

つねいししげつぐ
恒石重嗣年譜

宣伝主任参謀の太平洋戦争



市ヶ谷記念館 ©テラ / PIXTA

名倉有一編

つね いし しげ つぐ

恒石重嗣年譜



図1 恒石重嗣氏
撮影時期：1941年ころ
出典：恒石重嗣. 心理作戦の回想.
東宣出版, 1978, カバー.



図2 日本放送協会「放送会館」(東京・内幸町)
出典：“NHK 東京放送会館” Wikimedia Commons
(参照 2023-04-19)

はじめに

「[太平洋戦争中は] ...なんでも秘密のベールをかぶっていたので、わが国の対敵放送なんかも、たいしたことはやってなかったんだろう、と思われがちだが、今日のテレビやラジオに出てくる気のきいたCMのスポットや、ディスク・ジョッキーの先駆みたいなのを開発した、と自負している。もっとも、わたしはしろうとだから、功績はスタッフ諸君のものだがー。」¹

こう語るのは参謀本部で敵の戦意低下を目的とする宣伝を担当した恒石重嗣氏(1909-96)。彼の要請を受け、日本放送協会(NHK)が1943(昭和18)年3月新番組「ゼロ・アワー」を開始するとアドリブや良質の音楽が南太平洋に展開する米軍将兵たちの間でたちまち人気を呼び、“Tokyo Rose”の愛称で一躍世界的に有名になった。第二次世界大戦中各国がラジオを対敵宣伝の手段として重視する中、「ゼロ・アワー」以前の日本の海外宣伝は見劣りした。米国は1920年代にはすでに大学で放送を専攻した多数のアナウンサーが複数のラジオ局でスポンサーの評価を得ようと日夜切磋琢磨していた。一方日本にはそうした大学も民間の放送局も競争も存在せず、「宣伝と言えば、大売出しの時のチンドン屋位[中略]元来、宣伝などは大いに軽蔑していた」²。満州事変後の宣伝戦で中国に敗れたことから曲折を経て1940年に情報局が設置され、NHKを指導取締る権限を有したものの、宣伝大臣のいるドイツなどに比べれば組織は弱体。多くの軍人と同様敵の心理を理解しようとし、勇壮なことを言えば事足りると信じる人々が放送行政を牛耳っていた。NHKも「聴取料の入ってこない」海外放送の重要性の認識が遅れ、英語アナウンサーを組織的に養成する体制が不十分だった。その結果、開戦後の日本の海外放送は正式な教育を受けていないアナウンサーが一方向的に日本の主張を叫び、ヒトラーの演説よろしく叩きつけるような調子で敵の指導者を非難していたから、日米交換船で帰国し恒石参謀の上司となった西大佐は、外国で聴いた日本のラジオ・トウキョウ放送を「生硬だ」と切って捨てる。恒石参謀は改善のため放送経験のある捕虜3名を東京に送らせ、一流のホテルで高給を与えて明治のお雇い外国人のように優遇、NHKに派遣して技術指導に当たらせるとともに問題点の指摘を求めた。同時に米国の国内放送傍受の体制を新設し、最新のニュースを外務省や海軍をはじめ主要官庁に提供。さらに米国に詳しい新聞記者や学者に協力を求めて、海外宣伝関係者全体の意識改革とレベルアップを図っていった。本書は、問題山積の日本の海外放送から世界的な成果を上げた恒石重嗣氏の生涯をたどり、彼の故郷にあるオーテピア高知図書館に収蔵していただくため作成した。

¹ 読売新聞社編. “ゼロ・アワー：当たった”伝単” 作戦”. 読売新聞社, 1980, p.167, (昭和史の天皇3：ポツダム前夜). (読売新聞朝刊連載は1967-10-09～16)

² (恒石参謀が設立した駿河台分室の職員) 小林久子. 猫のしっぽ. 文芸社, 2003, p.76.

凡 例

1. 引用

- (1) 恒石重嗣氏の言葉：□で囲うか、太字とした。
- (2) 表記
- ① 新字体、現代かなづかいに改め、ふりがなを追加・省略したことがある。
 - ② 出典により使われる文字が異なる場合、統一せず原文のままとした。
(例)「濠州」と「濠洲」
 - ③ 当時の正確な名称でない場合も、原文のままとした。
(例) NHK (正しくは日本放送協会)、内閣情報局 (同じく情報局)
- (3) 段落：原文に従わない場合もある。
- (4) 誤記・仮名
- ① 『心理作戦の回想』：「正誤表」³により訂正。
 - ② 『駿河台分室物語【本編】』：仮名を脚注により実名にした。
- (5) 記号：縦書きの原文を横書きにしたため、標記を変更したことがある。
(例)「ボヤく」→「ボヤボヤ」
- (6) 原文中の注釈・脚注：原則として省略した。
- (7) 下線：とくに断りのない場合、すべて編者。
- (8) 現在では使用されない言葉もあるが、書かれた時代等を考慮しそのまま引用した。

2. 引用文内の記号・略号

()	原文のまま
□	原文中の判読できない部分
[]	一部断りのある場合を除き、編者による補足・注釈
(心理○○)	出典：恒石重嗣著『心理作戦の回想』p.○○の意

3. 年号：元号の付かない2桁の数字は西暦の下2桁：(例) 39年は1939年

4. 主に使用した辞書 (いずれも携帯端末版)

- (1) 英語：研究社・新英和 (第7版)・和英 (第5版) 中辞典, Version4.2.5
- (2) 日本語：岩波書店・『広辞苑』第6版, Version.4.3.4

[以下敬称略]

³ 本書「『心理作戦の回想』正誤表」に収録。

目次

はじめに	3
凡例	4
目次	5
第1部 戦前	15
1.1	生い立ち
.....	17
誕生	17
少年時代	18
1.2 中学校（22年4月～27年3月）	19
同級生	21
1.3 陸軍士官学校（27年4月～32年7月）	23
時代背景	23
第44期生	24
1.4 丸亀：歩兵第12連隊（32年7月～37年1月）	26
1.5 北満：独立守備隊25大隊（37年2月）	32
1.6 陸軍大学校（38年6月～40年6月）	34
入校まで	34
陸大と陸士44期	35
12連隊の陸大在校生（38年9月当時）	36
1.7 東満・第12師団（40年6月～41年11月）	37
ソ連入国（40年秋）	38
関特演（41年7月）	39
転任（41年11月）	40
第2部 大戦中	41
2.1 開戦前後	43
2.1.1 参謀本部（41年11月）	45
第2部第8課	46
参謀本部式	49
2.1.2 宣伝体制	50
陸軍報道部	51
桑原先任参謀	52
宣伝計画の立案	53
2.1.3 情報局	54
連絡協議会	55
2.1.4 南方作戦の企図秘匿	56
2.2 1942年	57
2.2.1 大本営発表の改善（1月）	59

2.2.2 善通寺捕虜収容所開設（1月）	61
開設前後の動き	62
2.2.3 情報局の捕虜利用	63
「捕虜の声」（2月）	63
写真週報（4月）	65
2.2.4 対インド宣伝（2月）	66
「印度」関連の海外放送	69
爆撃予告放送	70
2.2.5 米国内放送を傍受（3月）	71
第8課別班	73
2.2.6 東方社	74
2.2.7 東京初空襲（4月）	75
米心理作戦の大戦果	76
2.2.8 海外放送に着目	77
南方軍・日本放送協会の捕虜放送	78
2.2.9 捕虜の活用（5月）	79
「俘虜労役規則」緩和（6月）	79
海外放送改善に利用	80
2.2.10 昼食会（6月）	81
山王ホテル	82
2.2.11 カズンス到着（8月）	83
NHK 雇員	84
命 令	85
2.2.12 米軍の反攻（8月）	87
ニューギニア戦線	88
伝単戦	89
2.2.13 西義章課長（8月）	91
新課長の提案	92
2.2.14 米放送要員到着（10月）	93
謀略放送の序曲	94
2.2.15 立教大学アメリカ研究所（10月）	97
2.2.16 東方社と伝単（11月）	99
2.2.17 捕虜のアドバイス（11月）	100
2.3 1943年	103
2.3.1 東方社理事長交代（3月）	105
2.3.2 ゼロ・アワー（3月）	109
満潮英雄	110
番組の構成	112
番組の反響	113
成功の要因	115
委託番組	116

目次

池田徳真	117
2.3.3 情報局改組（4月）	118
大本営との緊密化	118
新総裁	119
2.3.4 東条首相の南京・南方訪問（6-7月）	121
西大佐戦死（7月）	122
南方出張（7月）	123
2.3.5 参謀長会議（8月）	124
2.3.6 米本国向け放送	125
準備室	126
文化学院接收（7月）	127
捕虜候補者	129
池田徳真	131
樺山資英	132
2.3.7 職制変更（10月）	134
2.3.8 大東亜会議直前の開所式（11月）	135
関係者	137
盗聴器	138
2.3.9 映画（11月）	139
2.3.10 仏印出張（11月）	141
2.3.11 日の丸アワー（12月）	142
捕虜の移送	142
小岩井少佐の「命令」	143
リハーサル	144
放送開始	145
2.3.12 駿河台分室訪問（12月）	147
ウィリアムズの拒否事件	148
2.3.13 クリスマス（12月）	150
2.4 1944年	151
2.4.1 東方社移転（1月）	153
2.4.2 中央公論（1月）	154
2.4.3 軍陣新聞（2月）	155
2.4.4 英文放送事前監査室（3月）	158
開設理由	158
論説委員室	160
池田解任の経緯	161
慰労旅行	164
2.4.5 インパール作戦（3月～7月）	165
2.4.6 対米放送再編（4月）	166
2.4.7 遠乗会（4月）	167
2.4.8 東方社の外地撮影（7月）	168

華北.....	168
南方.....	168
2.4.9 「戦争指導の大綱」(8月)	170
2.4.10 情報局総裁報告(10月)	172
2.4.11 職員更迭(10月)	173
2.4.12 B29 東京初偵察(11月)	174
2.4.13 風船爆弾(11月)	175
2.5 1945年.....	177
2.5.1 仏印出張(1月)	179
2.5.2 命拾い.....	181
2.5.3 大本営発表.....	182
2.5.4 ヒューマニティコールズ(4月)	185
ルーズベルト大統領追悼	185
忠告.....	186
2.5.5 機構縮小(4月)	187
2.5.6 四国防衛軍へ転出(6月)	188
2.5.7 終戦(8月)	191
東京.....	192
第3部 戦後.....	193
3.1 占領統治.....	195
3.1.1 米軍の追及(45年9月).....	197
陸軍省転補	199
3.1.2 復員(45年12月)	200
3.1.3 喫茶店開業.....	201
3.1.4 GHQ 出頭(45年12月～47年暮れ)	204
3.1.5 1回目の渡米(48年9～10月)	206
現地の人脈	207
3.1.6 2回目の渡米(49年6月～8月)	209
二世からの依頼	210
証言・帰国	212
有罪.....	213
3.1.7 3回目の渡米(49年10月～11月)	214
渡米要請	214
サンフランシスコ	217
ニューヨーク	219
横山隆一	220
帰国.....	221
3.1.8 警察予備隊(50年8月)	222
3.2 主権回復.....	225
3.2.1 金剛建設(株)取締役(52年9月)	227
3.2.2 渡米要請拒否(53年)	228

目次

3.2.3 警察犬の育成 (59年)	229
3.2.4 戦争体験公表 (62年10月)	231
情報公表	232
3.2.5 乗馬 (66年)	234
3.2.6 転居 (68年3月)	235
3.2.7 東京ローズ特赦 (77年1月)	237
3.2.8 舞台再訪 (77年5月)	238
3.2.9 駿台会 (77年7月)	239
3.2.10 『心理作戦の回想』発刊 (78年8月)	240
3.2.11 大戦の総括	242
(1) 戦争目的	242
(2) 心理戦	243
(3) ゼロ・アワー	244
(4) 日の丸アワー	245
(5) 科学力の差	246
3.2.12 瀬島龍三来県 (83年)	248
3.2.13 地域社会活動 (86年)	250
3.2.14 高知県軍恩連盟会長 (88年)	251
3.2.15 高知県偕行会 (90年3月)	253
3.2.16 終戦50周年特別ドラマ (95年8月)	254
体験を語る	255
3.2.17 憂慮 (96年3月)	256
3.2.18 逝去 (96年9月)	257
謝辞	260
【資料編】(五十音順)	
あじ アジアからの留学生	265
戦前の留学生関連機関	265
南方特別留学生	266
あな アナウンス:「淡々調」と「雄叫び調」	267
戦前	267
戦時中	267
うす 白井茂樹	269
おか 岡 繁樹	270
軍陣新聞	271
岡繁樹小伝	272
かい 海外情報の収集:情報局	281
かい 海軍と対敵放送	283
かい 海軍報道部	284
平出英夫	284
高戸主計中尉	287

がい 外交伝書使.....	289
がい 外務省と放送.....	293
対外宣伝.....	293
日本放送協会との関係.....	293
「短波ニュース」.....	294
米国内放送.....	295
かけ 筧 光顕.....	296
かず カズンスの横顔.....	297
戦時中.....	297
戦 後.....	301
かぜ 「風と共に去りぬ」.....	302
かる カルカタ攻撃.....	305
カルカタ.....	306
かわ 『河村俊平追想録』.....	307
河村俊平の生涯と恒石.....	309
かん 幹部候補生.....	310
くり 栗原悦蔵.....	312
ぐん 軍協力者の戦後.....	313
こい 小岩井少佐の「命令」翻訳.....	317
こう 高知県軍恩連盟.....	318
第六代会長・嶋内 百千世.....	319
補 足.....	320
こう 高知・東京間の往来.....	322
国 鉄.....	322
国内航空.....	325
こお コーヒーの戦後.....	326
さん 参謀本部第8課.....	328
設 立.....	328
恒石在籍時の関係者.....	331
陸軍中野学校.....	333
参謀本部の傘.....	333
参八会.....	335
しえ シェンク軍曹.....	336
じゃ ジャズ.....	339
しや 上海派兵.....	341
じゆ 重慶向け放送.....	342
しゆ 主婦の友社.....	344
しよ 昭和八年陸軍特別大演習：福井.....	345
じよ 叙 任.....	346
すぎ 杉田一次.....	350
すぎ 杉山参謀総長の感謝状.....	352

目次

する 駿河台分室関係者.....	353
警 備	354
部外からの主要協力者	354
せん 戦果誇張と錯誤	355
日本側	355
米国側	355
そう 総 軍	356
そう 宋 美齡	357
だい 第一次大戦における英国の宣伝.....	359
ウェリントンハウスとクルーハウス	359
『クルーハウスの秘密』	360
たい 大正デモクラシー.....	361
たい 対ソ静謐	362
たい 「対敵海外放送ノ概要ト其ノ反響」	365
たい 「対敵電波戦」	367
たけ 竹槍事件	371
たて 建川美次	375
たに 谷山樹三郎.....	377
たん 短波放送受信	379
ぢー ゴー・ゴルマン	380
ちゆ 中央公論社員の南方占領地視察（42年10月～43年5月）	383
ちゆ 駐在武官	390
つか 塚田数平	392
つる 都留重人	393
でん 伝 単	394
伝単の歴史	394
淡路事務所	395
マレーの伝単戦	397
駿河台分室へ移転（43年秋）	398
どい ドイツの宣伝	399
とう 東亜放送協議会	401
第五回東亜放送協議会	403
第六回東亜放送協議会	406
とう 東京初空襲と憲兵司令部.....	407
とう 当時の教育事情	411
全 国	411
高知県	411
とう 東 宝	413
とう 東方社	414
岡田桑三	414
軍と東方社	416

東方社と淡路事務所.....	417
『FRONT』刊行リスト.....	420
どう 同盟通信社.....	421
なみ 並河 亮.....	424
なん 南方軍などの対敵放送.....	427
南方軍の放送.....	429
参謀本部と南方軍.....	431
南方各局の対敵放送.....	432
南方軍以外の外地総軍の対敵放送.....	433
にし 西 義章.....	434
パネー号事件.....	434
帰 国.....	434
長距離機 A26 (キ 77).....	435
につ 日系二世.....	437
にほ 日本の海外宣伝の評価.....	442
情報局.....	442
批 判 (日本人).....	445
批 判 (外国人).....	447
はた 秦 豊吉.....	448
はま 浜本純一.....	449
ひう 日向正三.....	451
ひら 平川唯一.....	453
びる ビルマの戦い.....	457
戦前の工作 (南機関).....	458
開戦～1942 年.....	460
アラカン作戦.....	461
ミイトキーナの戦い.....	461
ひろ 広島陸軍幼年学校.....	464
同級生の回想.....	464
ふい フィリピン戦犯裁判.....	465
川口清健.....	467
ふく 福岡受信所 (埼玉県).....	468
ぶし 武士道.....	470
武士道の誇示.....	471
ふじ 藤原岩市.....	473
マレー方面工作の経緯.....	473
批 判.....	473
追 悼.....	475
ふつ 仏印との関係.....	477
北部仏印進駐 (1940-09-23).....	477
南部仏印進駐 (1941-07-28).....	477

目次

仏印静謐保持.....	477
安南工作関連.....	479
ぶん 文化学院.....	480
引越し.....	480
作家・杉本苑子.....	482
迷い猫.....	483
特別室.....	484
爆撃禁止区域？.....	487
へい 兵役制度.....	488
べい 米国内放送受信.....	490
べと ベトナム反戦運動.....	491
ハノイ・ハンナ.....	493
ほう 放送施設.....	494
ほう 放送による「暗殺」.....	497
ほり 捕虜の活用.....	499
方 針.....	499
優 遇.....	500
批判を黙殺.....	501
捕虜への風当たり.....	502
ほり 捕虜の訊問.....	505
ほり 捕虜の増加.....	506
まき 牧 秀司.....	507
まち 町田敬二.....	510
まん 満州事変と対外宣伝.....	511
宣伝戦敗北.....	511
対外放送強化.....	511
みか 三笠宮崇仁親王.....	513
みや 宮本吉夫.....	514
もく 目視飛行.....	518
やま 山下使節団.....	519
資料.....	519
やま 大和魂.....	520
よう 要 線.....	522
らん 蘭印作戦における謀略放送.....	523
りく 陸軍大学校回顧.....	524
りく 『陸軍中野学校』発刊.....	527
GHQ での恒石陳述（46年6月）.....	528
原 文.....	529
訊 問.....	531
索 引.....	532

『恒石重嗣年譜』

年 譜 (要約)	552
主な参考資料	555
収録図一覧	560
『心理作戦の回想』正誤表	564
ホームページ上の恒石資料	565
Table of Contents	566

第1部 戦前

『恒石重嗣年譜』

1.1 生い立ち

誕生

○恒石重嗣^{つねいししげつぐ}は日露戦争終戦4年後の1909（明治42）年10月19日生まれ⁴。

○実家は現在の香南市香我美町西川⁵。

○軍人の道歩み、「祖父の愛用していた栗田口一竿子忠綱」（心理210）を軍刀とした。



図3 高知県南部
出典：Google

⁴ ○恒石重嗣. 心理作戦の回想. 東宣出版, 1978, 著者紹介. [以下本書は（心理）と略す]

○この年伊藤博文が暗殺され, 日本の生糸輸出は世界一に.

○文化面では夏目漱石が「それから」を書き, 「レイテ戦記」の大岡昇平, 「李陵」の中島敦, 「ゼロの焦点」の松本清張, 映画評論家の淀川長治らが生まれている. 映画監督の黒澤明は1910年3月生まれで, 同世代.

○海外ではブリティッシュ石油会社の前身アングロ=ペルシアン石油会社が設立され, ピアリー（米）が初めて北極に達し, プレリオ（仏）が初めてドーバー海峡を飛行機で横断. [岩波書店編集部編. 近代日本総合年表 第三版. 岩波書店, 1991, p.201.から抜粋]

⁵ ○安岡元彦（※）. Eメール. 2018-09-25.

（※）安岡は恒石重嗣の姉の孫で, 恒石を「大叔父」と呼ぶ.

○「[2021年] 6月赤岡から山北（私の実家）、西川を登る塩の道を通って西川の恒石実家を訪ねました。たぶんこの家ではないかと思われる [石垣のある] 宅でしたが誰もいないようで確かめる事はできませんでした。」. [同上. 2021-09-17]

少年時代

「...暑中休暇等には必ず岸本⁶の君⁷を訪ねたものだった。僕には兄弟はあるが年齢がかけ離れていたし家には不在だった⁸ので、此の休暇中に君を訪ねて或は海辺に遊び又は涼台で夕餉を共にし夜はおそく迄カルタ取りに興じ、時には又日曜学校に行った事もあつた。本当に少年の頃から兄弟の様な気持で交っていた。君も亦僕の行くのを心から喜んでくれたし、山間の僕の家まで自転車で遊びに来て呉れた事も忘れられない思い出となった。」⁹

⁶ 現在の高知県香南市香我美町岸本。

⁷ ○恒石の従弟・河村俊平(1912~1935)：35年3月東京帝国大学法学部卒業。4月大蔵省に入省し、高知市長の三女と結婚。6月9日徴兵検査で帰郷した夜脳膜炎に罹り、25日死去。
[河村茂徳編・発行。河村俊平追想録。1937, 河村俊平略歴]

○資料「『河村俊平追想録』／河村俊平の生涯と恒石」

⁸ ○恒石の兄は軍人だったらしい。[安岡元彦。電話。2022-11-28]

○恒石の姉はこのころすでに安岡家に嫁いでいたのかもしれない。

○「恒石重嗣大叔父の姉の名は「斗重」でした。今日お墓で確認しました。読みはシカエ?ではないかとの事ですが、親戚の人も自信無さそうでした。高知帰省した途端恐ろしく寒い毎日です。」。[同上。Eメール。2022-12-20]

⁹ ○恒石重嗣。「君を追想して」。『河村俊平追想録』 p.163.

○寄稿の結び：「僕の写真帳には士官学校当時君の一高姿と共に東京野々宮で撮ったのと大学時代のもののが残っている、此れを見る度に何事かを僕に呼びかけている様だ。否今も猶確かに高円寺辺りに居る様に思ふ。「靈魂は不滅なり」幽明相隔ても魂と魂とで「恭ちゃん」と呼び「重さん」と呼ばれ度い。」。[同上。p.164]

○大正時代は恒石が2歳の時から中学卒業の前年12月まで。

○資料「大正デモクラシー」

1.2 中学校（22年4月～27年3月）

○恒石は（尋常）小学校（16年4月～22年3月）を修了し、22年4月高知県立高知城東中学校に入学。

○中学入試：募集定員 180 人、志願者 573 人（前年は 427 人）¹⁰

○同中学校の「生徒訓育ノ状況」

「毎朝始業前十分間合同体操及合同講話ヲ行フ外生徒監督係ハ一般ノ風紀訓育ニ関スル実務即チ整理施行シ各級主任ハ其ノ訓育ニ関シ直接指導ノ任ニ当リ又通学生徒監督者ハ生徒ノ自宅ヲ訪問シテ指導矯正ニ任シ同時ニ家庭トノ連絡ヲ図リ協力シテ訓育ノ効果ヲ大ナラシメンコトヲ期ス武術ハ正科トシテ之ヲ科シ庭球野球端艇蹴毬相撲ハ生徒ノ希望ニヨリ練習セシメ以テ身体ヲ鍛錬シ礼儀秩序ヲ重ンシ質実剛健¹¹ノ氣風ヲ養ワシメンコトニカム」

¹⁰ ○“大正十一年高知県統計書”. 国立国会図書館デジタルコレクション.
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/973554>, 44 コマ, (参照 2022-11-28). 次項も出典同じ.

○【比較】高知県立中学海南学校 [本書,p.20.図4] の定員：同年度 120 名. [同上. 45 コマ]

○前年志願者数：オーテピア高知図書館回答. 2022-11-27. [『近代高知県教育史』高知県教育史編集委員会/編 高知県教育研究所 1964 年刊, p.113]

○資料「当時の教育事情」

¹¹ 現在の校訓：「質実剛健・文武両道」. [“高知県立高知追手前高等学校”. Wikipedia. (参照 2023-02-14)]

○恒石は飛び級はせず、通常の5年間で卒業して陸軍士官学校に進んだ¹²。

○当時高知県から軍人を目指す場合、高知県立中学海南学校から広島陸軍幼年学校¹³へ転じ、無試験でエスカレーター式に陸軍士官学校に進むのが一般的なコース。

(例) 陸軍大将山下奉文(1885-1945):「高知の海南中学から、広島幼年学校に進んだ。海南中学は、陸軍軍人養成を目的とした学校で、旧藩主山内家の醸金をもとに創設された¹⁴。卒業生のほとんどが、幼年学校、士官学校への進学を希望する校風であった。」¹⁵

		
1922年当時の校名	高知県立高知城東中学校	高知県立中学海南学校
現在の校名	高知県立高知追手前高等学校	高知県立高知小津高等学校
設 立	1878年	1873年
著名な出身者 (抜粋)	内閣総理大臣：濱口雄幸 経済学者：有沢広巳 物理学者：寺田寅彦 精神科医：森田正馬 漫画家：横山隆一、やなせたかし 陸軍中将：葛目直幸	元帥海軍大将：島村速雄、 永野修身 陸軍大将：山下奉文 海軍中将：大谷幸四郎ほか 陸軍 〃：沢田茂ほか

図4 高知市の両中学校比較

出典(写真とも): Wikipedia. (参照 2020-10-21)

¹² 前述の河村俊平は25年4月同中学校入学, 29年3月4年修了時卒業, 翌4月第一高等学校進学. [資料『河村俊平追想録』/河村俊平の生涯と恒石]

¹³ 「幼年学校生徒というのは旧六鎮台があった場所 [東京・仙台・名古屋・大阪・広島・熊本] に置かれた全寮制の学校で授業料を納める必要がある。幼年学校は、将校にふさわしい階層の出身者を集めるために授業料を徴収していた。 [荒木肇. 日本人はどのようにして軍隊をつくったのか: 安全保障技術の近代史. 出窓社, 2010, p.232]

¹⁴ 山内家第18代当主山内豊秋(1912-2003)は高知市に生まれ, 19年学習院初等科, 29年 [東京] 陸軍幼年学校, 29年陸軍士官学校. [“山内豊秋”. Wikipedia. (参照 2022-10-21)]

¹⁵ 福田和也. 山下奉文: 昭和の悲劇. 文芸春秋, 2008, p.41. (文春文庫)

同級生

「彼〔漫画家・横山隆一〕と私とは高知一中（現追手前高校）の同窓である。中学時代背丈の順に席次を定められていたときがあった。彼は最前列にいて先生の講義する机の下にかくれるほどの地理的優位を確保していた。講義中彼はよく居眠りするのが得意であったが、何しろ死角にはいつているからなかなか見付からなかった。」

（心理 246）

○横山隆一の回想¹⁶

・「高知市には、そのころは、まだ高等学校¹⁷はなかったので、中学生が大人のようにふるまっていました。中学生のくせに遊郭へ行って、土地の赤新聞へ名前入りで出たりしても、たいして問題にもならず、短期の停学でかえって貫禄^{かんろく}がついたりしたところですから、小学生までまかせていました。」

・「〔中学時代の23年に父が急病で亡くなり〕お金がないので極度に節約をしましたが、子供のころから好きな映画は、苦心して見るようにしていました。学校から帰ると、急いでつんつるてんの着物に着替えて、映画館へ行きました。からだ小さいので、五銭という子供の入場料ではいりました。〔中略〕

貧乏といえば、学生はみんな革ぐつでしたが、私はゴムの短ぐつでした。暖国の土佐でも、このくつは冬ははだしよりつめたく、夏は足が汗びっしょりになるくらい熱いのです。それもつらかったのですが、くつ下がすぐ破けるので、私はいつも素足でした。〔中略〕

当時、私の中学では映画は禁止されていました。だから〔修学旅行¹⁸で行った〕大阪でも友人の協力を得て宿を抜けだし、浪華クラブという映画館で、ユニバーサル映画ノーマンケリー主演の「メリーゴーラウンド」という映画を見ていたり、……」

・「卒業と同時に上京することになっていましたので、荷物はまとめてチッキで送りました。卒業式の朝、家を出る時、〔預けられていた高知市内の〕伯母にあいさつして別れ、その夜は、友人の家に泊まりました。

私の一人ぼっちをなぐさめて送別会を開いてくれたのです。友人というのは水泳部の連中で、先輩も来てくれました。私は小学一年のころから水泳が好きで、そのころから中学校の水泳部にくっついて歩いていましたので、水泳部の連中とは、現在でも兄弟のような交わりをしています。その夜集まった友人たちは、だれも帰らず朝まで語り明かし、私を港まで送ってくれました。

¹⁶ 横山隆一. わが遊戯的人生. 日本図書センター, 1997, p,18, 21, 24, 26-27, 29-30.

¹⁷ 旧制高知高等学校は1922年創立. 1950年廃止され, 高知大学となる. [“高知高等学校(旧制)”. Wikipedia. (参照 2022-11-28)]

¹⁸ ○横山・恒石らが入学した年, 上級生は9日間の修学旅行: 「本 [大正11=1922] 年度ニ於テハ第一学期ニ於テ第四学年ヲ東京方面へ九日間ニ亘リ修学旅行セリ」. [『大正十一年高知県統計書第三編』NDL デジタルコレクション 44 コマ]

○横山の時の修学旅行先が大阪だったのは, 入学翌年9月の関東大震災の影響か.

『恒石重嗣年譜』

船に乗ると、再びここへ帰ることがあるだろうか、強がっていたくせに急に自信がなくなって、希望の少ない船出になりました。」

1.3 陸軍士官学校（27年4月～32年7月）

時代背景

○卒業生数推移：開校以来最多の19期と比較すると42期は第一次大戦後の軍縮により8割減少したが、以後増加に転じていく。

期	入校年	入校者数	卒業 帰隊年	卒業 者数	内 歩兵科	備考
19	1905	1,183	1907	1,068	882	1904年日露戦争開戦
42	26	222	30	218	117	25年四個師団廃止発表
43	27	244	31	227	122	27～28年山東出兵
44	28	342	32	315	174	
45	29	365	33	337	190	
48	32	492	36	388	216	31年満州事変

図5 陸軍士官学校入校・卒業生

出典：山崎正男編、陸軍士官学校、第8版、秋元書房、1990、p.211～226,267、などから抜粋。

○第一次大戦後

「高等教育も大きく拡充されている。世間の人気はサラリーマンである。あるいは試験に合格した高等文官だった。世界大戦後の金融業界や運輸業界人は飛ぶ鳥を落とす勢いである。高等文官も恵まれていた。同じ中学卒で、かたや帝大法学部進学、かたや陸士入校では40歳にもなれば俸給に大きな格差が出た。陸軍ではもっとも優秀な人で少佐である。もちろん、陸軍大学校出身で中央勤務だとして。同年で官庁に行っていたら、同じ成績なら文官は局長、少将担当官である。[中略]

この[海軍の]軍縮の後、関東大震災が起こる。1923（大正12）年9月1日のことである。国家財政はますます厳しくなっていく。帝都復興に向けて、軍備など考えていられない。革命によってロシア帝国は倒れたし、支那だって混乱の渦中である。東京帝国大学のある教授は、『世界戦争の悲惨をみたら、もう二度と戦争は起きないだろう』と予言した。

さて、陸軍である。たしかに大規模な戦争は起きないだろう。しかし、満洲の利権は守らなければならない。なにぶん、国民の財産である。しかも、開港地や居留地には、多くの日本人が進出していた。守るべきは同胞の生命である。そういう任務はありながら、装備は少しも向上しない。予算に限りはあるし、国防予算が増えることを許す時代ではない。」¹⁹

¹⁹ 『日本人はどのようにして軍隊をつくったのか』 p.233-235.

第 44 期生

○恒石は 27 年春に合格 4 月入校の 43 期生となるべきところ、おそらく健康上の理由で 1 年卒業が遅れたと次の理由から推測する²⁰。

- ・翌 28 年の恒石の母校からの陸士合格は 1 名：「城東中学校第四年生水田健晴君は今回陸軍士官学校の入学試験に立派な成績で合格した」²¹
- ・後に陸軍大学校に進む彼が学業不振とは考えにくい。

○恒石は本書.p25.図 6.の「前の期より」44 期に加わった 6 名の内のひとりかも知れないが、以下入学当初から 44 期だったともものとして記述する。

○入校

- ・それ以前と比べ人気は下降傾向とはいえ、陸士試験は全国の中学から秀才が集まる一高・海兵（海軍兵学校）と並ぶ狭き門で、競争率は 27 倍²²だったという。
- ・学力のみで合否を判定する一高と異なり、陸士は身体検査や身辺調査も厳格だった。
- ・入校者 364 名²³の出身別内訳：陸軍幼年学校（陸幼）149、中学校 208、他学校 2、下士（官）5。
- ・陸軍の主要ポストは陸幼卒業生が占める。（この年度入校者の高知県出身の広島陸幼組が 7 名²⁴）
- ・当時は予科・本科とも東京の市ヶ谷台（復元された本部が本書表紙の防衛省市ヶ谷記念館）²⁵

○課程

- ・予科：4 月入校。語学・数学・国語・漢文・物理といった普通科目が中で、2 年後の卒業前に専門（兵科）と配属部隊（原隊）が決まる。（恒石は歩兵科、香川県丸亀第一二連隊配属となる）
- ・原隊勤務：上等兵として 6 カ月勤務する間に伍長、軍曹と進級。
- ・本科：11 月市ヶ谷台に戻り、以後 1 年 9 カ月は軍事学、演習が中心。

²⁰ ○陸士入学時の健康診断は厳格だが、入学後激しい勉強・訓練のためか健康を害する者が出ている。（例）高知県出身の田村正太郎：恒石より 1 年上の 1908 年、（前述の恒石の従弟河村俊平が住んでいた）現香南市香我美町岸本生まれ。28 年陸軍士官学校予科卒業と同時に病氣退校、翌 29 年外務省留学生としてレニングラードに行き外交官の道に転じている。[田村正太郎. ビルマ脱出記. 図書出版社, 1985, p.225, 奥付]

○「延期生」と呼ぶ：「自宅療養のために陸士卒業が 1 期遅れ（延期生）」。「山中峯太郎」. Wikipedia. (参照 2022-12-22)]

²¹ ○土陽新聞. 1928-03-06. 夕刊.

○水田健晴は恒石と同じ 44 期. 兵科：工兵科. [『陸軍士官学校』 p.242]

²² ○浦茂. 人生遍路八十年. 協和協会出版部, 1990, p.298.

○浦は 27 年金沢第一中学校首席卒. 28 年陸士入校. 64 年航空幕僚長. 44 期生会代表.

²³ ○野邑理栄子. 陸軍幼年学校体制の研究：エリート養成と軍事・教育・政治. 吉川弘文館, 2006, 付録 3.p.21.

○なお入学者数は 342 名. [『陸軍士官学校』 p.223], 355 名. [本書.p.25.図 6] とも.

²⁴ 資料「広島陸軍幼年学校」

²⁵ 映画：山本弘之監督. 陸軍士官学校. 日活, 1937. (YouTube)

・卒業：戦後伊藤忠商事会長や中曽根首相顧問を歴任する瀬島龍三の卒業時席次は、第44期三一五名の次席。（優等で卒業が確実で将来を嘱望されていたながら、卒業直前五・一五事件²⁶に参加し退校処分となった吉原政巳²⁷も恒石の同期）

	本科前の期より 6	44期	315
入校当初 355	本科卒業 309	本科中退	11
	本科不卒業 46	予科卒業	22
		予科中退	13

図6 陸士第44期の入校・卒業生内訳²⁸

²⁶ 2.26 事件では坂井直が参加し銃殺刑。

²⁷ ○「立憲政友会本部襲撃隊 [中略] 吉原政巳 - 陸軍士官学校本科生。禁錮4年」。[“五・一五事件”. Wikipedia. (参照 2022-10-28)]

○「昭和十四年十一月陸大卒業後の山下君の勤務地は、十六年三月から十七年四月の第十六軍参謀として殊勲をたてた時期以外、一貫して東京であり、しかもその大半が陸軍省人事局補任課の要職であった。一方、一二年八月召集され北・中支に従軍、十五年三月帰還した小生は、間もなく陸軍中野学校に奉職、二十年八月まで教育に携わったが、何かと山下君の支援を受けたに違いない。」。[吉原政巳.“山下豊君— 一列外生の見た友 —”. 聚光: ひたすらに歩みし日々 山下豊追想集, 山下則子, 1990, p.73-75]

○「八代昭矩（1乙）は一九四二年六月から一年三カ月、中野で過ごした。日本が初戦の戦果で昂揚する時期であった。彼以前の時期は、いわゆる学校というよりも、吉田松陰の松下村塾的な子弟が心を通わせて、何となく一体感を得る場所だった。だんだん制度が整って組織化され、「学校的形態」の始まりがその時期だったという。

講義は国体学もあった。七生報国の楠木正成の精神を持って進むことを基本として、全体のなかでもとりわけ重視されていた。教官は、五・一五事件のとき陸軍士官学校の本科生で、恩賜（陸士の優等卒業）目前というところで事件に参加して、退校させられた吉原政巳だった。この授業のみ、記念講堂という畳敷きの部屋で教わったという。講堂の壁には日露戦争のときに敵地深く潜入して、敵に処刑された沖禎介・横川省三両勇士、明石元二郎大将等の写真が掲げられていた。」。[山本武利. 陸軍中野学校：「秘密工作員」養成機関の実像. 筑摩書房, 2017, p.101-102.]

○「秋草 [俊校長] が去って間もない一九四〇年後半から皇国史観を東大で学んだ吉原政巳が「国体学」を担当しはじめた。彼は天皇イズムを強調し、「誠」の精神論を展開するようになった。吉原の採用の際、時事問題に触れないとの学校当局からの要請があったらしい。五・一五事件参加で陸軍から追放された彼は、神皇正統記や楠木正成論を教え込むことにより、終戦まで中野学生に右翼イデオロギーを注入し続けた。彼は伊藤佐又に代わって学生のシンボルとなった。精神主義、国家主義の合体は当初は薄かったが、神戸事件以降強まることになる。」。[同上. p.143]

○恒石も参謀本部勤務の際、陸軍中野学校教官を兼務している：「…参謀本部第八課の恒石重嗣中佐（44期・中野学校教官として宣伝を担当）…」。[中野校友会編. 陸軍中野学校. 中野校友会, 1978, p.806/『心理作戦の回想』カバー（著者紹介）]

²⁸ 岩越神六作成「予科入校時より現在までの人員の推移概見」。[陸軍士官学校第四十四期生会. 回想録：五十年の歩み. 陸軍士官学校第四十四期生会, 1982, p.501.より]

1.4 丸亀：歩兵第12連隊（32年7月～37年1月）

「大屋〔角造〕²⁹、河合〔治〕³⁰の両君³¹と共に命課布達式があったのは、蓬萊城³²下の丸亀一二〔連隊〕で、河合は一、大屋は六、わたしは第九中隊付となった。善通寺及び丸亀地区は昔からの軍都であり、青年将校は花柳界³³でもよくもてた。三八期小川三郎、四二期鈴木主習などの先輩からその道の指導を受けたが、その舞台は三日月という名の料亭であった。

夜間演習（編注 夜遊び）が続くので早朝からの銃剣術指導は眠かったが、もともと好きなことでもあり一日も欠^(ママ)がしたことはなかった。ただ、たまたま夜間演習を休むと、敵の方から「今晚は」と下宿へ強襲をかけてくる始末で、線香代³⁴はかさむばかり、昭和九年末の結婚時には、一金二百六十円也³⁵となっていてその処理には苦慮したが、なによりも新妻の信頼を裏切ったことは不覚であった。

最初手掛けた昭和八年兵³⁶は連隊の射撃大会で優勝した。満期の際香川県特産の朱塗りのテーブルを送ってくれた。（今も大切に愛用している）。その返礼の意味もあって送別会を前記三日月で催したところ、一部の上司がこれを問題視したそうだが、幸い小川先輩などのとりなしで事なきを得た。同期三名はそれぞれ、コースを異にしたが、大屋君とは今次大戦中、参本第二部内の隣組で勤務した。また先年、歩一二百年祭では三名相会し、共に健在を喜び今後の活躍を誓った。連隊長は候補生時代が関亀次、任官後は館余惣、本郷義夫、安達二十三のかたがたであった。」³⁷

○恒石は3カ月間の見習士官生活を終え、32年10月25日歩兵少尉³⁸、34年10月20日中尉³⁹に進級。

²⁹ 福岡県の旧制嘉穂中学校出身。「旧制高校を目標としていた。」。〔“うら道人生の回想”。『回想録：五十年の歩み』p.327〕

³⁰ 陸士44期同期の大屋・河合のフルネームは『陸軍士官学校』p.242.による。

³¹ 両名は恒石と同様広島陸軍幼年学校の卒業生ではない。

³² 香川県・丸亀城の別名。

³³ 「辻の料亭や料理屋嫌いのエピソードは多い。〔中略〕辻がそういう場所を嫌ったことは、小学校高等科を過ごした山中町に、北陸有数の歓楽地・山中温泉があることにその原点を求める言説が半ば定説化していることから察することができる。」。〔前田啓介. 辻政信の真実：失踪60年—伝説の作戦参謀の謎を追う。小学館, 2021, p.113〕

³⁴ 【線香代】「芸娼妓などの揚代。上方では花代。もと、線香1本のともる間を単位に時間を計算したからいう。」。〔『広辞苑』〕

³⁵ 陸軍中尉の月給は45年当時85円程度〔歴史探検隊. 50年目の「日本陸軍」入門. 文芸春秋, 1991, p.122. (文春文庫)〕, 34年以降のインフレを加味すればはさらに低かったと推測。

³⁶ ○「昭和七年兵」とも。〔本書. p.29〕

○資料「兵役制度」

³⁷ 恒石重嗣.“任官・満州・参本・命拾い三たび”。『回想録：五十年の歩み』p.120-121.

³⁸ 『陸軍将官実役停年名簿 昭和19年9月1日調』

³⁹ 陸士44期同期の山下豊と同時の進級と推測。〔『聚光』略歴〕



図7 連隊兵舎全景

出典：歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌 巻頭写真

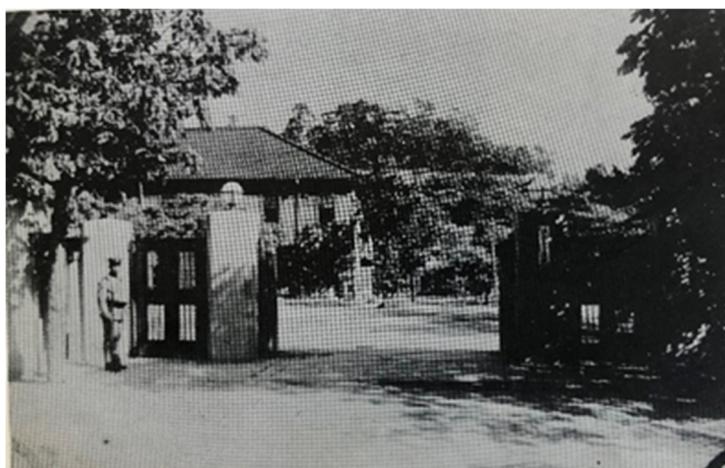


図8 連隊正門

出典：同上

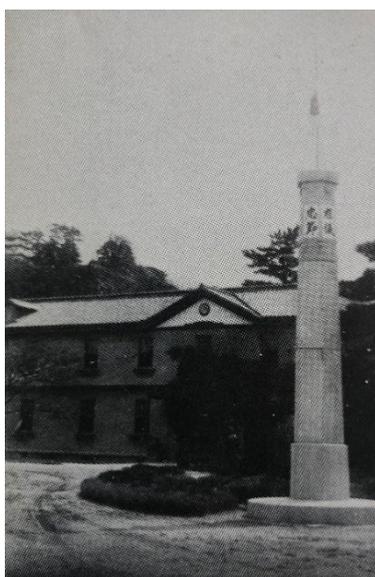


図9 連隊本部前

出典：同

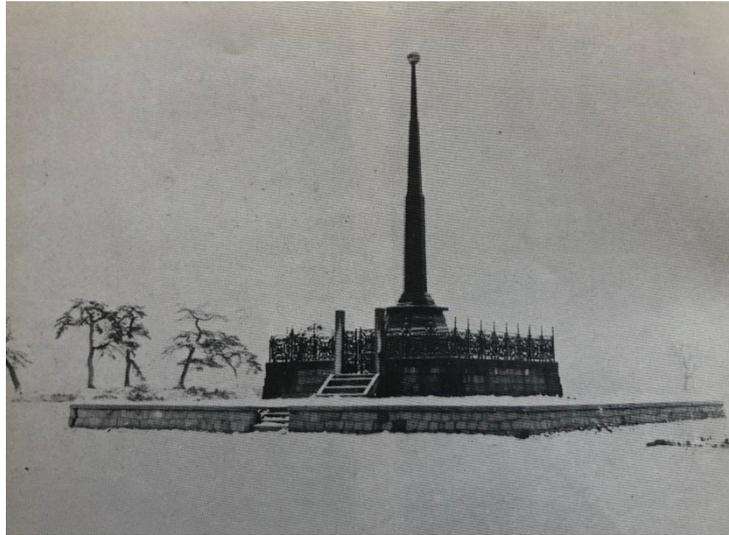


図 10 日清戦争記念碑
出典：歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌 巻頭写真



図 11 酒保から見た丸亀城
出典：同上

「私が仕えた中隊長は江口藤作、加川勝永、仙頭俊三、小川三郎の諸先輩であり印度独立軍の指導将校として活躍しビルマで^(ママ)状烈な戦死をとげられた小川氏を除いて皆御健在である。」⁴⁰

【射撃競技会優勝】

昭和七年兵は私が初めて担当した組で聯隊の射撃大会で見事優勝した時は大変嬉しかった。それには練達の岡田順一准尉や成行軍曹、白井伍長等の適切な指導があったことを忘れることは出来ない。その記念写真は今でも手許に残っている。

【関ヶ原の強行軍】

昭和八（九）年⁴¹に福井縣下で第十一師団と第九師団との対抗の特別大演習⁴²があり、その前奏曲として我が師団は岐阜縣下から演習しつつ琵琶湖東岸を北上して九頭竜川方面に向った。そのかわきりとなったのは関ヶ原附近の要線⁴³を対抗軍に先んじて占有することであり私は聯隊中から選出された健脚小隊長を命ぜられた。そしてその要線までは約十軒の行程であり演習開始と共に強行軍を續行し約一時間後に之を敵に先んじて占領出来面目をほどこしたことであった。指揮刀と軽い軍装の小隊長は楽であったが軽機を担いだ重武装の兵士達には気の毒であった。

【朱塗りの食卓】

昭和八年兵満期除隊に際し私は立派な朱塗りの食卓を記念に頂戴した。然し此の時一寸したトラブルがあった。それはその返礼の意味で送別の宴を料亭三日月でやったことである。三日月は私共青年将校の巣になっていて殆んど毎夜のように小川、鈴木、佐藤、江藤、大屋などの面々が痛飲、放歌する研修？の場であった。そんな訳で此処を選んだのは不謹慎だとの論が部隊上層部で出たそうであるが小川中隊長の奔走で事無きを得たとのことであった。改めてその御厚情に感謝すると共に御冥福を祈ってやみません。尚「昭和八年兵満期記念」と書かれたこの記念の食卓は満洲や東京など転任の度に持ちまわり五十年を過ぎた今も尚大切に保管してあり、第九中隊と私とを結ぶ絆である。」⁴⁴

⁴⁰ 恒石重嗣. “思い出すまま”. 歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌：思出之記. 歩十二編集委員会編. 歩十二編集委員会, 1985, p.442.

⁴¹ 昭和八年：「[10月] 八日秋季演習及特別大演習に参加の為出発鉄道輸送にて関ヶ原赤坂町に向う、垂井にて遭遇戦揖斐川に対峙 一日夜は大垣墨股に宿営 引続き旅団・師団の演習を関ヶ原、近江平野野州 [洲] 川・八幡・安土附近に行い二一日より彦根より列車にて鯖江に着き特別大演習に参加 二四日より二六日まで武生、小松、福井九頭龍川と攻防演習を行い二七日福井市紡績工場空地 (※) にて大観兵式に参列二八日福井発二九日帰營す」. 『歩兵第十二聯隊百十年記念誌』 p.634]

(※) 「下記資料では、大観兵式が行われた場所が「福井市外木田村山奥福井紡績株式会社用地」とあり。

福井県編. 昭和八年陸軍特別大演習並地方行幸福井県記録. 福井県, 1935.3 【H288】 : p50;

* 国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1443302/1/119>].

[福井県立図書館回答. 2023-02-18]

⁴² 資料「昭和八年陸軍特別大演習：福井」

⁴³ 資料「要線」

⁴⁴ 『歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌』 p.442, 444.

「【各部幹候要員の入隊】

医、経、の幹候要員は各歩兵聯隊で第一期教育を終ると師団司令部所在地の歩兵連隊である歩十二へ入隊して来ることになっていた。私は高知の旧制中学から士官学校に進んだので中学の同級生が初年兵として入ってくる訳である。

従って聯隊内では少尉と二等兵或は教官と初年兵という関係になるので断然私の方が優勢であるが日曜日となるとそうはゆかない。「江戸の仇を長崎で」という訳でもあるまいが續々と私の下宿を訪れて来て此方がやり込められる。スキ焼きなどの御馳走せねばならない。薄給の貧乏少尉やヤリクリ中尉⁴⁵ではたまったものではない。

昭和八年だったか吉田君という医専出の元同級生が私の初年兵としてやって来た。彼のニックネームは「笑い」と言う。

何時でも笑っているような顔付きであることから此の名がある次第で全く緊張感など望むべくもない御面相である。行動の基本である不動の姿勢も右に左にフラフラして定まらない。まして他の戦技に至っては押して知るべきである。

この勇士には私も大弱りであったが辛うじて乙幹⁴⁶にパスして胸をなで下したことであった。⁴⁷

⁴⁵ 「戸高 [一成] 政治への不満が強くなると同時に、相対的に軍への信頼度が高まったのが昭和の初めですね。その前は、大正デモクラシーの影響もあって、軍人自身が軽視され、嫌われ者だった時代でしょう。軍人が軍服を着て外出するのがイヤだと思ったりしていた時代です。

半藤 [一利] そうです。「貧乏少尉のやりくり中尉、やっそこ大尉で百四十円、嫁ももらえん」なんて、俸給の少なさを馬鹿にした戯れ歌が流行ったくらい。[半藤一利, 保阪正康, 中西輝政, 戸高一成, 福田和也, 加藤陽子. あの戦争になぜ負けたのか. 文芸春秋, 2006, p.140. (文春新書)]

⁴⁶ ○「日本陸軍における幹部候補生（かんぶこうほせい）とは、中等教育(※)以上の学歴がある志願者の中から選抜され、比較的短期間で兵科または各部の予備役将校、あるいは兵科または各部の予備役下士官になるよう教育を受ける者。場合により幹候と略されることもある。日本陸軍では下士官以上が部隊の幹部という位置づけであった。

1927年（昭和2年）12月に一年志願兵制度を改めて幹部候補生制度が定められ、1945年（昭和20年）8月の太平洋戦争（大東亜戦争）終結まで存在した。制定当初は主として予備役将校の養成を目的としたが、1933年（昭和8年）5月の制度改正以後は予備役将校となる教育を受ける甲種幹部候補生と、予備役下士官となる教育を受ける乙種幹部候補生に修業期間の途中で区分された。[”幹部候補生（日本軍）”. Wikipedia. (参照 2022-10-10)]

(※)【中等学校】「②旧制の中学校・高等女学校・実業学校の総称。[[広辞苑]]

○資料「幹部候補生」

⁴⁷ 『歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌』 p.442-443.

「【^{ああ}噫・白井軍曹】

私の初年兵教育の助教であった白井軍曹は正義感の強いしかもやさしい優秀な模範的下士官であった。彼は選ばれて聯隊本部の兵器掛曹長として勤務していたが或る日の夜久しぶりに私の下宿へ来て約一時間程の思い出話などして帰った。ところが翌朝お城の下にあった弾薬庫で小銃自殺を遂げているのが巡察によって発見された。急報に接して駆けつけてみると弾丸は左胸から背中に見事に撃ち抜かれていた。後で聞くと聯隊の兵器検査が近くに迫っており弾薬の員数が不足していたらしい。しかも員数不足は前任者か或はもっと前からのもので検査時には何とかさしくって⁴⁸過していたようであるが責任感の強い彼にはそれが出来なかったものである。そんな事情を打明けてくれればよかったものを全く平常の如く快活に談笑して帰った彼を偲び自分の不明を責めると共に痛恨の涙を止めることは出来なかった。

まことに惜しい人を亡くしたものである。心から御冥福を祈っております。」⁴⁹

⁴⁸ 【差し繰る】「さしつかえのないように都合をつける。くりあわせる。」。『『広辞苑』』

⁴⁹ 『歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌』 p443.

1.5 北満：独立守備隊 25 大隊（37 年 2 月）

「私は昭和一二年から約一年足らずの短期ではあったが、北満の孫呉附近の警備に当たっていた独立守備隊に勤務していたとき、同将校団の先輩として同大佐〔陸軍きつての文化軍人と言われた町田敬二⁵⁰中佐（後大佐）〕のご指導を受けた。」（心理 264）

「歩兵砲隊付となっていた十二年二月、突然新設の独立守備隊二五大隊へ転任となった⁵¹。これは北満の黒河から孫呉を経て辰清に至る間の鉄道守備を主任務とする部隊である。本部は孫呉にあり、隊長は大佐、本部には佐官二、尉官二、戦時編成の中隊（重機二を含む）四、歩兵砲隊、通信班等から成る小型の歩兵連隊の戦力であった。黒河の河岸に立てば滔々と流れる黒龍江の彼方ブラゴベシチェンスクを目前にしてソ連の兵馬が隠顕する。まことに若き士官の血を沸かせるに足るものがあつた。」⁵²

○37 年 11 月 1 日、陸軍大尉進級⁵³

⁵⁰ ○陸軍大将町田経宇の次男。父は陸軍薩摩閥の幹部的存在であった。〔“町田経宇”. コトバンク. (参照 2022-10-29)〕

○町田敬二は陸士 30 期。映画制作や作詞を手掛ける。36 年の 2.26 事件の後 38 年春まで孫呉に勤務する間、友人西竹一大尉（バロン西）が来訪し、満鉄総裁松岡洋右と面談している。日華事変では大隊長として金鷄勲章を授けられた。〔町田敬二. ある軍人の紙碑：剣とペン. 芙蓉書房, 1978, p.105, 108 ほか〕

○資料「町田敬二」

⁵¹ ○丸亀連隊が陸大受験準備のために供与した便宜か。

○同年 8 月、12 連隊は上海に派遣された。〔資料「上海派兵」〕

⁵² “任官・満州・参本・命拾い三たび”。『回想録：五十年の歩み』 p.121.

⁵³ 『陸軍将官実役停年名簿 昭和 19 年 9 月 1 日調』

「ここでの冬季の温度は零下四十度前後の日が多く、耐寒演習では五十二度を記録したこともあった。この地には野鳥一雷鳥、雉一が多く愉快的思い出もある。広野で乗馬群の包圍攻撃によって雉を追い回し、疲労を待って捕獲するのは壯観であった。またある日曜日の昼下がり、私は官舎の窓から官舎群の塵捨て用壕に大きな雄雉が進入したのを見付けどてら姿のままトンボ捕りの網を手に、企図秘匿、匍匐前進で接近、関脇荒勢⁵⁴宜しく突然、襲いかかったが間一髪逃げられ、こちらは雪の中に顔を突っ込んでしまった。この体たらくを口さがない奥様連中に見られ、さんざん冷やかされて一汗かいたことがあった。これも今となっては懐かしい。

ある日、今は亡き重宗君がヒョッコリ来訪、一泊して行ったことがある。寒い北満では風呂から上がって浴衣に着がえ、ペチカのパチパチと燃える音を聞きながらやるビールは乙なものである。[中略]

当時一寒村であった孫呉にも十三年には兵営や官舎が急ピッチで建造されていた⁵⁵。現在どうなっているか、つわものどもの夢の跡を再訪して見たい。」⁵⁶

⁵⁴ 高知県出身の力士。

⁵⁵ 「孫呉は北安と黒河の間、むしろ黒河に近い。その日本軍の(ママ) トン陣地から、ソ連のシベリヤ鉄道は重砲の射程距離内にあった。昭和十四年のノモンハン事件、同十六年の関東軍特別演習(関特演)の後、関東軍のシベリア進出の噂さと照合して、孫呉も急速に軍都化して、クローズアップされていた。」、『ある軍人の紙碑』p.107

⁵⁶ “任官・満州・参本・命拾い三たび”。『回想録：五十年の歩み』p.121-122.

1.6 陸軍大学校（38年6月～40年6月）

入校まで

「陸軍大学の入学試験は二回あり第一次〔初審〕はペーパーテストであって入学生の倍数をとり第二次〔再審⁵⁷〕は主として面談問答形式であって人物考査を主とする。第二次試験のため部屋に入ると三名の試験官がおりその一人は何と仙頭中隊長であった。無論裏口入学などはあろう筈はないけれども問答の途中で返答が少し軌道を外れかけるとそれとなく軌道修正のヒントを与えられたように思われその恩恵は生涯忘れることは出来ない。」⁵⁸

年	月	事 項
34	12	この年9年兵担当を終え年末に結婚（新年から陸大受験準備開始 ⁵⁹ ）
37	2	北満の独立守備隊 25 大隊へ転任
38	2	1日陸大初審 ⁶⁰
	6	東京で陸大再審、入校

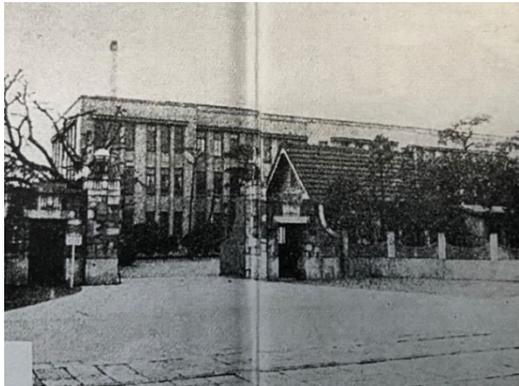


図 12 昭和十六年当時の陸大正門付近
（現、東京都港区立青山中学校）
出典：高山信武. 続・陸軍大学校. 芙蓉書房,
1978. 巻頭写真

⁵⁷ 「試験官ハ時ニ怒声ヲ張り上ケ「何です」・・・「そんな議論が何処にある」
・・・と、叱咤シ又時ニ「それでいいですか・・・随分間抜けた方法ですな」
・・・ト嘲笑シ受験者ノ心理ヲ翻弄スル為メ受験者ハ癩ニ蝕ハリ或ハ落胆失望シ或ハ悲
観セザルヲ得ザル如ク仕向クルコトアリ。然レドモ是レ此ノ間ニ於ケル人物試験ナリ此ノ
如キ境地ニ立チ平静ニシテ謹厳、明敏ナル知識ノ活動ヲ現実スルハ受験者ノ要諦ナリ。」
〔上法快男編. 陸軍大学校. 芙蓉書房, 1973, p.383-384〕

⁵⁸ 『歩兵第十二連隊百十年祭記念誌』 p.443.

⁵⁹ 「陸大合格には3年程度をかけての受験勉強が必要だった。」. [“陸軍大学校”. Wikipedia.
(参照 2022-10-30)]

⁶⁰ 初審・再審：「陸達第56号（昭和12年11月8日）陸軍大学校学生及専科学生採用規則」. [国立国会図書館デジタルコレクション（官報）], 「陸軍大学校学生候補者試験科目及初審試験開始期日等の件達」. [アジア歴史資料センター. Ref. C01005048300, C01005064600]

陸大と陸士 44期⁶¹

陸大・期	卒業年	卒業総数	内陸士 44期	同左例
51	1938	51	7	瀬島龍三
52	39	52	18	山下 豊
53	40	49	8	恒石重嗣
54	41	73	6	
55	42	76	12	
56	43	96	17	
57	44	93	3	
合 計		490	71	

○有末精三（元参謀本部第二部長）・飯村穰（元陸大校長）の陸大回想⁶²

○瀬島龍三

「参謀本部作戦課。陸軍大学校出の超エリート参謀二十数人から成る陸軍の中枢機関だ。国防方針に基づき作戦計画を立案し、戦時中は四百万人の軍隊を動かした。

陸軍には不文律があつてね。陸大の軍刀組が作戦課に集まるんです。陸軍士官学校卒のエリート五百人のうち一割が陸大に進み、さらにその一割の五、六人の成績優秀者だけが卒業時に陛下から軍刀をもらい、軍刀組と呼ばれる。

陸大をトップで出た瀬島龍三は満州（中国東北地方）の部隊で約一年間、参謀勤務をした後、三九年末、不文律通り作戦課に配属された。」⁶³

⁶¹ ○『陸軍大学校』『陸軍大学校卒業者名簿』

○名簿は陸士の卒業期順. 陸大 51 期の陸士 44 期の最初は瀬島龍三なので成績順か.

○陸大 53 期の恒石は陸士 44 期 8 名中 7 番目.

⁶² 資料「陸軍大学校回顧」

⁶³ 共同通信社社会部編. 沈黙のファイル. 共同通信社, 1996, p.62.

12 連隊の陸大在校生（38 年 9 月当時）

「尚その時〔陸大に〕採用された第四十三期生⁶⁴は四十九名で歩十二から鈴木主習、佐藤忠彦、近藤進の三氏を加えて四名、半歳先に大屋角造稍々遅れて梅里助就、又専科⁶⁵学生には福山芳夫〔陸士 35、専科 6（39 年卒）〕、松浦覺〔陸士 39、専科 12（44 年卒）〕の諸氏もおり小將校団を形成出来る程の盛況であった。」⁶⁶

「〔孫呉の後、昭和〕十三年から十五年までは陸軍大学々生となったので再び歩十二に在籍した。」⁶⁷

氏名	陸士	卒業階級	陸大	成績
鈴木主習	42 期	歩兵大尉	53 期	
佐藤忠彦	43 〃	〃	〃 〃	
大屋角造	44 〃	〃	52 〃	
恒石重嗣	〃 〃	〃	53 〃	
近藤進	46 〃	航空兵大尉	〃 〃	優等

図 13 陸大在校生（12 連隊. 38 年 9 月現在）

出典：下記脚注.69-70.

○上記 5 名の名前は次の資料にもある：「歩〔兵第〕十二〔連隊〕附タル次ノ者ハ陸軍大学学校在学中ニシテ編成上支障アルニ付 昭和十一年陸満機密⁶⁸第五（註九五）號第四條ニ依リ留守部隊ノ定員外ニ致シ度ニ付認可セラレ度申請ス 歩兵大尉鈴木主習、佐藤忠彦、大屋角造、恒石重嗣、近藤進、計五名⁶⁹（終）」⁷⁰

⁶⁴ 正しくは陸軍大学校第 53 期（卒業生 49 名）

⁶⁵ 「... 師団参謀要員の養成課程として、1933 年（昭和 8 年）に「専科学生」（修学期間は約 1 年）が設置され、1944 年（昭和 19 年）までに 480 名が卒業した」。〔「陸軍大学校」. Wikipedia.（参照 2022-10-28）〕

⁶⁶ 『歩兵第十二連隊百十年祭記念誌』 p.443.

⁶⁷ 同上. p.442.

⁶⁸ 陸満普大日記「陸軍省保管の様々な公文書類を編冊した「陸軍省大日記」（永久保存文書）のうち、満州（現在の中国東北部）で活動した陸軍の部隊を主に対象とした「陸満機密・密・普大日記」は、秘密度が高い順から「陸満機密大日記」「陸満密大日記」「陸満普大日記」に分かれています。...」。〔“（2）陸軍関係資料”. 防衛省防衛研究所.

https://www.jacar.go.jp/nichiro2/shiryoku/shiryoku01_02.html,（参照 2022-09-14）〕

⁶⁹ 5 名の内訳。〔「第 10 部」. 陸軍大学校卒業生.

<http://kitabatake.world.coocan.jp/rikudai10.html>,（参照 2022-9-14）〕

⁷⁰ ○第十一師団長発、陸軍大臣あて 38 年 9 月 29 日付電報：「陸軍大学校學生ヲ留守隊ノ定員外ト為スノ件」。〔アジア歴史資料センター. Ref. C04120569200. 0610- 0612〕

○「一五年になると、それまでは所属部隊から陸大に派遣されるという形をとっていた学生の身分が、全員、陸大付になった。これは、参戦部隊が入校者のポストを欠員にしたままで行動する不都合を解消するための措置であった。しかし、この人事措置は翌一六年には以前の状態に戻された。一年で中止したのは、戦争が長期消耗戦となって人事施策が混乱したためと思われる。」。〔黒野耐. 参謀本部と陸軍大学校. 講談社, 2004, p. 223-224〕

1.7 東満・第12師団（40年6月～41年11月）

「私が再度渡満したのは十五年初夏、命課は東満、城子溝（東寧西南方）に司令部を置く第十二師団（長・河辺正三中将）の後方主任参謀⁷¹であった。[中略]

師団長は小兵ではあったがカイゼルひげを貯えた智勇兼備の名将であった⁷²。ある日副官邸から軍紀風紀に関する指示の案文に連帯印を求めてきたとき、私は文案の内容を確認して捺印。やがて呼び鈴で師団長室に入ると、大声一番「盲判^{めくらはん}じゃ」と一喝された。よく見ると衛戍地司令官の立場で指示すべきところが師団長名になっていた。この大喝は今も脳裏にあって、処世の指針としている⁷³。

そのころ宮元君が情報主任参謀（兼警備）として着任、たまたま発生した兵器廠の失火で誘爆を起こし手がつけられなかった折、君の勇敢適切な指導によって災禍を最小限に食い止めた見事な働きは今も忘れられない。話は前後したが前記指示が出されたのはこの事故に関連するものであった。」⁷⁴

⁷¹ 「第3軍隷下兵団（※）参謀一覧表」.[アジア歴史資料センター. Ref. C1307048670]

（※）恒石の所属した第12師団は第三軍に所属

⁷² 「昭和十二年七月七日の夜半、北京郊外の盧溝橋付近で演習を行っていた日本陸軍の支那駐屯軍に、やはり同じように夜間演習をしていた中国軍から数発の銃弾が撃ち込まれました。これでただちに戦争が起こったかのように巷間言われています。つまり「運命の一発」で日中戦争がはじまってしまったと。しかし事実はそうではありません。それは偶発的にはじまった日中両軍一個中隊の小競り合いにすぎず、ほかでもない現地の日中両軍間では、事件の翌々日、盧溝橋にほど近い宛平县城において停戦に向けての協議がなされていたのです。紛争はこれで幕を閉じるはずでした。ところが停戦協定の翌日十日の午後四時、ふたたび銃弾が、こんどは日中両軍に撃ち込まれて戦火が一挙に広がってしまった。せっかくの停戦協定を叩き壊すようにいったい誰が撃ち込んだのが、現代史のナゾとなっています。が、その戦闘再開の裏には日本軍の連隊長の独断専行という大きな原因がひそんでいます。すなわち牟田口廉也連隊長がその人で、独断で抗戦命令をくだし、事後報告を受けた河辺正三旅団長が無言のままこれを認可したからでした。牟田口は停戦協定締結の動きを知らながら攻撃を行ったのです。この人は昭和十九年三月、三個師団七万五千人あまりの日本軍を、飢餓と弾薬不足によってジャングルの泥濘のうちに白骨化させたインパール作戦を指揮することになるのですが、そのときの上長もまた河辺正三でした。しかも、牟田口が抗戦命令を下したその翌日の十一日、首相の近衛文麿は声明を出し、「今次事件はまったく支那側の計画的武力抗日なること、もはや疑いの余地なし」と断言しあっさり兵力の増派を決めてしまいました。以降、四年半に及ぶ泥沼の日中戦争には、昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃の日までに、じつに百億円もの戦費が投じられ（現在の価値にして約二十兆円）、四十五万五千七百人もの日本兵が戦死することになるのです。」

[半藤一利. 昭和史の人間学. 文芸春秋, 2023, p.140-142. (文春新書)]

⁷³ 資料「GHQでの恒石陳述／訊問」

⁷⁴ “任官・満州・参本・命拾い三たび”. 『回想録：五十年の歩み』 p.122.

ソ連入国（40年秋）

「十五年秋ごろ、同郷の先輩、朝鮮軍の青木^{たけき}一枝参謀が業務連絡のため、飛来中、風に流されてソ領に入って撃墜され、脚・腰骨折のためソ連病院での加療を終わり身柄引き渡しが行われた。井原潤次郎参謀長が委員長、関東軍の稲葉参謀（四二期）が委員。私は一度ソ領を踏んでおきたいと思ったがポストがない。やむを得ず一等兵に化け委員長の鞆持ちとして参加を許された。引き渡しは^{かんぼく}灌木の茂みに若干の兵力を潜入待機させ、緊張した雰囲気の中で行われた。ソ領の一角に足跡を印したのはこれが最初で最後であった。このときの一等兵姿の写真はほろ苦い思い出となって残っている。なお、城子溝へは、岩越、戸次、白石の諸兄の来訪を受けた。嬉しかっただけに今も記憶に鮮明である。」⁷⁵

⁷⁵ “任官・満州・参本・命拾い三たび”. 『回想録：五十年の歩み』 p.122.

関特演（41年7月）

「ここでの大きな出来事はいわゆる関特演⁷⁶で三十五万の関東軍を一挙に八十万に増強し、機を見て対ソ攻勢をとる準備陣であった。当師団は関東軍の重点正面であっただけに、陸続として部隊が到着、兵馬は山野に充満し、河辺将軍の指揮下に入った部隊は二十三を数えた。」⁷⁷

「わが国にあっては、独ソ戦ないしは欧州戦局の見透しをドイツ優勢と見て、ヒットラーの標榜する欧州新秩序の建設も遠からず実現するものとの判断が支配的であった。

ただ海軍および陸軍の一部（ソ連担当の参謀本部第五課あるいは陸軍省軍務局）には慎重論もあって、独ソ戦は持久戦となり、短期決戦による独軍の快勝を危ぶむ声もあったのであるが、この際ドイツと相呼応して宿敵ソ連に痛撃を加え、北方の患を除くべしとする意見が大勢を占めていた。とくに陸軍統帥部第一部長（作戦）田中中将、同じく第二部長（情報）岡本中将、同第六課長（米英情報）天野大佐などはその急先鋒であり、松岡外務大臣および原枢密院議長も強硬派の雄であった。そこで欧州方面の戦況や極東ソ軍の西送の状況あるいはソ連軍内における動揺混乱などをよく観察しつつ、いわゆる熟柿の落ちんとするを待って一挙東部ソ満国境方面から攻勢に出るべく、朝鮮および満州にあるわが軍備を画期的に増強することとなった。

すなわち当時満鮮にあった約三五万の兵力を一挙に約八五万に強化することが決定せられ、動員せられた人馬は陸続として満州の曠野に到着し、とくに東部国境方面の兵力は充実し、士気昇天の勢であった。

これを企図秘匿の考慮から関東軍特別演習、略して関特演と呼んだ。私は当時東部国境東寧附近に駐屯していた第十二師団の後方主任参謀として勤務していたので、日夜到着する部隊の区署などに忙殺された。新たに第十二師団長河辺正三（後笠原幸雄）中将の指揮、あるいは区署下に加えられた兵站諸部隊は、確か二三ヶ部隊に達したと記憶している。」（心理 3-4）

⁷⁶ 【関特演】「関東軍特種演習の略。1941年（昭和16）7月、日本軍が行なったソ連に対する攻撃準備の秘匿名称。[41年6月の]独ソ戦に乗じて、約70万の兵力を動員したが、8月中止。」、『広辞苑』

⁷⁷ “任官・満州・参本・命拾い三たび”。『回想録：五十年の歩み』p.122.

転任(41年11月)

「殺気だった将兵の心を慰めるように、山野一面に乱れ咲いていた大輪のりんどうの花もいつしか凋み、ようやく寒風の吹き始めた十一月一〇日であった。私は突然に転任の電命を受けた⁷⁸。「ポスト」は参謀本部付⁷⁹というのであった。

当時南方問題は緊迫の一途をたどり、既にわが軍の仏印への進駐もあり、あるいは北方の守りを固めておいて、南方作戦を開始するのではないかという情報は、東満の辺境へもチラホラ聞こえていたので、私はおそらく南方作戦部隊の要員として転補されるものとひとり決めて急ぎ空路上京した。」(心理4)



図14 三宅坂の大本営陸軍部

出典：決定版昭和史 第8巻,毎日新聞社,
1984, p.77.

⁷⁸ 「職務歴 1941-11-10 参本謀略課員兼報道部員」. [偕行文庫資料]

⁷⁹ ○ 「「参謀本部付」とは参謀を補佐する将校のことだ」. [『沈黙のファイル』 p.67]

○ 「[部付は] 参謀肩章吊ってない」. [“池田徳眞氏の回想：「ウィリアムズの拒否事件」ほか”. 2016, (DVD)]

○ 瀬島龍三の例

・ 「39年11月27日参謀本部配属 [参謀本部付]」. [『沈黙のファイル』 p.378]

・ 「防衛庁戦史室に残る参謀本部の編成表「大本営陸軍部将校、各部将校、高等文官職員表」。その記載でも瀬島は一九四〇年一月に部付将校から参謀に昇格している」. [同上. p.67]

○ 恒石は東京の赤尾好夫(※) 宅に住んだことがあるらしい. [安岡元彦. 電話. 2022-11-28]

(※) 1907-85. 「1931年、東京外国語学校(東京外国語大学の前身校) イタリア語科卒業。同年10月、歐文社(現在の旺文社)を設立。[中略] 戦時中に戦意高揚を煽った廉で、敗戦後は公職追放を受けた」. [“赤尾好夫”. Wikipedia. (参照 2022-11-30)]

第2部 大戦中

『恒石重嗣年譜』

2.1 開戦前後

『恒石重嗣年譜』

2.1.1 参謀本部（41年11月）

「十一月一八日着京するや私はただちに三宅坂の参謀本部（大本營⁸⁰陸軍部）— 後市ヶ谷の元陸軍士官学校に移転— の門をくぐった。

部内の空気はわが日本の興廃を賭けた未曾有の大戦を目前にして張りつめた緊張感がみなぎり、身の引き締る思いであった。私はまず関係の上司に着任の申告を行ない、その指示を仰いだ。私の所属は第二部（情報・宣伝謀略等）で、最初は第六課（英米情報）の予定であったようであるが⁸¹、結局第八課（総合情勢判断、宣伝、謀略、特殊情報すなわち暗号解読、防諜）（※）と決定された。かくて密かに期待していた出征の夢は消え去った。」（心理4-5）

参謀総長	次長	第20班（戦争指導）		
		総務部		
		第1部（作戦、動員等）		
		第2部（情報、宣伝、謀略等）	第5課（ソ連情報）	
			第6課（欧米）	
			第7課（満支）	
			第8課（上記※）	
			大本營陸軍報道部（宣伝の実施）	
第3部（通信、鉄道、船舶）				
第4部（戦史）				

図15 参謀本部組織図（恒石赴任時）

出典：（心理6）

⁸⁰ 「昭和一二年をもって参謀本部・軍令部の実体が大本營に移行した、との説もあるが、参謀本部に大本營陸軍部の看板を、軍令部に大本營海軍部の看板をそれぞれ並べただけで、大本營会議がしばしば開かれたわけでもなく、同一場所に勤務したわけでもなく、大本營という実体は何もなく、端的に言えば有名無実の存在であったという説も強い。」〔百瀬孝. 事典 昭和戦前期の日本：制度と実態. 吉川弘文館, 1990, p.262〕

⁸¹ 恒石と同じ44期で病気治療中の大屋角造の交代要員か：「十五年十二月参謀本部に転勤したが、病をえて約一年半後、大東亜戦争にやや暗い影がさしはじめた十七年九月から常勤できるようになり、米州関係担当の情報勤務という「うら道稼業」に従事することとなった。対米情報に専念しながら、戦況不利には悩まされ通しだった。決定的勝利の見込みは既に無く、何時如何なる形で終戦に導くかが、大本營の戦争指導幕僚、特に米英課関係者の考慮の底流をなしていたことは否めない。」〔大屋角造.“うら道人生の回想”. 『回想録：五十年の歩み』 p.328〕

第2部第8課

「当時の第二部長は元駐独武官の岡本清福中将⁸²（後に元駐伊武官有末精三中将）で、第八課長は武田功大佐（後、西義章大佐、永井八津次少将）、班長⁸³門松正一中佐（後大佐）、謀略高沢中佐・尾関正爾少佐（後中佐）、宣伝桑原長少佐、特殊情報多田少佐（後中佐）という顔ぶれであった⁸⁴。

宣伝参謀は一六年夏までは藤原岩市少佐（後中佐）と桑原少佐の二人であったが、南方作戦に伴う対インド・マレー工作のため、藤原少佐は九月既に転出してタイ国駐在の田村武官の下にあった⁸⁵。

そんな関係から、私は藤原少佐転任後空席になっていたポストにつくこととなり、宣伝業務を桑原少佐とともに担当するよう命課されたのである。」（心理5）

「昭和一七年後半、桑原参謀、小岩井大尉、草間中尉は相前後して第一線兵団に転出し、山口源等大尉、浜本純一中尉が後任として発令された。宣伝関係参謀の後任として佐藤不二雄少佐（後中佐）が充当されたが、在職期間は比較的短かったので、私が昭和二〇年六月末まで長期にわたって重任を果たさなければならぬ破目となった⁸⁶。」（心理90）

⁸² 「例のスイスでダレス工作をやり、終戦時チューリヒで拳銃自殺した岡本清福中将……」。『昭和史の天皇3』p.167]

⁸³ ○「昭和十二年の参謀本部改正で〔中略〕第八課になっても同課内には、第一班（※）、第四班、第十一班などがそのまま業務を続け…」。『陸軍中野学校』p.148]

（※）恒石赴任時に第一班があったか不明。

○資料「参謀本部第8課／設立」

⁸⁴ ○資料「参謀本部第8課／恒石在籍時の関係者」

○「明治の昔から「大日本帝国陸軍」では、神がかり的精神主義（※）が幅をきかし、頭の硬い人間が多いといわれていたが、そうした中で参謀本部はさすがに陸軍の頭脳中枢であり、今ならさしずめ大蔵・通産官僚や大企業に集まるような、逸材が多く集まっていたことは確かである。〔中略〕…宣伝謀略を担当する第八課は、その業務の性質上、軍人以外の民間の各分野でのエキスパートを囑託として抱えていた。それは学者・ジャーナリスト・芸術家といった文化人から、転向した共産主義者までを含んでいた。〔多川精一、戦争のグラフィズム：『FRONT』を創った人びと。平凡社、2000、p.48-49〕

（※）「軍部や右翼の「神がかり」も、実は信用がなかった。まさか本気ではあるまい、としか考えられないようなばかばかしさであった。社会科学と神がかりとは、全然勝負にならないはずである。ところが、「神がかり」は外見で、その裏には、党派あるいは功利的な打算がみえていた。〔中島健蔵、昭和時代。岩波書店、1957、p.38〕

⁸⁵ ○「九月二十九日、私と山口〔源等〕中尉は合の背広に身を包んで、羽田を飛び立った。〔藤原岩市、F機関。バジリコ、2012、p.34〕

○資料「藤原岩市」

⁸⁶ ○資料「参謀本部第8課／恒石在籍時の関係者」

○恒石が宣伝主任参謀となったのは佐藤不二雄参謀が転出した44年1月以降か。

「宣伝なんて陸大でも教えられず⁸⁷面くらったが、当時はまだ大尉⁸⁸で若かったし、ガムシヤラに仕事をした。担当は軍事宣伝で、国としての対外宣伝は内閣情報局や外務省がやってた。しかし、軍だけで軍事宣伝ができるわけではなく、情報局に委員会みたいな組織（陸、海、外、逡の各省、それに同盟通信とNHKの連絡協議会）を作って、毎朝⁸⁹九時から、各自が所管のニュースを持ちより、その取り扱いを決めていた。」⁹⁰

○8課・谷山樹三郎元中尉

・「恒石さんは他部や、八課でも軍事の方に門松、尾関という二人の参謀がいてそれとの連絡がお仕事で、情報参謀としての仕事は「自分が」駿河台⁹¹へ出るまではほとんど全部任せきり。今でいうディスクの仕事。朝「日」、毎「日」、讀「賣新聞」、中央公論、改造、映画社としては国策「会社」の日映、情報関係では同盟「通信社」、東大の大学院。松竹、東宝も全部自分の傘下。海軍軍令部と外務省、大東亜省、「大本营」陸軍部が定期的に虎ノ門の情報局⁹²で情報交換をしていた。そのお偉方が出席する会議へ、参謀代理としてまだ中尉の自分が参謀の黄色い旗を立てた車に乗って出ている。

東宝がサイゴンで現地ロケをした安南の独立戦争がテーマの映画⁹³について、自分だけが賛成し、上映が許可になった。爾来、東宝は自分を貴賓扱いし、帝国ホテルに一室を与えてくれた。「中略」日常接触される方は同盟通信は菱刈「隆」大将の息子さん、NHK国際局長の森さん。ほぼ毎日私のディスクにみえた。」⁹⁴

・「池田さんも書いておられるが⁹⁵、どちらかといえば線の細い大人しい参謀。」⁹⁶

⁸⁷ 資料「陸軍大学校回顧／田崎末松」

⁸⁸ 41.10.1 少佐進級。『陸軍将官実役停年名簿 昭和19年9月1日調』／資料「叙任」

⁸⁹ 「毎週一回」の会議が開戦から「毎日」となった。[本書「2.1.3 情報局／連絡協議会」]

⁹⁰ 『昭和史の天皇3』 p.168.

⁹¹ 本書「2.3.6 米本国向け放送」

⁹² 「局舎は当初、接収した帝国劇場が充てられたが、1942年2月には三宅坂の参謀本部庁舎に移転しており、間もなく、霞が関の内務省庁舎5階（警保局のある階）に再移転している。」。[“情報局”. Wikipedia. (参照 2022-12-04)]

⁹³ ○1943年10月東宝公開の、衣笠貞之助監督、長谷川一夫主演の『進め独立旗』か。

○長谷川一夫主演の同作品は「橘外男の小説『ナリン殿下への回想』を映画化。在日インド人の独立運動を中心に、日本人の援助と英国大使館の弾圧の間で揺れるインド人闘士の姿を描いたもの。」。[“進め独立旗”- Wikipedia. ピアえんため情報. (参照 2022-07-28)]

○この映画が仏印ロケをしたか否かは不明。

○東宝が44年2月公開した日比合作映画『あの旗を撃て』は「比島派遣軍報道部の協力を得て長期の大規模な現地撮影。」。[“あの旗を撃て”Wikipedia. (参照 2023-07-04)]

⁹⁴ DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』／資料「谷山樹三郎」

⁹⁵ 「[宣伝主任参謀の恒石重嗣少佐は]三四歳ぐらいの若い将校で穏やかに話をされる方であった。」。[池田徳眞. 日の丸アワー：対米謀略放送物語. 中央公論社, 1979, p.22]

⁹⁶ ○“谷山樹三郎元陸軍大尉の回想：「ウィリアムズの拒否事件」ほか” 2016, (DVD)

○恒石の1996年の映像を見た谷山は、「この人は誰ですか」と聞いた。

○年月の経過、戦後犬の飼育で鍛えた [本書「3.2.6 転居」]、あるいは病気のせいかな。

「最初は軍も放送まで手が回らず⁹⁷、わたしは、もっぱら開戦準備として“伝単”（宣伝ビラ）作り⁹⁸と、インテリ向きの『フロント』（前線）⁹⁹というライフのような豪華で美しい雑誌の製作¹⁰⁰をやっていた。」¹⁰¹

「多数の文化人がこの仕事に徴用¹⁰²された。記憶しているのは、写真家の木村伊兵衛氏、評論家中島健蔵氏、マンガ家の松下井知夫氏らだった。伝単は神田淡路町の小さなビルの二階、フロントは九段の野々宮アパート¹⁰³の一、二階を借り、東南アジア留学生にも手伝わせて作っていた¹⁰⁴。」¹⁰⁵

⁹⁷ ○「開戦に先立ち参謀本部では一七人の日本放送協会職員を、一七年一月にはさらに一九人を徴用して南方に送った。」（心理 111）とある。（8 課藤原岩市・桑原長らの手配か）。

○したがってここでいう「軍」とは開戦後の参謀本部(8 課)のことと推測する。[本書「2.2.8 海外放送に着目」]

⁹⁸ 資料「伝単」

⁹⁹ 資料「東方社／『FRONT』刊行リスト」

¹⁰⁰ 本書「2.2.6 東方社」／資料「東方社」

¹⁰¹ 『昭和史の天皇 3』p.168.

¹⁰² 【徴用】「②国家権力により国民を強制的に動員し、一定の業務に従事させること。」
[『広辞苑』]

¹⁰³ フロントを作っていた東方社が野々宮アパートに移転したのは 44 年 5 月。[本書「2.4.1 東方社移転」]

¹⁰⁴ 東南アジア留学生が手伝っていたのは伝単かフロントか不明だが、伝単だとすると戦前は極秘だから開戦後と思われる。[資料「伝単」／資料「アジアからの留学生」]

¹⁰⁵ 『昭和史の天皇 3』p.168.

参謀本部式

「在外公館に対しては、外務省から必要なる宣伝指示が伝達されていたが、大本営においてもその駐在武官¹⁰⁶に対しては別途に参謀次長電をもってそのつど所要の宣伝指示を行なった。短い電文に要領よく指示事項をまとめることは案外むつかしいことで、私は着任そうそう不慣れのため、岡本第二部長からよく懇切なご指導を受けたことは今もって忘れることができない。」(心理 157)

○谷山樹三郎

「自分のデスクの上には第一線の情報部からの情報が全部集まる。永井課長からそれを「3枚に書いてこい」と指示され、東宝から提供された帝国ホテルの別室¹⁰⁷で夜中まで作業した。」¹⁰⁸

○室伏稔(元伊藤忠商事会長)

・「総合商社にとって強さと弊害の両面性を持つ「部門縦割り」に部門横断的な総合調整機能という「横ぐし」を通すことの重要性を瀬島さんは耳が痛くなるほど強調された。恐らくは瀬島さんの大本営における経験が伊藤忠の業務部の機能に反映されているのだと思われる。」¹⁰⁹

・「日常業務で指導されたのは、①報告書は必ず紙1枚にまとめる②結論を先に示す③要点は3点にまとめる一の3点だ。3枚以上の報告書は受け取らず、突き返していた。また「どんな複雑なことでも要点は3つにまとめられる」が口癖で、我々に物事の本質を見極め、整理する習慣を身につけさせた。」¹¹⁰

○池田徳眞(捕虜を使った対米謀略放送「日の丸アワー」放送主任)

・「...、[43年]十月下旬に山王ホテルで恒石少佐にその旨[対米放送に使う捕虜の候補者]を報告した。少佐は「そうですか。それでは今ここで決めてしましましょう」との話である。これが参謀本部の超省力主義で、拙速を貴ぶやり方だなと驚いたが、一五分ほどで一三人をきめた。ちょうど八百屋で、ナスかトマトでも選ぶように簡単にやったのだが、これが彼らの運命の岐路になったことは言うまでもない。」¹¹¹

・「浜本中尉の話では、参謀本部は陸軍の頭脳ではあるけれども、部隊とは違って手足がなく、大工一人見つけることも大変な仕事なのだそうである。いや大工だけではない、後に他の俘虜収容所に行って知るのであるが、参謀本部には権力はあるのだが物が無い。この権力物力分離の原理を厳密に実施していることは、素晴らしいと後で感心するのであるが、この時はそんな気持ではなかった。」¹¹²

¹⁰⁶ 資料「駐在武官」

¹⁰⁷ 本書. p.47.

¹⁰⁸ DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』

¹⁰⁹ 室伏稔. 私の履歴書⑥瀬島龍三さん. 日本経済新聞. 2011-09-17, 朝刊.

¹¹⁰ 「私の履歴書⑦仕えやすい上司」2011-09-18.

¹¹¹ 『日の丸アワー』p.24.

¹¹² 同上. p.39.

2.1.2 宣伝体制

「第八課の担当する宣伝業務は、いうまでもなく陸軍の作戦に関連する事柄であり、その企画を行なうのが本来の任務である。軍事以外の一般宣伝は内閣情報局¹¹³（当時総裁は谷正之）の管掌するところであり、海軍作戦に関してはもちろん大本営海軍部が企画実行したわけである。」（心理 5）

「ただ海軍が軍事に関する宣伝は企画も実施も報道部一本であったのに対し、陸軍は企画は参謀本部第八課において担任し、実施面を報道部が担当するよう二本建となっていた。したがって対外宣伝の実施は報道部員、兼職の資格において第八課で行なうというやや変則的な面があった。」（同上. 156）

¹¹³ 本書「2.1.3 情報局」

陸軍報道部

「陸軍部における軍事宣伝の実施は、大本営陸軍報道部の任ずるところであったが、対外宣伝に関する限り、その実施は報道部員の資格で第八課で行なっていた¹¹⁴。それがため、私は報道部員兼職を命ぜられた¹¹⁵。したがって報道部の業務は大本営発表¹¹⁶を主体とし、主として対内的見地から新聞、放送、映画、美術、文化、各種出版物等全般にわたり言論指導を行なうほか時局講演など広範多岐に亙っていた。そして大本営報道部長は、第二部長の指揮下にあった。その関係を図示すれば左のとおりである¹¹⁷。つまり第八課において立案された宣伝企画は、第二部長の決裁を受け、第二部長から報道部長に指示命令することができる仕組みになっていた。[中略]そして第八課と報道部との連絡は、戦況発表で毎日のように発表主任の廣石少佐（後中佐）と顔を合わせるし、毎週一度、私は報道部長室で昼食を共にし、報道部長以下部員の人々との意志疎通をはかった。」（心理 5-6）



図 16 廣石権三（大本営報道部戦況発表主任）
陸士 38 期
出典：（心理 295. 部分）

¹¹⁴ ○「それから陸海軍も報道部というのがおりました。陸軍の報道部の方は、国内向けの大本営発表とか新聞指導とかを平時からやっておったわけですが、ところが海外 [欧米] 向けの放送とか宣伝というものはほとんどやっていない、やってないということは、ひとつには情報が入らん訳です。あの時分の情報といういうと結局在外公館から大使館あたりから入ってくる、それは全部外務省へ来ますけどね、同じものが参謀本部の第二部までは来る訳です。報道部には行かないんですよ（※）。だから世界の情報はまあほとんどつんぼだと、これに海外向けに放送なんかやれといたって無理ですわね。」[“恒石重嗣元陸軍中佐の回想：「ウィリアムズの拒否事件」ほか”。2003, (DVD)]（※）報道部は新聞社との接触が多く、外務省が情報の漏洩を恐れたためか。[資料「海軍報道部／高戸主計中尉」／資料「藤原岩市／批判」]

¹¹⁵ ○藤原・桑原参謀も報道部員を兼職。[資料「藤原岩市／批判」／本書. p.52：桑原長年譜]
○桑原の対外宣伝会議出席：資料「重慶向け放送」

¹¹⁶ 「[大本営発表綴]は、大本営陸軍報道部員だった廣石権三中佐の遺族が、防衛省防衛研究所に寄贈したものである。全5部と付属物からなり、1941年12月8日から1945年8月23日まで、大本営発表とその関連資料が綴じ込まれている。[中略]オンデマンドで視聴することも可能……。[辻田真佐憲. 大本営参謀のハンコ決裁の実態が明らかに。NHK [-BS1, 2022-12-17]「軍人スポークスマンの戦争～大本営発表の真実～」補足。YAHOO! JAPAN ニュース. 2022-12-18, (参照 2022-12-20)]

¹¹⁷ 本書. p.45.図 15.

桑原先任参謀

「先任の桑原少佐は作戦軍の宣伝班の編成のため繁忙を極めていた。支那事変を通じて行なわれて来た各軍報道部の性格を、さらに前向きとし単に戦況などの報道に止むることなく、対敵宣伝も積極的に行ない、また占領地住民に対する宣伝工作も活発に行なうため、名ある文士達を根こそぎ動員（徴傭令により軍囑託とする）して宣伝班の要員とする作業がつづいていて、人事はもちろんのこと、予算や資材の配分などに大わらわであった¹¹⁸。この宣伝班の構想は、独軍のPR¹¹⁹（宣伝中隊）のものを取入れたものであった。現在六、七〇歳前後の文士で陸海軍いずれかの宣伝（報道）班員とならなかった者は少ない。皆伝家の宝刀を帯びて¹²⁰征途に上ったのである。

また開戦と同時に撤布する伝単の作製は、早くから始まっていて、逐次作戦軍に輸送中であつた。この伝単については後述するけれども、桑原参謀の指示の下に小岩井大尉（後少佐）が指導して、神田淡路町の事務所で数人の漫画家達によって作製され、南方各地向けにそれぞれの言語で説明を加えた三色刷のビラで、数百万枚に及ぶものであつた。そしてその輸送業務には小池憲兵曹長が当たっていた。」（心理7）

○桑原長年譜¹²¹

- 40年 8月 1日 第25師団参謀（満洲林口）
- 41年 3月 1日 参謀本部部員、兼大本営参謀
- 8月 1日 陸軍少佐
- 11月 12日 兼補¹²²大本営陸軍報道部部員兼補陸軍中野学校教官
- 42年 9月 7日 第10師団参謀（満洲佳木斯^{ジャムス}）



図17 桑原 長
撮影時期：41年3月
出典：『一武人の波瀾の生涯』巻頭写真

¹¹⁸ ○資料「藤原岩市／追悼」

○ジャワ攻略の第十六軍宣伝班に町田敬二中佐（班長）、横山隆一らがいた。（心理110）

¹¹⁹ 正しくはPK（Propagandakompanie）。〔資料「藤原岩市」〕

¹²⁰ 「報道班は刀をつることになっていたのが六本木へ行って刀を買いました。背がひくいので刀を切って短くしてもらいましたが、銘を残してくれというと、刀屋が笑って「こんな安物の昭和刀に銘なんかありませんよ」といいました。」。〔『わが遊戯的人生』p.92〕

¹²¹ 桑原安正編。一武人の波瀾の生涯：燃えた情熱と戦後の反省。桑原文子，1996，巻頭年譜から抜粋

¹²² 【兼補】「本職以外に兼務として他の職に任命されること。兼任。」。『広辞苑』

宣伝計画の立案

「そんな状態であったので、大戦に伴う宣伝計画はいまだ文書化されていなかった。もちろん国の総力を挙げての戦争であるから国家として宣伝計画は策定せられるべきもので、単に陸軍や海軍のみで立案されるべきものではない。したがって主管官庁は内閣情報局である。しかしながら、情報局にもいまだ成案はなかった。そこで私は取急ぎまず宣伝計画の陸軍案の作製を急いだ。

開戦はいよいよ目前に迫っている。こんなときに主管官庁がどこだなどと縄張りをいってはいられない。走りながら考えねばならぬ状況であった。私は上司の決裁を得た陸軍案を情報局に提供して、それをタタキ台として情報局の成案にもって行くことを望んだのである。[中略]

内閣情報局は対外宣伝に関する陸軍案を基に関係官庁と協議の上、「日英米戦争ニ対スル情報宣伝方策大綱」を成文化したが、既述の対外（敵国を含む）宣伝の陸軍案はほとんど無修正のまま採択された¹²³。この文書は輿論指導も含めた対内外全般の宣伝を律したもので、そのうち対敵国宣伝の部分は別冊として必要な向きにのみ限定して配布されていたのであるが、終戦時の指令によって焼却され、その資料が残されていない。

米国よりの返還文書の中にもいまだ発見されていないので、ここに原文を掲載することができないのは誠に残念である¹²⁴。」（心理 7-8, 11）

¹²³ 「この内容について、恒石は「陸軍案がほとんど無修正のまま採択された」と述べている（なお筆者 [北山節郎] に対しては、「私が一案を起案、上司の決裁を受けて陸軍案を情報局に送付、それをタタキ台として情報局案を作ってもらった」が、成文の大綱は「後日、それを基として恐らく情報局（あるいは外務省も参画）で細分化したものと思う」と答えている）。」。[北山節郎. ラジオ・トウキョウ II. 田畑書店, 1988, p.27]

¹²⁴ 同上. III. p.342-352. に収録.

2.1.3 情報局

「昭和一二年九月に従来の情報委員会を拡充して内閣情報部とし、さらに同一五年一月二月これを強化して内閣情報局に昇格せしめ¹²⁵、初代総裁に伊藤述史氏が任命せられ、開戦時は谷正之氏が総裁の職にあり、その後天羽英二氏、緒方竹虎氏などを経て終戦時は下村海南総裁となった。情報局は国策遂行の基礎となる一般宣伝の計画および実施を主任務とし、五部一七課約五五〇人の陣容であって、「情報の大本営」とも呼ばれたが、各官庁から派遣された職員の混合体であり、局に昇格後日なお浅かったので、いまだ寄合世帯の空気が拭い切れないところも残っていた。」(心理 155)

「けど貧弱でしたよ。結局ドイツなんか宣伝省というのがあって宣伝大臣がおったでしょう。大々的にやってますわね¹²⁶。日本も情報局というものができてやってはおりました。550人ぐらいおったでしょう。各官庁から出向して内閣情報局を作った訳ですけど、ところがこれが寄合所帯で、人事関係以下、給料も各省から出とったんじゃないか...、ま、ともかくとして人事関係は本省が全部握ってるわけです。だからひも付きでしょ、みんな¹²⁷。これではまとまるわけにはなかなかいかないですね。まあ形は出来取ったけれども弱かったでしょうねえ¹²⁸。」¹²⁹



図 18 情報局開設

出典：朝日新聞 1940-12-07. 朝刊.

¹²⁵ 経緯. [資料「満州事変と対外宣伝／対外放送強化」]

¹²⁶ 資料「ドイツの宣伝」

¹²⁷ 「[逋信省から出向した宮本吉夫は] 戦前戦中を通じて情報局の放送担当の課長として、複雑な情勢下に粉骨碎身し、大きい業績をのこし、放送協会への多年にわたる逋信省の監督指導の伝統を守り抜いた。」. [海外放送研究グループ編（編集責任者並河亮）. NHK 戦時海外放送. 原書房, 1982, p.186]

¹²⁸ 「対外宣伝方策にもとづき、実際に宣伝活動を指揮したのが情報局であり、そのもとで実行したのが同盟通信社、日本放送協会などである。[中略] 日本の情報局でも関係官庁の強い抵抗があり、各省所轄業務のなかで、情報局に完全に移管統合されたものは結局ひとつもなく、既存機関は主要業務を依然として確保していた。対外宣伝業務の多くは外務省に残され、軍事情報については大本営陸・海軍報道部が存在し、放送業務は逋信省の所轄のままであったのである。」. [有山輝雄. 情報覇権と帝国日本Ⅱ：通信技術の拡大と宣伝戦. 吉川弘文館, 2013, p.488]

¹²⁹ DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

連絡協議会

「情報局と関係官庁との連絡は、おおむね緊密に行なわれたが対外放送はとくに歩調を合わせ、すみやかに対処する必要から、第三部長¹³⁰主宰の下に対外放送連絡協議会を設け、陸海軍、外務、内務、大東亜、通信省、NHK、同盟の責任者が毎朝¹³¹会合し、情報交換を行ない、そのつど宣伝要領を協議決定した¹³²。

特に第三部長の井口貞夫氏（後駐米大使）、宮本吉夫¹³³放送課長、水谷¹³⁴（故人）、並河〔亮〕¹³⁵情報官（日大・玉川大教授）にはお世話にもなり無理もききいれていただいたわけで懐しい方々である。」（心理 155）

¹³⁰ 第二部長か：「……資料が少ないが、国際部第二課長澤田進之丞（※）は次のように記している。（『放送研究』昭和十七年一月号）

「それまで〔開戦前まで〕我が海外放送の宣伝大綱方針指導のため毎週一回、情報局第二部第三課主宰の下に陸海軍、外務省、情報局第三部等の関係各官庁代表者が集まって我々のために定期会合を催されてみたのである。」。（『NHK 戦時海外放送』p.246）

（※）「国民新聞記者たること約八年、日本放送協會に入り報道 [=ニュース] 放送に従事、次いで対外敵放送全般を管掌す。現在日本放送協會國際局亞洲部長參事。」。〔澤田進之丞、姿なき戦ひ、輝文堂書房、1944、巻末著者略歴〕

¹³¹ 開戦前は週1回

○「…今次戦争開始されるや、更に海外放送の新拡充を行ったほか、情報局に於て従来週一回行ひ来った海外放送打合会議を拡大し、陸海（統帥部を含む）外務等関係各方面出席の下に「海外放送連絡協議会」を毎日開催し大東亜戦遂行に向って作戦、外交に即応せる活発自在な対外放送戦を指導することとなり、かくて日本放送協會の海外放送は茲にその全機能を挙げて活動することとなった。」。（『NHK 放送文化研究所蔵、「対敵電波戦」第一号、p.2-3〕

○「ちなみに開戦当時の情報局第二部第三課長は通信省出身の宮本吉夫。

「戦争勃発を契機として本会合は即日拡大強化せられ、同盟通信社の対外宣伝部門担当者をも加へて毎日迅速的確に其の日々々の宣伝方針を議する事に飛躍した。之は極めて時局に即応した適切な処置であつて、相手が米、英といふ世界宣伝網の過半を抑へてゐる大敵である以上、我方にも当然之に対抗して組織的、且つ統一的なる対外宣伝方針を行ふべき『抛りどころ』を必要とするからである。この会合は現在まで、元旦一日のみを臨時休会としただけで、其の他は連日続行されつつ多々益々其の機能を推進せしめてゐる事を言へは足りる。」。（北山節郎『NHK 戦時海外放送』p.246）

¹³² 「開戦と同時に、それまで内閣情報局、外務省、陸軍、海軍が独自に行なつてきた対外宣伝は「情報連絡協議会」のもとに一本化された。それと同時に、情報局の管理下にあつた海外放送は、陸軍、海軍、外務省、情報局、内務省、^(マ)通信院などに、NHK と同盟通信（共同通信の前身）が参加したこの協議会の管理下に置かれることになった。」。

〔中澤まゆみ、ダイナはもう聞こえない：日本のジャズ・戦中編、潮、1982、(281),p.194-195、(1982年9月号)〕

¹³³ 資料「宮本吉夫」

¹³⁴ 宮本吉夫後任の水谷史郎と思われる。〔同上〕

¹³⁵ 資料「並河亮」

2.1.4 南方作戦の企図秘匿

「...われわれが、最も頭を痛めたのは南方作戦のための大兵力の戦略展開に関するものであった。もちろんこれを事前に暴露することは国家の浮沈に関する重大事である。さりとしてこの大部隊の動きを掩いかくすことは至難の業であった。そこで考えぬいた結果、わが軍はインド・ビルマ方面からの重慶への輸血路を南西シナ方面より遮断して、シナ事変を解決せんとするものであるという点に宣伝の焦点をしぼったものである。幸いに他の諸施策と相まって、その欺瞞宣伝は成功した。」¹³⁶

「そして一二月四日マレー上陸部隊主力船団一七隻は海南島三亜港を出てシャム湾に向かったのである。

宣伝面においてはそれと相前後して、現地部隊の陽動と相呼応して内地新聞あるいは放送等により支那事変の早期解決の必要性を強調し、それがためには、援蒋ルート遮断作戦の重要性を取上げることにより暗に昆明作戦を示唆し南方作戦全般の企図秘匿に努めた。

またタイ国に対する現地交渉（第二十五軍先遣兵団主力が南部タイのシンゴラ、パタニー附近への上陸など）が開戦当日の一二月八日午前〇時に開始するよう指定されていたのも企図秘匿上の考慮からであった。

なおこれに先立ち一二月二日（すなわち開戦第一日を一二月八日と決定した日）日本郵船の龍田丸は予定のごとく横浜出港ロスアンゼルスへの航海に上ったが、ミッドウェー近海から引返さねばならないことは既に定っていたのである。この措置もまた開戦企図の秘匿を狙ってとられたものである。

電報送達の面でも一二月二九日以降陸軍省防衛課、参謀本部通信課は逡信省外国電信課に要請して在日米大使館への電報送達を約一〇時間内外遅らせる措置をとり防諜工作を行なっている。

右のほか作戦部隊が防諜に細心の注意を払い、あるいは無線通信の封止とか暗号（略号）の利用等によって企図秘匿に努めたことは申すまでもない。

第二十三軍司令官に対する香港攻略命令を携行した杉坂少佐の搭乗機が、一二月一日広東省の非占領地域内へ墜落する椿事が発生し¹³⁷、統帥部はわが企図の暴露を憂慮したが、幸い実害もなく、ハワイ奇襲はもちろん、マレー、比島方面への奇襲上陸にも成功して開戦初頭の始動はまず良好であったのは企図秘匿の目的をおおむね達成できた証左ともいえるかと思う。」（心理 80）

¹³⁶ 恒石重嗣。「東京ローズ」始末記. 論争. 1962-10, 4(9), p.132-133.

¹³⁷ この事件を扱った作品：吉村昭. 大本營が震えた日. 新潮社, 1968.

2.2 1942 年

『恒石重嗣年譜』

2.2.1 大本営発表の改善（1月）

「開戦初期の発表は大本営（陸）（海）軍部発表と二元的になっていた。私は、国民に対し陸海軍が対立的であるような印象を与えることを避ける意味から、陸（海）軍部の文字を除き、単に大本営発表とするよう上司に意見具申し採択されたので、海軍側の諒解も取りつけ一七年一月一五日以降はそのような発表形式をとることとなったのである。発表文については陸（海）軍作戦についてそれぞれ陸（海）軍報道部で起案するもので、陸海軍協同作戦の場合は協議決定することは無論である。」（心理 295）

○桑原長参謀

「太平洋戦争必至の情勢下、当時陸軍報道部長は人格玲瓏¹³⁸の名も高き馬淵¹³⁹大佐、海軍報道課長は演説の大家平出大佐であった。或る日私が業務連絡の為報道部長室へ行くと、報道将校が部長室につめかけて口角泡をとばしつつ何か議論に花を咲かせている。

「海軍は怪しからん。実力のなくせに勝手なことを言いやがる。」

「やれるならばやって見るがよい。」

等々の言が矢つぎ早やに発せられている。何事かと種々訊して見たところ、今朝、海軍報道部から、

「陸軍は満洲事変以来、国民をリードして来た。今度の太平洋戦争は海軍にリードさして呉れ。」

との申し込みがあったとのことである。[中略]

陸軍、海軍の両報道部は政府を無視し、情報局を侮視し、自己等が不正にも、紙やフィルム、電波等を手中に握り、自己宣伝に汲々としたのである。[中略]

私共宣伝に任ずる者は、しばしばエライ人から呼びつけられて、

¹³⁸ れいろ う【玲瓏】「②玉などが透き通り曇りのないさま。」。[『広辞苑』]

¹³⁹ ○「馬淵 逸雄（まぶち いつお、1896年（明治29年）8月31日 - 1973年（昭和48年）9月17日）は、日本の陸軍軍人。最終階級は陸軍少将。[中略] 支那派遣軍参謀（報道部長）を経て、1940年（昭和15年）12月、陸軍報道部長に就任。報道部長時代は、火野葦平などの文化人を戦線に案内して国内向けに従軍作家による報道を充実させたほか、上海における敵性租界の言論工作、親日新聞の創刊など情報統制を行った。1941年（昭和16年）10月、第20師団隷下の歩兵第78連隊長に発令され朝鮮半島に駐屯し太平洋戦争を迎えた。」。[“馬淵 逸雄”. Wikipedia. (参照 2023-05-27)]

○「大平 秀雄（おおひら ひでお、1898年（明治31年）12月4日 - 1995年（平成7年）1月20日）は、日本の陸軍軍人。最終階級は陸軍少将。[中略] 1941年（昭和16年）8月、陸軍大佐に進んだ。1941年10月、大本営陸軍報道部長に就任。1942年（昭和17年）3月、歩兵第239連隊長に発令され臨汾に駐屯。1943年（昭和18年）3月、近衛第2師団参謀長に発令され太平洋戦争に出征し、スマトラ島の警備を担った。」。

[“大平 秀雄”. Wikipedia. (参照 2023-05-27)]

「今日の新聞は海軍の新聞ではないか。お前等がボヤボヤしているからだ。しっかり陸軍のことを書かせろ！！」

とよくよく叱られ^(ママ)てものである。

陸軍報道部長以下はこのお叱りが恐いばかりに、海軍の向うを張って新聞社や放送局に強圧を加えて行くのであった。

信なき人々は、假令それが不正であろうとも、不義を知りつつも之に屈従していくのだ。自己の地位を守り進級の早きを願う人々がかかる外道におちて行ったことも亦已むを得ないことでもあったろう。かくの如き時私はいつも、

「新聞は新聞社が自己の信念によって作るものである。陸軍や海軍がとやかく言うべきではない。それが職域奉公ではないか。」

と突っぱねていた。之も私が逸早く大本営を追い出される一因となってしまった。

さきに述べた井上先生の言¹⁴⁰の如く、陸海軍は新聞を通じ、ラジオを通じて国民の前にひたすらに「自己宣伝」の茶番劇を展開しつつ、終戦に至るまで止まることがなかったのである。」¹⁴¹

¹⁴⁰ 「太平洋戦争が始められて暫くしてのことであつた。或る晩、我々の陸大同窓会が偕行社の一室で催された。其の席には陸大当時、憲法学を教えていただいた井上孚麿先生も顔を見せて居られた。種々雑談の折り先生は私に対して次の様なことを謂われた。「桑原君、君は報道部に^(ママ)席をおいているようだが、陸軍、海軍の争いは何とかならんかね。国民は笑っているよ。」「まあ一、これを芝居にたとえて謂えば、舞台上で陸軍、海軍という二人の役者が、いきり立って劇を演じているのを、国民と云う観衆が冷静にしかもにがにがしく心配顔で見ている様なものだね。……こんなことでは到底到底、戦争はうまくいかないよ。」。 [『一武人の波瀾の生涯』 p.140-141]

¹⁴¹ 同上. p.141-145.

2.2.2 善通寺捕虜収容所開設（1月）

○太平洋戦争初の捕虜収容所が42年1月14日四国の善通寺師団施設内に開設され¹⁴²、翌15日午後、横浜市内の洋館に留め置かれていた9名（英領ギルバート諸島の英植民地省地区行政官1名、ニュージーランドの沿岸監視員3名、同国兵士4名、中国・青島の米国領事館付海軍無線士1名）が海軍の護送で善通寺駅に到着、善通寺師団側に引き渡され初の収容者となった¹⁴³。

○同日夜、グアム島の捕虜・抑留者480名が多度津港経由琴平電鉄で善通寺着。

○同年9月大阪、神戸、東京、川崎、横浜収容所・分所が設置されるまで、本収容所は内地で唯一の正規の捕虜収容施設であった¹⁴⁴。



図19 開墾作業中の捕虜（下士官・兵）
1942年ころ
善通寺市立図書館蔵



図20 労働を免除された捕虜（将校）
出典：同上

¹⁴² 善通寺に続いて42年1月31日に香港、2月1日に上海に捕虜収容所が開設された。

[名倉有一編。「善通寺俘虜収容所」ハンドブック。：太平洋戦争初の捕虜収容所と人々の記録。私家版、2021、p.61]

¹⁴³ ○捕虜の内訳。[ジョン・M・ジョーンズほか。太平洋戦争初の捕虜収容所 善通寺の記録。私家版、2012、p.82／『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』p.135]

○捕虜は海軍が捕獲した者も含めすべて陸軍が管理。[茶園義男編・解説。大日本帝国内地俘虜収容所。不二出版、1986、p.34-37]

¹⁴⁴ ○『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』p.160 ほか。

○その後の捕虜数。[資料「捕虜の増加」]

開設前後の動き

年	月	日	事 項
41	12	12	軍務局長通牒：支那派遣軍・南方軍各参謀長へ捕虜収容所準備指示
		29	陸軍省に俘虜情報局設置
42	1	14	太平洋戦争初の捕虜収容所を香川県善通寺に設置, 翌日 489 名到着
		25	日本放送協会, 善通寺収容所で捕虜の声を録音 (1 月 29 日まで)
		31	香港に捕虜収容所設置
	2	1	上海 〃
		3	(2 日とも [本書. p.63.脚注.149]) ラジオ・トウキョウ, 米国へ捕虜の声を放送
		18	上村俘虜情報局長官, 善通寺収容所視察
		27	読売新聞：カズンス少佐が母国濠州へ放送する記事を掲載 善通寺収容所の下士官・兵捕虜, 近隣の大麻山開墾作業に従事
	3	12	赤十字国際委員会, 善通寺収容所視察
	4	6	海軍, 大船に捕虜尋問のための仮収容所設置
		29	情報局編集「写真週報」：善通寺収容所の記事
	5	26	陸軍次官通牒：海外宣伝のため東京へカズンス少佐護送指示
		30	陸軍大臣・首相東条英機, 善通寺師団視察
6	3	俘虜管理部長通牒：捕虜将校の労働, 条件付きで許可 (宣伝業務等)	
8	13	読売報知新聞：「外地、南方各地に俘虜収容所 所長きのふ正式発令」	

【出典】『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』p.17.ほか.

2.2.3 情報局の捕虜利用

「捕虜の声」(2月)

○善通寺捕虜収容所

「[1月25日] 俘虜各人ノ感想ヲ録音機ニ吹込ミ米国向放送スベク日本放送協会ヨリ係員来所(吹込ノ件ハ閣議決定¹⁴⁵) 明日ヨリ吹込開始. 吹込ニ伴ウ電灯電線臨時架設方依頼」¹⁴⁶

○日本放送協会

「四. 俘虜の声を海外に放送

敵国軍の俘虜を敵国に向けて放送せしめた例は、既に今次欧洲大戦に於て独逸が昨年春より実施し来つたところで、独逸の「世界放送」は主として英人俘虜を英国向、南阿向、印度向、東亜向、米洲向に語らせ、例のホーホー卿までが、「どつこい、おいらは生きてゐる！」なる題下に英人俘虜と対談をやつたりした。東亜向には主として濠洲兵俘虜が遙々伯林のマイクから濠洲に呼びかけた¹⁴⁷。

大東亜戦勃発するや我が赫々たる戦果と共に、各地から米兵、英本国兵、濠洲兵、ニュージーランド兵等々が俘虜として我が収容所に送られて来たので、これら米英人俘虜の手記を日本の海外放送で米英向に放送することとし、放送局員を四国、神戸、上海の俘虜収容所¹⁴⁸に派して俘虜の手記を蒐集し、彼等の言葉を録音にとつた。今のところ約一千数百名の手記や録音が集り、二月三日¹⁴⁹より北米東部向と北米西部向に毎日二回、英語ニュースに引続き約五分間放送を行つてゐる。

これより先、東京から放送局員がやつてくる旨を知らされた俘虜達は、非常に喜んで、数の少ないタイプライターを互ひに奪ひ合うやうにして手記を書きはじめ、放送局員の来るのを待ちわびてみたさうであるが、愈々放送のマイクが到着するや、彼等は大喜びで我れ先にと争ひつゝマイクの前に立つといふ始末、家族に向つて綿々の情を訴へる者、元気よく歌を唄ふ者、その和氣横溢せる場面は^(マア) 盡く録音されたのであ

¹⁴⁵海外放送連絡協議会か。[本書「2.1.3 情報局／連絡協議会」]

¹⁴⁶『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』p.73.

¹⁴⁷ 英国の例：「たしかにイギリスは、デザインは野暮ですが、インフラ整備には力を注いだ。第一次大戦の経験から、次の戦争は、ラジオによる世界に向けたプロパガンダが戦争の死命を制すると気づいていた。そこで一九三七年ごろ、イギリスにとってはなけなしの予算を使って、全世界の植民地、英語圏を中心にBBCがラジオのネットワークを築き、グローバルに長波、中波、短波ネットワークの大半をおさえていくんです。戦争が始まると、敵の捕虜の名前をなんども放送するんですね、するとドイツ人の母親が懸命にBBCを聞きますから。」。[中西輝政『あの戦争になぜ負けたのか』p.146-147]

¹⁴⁸ 当時国内の俘虜収容所は善通寺のみで、神戸は民間人抑留所。[『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』p.61,111]

¹⁴⁹ 2月2日か：「...過般来日本放送協会国際部員が来善し吹込中のところ全部終了したのでいよいよ二日から国際放送の時間に順次電波にのせて彼らの声になつかしの故国に送られる。」。[“米俘虜 故国へ声で便り 一同揃って日本の襟度に感謝”. 大阪毎日新聞, 1942-02-02]

る。かかる雰囲気を用意しなかつた放送局員は、これは米国人¹⁵⁰の性格を現したものであらうが、それにしても彼等のいかにも嬉しさうな様子には少からず驚かされたと云つてゐる。米国が米国民俘虜の声を敵国放送局から聴かされたのは勿論これが最初であつて、俘虜放送の皮切りをやつた独逸も米人俘虜の放送は未だやつてみないのである。この放送によつて敵国の人心に与へる影響は相当大なるものがあらう。[中略]

左に俘虜の手記の二、三¹⁵¹を紹介する。[中略]

海軍大尉 マークス・モーチマー

俘虜の僕に母国に向けて放送さしてやらうといふのだから、日本人の親切さがわかるだらう。お前の写真を胸に抱いているよ。早く戦争が終つて、再びお前の胸に抱かれないと思ふ。[中略]

海軍大尉 マギー・トーマス

この放送はきつと NBC、CBS、MBS 放送網で受信されて、この話の内容がお母さんのところへ送りとゞけられるでせう。僕はこの通りとても元気です。お金のことで心配があつたら役所に行つて話しなさい。[中略]

看護婦 ヴァージニヤ・ヨセフイン

お母様、がっかりなさいませんやうに。私達は元気で、愉快に暮しています。戦争が終つたら、またお母様のところにまゐります。待つてみて下さいませ。」¹⁵²



図 21 マイクの前の捕虜

出典：『善通寺俘虜収容所 記録写真』
No.17／善 2-17.

¹⁵⁰ ○英海軍オリバー・L・ゴードン大佐：「その後ラジオ東京が善通寺に代表団を送つてよこして個々の捕虜から個人的な便りを記録し、後にそれらは東京から放送されたが、明らかにプロパガンダ目的に使われていた。我々が[42年9月9日に]善通寺に到着する以前からそこにいた米国人はほとんど全員放送用に個人的な便りを録音しており、その後再び機会が与えられると少なくとも一度か二度はそれを続けている者もいた。その件に関する英国の命令は、捕虜は放送すべからず、と明白だった。したがって我々がそれを拒否すると、収容所当局の怒りをかかった。」、『太平洋戦争初の捕虜収容所 善通寺の記録』p.22／『善通寺俘虜収容所』ハンドブック』p.166]

○ニュージーランドの沿岸監視員ジョン・M・ジョーンズ：「一九四二年の初め日本側から、捕虜は自分の声を録音できる、と伝えられた。検閲されるのは勿論だが、東京のJOAKが短波で海外に放送するという。英国人は全員が拒否したが、ほとんどの捕虜は自分が生きていることが家族に伝わるという望みをもって、これに応じた。私のメッセージは実際に家族が聴いた。彼らは私が処刑されたと思っていた。私は日本海軍の基地から二〇〇キロの場所で送受信装置を持った民間人として捕えられた。家族は（スパイ容疑で処刑されるという）最悪の結果を考えた。」、『太平洋戦争初の捕虜収容所 善通寺の記録』p.5]

¹⁵¹ 計 12 名分を引用。

¹⁵² 「対敵電波戦」第一号. p.84, 86.

写真週報 (4月)



図 22 善通寺収容所の捕虜特集記事
出典：「写真週報」1942-04-29号. p.6-7.
アジア歴史資料センター
Ref. A06031081300

2.2.4 対インド宣伝 (2月)

「米国の戦意喪失を図るためには東は蒋政権、西は英国の屈伏が重大要件であった。そして英の屈伏のためにはドイツに期待するところが大きかったが、わが国としてはインドを脱落せしめることが肝要であった。ゆえにインドはわが重要な宣伝対象であり、努めてその反英独立機運を激化して英国よりの離脱を策した。」(心理 100)

○背景

「しかし、一九四二年一月後半になっても、東条内閣のインドに対する方針は示されず、R・B・ボース¹⁵³は苛立ちを強めていた。彼は一月二八日の『中外日報』に次のようなコメントを寄せ、東条内閣に対する不満を表明した。

東条総理は議会に於てビルマ、フィリピン等の将来について言及されたが、印度については触れられなかった、これはお考あつての事であらうが、我々としては印度の解放無くして英勢力の撃滅は無いと信じる。

一方、前述のように、マレー半島での進軍作戦は快進撃を続け、一月末にはイギリスの牙城・シンガポールに迫っていた。この頃には参謀本部も、マレー侵攻作戦におけるF機関・インド独立連盟・インド国民軍の重要性をはっきりと認識し、シンガポ

¹⁵³ ○ラス・ビハリ・ボース (ヒンディー語：ラース・ビハーリー・ボース रास बिहारी बोस Rasbihar Bose.ogg 発音、ベンガル語：ラシュビハリ・バスター রাসবিহারী বসু、英語：Rash Behari Bose、1886年3月15日-1945年1月21日) はインド独立運動家。イギリスによって過激派として指名手配されたことから、1915年に日本に逃れてインド独立運動を続けた。ラス・ビハリ・ボースは相馬愛蔵と相馬黒光(※)の長女、俊子と結婚した。独立運動家で自由インド仮政府主席を務めたスバス・チャンドラ・ボースと混同されることもあるが別人。2005年から、日本に本格的なインドカレーを伝えた人物であると喧伝されているが、本格的インドカレーが日本に紹介されたのは1858年のこと。[“ラース・ビハーリー・ボース”. Wikipedia. (参照 2022-08-15)] (※) 1901年夫婦で中村屋を創業. 妻・黒光の本名は良。[“相馬黒光”. Wikipedia. (参照 2023-05-11) から抜粋]

○「このラース・ビハーリー・ボース。単に[新宿中村屋に]インドカレーを伝えた料理人などではない。彼は一九一〇年代のインドを代表する過激な独立運動の指導者である。」。[中島岳志. 中村屋のボース：インド独立運動と近代日本のアジア主義. 白水社, 2005, p.9]

○「インド民族運動の指導者である[ラース・ビハーリー・]ボースが日本にやってきたのは、一九一五年六月のことであった。彼は一九一二年一二月、デリーでインド総督ハーディングに爆弾を投げつけて負傷させ、一五年二月にはラホール兵營反乱事件を起こし、インドを逃れ日本に渡ることを決意する。[中略] ... [玄洋社創設者、黒龍会顧問の]頭山を尋ねたのはそれから一か月以上も経った一月二四日のことだった。ボースを頭山のところへ連れて行ったのは、孫文から依頼を受けた宮崎滔天だった。」。[嵯峨隆. 頭山満：アジア主義者の実像. 筑摩書房, 2021, p.135,137-138. (Kindle 版)]

ール陥落後、大量に出ると考えられるインド人捕虜の適切な処遇のあり方について検討を始めていた。

一月末。

参謀本部はついにインド問題に本腰を入れて取り組むことを決意し、具体的な協議に入った。そして、その作戦の中心を担う人物として、R・B・ボースの存在に目をつけた。

参謀本部は即座にR・B・ボースを呼び出し、彼に具体的な意見を尋ねた。R・B・ボースは「まずマレーにおける印度人投降兵を中心にし、それに新しく義勇兵をつのって独立軍を組織する」ことを提案し、さらに「東亜各地の独立運動諸団体の代表を招集し、強力な政治団体を結成する」という構想を示した。

また、参謀本部は、当時の日本を代表するインド研究者である木村日記¹⁵⁴も呼び出し、インド工作に関する意見を尋ねた。この時、参謀本部はドイツに滞在中のチャンドラ・ボースを日本に招聘し、指導者とする構想を示したという。しかし、木村は「彼を日本につれて来ると、後日、日独間で問題が起こるかもしれない。それよりもこの際日本に久しく亡命して居るラス・ビハリ・ボース氏を指導者とするのが最も適切であり、また本人も祖国への最後の御奉公として献身的にやると考へる」と応じ、参謀本部もこの意見に同意した。木村はその翌日、R・B・ボースの自宅で彼と会談を行い、今後の進行構想を固めたという。そして、自ら参謀本部が進めるインド作戦の顧問に就任し、R・B・ボースと共に赤坂の山王ホテルを拠点として、活動を開始した。

さらに参謀本部とR・B・ボースは、インド作戦を挙げるための重要メンバーとして、当時上海に滞在中のA・M・ナイルを日本に呼び戻した。ナイルは帰国してすぐ、このR・B・ボースの作戦に加わり、彼らと同様、山王ホテルに拠点を構えた。

そのような中、大本営は二月七日付けで「対インド謀略案」を作成した。ここでは、イギリスの植民地支配体制を崩壊させるため、マレー半島・ビルマで投降したインド兵を密かにインドに侵入させ、「インド内に反英独立の騒擾を喚起せしむ」ることが構想された。

これまで「大東亜共栄圏」の構想外だったインドが、マレー半島におけるインド人工作の成功によって、一気に大本営作戦の重要課題として注目され始めたのである。

155

¹⁵⁴ 「『人物レファレンス事典 明治・大正・昭和<戦前>編3<2010-2018>あ～す』日外アソシエーツ 2019年 p753『木村日記(きむら・にちき)』別名「木村日記(きむら・にっき)」。明治15(1882)年12月25日～昭和40(1965)年11月25日 明治～昭和期のインド哲学者、仏教学者。立正大学教授。インド哲学、現代インド思想を研究。「日本著者名・人名典拠録 1 75万人収録 あ～く」日外アソシエーツ 2012年 p1843『木村日記(きむら・にちき)』1882生、1965没。僧侶(日蓮宗)。専門はインド哲学、仏教学。号は龍寛、慧晃院。』。[浜松市立中央図書館回答. 2023-05-26]

¹⁵⁵ 『中村屋のボース』p.279-281. 引用文中の出典は省略。

All Indians, Arise To Crush British! Build India For Asia, India For Indians!

— Rash Behari Bose Radiocasts From Tokyo —

Rash Behari Bose, leader of the Indian independence movement in Nippon, addressed his compatriots over a trans-hemispheric hookup from station JOAK (Tokyo) on Friday, March 13, starting at 8.50 p.m., advising them to choose the right course in the crisis now staring India in the face.

Since Premier Hideki Tojo made three Greater East Asia declarations from January 21 to March 12, in all of which he appealed to the Indian people to shake off the age-old shackles imposed by the British, Indians in Nippon, Thailand, Germany and other countries have been rallying to the cause.

Below is the gist of Mr. Bose's radiocast:

We Indians are a race that have evolved from the mythological age by the revelation of God. We have



Rash Behari Bose

been ordained with the fulfilment of a task.

The glory of India's history dating back scores of centuries indicates that we have fulfilled the task. The British invasion of India meanwhile has given us a period of suffering. We are about to emerge from this period of ordeal triumphantly.

I feel proud to know that the dear people of Japan admire the uphill fight you all have made against the armed oppression of Britain.

I am convinced at this moment that your persistent efforts for years will be crowned with success, that the noble sacrifices made by thousands of martyrs will bear fruit, and that you will release yourselves from the age-old foreign shackles so that you may forge ahead toward the fulfilment of your ordained task before long.

Upon launching an independence movement as a Greater East Asia representative, I pay my reserved respects to those who have given their lives either individually or in groups to regain our birthright of liberty which had been wrested away by Britain. Some of them were admired by their countrymen, while

most others were men scarcely known.

I also pay tribute to those who fought for the first independence movement for India in 1857, regardless of whether they were Hindus or Muslims. I renew my gratitude to countless others who rose in subsequent revolutions against Britain, giving everything, including their lives, to the cause.

Tens of thousands of warriors and their compatriots all fell without attaining their objectives. Nippon's having resolutely risen to destroy the United States and Britain, has given India the much coveted opportunity our seniors vainly sought in their lifetime. Spirits of my dear seniors, guide me properly in my great undertaking.

Last but not the least, I wish to pay profound gratitude to the authors and leaders of the Indian National Congress. But for their steadfast guidance we would not have been placed in a position to share the burden of releasing India from her age-old shackles. My thanks are due to the pioneers of the movement.

It is my earnest prayer that the spirits of these worthy leaders will bless me from the country beyond for my humble efforts.

I wish to tender my heartfelt gratitude to Mahatma Gandhi and other leaders today who have long striven to establish an India for the Indians.

I ask you all—regardless of whether you are Hindus or Muslims, whether you are National Congress men or not, whether you are affiliated with the Indian Hindu Conference or with the Islamic League—to rise as a body to crush Britain and establish an India for Asia and an India for the Indians.

図 23 インド人に向け放送するビハリー・ボース
出典：THE OSAKA MAINICHI & THE TOKYONICHI
NICHU, 1942-03-15

「印度」関連の海外放送

○日本放送協会¹⁵⁶

42年	標 題
3月	印度問題を繞る放送戦
4月	印度洋作戦と放送戦
〃	印度問題深刻一対印戦
5月	英の窮状と印度問題
8月	印度独立を繞る放送戦

○大本営陸軍報道部・武田大尉：42年4月27／28日

「対印度放送は当分東京一本で行く。各個に電波を出すことは遠慮されたい。」¹⁵⁷

○情報局・並河亮情報官

「私は忙しい仕事の合間に一週二本の割合で中国向け、インド向けの放送原稿を書くように命じられた。それらの原稿は、終戦直後、NHKが全部焼却したが、たまたま私が自宅に持ち帰った何本かの原稿がある。そのうちの一本の一部分を左に掲げておこう。これは英語、ヒンドゥ語、ウルドゥ語、タミール語に訳してインド向けに放送された。」

「立ち上がる時が来た」

「(一九四二年)八月七日のあなた方のボンベイ会議は、イギリス人の即時退去を可決した。それに対しイギリス政府は武力をもって大弾圧を開始し...」¹⁵⁸

○杉山参謀長からインド向け放送に対し感謝状：8月20日¹⁵⁹

¹⁵⁶ 資料「対敵電波戦」

¹⁵⁷ ○資料「東亜放送協議会／第五回東亜放送協議会」

○「この頃、インド国内に対するラジオ放送の統一強化は、一日もこれを放置できない状況であったので…」.[資料「南方軍などの対敵放送／南方軍の放送」]

¹⁵⁸ 並河亮. もうひとつの太平洋戦争：戦時放送記者がいま明かす日本の対外宣伝戦略. PHP研究所, 1984, p.117-118.

¹⁵⁹ 資料「杉山参謀総長の感謝状」

爆撃予告放送

「昭和一七年春、わが海軍最初の渡洋爆撃がインド・カルカッタ地区に対して行なわれた¹⁶⁰。これに先立つこと約一週間、東京から次の謀略放送¹⁶¹を行なったことがあった¹⁶²。

日本軍は米英等の圧政からアジア民族を解放するために進攻するものであって、けっしてインド人を敵とするものではない。近くインドの英軍事施設の爆撃が行なわれるかも判らない。その場合インド人達に被害を及ぼすことは忍びない。軍需工場等に働く者はすみやかに退避するように……。

インドでは短波受信機は約一万人に一台くらいの割合しかないと言われていたので、いかほどの効果が挙げられるかは疑問であった。ところが学校や役場のような公共施設には受信機が備えてあって、傍受した者は口伝えによって皆に知らせるわけで、それが案外迅速に拡大伝達されていることが判明した。というのは当時インド駐在武官として勤務していた市田^(マ)陸軍大佐が交換船で帰朝し¹⁶³、大本営において「この放送によって数万のインド人労働者が工場から逃避したため軍需生産に多大の支障を来した」¹⁶⁴との報告で証明された。」(心理 103-104)

¹⁶⁰ 42年4月か：資料「カルカッタ攻撃」

¹⁶¹ カルカッタは反英運動が盛んな地で、ラース・ビハーリー・ボースも来日前この地で独立運動を展開していた。[資料「カルカッタ攻撃／カルカッタ」]

¹⁶² 大本営海軍報道部の指示で日本放送協会が翻訳・放送したと推測。

¹⁶³ ○交換船龍田丸で42年9月27日帰国した一田次郎(陸士29期, 陸大37期)

○40年ボンベイ領事館に派遣され、同じく交換船龍田丸で帰国した参謀本部附阿部直義大尉(陸軍中野学校一期)が42年11月提出した「インド事情報告書」に「第四章日本の対印空襲」の項がある。[『陸軍中野学校』p.156.目次のみ. 本文なし]

¹⁶⁴ ○後に米軍も日本爆撃の際こうした予告を行なっている：「[45年]七月二十六日から奇襲戦法をやめてビラ撒布による予告戦術に転換...」。[『人生遍路八十年』p.28]

○ビラの例：「空襲豫告 この都市が米空軍の次の攻撃の目標です」。[鈴木明・山本明編. 秘録・謀略宣伝ビラ：太平洋戦争の紙の爆弾. 講談社, 1977, p.12, 52-53]

2.2.5 米国内放送を傍受（3月）

「戦争中の電波合戦は、電波を出す方はNHKが担当。まず海外放送は、二十数か国語にしてニュースや解説を流すとともに、ゼロ・アワーも出していた。聞く方は同盟通信¹⁶⁵がやっていた¹⁶⁶。もちろん戦時だから、軍は最終的には両方にタッチはしていたが、実際の仕事は、毎朝、情報局に関係者が集まって連絡会を開き、方針を指示する、という程度だった。しかし、だんだん戦局が進むにつれて、NHKや同盟まかせというわけにもいかないというので、軍としてはまず相手の電波を聞く機関を作ろう、ということになった。もっともわれわれ情報を担当するものは、以前からも敵の放送は傍受していた¹⁶⁷が、場所も市谷台の参本の中で、しかも機械もあまりよくない。そこで東上線の上福岡に本格的な傍受施設を作った¹⁶⁸。短波を聞くのはわけないが、われわれが聞きたいと思ったのは、中波のアメリカのローカル放送だったから、まずこの受信機作りに苦労した。機械のことはよくわからぬので、国際電気通信KKに頼んで作ってもらったが¹⁶⁹、……」¹⁷⁰

「戦争は始まったけれども情報がほとんど入らんですわ。入るのはもう第三国あるいは枢軸関係ね、ドイツ、イタリー、中立国は多少ありましたけどね、そういうところから外務省に入ってくる公電がありますわね、それしかないんですよ。だからね宣伝する相手の国内情勢も何も知らずにやっても宙に浮いていかなあということ。なんとかして、アメリカのことやから、ローカル〔放送〕やったらあんまりねウソを言えない国だなあというのでね、それを聴けたらいいなあという気持ちになって¹⁷¹大野さんに言うたんですよ。「大野さん、ひとつそういうものができませんかね……〔以下略〕」¹⁷²

¹⁶⁵ 資料「同盟通信社」

¹⁶⁶ 資料「海外情報の収集：情報局」

¹⁶⁷ 「…太平洋戦争中の敵側の日本語〔短波〕放送は一四くらいあったのだが、それは主に参謀本部の傍受室で受信していたから…」。〔池田徳眞. プロパガンダ戦史. 中央公論社, 1981, p.9〕

¹⁶⁸ 資料「福岡受信所（埼玉県）」

¹⁶⁹ 「…昭和16年12月参謀本部第八課に囑託として出向していた国際電気(株)の受信課長大野貫二技師に米国内放送受信機の製作を要請した。早速、同社では衆智を結集、苦心の末、翌年2月末頃その開発に成功した。」。〔恒石重嗣. 第二次大戦中の米国内放送の利用. 偕行社, 1990, 469. p.47. (偕行社, 1990-01)〕

¹⁷⁰ 『昭和史の天皇3』p.184-185.

¹⁷¹ 樺太特務機関敷香支部のソ連の国内中波放送傍受がヒントとなったか：「これはマガダン放送が中心で、ウラジオ、アレクサンドロフスク〔・サハリンスキー〕、コムソモリスク等極東シベリアのローカルラジオの傍受工作であったが、一見無価値のような情報でも丹念に収集整理・分析を続けることにより、相当貴重な情報源として、有力な判断資料となった。」。〔『陸軍中野学校』p.745〕

¹⁷² DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

○大野貫二（国際電気通信 KK・受信課長）

「当時、わたしも参本囑託をしていたが、十六年暮か十七年はじめ、参本の恒石少佐（当時）から、アメリカ国内の中波の放送をキャッチできる受信機ができないか、という相談をうけた。これは今の技術でも非常にむづかしい注文だ¹⁷³。[中略] 東京狛江の工場で製造したはずだ。ただアンテナは電柱の間に五百メートルぐらいのワイヤを張ったものだった。これを上福岡（東上線）の参本八課の別室に運び込み、たくさんの二世たちが聞いていたが、聴取可能範囲は、アメリカの西海岸一帯はもちろん、ロッキー山脈を越えたデンバー放送局のも聞こえたことをはっきり覚えている。あるいはセントルイスまで聞こえたようにも思う。聴取時間は秋から春にかけては、日本時間の午後三時ごろから翌午前二 - 三時ごろまで、雑音はあったが鑑賞ではなく、内容がわかればいいのだから不便はなかった。もっとも夏は空電が多く、東京では聞きにくいので、技術者を青森県の三沢に派遣して聞かせた。」¹⁷⁴

○「...昭和 17 年頃（太平洋戦争開戦直後）、アメリカの国内放送傍受のための軍関係の施設が造られた。受信所本館に向かって左後方の、池の近くに 20 坪位の建物があった。通称第 3 受信室と呼んでいたようだが、何のためにあるのかはあまり知られていなかった。機密漏洩を恐れて隔離されていたようで、誰もその内容について口にしなかったという。[中略] この第 3 受信室も、終戦前夜に他の電波傍受施設と同様にその姿を消した。」¹⁷⁵



図 24 福岡受信所局舎と増設社宅

撮影時期：1931 年

出典：『福岡受信所の歴史』 p.15

¹⁷³ 資料「米国内放送受信」

¹⁷⁴ 『昭和史の天皇 3』 p.185-186.

¹⁷⁵ 上福岡市教育委員会. 福岡受信所の歴史：無線塔がそびえていたまち 上福岡. 上福岡市教育委員会, 1998., p.68. (市史調査報告書第 14 集)

第8課別班

「対米情勢判断の資料とするためにもまた対敵宣伝に利用するためにも、米国内のローカル放送を傍受して、これを分析することはきわめて価値あることであった¹⁷⁶。ことに民主主義国家として言論の自由を尊重する米国としては、短波による対外放送は別として、国内の中波による国民向けの放送は大體解放的でどこかの国のような秘密主義ではなかったので、傍受してみるとかなり参考にもなり、宣伝的に利用できる内容のものが多かった。[中略] この受信機ができ上がったことは素晴らしいことで、米国内の情報を入手することがほとんどできなかった当時において、きわめて貴重な情報を入手する道が開拓されたわけである。[中略]

そこでこれを傍受するため二世¹⁷⁷の人々約二〇〇名を徴用して参本囑託とし、日夜三交代で受信に当たった。受信箇所は米國中、西部一〇数カ所の放送局であって、聴取しながら速記し、タイプして、英文のまま（英語に弱い役所へは訳文）外務省¹⁷⁸、情報局、海軍その他関係方面へ機を失せず送達した¹⁷⁹。これらのグループを参本第八課別班と称し、管谷少佐を長とし、安藤大尉が主として二世達の聴取を指導し、また田村大尉（現神奈川県議）が庶務を担当した。」（心理 259, 261）

¹⁷⁶ 米国も同様に日本の国内放送を傍受した。

①「42年5月から、東亜中継放送の中で、敵国の情報機関に傍受されて、国内情勢の判断材料を与える可能性が多いとおもわれた国内番組には、“番組遮断”が行なわれ、42年10月には、月間40回に達し、中継を受けていた放送局を困惑させた」.[資料「東亜放送協議会」]

② 最高戦争指導会議における情報局総裁報告（44年10月5日）：「また対内報道は敵側がよく傍受し、これを分析しある状況に鑑み...」（心理 284, 286）

③「受信技術の進歩によって、戦中の日米では、互いに相手の国内放送をも傍受することに努めた。」.[北山節郎. ピース・トーク：日米電波戦争. ゆまに書房, 1996, p.25]

¹⁷⁷ 資料「日系二世」

¹⁷⁸ 資料「外務省と放送／米国内放送」

¹⁷⁹ ○「国立公文書館に日本語に訳された内閣官房総務課長あての「秘米国内放送傍受情報」が所蔵されている。日刊で第113号（1943年2月1日）から第452号（同11月1日）までで、前年10月から発行が始まっていたと思われる。全部で5百数十のニュース項目があり、米国内、国際、カナダ国内の三つに分類され、さらに問題ごとにカテゴリーが付けられている。半分以上が米国内ニュースで、食糧問題に関するものが一番多く、資源、労働の順になっている。各項目は3行から4行の短いもので、例えば、「(桑港 KPO・三月二十五日二十一時) 愈々三月二十九日月曜日カラ肉、脂肪、バター、チーズノ配給制ガ実施サレルガ同時ニ飲食屋向ケハ七割五分方削減サレル」などである。毎月の「米国内中波放送傍受成果一覧表」があり、地図上の都市に傍受日を示す数字が記されている。」

[鳥居英晴. “参謀本部の米国内中波傍受作戦”. SW DX GUIDE MAY 2019, p.14-15]

○その他の見出し例：「中波放送. 米国内放送受信情報. 43-02-05. 「国内ニュース.

◎鉄鋼生産戦時需要ニ追ヒツカズ（ソートレーキ二月四日夜）」（注意書き）「本情報ヲ新聞及ビ放送に発表セラルル場合ハ予メ参謀本部第八課恒石少佐ニ御連絡セラレ度」.

[アジア歴史資料センター. Ref. A03024876200]

2.2.6 東方社

「出版物については内閣情報局で作製し、あるいは指導していたものが大量であったが、私の所属する参謀本部第八課においても「フロント」と称する写真雑誌を発行していた¹⁸⁰。これは九段下野々宮ビル¹⁸¹にあった東方社と称する事務所で行なっていたもので、元来は北方対ソ宣伝のための研究機関として生まれたものであったが、南方作戦の発起に伴い、一八〇度の転換を行ない、主として南方占領地を対象とし、併せて枢軸国、満支およびソ連、その他の中立国へもわが大使館宛送付したのである。内容は写真を主体として必要な解説を加え、各戦線の戦況、戦果、占領地民衆の対日協力、連合軍捕虜の生活状況や日本国内の戦争努力ないし軍需生産、南方資源の開発状況などを宣伝して、わが国に対する信頼と協力を増進することを狙ったものであった。したがって使用言語は英、独、伊、露、西、仏、支等多岐にわたり、ことにインド語や南方各民族の言語は複雑であった。」(心理 163-164)

○東方社社員・多川精一

「新しく入った美術部の部屋は、狭い中庭をはさんで旧館の理事室のベランダと向かいあっていて、丁度僕の席からその理事室の中が正面に見えた。だから口を交わすことのない時々見える非常勤理事や、時折訪ねてくる参謀本部の担当将校などの様子を、仕事をしているふりをしながら観察していた。軍の参謀本部といえども役所組織だから、その担当者は始終替わったが、昭和十七年初めの担当将校は恒石重嗣という参謀少佐で、その少し前に満州の関東軍から、中央の参謀本部に転属になったということだった。まだ三十歳前後の陸軍大学校出の若いエリート参謀で、声は聞こえなかったがその挙措動作は遠目にみても、きびきびしていかにも軍人らしかった。人を直感的に評価する木村伊兵衛さんは、彼を〈下町の魚屋のあんちゃん風〉と評したが、それがぴったり似合う人だった。」¹⁸²

¹⁸⁰ ○「戦争中の対外宣伝については、機密事項が多く、また終戦直後、関係書類がほとんど全部焼却されたので、その実相がよくわからなくなっている。現に参謀本部では、東方社を直轄の事務所と考えていた形跡があるが、東方社員は、民間出版社と理解していたことも事実である。おそらく、両面の二重性格を持っていたというのが真相であろうと思う。」[中島健蔵、『心理作戦の回想』序]

○資料「東方社」、資料「参謀本部第8課／参謀本部の傘」

¹⁸¹ ○「東方社の正式な創立日は、確認できる書類は残っていないが、一九四一（昭和十六）年の三月から四月の間だったと思われる。[中略] 社屋は前に述べた東京市小石川区金富町四七番地、市電の伝通院停留所から二、三分のところにあった。山の手の高台に建っている、なんの変哲もない大正期の洋館である。」[『戦争のグラフィズム』p.63-64]

○44年に九段下野々宮ビルへ移転：本書「2.4.1 東方社移転」

¹⁸² 多川精一。焼け跡のグラフィズム：『FRONT』から『週刊サンニクス』へ。平凡社、2005, p.40.

2.2.7 東京初空襲（4月）

「ドーリットル中佐の率いるB25爆撃機一六機は、本州東方約六〇〇マイルの洋上で、空母ホーネットから発進して、東京その他に散発的攻撃を加えた。東京初空襲である¹⁸³。それは昭和一七年四月一八日正午過ぎのことであった。これはまさに真珠湾奇襲以来沈滞していた米国民の溜飲を下げ、日本軍民に一矢むくいようとする心理作戦であったが、結果的には武力戦略に重大なる影響を与えたものである。私はおりから部外の宣伝関係者と赤坂茶寮¹⁸⁴で要談中であったが、時ならぬ空襲のサイレンに驚くとともにただちに事態の概要を知った。そこでぐずぐずしていると鬼の首でもとったように敵側の一方的宣伝になると思ったので、NHK海外局に独断で次のように指示した¹⁸⁵。「敵は爆撃機十数機をもって東京上空に侵入、目下学校、病院等に対して爆撃を加えつつあり、まったく人道に反する悪虐な行為である。しかしながらわが防空隊はこれを迎え撃ち、着々戦果を挙げている」と。ただちに発信された東京からの電波は、その内容がニュースバリュの大きかった関係もあり、サンフランシスコ＝シドニー＝重慶＝ニューデリー＝ベルリン＝ロンドンというふうに世界中の放送局がリレーして地球を一廻りして東京にはね返って来るのに三〇分までかからなかったことが、昨日のように鮮明に思い出される。」（心理 362-363）

¹⁸³ 戦時中米国で映画化：Mervyn LeRoy, dir. *Thirty Seconds Over Tokyo*. Van Johnson; Robert Walker; Spencer Tracy, perfs. 1944, Metro-Goldwyn-Mayer. [“Thirty Seconds Over Tokyo”.Wikipedia. (参照 2022-11-18)]

¹⁸⁴ 東方社か：「昭和十七年四月十八日、その恒石参謀が理事室で理事たちと話をしている時だった。街では戦争が始まって空襲のような異常事態が発生したら、まず警戒警報が出るはずなのが、いきなり空襲警報のサイレンが鳴り渡り、ほとんど同時に近くで高射砲の炸裂音が轟いた。廊下に飛び出して東の空を眺めた僕の目に、その時見慣れない双発の飛行機が、一瞬低い家並みをかすめるように飛び去った。少年時代から飛行機のことには多少興味と知識があった僕は、「あっ！あれはアメリカの爆撃機でノースアメリカンB-25ですよ！」と大声で周りの人に叫んだ。理事室にいた恒石少佐もベランダに飛び出してきたが、「バカをいうな、B-25は陸上から発進する爆撃機だ。日本に来るはずがない」と一蹴されてしまった。」。『焼け跡のグラフィズム』p40-41]

¹⁸⁵ 「海外放送は、東京軍管区発表に先立って、東京空襲を伝えた。これに関し、宮本吉夫の『戦時下の新聞・放送』は次のように記している。

「[午後1時55分の東部軍管区司令部の]発表に先立って、情報局は、アメリカの飛行機が東京上空を通過した同[4月18]日午後〇時半頃日本放送協会の海外部に直通電話で連絡し、横須賀始め東京市内の情報をまとめたところによって午後一時半米西部向の海外放送を第一報として[放送した]」（六二-六三頁）

「日本放送」協会の放送司令部とは別に、情報局は、国際部に直接「連絡」したのだ。」。『ラジオ・トウキョウII』p.144]

米心理作戦の大戦果

「嘘の内容でも先手をとって放送されると、その印象を拭い去ることはなかなか容易でないものであるが、この際は敵の機先を制することができ、しかも事実小学校などを盲爆したことや、敵機の多数が予定の重慶軍勢力範囲に到達し得なかったこともあって¹⁸⁶、敵側の宣伝効果のある程度減殺することができたと思う。しかしながらそんな小手先のことよりも重要な問題は、この行動を伴う心理作戦が日本の指導層、なかならずわが国の国防の重責を負う海軍、とくに連合艦隊司令長官の神経を刺激するところが少なくなかった点である。山本大將が恐れたのは、「日本海軍いずこにありや」という国民の非難の言葉であったと思われる。山本長官の強硬なる「アリューシャンミッドウェー島攻略によってわが哨戒線を東方に推進し、併せて米艦隊を誘致して短期決戦を挑む」意見は、ついに反対していた軍令部および陸軍作戦当局を動かし、インド洋方面の作戦を終わって内地に帰投したばかりの機動部隊に休息と準備の時間を与える間もなく、急遽本作戦に発進せしむるに至った。そしてミッドウェー海戦において、わが海軍は劣勢なる米海軍に惨敗し、一挙に虎の子の四空母を失い、戦勢の潮流が変わる結果となったことは、ドーリットル心理作戦によって得た米側の望外の大戦果といわざるを得ない。

同時にまた日米戦のその後の戦局に一大転機をもたらすに至った。すなわち春秋の筆法をもってすればドーリットルよく日本連合艦隊を潰滅せしめたこととなり、嚇々たる真珠湾の戦果も帳消しにされたようなものである。」(心理 362-363)



図 25 日本放送協会「放送会館」(東京・内幸町)
出典：Wikimedia Commons (p.2.図 2.に同じ)

¹⁸⁶ 資料「東京初空襲と憲兵司令部」

2.2.8 海外放送に着目

「最初は軍も放送まで手が回ら¹⁸⁷なかったが」対敵宣伝用の伝単（宣伝ビラ）や写真雑誌『フロント』（前線）の製作をやっているうちに、その効果が大きいとわかった¹⁸⁸ので、われわれとしては、もっと積極的に手をひろげて放送¹⁸⁹にまで乗り出そう、ということになった¹⁹⁰。¹⁹¹

(1) 南方軍の対敵放送（42年初めの例）

月	日	発信地	送信先	放送内容
2		シンガポール	オーストラリア	捕虜の声 ¹⁹²
3	3	サイゴン	蘭 印	作戦支援の謀略放送（7日間） ¹⁹³

(2) 日本放送協会

「我が海外放送ハ今次開戦後引続き情報局主体トナリ大本営、外務省ト緊密ナル連携ノ下ニ作戦ト呼応シテ強力ニ之ヲ実施シ就中対敵放送ニ重点ヲ置キ来タリタル処其ノ成果ヲ挙ゲ敵側ニ対スル反響見ルベキモノアリ」¹⁹⁴

¹⁸⁷ 本書. p.48.

¹⁸⁸ 資料「伝単／マレーの伝単戦」

¹⁸⁹ 資料「放送施設」

¹⁹⁰ ○南方軍・情報局と同様に、参謀本部（第八課）も「放送〔発信〕にまで乗り出そう」という意味か。（受信：本書「2.2.5 米国内放送を傍受」）

○「南方作戦では、開戦準備の段階から敵側に対するラジオ放送が重視され...」。
〔資料「南方軍などの対敵放送／南方軍の放送」〕

○42-05-26, 南方軍へ放送経験のある捕虜の東京護送指示。〔本書「2.2.9 捕虜の活用／海外放送改善に利用」〕

○資料「東亜放送協議会／軍関係者の参加」

¹⁹¹ 『昭和史の天皇3』p.169.

¹⁹² 小俣特派員。「一刻も早く帰れる日を：英に騙された俘虜濠洲兵放送」。読売新聞。1942-02-27。（本書.p.78.図26）

¹⁹³ ○「本工作については、十七年四月二十八日付をもって、南方軍総司令部より大本営陸軍部宛に文書をもって報告された」。〔資料「蘭印作戦における謀略放送」〕

○資料「南方軍などの対敵放送／南方各局の対敵放送」

¹⁹⁴ 資料「対敵海外放送ノ概要ト其ノ反響」／資料「対敵電波戦」

2.2.9 捕虜の活用（5月）

○陸軍大臣・東条英機は現職の総理としては初めて四国を訪問。

○5月30日善通寺師団司令部で「永見師団長から管下の状況を、水原兵務部長〔捕虜収容所長兼務〕からは俘虜収容所の状況報告をうけ」、以下の訓示を行なった。

「又我国現下ノ情勢ハ一人トシテ無為徒食スルモノアルヲ許サナイノデアリマスカラ、俘虜モ亦此ノ趣旨ニ鑑ミ、大ニ之ヲ活用セラルル様注意ヲ望ミマス」¹⁹⁵

○この日、国内唯一の収容所である善通寺にいた捕虜は395名¹⁹⁶。



図 28 四国に到着した東条首相・陸軍大臣
出典：香川日日新聞. 1942-05-31

「俘虜労役規則」緩和（6月）

「...将校および准士官の労役は俘虜労役規則により禁止されていた。そこで大本営は陸海軍省との間に次のように取りきめを行なった。俘虜管理部長より関係方面に出された一七年六月三日付の通牒¹⁹⁷は左のとおりである。

俘虜たる将校及准士官の労務に関しては俘虜労役規則に禁ぜられある処なるも一人と雖も無為徒食を許さざる我国現下の実情と俘虜の健康保持等に鑑み之等に対しても其の身分職能力等に応じ自発的に労務に就かしめ度き中央の方針なるに付可然指導相成度

追て之が為の労務は左記を適當と思料せらるるに付参考の為申添う

- 1 技術、学術を利用する諸労務
- 2 農業
- 3 家畜家禽等の飼養
- 4 一般労役俘虜の監督
- 5 戦史資料等の記述
- 6 宣伝業務
- 7 其他適當と認むる労務」(心理 167-168)

¹⁹⁵ 『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』 p.140, 314.

¹⁹⁶ 同上. p.326. (なお当時捕虜のほとんどは外地・占領地にいたが〔資料「捕虜の増加」〕, 東条方針に従い日本国内での労働やタイ・ビルマ国境の鉄道建設などに利用される)

¹⁹⁷ 「俘虜タル将校及准士官ノ労務ニ関スル件」. [アジア歴史資料センター. Ref. C13070715000]

海外放送改善に利用

「わが国の海外放送というのは、比較的日が浅く¹⁹⁸、それだけに外人にアピールする内容一つまり、聞かせるテクニックがじょうずとはいえなかったようで、欧米にいた人や、あとで交換引き揚げ船で帰った人たち¹⁹⁹の感想を聞いても、あまりパツとしない、という。放送技術が一本調子、いってみれば生硬だった²⁰⁰。」²⁰¹

「それはもう改善せにゃいかんからというので、はじめ捕虜 [中略] ベテランを呼びましてね、…」²⁰²

「元来捕虜の将校を宣伝等に利用する趣旨は彼等といえども「無為徒食を許さない」ことから生まれたものである²⁰³。」(心理 228)

○捕虜護送

「陸軍密電

陸軍次官ヨリ岡部隊総参謀長、

富部隊参謀長宛通牒案

海外宣伝ニ使用スル為昭南島「チャンギ」要塞ニ 収容シアル「カズン [ス]」少佐
ヲ速ニ東京ニ護送セラレ度

尚本人ハ善通寺俘虜収容所ニ収容ノ形式ヲ採ル予定ナルニ付俘虜名簿、俘虜日誌等
ハ善通寺俘虜収容所ニ直送セラレ度²⁰⁴

五二二 33-3 昭和拾七年五月二十六日²⁰⁵ (印)²⁰⁶

¹⁹⁸ 資料「満州事変と対外宣伝」

¹⁹⁹ 当時日本の海外放送を含め短波放送を聴けるのは海外駐在者など一部に限られた。

[資料「短波放送受信」]

²⁰⁰ 資料「日本の海外宣伝の評価」

²⁰¹ 『昭和史の天皇3』p.169.

²⁰² DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

²⁰³ 資料「捕虜の活用」

²⁰⁴ 「七月三十日付左記一名(但シ書類ノミ)ヲ収容ス 豪州陸軍大尉カズン [ス]」.
[善通寺市立図書館蔵『善通寺俘虜収容所 情報綴』H-357]

²⁰⁵ 俘虜管理部長通牒(42年6月3日付)の直前。[本書 p.79]

²⁰⁶ 標題(俘虜管理部)「俘虜ノ内地送致ノ件」.[アジア歴史資料センター.
Ref. C01000457800] …書類に「参本八課」の連印

2.2.10 昼食会（6月）

1. 日時：42年6月2日午後
2. 会場：山王ホテル
3. 出席：（1）日本側9名：大本営陸軍部恒石少佐、情報局並河情報官、外務省（囑託）小平知 [利?] 勝、今井守、牧秀司²⁰⁷、村山有、放送協会渡邊肇、（沖健吉）（坂本琢己 [巳?]）（2）収容者8名²⁰⁸
4. 式次第
 - ・大東亜戦争ニュース上映：開戦からマンダレー陥落まで約1時間
 - ・昼食：主催太平洋戦時救済委員会…日本国内・占領地の敵国人を民間の立場で救済するため42年2月11日創設（偽装）
 - ・昼食会場およびその後誘導した個々の部屋で日本に好都合な発言の録音・記事執筆を依頼、脅迫（「此勧告ヲ容レザル場合ハ或ヒハ帰国ニ支障有之モ知レズ」）
5. 恒石の動き：「内務省ノ役人ノ如ク仮装」、「尚本計画ヲ円満且自然ニ進行セシムル為、村山ハ AP「ヒル」ヲ戦争直前迄指導シ且外人記者間ニ知己多キヲ以テ、主トシテ彼ヲ潤滑油トシテ紹介斡旋ノ勞ヲトラシムルコトトセリ 又恒石少佐ハ当局ノ監視員ノ如ク仮装シ主トシテ村山ヲ監視スルコトトセリ」
6. 開催の理由：「独伊ヨリ「リスボン」ニ到着セル英米通信員ノ行ヘル悪質宣伝ヲ見急速ニ対策ヲ講スル必要アル旨大本営陸軍部ヨリ情報局海外放送連絡委員会ニ要求スル所アリ 五月二十五日頃ヨリ関係方面ノ積極的援助ニ依リ具体的ニ準備スル事ヲ得タリ」²⁰⁹

²⁰⁷ 資料「牧秀司」

²⁰⁸ 「而して送還に先立ち参謀本部に於ては抑留者中より通信員其の他数名を人選し、之を招待して一般的對外宣伝に利用せんとの計画あり、本省に対し之に協力方申越ありて警視庁に於て抑留中の者其の他より左の八名を詮衡し、本月三日警視庁員附添の下に右レセプションに出席せしめたり。

ユニバーサルニュースフィツチャース通信員	米国人	クライトン	警視庁抑留
AP 通信員	〃	ダイナン	〃
UP 通信員	〃	ベレアー	〃
紐育タイムス通信員	〃	トリシアス	〃
ナショナルシテイー銀行支店長	〃	チェンバレン	〃
宣教師	〃	ウォルサー	〃
ジャパンアドバタイザー通信員	〃	テネリー	警視庁検挙
AP 通信員	〃	ヒル	〃 」。]

[復刻版外事月報（1942年6月号）. 不二出版, 1994, p.35]

²⁰⁹ ○以上1～6：有山輝雄/西山武典編. 情報局関係資料 第4巻. 柏書房, 2000, p.9-34, (近代日本メディア史資料集成 第2期)の「海外宣伝のため帰還抑留敵国人利用状況（其一）」から抜粋.

○資料「GHQでの恒石陳述」

山王ホテル²¹⁰



図 29 山王ホテル全景

出典：平塚征緒. 図説 2・26 事件.
河出書房新社, 2003, p.83.



図 30 山王ホテル正面入口

出典：『図説 2・26 事件』 p.96.

²¹⁰ 「戦前においては、帝国ホテル、第一ホテルと並ぶ、東京を代表する近代的ホテルの一つであり、1936年（昭和11年）に発生した二・二六事件の舞台ともなった。[中略] 立地は赤坂区（当時）山王、日枝神社の南側（キャピトル東急ホテルの南隣に該当する）に隣接し、皇居や国会議事堂へも至近であった。[中略] 階数 地下2-4階 部屋数 149室 敷地面積 13,000 m²」. [“山王ホテル”. Wikipedia. (参照 2022-11-12)]

2.2.11 カズンス到着（8月）

「彼は英国人で陸軍士官学校を卒業しているが、濠州に渡り、シドニーの放送局で約一〇年勤めた有名なアナウンサーとしてニュース解説などをやっていた²¹¹。今度の大战で志願して濠州軍にはいった。そしてシンガポールの陥落によって日本軍の捕虜となっていた。階級は少佐になったばかりであった。彼がアナウンサーであったことは既に現地では知られていた²¹²、選考の上No. 1として東京に呼ばれた。一七年八月初めの暑い朝、私は参謀本部第二部の応接室で初めて彼と対面した。

彼は六尺豊かの体軀で、眼鏡をかけ口髭をたくわえた見るからに堂々たる紳士であった。その態度も立派で、礼儀正しく応答も明快であった。捕虜という立場から来る卑屈さは微塵も認められなかった。私も勝者の立場を捨てて紳士的に対応した。彼に「日本の海外放送を手伝わないか」と話してみたがなかなかウンとはいわない。しかし捕虜生活にはウンザリしているらしく、結局「放送についての忠告や助言ならやろう」という。」（心理 168-169）

○Wikipedia

“Charles Hughes Cousens (26 August 1903 - 9 May 1964) was an Australian radio broadcaster, television presenter and army officer. Cousens was a radio and television personality known for his programs on 2GB and Channel 7 in Sydney. However, he is best known for broadcasting radio propaganda on Radio Tokyo for the Imperial Japanese Army while he was being held as a prisoner of war during World War II, for which he faced accusations of high treason. In 1946, Cousens was charged under the Treason Act 1351 - the first Australian to face the charge. Despite being committed for trial in August 1946, the charge was dropped in December 1946. However, his commission was stripped by military authorities in January 1947. Cousens always maintained he delivered the propaganda broadcasts because he had been threatened by the Japanese with torture and death. Despite this, his work during the war has continued to be the subject of much discussion and speculation.”²¹³

²¹¹ 当時のカズンスの写真：Chapman, Ivan. *Tokyo Calling: the Charles Cousense case*. Hale & Iremonger Pty Limited, 1990.

²¹² ○「菱刈 [隆文] は開戦直後に同盟通信社の社員としてシンガポール地区へ行き、当時捕虜になっていたカズンス少佐 (Major C. Cousens) と会った。菱刈の話ではカズンス少佐を発見し宣伝放送に使うよう参謀本部第八課に推薦したのは、外ならぬ彼自身であった。」 [池田徳眞. 駿河台分室物語【本編】. 私家版, 2015. p.204]

○戦争が本格化すると、カズンスのように敵側に利用価値が大きい将兵は捕虜になる可能性のある部署には配属されなくなると推測する。

²¹³ “Charles Cousens”. (参照. 2023-05-29)

NHK 雇員

「そこかねて連絡してあった内閣情報局の海外放送の主任者並河情報官に「彼を放送協会の雇員のような資格で背広を着せて一般外人並みの待遇をして海外放送に協力さすよう」に要請した。」(心理 169)

「私は彼等²¹⁴にNHKの海外放送に協力することを要請した上、内閣情報局の並河情報官に「彼等はNHKの雇員のような資格にして、給料もNHKから支払い、一般外人並に背広も着せ、ホテル住いをさせて放送技術向上に役立たせるよう」に連絡した。なお捕虜である以上間違いがあってはならぬので「私服の警察官によってそれとなく監視は怠らぬ」ように要望した。したがって彼等三名はNHKから背広も与えられ、第一ホテルに住い、食事もホテルですという状態で、一般外人と何等変わりはなく、給料も数百円が支払われ、レイズのごときは[1943年10月14日の]比島独立後は七百円にもなっていたという(私なんかは新参の中佐[45年3月1日進級(偕行文庫資料)]で一五〇円にも足りなかった。)(心理 347)

「当時、海外放送は情報局とNHKが主体でやっていたので²¹⁵、これ以上、軍が表面に出ると越権²¹⁶になるから、ともかくNHKに身柄と、彼らにやらせる仕事を一任したわけだ。」²¹⁷

「... NHKの囑託みたいな、雇員ですか、立場にして給料もやってね、背広を着せて、捕虜扱いじゃないんですわ²¹⁸。一般外人と同じように扱って第一ホテル²¹⁹に泊めたりしてやりよったんです。」²²⁰

²¹⁴ 8月のカズンスに続き10月にインス、レイズが到着。[本書「2.2.14 米放送要員到着」]

²¹⁵ 資料「対敵電波戦」／資料「対敵海外放送ノ概要ト其ノ反響」

²¹⁶ 情報局官制第一条三。「電話ニ依ル放送 [=ラジオ] 事項ニ関スル指導取締」。
[アジア歴史資料センター。Ref. A03033244600]

²¹⁷ 『昭和史の天皇3』p.170.

²¹⁸ こうした特別待遇をした理由(推測)

① 対日本放送協会：「単なる捕虜ではなく参謀本部が手配した特別な外国人である」と職員に周知徹底させ、指導を受けさせる。

② 対捕虜：ストレスの少ない環境で存分に能力を発揮して指導を行ない、日本放送協会内部の問題点を報告してもらう。

③ 規則上の配慮：カズンスについては42年6月俘虜管理部長の通牒にある「自発的」ならぬ命令による使役であるため、捕虜ではなく一般外人の扱いをすることで、後日必要の生じた場合の説明を容易にする。

²¹⁹ 参謀本部が謀略の拠点としていた山王ホテルには当初は宿泊させていない。[本書「2.2.4 対インド宣伝」／本書「2.3.6 米本国向け放送／準備室」]

²²⁰ DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

命 令

「ところがその日の夕方NHKからぜひ来局して欲しいとの電話があった。聞いてみれば並河情報官がカズンス（Charles Cousens）少佐の声に惚れて直接アナウンスもやって欲しいというと「私の声はオーストラリア人にはすぐわかる。そうすると祖国に対する反逆になる」といってきかなくて困っているとのこと。当時米軍は濠州を基地としてニューギニア方面への反攻を開始していて米濠人間においてはぼつぼつトラブルも起こり始めていた。そして米濠を離間するための宣伝は、一つの大きな狙いであった。彼はその役割を果たすのにはまたとないタレントであった。」（心理 168-170）

「そこでわたしは一計を案じた。捕虜に対して、われわれは、命令する権利を持っている。」²²¹

「...私は上司の許可を得て参謀総長の命令として「貴官は爾今日本放送協会の海外放送に従事すべし」と伝達した。謀略放送に参加した捕虜は、後述する文化キャンプの者を含め二六名であったが、命令に基づいて従事した者はカズンス少佐ただ一人であった²²²。命令を受けた彼は、一瞬ショックを受けた様子で緊張の面持ちであったが、これで一つの踏切りがついたのか、その後の協力ぶりは真摯であった²²³。やがて彼は匿名で放送したにも拘わらず、やはりメルボルンの新聞には彼の写真とともに「カズンスが東京から放送した。多分背中にピストルを突きつけられて放送しただろう」という記事が出たことが交換船による引揚者の言で証明された²²⁴。」（心理 170）

²²¹ 『昭和史の天皇3』p.171.

²²² 資料「カズンスの横顔／戦後」

²²³ ○恒石はじめ当時の関係者への取材. [『ラジオ・トウキョウII』p.184-196]

○恒石はカズンスによって放送経験者が役に立つと確信したと推測する. [資料「シェンク軍曹」]

²²⁴ 「太平洋戦争勃発後、メルボルンの河相公使の公邸に保護監禁されていた私 [池田徳眞] は、翌 [42] 年の四月になってメルボルンの『アーガス』 (“Argus”) という新聞に、彼の写真と記事とが載っているのを見た。それは「カズンスが、東京から放送をした (※)。声はすこし違うが、カズンスであることには間違いない。声が変わったから、きっとピストルを背中に突きつけられて放送したのであろう」という記事であった。私は帰国後まだ外務省のラジオ室にいるころ、JOAKの国際局にカズンスを訪ねて、その話をしたことがある。彼は「ピストルなんか、突きつけられませんかよ」と言って笑っていた。彼は健康があまりよくないので、当時は第一ホテルに泊っていた。」 [『日の丸アワー』p.16-17]

(※) ○カズンスの東京到着は42年8月.

○したがって42年4月の新聞記事にある彼の放送は東京からではなく、(同年2月の) シンガポールからと推測する. [本書. p.78.図26]

○満潮英雄：上司澤田進之丞の指示でカズンスを説得²²⁵

「そして [カズンスは] 『そりゃ、この戦争は大きな歴史から見れば一時的なできごとで、この戦争自体をそれほど重視することはないだろう。しかし、放送はやりたくない』と、ながなが哲学的なこともいう。そこで『いやいややられて困るのはこちらだから、やりたくなったらやってくれ』とわたしはいった」 [中略] するとカズンス少佐はいった。『それほどまでにしてくれるなら、直接日本のポリシーを吹聴するとか、軍の発表とかを自分が放送するのはかんべんしてほしい。しかし文化的な、世界の平和についてなら論じさせてもらう。この世界はわれわれが死んだあとだってずっと続く。わたしはどの国に敵対するという気持ちはもっていない。 [中略] その意味で、とりあえずは放送技術（アナウンス）について原稿の文章を直したり、発音の違いなどについてお手伝いさせてもらう』これには感心してしまった。 [以下略]』²²⁶

²²⁵ 「...当時の大本営陸軍部宣伝主任参謀の恒石重嗣氏によれば、「満潮さんの人柄のおかげで、捕虜の人も次第に協力するようになった。でっぷり太って、見るからに温厚、それでいて頭がきれる。こういう満潮さんに捕虜も敬服し、[後述するゼロ・アワー] 放送が成功した。」。 [墓碑銘：“東京ローズ”を育てた対米謀略放送の班長. 週刊新潮. 1988-07-14号, p.123]

²²⁶ 『昭和史の天皇 3』 p.172-173.

2.2.12 米軍の反攻（8月）

「昭和一七年八月七日敵の反攻第一歩がソロモン群島のガダルカナル島周辺において開始された²²⁷。上陸兵力は輸送船二〇数隻と空母三戦艦一巡洋艦一〇に支援された米海兵隊約一万六、〇〇〇名であった。当初同島にはわが海軍の飛行場設営隊二、五〇〇名がいたに過ぎなかった。同島は米本国と濠州を結ぶ連絡線上の要域であるだけに、彼我共に兵力を注入して爾後約半年にわたる血みどろの争奪戦が展開されたのである。」
（心理 123）

○42年5月以降の戦況²²⁸

月	日	事項
5	1	日本軍, ビルマのマンダレー占領（南方進攻作戦一段落）
	7	マニラ湾のコレヒドール島の米軍降伏（捕虜3万5千人（バターソン=死の行軍）） 珊瑚海海戦（～5.8）. 日・米機動部隊の初の航空戦, 双方空母1隻ずつを失う（この結果ポートモレスビー攻略作戦一時延期）
6	5	ミッドウェー海戦（～6.7. 日本, 4空母を失い戦局の転機となる）
7	11	大本営, ミッドウェー敗戦の結果, [中略] ポートモレスビーにたいする陸路進攻作戦を命令
8	7	米海兵1個師団, ソロモン群島のツラギおよびガダルカナル島に上陸
12	31	大本営, ガダルカナル島撤退を決定

²²⁷ ○「[参謀本部内の] 情報関係者はガダルカナル上陸は米国最強の海兵隊だから本気だという見方をしていたが、作戦の方は威力偵察程度で早く攻撃しないとなくなると甘い判断をしていた」。[DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』]

○米海兵隊が上陸してすぐ引き揚げた例もある：「1942年8月17日に、221名のアメリカ海兵隊が2隻の潜水艦でマキンに上陸したマキン奇襲事件だった。当時のマキンには海軍陸戦隊64名など73名（ほかに民間人2名）の日本軍がいたが、戦闘で壊滅した。日本軍の救援部隊が到着する前にアメリカ軍は引き揚げてしまった。」。[“マキンの戦い”。Wikipedia.（参照 2022-11-26）]

²²⁸ 『近代日本総合年表』 p.330, 332.

ニューギニア戦線

「ちなみに小岩井少佐は開戦前²²⁹より第八課部付将校として永らく勤務し、宣伝ビラの作製指導に当たっていたが、支那事変では殊勲により金鷄勲章を受け、さらに戦争中期²³⁰ニューギニアに再び出征し、ポートモレスビー作戦の歩兵大隊長としてオーエンスタンレー²³¹の峻険を突破した歴戦の勇士で、まことに快男子であった。」

(心理 204)

○「この小岩井少佐は、参謀ではないのだが、陸軍部内では有名な人であった。というのは、彼は日中戦争の発端である北京郊外の^(ママ)蘆溝橋事件の当夜、現地で演習をしていた日本軍の中隊長で、功四級の金鷄勲章をもらった軍人だからである。そして、太平洋戦争が始まると、大隊長として大隊を率いて、ニューギニアの北岸のブナから前人未踏のニューギニア島中央のオーエンズ・スタンレー^(ママ)山脈を越え、オーストラリア側の港であるポートモレスビーを眼下に見るところまで行ったのだが、他の戦況が思うように進まないで、命令により再び山越えをしてもどってきた²³²勇士である。」²³³

²²⁹ 40年8月。[資料「参謀本部第8課／恒石在籍時の関係者」／名倉有一編. 駿河台分室物語【資料編】. 私家版, 2015, p.59]

²³⁰ 「42.2 南方総軍司令部付 8.1 陸軍少佐 8月 歩兵第四十一連隊第二大隊長」。[同上]

²³¹ 「オーエンスタンレー山脈(Owen Stanley Range)は、パプアニューギニア南東部にある山脈。最高峰はヴィクトリア山の4,072m。ビスマーク山脈から連なる山脈であり、ニューギニア島の南東端まで続いている。北東-南西方向に伸びており、山脈の延長は約600km。19世紀にイギリス海軍のオーエン・スタンレーによって発見された。」「オーエンスタンレー山脈」。Wikipedia. (参照 2023-05-30)]

²³² ○「福田 [和也] 昭和天皇も『独白録』で、ポートモレスビー作戦が失敗したときに、もうこの戦は負けだと思ったと言っていますね。」「『あの戦争になぜ負けたか』 p.180]

○「私に [は] 「ニューギニア」の「スタンレー」山脈を突破されてから勝利の見込みを失った。」「[寺崎英成／マリコ・テラサキ・ミラー. 昭和天皇独白録. 文芸春秋, 2020, p.78. (Kindle 版)]

○昭和天皇が「勝利の見込みを失った」のは次のどちらの時か不詳。

①「[昭和17年9月26日] 南海支隊、補給が絶え「スタンレー戦線を撤収し、ブナ地区に撤収せよ」との命を受けイオリバイワから撤退開始、オーストラリア軍の猛追撃を受ける。11月ブナ地区へ撤退した者三〇〇人(上陸時八〇〇〇人)」。[日置英剛編. 年表太平洋戦争全史. 国書刊行会, 2005, p.150]

②「[昭和18年9月4日] 米豪連合軍八〇〇〇人がニューギニアのラエ東方二〇キロのブル河口ホポイに上陸開始。蛙跳び作戦開始」。[同上. p.266]

²³³ 『日の丸アワー』 p.43.

伝単戦

「また東南太平洋地域の米軍に対するもの〔伝単〕も作製して送付したけれども、東南アジア向けの「植民地解放」とか「独立の獲得」というような魅力的な内容に乏しく、かつ戦局の不振から航空機による撒布に困難をきたしたので、勢いこの方面に対しては電波戦を主体とする宣伝に頼らざるを得なくなった。」(心理 96)

○日本軍の伝単（構図）

・(前線で苦戦するオーストラリア兵と、彼らの本国に進駐し地元の女性を抱きかかえる米軍人が対照的に描かれたカラーの絵)

「濠兵対象。濠兵の「何か呼び声が聞こえなかった？」問いに、ヤンキーが「シート、静かに！お嬢さん、あいつはもう死神のリストに載っている」といっている。(ニューギニアで戦う濠兵の恋人は米兵に奪われている。米濠離間)」²³⁴

・(沈みつつある味方空母の上を飛ぶ米機の白黒の絵)

「家なき飛行機一百間は一見に如かず、帰るに家なし—ガダルカナル米兵対象」

・(ベットにうつ伏せになった肉感的な女性が男性の写真を抱くカラーの絵)

「君は必要とされている—米兵対象、一なぜ私をこんなふうに置いていったの。耐えがたい寂しさ、沈黙、この湧きいずる、しかも満たされぬ情熱になぜ私ひとり苦しまなければいけないの。なぜ帰ってくれないの？—(米兵の望郷心をそそる)」²³⁵

²³⁴ 『心理作戦の回想』巻頭の写真とキャプション. 以下同じ.

²³⁵ 日華事変当時とは変化：「太田〔天橋〕氏は末藤〔知文。中支派遣軍・報道部長〕大佐と相談した上で、陸軍司令官の謹厳な布告とともに色っぽいものも取り混ぜて作った。前者だけでは中国の民衆が日本の伝単に興味を失うことを恐れたのである。最初の作品は中国語で以下のように書かれた説明文に続き、一見しただけでその内容がすべて分かる絵が添えられている。

「蒋介石軍は負けて逃亡する時、いつも中国女性を強姦する」

この絵は独創性に富んでいて、蒋介石軍の兵隊が良民の女性を強姦する場面を描いた4色刷りの絵が、長い辺を二つ折りにして太陽にかざすと現れる。この伝単は40万枚印刷され、蒋介石軍が支配する地方へ6万枚が散布された。将兵と市民の離反を図ったのである。しかし後に日本軍総司令部から、「かようなものは皇軍の威信を失墜させる」として「配布禁止」の命令が出た。さらに残る34万枚の焼却を命じていたので、1～2万枚をのこしてほとんどを焼かねばならなかった。しかしながら後に日本から来た特派員や文民がこの問題の伝単を見て大いに喜び、ほとんどが土産として国に持ち帰った。こうしてその種のものとしては最初にして日本陸軍の傑作である好色な伝単は、日本人の士気(?)高揚を助けるという皮肉な結果に終わった。その当時日本の軍部の考え方はまだ自由で品があった。しかし日華事変が太平洋戦争に発展すると、いわゆる皇軍の威信なるものはすべて無視されて好色なものを前線の敵に雨あられと浴びせることになった。、『駿河台分室物語【本編】』p.176-177]

○連合軍の伝単

・「[一九四二年 10 月 29 日朝] 八時頃、敵機が三機低空で頭上に飛来し、弾薬の代になにか撒いて去つた。拾ってみると宣伝ビラだつた。下手くそな日本語で「将校は日本臣民を苦しめる軍閥であるから兵隊はその命令に服従するな」というようなことが書いてあつた。ビラを拾った兵隊がどんな目で読むだろうと思って注意していると、「ありがてえ、久しぶりで紙で尻を拭けらあ。焚きつけもできた」と喜んでいて。私が冗談に、「お前たちを苦しめるのは軍閥のおれだ」と言葉をかけると、逆に、「兵隊よりも苦しい戦闘をしているのは大隊長殿です」と真底からいつてくれた」²³⁶

・「この苦難のほか、[小岩井] 少佐は面白い話もしてくれた²³⁷。彼らがジャングルの丘を横断しているとアメリカ軍の偵察機が時々大隊の上空に飛来し、ある時は爆弾をまたある時は薄い紙に印刷した東京の帝国ホテルのメニューを投下した。後者は間違いなく宣伝論法 (propaganda logic) で、大隊の兵士たちに影響を与えようとしたのだ。「あなた方が並外れた困難に耐えている時、東京の金持は帝国ホテルで豪華な食事を楽しんでいます」²³⁸

○用紙の差 (宣伝雑誌の例) “

「一九四二 (昭和十七) 年も終わりに近いころだったと思うが、参謀本部からアメリカの国家宣伝雑誌が回ってきた。“VICTORY”という誌名で、政府か軍からの委託でタイム社が編集したものらしかった。外国および戦場の米国将兵向けにつくられていて、判型、レイアウトなど“LIFE”を、広告をいれずに再編集して、薄く仕立てたという感じであった。[中略] だが [東方] 社のスタッフが最も衝撃を受けたのは、内容ではなくその用紙の薄さであった。すでに戦争が始まって輸送状況が厳しくなる中で、『FRONT』の重さが問題になっていたときだけに、ショックはいっそう大きかった。この“VICTORY”に使われている紙は、コンサイス辞典の紙を少し厚くした程度でありながら、画面に写真を印刷しても、あまり裏抜けのしない印刷用紙であった。今考えると、最近日本で週刊写真雑誌に使われはじめた、軽量コート紙といわれるものに似ていたと思う。これはまさに航空輸送を前提にした印刷物であった。「いや参った。負けたな」と大声でいったのは写真部長の木村 [伊兵衛] だったが、他の誰もが同じ思いであった。ロシア的な重厚さを特徴とする“USSR”を範としてスタートした『FRONT』は、戦時になって弾薬や物資を優先させる輸送状況の中では、その重量と大きさが災いして、輸送と配布が意のままにならなかったのである。」²³⁹

²³⁶ 小岩井光夫. ニューギニア戦記. 日本出版協同, 1953, p.151.

²³⁷ 小岩井少佐はニューギニア戦の後, 43 年 9 月に再度参謀本部付となった.

[資料「参謀本部第 8 課 / 恒石在籍時の関係者」] / 『駿河台分室物語【資料編】』 p.59]

²³⁸ 『駿河台分室物語【本編】』 p.98.

²³⁹ 『戦争のグラフィズム』 p.160, 166.

2.2.13 西義章課長（8月）

「交換船によって帰国した西義章大佐（駐メキシコ武官）は、武田大佐の後任として第八課長となった²⁴⁰。大佐は海外生活の経験から、日本のラジオ放送は諸外国に比し宣伝技術において一步の遅れがあるので、これを改善強化する必要を感じていた。そして宣伝に関しては、きわめて熱心で、かつ見識を持っておられた。私はこの新しい課長に教示善導せられた点が少なくなかった。」（心理 166）

○経歴

「西義章（〔陸士〕31）〔北海道〕²⁴¹ 明31・12・11～昭18・7・7
陸軍中尉・小学校教員数藤熊七の二男、西家の養子、妻直子は陸軍大将南次郎（6）の女
旭川中学卒を経て大5・12 士候生 8・5 陸士卒 8・12 騎少尉・騎24連隊付 11・
12 騎中尉 昭4・3 騎大尉 5・11 陸大卒・騎24連隊中隊長 7・3 陸士教官 9・8
騎少佐 10・2 アメリカ駐在 11・8 アメリカ大使館付武官補佐官²⁴² 12・8 参本部員
12・11 騎中佐 12・11 大本営参謀 14・4 メキシコ公使館付武官 14・8 騎大佐
17・8 参本課長」²⁴³

○「...西大佐も陸軍には珍しいアメリカ通...」²⁴⁴



図 31 西義章
陸軍士官学校時代
靖国偕行文庫蔵

²⁴⁰42年8月20日。〔福川秀樹編著. 日本陸軍将官辞典. 芙蓉書房出版, 2001, p.547〕

²⁴¹「北海道関係を扱っている当室で、まず旭川中学校までの資料を調査しましたが、学校記念誌等はなくお名前を確認することができませんでした。

次に旭川市史、旭川の人物辞典、そして、北海道に広げて辞典に名前があるか種々資料を調査しましたが、確認できませんでした。〔北海道立図書館北方資料室回答. 2021-10-06〕

²⁴²資料「駐在武官」

²⁴³○秦郁彦編. 日本陸海軍総合辞典〔第2版〕. 東京大学出版会, 2005, p.118.

○資料「西義章」

²⁴⁴『日の丸アワー』p.22.

新課長の提案

「『どうだ、捕虜の中で、放送関係の仕事をしていたことのある [カズンスのような] 優秀なのを、[もっと] さがして使ってみてはどうか』と提案され、それはおもしろい、というので、すぐ出先に手配した...」²⁴⁵

○フィリピン²⁴⁶で収容されていた捕虜 2 名が選抜され東京に送られることになった。

○フィリピン初の正規の捕虜収容所が 42 年 8 月 1 日、マニラ、カバナツアン、オードネル（比島人）の 3 カ所に開設されている。²⁴⁷



図 32 外地や南方に捕虜収容所新設
出典：読売報知新聞. 1942-08-13

²⁴⁵ 『昭和史の天皇 3』 p.170.

²⁴⁶ カズンスのような英国系の捕虜だけでなく、米国人向けに放送するのだから米国系捕虜も必要だという西課長の提案か。

²⁴⁷ 茶園義男編・解説. 俘虜情報局・俘虜取扱の記録. 不二出版, 1992, p.226.

2.2.14 米放送要員到着（10月）

「彼 [ウォーレス・インス (Wallace Ince) 米陸軍大尉] はマッカーサー幕僚部の監察官でコレヒドール要塞のラジオ (自由の声) のアナウンサーでもあり、同地で日本軍の捕虜となっていた。根っからのラジオマンである。彼はカズンス少佐よりややおくられて東京にやって来たが、私の協力要請にはまったく異議なくむしろ進んで従事するような気分が見えた。満潮氏は彼について次のように回想している。

彼はカズンスに比べるともっとさばさばしていた。「俺はラジオマンだ。ラジオをやるんだったら世界中どこへ行っても同じ。ラジオは俺のライフワークだ。その仕事をつづけられるチャンスが来たんだからやるサ」²⁴⁸ [中略]

彼 [ノーマン・レイズ (Norman Reyes) 米比軍²⁴⁹中尉] もインス大尉と同様コレヒドールで捕虜となった。彼は父にフィリピン人、母にアメリカ人を持つ混血で、高校時代から放送にたずさわっていたそうである。そして非常に声のいいアナウンサーで、頭のとっぺんから足の先までのジャズボーイであった。わが放送への協力についても一も二もなかった。結構嬉しそうに振舞っていた。」(心理 172-173)

○2名の捕虜の参謀本部到着は42年10月12日。²⁵⁰

²⁴⁸ ○米国のアナウンサー間の競争。[資料「平川唯一」]

○池田徳眞がプロボウ裁判の証人で訪米した際、ワシントンのFBI本部で検事はインスの調査ファイルを見せ、起訴する準備は出来ていると言った。[DVD『池田徳眞氏の回想』/『日の丸アワー』p.196]

○しかし彼は起訴されず、「...その後昇進して中佐のランクになっているそうである。」(心理 173)

²⁴⁹ 「1934年、アメリカ合衆国議会はフィリピン独立法を可決し、1935年にはフィリピンの独立方針が認可され、これを受けてフィリピン独自の戦力の整備が決定された。フィリピン・コモンウェルス (独立準備政府) の初代大統領となったマニユエル・ケソンの要請で、アメリカ陸軍のダグラス・マッカーサー少将やドワイト・D・アイゼンハワー少将らが軍事顧問として派遣された。マッカーサーらは、独立予定の1946年までに、常備軍1万人 (従来の警察隊員6千人を含む) と予備役40万人のフィリピン陸軍 (PA) を整備する計画を立案した。フィリピン全土を10個管区に分けて、有事の際には各管区で7500人規模の予備役師団を編成、常備師団1個と合わせて11個師団となる計算だった。この計画には魚雷艇36隻を有する沿岸警備部隊と、高速爆撃機100機を有するフィリピン陸軍航空軍も含まれていた。マッカーサーは、計画達成の暁には、あらゆる侵略に対抗できる自衛戦力が備わると評価していた。しかし、財政的問題や士官の不足などから、その整備は遅々として進まず、最終的に、フィリピン軍は、体制未整のままで太平洋戦争に突入することを余儀なくされた。」[“フィリピン軍”. Wikipedia. (参照 2022-11-07)]

²⁵⁰ Close, Frederick P. *Tokyo Rose/An American Patriot: A Dual Biography*. The Scarecrow Press Inc, 2010, p.100. (Kindle版)

謀略放送の序曲

「カズンス少佐は主として論説的なものを書いたり、原稿の手直し（放送技術的の）や発音の訂正などのアドバイスをやっていた...」（心理 173）

○池田徳眞

「そのころカズンス少佐は、毎日短波放送で世界に向ってニュース解説をしていた。彼が俘虜という立場で、考えに考えたあげく、作った放送のテーマは「変化は避けられない」（inevitability of change）という、ただ一つのことであった。彼はその日の戦況を解説して、最後に”Change is inevitable”と結ぶのである。

このテーマは緒戦で日本軍が進撃している時には、まことに好ましかったのだが、戦争の後半になってアメリカ軍がどんどん反撃してくるようになると、これも変化には違いないのだが、日本としては面白くない。それでカズンスの入院²⁵¹ということもあって、このニュース解説は中止されてしまった。」²⁵²



図 33 東京に呼び寄せられた 3 名の捕虜
出典：『心理作戦の回想』 p.169,172- 173.

²⁵¹ 44 年 6 月ころ。 [資料「カズンスの横顔／戦時中」]

²⁵² 『日の丸アワー』 p.17.

「...インス大尉はプログラムの時間的配分には独特の優れた才能を発揮した。レイズ中尉は主としてレコードを選んで甘美な音楽を流し、その合間に毎日のニュースから作った原稿を読んでいた。

一方ニューギニアのジャングルでは、ガダルカナル島戦以来連日死闘が繰返されていた。文化生活に慣れた米濠兵は炎熱の戦場で水不足に苦しみ、マラリヤに悩まされ、生命の危険にさらされていた。

サンフランシスコ等からの敵側放送は、戦時色の濃い音楽を入れて前線将兵の士気の鼓舞に努めていた。日中の戦闘に疲れ果てた兵士も静かになった夕刻の一時、今日一日生きながらえた身の幸福を思い、ふと故郷に残した妻子の身の上に思いをはせるのは自然の道理である。こんなとき平和な時代の楽しいセクシーで妙なる調べがどこからともなく流れてくれば郷愁の念も一入湧いてくる。幸いわが放送協会にはその目的に適する戦前のレコードが多数あったので²⁵³、さらにこれを複製して使うことにした。一七年秋頃は日本時間午後六時から一五分間であったが、二世数名も加わり、だんだん宣伝的要素も加味しながら放送時間も三〇分間に延長した。昔懐しいよい音楽と気のきいたディスク・ジョッキー番組は評判がよく、アメリカG I達の間にはたちまち人気が出たようである。

レイズ中尉は南太平洋向けの放送にこの甘美な曲を一七年秋から数カ月にわたって放送し続けた。もちろんその前後には二世達によって日本側の宣伝が放送されていたけれども、特定のグループを作って組織的に謀略的放送を行なうところまでは行ってなかった。ただこの昔懐しいしらべによって敵軍兵士の心を捉え、聴取者の輪を次第に拡げて、やがて行なう予定の本格的謀略放送の前駆としていわば餌蒔きを続けていたのである。」(心理 173-174)

○「捕虜が始めた日本初のDJ番組

「インスはプログラムの時間配分に才能を見せ、頭のとっぺんから足の先までジャズ・ボーイだった若いレイズは、音楽をかけながら、その合間に毎日のニュースをもとに作った原稿を、これまでの海外放送のアナウンサーとは打って変わった軽いお喋りに仕立てて読んだ。日本のDJ番組のはしりである。前線の兵士たちに向かって流す、アメリカの慰安放送にヒントを得て、昭和十七年秋にはじまったレイズのDJ番組は、南太平洋のGIたちの間で人気を呼んだ。この番組はやがて「ゼロ・アワー」に拡大されていく。」²⁵⁴

²⁵³ NHKの苦心談。[資料「ジャズ」]

²⁵⁴ 中澤まゆみ「ダイナはもう聞こえない」p.196.

「音楽で思い出すのは、たっただいまアメリカ国内で流行している歌というのは、前線の兵隊は知らないから²⁵⁵、むしろ古い流行歌の方が喜ばれる。日本の前線の兵隊が、その時東京で流行していた歌謡曲より、市丸²⁵⁶や勝太郎²⁵⁷の歌を流すインドのデリー放送や、サンフランシスコ放送を聞いて喜んでた²⁵⁸のと同じ理由だ。」²⁵⁹

²⁵⁵ 「また一九四九年夏サンフランシスコで行なわれた東京ローズの反逆裁判に、米陸軍のラジオを統轄していたテド・E・シャードマン中佐 (Ted. E. Sherdeman) が政府側証人として出廷したが、彼は次のように証言した。

私は一九四三年おそく米陸軍のラジオを監督指導する役目で豪州に到着したが、私の心は競争相手の東京ラジオによって日夜強襲を受けた。私の仕事は米軍将兵をホットジャズと宣伝の献立表の東京放送から引き離して、われわれの番組を聞かせることであつた。しかしながら船舶の余積は少なくても良いレコードを輸送して、これを利用することは一九四四年末期までできなかった。」

つまり東京ラジオのゼロ・アワーに対するG I達の聴取率は、米国が自国軍隊に対して行なったものよりはるかに高かったことを正直に告白している。また彼の証言当日の「サンフランシスコ・クロニクル」紙によると、「数名の元G I達が米政府は東京ローズを釈放する代りに、この米軍ラジオの主謀者を軍法会議にかけるべきだと示唆した理由は、多分前述の事情によるものだろう」と述べているところからも、優勢なゼロ・アワーの対抗策には米側もかなり腐心していたものと思われる。」(心理 180-181)

²⁵⁶ 「市丸・江戸小歌市丸 (いちまる・えどころたいちまる、1906年7月16日 - 1997年2月17日) は、昭和期の芸者歌手。本名は後藤まつゑ (ごとうまつゑ)」。[“市丸”. Wikipedia. (参照 2022-12-27)]

²⁵⁷ 「小唄勝太郎 (こうたかつたろう、1904年 (明治37年) 11月6日 - 1974年 (昭和49年) 6月21日) は日本の女性歌手。本名は眞野かつ。」。[“小唄勝太郎. Wikipedia. (参照. 2022-12-27) ”]

²⁵⁸ 部隊の無線機で受信したと思われる。[資料「短波放送受信」]

²⁵⁹ 『昭和史の天皇3』p.194.

2.2.15 立教大学アメリカ研究所（10月）

○「一〇月一五日、今度は山下〔英夫〕教授が陸軍の参謀本部から呼び出され、参謀恒石重嗣陸軍少佐から「研究所の機能を発揮し、本部に助力せよとの下命」を受けた。二〇日に山下教授から参謀本部の意向を伝え聞いた遠山学長は、アメリカ研究所長としてこれを承諾した。国策協力との関連でいえば、詳細はなお不明なのだが、一九四二年一〇月にはアメリカ研究所内に「戦時協力部」が存在していた形跡がある。先の恒石少佐は、翌一九四三年の一月中旬に彼の仕事を「情報局第二部（陸軍関係）並河〔亮〕情報官に引継」ぐために立教を訪れた。年度が改まり（一九四三年）四月一九日には、三辺金蔵学長事務取扱 — 二月に辞職した遠山学長の後任 — が情報局に呼び出され、奥山〔村〕喜和男次長から以後、アメリカ研究所に対して毎月五〇〇円の補助金を下付すること、そして「アメリカ研究所ヲ通ジテ情報局ニ利便ヲ供セラレタシトノ希望」が伝えられた。三辺所長は情報局への「協力ヲ咨マザルベキ旨」を答え、併せて謝辞も述べた。〔中略〕〔43年4月から研究員になった〕鈴木圭介が、「山下教授が、アメリカ研究所の財政的基礎を確立しなければいけないというので、外務省と参謀本部に連絡をして、補助金を獲得しようと努力をしておいでになりました」と述懐したように、国策協力は研究所の財政を支える上で有効な手立てと考えられたのである。軍のお墨付きという宣伝効果も手伝って、「いろいろの軍需産業機関から寄附をもらう」際、研究所にとって好都合でもあった。」²⁶⁰

○「...一九四三年一二月頃の研究員の数は一〇名を超える程度で、経済班、政治外交班、文化班の三つの研究班で編成されていた模様である。〔中略〕...役員名簿が掲載され、顧問として荒木貞夫陸軍大将など陸軍軍人四名と山本英輔海軍大将ら海軍軍人二名、校友の前田多門・新潟県知事など計一〇名、評議員として東京帝国大学の高柳賢三、高木八尺両教授ら一名、理事として同じく東京帝国大学教授の神川彦松や元外務省アメリカ局第一課長の藤村信雄²⁶¹・情報局諮議ら三名の名前が挙げられている。役員に陸海軍の高級将校や情報局高官を加えることで、国策色をアピールしたかったのだろう。〔中略〕事業一覧表中の「各部ノ業務又ハ昭和十八年予定事業」欄には「米州関係ノ戦時情報ノ蒐集分析」や「対米宣伝対策ノ立案」（以上、戦時協力部）、「陸海軍部、情報局、外務省等ノ関係官庁ヨリ随時提出サレル課題ヲ常ニ優先的ニ報告ス」〔中略〕など、様々な事業内容が列挙されており...」²⁶²

²⁶⁰ 老川慶喜・前田一男編. ミッション・スクールと戦争：立教学院のディレンマ. 東信堂, 2008, p.280-282.

²⁶¹ 本書「2.3.6 米本国向け放送／準備室」

²⁶² 『ミッション・スクールと戦争』 p.284-285.

○「債務問題などで揺れるアメリカ研究所が立教大学の所管を離れ、財団法人立教学院²⁶³による経営の下で再出発したのは一九四三年八月末のことである。研究員は従来のような各学部の重鎮を中心とせず、鈴木圭介ら若手・中堅を軸に再編され、研究所の発展を願った山下教授の遺志は、教授の働きぶりを間近で見ていた彼ら若き研究員によって引き継がれた。常務理事の藤原守胤ら幹部が、研究所財政の安定化に苦慮を重ねながら尽力したことにも支えられ、若手研究員たちは学問的な見地からアメリカに向き合い、研鑽を積むことができた²⁶⁴。彼らは軍から回される、当時入手が困難だった諸資料²⁶⁵の分析などの委託研究に当たる一方で、外務省の若手官僚や都留重人²⁶⁶ら所外の研究者との交流を通して知的刺激を受けた。²⁶⁷」²⁶⁷

²⁶³ 「.....一九三一年八月に立教学院が立教大学と立教中学校を経営する財団法人として出発するとき...」. [永井均.“アメリカ研究所と戦争”.『ミッション・スクールと戦争：立教学院のディレンマ』 p.254]

²⁶⁴ 「...戦時中、二十代の男がフリーでいれば、徴兵ばかりでなく軍需工場への徴用が必ず来た。そうした一般徴用は、軍関係の仕事をしていない限り、逃れることはできなかったのである。」. [『戦争のグラフィズム』 p.174]

²⁶⁵ 東方社も同様に資料を受けた。

・「一九四二（昭和十七）年も終わりに近いころだったと思うが、参謀本部から [アメリカの国家宣伝雑誌が回ってきた.]。 [同上. p.160／本書. p.90]

・「...シンガポールで接収したというアメリカ映画「風と共に去りぬ」とディズニーの「ファンタジア」を、「対敵研究資料」という名目で参謀本部第八課から借りてきて、社の内部で映写したことがあった。」. [同.p.166／本書.p.140]

²⁶⁶ 資料「都留重人」

²⁶⁷ 『ミッション・スクールと戦争』 p.293.

2.2.16 東方社と伝単（11月）

「東方社のメンバーには、中島健蔵、林達夫、木村伊兵衛（人物写真では当代一といわれた）、原弘、岡田桑三、太田英茂、山川幸世、山本房次郎、岩永博の各氏など、囑託約二〇名ほどであった。[中略] [「フロント」の] 発行部数は毎月²⁶⁸約一、〇〇〇部内外であったと思うが、その主体は南方占領地向けであった。印刷や紙質なども米誌「ライフ」「ルック」に見劣りしないものを作製するよう心掛けた。とくに敵側の「捕虜虐待」のデマ宣伝を破碎するために、各收容所に出張して彼等を正遇している状況を写真に収めて²⁶⁹編集したものは効果的であったかと思う。」（心理 164）

○東方社・今泉武治²⁷⁰

・[42年]「十月二十九日（木）原[弘]さんからすぐ帰ってくるようにとの電話。三階にみんなが待っていた。太平洋作戦の謀略印刷物の制作打合せ。漫画地図などをきめて全体のちらし風のもののプランを七、八枚きめる。敵性のマリン（海兵隊）にどの程度に食いつけるかが難しい問題だ。夜、『ライフ』、『ジグナル』を見る。

十月三十日（金）朝からソロモン島上陸のマリンに対する謀略投降勧告のビラ七種をつくる。数が多いので考えている余裕がない。材料は地図・漫画が各一面ずつで、他は大部分“LIFE”からの複写もの。まだまだ研究が足らぬ拙速のもの。ひるも一時からやり始める。多川[精一]君にも手伝ってもらって、六時に出来上る。相当身体が疲れる。」（p.24）

・「十一月十一日（水）捕虜の写真が出来たので謀略ちらし三種をやる。四時頃までにやる。ヴァラエティーがないので三種せいぜいだ。」（同上）

・十二月七日（月）「ガダルカナル島にバラまくちらしが出来てきた。印刷が悪いので効果がうすい。漫画のちらしは東方社のものではないが、いずれもひどいもの。前線と本国との対比の手ばかり。」（p.25）

・「十二月十六日（水）ソ連の対独宣伝のうまさを岡田[桑三]氏とほめる。ドラクロアの日記をノートする。午後はソ連対独宣伝物の翻訳をノートする。」（同上）

・[43年]「九月一日（水）出社。交換船²⁷¹に渡す俘虜の生活状態の組写真が依頼されたので考える。」（p.34）

²⁶⁸ ○全 16 冊（第 1～14 号と特別号 2 冊）。[資料「東方社／『FRONT』刊行リスト」]

○「...『フロント』や『戦線』（パンフレット形式の軽量宣伝物）の仕事があったんです。」。[浅野隆. 野々宮ビル地下、暗室しごと. 山口昌男ほか. FRONT 復刻版. 解説Ⅲ. 平凡社, 1990, p.17]

²⁶⁹ 善通寺捕虜收容所：「[42年]十一月三、五両日東京東方社写真部員二名来所対米軍謀略宣伝ノ目的ヲ有スル写真を撮影ス（参謀本部庶務課ヨリ師団ニ連絡アリ許可セラレタルモノニシテ検閲ハ行ハズ）。[『善通寺俘虜收容所』ハンドブック』 p.170]

²⁷⁰ 『日記』一九四二—一九四三. FRONT 復刻版：解説Ⅱ. 平凡社, 1990.

²⁷¹ 第二次日米交換船. 「帝亜丸」43年9月14日横浜出航。[“交換船”.Wikipedia.（参照 2023-06-07）]

2.2.17 捕虜のアドバイス (11月)

○「日本ノ対外放送ニ対スル意見」

「カズンスとインスの二人が、一一月²⁷²に「日本ノ対外放送ニ対スル意見」を執筆した。これは、日本の対敵放送に関する最も本質的な批判と、日本人の英語ニュースと解説に対する技術指導という二面を持ち、今日に於ても通ずるものをもっている。しかし、ラジオ東京が、この二人のアドバイスを生かしたどうか²⁷³。二人の「意見書」は、一九四三年三月六日付²⁷⁴の大本営陸軍報道部の文書²⁷⁵に、「二月四日南方軍総司令部ヨリ送付セラレシモノナリ」として残されている。

カズンスは、ラジオ東京のニュースと解説について、まず、「余リニ多クノ『アイディア』ヲ一度ニ伝へ様トシナイ事」と述べ、現在放送されているニュース解説＝通信の多くは「的確ナル『モチーフ²⁷⁶』ノ把握ニ欠ケテ居ル」と指摘した。そして、日本が自分の「損害」や「共栄圏ノ不祥事」を「語ルヲ避ケ……之ヲ隠蔽スル」のは、「却ツテ敵側ニ宣伝材料ヲ与ヘル事ニナル」と批判した。しかしラジオ東京は、独自の自主的な取材をしているわけではなく、「宣伝材料」は、大本営発表をはじめとして供給されたものを放送しているだけであった。

カズンスはまた、「熱心ナル戦闘的ナ日本人解説者」によって書かれた「恫喝、誹謗、個人ニ対スル攻撃等ハ敵国人ノ態度ヲ硬化セシメ彼等ノ決意ヲ昂揚スルノミ」であり、「宣伝放送ノ最モ肝要事ヲ忘却シテ居ル」と指摘した。戦中海外放送の主要な部分を占めてきた、この種の放送²⁷⁷が、カズンスによって厳しく批判される。

「英米ノ見解ヤ考ヘ方ヲ充分研究シ適當ナル対策ヲ講スレハ敵国人ヲシテ日本ノ見解ニ耳ヲ傾ケシメ彼等ノ反感ヲ少ナクシ、時ニハ全ク敵意ヲ喪失セシムルコトモ不可能デハナイ」

²⁷² ○本文標題：「カズンス少佐等ノ我カ対外放送ニ対スル意見（一七・一一）」

○（「十七・十一」と表記していないのは、カズンスが11月にはすでに南方軍にいなかったことを突かれた場合、縦書きの「一一」を「二」と説明するためか）

²⁷³ 恒石は生かしているようだ。[本書「2.4.4 英文放送事前監査室」／本書「2.5.4 ヒューマニティコールズ／忠告」]

²⁷⁴ 「ゼロ・アワー」放送開始直前か。[本書「2.3.2 ゼロ・アワー」]

²⁷⁵ ○NHK 放送博物館蔵：「極秘 日本ノ対外放送ニ対スル意見 昭和十八年三月六日 大本営陸軍報道部 本記述ハ以前「シドニー」放送局ニ於テ時事解説ノ第一人者トシテ活躍シ其声名ヲ謳ハレ今次大東亜戦争勃発ニ当リ馬來ニ派遣セラレタル濠洲軍第十九大隊副大隊長「カズン」少佐並ニ「インス」大尉ノ手記ニシテ昭和十八年二月四日南方軍総司令部ヨリ送付セラレシモノナリ」

○参謀本部が日本で放送協会雇員（捕虜）の意見を発表するのは越権になる、あるいは関係者に無用な刺激を与えると判断したため南方軍総司令部よりの資料としたものか。

²⁷⁶ モチーフ【motif フランス】「①絵画・彫刻・小説などにおいて、表現の中心的な動機となるものごと。」。[『広辞苑』]

²⁷⁷ 資料「アナウンス：「淡々調」と「雄叫び調」」

欧米人は「スラヴ人ヲ除キ」、物ノ考え方が「分析的、批判的」であり、英米の聴取者は「理論的ナ分析的ナ議論ヲ以テスレハ比較的容易ニ納得セシメ得ル」として、カズンスは次のように提言する。

「若シスル議論カ適度ノ威厳ト適度ノ抑制トヲ以テナサレレハ其ノ効果ハ一層増加スル。

……米英人ノスル心理的特徴ニ鑑ミ対敵放送ニ於ケル『云過キ』ハ全ク無効果以上テアル……誇張ノ不可ナルハ云フ迄モナイ」

カズンスは、さらに、日本の「聖戦」という表現が、ナチス・ドイツの「神秘主義ノ如キモノヲ想起セシムルニ過キナイ」といましめる。そして、日本の考え方を世界に納得させるためには、「日本カ供給シエル最高ノ頭脳カ必要テアル²⁷⁸」として次のよう述べる。

以上述ヘタ処ヲ更ニ要約スレハ

- (一) 政府当局ハ「ニュース」及「ニュース」解説ノ放送ニ際シテ遵守スヘキ原則ヲ含ム方針ヲ確定スルコト
- (二) 放送文案ノ企画作成者ハ条理ヲ尽シタ率直ナ且刺激的ナラサル論議ヲ通シテ東亜ニ於ケル日本ノ大業ノ真面目ニ就テ敵国人ヲモ納得セシメ得ル様凡有努力ヲ払フ事
- (三) 凡有機會ヲ捉ヘテ日本政府ノ言ハ信頼スルニ足ルモノアルト云フ事ヲ冷静ニ強調スル事
- (四) 大東亜建設ニ関スル具体的「ニュース」ハ機会アル毎ニ強調スル事、但シ尊大ナル態度ヤ誇リニ充チタ言辞ヲ使用セス単ナル業績ノ記録トシテ或ハ日本ノ方策ノ証拠トシテ放送スヘキテアル
- (五) (四)ニ述ヘタルカ如キ項目ニ関シテハ時ニハ大東亜圏各地ノ知識階級ニ属スル人士ヲシテ自発的ニ放送セシムルヲ可トスル 官辺筋ノ直接ノ放送ハ効果カ薄イ
- (六) 張 [誇] 張サレタ表現「戦々競々タル敵」トカ「無敵日本軍」ト云フ様ナ言葉ハ外国語放送ニハ禁物テアル
- (七) 「ニュース」或ハ通信ノ作成者カ如何ニ興奮ヲ感シヨウトモ外国語ノ放送ニ於テハ「威厳ト慎ミ (控エ目)」カ合言葉テアル事ヲ忘レヌ事
- (八) 若シ「ニュース」或ハ通信ニ於テ個人ヲ攻撃スル必要ニ迫ラレタ時逆ニ相手ヲ持ち上ケル様ナ「テクニク」ヲ使用スル事

此レハ最モ効果的ナ方法テ巧ミニ使用サレタ場合ニハ反駁ノ余地カナクナルスル放送ニ当ツテハ先ツ一応相手ヲ立テテ自分ノ方カ讓歩スル様ナ形式ヲ採ルカ良イ (文例省略)

最後ニ自分ハモウ一度「人ハ真実ノ為ニ闘フモノテナク、真実ト信スルモノノ為ニ闘フモノテアル」ト云フ言葉ヲ繰返シ度

そして、カズンスは次のように結ぶ。

「第一次世界大戦ニ際シテ英濠ノ蒙ツタ如キ戦禍ヲ蒙ラナカツタ日本ニ採ツテハ理

²⁷⁸ 第一次世界大戦における英国の人材登用例をイメージか。[資料「第一次大戦における英国の宣伝」]

解シ難イ事カモ知ラナイカ、英国人ヤ濠州人ハ戦争ノ無益サト云フ事ヲ良ク知ツテ居ル、併乍ラ彼等ト雖モ自分達カ脅威ヲ受ケテ居ルト信スル限り抗戦ハ止メナイテアラウ」

このカズンスの「意見」は、真摯であり、勇気がある。放送のプロとしての経験を
もとに、日本の放送の欠陥を鋭くえぐり、しかし、捕虜の身でありながら、何ら迎合
するところがない。そして、母国が「脅威ヲ受ケテ居ルト信スル限り」戦い続けると
断言している。戦後のカズンスの叛逆裁判に、このカズンスの意見がもし提出されて
いたら、もっと簡単に結論が出ていたのではないかと考えられる。

ウォーレス・インズ大尉（ラジオ名、テッド・ウォーレス）も、北米・マニラの放送体験から、ニュース原稿の添削を行っていたが、具体的に「ニュース原稿ノ作成改善」に関する意見を述べている。

「現在東京放送局デ採用シテキル日本語テキストカラ外国語ニ翻訳スル方法ハニュースヲ統一スルト云フ点デハ効果ガアルカモ知レナイガ……外国語ニ依ルニュースノ生命ヲ殺スモノデアル……基礎トナル原稿ハ主題ト根本原則トアイディア丈ケ即チ絶対必要ナ骨子丈ケトシ表現ハ各外国語ニ任セタ方ガヨイ²⁷⁹」

インズはさらに、アナウンサー、ライター、編集者の機の配置にも意見を出している。また、ニュース原稿の発信地名、例えば「リスボン発」を削除し、よりストレートに、どこで何が起こったかを伝えるよう提案した。これは、この時期、同盟通信が特派員を残せたのは同盟国・中立国だけであり、外電の多くが「リスボン発」となっていて、「聴取者ニ混乱ヲ与へ」ていたためである。

ラジオ東京は、放送開始以来、初めてプロによるアドバイスを得たのである。しかも捕虜たちから。

これらのアドバイスは、海外放送のソフトウェアの改善の必要を論じたものだが、この頃、日放内部ではハードウェアの立ち遅れにも気がついていた。一例がマイクロホンと録音盤の性能である。」²⁸⁰

²⁷⁹ 戦後のユニクロ社長の話：「かつてジョン・ジェイ氏から聞いた話だが、ニューヨーク在住のファッション界のカメラマンで、一流といわれている人のなかには、日本人は一人もいないという。日本人カメラマンは、ファッション写真を撮るときに、最初から最後まで全部決めてから撮る。たとえば、モデルはこういう構図でこう立って、こうニコッと笑って、という具合。だから出来上がりの写真がものすごくかたくてダメなのだという。アシスタントとしては最高に優秀だが、チーフはできない。」〔柳井正、一勝九敗、新潮社、2003、p.107-108〕

²⁸⁰ 『ラジオ・トウキョウⅡ』 p.193-196.

2.3 1943 年

『恒石重嗣年譜』

2.3.1 東方社理事長交代（3月）

○ [43年]「岡田, 理事長を辞任。新理事長に林達夫。また新たに、^{たてかわよしつぐ}建川美次陸軍中将
が総裁に, 中島健蔵が理事に, 太田英茂が事務総長に就任。」²⁸¹

○ [43年] 三月十八日（木）「三時から下の写真部に全部が集って、新しい理事長の
林[達夫]さんから就任の挨拶がある。今迄の理事の暗闘がここに至るまでの経緯を
話す。案外、一貫性のない話振りだ。あまり事情の顛末が分らない。」²⁸²

○「参謀本部内でも、反東條と見なされる者は厳しい戦地に転出させられ、東方社創
立にかかわった参謀たちも、次々といなくなった。[中略] ... 岡田[桑三理事長]²⁸³と、
参謀本部第八課の浅田[三郎]中佐²⁸⁴、恒石少佐ら担当将校の間は、前のようにしっ
くりいかななくなっていた。『FRONT』の生みの親ともいえる白井茂樹²⁸⁵大佐は、一九
四一年三月に参謀本部を転出し、十二月の開戦時、ラングーン攻撃の空中戦で司令機
に搭乗していて敵の集中攻撃にあい、戦死してしまった。白井が参謀本部をやめると
き、岡田に「これからは風あたりが強くなると思うが十分気をつけてください」とい
い残したそうだが、それが現実になってきたのである。[中略] ... そのころ東方社は資
金的にも行きづまっていた、もう一度財界から寄付をあおごうと岡田が奔走していた
のだが、第八課の課長も担当者も創立当時とは入れ替わっていて、寄付や軍事献金な
どは受けなくてくれと、すべて止められたという。このような資金問題のほかにも、
軍の作戦が南方に重点を移したことから、岡田や勝野[金政]が当初から進めていた
対ソ謀略宣伝の仕事²⁸⁶が、軍の方針として必要でなくなった²⁸⁷ことも、やめる理由の
一つだったかもしれない。²⁸⁸

²⁸¹ “写真史の中の[FRONT]1922-1947”. 「FRONT」復刻版：解説 I, 平凡社, 1989, p.60.

²⁸² 今泉武治『「FRONT」復刻版：解説 II』 p.29.

²⁸³ 資料「東方社／岡田桑三」

²⁸⁴ ○『心理作戦の回想』：浅田の記述なし。

○『陸軍中野学校』：浅田三郎大佐（36期・北方軍参謀・兼中野学校教官・十九年春着
任）。[p.741]

○「参八会住所録」（1980年現在）[本書. p.239] / 寄せ書き. [本書. p.335. 図 87]

²⁸⁵ 資料「白井茂樹」

²⁸⁶ 「尚対ソ関係の研究試作は早くから九段に秘密事務所が開設されており、関東軍もハル
ピンに機関を持ち、白系露人や共産党転向者等多士済々の要員に恵まれ、蓄積資料も豊富
で羨しい限りであった。亡命ルシュコフ大将も九段事務所に協力していた。何れにしても
淡路事務所の [伝単の] 仕事は全く泥棒を掴まえて縄をなうお粗末さであった。この種作
業は長年周密な資料収集、担当者の現地視察、現地人適格者の参加協力を得て初めて有効
となるものである。現地人自身が自主発想し計画実施するものが、最も効果的であるが、
しかし望むべくもなかった。]. [藤原岩市. 留魂録. 振学出版, 1986, p.47]

²⁸⁷ 「[昭和 17 年 7 月 25 日] 大本営政府連絡会議, ドイツの対ソ戦参加申入れに対し,
不参加を回答する旨決定」。[『年表太平洋戦争全史』 p.332]

○「内部的にも理事の間がうまくいっていなかった。創立当時に岡田が関東軍の要請で始めた、蒙古語辞典のための蒙古語と日本語の対照カードづくりが、三階の資料室で服部四郎教授²⁸⁹の手により進められていたが、そのやり方を恒石少佐から批判された。そのとき、岩波書店が経営困難になったのも、哲学辞典の準備に時間がかかりすぎたのが原因だった、と恒石がいったことから²⁹⁰、岡田はてっきり林 [達夫] ²⁹¹理事

²⁸⁸ 『戦争のグラフィズム』 p.174-175,180.

²⁸⁹ 43年当時は助教授か：「服部 四郎（はっとりしろう、1908年〈明治41年〉5月29日 - 1995年〈平成7年〉1月29日）は、日本の言語学者。東京大学名誉教授。1908年、三重県亀山市生まれ。第一高等学校時代に読んだ安藤正次の『言語学概論』で、日本語の起源が不明であることを知り、言語学を志すようになった。1931年、東京帝国大学文学部言語学科卒業（※）。言語学、国語学、アイヌ語、朝鮮語、モンゴル語、満州語、トルコ語、中国語などを、藤岡勝二、橋本進吉、金田一京助、小倉進平らに教わる。大学での同期には有坂秀世がいた。また、学部時代に、琉球（沖縄）出身の仲宗根政善をインフォーマントとして言語調査を行っている。1933～1936年には、日本学術振興会の援助を受け、旧満州国北部ハイラルなどで、モンゴル語、ブリヤート語やタタール語などのアルタイ諸語の研究を行った。1943年、文学博士の学位を取得（学位請求論文：「元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究」）。

職歴

1936年 東京帝国大学文学部講師

1942年 同助教授

1942年 慶應義塾大学語学研究所スタッフ（西脇順三郎、松本信広、辻直四郎、福原麟太郎、市河三喜、井筒俊彦らが同僚）

1949年 東京大学教授 文学部勤務 言語学講座担当...」。[“服部 四郎”. Wikipedia. (参照 2022-09-16)]

（※）池田徳真も服部四郎と同様、東京帝国大学文学部言語学科で金田一京助助教授に学び、31年卒、[岩尾光代、栗野真紀子. 日本の肖像：鳥取池田家（旧侯爵）. 毎日グラフ. 1988.3-6号, p.78-79]

²⁹⁰ 『岩波書店 百年』で見えますと、『哲学辞典』は大正11年（1922）10月25日に刊行され、大正13年12月10日に増訂再版が出ています。この辞典について書かれている記事は、「岩波書店として最初の辞典」であったこと、「1939年1月までに1万9000部発行した」ということだけです。「岩波書店が経営困難になった・・・」については百年史には何も書かれていませんが、私たち内部にいた人間は、会社は過去何度も経営危機があったと聞いております。『哲学辞典』の刊行から1年も経たない大正12年9月1日、関東大震災で、岩波書店の建物等すべて焼失したようです。百年史には、震災に関する記事として、「岩波茂雄は、大震災で“裸一貫”になったことをむしろ感謝し、新たな決意をもって日本の文化のため一層の努力をするという挨拶状を各方面に出した」とあります。それにしても、恒石参謀は、大正11年などという古い時代を問題にしたのでしょうか？。

[米濱泰英. Eメール. 2022-07-21]

²⁹¹ 林達夫は戦前から岩波書店と関係が深い：著作『ルソー』（「大教育家文庫14」岩波書店、1936年）。訳書『イエス』（ブセット）岩波書店、1923年／（ヴィルヘルム・ブッセ表記）岩波文庫、1932年、『痴人の告白』（ストリントベルク、和辻哲郎共訳、岩波文庫、1924年）、『昆虫記』（ファーブル、山田吉彦と共訳、岩波文庫旧版・全20巻、1930-1934年）、『思想の運命』（岩波書店、1939年）。[“林達夫”から抜粋.Wikipedia. (参照 2023-06-11)]

のさしがねと受けとり、東方社内部がこういう状態ではもう自分がいることもなからうと、嫌気がさしてしまったという。」²⁹²

○フランス文学者中島健蔵（1903-79）は42年末シンガポールから帰国 宣伝班の徴用解除となり、林達夫（1896-1984）の誘いで東方社勤務：「東方社は、参謀本部と連絡があり、対外宣伝のぜいたくなグラフ雑誌を発行しているという。神がかりのばかばかりの国内宣伝とはちがって、ほんものの文化をぶつけるのだという。[中略] 東方社は、たしかに参謀本部と連絡があったにはちがいないが、実は、憎まれていたのであった。再組織しないかぎり、仕事はつづけられない状態だとわかった時には、もう遅かった。[中略] 東方社のおかげで、わたくしは、比較的正しい情報を得ることができた。しかも、さすがに、ミッドウェイの敗戦は、最後まで知らずに終わった。」。[『昭和時代』 p.179-181]

²⁹² 『戦争のグラフィズム』 p.180.

「大東亜戦争後期には元駐ソ大使建川美次²⁹³中将を [東方社] 社長として迎えた。」
(心理 164)

○「しかし創立者としての岡田は、五十人からの社員を、この戦時中に放りだすわけにいかないと責任を感じていた。創立当時面倒を見てくれた矢部忠太中佐からは、「飾りものになるような予備役の将軍など連れてこないでくれ」といわれていたのだが、この際、自分のやめた後のためにも、参謀本部に対して押さえのきく人物を入れたほうが良いと考えた。そこで、かつて北方懇話会（軍部・財閥などで構成するソビエト問題研究会）で会ったことのある建川美次中将を訪ねた。建川中将は [中略] 以前には参謀本部第一部長、第二部長を歴任しており、また開戦直後の一九四二年三月まで駐ソ大使もつとめていた。彼は反東條派でもあった。話を聞いた建川は、「わかった、それでは担当将校をすぐ連れてこい」と岡田に命じた。突然のことで困惑する浅田三郎中佐は、大先輩である建川中将の前でコチコチになっていたが、建川はいきなり、「いったいあれか、参謀本部は東方社をつくらせておいて、子供が生まれたからといって、庶子認知をしないというのか」といったという。突拍子もないたとえ言葉に、浅田中佐は困りはてて参謀本部に戻り上司に報告した。もともと直轄の機関ではないから誰をキャップにしようかと東方社の自由であり、拒否するにも、なにぶん相手が陸軍の大物ではそれもままならず、岡田の思うつぼに事は進んだ。その後、建川は東方社に来て理事や部長たち幹部と会い、東方社の雰囲気が入り込んで総裁を引き受けた。たかだか五十人ばかりの会社で総裁というのも大げさだが、建川は駐ソ大使をやめてから、満鉄総裁や情報局総裁就任の話全部断わっていたことから、それ以下の役名では失礼だと思ったからと岡田はいつている。[中略] 月に何回か理事会や参謀本部との連絡会が開かれていたが、私の席から見える向かいのベランダごしに建川総裁を中心に、理事たちと浅田・恒石ら参謀の姿が見られるようになった。それまでの会合では監督官の立場から理事たちと気軽に接していた将校たちも、建川が来るようになってからはガラリと変わって、コチコチになっているのがこちらから手にとるようにわかり、階級至上の軍隊組織²⁹⁴は大変だなあと同情しながらも、何やら溜飲が下がったことも確かであった。」²⁹⁵

²⁹³ 資料「建川美次」

²⁹⁴ 後述する対米放送主任の交代時にも陸軍 OB の影響があったらしい。

○池田徳真：「私が「後任は誰ですか」と聞いたら、「同盟通信の菱刈隆文君です」との答であった。私は「ああ、あの菱刈大将の息子か。それが理由だな」と思った。」。『日の丸アワー』 p.117]

○恒石：「池田氏の新任務への転出に先立ち、[44年] 二月下旬から菱刈隆文氏が捕虜放送の主任となっていた。彼は陸軍士官学校を病氣中退（陸士第四十五期生）の後、同盟通信社にはいり、開戦後シンガポールにいた。父君は元関東軍司令官菱刈大将であり、当時なおご健在であった。」（心理 231）

²⁹⁵ 『戦争のグラフィズム』 p.180-184.

2.3.2 ゼロ・アワー（3月）

「一八年初頭、私は放送協会海外放送の担当部長の沢田進之丞氏（副部長森勝治氏）に対し、太平洋方面敵軍隊向謀略放送を実施するため、二世を主体とし前記捕虜三名を含めて特別の専任グループを編成するよう要請した。もちろん情報局も諒解済みであった²⁹⁶。放送協会では自主的に米州部²⁹⁷の中から十数名を選出して特別のグループを編成し、満潮英雄氏が班長となり「前線班」と称した。一八年三月のことである。したがって番組の編成はもちろんのこと、放送原稿は満潮氏の目を通さないものは一つもなく、対敵放送実施についての監督指導は彼に一任されたわけである。捕虜達が勝手にやった等ということはまったくでたらめであって、終戦後彼等が反逆罪から逃れるために言ったことが、興味本位にまことしやかに言伝えられているに過ぎない。[中略] 班長の満潮氏はこの番組を「ゼロ・アワー」と命名した。」（心理 174-176）
「この番組には、[中略] 戦況ニュースも入れたが、できるだけ客観的に、日本的色彩を推したものを流した。正直なところ、こちらは実際に負け続けているのだから、からいばりしても相手には通じなかったからだ。」²⁹⁸

○「[43年3月20日からの海外放送番組の一部] 改正理由は、「戦局ノ進展ニ鑑ミ」であった。一方、逓信大臣が許可した「拡充ノ件」（電無第四二五号）では「八俣送信所五〇『キロワット』短波送信機（R-2号）改修完成に伴ふ拡充」とある。[中略] ... 「ゼロ・アワー」が登場した。第八送信（濠州向）である。」²⁹⁹

²⁹⁶ ○「参謀本部が企画し、「作戦の一部」としてNHKに命じた前記「謀略放送」は、情報局の私〔並河亮〕に一応形式的な連絡はあったが、恒石参謀が直接NHKの国際部の沢田進之丞部長に命じたのである。そこで沢田氏は部内で英語の解説なども書いていたアナウンサー、満潮英雄氏を班長に指名した。」「『もうひとつの太平洋戦争』p.140」

○「情報局としては「作戦」には一切口出しをしない。またできるものでもない、と決めていた。したがってNHKとの関係においては、大本営の行う「謀略放送」の内容に口出しをしない。意見もいわない、という態度を決定していた。ただし、その「謀略放送」の従事者が、前記三人の捕虜のごとくNHKの国際局内に日本人職員（雇員）と同じ資格で働く（それは大本営からの要請であった）ということであれば、それらの者の局内における服務、職責の正常な遂行については指導の義務を負ったのである。また逓信省は、NHK国際局から届く放送原稿の事前検閲を続ける義務を負わされていた。政策の立案権はないが、監察権はあるといった変態な関係が、NHKと情報局、逓信省の間に存在し、当然、「謀略放送」の立案・実施は、参謀本部とNHKとの直接取引によることになり、NHK国際局にはそれを当然のことと考える者もいたし、意識的に情報局・逓信省を無視する者も出てきた。」「〔並河亮、「ミッドウェー海戦から終結まで」、『NHK戦時海外放送』p.301-302〕

²⁹⁷ 「この時、まだ米州部はできていない。」「『ラジオ・トウキョウII』p.310」

²⁹⁸ 『昭和史の天皇3』p.192.

²⁹⁹ 『ラジオ・トウキョウII』p.307.

満潮英雄

・「前線班ができたのは十八年三月。文字通り南太平洋の米軍の前線向けに放送するもので、これをわたしは『ゼロ・アワー』と名づけた。ゼロ・アワーというのは、いうならば”突撃”瞬間のことで、命令によって打ち合わせてあるその時間を、時計の針がさしたトタンに『ワーッ』と飛び出して行く—まあ、戦争をしている兵隊にとっては、一番ピリッとくる名前だったわけだ。

そしてこの放送にテーマ・ソングをつけたが、それは『ストライク・ザ・バンド』³⁰⁰（軍楽隊をやれ）という勇壮なマーチで、戦前からアメリカでは流行していた行進曲。非常にミリタリストイックだが、それもよかったと思う。[中略]ところで、ゼロ・アワーのメンバーだが、十五、六人。思い出すままに言えばマネージャー格がニューヨーク大学出身の沖健吉君（現、東京・赤坂、スタンダード通信社長）、石井鎌一君兄妹、アメリカの大学を出た音楽家の忍足信一君（現、東京・銀座、教文館ビル内、NBT 社長）、それに新居君とか、森山 [久³⁰¹] 君、日向 [正三]³⁰²君、渡辺 [忠恕] 君、早川フミ枝さん、須山芳枝さん—そんな人たちがいた。そしてあとで³⁰³、あの”東京ローズ”戸栗郁子さんが参加して来たわけだった—³⁰⁴

・「ニュースが主だから、どうしてもナマ放送になる。放送開始の二時間ほど前から準備をはじめ『きょうはこんなところでいこうや』と第五スタジオにはいる。当時のことだから、ほんとうなら原稿はみな事前検閲をうけないといけないが、参謀本部の恒石少佐は『君たちに一切まかせる。アチラ式にしかるべくやってくれ、原稿をみたってオレにはわからん』と行ってすべてを一任してくれた³⁰⁵。まったく物わかりのいい軍人だと思って敬服したものだ。

ゼロ・アワーは、はじめは主としてガダルカナル戦線を対象にしていた。恒石さんたちはガダルカナルの敵を追っばらったら、もっと別の角度から大きなことをやるつ

³⁰⁰ 「…『洋楽索引 [上巻] 作曲者と原題と訳題を引き出すための』小川 昂／編 民音音楽資料館 1975 (760.31/材/) では、洋楽の原題と訳題を調べることができますが、こちらを確認したところ、項目としては Gershwin の「Strike Up The Band」のみが掲載されており、この曲の原題、訳題とも変わらず「ストライク・アップ・ザ・バンド」となっていました。」。[静岡県立図書館回答. 2022-12-08]

³⁰¹ 『心理作戦の回想』p.326。（日向, 渡辺の名前も同じ）

³⁰² ○「彼は私 [恒石] とカズンス少佐とのパイプ役にもなっていた。」（心理 328）

○資料「日向正三」

³⁰³ 「一八年一月から戸栗郁子さんがこのゼロ・アワーに登場してきて…」（心理 178）

³⁰⁴ 『昭和史の天皇 3』p.175-176.

³⁰⁵ 恒石は責任者：「サイパン島上陸後の某日、こんなことがあった。それは共同謀議ではなかったが、レイズ中尉は「星条旗よ永遠なれ」（“Stars and Stripes Forever”）のレコードを使った。放送局の一幹部はこれを米国々歌（“The Stars spangled Banner”）と勘違いして、利敵行為として問題視した。当日は日曜日で班長の満潮氏も不在であった。謀略放送であるから時には敵を喜ばす放送をして、後でドスンと落とすようなやり方をするのも一案といえるけれども、この場合はやや行過ぎであったかも知れない。お陰で私も監督不行届ということで重謹慎三日の処罰を受ける羽目になった。」（心理 340-341）

もりだったらしく『そうだったら、もっといいネタをやるよ』とよくいていた³⁰⁶。こちらは毎日のネタに困るから、毎日電話で恒石さんに『何かありますか』と聞くのだが『いまはまあいいよ、足踏みして待っててくれよ』といていた。ところが、ガダルカナルの戦線はだんだん悪くなる。恒石さんは何もいわない。そこでこちらも勝手にいろいろ頭をしぼったものだ。大本營の方へは、敵の戦意を喪失させる目的といてあったが、内容は決してそんな大げさなものでも、かたくるしいものでもなく、いたってたわいのないものだった。一例をあげるとこんな具合。[中略]

『いいにおいがするじゃないか』『うん、今夜はハンバーグだ、すこし大きいヤツをつくったぞ』『オニオン（タマネギ）つけてアスパラもあるな、いいなあ』『ビールもあるんだ』（グググーッとノドを鳴らせる）『ああ、うめえ！』これだけで相手は畜生ツとくるわけだ。もっともわれわれもこういう放送をやりながら“いやんなっちゃうな、今夜も帰れば、おかずは梅干ししかないんだよ”という次第だった。』³⁰⁷

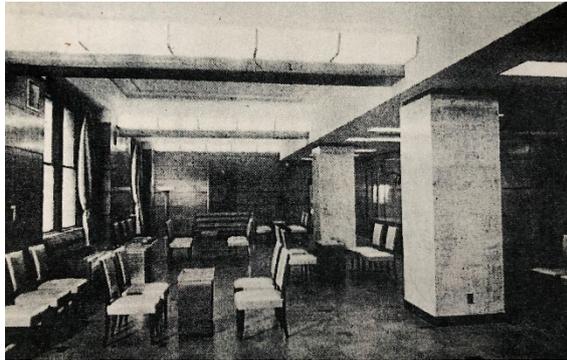


図 34 第5スタジオ待合室

出典：船橋治. 復刻版新建築. 不二出版, 2009, p.178, (第8回配本)

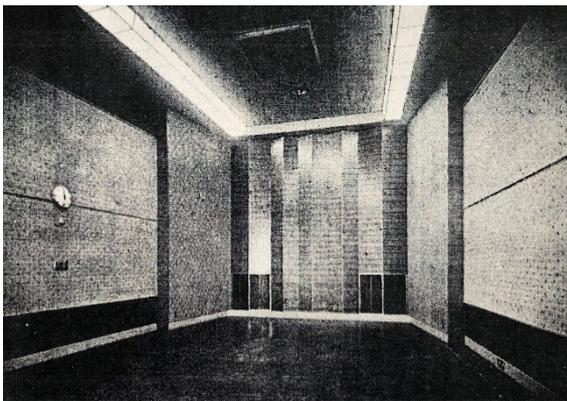


図 35 第5スタジオ

出典：『復刻版新建築』（第8回配本） p.176.

³⁰⁶ 対米謀略放送のことか。

³⁰⁷ 『昭和史の天皇3』 p.178-179.

番組の構成

「無数の電波に割り込んでいくことが難しい³⁰⁸。ことに放送なんてものは〔伝単と違って〕後に残りませんのでね。だからどうやって割り込むかということで苦勞もし、適材もおったわけですね…」³⁰⁹

○「どういう仕組みだったか、そのメンバーの一人、現 AP 通信東京支局編集長石井鎌一氏の話。

「わたしは、文化学院を出て NHK 海外局のアナウンサー試験に合格したのだが、入局して二、三年したころ、例の三人の捕虜といっしょに仕事をするようになり、そのままゼロ・アワーのメンバーになった。この放送の構成はみんなで考えたのだが、放送時間は午後六時から約一時間³¹⁰、南太平洋向けだから、時差はせいぜい一時間、敵もちょうど戦い終えてほっと一息入れた夕食ごろを見計らったわけだ。放送の出だしはレイス中尉が受け持って、彼はアメリカ式のはなやかな声で『ディス・イズ・ゼロ・アワー、フラム・ファー・ジャパン』（遠い日本からのゼロ・アワーです）そしてストライク・ザ・バンドの勇壮なマーチがはいる。それからクラシック音楽を十五分ほど続けたあと、五分間、戦況や世界ニュースを入れる。このニュースはだいたい男性の受け持ちだった。ニュースのあと十五分間、こんどはセミクラシックを流し、また五分間のニュース、続く十五分間はジャズ、そのあとまたニュースということになる。もちろんこれだけではなんの変哲もないが、このニュースと音楽のつなぎ目に、男女交代で寸劇やニュースをもじったアドリブを入れる。いちいち覚えていないが、これが圧倒的にうけたんだなあ。太平洋に放たれている無数の電波の中から、アメリカの将兵がわざわざゼロ・アワーを選んで聞いていたのは、このつなぎ目のアドリブや寸劇だった—」³¹¹

³⁰⁸ 「世界各国から無数に放送されている電波に割り込んで、日本の放送をどう聞かせるか。アメリカ音楽を“音の弾丸”として、リスナーを獲得しようというのは、〔放送連絡〕協議会のアイディアである。連戦連勝を高らかにブチ上げる大本営発表とはうらはらに、十七年六月のミッドウェー海戦の完敗以来、戦局は日々不利になっていた。海外放送には、大本営発表のようなごまかしはきかない。しかし、勝っている戦争の宣伝はたやすいが、実際は下り坂に向かっている戦局をどうカバーして宣伝するのか。協議会の関心はそこに集中した。陸軍、海軍、外務省のヘゲモニー争いは、戦局のあらゆる部分で展開されていたが、海外放送の場合も同様だった。結果的には、戦争の主導権を握り、具体的な“謀略放送”のアイディアを実行に移した陸軍の発言力が、海外放送にも大きな影響を与えることになる。“エサ”のアメリカ音楽と、対外宣伝を最も効果的に結びつけたのが、陸軍参謀本部の要請で生れた「ゼロ・アワー」である。これは、こののち続々と登場する、世界に類を見ない捕虜放送の皮切りでもあった。捕虜放送を最初に提案したのは、在米日本大使館の武官、補佐官などを経験し、海外の事情に詳しい西義章参謀本部第八課長だったといわれている。」。〔中澤まゆみ、ダイナはもう聞こえない。p.195〕

³⁰⁹ DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

³¹⁰ ○時間：「七・二五「ゼロ・アワー」七・四五終了」。〔『ラジオ・トウキョウⅡ』p.308〕

○番組内容：①『ラジオ・トウキョウⅡ』p.308と②（心理177）では違いがある。

³¹¹ 『昭和史の天皇3』p.176-177.

番組の反響

「やがて敵側のサンフランシスコ放送では新たにアメリカ・ローズを仕立てて東京ローズに対抗し、躍起になっていたことが思い出される。当時駐独大使館から参謀本部へ、確か二回か三回次のような電文が届いた。

ゼロ・アワー放送はドイツから英国に向かってやっている謀略放送「ホーホー卿」以上に成功しつつあるらしい。アメリカの戦線でもよく聞こえる所とそうでない所があり、アリューション方面では聞こえが悪いとこぼしているようだ。

好評だから今後共しっかりやって貰いたい。

と讃辞と激励と相半ばするような内容であったと記憶している。

またゼロ・アワー放送開始後約四カ月の六月二九日ニューヨークタイムスは次のように報じた³¹²。

ガダルカナル発一ラジオ東京と日本軍の空襲によりここでの夜はさほど退屈ではない。東京はゼロ・アワーと呼ぶ番組をカダルカナル島附近に向かって送信しているが、G I たちは彼等に同情し気の毒がってくれるこの放送を大いに気に入っている³¹³。」(心理 179-180)

○満潮英雄

「ゼロ・アワーが前線の将兵を完全にとりこにしてしまったという反応はすぐ、サンフランシスコ放送が打ち返してきた。『ゼロ・アワーは前線の兵隊に聞かれているようだが、あんなヤボ天放送は、これまでに聞いたことも聞かれたこともない』

つまり、裏返しすれば好評なのでシャクにさわってしかたがない。しかし、なんとかいわないと面目が立たぬから『東京ローズ [アメリカの将兵は番組の女性アナウンサーをこう呼んだ] がまたやっている。笑おうにも笑えない。泣くにも泣けない放送だ一』とこきおろす。われわれはニタニタしながらサンフランシスコ放送を聞いていたものだ³¹⁴。」³¹⁵

○捕虜になった米軍パイロット (参本情報：聴取状況調査)

「二〇時 - 二一時ノ間ニ於ケル「ガ」島ニテ連日聴取セリ、聴取状況ハ極メテ良好ニシテ音楽ハ米国ニテ最近流行シアルモノヲ演奏シアル為全員連日「東京」ラジオヲ楽シミアリ」³¹⁶

³¹² Ira Wolfert. Japanese Radio Attacks Morale of Men On Guadalcanal With Tales of Home Folk. *New York Times*. 1943-06-29.

³¹³ “The fellows like it very much because it cries over them and feels so sorry for them. It talks about the food that they miss by not being home and tells how the war workers are stealing their jobs and their girls.”. [同上]

³¹⁴ 満潮は話をこう結ぶ：「ゼロ・アワーの内容はご覧の通りのバカバカしいものだが、二十余年たった今日、テレビのCMが毎日それをやっている一」。[『昭和史の天皇3』p.180]

³¹⁵ 同上.p.179-180.

³¹⁶ 資料「捕虜の訊問」

Japanese Radio Attacks Morale of Men On Guadalcanal With Tales of Home Folk

By IRA WOLFERT

Copyright, 1943, by North American Newspaper Alliance.

GUADALCANAL, June 19 (by Mail)—Between the Tokyo radio and Japanese bombers, the nights are not always dull here.

Tokyo has been beaming a program called "the zero hour" direct to the Russell Islands and Guadalcanal. The fellows like it very much because it cries over them and feels so sorry for them. It talks about the food that they miss by not being home and tells how the war workers are stealing their jobs and their girls.

That is how it has been during eight recent night raids. The Japanese come over in two's and four's. The alarm rings. Our night fighters go up and we can hear their motors and sometimes we can hear the Japanese motors.

When the raiders come close, searchlights go up. When the searchlights find something, the guns go off. The guns are the most expensive part of the show. The fuse alone on each of these shells cost more than an expensive

図 36 ゼロ・アワーの反響 (米国側)

出典：New York Times, 1943-06-29

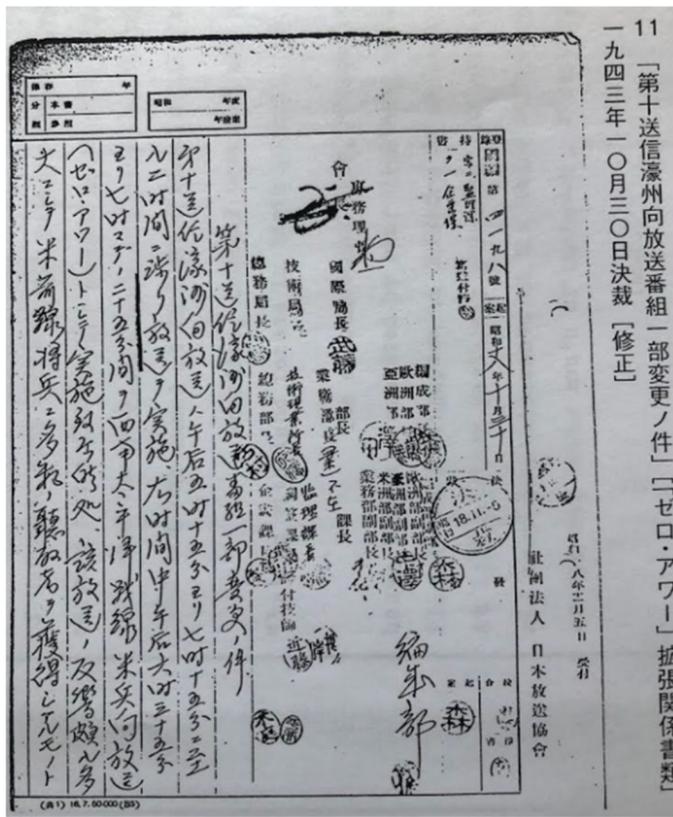


図 37 ゼロ・アワーの反響 (日本側)

日本放送協会の稟議書 (1943-10-30 決裁)

「ゼロ・アワー」が「反響大ニシテ米前線將兵ノ聴取者ヲ多数獲得」しているため拡張したとある。

出典：北山節郎編. 外務省と対外放送：ラジオ・

トウキョウ小史. 緑陰書房, 2005, p.221. (部分. 続太平洋戦争メディア資料シリーズ)

成功の要因

「東京ローズという人が出たからというよりも³¹⁷、その前にアドリブが非常に気がきいて、向こうの今痛いところを突いてしかも面白くやる。そこに「米軍将兵は」相当惹かれたようですね。それと音楽。戦争中の音楽はやらずに戦前のことばかりやって³¹⁸、それが懐かしいという。それと非常に功績があったのは、アメリカのローカル放送をキャッチできたこと。」³¹⁹

「この「米国内放送」傍受情報が米国内情勢の判断に役立ったことは前に述べたとおりであるが、これを聞いていると自動車事故や火事、強盗、殺人、洪水などはもちろん出征軍人の奥さんがどうしたとかなかなか細かく具体的に地名や名前も出てくる。そこで前線の米兵に故郷で起こっている些細なもつとも身近かなニュースを間髪を入れずに知らせる³²⁰。さすれば半ばサービスで半ば郷愁をそそり、銃後への不安感をもたらすこととなる。聞いた兵士は半信半疑であるが、やがて本国と前線を往来する新聞、通信記者達によって真相を知るわけで、ゼロ・アワーの信用をつなぐこともできた。あるとき、米国の有名な陸上選手が死亡したニュース³²¹をキャッチするや、ただちにゼロ・アワーで放送したことがあったが、「米兵は前線に出て来た記者にこれを確かめ約一週間後に真実であることを知った」と言う事実を確認することができた。

この中波傍受情報は故郷のニュースを渴望している前線の将兵にとっては絶好の材料であり、これを織り込むことによって、わがゼロ・アワー放送の信用度も高め、かつ米軍兵士達の不安や不満の芽を育てるよう努力が払われたわけである。」(心理 261-262)

³¹⁷ ○43年6月、ニューヨークタイムズが「ゼロ・アワー」の人気を報道。[本書、前項]

○同年11月、「東京ローズ」戸栗郁子がゼロ・アワーに登場。(心理 178)

³¹⁸ 戦時中流行している曲も流した。[資料「捕虜の訊問」]

³¹⁹ DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

³²⁰ ○「又「故郷のたより」として之も毎日五分乃至十分間、最新のアメリカの国内ニュースを傳へてやる事にしてゐる。その他世界の主要なるニュースも手際よく短かく編輯されてアナウンスされる。」[澤田進之丞、姿なき戦ひ、輝文堂書房、1944、p.185]

○「この「ゼロ・アワー」放送の中には「戦友の消息」といふ五分間の俘虜放送の時間が含まれてゐる。彼等の戦友であつて今は日本に俘虜となつてゐる者が自分の生活環境をありの儘に前線の戦友に傳へるものである。」[同上、p.184-185]

³²¹ ○チャールズ・パドックか：「(Charles ("Charlie") William Paddock、1900年8月11日 - 1943年7月21日)は、アメリカ合衆国の陸上競技選手。[中略] 1920年アントワープオリンピックのアメリカ代表として参加する。ここで彼は100mで金メダル、200mで銀メダル、さらに4×100mリレーでも金メダルを獲得し大活躍を見せた。[中略] パドックは競技を続けながら、いくつかの新聞社の経営にも携わっていた。1920年代後半には映画にも出演している。また第一次大戦後からはウィリアム・アップシャー(William P. Upshur)少将の個人スタッフとして従事。第二次大戦中、パドックとアップシャーはアラスカのシトカ近郊の飛行機事故で死亡した。」[「チャールズ・パドック」. Wikipedia. (参照 2022-12-23)]

○新聞記事：Johns, Walter L. PADDOCK THIRD TROJAN ATHLETE TO BE INVOLVED IN AIR MISHAPS. *The Evening Independent* (Massillon, Ohio). 1943-07-24, p.3.

委託番組

「最近出版された『東京ローズ』と題する本の中では、これを（陸軍直轄番組）とし、私が事実上のプロデューサーであったと述べているが³²²、事実とはまったく相違している。何となれば私は、「宣伝対象を南太平洋の米濠軍とし、その厭戦気運醸成を図るよう」に宣伝目的を明示して前線班の編成を要請したけれども、人選は放送協会が自主的にやったもので、私の方はいっさいノータッチであって、彼等の身分もNHKの職員のままであった。したがってアイバがいつ「ゼロ・アワー」に参加したかも知らなかったし、まして彼女が途中で放送をやめたがったけれども許さなかったとか、あるいは昇給にも私が口を利いたとか、まことしやかな記事も散見せられるけれども、まったく根も葉もないことである。

放送内容も前記目的に合致することを主眼として、彼等が自主的に資料を集め、番組編成を行っていたわけで、放送原稿は提出されたが事前検閲をすることは無かった。私の方では彼等の良識を信じて任せていたのが実情で、舵取りだけを行っていた。

これに比べて後に述べる駿河台の捕虜放送は、参謀本部囑託の日本人が指導して作らせた原稿を直轄の時間帯に捕虜自身に放送させたもので、いわゆる「直轄番組」といえるであろうし、これと対比して「ゼロ・アワー」は「委託番組」というところであろう。」（心理 175-176）

³²² ○「これらアメリカ前線 GI もまだ聞いていない国内ニュースを組み込み、厭戦に主力をおいた番組を捕虜を使ってやろうではないか、という案を恒石たち第八課は考えついた。さっそく恒石から沢田進之丞米州部長に命が下り、それが具体化したのが「ゼロ・アワー（零時時間）」番組であった。これは、海軍がうるさいので、一応情報局を通してNHKに命令が出された形が取られたが、実際には以上のごとく陸軍独自のアイデアで直接NHKに命じて作らせた、いわば陸軍直轄番組であった。」。[ドウス昌代. 東京ローズ. サイマル出版会, 1977, p.74]

○「恒石の大叔父は詳細な処まで気が付くというか中々クレバーでした。ドウス昌代氏 [1938-2022] の「東京ローズ」の著書にも間違っている点、疑問点などチェックを入れていました。」。[安岡元彦. Eメール, 2018-08-06]

○恒石は池田徳眞の *Bunka Camp Story*（私家版, 1964）も参考引用文献としている。（心理 382. 書名は「池田徳真蔵『文化キャンプ』（英文）」）

池田徳眞

「池田は捕虜の面接の仕事をする傍ら、「東京ローズ」放送の研究を始めた。それはその放送から何を学べるか、自分の放送との違いは何かという、心の中にあった疑問を解くためだった。それで池田は同僚と時々東京ローズのスタジオを訪ねた。午後6：30から7：30まで、太平洋諸島では2、3時間遅い時間に、政府系の東京で唯一の放送局であるNHKから、アイバ・戸栗と3名の捕虜からなる「東京ローズ」チームによる毎日1時間の短波による放送があった。[中略] この番組では恒石少佐が最終的な責任を負うわけだが、大勢の二世、つまりアメリカで生まれた日本人が働くNHK放送局の米州部前線班（Front Section, the American Department）の管理の下に放送されていた。もともとこの番組はカズンスが提案したと言われている。アイバがNHKでタイピストとして働いていた時カズンスが彼女の甘い声に気付いて「ゼロアワー」を計画、「みなし子アン」という役（character）を作った。

「ゼロアワー」の構成は極めて単純だ。スタジオには2人、アイバとノーマン〔・レイズ〕がいる。司会のノーマンが番組の最初と最後のアナウンスをする。また彼は回転盤の前に座る音楽ディレクターとして、これから流そうとする音楽に関係した短いロマンチックな言葉を伝える。アイバはマイクの前において時々甘い話を語り、時にはアメリカの町の名を挙げ、番組のアナウンスをする。音楽愛好家のノーマンは、回転盤に乗せる前のレコードを優しく手に持っている。カズンスとテッドは後ろに座って番組用の記事やお知らせ（stories and announcements）を書く。池田が研究のためスタジオを訪れた時には、「ゼロアワー」はすでに数カ月間放送が続けられていた。

池田は3、4回見学した後、露骨な宣伝文句はあまりないが、よく出来た番組だと気が付いた。この番組の強みと効果は以下のように要約できる。

- 1 敵の兵隊から多くの聴取者を獲得していること。
- 2 アメリカの兵隊に確実にホームシックを起こさせるのに十分効果的。
- 3 少人数の職員で番組が作れる。

この番組を数回見た後、池田は同僚とどうやったらゼロアワーの原則（principles）を自分たちが計画している宣伝放送に適用できるか議論した。1人が池田に言った。「日本の宣伝という点から見ると、この番組で3名の捕虜は最低限の協力をしているだけだ」

ゼロアワーと、提案された捕虜放送の間にそれほど共通点があるわけではないと池田は考えた。胸のうちでは捕虜に可能な最大限の協力を強制することと、アメリカ大陸を宣伝の雨で爆撃する強い決意をしていたが、彼の前に横たわる大きな問題はいかにしてそれをするかということであった。ゼロアワー放送見学後も、それは依然として彼の頭痛の種だった。³²³

³²³ 『駿河台分室物語【本編】』p.52-54.

2.3.3 情報局改組（4月）

大本営との緊密化

「一九四三（昭和一八）年四月一日付で、情報局が改組された。

「五部制を四部制に改め……」（『戦前の情報機構要覧³²⁴』二三八頁）

この改組は、海外放送に影響するところが大きかった。

「今般の情報局改組の目的ならびに重点は昨年十一月十七日の閣議決定たる『情報宣伝啓発の指導強化に関する件』を基礎に改組され……

対内的には国内輿論の指導啓発、国民士気の作興、戦意の熾烈化に努め、また対外的には対敵宣伝を活発旺盛ならしめ敵国戦意の喪失と敵国内紛乱の惹起を誘導せしめるとともに、大東亜圏内の諸国ならびに諸地域に対し思想戦施策を強化し帝国の真意を理解せしめ、大東亜の建設に同調協力せしめんとするもの。……」（同前）〔中略〕

「審議室の構成員は総裁、次長、各部長、陸軍省情報部長、海軍省軍務局第四課長〔平出英夫. 本書. p.285〕、大東亜省³²⁵総務局総務課長で、これら陸、海、大東亜各省の官吏は情報官を兼任することになってゐる点が、身分関係からみて注目される点である。なほその他若干のものが審議室に入るが、その中二名は審議室附専任情報官として陸海軍人が任命されるはずである。

……これを要するに今般の審議室創設の目的は現下戦争の段階が思想的様相をいよいよ深刻化しつつあり、かつ思想戦は作戦と形影相伴ひ、渾然融合すべきものであるに鑑み内閣情報官は大本営と一体関係に立たねばならぬ客観情勢よりなされたもの」（『朝日』三月三十一日）

情報局の今回の改組は、まさに「大本営との緊密化」をめざしたものであり、さらには、軍による情報局支配を徹底させるものであったといえよう。³²⁶

³²⁴ 戦前の情報機構要覧：情報委員会から情報局まで. 出版者不明. 1964.

³²⁵ 「1942（昭和17）年11月1日に勅令第707号により発足した。太平洋戦争以後のさらなる占領地拡大にとともに、内地、朝鮮、台湾、樺太を除く「大東亜共栄圏」における政務を一元的に管轄する機関として設置された。当初は総務局、南方事務局、満洲事務局、支那事務局の四局体制であった。設置にあたっては、圏内国との外交に関する権限を奪われるのみならず独立国の独立の制限とみなされる措置は圏内国の反発を招くとして、外務省の強い反対を招いて東條英機内閣の東郷茂徳外相辞任の原因となった。「純外交」以外の政務を管轄し、「大東亜地域」における外交官と領事館に対する指揮監督権を持った。1943（昭和18）年11月1日に勅令第818号によって官制を改正し、交易局を加えて五局体制となった。大臣は小磯国昭内閣と鈴木貫太郎内閣においては外相が兼任した。勅令第490号によって1945（昭和20）年8月26日に廃止された。』〔“大東亜省”. アジ歴グロッサリー. (参照 2023-04-18)〕

³²⁶ 『ラジオ・トウキョウII』p.319-320.

新総裁

「情報局改組直後の四月二〇日、東條内閣改造があり、発表は深夜一時であった。外務大臣に重光葵、谷 [正之] 外相が兼務していた情報局総裁に元イタリア大使天羽英二が就任した。[中略]

天羽新総裁は、さっそく情報局のカオであった奥村喜和男³²⁷次長を更迭し、二二日、後任として、内務官僚の村田五郎群馬県知事を任命した。五月一五日には、日本放送協会の人事を一新した。

彼はまた、情報局審議室に「民間側から各界達識の士」を参加させるという方針を出し、六月九日、「諮議」の資格で次の九氏に発令した。

大蔵 公望 東亜研究所副総裁、貴族院議員
太田 正隆 衆議院議員、翼賛政治会総務
加納 久朗 横浜正金銀行取締役
高橋 雄豺 読売新聞社主筆
鶴見 祐輔 衆議院議員、太平洋協会³²⁸専務理事
松本 重治 同盟通信社海外局長
藤村 信雄 元大使館一等書記官
北野 吉内 朝日新聞社編輯総務

その後、矢野真放送協会専務理事も「諮議」に加わった。」³²⁹

³²⁷ 資料「日本の海外宣伝の評価」

³²⁸ 「概要 1938年5月、「太平洋国策の樹立」を標榜して設立され、副会長を松岡洋右、理事を鶴見祐輔とし、鶴見が事実上協会の運営を取りしきった（会長は当分空席とされたが最後まで就任者がいなかった）。設立には海軍が大きく関与しており、これに鶴見ら日本IPR以来の知米派知識人が加わった（このためしばしば太平洋問題調査会と混同されるが、全くの別団体である）。同時期の国策調査機関は、同じ年に設立された東亜研究所に代表されるように、アジアないしユーラシアの総合的地域研究を進めるものが大半であったが、太平洋協会は今日という環太平洋地域、すなわち南北アメリカ大陸地域を調査対象に含めている点に大きな特徴がある。太平洋戦争期には、関嘉彦を班長にボルネオ守備軍のもとで北ボルネオ（旧英領ボルネオ）での占領地調査を担当した。所員には講座派社会科学者で第二次世界大戦後に中国研究所を設立する左派の平野義太郎、河合栄治郎の弟子で戦後社会思想研究会を結成し民社党ブレーンとなる関嘉彦、あるいは思想の科学研究会を結成することになる人々など、多彩な人材が集まっていた。また民族研究所・台北帝国大学南方人文研究所・西北研究所などと並んで、戦時期における人類学者の活動の場を提供した（太平洋協会には清野謙次・杉浦健一らが参加）。1943年には協会内にアメリカ研究室が作られ、丸の内の三菱ビル街に一室を設け、鶴見和子、坂西志保、都留重人、阿部行蔵らを主軸に、細入藤太郎、清水幾太郎、福田恆存らが加わり、戦時米国の実相調査が行われた。1945年8月の敗戦にともない解散、会の資産は中心メンバーであった平野らの「中国研究所」グループと関らの「社会思想研究会」グループに分割・継承された。」

[“太平洋協会”Wikipedia. (参照 2023-04-14)]

³²⁹ 『ラジオ・トウキョウII』p.321-322.

2.3.4 東条首相の南京・南方訪問（6-7月）

43年 6月	30日	タイ、マレー、ジャワ、フィリピン歴訪の旅に出発。 南京で汪兆銘政権と、上海共同租界を中国に返還する協定に調印。
7月	4ㇿ	シンガポールでインド独立連盟大会。ビハリ=ボースが引退表明、 新総裁にチャンドラ=ボースを選出。
	5ㇿ	[チャンドラ=ボース] インド国民軍を閲兵する。 東条英機首相も参列。
	7ㇿ	ジャワ訪問の東条英機首相を一般民衆が盛大に歓迎。
	12ㇿ	南方軍政地視察から帰国。

図 39 東条首相の訪問スケジュール

出典：『年表太平洋戦争全史』 p.243,246-249.



図 40 東条首相ジャワ訪問

出典：朝日新聞. 1943-07-13, 夕刊.

西大佐戦死（7月）

「〔西〕大佐は一八年夏頃³³⁰であったか、欧州ポルトガル方面にあつて情報収集や対米工作を行なう新任務を帯びて新たに開発された長距離機でシンガポール飛行場を飛び立った³³¹。おりから事務連絡のため支那および南方に出張していた³³²私は、大佐を同飛行場で見送つたのであるが、燃料満載のため飛行場端末で辛うじて離陸したものの、途中故障のためかあるいは撃墜されたか原因不明のまま不幸にもこの逸材は欧州の地を踏むことができなかつた。その後あらゆる手段を尽して遭難の情報収集が続けられたが、何等の手がかりも得られず、戦死と認定された。雄図ついにならず痛恨の極みであつた。」（心理 166-167）

「...〔メキシコ駐在経験のある西大佐は〕ベルリン経由南米³³³に飛んで謀略工作をやるために出発したが、途中消息を絶つた。惜しい人だつた。」³³⁴

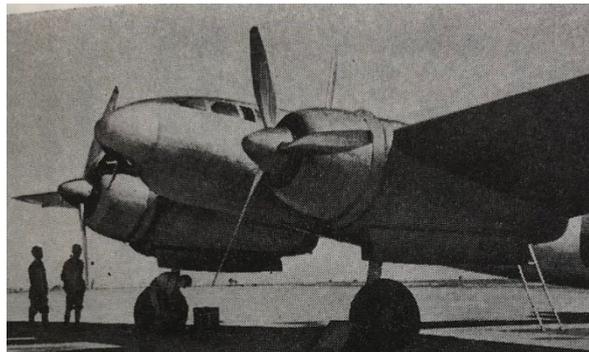


図 41 長距離機 A26（キ七七）

出典：木村秀政：わがヒコークキ人生。
日本図書センター，1997，p.138.

³³⁰ ○43年7月7日。〔資料「西義章/長距離機 A26（キ 77）」〕

○戦死認定も同日：「万里制空の雄図空しく昭和十八年七月七日印度洋上に愛機と共に散華した長友重光陸軍技師等五名の本社航空部員もこの度の論功行賞に際し左の通り有難き恩命を拝した」。〔長距離機の勇士 長友技師等に恩命。朝日新聞。1945-07-26〕

³³¹ 資料「西義章/長距離機 A26（キ 77）」

³³² 東条首相の南京・南方訪問にともなう出張か。

³³³ ○目的地は南米ではなく中立国ポルトガルと推測：中南米諸国で43年6月末現在日本と断交（または日本に宣戦）していないのはアルゼンチンだけ（同国の断交44年1月26日、宣戦45年3月27日）。〔アジア歴史資料センター。Ref. B02032435100〕。

○なお元参謀本部第2部長の岡本清福は43年7月遣独伊連絡使節団長。「ヨーロッパ戦線の激化のため帰国の術がなくなり、ヨーロッパにとどまって情報任務に就くこととなった。〔中略〕1945年8月15日—チューリッヒの居宅で拳銃により自決」。〔“岡本清福”。Wikipedia。（参照 2023-02-11）〕

³³⁴ 『昭和史の天皇3』p.168.

南方出張（7月）

「また一八年初夏以来、インド・ベンガル地方は大飢饉に見舞われた。このとき私は、ちょうどシンガポールに出張していてチャンドラボース氏にはシンガポールから被災地の人々への慰問と激励を、またラングーンからはバーモービルマ首相³³⁵によってビルマ米の提供を呼びかけるよう指導した。」（心理 104）

「彼〔チャンドラボース〕は宣伝については人一倍理解も深く熱心であった。私が一八年八月頃³³⁶業務連絡のためシンガポールを訪れたときも夜半まで自ら放送原稿を書いて、祖国に向かって熱烈に呼びかけていた。その熱情は彼との夕食時提供されたカレーライス辛さとともにいまだに忘れ得ない思い出である。」（同上、103）

出張先	都市	時期	備考
	◎総軍司令部		
南方総軍	◎シンガポール	43年7月	業務連絡(心理 103)
	ジャカルタ	不明	〃 (〃 112)
仏印	サイゴン	43年11～12月	業務指導と連絡(〃 203)
	〃	45年1月	仏印処理(本書「2.5.1 仏印出張」)
支那派遣総軍	◎南京	出張の記述なし	
	上海	時期不明	上海経由汽車で北京へ ³³⁷
	北京	〃	
関東軍	◎新京	出張の記述なし	

図 42 大戦中の恒石の海外出張



南北各地へ業務連絡（デス・インデスホテル<ジャカルタ>前の筆者）

図 43 恒石ジャカルタ訪問

出典：（心理 112）

³³⁵ 「1943.8.1 日本占領下のビルマで、バーモー政府独立宣言、米英に宣戦布告。日本・ビルマ同盟条約調印」。『近代日本総合年表』 p.336.]

³³⁶ 前項の西大佐をシンガポールで見送った43年7月と推測。

³³⁷ 「私は上海には戦中に一度行っただけですが機上から見ても長江と海との区別が水の色で想像出来る位で驚きました。その時は天候不良のため北京まで火車〔中国語の汽車〕に変更して国土の広さを実感したことでした。」。〔葉書、1995-08-23〕

2.3.5 参謀長会議（8月）

- 資料標題：「昭和十八年度参謀長会同における実務連絡事項（第八課主務事項）
（対敵宣伝、戦場宣伝、前大戦の対敵宣伝）昭和十八年八月十七日大本営陸軍部」³³⁸
・内容

項目	内 訳	ページ
対敵宣伝ニ就テ	第一 要旨 ³³⁹	3
	第二 戦場宣伝ニ就テ	4
	第三 対外宣伝上ニ於ケル俘虏ノ利用ニ就テ	8
	第四 其ノ他 ³⁴⁰	9
俘虏ヲ利用スル 対敵放送ノ件	一 利用状況	11
	二 反響	13
	三 放送内容	13
	四 放送従事俘虏ノ取締	14
	五 其 他 ³⁴¹	14
前大戦ニ於ケル 対敵宣伝ノ研究 ³⁴²	（表紙・概略）	15
	目次	17
	一 「クリュー・ハウス」 ³⁴³ の組織	18
	二 宣伝ノ計画	19
	三 宣伝ノ方法及戦略	21
	四 宣伝ノ組織的実施	23
五 宣伝結果ノ測定	30	
アラカン作戦 ³⁴⁴ ニ於ケル戦場宣伝ノ教訓		35

³³⁸ ○アジア歴史資料センター. Ref.C14010442700.

○内容から恒石の起案と推測する. [翻刻：本書「ホームページ上の恒石資料」]

³³⁹ 一部引用：「対敵宣伝ニ関シテハ去ル三月宣伝主任者会同席上次長、第二部長口演ニ於テ指示セラレタル処ナルモ要スルニ主敵タル米国ニ対シテハ…」

³⁴⁰ 同上：「俘虏中宣伝ニ直接利用シ得ル者ハ利用ヲ考慮シアリ（例ヘバ新聞記者放送員、反戦分子秘密結社員、社会的地位高キ者等）」

³⁴¹ 同：「目下俘虏中ノ適任者ヲ選定シテ之ヲ宣伝業務上更ニ有効多量ニ利用スル如ク準備中」

³⁴² 資料「笈光顕」

³⁴³ ○資料「第一次大戦における英国の宣伝」

○本会議直後の8月25日に飯野紀元訳『英国の宣伝秘密本部』（内外書房）発行.

³⁴⁴ 「第一次アラカン作戦」のことと思われる. [資料「ビルマの戦い／アラカン作戦」]

2.3.6 米本国向け放送

「米本国に向かっては主として東京ラジオから本書の頭初に掲げた「戦争終末促進に関する腹案」に準拠して開戦以来日夜宣伝放送に努めて来たところであるが³⁴⁵、これに加えて捕虜による謀略放送を開始することとなった。[中略] ……なるべく彼等に自発的に行なわせ「自由アメリカ」的性格をもたせ³⁴⁶、日本側は表面に出ることなく陰で指導し、監督する立場をとるようにした。したがって捕虜の適任者を選ぶことも重要であったが、これを内面指導する日本側職員の人選および捕虜達を過誤なく自発的に活動せしむるための配慮はとくに留意を要するところであった。」

(心理 193-194)

「西大佐の時に、ゼロ・アワーのように向こうの兵隊さんだけでなしに、アメリカの国民に呼びかけないといかんという意見で、私もそういう考えをかねてから持ってた訳です。」³⁴⁷

³⁴⁵ 資料「対敵電波戦」

³⁴⁶ 「自由フランス」をイメージか：「自由フランス（じゆうフランス、フランス語: France libre）は、第二次世界大戦中にナチス・ドイツによるフランス占領に反対して成立した組織である。亡命フランス人による独自の自由フランス軍（Forces Françaises Libres）を率いるとともに、フランス内レジスタンスを支援した。[中略] 1940年のドイツ軍の侵攻によるパリ陥落後の6月17日にイギリスのロンドンに亡命した前国防次官シャルル・ド・ゴール将軍は、6月18日にはイギリスの公共放送BBCを通じて歴史的な演説（Appeal of 18）を行い、国内外のフランス人に対独抵抗運動（レジスタンス）を呼びかけた。6月21日にフィリップ・ペタン率いるフランス政府はドイツに休戦を申し入れ、フランス南部を統治するヴィシー政権となった。[中略] 自由フランスはBBCや独自の放送局からフランス内地のフランス人に対独レジスタンスを呼びかけ、内地フランス軍による諜報・妨害作戦を行った。」. [“自由フランス”. Wikipedia. (参照 2022-12-15)]

³⁴⁷ DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

準備室

「一八年夏、山王ホテル第四二六号室を借りて、米国民を対象とする謀略宣伝の準備にとりかかった。すなわち元外交官でニューヨーク領事、ペルー代理公使などを歴任した藤村信雄氏³⁴⁸（当時四三歳）を参謀本部嘱託とし、彼を中核として人材を集め、主敵米国を対象とする宣伝の研究準備を始めたのである³⁴⁹。そのブレーンには当初米加州大学卒哲学博士の森野正義氏³⁵⁰（当時三一歳）や東京大学卒英オックスフォード留学約四年の池田徳真氏もいた。これらはいずれも嘱託となった。」（心理 194）

³⁴⁸ ○43年5月情報局審議室（※）、43年11月～45年6月参謀本部駿河台分室・所長。
[秦郁彦編. 日本近現代史人物履歴事典. 東京大学出版会, 2013 p.496.より]

（※）43年6月とも。[本書「2.3.3 情報局改組/新総裁」]

○藤村は43年11月に駿河台分室専任となるまでは情報局審議室との兼任か。

・恒石の部下谷山樹三郎は「藤村信雄氏は「駿河台分室の」常勤ではなかった」と編者に話した。

・43年10月ころ駿河台分室職員となった小林久子は「藤村所長さんはいつも所長室におられた様でしたがよくわかりません.」。[手紙. 2015-06-03]

³⁴⁹ 「さて、参謀本部の第八課では、課長の西義章大佐（もと在メキシコの武官で、アメリカ通）の考えで、宣伝謀略関係で民間人と接触するために、昭和十八年五月から赤坂の山王ホテルに秘密の部屋を持っていた。そして元外交官で、ペルーの一等書記官で代理公使をしたことのある、藤村信雄氏（当時、四三歳）にその仕事を依頼していたが、その部屋は山王ホテルの四階の奥まったところで、ちょっと誰も気付かない四二六号室であった。」
[『日の丸アワー』 p.21]

³⁵⁰ 「この藤村氏のアシスタントとしては、森野正義氏と給仕が一人いただけであった。森野氏は二世で、カリフォルニア大学を卒業して政治学博士の称号を取り、すぐ昭和十四年末に来日し、十五年から外務省の情報部に勤めていた人である。森野君の話によると、藤村さんも若い時にニューヨークで領事をしていてアメリカ通であるし、西大佐も陸軍には珍しいアメリカ通なので、この二人の下なら働き甲斐があると思って参加したのだとのことである。」 [同上.p.21-22]

文化学院接収（7月）

「捕虜二、三〇名を収容し、これに日本側職員³⁵¹のほぼ同数を加えるとかなりのスペースの建物が必要であった。幸い駿河台にあった文化学院（現文化学院大学³⁵²）は休校中³⁵³で、校舎が使われていなかった。さっそく所有者の西村伊作氏に交渉してこれを借り受けることができた。」（心理 195）

（1）西村伊作

「私が拘置所にいる間に、私の経営している文化学院が閉鎖を命ぜられ、それが新聞へも大きく書かれた。自由主義の教育はいけないという理由のほかに、何か学校の中が乱れているふうに宣伝してあったけれども、それは文化学院を閉鎖させたいために無理につけた理由であって、文化学院を閉鎖して、その建物を政府側のある者が取りたいと思ったからである。その目的のために私は拘禁されているのであった。ある日私は拘置所の特別の面会所へ連れられて行った。そこには陸軍の参謀本部から来た人がいたし、私の弁護士もいた³⁵⁴。それは私の閉鎖された文化学院の建物を陸軍の方へ貸せ、という交渉であった。私は閉鎖されているのであるから貸してもいいと承諾した。軍部の人私の長男久二と交渉して、相当厳しい強いことばで久二を脅かして、安い家賃で学校の建物を借り上げようとした。結局文化学院の建物を貸すことになって、軍部は軍の事務所を学校の建物の中に置いた。」³⁵⁵

（2）太田天橋

「昭和十八年七月³⁵⁶、参謀本部は、駿河台の文化学院を接収して、宣伝・謀略の仕事を経営的にやることになった。[中略] 俘虜を数十人つれてきて、本格的に謀略放送などもやることになったのである。[中略] 参謀本部からは第二部長有末精三少将、藤原岩市中佐³⁵⁷、恒石重嗣、小岩井光夫³⁵⁸の両参謀が参加した。」³⁵⁹

³⁵¹ 資料「駿河台分室関係者」

³⁵² 1921年開校, 72年専修学校, 2018年閉校. [“文化学院”. Wikipedia. (参照 2022-07-22)]

³⁵³ ○「文化学院については東京都から、向島高女については文部省から、それぞれ三十日発表された」. [文化学院・向島高女校門を閉ぢる：決戦下教学刷新に閉鎖の断, 朝日新聞. 1943-08-31]

○資料「文化学院」

○向島高女の閉校後の施設利用は不詳.

³⁵⁴ 「拘置所で一か月ほど待つてようやく裁判が始まった。[中略] けれども弁護士は弁護する方法がない、といった。弁護士は私のこういう [不敬罪] 事件を弁護すると、この戦争のときに自分の立場が悪くなるということを恐れた。」. [西村伊作. 我に益あり：西村伊作自伝. 紀元社出版, 1960, p.380-381]

³⁵⁵ 同上. p.380.

³⁵⁶ 9月の文化学院閉鎖公表まえに在校生の転校先を決定する必要がある. [資料「文化学院／作家・杉本苑子」]

³⁵⁷ 太平洋戦争中は南方勤務. [“藤原岩市”. Wikipedia. (参照 2023-06-06)]

³⁵⁸ 参謀本部付. [資料「参謀本部第8課／恒石在籍時の関係者」]

³⁵⁹ 太田天橋. 私がマンガ伝単の元祖だ. 日本週報, 1949, 483号, p.80.(1949-06-04 臨時増刊号)

(3) 池田徳眞

「藤村氏の話によると「参謀本部では、こんど接收した駿河台文化学院に俘虜を収容するとともに、伝単（ビラ）をつくっている淡路町事務所と対ソ宣伝の九段事務所を合併して、対敵謀略宣伝センターを作る計画である。[以下略]」³⁶⁰



図 44 文化学院

撮影時期：1939 年ころ

出典：西村九和. 光の中の少女たち：西村伊作の娘が語る昭和史. 中央公論社, 1995, カバー写真



図 45 戦時中の鉄道路線図

出典：時刻表第十九巻第三號.

1943-02-28,p.14. (部分. 赤い四角は編者追記)

³⁶⁰ 『日の丸アワー』 p.21.

捕虜候補者

「そこで参謀次長電をもって大東亜全域の各軍を通じて捕虜収容所³⁶¹から宣伝に適任の捕虜候補者を選定して、その名簿に経歴その他の必要事項を記載して提出するよう指示した。そして提出された多数の候補者名簿から五三名を選出して逐次東京の大森収容所に送致することとなった。一八年秋のことであった。」(心理 194)

「……十八年夏ごろ、関東軍からシナ派遣軍、南方総軍など全前線³⁶²へ通知を出し、放送の適任な捕虜を出してほしい、とやってやった。」³⁶³

○四国の善通寺収容所にいた米海軍少尉ヘンショー³⁶⁴

「「われわれを名指して「他の収容所へ移送する」という命令が来た時、ジョージ³⁶⁵ [ウィリアムズ (Charles F. Williams)] と私はなぜ自分たちがと話し合った。彼は司政官 (governor) でシビリアンだから多分捕虜交換 [で帰国] になるのではということになった。私については、誰も見当がつかなかった。収容所の通訳の1人は、[合唱団を] 組織したせいだと言った。私は合唱団のメンバーを集め、余興の台本を書いて演出していた。「そういうことをするとね」と彼は続けた。「軍隊では反乱を扇動しかねない人物とみられるのさ」。何が進行しているのか、誰も見当がつかなかった。午後遅く、管理棟前に私物を持って整列、見送りに集った何百人もの捕虜に挨拶して収容所の門を出た³⁶⁶。トラックで連絡船乗場に行った。美しい [瀬戸] 内海を横断した。その後どこに着き何に乗り換えたか覚えていないが、自動車と列車で運ばれて行った。座ることは許されたので、ジョージと私は話をしようとした。しかし会話は禁止された。長い距離を歩くことがあった。私の袋は、善通寺の捕虜が自分の赤十字小包の中から餞別にくれた缶詰で重くなっていた。ぜんそくの発作を起こして呼吸困難になり、歩けなくなった。倒れる寸前ウィリアムズは私の身体を支え、荷物を持つと言ってくれた。おかげでなんとか大森収容所にたどりつくことができた。」³⁶⁷

³⁶¹ 善通寺収容所では「俘虜特種技能調査一覧表」を作成している。[『善通寺俘虜収容所情報綴』I-134]

³⁶² 国内の善通寺捕虜収容所からも：ヘンショー、ウィリアムズ、カルプフライシュ。[『善通寺俘虜収容所』ハンドブック』p.198-199／『日の丸アワー』p.66 ほか]

³⁶³ 『昭和史の天皇3』p.189.

³⁶⁴ George Herbert Henshaw(1918-2003). 戦後テレビの舞台デザイナーとして活躍。[『駿河台分室物語【資料編】』p.179]

³⁶⁵ ウィリアムズが、マキン島から7名のニュージーランド人とともに日本へ送られた際の船中での話：「私の名がチャールズ・ウィリアムズだと知るとニュージーランド人たちは、「気取ってるよ (La-di-da)、ジョージでいこう。」と言い、捕虜の期間中私はその名前で通すことになった。」。[Williams. 手紙. 1991-4-6]

³⁶⁶ 43年10月28日。[『善通寺俘虜収容所』ハンドブック』p.192]

³⁶⁷ Henshaw. 手紙. 1992-6-25.

○香港で捕虜になった英海軍士官ルイス・ブッシュ (Lewis Bush) ³⁶⁸

「…ウィリアムズという男も [大森収容所に] 入って来た。歴史に名の残る幾多の名船長を輩出した、英本国デヴォンシャ生まれの、快活できかん気で頗るエネルギッシュな人物だった。[中略] 快活なヘンショー海軍少尉はハワイ生まれだけあって、ギターをもって入って来た。」³⁶⁹



図 46 (左から) ウィリアムズ, ヘンショー, ブッシュ。
出典：『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』 p.193.

³⁶⁸ ○香港のブッシュら 501 名の捕虜は 43 年 9 月 2 日大阪に上陸, 新潟に収容されたが直後に彼だけは 大森へ移送される。 [ルイス・ブッシュ, 明石洋二訳, おかわいそうに：東京捕虜収容所の英兵記録, 文芸春秋新社, 1956, p.132, 169, 178-179]

○ブッシュも候補者だった：「…戦前に弘前と山形の高等学校とで英語の教師をしていたイギリス人のブッシュ海軍中尉は、帰国の途中香港で開戦となり、イギリス海軍に加わって捕虜になった人だが、恒石さんが「通訳にでも使いましょうよ」と言うのを、私が「最近のイギリスを知らないイギリス人など不要です」と強く反対したので一三人 (※) の中には入れず大森の収容所に残してきた。そのため、戦後、彼は日本で働く気になり、英国映画協会の日本代表として活躍し、日本婦人を奥さんにし、親日家として三〇年在日し、つい先年帰国された。もし私が恒石さんに、あの時に「イエース」と言っていたら、おそらく親日家ブッシュ氏は生れなかったと思われる。」 [『日の丸アワー』 p.26-27]

(※) 14 人とも。 [『駿河台分室物語【資料編】』 p.283]

³⁶⁹ 『おかわいそうに』 p.216.

池田徳眞

・「昭和十七年十月九日に交換船鎌倉丸で帰国して³⁷⁰落ち着いた職場は、外務省の情報部ラジオ室で、外務省の構内をはいって左のいちばん奥の建物にあった。室長の樺山資英君は、私のイギリス以来の友人で、彼が私を在オーストラリアの日本公使館の文化宣伝係に引っぱったのだから、ここに帰ってきたのだ。[中略]日本の対敵宣伝放送をみると、理論も、組織も、統一した方針もなくバラバラで、敵国の宣伝態度に比べて、はるかに見劣りするものであるということを感じするようになった。それで、昭和十八年五月頃であったと思うが、「対敵宣伝放送の原理」という邦文タイプ二七枚のものを書いて、室長の樺山君に見せた。この「対敵宣伝放送の原理」を、私は当時の日本の対敵宣伝放送を改善する必要があると思う一念から、警鐘のつもりで書いたのである。ところがそれは、想像だにしない世界へ私を連れて行ってしまった。九月の中頃であったと思う、樺山君が話があるというので二人で別室にいった。彼は「参謀本部第八課では、ゼロアワー放送につづいて、俘虜集団を使って対米謀略放送をすることを計画している。それで担当の参謀から、誰かじっさいに俘虜を使ってアメリカ西部に向けて放送することのできる人を、推薦してくれという依頼があった。君やらないか」と言うのである。あまりに奇想天外なことなので、たしか二、三日考えさせてもらったように思う。考えてみると、世界的にも前例のないことだし、自分がするのではなく、俘虜にさせるという超難事業であるから、うまくいかないかも知れないと思った。そして何よりも、私がアメリカに一度も行ったことがないというのが難点だと感じた³⁷¹。私はその時まで、イギリスへ四年四ヵ月とオーストラリアに一年半行っただけなのである。しかし樺山君は「アメリカ生れの二世はたくさんいるのだから、使えばいいのだし、ラジオ室も全面的に応援するからぜひやれ」と勧めた。その時は私もまだ若くて無鉄砲だったから、「戦争なんだ、やってみるか」という気になり、「イエース」と答えた。はじめから、自分の能力をはるかに越えた難事業と分かっているのに、本気で取組んだのは、一生のうちでこの時ただ一回だけであった。」³⁷²

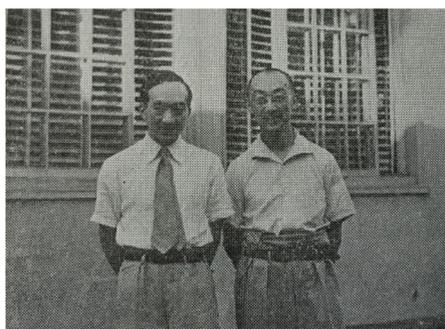


図 47 樺山資英（左）と池田徳眞
撮影場所：外務省ラジオ室の前
出典：『プロパガンダ戦史』 p.9.

³⁷⁰ 鎌倉丸は「1942年10月8日：横浜帰港」。「交換船」. Wikipedia. (参照 2023-04-18)

³⁷¹ 「一九三二年から六年にかけての4年超のイギリス滞在の間、彼はヨーロッパのあちこちの国々を旅行したが、日本に帰る途中にアメリカへ寄る機会を逸していた。新世界を見たいという強い希望を持っていた池田は、ロンドンで妻とけんかした。最終的には池田の方が折れ、もう一度インド洋を経由して帰国することになった。幼い女の子とイギリスで生まれた赤ん坊がいたからだった。」、『駿河台分室物語【本編】』 p.13-14

³⁷² 『日の丸アワー』 p.12, 14-15.

・「そして私は九月下旬にその〔山王ホテルの〕部屋で、はじめて藤村氏にお会いした。長身で赤ら顔に眼鏡をかけた元気よく話をする方であった。〔中略〕「...それであなたには、俘虜による対米謀略放送の企画、俘虜の選考、放送の実施をしてほしい」とのことであった。〔中略〕藤村さんにお会いした数日後、おなじ山王ホテルの四二六号室で、はじめて宣伝担当参謀の恒石重嗣少佐にお会いした。三四歳ぐらいの若い将校で穏やかに話をされる方であった。恒石少佐は、一枚の横長の表を私に渡された。それには五三人の俘虜の姓名と、その下に階級、年齢、国籍、戦前の職業などが書いてあった。恒石少佐は私に言われた。「これが俘虜放送に利用するために、現地でいちおう選んで東京に送ってきた、俘虜のリストです。大部分は、すでに東京俘虜収容所（大森にあった）に來ています。放送に使うという意図は隠して、この中から一五人か二〇人ぐらい役に立ちそうな者を選んで下さい。あなたの名は収容所に通知してありますから、何時でもはいれます。また信用できる人なら、あなたは誰を同行しても差支えありません」とのことであった。いたって簡単明瞭である。そして、俘虜選考と言う仕事ははじまった。」³⁷³

・「参謀本部のリストにある五三人の俘虜のうち、まだ一三人が到着していないのであるから、あとのことも考えて四〇人の中から一〇人あまり見当をつけた。私は恒石参謀か誰か軍人が会うのだろうと思って、〔43年〕十月下旬に山王ホテルで恒石少佐にその旨を報告した。少佐は「そうですか。それでは今ここで決めてしましましょう」との話である。これが参謀本部の超省力主義で、拙速を貴ぶやり方だと驚いたが、一五分ほどで一三人をきめた³⁷⁴。ちょうど八百屋で、ナスかトマトでも選ぶように簡単にやったのだが、これが彼らの運命の岐路になったことは言うまでもない。」³⁷⁵

樺山資英

「その時〔43年秋〕樺山は恒石少佐に関する事、対敵謀略に関する参謀本部の段取りについて彼に明かした。驚いたことには、第八課の6、7名の参謀でもっとも若い恒石少佐が敵国に対する極めて広範囲な謀略や相手の謀略に対処する唯一人の担当者なのだという。彼は敵の放送に関する事すべてを調査、検討して上席者に報告しなければならない。同時に日本政府の放送局であるNHKから発せられるすべての短波放送を陸軍の観点から監督する。これら一般的な任務のほか「東京ローズ」、3名の捕虜が書き放送する解説、「淡路町事務所」でのパンフレット制作など多くの謀略活動をしている。樺山は言う。「ほかの陸軍将校と比べれば、恒石少佐は謀略のことをはるか

³⁷³ 『日の丸アワー』 p.21-23.

³⁷⁴ 〇14名とも。〔駿河台分室物語【資料編】 p.283〕

〇選抜されたヘンショー以外の捕虜の例。〔『日の丸アワー』 p.22-25, 68, 70-71〕

- ① シェンク（「バタビア（いまのジャカルタ）放送局の放送員」、収容所名不詳）
- ② カルフライシュ（「戦前はラジオのニュース放送をしていた」、善通寺収容所）
- ③ プロポー（「日蓮宗の信者」、台湾の花蓮港収容所）。
- ④ ストリーター（「反ルーズベルトの詩などを書いて持っていた」、上海収容所?）
- ⑤ ウィリアムズ（英植民地省勤務、マキン駐在、善通寺収容所）

³⁷⁵ 同上。 p.24.

によく理解している。しかしこれだけ広範囲な仕事を彼1人で管理するのは不可能だ。だから彼は自分の目的のため、文民（civilians）を目一杯利用することにした。それで僕に敵の放送の分析を依頼し、数人の二世には3名の捕虜を見張らせている。藤村氏には駿河台分室に謀略拠点を作らせるとともに、アメリカ西海岸に向けた新しい捕虜放送を頼んだのさ」

池田 「樺、参謀本部がこれだけ重い責任をたった1人の将校に託すとは驚いたよ³⁷⁶」

樺山 「陸軍が自分たちの予想をはるかに超える大戦争に飛び込んでしまったからだ」

池 「無茶な話だ」

樺 「陸軍将校の敵の謀略全般に対する理解は、総じてお粗末だ。英語はほとんど分からないが³⁷⁷、恒石のような将校を見つけることはまず不可能だ。だから謀略の基本も知らない別の将校が、彼に代わって欲しくない」

池 「これほどの責任を陸軍が文民に負わせるとは、今日まで思いもしなかった」

樺 「多分、「最小の努力で最大の成果を得る」というのが陸軍の要諦だからだ。

しかしながら彼らは好むと好まざるとにかかわらず、そうせざるを得ないよ。自分たちでは捕虜を扱うことができないからな³⁷⁸」³⁷⁹

³⁷⁶ 参謀本部の瀬島龍三が戦後伊藤忠商事で同様な組織運営をしたことを、同社元会長・室伏稔が語っている：「まず当時の業務部の役割を簡単に説明したい。国際化、非繊維部門の拡大発展を目標とし、2つの重要な機能があった。「中長期、短期の全社的経営計画、組織、制度の企画、立案、管理」と「グループ戦略並びに成長戦略につながる全社的プロジェクトの推進」である。それを十数人の人数でこなしていた。「重要な部署ほど少数精鋭」が瀬島さんの考えだった。」「私の履歴書」・日本経済新聞、2011-09-17、朝刊]

³⁷⁷ ○「恒石大尉父は英語を読むのは全く不自由なかった。」「安岡元彦。電話。2022-12-21」

○「[49年8月]…単身サンフランシスコーハワイ経由で帰国の途についた。」(心理338)

○「ただ帰国中も続行された証言を知るために、地元のサンフランシスコ・クロニクル紙およびエキザミナー紙の記事収集をB氏に依頼して帰ったが...」(同上)

³⁷⁸ ○「こうして捕虜放送のお膳立ては着々として進んだが、大本営陸軍部の戦略構想の一環として展開されるこの計画を、民間人と敵国捕虜のみに委ねて置くわけにはいかない。そこで主任参謀の恒石少佐を補佐する監督将校が必要となった。軍事作戦に関することなら当然陸軍士官学校出身者がその任に当たるべきであるが、捕虜による対敵謀略放送などという「水もの」となると、士官学校出の職業軍人では少々ミスキャストのきらいがある。第八課内であれこれ評定の末、監督将校には陸軍中野学校出身者を当てることになり、前任参謀尾関中佐が「[谷山の後任として(※)]上海から濱本を呼ぼう」の一声で白羽の矢が私に立てられたという次第である。」「浜本純一。青雲白雲：私の人生劇場。浜本事務所、1986、p.97】(※)資料「谷山樹三郎」

○「これらの[対米]放送には中野出身者中、谷山大尉、浜本大尉、山口少佐、伊野部重珍少佐(乙I長)(※)一二三九兵衛少佐(乙I長)らが逐次参画している。」「[陸軍中野学校]p.139】(※)期別：山口、伊野部、一二三は陸軍中野学校乙I長、谷山、浜本は乙II長、

³⁷⁹ 『駿河台分室物語【本編】』p.12-13.

2.3.7 職制変更（10月）

「その [43] 年の秋、職制が変わり、八課は四班と呼ばれ³⁸⁰、その班長には永井八津次少将が就任した。この人は、のち陸軍省軍務課に転じ、鈴木 [貫太郎] 内閣ができたとき、陸軍が首相につきつけた三条件を起草した人である。」³⁸¹

○参謀本部第2部第8課は第2部第4班となり、10月15日恒石は「第4班課員」となる³⁸²。

○東方社

「太田英茂を中心とする内部改革も順調に進み、参謀本部との関係も建川中将という“カブト”の威力か、岡田時代よりスムーズに動くようになった。二代目の理事長に就任した林達夫は、本来学究の徒であり、こうした組織の長に収まることは自ら望むところではなかったが、木村 [伊兵衛] や原 [弘] をはじめ、昔からの友人とともに始めた仕事だけに、内外ともに情勢の悪化している中で、岡田の後がまを逃げることはできなかった。また、林達夫の弟、林三郎は陸軍中佐で、一九四〇（昭和十五）年当時からソ連担当の五課にいて、なにかと陰から支援してくれていた。その林参謀は一九四三年十月の異動で第五課の課長に昇進した。そんな関係もあって、参謀本部側との関係修復のために、ひとまず [東方社の二代目] 理事長を引きうけることにしたのであった。

同じ十月の異動で第八課は格下げになって第四班となった。一九三七（昭和十二）年十一月に課として新設されてから、わずか六年目であった。戦場が南北に拡大されて、中央で現地の情勢が把握しにくくなってきたのに加え、このころは現地での宣伝や戦場で撒く伝単は、現地軍にまかせざるをえない情勢になっていたのである。もともと対外国宣伝は、平時にあってこそ威力を発揮できるのであって、戦争が激化した時点では、占領地の民衆に対しての宣撫工作や、対敵謀略宣伝にならざるをえなかった。」³⁸³

³⁸⁰ 恒石は43年10月の職制変更以後も「参謀本部第八課」という言葉を使用している。

○43年11月：「永井第八課長」．〔(心理196)／本書p.135〕

○45年6月：「参謀本部八課も陸軍省軍務課と合併となった」．〔(心理236)／本書「2.5.5 機構縮小」〕

³⁸¹ 『昭和史の天皇3』p.168.

³⁸² 偕行文庫資料.

³⁸³ 『戦争のグラフィズム』p.201-202.

2.3.8 大東亜会議直前の開所式（11月）

「一八年十一月三日の佳節をトして神事にのっとり [接収した文化学院の中庭で] 開所式を挙行した。有末第二部長、永井第八課長以下第八課の幕僚を始め、職員全員参列してこの意義深い放送の前途を祝して冷酒の盃をあげた。そして命名して駿河台技術研究所（後に駿河台分室）とし、その仕事の内容を偽装した³⁸⁴。」（心理 196）

「大東亜共同宣言は一八年十一月五日六日の両日、大東亜独立国の代表がわが国会議事堂に参集して大東亜会議を開催し³⁸⁵、その際採択され中外に宣言されたものである。」（同上. 287）

○池田徳眞

・「11月3日、秋晴れの下、開所式が神式で執り行われた。第二部長有末少将および第八課長永井大佐、恒石少佐を含む第八課の参謀将校ら10名以上が参列した。所長の藤村氏はじめ当時15名ほどの文民所員のほとんども出席した。式が終了すると全員で写真撮影し、日本人がこうした場合通常するように冷酒とスルメで分室の門出を祝った。

参謀将校は全員戦闘帽を被り、肩章と日本刀を身に付けて日本陸軍の権威を示していた。列席者の中でもっとも有名なのは、東條将軍と極めて親密な有末少将。というのは、開戦の少し前に彼がローマで駐在武官をしていた時、日本、ドイツ、イタリア間の防共協定締結に尽力したからだ。陸軍将校の中には彼のことを、軍人ではなく政治家だと陰口をたたく者もあった。いずれにせよこの駿河台分室の開所式での彼は上機嫌で、参謀将校や藤村氏と大きな声で話していた。有末少将はとても幸せだった。なぜなら駿河台分室の開所式よりはるかに大きな楽しみがあったからだ。彼の心はすでに東條将軍が住む首相官邸に飛んでいる。というのは11月5、6の両日東京で開催される大東亜会議に参加するため、大東亜共栄圏の国々の代表が続々と羽田飛行場に到着しており、最初の事前会議が11月3日の午後3時から永田町の首相官邸で開催されるからだ。これは大東亜戦争の目的を世界に示す歴史的な会議である。しかし同時に、これには宣伝の要素も大いに含まれていた。日本陸軍において宣伝を担当する有末少将が、この企画で主要な役割を演ずる理由がそこにあった。」³⁸⁶

³⁸⁴ 「恒石少佐の説明では「毎日俘虜が出入りするでしょう。それゆえ、外部には技術を研究しているのだ、と言えよと思うのです」とのことであった。」。『日の丸アワー』p.28]

³⁸⁵ 「史上初のアジア・サミット」。[深田祐介. 黎明の世紀：大東亜会議とその主役たち. 文芸春秋, 1991, 帯]

³⁸⁶ 『駿河台分室物語【本編】』p.58.

・「この参謀本部駿河台分室というのは、正式の名称であるが、内部で働くわれわれは略して単に分室と呼んでいた。もっとも表札は「駿河台技術研究所」となっていた。これは偽名であるが、外部に公表した名前である。[中略]そして戦後アメリカ側では「参謀本部駿河台技術研究所」(The Surugadai Technical Institute of the General Staff Office)と呼ぶのは、あまりにも長くて言いにくいので、彼らは文化学院の文化をとって「文化キャンプ」と呼ぶようになった。そんなわけで、戦後ニューヨークで開かれたプロポー裁判の時には、法廷外でF B Iの検事と話している時には、検事もわれわれもすべて「文化キャンプ」と言っていたのだが、法廷内で正式に呼ぶ時には「参謀本部駿河台技術研究所」と言わなければならなかった。」³⁸⁷

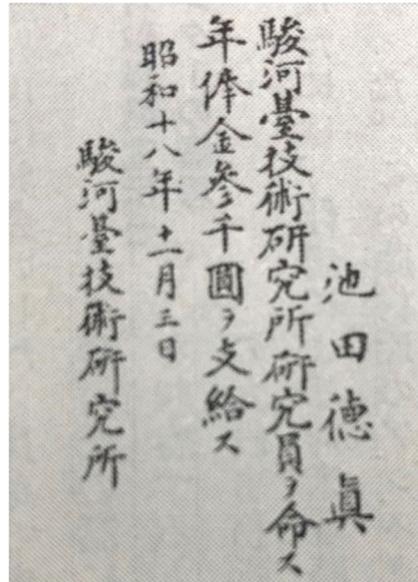


図 48 池田の辞令
出典：『日の丸アワー』 p.22.

³⁸⁷ 『日の丸アワー』 p.28-29.

関係者

「部外からは外務省の樺山資英、稲垣一吉、平沢和重、福島慎太郎、鶴見祐輔、前田多聞、木々高太郎の各氏や、同ラジオ室の小平利勝、牧秀司（囑託）、村山有などという人々もよく協力してくれた³⁸⁸。坂西志保女史などの助言も有難かった。捕虜が到着して駿河台に収容せられるまでには協力する人々の輪は次第に拡げられ、朽木、堂本、小島、渡辺、菱刈、宇野、早坂、その他の人々がこれに加わり、[村山有氏を除き³⁸⁹] 参謀本部有給囑託として宣伝業務に専念した。そして囑託となった人々は謀略放送が開始された一八年晩秋³⁹⁰には女子を含めて約三〇名内外の数に達した。」（心理 194）

○放送開始前後の主な増減

【職員】

- (1) 11月3日分室開設時・・・15人ぐらい³⁹¹
 - ・放送部：池田徳眞のみ
 - ・伝単部：「すでに「淡路町事務所」として数年間にわたって活動をしていたものが分室に吸収されたのであるから、主任の太田天橋氏を助けて、那須良輔君、松下井知夫君、長谷川中央君、林勝世君など、一流の漫画家、図案家がいた」
 - ・九段事務所からソ連専門家の勝野金政が企画部へ。
- (2) 「...十二月二日に日の丸アワー放送が開始され、約一週間たったとき、二世で軍属のバデイ・宇野君（一磨）が参加...」³⁹²
- (3) 「十二月十五日から一〇日間ぐらいのうちに、あい前後して新しく四人のスタッフになる四人の兵隊さんが前線の各地から呼び戻されて帰ってきた。それは、召集前は同盟通信社にいた渡辺忠恕君、伊藤忠雄君、田崎花馬君、それに外交官の小島大作君であった。それで、この時はじめて放送部という事務室をつくり、五人が机をならべて仕事をするようになった。」³⁹³

【捕虜】

³⁸⁸ ○資料「駿河台分室関係者」

○Wikipediaに戦時中の活動の記述がない場合がある。[資料「軍協力者の戦後」]

○「何事によらずPRに明け暮れる現代ならいざ知らず、一般には宣伝と言え、大売出しの時のチンドン屋位のものであった時代に、謀略宣伝専門業者なんてある訳もないから、こんな商売は誰にとっても初めてであったのだ。要領を得ないのは当然かも知れない。元来、宣伝などは大いに軽蔑していたお国柄だから、最初は、内証でこそこそやっていたが、戦況に手を焼いて、こそこそではおっつかなくなり、やっとな腰を入れる気になったのだろう。ところが武骨な軍では手に負えなくて、不本意ながら普段あまりつき合いの良くない文化人、芸能人を手当たり次第かり集めて、強引に軍に協力せよ、という事になった。」。[『猫のしっぽ』p.76]

³⁸⁹ (心理 194-195) / 本書. p.528. 脚注. 1283.

³⁹⁰ 放送開始は43年12月2日。(心理 204)

³⁹¹ 『日の丸アワー』p.31-32.から抜粋・引用. 以下同じ.

³⁹² 同上. p.31.

³⁹³ 同. p.58.

- (1) 12月1日：大森収容所から14名
- (2) 12月18日³⁹⁴：山王ホテルから「ゼロ・アワー」のカズンス少佐とインス大尉

盗聴器

「家族から捕虜宛への通信は万国赤十字を通じて行なわれていた。信書の秘密保持からいえば問題もあろうが、とにかくその通信内容を観察することも通敵防止の一参考となった。また捕虜の居室に盗聴器を備えることも検討はしたが、設置は取り止めた。」
(心理 214)

○池田徳眞

「事実、日本の参謀本部にも盗聴器の設置に長けた技術者がいた。その技術者は、13名の捕虜が大森収容所から移送される12月1日の4日前に駿河台分室に来た。その理由は池田が「所長の」藤村氏や「参謀本部から警備に派遣されていた」浜本中尉へ、盗聴器を設置して捕虜が話していることを聞きましょうと提案したからだ。それで浜本中尉がその男を連れて来て藤村氏と池田に紹介した。彼は中背で35歳くらい。勿論名前は明かさなかったし、軍人かどうか分からない。しかし協議はすぐ始まった。彼は配置図を注意深くチェックして言った。

「お望みなら、数日間で設置できます」

彼によると、最近では盗聴器を仕込んだドアの把手も利用が可能だそうだ。検討したが、以下の理由で設置は見送った。

- 1 藤村氏は公明正大な性格から、こういった卑劣なやりかたに頼らず捕虜放送が可能だと考えた
- 2 一方浜本中尉は、捕虜が何を企てようと力づくで服従させ、命じたとおり働かせれば十分だと主張した

こういった人たちがいたのでは、盗聴器を仕掛けることなど思いもよらなかった。その後、事態は変化した。目下の環境では、捕虜同士が秘密の情報交換をする危険が池田にとってより重要になった。あの時もっと強硬に主張して、捕虜の居住地区に秘密の機器を取り付けておくべきだったと後悔した。」³⁹⁵

○駿河台分室に収容された捕虜・ウィリアムズ

「当然われわれの間でこの日本のプロパガンダ作戦に協力すべきか否か熱のこもった論争が繰り広げられた。ジョン・プロボーは協力するしかないという側のリーダーで大勢はそちらに傾き、私は反対側の代表だった。われわれのいる部屋は隠しマイクで盗聴されているに違いないと思った。〔中略〕それで私の立場を明確にするため、すべての部屋を回り「どんなことがあっても放送に協力しないぞ」と大声で叫んだ。」³⁹⁶

³⁹⁴ 『駿河台分室物語【本編】』 p.128.

³⁹⁵ 同上. p.124.

³⁹⁶ Williams. 手紙.1991-04-06.

2.3.9 映画（11月）

「...南方軍から映画「風と共に去りぬ」を押収してある旨の報告を受けたので、「ファンタジヤ」とともにさっそく空輸して貰った³⁹⁷。天然色映画はまだ日本には来ていなかったのが大変珍しがられ、高貴な方々の所などアチコチで上映したことであった。しかしわれわれはこの南北戦争の悲惨な場面、とくに病院で呻吟する負傷兵の声などを録音してこれを反戦劇に組入れることが重要であった。対敵放送のゼロ・アワーのメンバーにも見せて、そんな場面を放送に利用した。」（心理 230）

○池田徳眞

「なお、私のアメリカ研究に非常に助けになったのは、企画部がその第二の仕事としておこなった、日本にはないはずの映画『風と共に去りぬ』（原作マーガレット・ミッチェル）を見せてくれたことである。このフィルムは、太平洋戦争の勃発までには日本には一本も入っていなかったのだが、日本軍がシンガポールで押収し、東京に送ったので、参謀本部第八課が全巻を一組もっていたのである。それゆえ、企画部と放送部 — といっても私一人なのだが — の人たちのために、わざわざ秘密の試写会を開いてくれた。場所は、東京銀座のある映画会社の試写室で、私も忙しい中を皆に遅れてタクシーで飛んでいった。

銀座の試写場での試写は、もう始まっていた。しかし、アメリカを知らない私にとっては、この戦争映画はなんとも言えない面白さであった。八〇年も前の話ではあるけれども、この合衆国の大事件であった南北戦争のようすを、四時間にわたって克明に写し出しているこの映画の中には、私の学ぶことが非常に多かった。もちろん、この時の私は、この映画を文学的または芸術的の観点から鑑賞しているのではない。ただアメリカの社会を知ろう、アメリカ人の気持をつかもう、そしてアメリカ人の弱点を探そうということで私は一所懸命になっていたのだ。

たとえば白人と黒人との気持である。黒人が白人の奴隷になって共同生活をしているような場面は、ヨーロッパでは見たことがなく、よく考えて見なければ理解できないものであった。また最初に「勝った勝った」と喜んでいた南部の人たちが、南軍が北軍にだんだん圧迫されて憂鬱になって行くようすが、なんだかその時の太平洋の戦況と日本国内の大衆の気持に似ているので、見ていていやな気がした。東京がアトランタのように、大火で焼かれては大変だなと不吉な予感がした。いずれにしても、私は感覚を研ぎすまして貪るようにこの映画を見たのであった。」³⁹⁸

³⁹⁷ ○ 恒石はフィルム空輸の時期を「一九四年春頃」としている。（心理 230）

○ 一方上記のとおり池田は日の丸アワー放送の準備中（43年秋）としている。

○ 資料「風と共に去りぬ」

³⁹⁸ 『日の丸アワー』p.35.

○東方社・多川精一

「……シンガポールで接収したというアメリカ映画「風と共に去りぬ」とディズニーの「ファンタジア」を、「対敵研究資料」という名目で参謀本部第八課から借りてきて、社の内部で映写したことがあった。

この二本は開戦前に制作されて、世界中に輸出されていたのだが、日本には敵性映画輸入禁止条例のため入っていなかった³⁹⁹。東方社の人たちは職業柄映画好きが多く、特にアメリカで少し前に開発された、テクニカラーという方式の総天然色映画は関心の的であった。それまで日本の白黒映画しか見たことのない私たちはただ呆然とするだけであった。」⁴⁰⁰

³⁹⁹ 「映画「風と共に去りぬ」の日本公開経緯について、以下のとおり回答いたします。

「朝日クロニクル 20 世紀 第 5 巻 冷戦下の独立」朝日新聞社 2000 年 p(1952)-3
『13 年待たされた日本公開-風と共に去りぬ』によると、アメリカで披露試写会が行われたのは 1939 年 12 月だが、映画法制定による外国映画の輸入制限と、その後の米映画商社の閉鎖により、この大作「風と共に去りぬ」は噂だけで日本の公開は実現しなかった。それだけに敗戦後のアメリカ映画解禁は「風と共に去りぬ」が公開されるかもという期待を映画ファンに抱かせたが、なかなか実現されず 1952 年 9 月に、完成から 13 年目にして日本で公開された。とありました。参考までに、昭和 13 (1938) 年公布、昭和 14 年に施行された「映画法」については「娯楽の戦前史」石川弘義／編著 東京書籍 1981 年 p210～に詳しくあります。終戦後すぐに公開されなかった理由については、GHQ の意向があったようです。「占領下の映画 解放と検閲」森話社 2009 年 p107～『公開されなかったアメリカ映画』に詳しくあります。」、[浜松市立中央図書館回答. 2023-03-24]

⁴⁰⁰ 『戦争のグラフィズム』 p.166-167.

2.3.10 仏印出張（11月）

（私はこの「対米放送開始直前の」もっとも繁忙で大切な時期に折悪しくも安南
<ベトナム>独立に伴う宣伝業務指導ならびに連絡のため、仏印サイゴンへ一二月下旬から一二月月上旬まで出張を命ぜられ⁴⁰¹不在であった）（心理 203）

⁴⁰¹ ○参謀本部直轄の対米放送開始直前の担当者海外出張であり、東条首相直々の指示か。
・43年「11.5 大東亜会議開催（日本・満州・タイ・フィリピン・ビルマ・中国汪兆銘政権の各代表参加）. 11.6 共同宣言を発表. [『近代日本総合年表』 p.336]
・大東亜会議にフランス領であるインドシナから出席者なし. [資料「仏印との関係」]
○45年1月にも仏印出張. [本書「2.5.1 仏印出張（1月）」]

2.3.11 日の丸アワー (12月)

捕虜の移送

「大森キャンプからの捕虜移送は、文化学院の門扉作製に手間どり一二月一日となった。この日はよく晴れた寒い北風の吹く朝であったが富士の霊峰は白雪に輝いていた。浜本中尉は池田氏とともに大森に向かい、かねて選定した一三名⁴⁰²を伴って駿河台に帰着したのは午前一一時三〇分であった。

いよいよ明二日からは本放送にはいらねばならぬ。このことは一週間も前から予告しつづけている。したがって今日はそのリハーサルをぜひともやっておく必要がある。そのため午後一時から四時まで第五スタジオを予約して朽木氏（池田実弟）がNHKへ先行して待っていた。

昼食を終わったのは午後二時。いよいよリハーサルに出発しようとする、三時から命令の伝達があるという。NHKにいる朽木氏からは矢の催促である。池田氏の焦心は極限に達した。ようやくにして命令伝達も終わりタクシーを拾って急行、辛うじて間に合った。」(心理 203)

○池田徳眞

「昭和十八年十一月三日に駿河台分室が開設され、一〇日ほどして「日の丸アワー放送」が十二月二日から開始されることが確定した。その時、浜本中尉が私に「何日に俘虜一三人を分室に収容したら、二日からの放送ができますか」と問われた。それゆえ、私は「一週間前に収容するようにお願いします」と答えた。私の考えでは、一三人の俘虜はもう確定しているのだし、旧文化学院の奥の校舎の二階が、将校寝室と下士官・兵卒寝室でその設営もだんだんできつつあったから、俘虜を一週間前に収容することはできるものと楽観していた。ところが、そうではなかった。放送開始八日ほど前になって、浜本中尉から「一週間前に収容することは、不可能になりました。ぎりぎりのところ、何日前に収容したら、放送を開始することができますか」との話である。それで、私は「なぜですか」と問い、「ぎりぎりのところ、まる三日前に来なければ放送はできません」と答えた。なんでもその理由は、旧文化学院のビルの下をくぐってはいるアーチのような入口に、大きな木の扉をつくる大工が見つからないためだとのことである⁴⁰³。」⁴⁰⁴

⁴⁰² 14名とも。[『駿河台分室物語【資料編】』p.283]

⁴⁰³ ○上記の「旧文化学院の奥の校舎の二階が、将校寝室と下士官・兵卒寝室でその設営もだんだんできつつあった」との同時に入りの扉も作業が進められるべきものが、手落ちか。

○恒石参謀は不在。[本書「2.3.10 仏印出張（11月）」]

○浜本の『青雲白雲』に記述なし

⁴⁰⁴ 『日の丸アワー』p.38-39.

小岩井少佐の「命令」

「午後三時捕虜達は校庭に整列し、日本側職員もまたその左側に並んだ。浜本、谷山両中尉を伴って校庭中央に進み出た小岩井⁴⁰⁵少佐は、威厳をもって次の命令を伝達した [中略]。

諸子はこの無用の戦いを停止させるために日本陸軍に協力すべし
もし協力を拒否するなら諸子の生命は保証の限りに非ず
一瞬校庭には緊張の空気が漲った。」(心理 203-204)

○池田徳眞

「三時になった。一三人の俘虜は、浜本中尉の指揮で、中庭の中央に南面して一列に整列した。この日、恒石参謀は仏印にいて留守であったので、小岩井光夫少佐が静かに俘虜の前に現われ、ポケットから命令書を取りだし、浜本中尉の号令で「気を付け」をしている俘虜に向かって、命令を下した⁴⁰⁶。

命令

- 一、汝等は、この無益なる戦争を終結させる為に、大日本帝国陸軍と協力せよ。
- 二、協力を拒みたる者は、その生命を保証せず⁴⁰⁷。

昭和十八年十二月一日

大日本帝国陸軍参謀総長杉山元

これを、森野正義君が通訳して叫んだ。」⁴⁰⁸

⁴⁰⁵ ○「…ニューギニア戦線から帰還後参謀本部付を経て、1945年(昭和20年)6月、第96師団 [濟州島] 参謀となり終戦を迎えた。」. [“小岩井光夫”. Wikipedia. (参照 2022-10-30)]

○陸軍大学校卒業生名簿に名前がなく、現地軍養成の参謀(※)か。

(※)「昭和十九年後半になると参謀要員の補充は益々困難となり、関東軍をはじめとして各現地軍参謀要員養成に関する通達を受け、主として師団参謀要員を三ヶ月を目途に教育して自軍の補充を行う措置が講ぜられた。」. [『陸軍大学校』 p.113]

⁴⁰⁶ ○恒石重嗣：「…放送を命令したのは私の本意ではなく私が公務のためサイゴンに出張不在のため部付将校(参謀にあらず)のK少佐が代理として申渡したもので放送の性質上強制は不相当ですので私が帰国直後に改めて賛否を問うた次第……」. [葉書. 1989-01-03]

○池田徳眞「……参謀総長の名前を読んだが、あれは偽命令。但し、[捕虜]本人たちには命令であることは間違いない。」. [DVD『池田徳眞氏の回想』]

⁴⁰⁷ 資料「小岩井少佐の「命令」翻訳」

⁴⁰⁸ 『日の丸アワー』 p.42-43.

リハーサル

「リハーサルに同行した捕虜はプロボー、ヘンショー、カルプフライシュの三名であった。池田氏はNHK南玄関からこの三名を伴って第五スタジオに急行した。そこは捕虜の放送だというので珍しがって約二〇名近い見学者が待っていた。彼等は一面この放送に興味もあったようだが、半面はたしてうまくやれるかという冷い眼をもって見守っている者も少なくなかった。」(心理 204)

○池田徳眞

「スタジオに先発で行っている朽木から、催促の電話がたびたびかかってくる。「一時から四時までということ、覚えているのか。四時以後は、他の放送があって絶対に使えないのだぞ。内閣情報局、JOAKの人たち二〇人ぐらいが、さっきから待っている。彼らは、明日から本当に放送ができるのかと知っている。本当に四時までに来られるのか」というような内容である。何しろ彼は昼頃から五、六回電話してきた。私からは「俘虜は到着したから、明日からかならず放送する。いま、三時に命令が出ると聞いた。それまでは、どうすることも出来ない。命令が終わったらすぐとんでいく」と言うほかなかった。[中略] 解散の号令とともに、私はカルプフライシュ中尉、ヘンショー海軍少尉、プロボー軍曹の三人のアメリカ人に「私についてこい」といい、急いで門をでて一五〇メートルメートルぐらいを走り、大通りの御茶の水駅の斜め前に出た。幸いじきに、タクシーの空車がきた。それに乗って、JOAKへと急いだ。車が日比谷交叉点にきた時に、私ははじめてこの対米放送のことを三人の俘虜に明かした。[中略] タクシーは、すぐJOAKの横の内玄関についた。それでいそぎ足で第五スタジオに入り、いきなり準備した原稿をカルプフライシュに渡し、マイクの前で読めといった。彼は放送の経験があるので、思ったより上手に読んだ。次にプロボーに読ませたが、これもまずまずの出来であったから、これなら行けると思った。このリハーサルを、内閣情報局やJOAKの人が二〇人ぐらい副調整室で見ているが、みんな好意的な目ではなかった。彼らはほんとうに参謀本部に明日から放送ができるのかな、という顔をしていた。この時の参謀本部とは、二人とも一生のあいだ一度も軍服にご縁のなかった池田兄弟のことなのだからお笑いである。というのは、この場所に二人の他には、参謀本部と駿河台分室からは誰も来ていなかった。なにしろこの日は、私の勢いがすさまじかったので、俘虜たちは何も言わずに命令に従った。私も朽木もほっとして、四時になったので俘虜たちを連れて駿河台へ引上げ、藤村所長に報告した。」⁴⁰⁹

⁴⁰⁹ 『日の丸アワー』 p.42-44.

放送開始

「十二月二日はついに来た。俘虜による対米謀略放送開始の日である。朝食の時、私は心が強く引き締るのをおぼえた。「さあ、今日からが私と俘虜との本当の勝負だ」と思った。なにしろ昨日は、俘虜たちがまごまごしているうちに命令が下り、J O A Kでリハーサルをしてしまった。すなわち、先制攻撃をかけたのだから、昨日のところは成功であった。しかし、今日から俘虜たちは、どんな反撃に出るだろうかと思いつつ、八時すこし前に分室にいった。いよいよ俘虜が来たので、分室の様相もぜんぜん変り、所員みんなが非常に活発になっていた。

私はすぐ俘虜の住いに行ったが、俘虜たちにはあまり変わった様子ではなかった。それゆえ、私は彼らに「昨夜はよく眠れたか」とか、「大森のキャンプと比べてどうか」とか、当りさわりのないことを聞きながら、神経の方は鋭敏にして八方に眼をくばって、俘虜の行動をうかがった。その時ヘンショーとプロボーとが、この日の放送のことについて相談にきた。それで「出発は午前十時三十分、昨日の三人が行くのだから準備せよ」と伝えた。

いよいよ、対敵放送の第一日の放送に行くことになった。藤村所長はじめ、所員みんなが「放送の成功を祈ります」と送り出してくれた。この頃の所員数は、二五人ぐらいになっていたと思う。十一時すこし前に、J O A Kの内玄関に到着し、第五スタジオこのあとわれわれは「五スタ」と呼んだ一に入った。弟の朽木が待っていた。彼はなにしろ、前には松竹少女歌劇の、そしてその時は日劇ダンシングチームの演出家なのだから、スタジオにはいれば水をえた魚でスイスイと泳ぎ回っていた。それで彼の演出で、一時の本番までにリハーサルを二度おこなった。

いよいよ、本番が近づいた。スタジオの中には、朽木と俘虜三人がはいった。カルプフライシュとプロボーは、副調整室の二重ガラス窓の前の机にマイクをはさんで坐り、朽木が壁ぎわにあるレコードのターンテーブルの前につき、ヘンショーがその横に坐って見習う態勢をとった。私は副調整室のディレクターの左隣に坐り、on the airのサインである赤ランプの前で、放送原稿を左手に持っていた。それは、もし俘虜が変なことを言ったらすぐにスイッチを切るためである。なにしろこの放送は生放送であり、そして相手は俘虜なのだから何をいい出すか分かったものではない。それゆえ、赤ランプの番人もしんどい仕事であった。

この最初の放送には、藤村所長と浜本中尉がスタジオに来られたし、内閣情報局とJ O A Kの人が一〇人ぐらい副調整室にいた。午後一時になった。ディレクターの五、四、三、二、一の声につづいて、私の前の赤ランプがついた。私は右手を上げた。そしてプロボーの第一声が流れた。“This is Hinomaru Hour, the voice of the Greater East Asia is heard, strong, determined, ever victorious. On with the program!”（これから、日の丸アワーを放送します。確固とした決意と勝利に満ちた、大東亜の声が聞えてきます。その番組は、次のようです）

この最初の言葉は、この後四ヵ月毎日使ったものであるが、これは放送開始の三週間ほど前に、大曲の江戸川アパート⁴¹⁰第五四号の私の住いで、森野君と朽木と私と三

⁴¹⁰ 「...東洋一を謳う近代的な装備を搭載した、鉄筋コンクリート造の最も新しい集合住宅だった。」。[本書「3.1.1 米軍の追及」]

人で作ったものである。あとから考えてみると、これも大東亜宣言の影響を受けていて勇ましくはあるが、謀略という点から見ると、あまり感心したものではなかった。しかし当時の私たちには、そんなことをゆっくり検討する余裕などなかった。いずれにしても、初日の放送はまずまずで終わった。終了後、翌日の「モンロー主義の宣言」(The Issue of Monroe Doctrine) について J O A K の人と打合せて、分室に帰った。」

411

⁴¹¹ 『日の丸アワー』 p.45-47.

2.3.12 駿河台分室訪問（12月）

「私が仏印出張を終えて駿河台に出向いたのは一二月一〇日であった。藤村所長以下約二十数名のスタッフの堅い団結と涙ぐましい努力によって捕虜放送は軌道に乗りつつあった。私は藤村、池田両氏から留守中のことについて大要次の報告を受けた。

- a 捕虜一三名を大森キャンプから移送した。
- b 日の丸アワーは予定どおり二日から始まっている。
- c 小岩井少佐の命令伝達の件。
- d 放送は無事に運んでいる。
- e 放送電波が数分間数回停止したこと。
- f 人手不足が宇野の参加によって解消されたこと。
- g 捕虜の態度ははまだ全面的信用はできないが大体協力的であること。

主任参謀としてこの機会に捕虜達に面接し、その協力を促す必要があったので、整列を命じた。ただ私の捕虜に臨む基本姿勢は命令ないしは脅迫によって協力を強いるものではなく、あくまでも合意によって彼等の自発的協力を求めんとするものであって、約三〇分間にわたって大要次のごとく誠意を披^(マツ)櫛して賛否を問うた。捕虜は一列に並び、その右側には藤村所長以下のスタッフが、左側には浜本、谷山両中尉と憲兵が整列していた。通訳には宇野氏が当たった。

日本と、米、英、蘭国との間に戦争が勃発したことは誠に不幸なことである。過去二年間の戦を省るとき双方共に甚大な損害を出している。この戦をさらに数年間続けるなら莫大な出血を見ることは明らかであって、それから得られるものは何物もない。したがってこの終わりなき闘争は償われることはないであろう。

一方何時の日会えるとも判らない家族を遠い海の彼方に残して捕虜となった諸君は、誠に気の毒に思う。私は心からこの無用の戦ができるだけ早く終わって、そして諸君が最愛の妻や両親兄弟姉妹と共に幸福な生活を取り戻すことを望んでやまない。それゆえこの無用の戦を止めるために主として米国国民に人道的見地から放送によって呼びかけたい。もし諸君がわれわれに協力してくれるなら諸君の安全を保証し、できるだけの待遇をしたい⁴¹²。しかし協力できない者は前に数歩出るように。

そして私は右から順に一人ずつ指さして賛否を問うた。」（心理 209-210）

⁴¹² 資料「捕虜の活用」

ウィリアムズの拒否事件

「一、二番はよかったが三番目にいた男は敢然と三步前へ出て拒否の態度を明示した。彼の名はフルフォード・ウィリアムズという。ギルバート諸島の中のマキン島のガバナーで、シビリヤンで、英国人である。私は内心驚きもし、また感動もした。しかしもし第四番目以下がこれにならって拒否したらいったいどうなるだろう。せつかく苦労して始めたばかりの謀略宣伝放送は、その根底からくつがえることとなる。私は毅然たる決意を示す必要を感じた。そこで帯びていた軍刀を釣環からはずして、左前方にツンと突っ立てた。祖父の愛用していた栗田口一竿子忠綱である。私はこの瞬間に全生命をかけた⁴¹³。そして祈りをこめて第四番目を指さした。幸いにして前に出なかった。第五番以下も同様であったので解散して彼等を二階の居室に入れた。それにしても断乎拒否したウィリアムズの勇氣には心から感激した⁴¹⁴。しかしながら二階の居室からは捕虜達が彼の処遇について見守っているのに気付いた。そこで私は軍刀の柄に手をかける気構えを見せた。浜本、谷山両中尉は私を慰留して事なきを得た。」

(心理 210)

○池田徳眞

「恒石少佐は、一人残ったウィリアムズに近づいて、静かに「お前は死んでもよいのか」と問うた。彼は「死ななければならなければ、仕方がない」と答えた。そのあまりにも傲慢な態度に、恒石少佐も堪忍袋の緒を切って、「斬っちゃうか」といって刀の吊り革をはずし刀に手をかけた。一瞬殺気がみなぎった。浜本中尉はびっくりして二人の中に割って入り、「参謀、ここを汚すのはやめて下さい」と言って止めた。それで、恒石少佐も引かないわけに行かなくなった。」⁴¹⁵

○ウィリアムズ

「私の育った環境や信条からすれば敵に協力するなど問題外だったから、躊躇なく一步前を出た。」(My whole life and upbringing had conditioned me to refuse to cooperate in anyway with the enemies of my country and without any thought or reasoning, I took a step forward.)⁴¹⁶

⁴¹³ 「少佐の色白の顔は蒼白となり、怒りに引きつった。」。『駿河台分室物語』【本編】p.114]

⁴¹⁴ ○「3月10日、高知県偕行会では〔中略〕⁴⁴恒石重嗣会長が挨拶の中で披露された英国人捕虜の熾烈な愛国心についての体験談に、一同深い感動を覚え...」。〔渡辺良臣。花だより：防大出身者も参加した高知県偕行会総会。偕行。1987, 437, p.52. (偕行社。1987-05)]

○池田徳眞：「僕の一生忘れられないシーンですなえ。ええ、忘れられないですよ。」。〔DVD『池田徳眞氏の回想』〕

○ヘンショー：「…ウィリアムズは実に興味深い、素晴らしく高い徳性を具そなえた男だ。文化キャンプで過ごした数年間を思い返す時、私は彼の揺るぎない性格に驚きを禁じ得ない。」。〔George H. Henshaw. 手紙。1992-2-18〕

⁴¹⁵ 『日の丸アワー』p.54-55.

⁴¹⁶ Williams. 手紙。1991-4-6.

「このジェスチュアは後々までよく効いたようである。ついで私は彼を別室に入れて、温情をもって再度協力を要請した⁴¹⁷。しかし「私には妻子もあるが⁴¹⁸たとえ殺されても祖国に対する反逆行為はできない」というのが彼の一貫した態度であったので、惜しい人物と思いつつも説得を諦めた。そこで元の大森収容所に帰すのはこの放送の内容十分知られているので不適當と思い、差当り憲兵司令部に留置し⁴¹⁹、その後大井川沿いの鉢山⁴²⁰へやった。」(心理 210-211)

○「[浜本中尉の制止で恒石少佐も引かないわけにはいかなくなり]そこで、浜本中尉は、ウィリアムズを大山憲兵に渡した。大山憲兵は、彼を東側の建物の壁に向って顔がほとんど壁に付くようにし、手を後ろに組ませて立たせ、二時間ほどして東京憲兵隊本部に連行した。」⁴²¹

○「私は憲兵隊本部の独房で一週間過ごした。環境の変化(vicissitudes)には戸惑ったが虐待されることはなく、抵抗の事実を知った看守からはむしろ敬意をもって取扱われた。」⁴²²

⁴¹⁷ 浜本純一：「恒石氏の「別室に於て再度要請…」はなし」.[手紙. 1988-08-17]

⁴¹⁸ ウィリアムズが Diana Hayter と結婚したのは 46 年 3 月 5 日. [Williams. 手紙. 1991-08-02]

⁴¹⁹ ○浜本純一：「憲兵隊はウィリアムズの引き取りを当然迷惑がったが、ウィリアムズを例え一日たりとも元の大森収容所へ帰すことが出来ない。[中略] 俘虜情報局で処理するまで憲兵隊で「預って貰った」のが事実。」.[手紙. 1988-08-17]

○「ウィリアムズを預ってくれと、二～三十分がかりで憲兵隊と [電話で] 交渉。」.[同上]

○「[憲兵隊は]「こちらで預かる理由がない」と渋るので、「そこを何とか頼む」と粘ると、「下宿屋じゃない」と言われた。」.[浜本純一. 電話. 1988 年 8 月ころ]

○恒石重嗣：「捕虜に対し小岩井少佐が命令する権限は無かったと思いますのでその命令違反を理由として逮捕する訳にはゆかないでしょう」.[手紙. 1988-7-28]

⁴²⁰ 大山勉憲兵が数日後、長野県南部の天竜川に沿った満島捕虜収容所へ護送した。[Williams. 手紙. 1991-06-01]

⁴²¹ 『日の丸アワー』 p.55.

⁴²² Williams. 手紙. 1991-04-06.

2.3.13 クリスマス（12月）

「一方文化キャンプにおいては〔クリスマスのために〕米、英、濠、蘭の国旗と日の丸で部屋を飾り、スープ、ミートシチュー、米、その他うまいものが豊富に提供された。日本人職員幹部もちろん同席した⁴²³。食後煙草の特配がありさらに米国から赤十字を通じて送られて来た救恤品の配布もあったので、彼等は驚きかつ喜んだ。これは過去三週間の彼等の協力に対する報償であって、私としては去る一二月一〇日の約束の一端を果たしたものである。〔中略〕元来捕虜には規定によって食糧、衣料、日用品、煙草等の数量が定められていて、それは大森収容所から宍倉氏が受取っていた。しかしながら文化キャンプの者はとくに対敵宣伝に従事する大切な戦力である。これを積極的有効に活用するには、それ相当の配慮を払わねばならぬ。〔中略〕文化キャンプ近隣の日本人⁴²⁴から捕虜優遇について文句が出ているという報告を受けた記憶がある。参謀本部内からも「優遇に過ぎるのではないか」との批判があることも仄聞した⁴²⁵。」（心理 222, 224）

○池田徳眞

「……二十四日の晩には、駿河台俘虜収容所のクリスマスの晩餐会をひらいた。〔中略〕晩餐のメニューは、スープ、ミートシチュー、お米のご飯、それにスウィーツであった。そして少量のタバコの特別配給とクリスマス・パッケージを与えた。これは、東京俘虜収容所から二人に一個の割合で送ってきたもので⁴²⁶、スイスの赤十字国際委員会の世話でアメリカから送られて来たものである。このメニューは、平時ならばなんでもない夕食だが、戦争のこの時点での俘虜の夕食としては最高であった。」⁴²⁷

○ウィリアムズ

・同じころ東京憲兵隊から長野県満島収容所に送られ、将校待遇を剥奪されてダム工事の重労働に従事させられていた⁴²⁸。
・「満島に到着後クリスマス用に赤十字の小包が配られ、1つの箱を〔寝台用の〕畳の両側にいる捕虜と三人で分けた。」⁴²⁹

⁴²³ 出席者の寄せ書きに恒石のサインはない。〔『駿河台分室物語【本編】』p.134.図4〕

⁴²⁴ ○「池田がもう1つ気付いたのは、収容所東側の壁に隣接した2軒の住宅の2階からこの〔駿河台分室の〕中庭が見下ろせることであった」。〔同上. p.94〕

○炊事室からの調理のにおいは隣家まで流れたことだろう。

⁴²⁵ 資料「捕虜の活用／捕虜への風当たり」

⁴²⁶ 「また、万国赤十字社から俘虜情報局に届けられる慰問袋も、一般捕虜将兵の倍額支給を受けさせることに成功した。」。〔『青雲白雲』p.103〕

⁴²⁷ 『日の丸アワー』p.65.

⁴²⁸ ○「戦後ウィリアムズは、〔命がけで放送協力を拒否するという〕この勇敢な行為のために英国政府から勲章をもらった。」。〔同上. p.55／名倉有一編. 横浜・山手 250 番館:1942年1月、マキン島から来た捕虜たちの記録. 私家版, 2014, p.201〕

○一方、放送に協力したプロポーは戦後反逆罪で起訴される。〔『日の丸アワー』p.157〕

⁴²⁹ 名倉有一編. 長野県・満島収容所：捕虜生活と解放の記録. 私家版, 2013, p.16.

2.4 1944 年

『恒石重嗣年譜』

2.4.1 東方社移転（1月）

○移転

「一九四四（昭和十九）年に入って米軍の侵攻はスピードを増し、既に中部太平洋の制海・制空権を握って、サイパンやグアムを狙っていた。こういう状況から本土空襲は時間の問題になった。強制疎開による建物の取壊し⁴³⁰や、学童疎開⁴³¹が決まったのは一月であった。東方社も住宅地の中の木造建築では、空襲にあったらひとたまりもなく燃えてしまう危険があるので、鉄筋コンクリートの建物を探して移転することになった。

総務部の経理担当だった国司羊之助が一九四四年一月からメモをつけはじめた手帳が最近出てきたが、それによれば、一月十五日に恒石少佐と総務部長の島香が主婦の友社を訪問している。これは東方社の移転先の物色に行ったのだと国司はいう⁴³²。しかしここは不調に終わり、最終的に決まったのは、九段坂下の野々宮写真館のビルだった。この建物は一、二階と地下を写真館が使い、三階以上は今でいうマンションであった。これは当時の日本における最高級の西洋風アパートで、外国人や上流文化人の



の住まいだった。かつて東方社の中心スタッフを初めて引き合わせた野島康三が、最近まで経営していた野々宮写真館の後に、総勢百人近くになった東方社が移転するのも何かの因縁であった⁴³³。

引っ越しは五月一日から三日間かけて行われた。」⁴³⁴

図 49 野々宮アパート正面外観

手前右側の建物. 1階が同アパート入口と野々宮写真館入口.
出典：新城敦. 昭和二十年の写真家たち. 昭和館紀要. 「昭和のくらし研究」No.14（2015年5月号）p.54.

⁴³⁰ 44年「1.26 内務省, 東京・名古屋に改正防空法による初の疎開命令（指定区域内の建築物強制取壊し）. 以後各都市で〈強制疎開〉実施. 作業に戦車も使用. [『近代日本総合年表』p.338]

⁴³¹ 43年12月10日「文部省, 学童の縁故疎開促進を発表」. [同上. p.336]

⁴³² ○駿河台分室に東方社の100名近いスタッフを収容するスペースはなく, 恒石は近隣で防火に注意が払われた主婦の友社を東方社および伝単部移転先として考えたと思われる.

○資料「主婦の友社」

⁴³³ 恒石は戦前この写真館を従弟と訪れたことがある：「僕の寫真帳には士官学校時代君の一高姿と共に東京野々宮で撮ったのと大學時代のものが残ってゐる。此れを見る度に何事かを僕に呼びかけている様だ」. [資料「『河村俊平追想録』／河村俊平の生涯と恒石」]

⁴³⁴ 『戦争のグラフィズム』p.218, 220.

2.4.2 中央公論（1月）

○「政治・経済・社会・文化全般にわたって時事問題をあつかうので、法的には新聞紙法が適用された。だから、総合雑誌は法的な名称ではなく、規制もない。ところが、昭和十九年（一九四四）一月、出版部門別整備がおこなわれ、突如として国家権力が介入してきて、暴力的に、総合雑誌を中央公論、公論、現代の三誌に限定した。軍官からもっとも睨まれていた中央公論が、極右雑誌として識者のひんしゆくを買っていた公論とともに、総合雑誌に残されたことは識者に奇異の感をあたえたい。しかし、これにはそれだけの理由があった。参謀本部のつよい意向が反映したのである。中央公論には、日中戦争になってからでも、蒋介石や毛沢東の文章が掲載されたし、日本国内の知中国派と目される人びと、たとえば細川嘉六、尾崎秀実、梨本祐平というような人びとの論策も載った。参謀本部としては、コミュニケーション・ルートとしての中央公論は、総合雑誌として存置されたいと、恒石重嗣少佐から報道部の前任将校に非公式にいつてきたそうである。審査会の席上、委員の秋山中佐は、参謀本部からかくかくの意向がつかえられたが、報道部としても異論はない。ご意見があれば承りたいといったそうである。つねづね中央公論を批判していた人びとからも意見をのべるものもなく、すんなり決まってしまったという。陸軍が口をきれば万事その通り決まるというサンプルとしてあえて紹介しておく。この論理からすれば改造も当然残されるべきであったが、中国にふるくからの読者を持ち、雑誌の名も知られているという意味で中央公論ということになったのではあるまいか。」⁴³⁵

○「もともと中央公論社の問題は陸軍の報道部からはじまったもので、わたしが最初に話をきいたのも秋山中佐だった関係から、しぜん秋山中佐と交渉をかさねることになった。秋山中佐は、最初するときにはやはり中央公論の自由主義的傾向を問題にしたが、あとではそういう話は出なかったし、中央公論は対外宣伝のうえからいっても必要だという意見だったから、存続させることについては話がしやすかった。このことは、報道部よりもはるかに有力な参謀本部第二部の恒石重嗣少佐もそういつていた。現に十八年十月号のスパス・チャンドラ・ポーズの特別寄稿となっている「印度は戦わん」も、松本慎一氏の「印度問題に現れた列強の戦争目的」も、参謀本部から、直接、編集部にまわってきた原稿であった。」⁴³⁶

○「[44年] 7.10 情報局, 中央公論社・改造社に自発的廃業を指示（両社月末解散）」

437

⁴³⁵ ○黒田秀俊. もの言えぬ時代. 図書出版社, 1986, p.53.

○黒田は42年10月から43年5月まで陸軍報道部の企画で南方占領地を視察。[資料「中央公論社員の南方占領地視察」]

○黒田は「早稲田大学政治経済科中退. 明治大学高等新聞研究科修了. 元「中央公論」編集長. 戦後は日本原水協常務理事。[『もの言えぬ時代』著者紹介]

⁴³⁶ 黒田秀俊. 昭和言論史への証言. 弘文堂, 1966, p.78. (フロンティア・ライブラリー)

⁴³⁷ 『近代日本総合年表』 p.338.

2.4.3 軍陣新聞（2月）

○「参謀本部駿河台分室で「日の丸アワー放送」をしていたときのある朝、恒石参謀が一枚のタブロイド版二ページの日本語新聞を持って来て、私に見せてくれた。手にとってみると、『軍陣新聞』第五十六号⁴³⁸とあった。私は、最初、どこかの前線の日本軍が発行している新聞だろうと思ったのだが、発行所を見ると、それはデリーである。おや、それではこれは、イギリスのつくったものだなと思った。」⁴³⁹

○「恒石少佐が言った。「これは、敵が作っている週刊新聞です。ビルマのわが方の前線に飛行機で毎週撒きに来るのですが、よく出来ていて感心しているのです」[中略]
「.....もしアメリカがこんなものを作って太平洋戦線の各戦場にばらまいたならばと思うと、ぞっとします。これは、日本軍の士気に、たしかに悪影響を及ぼすと思われるものです。これが、敵の武力のあまり強くない、ビルマ方面⁴⁴⁰で幸いです」[中略]
すると恒石少佐がこう言って笑った。「実は、この日本語放送の表⁴⁴¹の中にある波長の中で1本だけ確認ができません。ですからラジオ室の樺山氏と参謀本部内部の短波傍受室に、もし受信したら報告してくれと命じました。こんなことをするのは、軍陣新聞の記事に影響された証拠でしょうな？」⁴⁴²

⁴³⁸ 「軍陣新聞第56号」は未見だが44年1月27日発行と思われる。『秘録・謀略宣伝ビラ』p.104-117.などより編者推測]

⁴³⁹ 『プロパガンダ戦史』p.149.

⁴⁴⁰ 資料「ビルマの戦い」

⁴⁴¹ 本書. p.157.図51.

⁴⁴² 『駿河台分室物語【本編】』p.188, 190.

2.4.4 英文放送事前監査室（3月）

「海軍関係の戦況の放送で、英訳がまずかったため、敵側から揚足をとられ、NHKは海軍関係者から叱られたことがあった。それを動機としてNHK内に海外放送監査室を新設することとなり、陸軍代表として池田〔徳眞〕氏がこれに当たることとなった。」（心理 231）

開設理由

・「なぜ事前監査室を作ることになったのだろうか？ それには理由があった。戦争勃発以来東京のNHKが実施した敵国向けの放送は、事前に原稿の監査をしなかったため宣伝の観点からすると大変困った問題が起きてしまったからである。彼らのいくつかの不手際は以下のとおりである。

1 放送の中でルーズベルト大統領のことを、「ルーズベルトの足萎え」と言った人があったらしい。外務省が傍受するアメリカの短波放送で即座に反応があり、ちょうど大人が子供を諭すようにこう言っていた。

「昨日の東京のNHK放送がルーズベルト大統領のことを、ルーズベルトの足萎えと述べた。ルーズベルト大統領の政策を批判するのならともかく、いくら戦時中でもそういう個人的なことは言うものではないよ」これが各省連絡会議で問題になり、こんな意見が出た。

「武士道を誇りとしている日本人が、くだらない個人攻撃をするとは何事か！」その後調査が行われ、それを書いて放送した人は大目玉を食らう。実際それは宣伝の見地からして大失敗であった。

2 この事例は上記のものと似ている。オーストラリア向けの放送でオーストラリア人のことを「罪人の子」(son of convicts)と呼んだことが、後で知れた。池田はオーストラリアに行ったことがあるから、そのことについての真実を知っている。オーストラリアへ数万人の罪人が送られて来たのは事実である。しかし、その時代には女性がごく少なかったから、彼らは子孫を残すことは出来なかった。それで今のオーストラリア人は、ほとんどすべてが一八五〇年以後にゴールド・ラッシュで来た人々の子孫である。だから「罪人の子」という言葉は根拠がないだけでなく、オーストラリア人にもっとも忌み嫌われる。こんなことを言って、何の得があるのだ？ 実際、宣伝上の大きなマイナス以外の何ものでもない。放送をした人は当然後で叱責された。

国民の敵愾心をあおるために「鬼畜米英」⁴⁴³などという意味のない感情的な言葉を使った軍部（Army）により生じた当時の一般的風潮に振り回され、それらのアナウン

⁴⁴³ 「緒方竹虎情報局総裁の下で、猛烈な「米英鬼畜」キャンペーンが展開された。口火を切ったのは新聞で、一九四四（昭和一九）年八月四日付『朝日』は、一面上段にチューリッヒ発同盟電を掲載した。見出しは「見よ鬼畜米兵の残忍性 勇士の頭蓋骨冒瀆 太平洋戦線記念と弄ぶ」である。、『ラジオ・トウキョウⅢ』p.83]

サーは海外放送という立場を忘れて浅はかにも前述した2つの言葉を使ってしまったのだ。

- 3 これは日本側がニュースを放送した際の間違いである。大本営が発表した海戦のニュースで、アナウンサーはこう読んでしまった。

「わが海軍は、敵の戦艦1、航空母艦1、戦艦4を撃沈せり」

勿論最後の戦艦は誤りであり、「駆逐艦」とすべき誤植であった。実際の放送原稿でも「戦艦」となっていた。時を措かずアメリカ側は、翌日の放送で誤りを指摘して来た。「最近の日本の大本営発表は、ますます当てにならない。彼らは一昨日の海戦で3隻の米戦艦と砲火を交えたと発表した、米戦艦を5隻沈めたそうだ。おかしいではないか。これでは日本海軍は、海戦に参加していなかった戦艦まで沈めたことになるのでは？ 実際には米艦は1隻も沈められてはいない」

アメリカ側が「日本の大本営はウソつきだ」とすでに発表してしまったのだから、日本側で「あれは誤植だった」と言うには遅すぎた。このアメリカの放送文（radio script）を読んだ海軍は烈火の如く怒り、NHKに「2度と斯様な間違いは許さない」と厳重に抗議した。これが事前監査室創設につながっていく。

そんな訳で放送の事前監査を求める声が高まっていった。こうして幾分遅きに失したものの、一九四四年三月一日、陸海軍の代表が正式に参加する事前監査室がNHKビル6階に開設された。」⁴⁴⁴

・「昭和十九年三月一日から、私は内幸町の日本放送協会の六階の六〇二号室に新設された、「英文放送事前監査室」に、参謀本部代表として行くことになった。そこでは、内閣情報局から板橋並治君（戦後、日米会話学院の院長）、参謀本部から私、海軍軍令部から三増君、外務省から隈本君、大東亜省から甲斐君の五人が、大きな会議用のテーブルを囲んで、ニュースを除くこれから放送される原稿を片っぱしから読むのである。そして原稿は、放送二四時間前にこの部屋に持込まれてくるのだから、遊んでいるわけにはいかない。そしてこの部屋は情報局の所管で、板橋君が室長であったが、みんな各省部の嘱託であったから同類感があってすぐ親しくなり、分担して放送原稿を読むことに相談がまとまった。[中略] なにしろ、この部屋で放送するのが不相当と判断すれば、削除もするし、書き換えもするのであるから、その責任は重大であった。そして私一存で計りかねる場合には、恒石参謀に電話をした。このように、われわれは、悪くいえば海外放送を検閲する絶大の権限を持っていたから、放送関係者の間に誰言うとなく「恒石少佐が、J O A Kの中の一室にいて、放送を全面的に指導していた」という噂が流れた⁴⁴⁵のだが、それは嘘であった。じっさいには、恒石さんもその

⁴⁴⁴ 『駿河台分室物語【本編】』p.225-226.

⁴⁴⁵ ○恒石はソフトな放送が効果を上げると考えていた：「われわれのやった対敵放送は、東京ローズに代表されるように、全体としてソフトムードで、技術的にも洗練されていた、と自負している。」。『昭和史の天皇3』p.194]

○一方、それ以外の放送で「雄叫び調」のアナウンスをされたのではせつかくの苦心がぶちこわしになりかねず、規制する必要がある。

○しかし放送は軍の管轄ではなく、また軍の中でも「雄叫び調」を是とする空気が強かったから、恒石は海軍を巻きこんで慎重に事を運んだと推測する。

他の軍人も駿河台分室関係の人も、この部屋に見えたことは一度もなく、この部屋の「陸軍さん」は私一人であった。いったい、なぜこういう放送事前監査室を作ることになったかという、それには理由があった。それは、戦争勃発後ずっとJOAKから出た敵国向けの放送は、原稿の監査をしなかったために、この直前に重大な問題が二つ起きてしまった。その第一は、東京からの放送で、ルーズベルト大統領を呼ぶのに「ルーズベルトの足萎え」と言った人があったらしい。外務省のラジオ室で傍受した「ショートウェーブ・ニュース」に、アメリカからの放送として次のような文章が現われた。「昨日の東京の短波放送で、ルーズベルト大統領のことをルーズベルトの足萎えと呼んだが、ルーズベルト大統領の政策を非難するのならともかく、いくら戦時中でもそういう個人的なことは言うものではないよ」と、まるで大人が子供を諭すような調子で言ってきた。これが日本政府の各省連絡会議で大問題になり、「武士道を誇りとしている日本人が、内容のない個人誹謗をするとは何事か」という意見がでて、これを書いて放送した人を調べろ、そして「英文放送事前監査室」を急いで作れ、ということが決定されたのである。」⁴⁴⁶

	『心理作戦の回想』	『駿河台分室物語』	『日の丸アワー』
1.海軍戦果発表の誤り	○	○	
2.米大統領の肉体的欠陥を誹謗		○	○
3.オーストラリア人を中傷		○	○

図 52 英文放送事前監査室開設の理由

出典：『心理作戦の回想』p.231, 『駿河台分室物語【本編】』p.225-226, 『日の丸アワー』p.119-120.

論説委員室

「[44年] 三月一日、日本放送協会では、「論説委員室規程」が施行された。「本室ハ対外放送内容ノ充実ヲ図ル為国際局長ノ需メニ応ジ解説及講演ノ放送内容ニ関シ考案、審議又ハ執筆ヲ為ス [中略]「論説委員」のメンバーは明らかでないが、三月以降、海外放送の外国語の解説者として、次の人々が登場した（最所と満潮が国際局長）。

松井明、田付辰子、飯野紀元⁴⁴⁷、森村守雄、島内敏郎、最所フミ、森野正義、芝均平、満潮英雄、山手弘、森分謙一、中沢健、乾精末、坂西しほ [志保] 百々正雄の名がない。」⁴⁴⁸

⁴⁴⁶ 『日の丸アワー』p.118-120.

⁴⁴⁷ 訳書に『英國の宣傳秘密本部』がある。[本書「2.3.5 参謀長会議」]

⁴⁴⁸ 『ラジオ・トウキョウⅢ』p.33-34.

池田解任の経緯

「駿河台の放送前後から日夜寝食も忘れて精励し続けて来た彼としては、これからやりたい企画もたくさんあり、誠に心残りであったと思うけれども、諸種の事情から新任務につくこととなった。ここでは海軍、外務、情報局、大東亜省の代表者とともに英語のニュース⁴⁴⁹、解説その他の放送原稿を事前に点検して、必要があれば指導訂正をするのが仕事である。『東京ローズ』の本の中に「恒石はNHK局内に一部屋構えと武藤義雄海外局長を通じて各部門に指令を出し始めた」⁴⁵⁰とあるのは、右の監査室のことを指していると思われるが、私がNHKに常勤することはあり得べくもないことであるし、放送ばかりにかかわっておれるほどの時間的余裕も無かった。

池田氏の新任務への転出に先立ち、二月下旬から菱刈隆文氏が捕虜放送の主任となっていた。彼は陸軍士官学校を病氣中退（陸士第四十五期生）の後、同盟通信社にはいり、開戦後シンガポールにいた。父君は元関東軍司令官菱刈大将であり、当時なおご健在であった。」（心理 231）

○池田徳眞

・「昭和十九年二月十五日の朝、所長室に呼ばれ、藤村所長の前で恒石少佐から「二月十八日限りで放送主任をやめ、日本放送協会の中にできる新しい英文放送事前監査室に、参謀本部の代表として行って下さい」と命じられた。彼は理由など何も言わなかった。しばらくして、また藤村所長に呼ばれたが、こんどは所長一人であった。そして「日の丸アワー放送に批判があります。『二十日鼠と男たち』は評判が悪かった。また、先日の放送で、平和（peace）という言葉が三〇分のあいだに一五回出たが、陸軍の放送としては弱気で面白くありません」と、解任の理由らしいことを言われた。私が「後任は誰ですか」と聞いたら、「同盟通信の菱刈隆文君です」との答であった。私は「ああ、あの菱刈大将の息子か。それが理由だな」と思った。」⁴⁵¹

・「恒石少佐は池田に放送担当を解任することは告げたものの理由は何も言わず、弁明も求めなかった。しかし、藤村氏が後で池田を呼び、彼が解雇された理由を以下のように説明した。

- 1 全体としてあなたの宣伝方針（propaganda policy）に批判がある。
- 2 とりわけ『二十日鼠と男たち』に批判が集中している⁴⁵²。
- 3 先日の日の丸アワー放送で、「平和」という言葉が30分間に15回使われた。敵は陸軍がこの放送を実施していることを知っている。まるで陸軍が和平提案をしてい

⁴⁴⁹ 「…ニュースを除く」。[『日の丸アワー』 p.118]

⁴⁵⁰ 『東京ローズ』 p.64.

⁴⁵¹ 『日の丸アワー』 p.116-117.

⁴⁵² 池田は藤村所長の事前の忠告を無視した：「しかしながら前述したように二、三の人が「これは捕虜の娯楽です」と藤村氏に言ったようだ。藤村氏は率直な人なので池田を呼び、こう注意した。「『二十日鼠と男たち』の放送に関して、これこれの批判があなたに対して起きている。以後気を付なさい！」それに答えて池田は前述した理由を説明し、彼に頼んだ。「放送劇の1つくらいで批判しないでいただきたい。私はもっと露骨な正真正銘の反戦劇を、この後すぐ放送する予定です」。[『駿河台分室物語【本編】』 p.150]

るかのようで、当惑している⁴⁵³。

池田はこれら3点に付いて、すぐにこう考えた。

批判の1に付いては、その詳細が分からないので反論できない。批判2に付いては、恒石少佐やその他の人たちは『旅路の終り』や『死者を葬れ』といった反戦劇について何も知らないようだ。批判3で述べられた日の丸アワー放送の原稿の検閲については、最近は何人が事前に読んでいたのでその責めは池田のみが負うべきではない。しかし彼は恒石少佐がそのように決定した以上、説明しても意味がないと思った。だから藤村氏に反論せず、「そうですか」とだけ述べた。

しかし心中穏やかではなかった。最初の指摘は、日本陸軍の戦時宣伝放送への理解の欠如である。参謀本部は、日の丸アワーのことを反戦原稿を次から次へと放送する一種の伝単機関銃 (leaflet machinegun) として使うことを望んでいるのかも知れない。しかしながら飛行機で敵にばら撒く伝単と、何千マイルも離れた場所から発信される放送とでは本質的に異なる。伝単ではあるいは当を得ているかも知れないどぎつい表現は、放送では絶対避けなければならない。なぜなら聴取者は我慢できないと思えば、いつでもラジオのスイッチを切ることができるからだ。ゆえに [『ファウスト』の] メフィストフェレスのように、甘い言葉のカプセルに入れた毒液を敵の耳に注ぐ必要がある。戦局が次第に不利に傾き、参謀本部が性急になるのは理解できる。しかしながら戦時宣伝放送は万能薬ではないのだから、それ単独で敗戦への潮流を変化させることは不可能だし食い止めることもできない。単純な陸軍将校は、東南アジア諸国の文盲の原住民を狙った伝単作戦はよく理解していたようだが、戦時宣伝として放送を用いる先進的な戦略は実際には分かっていたようだ。

2つ目として指摘すべきなのは、日本陸軍の捕虜放送に対する無理解である。

「捕虜なんか殺すぞと脅し、個性など無視して牛か馬のように扱き使うに限る」

これが日本陸軍の捕虜に対する考え方らしい。こんなことでは本国の聴取者の心を打つような、真に効果的な放送などできない。脅迫も必要かも知れない。しかし日本側として真の目的は、捕虜が日本に対する敵意を失い、ついには反戦思想を抱くようにさせることだ。池田はそれまでの4カ月間、どうしたら彼らの心をつかんで日本側を信用させ、宣伝放送に協力させる方法を見付けられるのかを考え、必死の努力を重ねて来た。そのために個々の捕虜と真剣に触れ合い、人間対人間の基礎の上で必死に心理戦を展開し、彼らをうまく味方に引き入れようと全力を尽くした。クイレに民間病院で手術を受けさせてしばらく入院させたのは、人道主義的な高貴な考えに促され

⁴⁵³ 45年夏、恒石中佐から駿河台分室の事実上の監督指導を引き継いだ一二三少佐（陸軍中野学校出身）：「関係各部課の承認をとりつける過程で、軍中枢部の軍人は、全く虚勢を張っているとしかいいようのない、いわゆる強がり屋の集団であった。少しでも、弱気というか、和平とか戦争中止に関係するような字句があれば即座に訂正した。謀略放送というのは、もっと深みのある柔軟性が必要で、速効性ではなく遅効性のものが大きな成果を挙げ得るものと信じていたので、戦局の重大さを思い眠れない日が続いた。」 [『陸軍中野学校』 p.141]

たからではなく、それが捕虜を心服させるいい機会だと思い恒石少佐を強引に口説いたのであった⁴⁵⁴。陸軍将校にとってこうした池田の努力は一文の価値もなかった。だから「ありがとう」の言葉すらなく、彼を解雇したのだ⁴⁵⁵。

3番目に指摘するなら、池田と弟の朽木が信奉し、「謀略派」と呼んだこのイギリスの冷静な宣伝態度を結局誰も理解しなかったことだ。

「宣伝とは、他人に影響をあたえるように、物事を陳述することである」

この言葉が意味する考え方は、誰でも容易に理解できる。しかし新聞とか情報とかいった世界に足を踏み入れた者は、この単純な言葉を理解するのがとても難しくなるようだ。振り返ってみると大戦中東京で戦時宣伝戦に従事したほとんどすべての人々は、池田や朽木のような異分子を除き、新聞や情報に関わっていた。そして陸軍将校は少なからず彼らの考え方や見方に影響されていた。多分そのせいで池田がイギリスの宣伝者から学び、提唱していた「宣伝戦の決着」(propaganda showdown)という考え方には誰も賛成しなかった。池田はなぜ日本の報道関係者(newsman)はイギリスの宣伝者たち、ビーヴァブルック卿(Lord Beaverbrook)・ノースクリフ卿(Lord Northcliffe)や著名なジャーナリストが得意とする、穏やかだがおそろしく効果的な謀略派の宣伝態度を理解できないのか不思議だった⁴⁵⁶。この話になると朽木はいつもこう言ったものだ。「日本人がイギリスのこうした宣伝態度を理解できないのも無理はない。英語を話すアメリカ人でさえ、ほとんど分かっていないんだから」

結局この問題は池田の解雇という形で公になったのである。突然免職となった訳だが、池田は陸軍がすることに、特に大戦中とあっては驚いている余裕はなかった。

⁴⁵⁴ 「小出博士は、クイレの腕を見るなり「これはいかん。今日すぐ手術しなければ駄目だ」と言われた。それで所長室で小出先生を囲んで、藤村所長と浜本中尉と私が協議した。その結果、俘虜は品川の陸軍病院に入院させなければならないということと、入院させる手続きに二日かかり、明後日でなければ絶対に入院できないということが判明した。小出先生は「それは絶対に困る」と言われる。そこで私が「明後日まで放っておいたら、どうなりますか」と問うたら、「九分通り左腕を切断することになる。もっと悪化すると生命の危険もある」とのことである。それで藤村所長も心配され、今日の午後順天堂病院で手術できないか、という話になった。それで、私が参謀本部の恒石少佐に電話で許可を求めた。恒石少佐は「ほかに方法はありませんか」と問われ、「よいでしょう」と同意された。」

『日の丸アワー』p.82]

⁴⁵⁵ ○「駿河台分室所員という池田の地位は新しい任務についてもそのままであったから、週に1度くらい後任者の邪魔にならない頻度で事務室へ顔を出した。」[『駿河台分室物語【本編】』p.230]

○「池田は放送の仕事を離れてNHKの英文放送事前監査室へ行くことになってから、市ヶ谷の大本営つまり参謀本部へ毎朝通った。」[同上. p.273]

○一二三大佐の依頼で、「……[45年]六月十五日から、また元の俘虜放送の主任に帰ってきた。」[『日の丸アワー』p.133]

⁴⁵⁶ ○恒石は池田と同様英国式宣伝を評価していた。

・本書「2.3.5 参謀長会議」

・「各国の放送の中で[BBCが]一番信用が置けた。あまり出鱈目を言わない。」

[DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』]

しかし彼は物事の表面しか見ず、性急に下した結論をいきなり実行する浅はかな陸軍将校たちにはうんざりした。」⁴⁵⁷

慰労旅行

「二月十八日限りで分室の放送部主任をやめて、次の英文放送事前監査室が始まるまでには一〇日あった。それで考えてみると疲れてはいるし、しばらく休みたいと思って十九日は一日家にいたが、二十日にぶらりと分室に行ってみると、恒石少佐の伝言として藤村所長から「英文放送事前監査室は、三月一日から開設されるのだからまだ八日ある。それまでの間に山口源等大尉（中野学校出身）と外務省ラジオ室の牧秀司君の三人で九州の俘虜収容所の視察に行ってきた。そして山口大尉は各収容所で、新番組ポストマンズ・コールについて連絡をするが、あなたと牧君には特に任務はない」」とのことであった。

なにしろ、戦争中の軍人ほどせっかちな者はない。翌日すぐ出発しろというので、三人一山口大尉は軍服一は翌日の夕方、東京発の急行列車に乗って、九州の福岡市に向って出発した。汽車の二等はあまり混んでいなかったから、三人は向い合って坐り、うつらうつらと一夜を過ぎた。夜が明けて、久し振りに見る日本の都市と農村の姿は疲れていた。二年前「勝った勝った」と喜び、「万歳万歳」と出征兵士を送っていた活気に溢れていた鉄道沿線の姿とは、打って変わった陰鬱なものになっていた。

車中の乗客にも明るい様子などは少しもなく、物資不足と食糧難という戦争の重圧に押されて、飢えと戦いながら生きている暗い顔、顔、顔が並んでいた。ことにお米の配給がだんだん窮屈になって来たので、大きな駅で売っている弁当にも米はぜんぜんなく、それに代るまことにおいしくない代用食が売られていた。当時はまだ、特急も走っていたけれども、普通急行列車で行ったので、東京、福岡間が二六時間かかり、そのあいだ自宅から持っていった握り飯とこの代用食の駅弁当を食べながら我慢していなければならなかった。

福岡に着いて、三人は旅館に落ち着いた。当時の福岡は、人口三五万人の古い城下町だから、町中を流れる小さい川を見下すこの旅館にも、東京では見られない日本的情緒が漂っていた。夕食のとき宿では、この町の名物である「鳥の水炊き」をご馳走してくれた。この水炊きを食べ、日本酒を飲んだ時には、東京からの車中の食事があまりひどかったのも、三人は甦る思いがした。宿の女中さんも軍人かいるので、なかなかサービスがよかった。ことに私はここ数ヶ月無我夢中で働いていたので、こんな情緒もこんなご馳走も忘れていたから、ことのほか楽しくお酒のおいしさが腹の底までしみわたる思いであった。ご飯の量が少ないということを除けば、戦争のことなどはどこにも考えられないような、豊かな楽しい晩餐であった。この時はじめて恒石少佐が慰労のために、われわれを旅行に出してくれたのだということが分かった。⁴⁵⁸

⁴⁵⁷ 『駿河台分室物語【本編】』p.202-204.

⁴⁵⁸ 『日の丸アワー』p.123-125.

2.4.5 インパール作戦（3月～7月）

「インドの一角に進攻してインド独立の仮政府を樹立することは、対インド工作上有効なる措置であり、さらに北ビルマの防衛、援蒋ルート遮断の見地からも望ましいことであった。このインパール作戦は昭和一七年頃から懸案となっていたが、一八年三月牟田口廉也中將が第十五軍司令官となり、強硬に本作戦の必要性を強調するにおよび、論議の末ついに一九年一月大本營はその決行を許可した。[中略] 彼 [チャンドラボース] は日本軍と提携して進撃し、祖国の地に「自由印度仮政府」を樹立し反英独立の拠点たらしむることを念願したのであるが戦勢利あらず敗退する日本軍と運命を共にせざるを得なかった。当時インド国民軍を直接支援したのは光機関であって、機関長は元駐独武官でボースの日本行きを策した山本敏大佐であった。これより先、F機関はシンガポール陥落後発展的解消し、岩畔機関となり、さらに光機関に衣替えしていた。[中略]

また余談ではあるが、インパール作戦に関する大本營報道部の新聞指導について注文をつけた思い出がある。それは本作戦は元来攻略的な意味を有し、かつ、敵の制空権下に軽装備の兵力をもって、三、〇〇〇メートル以上の峻険なる山系を突破して補給なき戦を続行して勝利を収めることは、常識的にみてまず困難と思われた。そして実体を伴わない大袈裟な報道は逆効果が大きいので、私は「インパール攻略の目途がたつまでは本作戦に関する記事は控え目に扱う」意味の文書を有末第二部長の決裁を受けて報道部に送達した。報道部はこの主旨に従って新聞指導を行なったので、本作戦に関する新聞記事の活字は比較的小さかった。

打続く戦局不振⁴⁵⁹に焦慮していたであろう東條首相は、本作戦をもって国民の志気作興あるいは東條内閣への信頼挽回の意図もあったと思われ、この消極的扱いにははなはだ不満であった⁴⁶⁰。有末第二部長および報道部長は夜半再三呼出しを受け叱られたようである。当時東條大將は首相のほか陸軍大臣のみならず参謀総長まで兼職されていたので、統帥部に属する者としてその命令に抗することはできなかった。そこで従来の方針を一擲して大々的報道に切り換えたのであったが、たちまちにしてわが軍は攻撃頓挫し、やがて多数の戦傷病者を戦場に残し戦車の猛追と熾烈なる砲爆撃下、敵側の宣伝ビラ⁴⁶¹に悩まされつつ悲惨なる敗走を続けなければならなくなり、報道部としてもその後の記事指導に困惑したことであった。」（心理 102-105）

「..... インドで印刷された邦字新聞（軍陣新聞⁴⁶²）などが、敗退するわが軍に撒布された。」（同上. 374）

⁴⁵⁹ 43年「11.25 [マキン・タラワ] 両島守備隊 5400人玉砕」、44年「2.6. [クエゼリン・ルオット] 両島守備隊 6800人玉砕」、「2.17 米機動部隊、トラック島空襲」。『近代日本総合年表』p.336, 338]

⁴⁶⁰ 資料「竹槍事件」

⁴⁶¹ 本書「2.4.3 軍陣新聞」

⁴⁶² 資料「岡繁樹」

2.4.6 対米放送再編（4月）

「ところで「日の丸アワー」は日本色が強過ぎる⁴⁶³ので、その名前の変更についてはかねて池田氏と検討中であったが、いまだ決定をみていなかった。駿河台捕虜の放送は捕虜自身で書いた原稿（もちろん内面指導は日本側で行なった）を彼等が放送する立場をとった⁴⁶⁴もので、開始初期のように日本側原稿を彼等が放送するものではなかった。すなわち「自由アメリカ」的立場で放送するので、余り日本的カラーを強く出すことは好ましくなかった。そこで人道的見地から戦争を否定して厭戦的気運を醸成する意味からヒューマニティコールズ（人道の呼びかけ）と改めた。放送内容は従来やって来たものと大差はなかった。また放送時間を別に三〇分追加して「ポストマンコールズ」という番組を新設した。一九年四月一日からである。したがって捕虜放送は午後一時から合計一時間となり、夜間さらにこれを再放送した。「ヒューマニティコールズ」は字のごとく人道的立場から戦争を否定し、「死」の恐怖と戦争の無意味なことを解説するのが本旨である。日本人が呼びかけるのではなく、この戦争で現実に関戦して来た捕虜達が生死の関頭に立って得た結論をせつせつと訴えて、米国民、とくに遺家族や婦人層に反戦気運を盛り上げようとするものである。米軍がガ島の奪回、ミッドウェー戦以来、作戦の主導権を握ったことは事実であるが、東京への道ははるかに遠くかつ険しかった。そこにはサイパンあり、比島あり、硫黄島、沖縄ありで、忠勇なるわが陸海空将兵の決死の戦いは彼等に甚大なる出血を強要することは必至であった。由来日本人は死を軽視する傾向があったが、米人はこれに反して生命を極度に尊重した。しかもその出血は出征兵士の家族にとってはかけがえのない夫であり、兄弟であり、あるいは恋人であり、また一家の柱である人の犠牲によって流されるのである。開戦以来主要戦場における米軍の人的損害については先に述べたところであるが、要はこの損害、とくに取り返しのできない「死」という問題に焦点を絞って総ての事象をこれに帰納するごとくあらゆる角度から終戦まで放送し続けた⁴⁶⁵。そしてこの放送に変化や新味をもたせるために反戦劇や新たに獲得した捕虜の体験⁴⁶⁶などを活用するに努めた。」（心理 231-233）

⁴⁶³ ○「これは、かねがね恒石少佐が言っておられたことで、「日の丸アワー」は強がり宣伝で謀略性に乏しいからであった。」。『日の丸アワー』p.117]

○「...如何ニ興奮ヲ感シ様トモ外国語ノ放送ニ於テハ「威厳」ト慎ミ（控エ目）カ合言葉デアル事ヲ忘レヌ事」。[本書「2.2.17 捕虜のアドバイス」]

⁴⁶⁴ 「...時ニハ大東亜圏各地ノ知識階級ニ属スル人士ヲシテ自発的ニ放送セシムルヲ可トスル」。[同上]

⁴⁶⁵ 「凡ソ「ニュース」解説（通信）ニハ「テーマ」カナケレハナラヌ（※）.一或ハ二ノ広い意味ノ思想カナケレハナラヌ.而シテ総テハ此ノ「テーマ」ニ基イテ演繹サレネハナラヌ.日本カラノ放送ニハ論議ニカヲ与ヘル基礎トナルヘキ此ノ「テーマ」カ混乱シテ居ル事カ少クナイ」。[同] （※）例：カトリック教会の朝のラジオ番組「心のともしび」

⁴⁶⁶ 資料「捕虜の訊問」

2.4.7 遠乗会（4月）

「...駐日外国武官やその家族に対して、映画会や野外騎乗などにより親善を深め、対日信頼を高めることにも留意した。」（心理 157）

○浜本純一

「昭和十九年三月末、私は結婚を機に「駿河台」監督将校の任を、中野学校で一期先輩に当たる山口源等大尉と交代して貰った。[中略]

さて、この年の四月、大本営陸軍部では独伊⁴⁶⁷など同盟国の駐在武官十数名を招いて東京郊外砧（きぬた）の東宝⁴⁶⁸撮影所まで遠乗会を催した。この集いは多分に宣伝的效果を狙いとした催しであったため、恒石参謀が幹事役を承り、私もその補佐役を勤めた。東宝撮影所では昼食時のアトラクションとして、高峰秀子⁴⁶⁹が「めんこい子馬」を踊って喝采を博したことをいまでも覚えている。⁴⁷⁰



図 53 高峰秀子
撮影時期：1940年代後半。
出典：Wikimedia Commons

⁴⁶⁷ イタリア研究者からの回答：「[同氏のローマ留学中の知人の情報引用] Corriere della Sera 紙の1944年4月16日1面に、『三国同盟委員会、昨日東京にて開催』という記事があり、その中でイタリア側の外務省特使として「プリンチピーニ大佐」col. Principini という人物の名前が挙げられていました。この名前を調査の起点にできるかもしれません。

[引用おわり] オメロ・プリンチピーニは、南京にいたところイタリア休戦時に東京に連れてこられ、[ドイツの傀儡政権であるイタリア社会共和国]^(ママ)を日本で代表するようになった人です。よく出てきます。そして常に「大佐」と呼ばれています。だから”武官”ととられる可能性もあるでしょう。]. [Eメール. 2020-03-14]

⁴⁶⁸ 資料「東宝」

⁴⁶⁹ 高峰 秀子（たかみね ひでこ、1924年3月27日 - 2010年12月28日）は、日本の女優、歌手、エッセイスト。1937年（昭和12年）4月に御茶ノ水の文化学院に入学。仕事の忙しさから登校は月に2、3日程度となり、担任教師の河崎なつから「このさい、学校をとるか、仕事をとるかはっきり決めてほしい」と言われ、入学1年半にして退学を余儀なくされた。[“高峰秀子”. Wikipedia. から抜粋. (参照 2022-12-21)]

⁴⁷⁰ 『青雲白雲』p.116.

2.4.8 東方社の外地撮影（7月）

華北

「写真部員の大陸や南方占領地への撮影出張は、一九四四（昭和十九）年にも引続き行われた。菊池俊吉、関口満紀の両名⁴⁷¹が、七月二日に華北に向かって出発したことが国司メモに記されている。しかし翌三日に菊池の実家から召集令状が来たとの連絡が入り、急遽電話で下関の憲兵隊に連絡して、乗船寸前の菊池をつかまえて帰京させた。当時の日本の男子にとって召集令状は絶対であって、出頭しなかったり遅れたりしたら、たちまち憲兵隊や警察の追及するところとなり、草の根を分けても探し出されて逮捕投獄されたのである。

菊池は故郷の岩手、東京、さらに入隊先の金沢と駆け回り、ここでやっと参謀本部からの召集解除の命令を受けとって、再度東京に戻った。しかし休む間もなく、先発した関口の後を追って華北へ向けて出発したのだった。菊池はこの後満州に入り、ハイラル、熱河方面で蒙古人の生活やラマ廟の祭りを取材した。また関東軍が南方に転出した後、手薄になった満州を防衛する必要から増強されていた現地人の満州国軍も取材した。〔中略〕菊池は十月末、参謀本部の恒石少佐から直接の電話で帰還命令が出て⁴⁷²、四カ月ぶりに東京に戻った。⁴⁷³

南方

「菊池らに続いて七月八日に、大木〔実〕、林重男の二人⁴⁷⁴が南方地域に向けて出発している。この年の六月には、すでに米軍はサイパン島に上陸し、激戦が行われていた。太平洋の制海権はほとんど米軍に握られていて、米海軍の機動部隊が随所に出没していたときである。南方への空路、海路ともに非常に危険であった。このときは参謀本部所属の軍属の身分で、各務ヶ原かがみの陸軍飛行場から、補充のためにフィリピンへ運ぶ輸送機に便乗できることになった。途中、那覇、基隆キールンで給油をして、ルソン島のクラーク・フィールド飛行場に無事着くことができた。

⁴⁷¹ 撮影写真と解説. [井上祐子編. 秘蔵写真 200 枚でたどるアジア・太平洋戦争：東方社が写した日本と大東亜共栄圏. みずき書林, 2018, p.171-179]

⁴⁷² 「満州で一人、あの時は手を広げすぎちゃいましてね。十月に入っても、頼んであったところを回りきらないわけですよ。弱ったなあって思って。そしたら東京から一参謀本部の恒石（重嗣）少佐から電話がかかってきましてね。もう撮影は終わらんなくちゃいけない、帰ってこいって言うわけですよ。その時、東京から新京（現・長春）まで、電話ってよく聞こえるものだなと感心しましてね。ほんと、隣と話してるみたいなんですよ。軍用電話ですから。しかし、十月ともなるともう冬ですから、真夏の服装で行ってたんで震えあがりましたねえ。」 [菊池俊吉. ライカ、『フロント』、東方社写真部『FRONT 復刻版：解説 II』 p.14.]

⁴⁷³ 『戦争のグラフィズム』 p.222-223.

⁴⁷⁴ 『秘蔵写真 200 枚でたどるアジア・太平洋戦争』 p.126-144.

このころはまだ日本軍も、新しい飛行機を盛んに南方戦線に送っていたが、飛行機そのものが粗製乱造の欠陥機である上、輸送にあたる操縦士が未熟なために、海軍の「紫電改」などという新鋭機が、林のしている前で次々に着陸に失敗して破損したという。

二人はこの後サイゴンに渡り、当時のフランス領インドシナ、今のベトナムを取材した。林はここで Deng 熱という風土病にかかり、高熱で一ヶ月ほど寝込む。大木はその間にハノイやユエを取材して回った。ユエでは中島健蔵から紹介されたフランス文学者の小松清に会って、安南独立運動のアジトなどに案内してもらい取材した。小松は中島と同様、軍に徴用されてハノイの宣伝班にいたが、ここで現地民の独立運動にかかわり、ベトナム独立のために奔走した。そのため、帰国したのは戦後の一九四六（昭和二十一）年になってからであった。

大木らはこの後、陸路を鉄道でバンコクに行き、さらにマレー半島を縦断、昭南（シンガポール）まで、果物ばかり食べながらの一週間がかりの鉄道旅行を強行した。昭南では英国から接収したカセイホテルに南方総軍の報道室があり、召集されてここにきていた風野〔晴男〕に出会った。風野は大尉に昇進して報道部にいた。またこの最上階には、報道班員として徴用されていた小津安二郎がいた。彼は積極的には何も仕事はせずに、毎日屋上で空ばかり眺めて暮らしていたという。

大木、林の二人は一九四四年の暮れ近く、帰還命令が出て半年ぶりに日本に戻るようになった。しかしこの間に戦況は加速度的に悪化していたのである。米軍はフィリピンに上陸し、巨大戦艦「武蔵」は撃沈されて日本海軍は壊滅状態だった。神風特別攻撃隊が編成され、特攻攻撃が始まっていた。二人が帰還しようとする道筋は、まさに主戦場になっていたのであった。しかし幸運にも補充機の操縦士を送り返す便に乗り込むことができ、昭南―サイゴン―広東―台湾を経由して、命からがら十二月半ばの福岡板付飛行場にたどり着いた。このころ本土では、サイパンからの B-29 による偵察⁴⁷⁵と空襲が始まっていて、空襲警報が頻繁に発令され、帰京する列車はそのたびに止まった。南方帰りの夏姿では初冬の内地の気候は寒く、ふるえながら東方社に戻ったのは、年の暮れも間近い十九日であった。

この年の外地取材は、一年前のような安穏なものではなかった。

しかし、こうして写真部員が命がけて撮影した一九四四年後半のフィルムは、そのころから急速に戦況が悪化していったために、ほとんど使われることなく写真部のネガ庫に眠ったまま敗戦を迎えてしまったのである。⁴⁷⁶

⁴⁷⁵ 本書「2.4.12 B29 東京初偵察」

⁴⁷⁶ 『戦争のグラフィズム』 p.223, 227-228.

2.4.9 「戦争指導の大綱」(8月)

「昭和一九年八月一九日、最高戦争指導会議⁴⁷⁷において決定した、今後採るべき「戦争指導の大綱」中、対外施策については次のごとくであった。[中略]

とくに対敵宣伝謀略については、

一貫せる方針の下に組織的且不断執拗に之を行い其の重点を我が戦争目的の闡明並に米英の戦意喪失、米英ソ支の離間に指向すると共に敵側の政謀略攻勢に対しては機を失せず之を破摧す

となっている。右の方針に基づき大本営陸軍部としてはまず部内の案を概成して部外折衝を始めることとなった。私は主として対敵宣伝案の骨子を提出したが、開戦以来一貫した方針の下に実施して来たことであり、戦勢不振の今日に至って事新しくいうべきことは余り無かった。」(心理 282-283)

⁴⁷⁷ 「戦争指導の根本方針を策定し、政略と戦略の調整を行うことを目的として設立された会議。従来は大本営政府連絡会議がその役割を果たしてきたものの、小磯内閣成立後に国務と統帥の調整を強化し戦争指導の一元化を図るために、1944年8月4日大本営政府連絡会議で「最高戦争指導会議に関する件」の決定を受けて設立された。出席者は参謀総長・軍令部総長・内閣総理大臣・外務大臣・陸軍大臣・海軍大臣で、必要に応じて他の国務大臣や参謀次長・軍令部次長が列席し、幹事は内閣書記官長・陸海軍軍務局長が担当した。また重要な案件の審議には天皇が出席する御前会議の形式を取った。小磯内閣期に52回開催し、鈴木貫太郎内閣期にも頻繁に開催された(『機密戦争日誌』)ものの、実態としては大本営政府連絡会議とほとんど変わりはない。そのため鈴木内閣成立後に東郷茂徳外相の提案で、正規の構成員のみによる最高戦争指導会議構成員会議を開催するようになったが、それでも国務と統帥の調整強化は思うように達成することはできなかった。1945年8月9日ポツダム宣言受諾の御前会議などは、最高戦争指導会議の枠組で開催されたものである。1945年8月22日廃止。】。[“最高戦争指導会議”. アジ歴グロサリー。(参照 2023-04-23)]

「とかく日本軍の缺点としていたずらに勇壮なる文章を書くことによって事足りりとする傾向があった。「敵の戦意喪失」あるいは「敵国間の離間」などというのはやすいけれども、勝誇っている敵に対して実効を取めることはなかなか困難である。そして作文よりも実行すなわち電波の弾丸を一発でも多く発射することが緊急であった。私はこの段階では次の三点に絞って対敵宣伝を実施するを適當と考えた。

- ① 日本はまったく自存自衛のためやむを得ず武力行使に出たものであるから、戦闘員はむろんのこと非戦闘員であっても老若男女を問わず最後の一人になるまで戦い抜くというきわめて鞏固なる決意を宣明する。これがためわが特攻攻撃を実証として強力に宣伝する。
- ② 敵側損害なかならず主敵米軍の人的損耗に重点をおいて、日本本土攻略までには数百万人の死傷者を出すことの必至なることを強調する。これがため前線の米軍に対しては前記ゼロ・アワー番組により、なるべく新たに入手せる捕虜を利用⁴⁷⁸（録音、手記または直接放送）し、死の恐怖と戦争継続への疑問を醸成して厭戦気運の高揚を図る。また米国民に対してはとくに出征遺家族、反戦分子等を狙って駿河台収容の捕虜をして放送せしめ（人道的見地より戦争否定、わが勢力圏内にある多数の捕虜の家族宛メッセージの録音など）、戦争の早期終結を希望する雰囲気醸成することに努める。
- ③ 米国に対し共産主義の実体を解明し、ソ連と提携することの危険を訴え、日本本土攻略に専念して支那大陸を放置することは、いわゆる熟柿主義を採るソ連に好餌を与えるものであり、かくては甚大なる国費と出血とを支払った米国として、何の得るところがあるかという点について反省を促す。

これは戦後の支那大陸や満蒙の実情を見れば明白なおりであるが、おそらく米国指導者としても考慮を払った問題であろう。ただわが方としては米ソ離間を狙ったのと、もし米軍の支那大陸への上陸を誘致することができれば否応なしに長期戦に持ち込めるので一石二鳥となるわけであった。そしてこの放送は日本人が行なうよりも捕虜の立場において愛国的見地から真剣に訴える方が有利と思われた。」（心理 283-284）

⁴⁷⁸ 資料「捕虜の訊問」

2.4.10 情報局総裁報告（10月）

「一九年一〇月五日内閣情報局総裁が最高戦争指導会議において報告した対内外宣伝の要旨を引用すれば次のとおりである。[中略]

なお対外宣伝は宣伝的傾向の少ないことが望まれ、対米宣伝においても単に対米指向のみに捉われずかえって対南米宣伝⁴⁷⁹によってその目的を達成することもあり得ることに留意するよう指導された。要するに右の宣伝方策は起案者の苦悩から生まれた結構づくめの美文であったが、さてこれを実施に移すとなると打続く敗戦のため、わが方は特筆すべき具体的資料に乏しい当時としてなかなか困難を伴い、極言すれば負犬の遠吠に終わる恐れがあった。

やはり戦うからには勝たねばならぬ。否少なくとも戦闘交綏^{こうすい}状態に陥り、彼我いたずらに損害を累加するのみで、容易に勝負決せず、長期持久戦⁴⁸⁰の様相を呈するような事態を招来してこそ、対敵宣伝の効果も期待できるものであることが痛切に感ぜられた。」（心理 284, 287）

⁴⁷⁹ ○44年4月に駿河台分室の早坂久・総務部主任が捕虜に対しスペイン語放送を開始したのでスペイン語ができる捕虜を知らないかと分室の捕虜に尋ねている：“In early April, Mr. Hayasaka, who could speak Spanish and English, came over to us and declared that he intended to start a Spanish language radio program and wanted to know if any of us knew Spanish-speaking POWs.”. [Fujita, Frank ‘FOO’. *FOO: A Japanese-American Prisoner of the Rising Sun*. University of North Texas Press, 1993, p.222]

○「彼 [早坂] は農学士で、ペルーにいたころの本職は獣医である。彼は藤村所長がペルーの代理公使をしていた時、その人柄に惚れ込んでいっしょに日本に帰ってきたのである。」。 [『日の丸アワー』 p.80-81]

⁴⁸⁰ ○「また戦争を持久に持込み、ベトナム戦争に見るごとく、一〇年、二〇年戦争ということになれば、戦に疲れ、戦争目的に疑惑を生じ、継戦意志喪失の好機も生じてくるわけである。」（心理 11）

○【ベトナム戦争】「1960年～75年の北ベトナム・南ベトナム解放民族戦線とアメリカ・南ベトナム政府との戦争。周辺諸国などをも巻き込む。」。 [『広辞苑』]

○資料「ベトナム反戦運動」

2.4.11 職員更迭（10月）

「[43年] 一二月三日、宇野一磨氏が参加して彼[池田]の右腕となるに及んで、その負荷もかなり軽減された⁴⁸¹。宇野氏は戦前ロスアンゼルスで報道関係の仕事をやっている開戦となるや志願して日本軍の報道班員となっていた二世で、英、日語ともに練達であった。彼は捕虜と机を並べて放送原稿の作製を指導し、NHKへの出向も池田氏に代わって担当した。有能の士であったが捕虜指導の面ではやや厳格に過ぎることもあり、融和に欠ける点なきにしもあらずであった。一九年後期であったか、彼は比島方面軍の宣伝班に転出し、現地でゼロ・アワーとよく似た要領で「マニラ・ローズ」を指導し、対敵宣伝に成果をあげたが、二五年大阪で死亡⁴⁸²した趣。[中略]

宇野氏は有能で仕事熱心であったが厳格でやや高圧的なところもあり、捕虜との間に感情的な溝が生じつつあった。あるいは彼が二世として懐いていた白人に対する潜在的反発心も手伝っていたかも知れなかった。」（心理 208, 227）

○ 宇野一磨（バディ・宇野, 1913-54.12 神戸⁴⁸³）米国カリフォルニア州出身。日本陸軍報道部在職中徴兵され米市民権を失う。49.9.26 米国でのプロボウ裁判の証人として出廷を求められ東京で池田と再会。結核のため診察の結果渡航不許可となる⁴⁸⁴。

○ 「宇野は一九四四年十月二十四日にマニラ入りしたが、これはマッカーサー元帥がレイテへ上陸した四日後だった。フィリピンへやられたら生きては帰れないと宇野に警告する仲間もいた。七カ月後の一九四五年五月彼はフィリピンのゲリラの捕虜になった。米軍がマニラの外縁に突入した二月四日宇野は日本陸軍の散り散りになった残存兵力とともに同市を脱出、アンティポロ、ボソボソを経てまずマニラ東方の山地に逃れ、さらにサンタイネスとサンアンヘロ金鉱へ行っった。そこから数週間、密林をさまよひ、やがてルソン島の東海岸にたどり着いた。遂には餓死寸前で、マラリアと脚気、極度の疲労に打ちのめされて宇野は日本兵四人とともにフィリピン・ゲリラに投降した。ゲリラは日本兵をその場で殺したが、宇野の一命だけ助けたのは、彼の流暢な英語を聞いて、価値のある情報を持った日本軍将校だと思ったからだ。」⁴⁸⁵

⁴⁸¹ 池田：「そしてこの[池田]一人での活動が、十二月二日に日の丸アワー放送が開始され、約一週間たったとき、二世で軍属のバディ・宇野君（一磨）が参加するまで続いたのだから無茶苦茶である。」。『日の丸アワー』p.31]

⁴⁸² 「その翌[昭和25]年、彼は妻と二人の子とを残して大阪で死んだ。彼と私とは「日の丸アワー放送」で、毎日俘虜を連れてJOAKの第五スタジオに通った相棒である。戦後の日本の社会状態では、病気でも生きるために働かなければならない時代であったから、彼も十分な療養もできなかったのものであろうと思ひ、非常に残念でならなかった。」
[同上. p.159]

⁴⁸³ ユウジ・イチオカ（市岡雄二）. 抑留まで：戦間期の在米日系人. 彩流社, 2013, p.153, 168.

⁴⁸⁴ 駿河台分室物語【資料編】p.21 / 『日の丸アワー』p.158-159.ほかから抜粋.

⁴⁸⁵ 『抑留まで』p.167

2.4.12 B29 東京初偵察 (11 月)

「超空の要塞」といわれた B29 ができたのは、昭和一八年七月で、中国の成都を基地として最初に北九州の八幡製鉄所を爆撃したのが同一九年六月一五日であった。しかしながら成都からの行動半径は、八幡、佐世保軍港、長崎造船所および満州鞍山製鉄所くらいに限られていたが、米軍がサイパン島を占領するにおよび、日本本土は全面的に B29 の攻撃にさらされることとなり、さらにテニヤン島、グアム島を加えたマリアナ基地は、大量の B29 の進出を許し、わが本土焦土化を容易ならしめる結果を招き、統帥部はもちろんわが指導者層に与えた心理戦的効果は大きかった。すなわち昭和一九年一二月末以来、マリアナ基地よりの B29 の日本本土爆撃は本格化した。」(心理 364)

○写真偵察機

「1944 年 (昭和 19 年) 11 月 1 日, 1 機の写真偵察機が東京の上空に姿を現した。米軍機が東京に飛来するのは, 1942 年 (昭和 17 年) 4 月 18 日のドゥリトル空襲以来だった。この米軍機は, 戦略爆撃機 B-29 を改造した F-13 と呼ばれる写真偵察機で, マリアナ諸島のサイパン島から飛来していた。

サイパンの基地に最初の F-13 が到着したのが 1944 年 10 月 30 日, [中略] 写真偵察機のマリアナからの初飛行のために空海救助などの用意が慌ただしく行われた。

ステーキリー [Ralph D. Steakley] 大尉が操縦する F-13 (機体番号 42-93852) は, 11 月 1 日の早朝にサイパン島を離陸し, 13 時頃には房総半島の勝浦上空に到着し東京に向かった。日本側の記録 (戦史叢書『本土防空作戦』) では, 「13 時 8 分に敵機が勝浦から侵入」とあるから米国側の記録とほぼ一致している。東京上空で写真撮影を行ったのは, 13 時 26 分 (平均時刻) と記録されている。この日の任務は, 東京近郊に位置する航空機関連工場, 東京の工業施設や横浜近郊の海軍施設の写真撮影だった。[中略] 13 時間 50 分の飛行だった。」⁴⁸⁶



図 54 写真偵察機「トーキョー・ローズ」とクルー

「機首のノーズアートは 4 M1 (東京初偵察) の直後に描かれたと考えられる。
(米国立公文書館)」

出典:『米軍の写真偵察と日本空襲』 p.9.

⁴⁸⁶ 工藤洋三著・発行. 米軍の写真偵察と日本空襲. 2011, p.1.

2.4.13 風船爆弾 (11月)

「攻撃開始は明治節の佳日を選び、一一月三日とし、午前三時頃より放球準備にかかり、午前五時一斉に発射した。[中略] 私はせめて宣伝ビラを上手に作製して米国製のものと同じ紙質や活字、文体などを使って企図を秘匿し、米国内の反戦分子の仕業のように見せかけて攪乱戦術をとれば、戦意喪失にも役立ち、拾った者が騒ぐことにより、国内放送にも取上げられ⁴⁸⁷、これを傍受分析すれば気球到達状況も判明すると思ひ、その旨意見具申したが、秘密保持を重視してか時期尚早として採用されなかった。

[中略]「ふ」号攻撃を実施した昭和一九年末から二〇年にかけては敵機の連夜の空襲に備え、日本列島は灯火管制のため街も村も暗黒であったのに反し、米本国にあってはネオン輝く不夜城を呈していた。このときに当たって米本国に一矢を報い得たものはわずかにこの風船爆弾と電波戦のみであった。」(心理 253, 258)

「もともと気球によって遠距離の目標を爆撃しようという考案は昭和八年頃からあったもので、東部満州の国境からソ連ウラジオストック地区を攻撃するもので約一〇〇キロ飛行できればよかった。この研究は小林軍次中佐(後少将)、辻川少佐、宮川技師等によって完成し、昭和一四年にはこの気球多数が整備され、満州駐屯の気象連隊の中に組み入れられ、専任部隊が編成された。その後低空の地上風を利用して敵の背後に宣伝ビラを撒布するため、宣伝用気球の研究も行なわれた。しかしながら米本土を対象とする場合は、飛行距離約八、〇〇〇キロ、平均時速二〇〇キロとして五〇時間近くを要し、気球内のガスの温度は昼夜によって三〇度余りの差があり、一万メートルの上空の気温は零下五〇度以下で、気圧は地上の約四分の一という低圧である。そんな悪条件の下で数十時間ガス洩れのない気球を作ることは容易ではなかった。」(同上. 248)

⁴⁸⁷ ○「われわれは攻撃開始以来、とくに米国国内放送の傍受(後述)に留意し、気球到達状況や効果についての観察に努めたが、時々山火事などのニュースを散見する程度で確証を得ることができなかった。やはり米側の報道管制のためであったと思われる。」(心理 256)

○「駿河台分室が開設された太平洋戦争半ばころ、参謀本部は大きな紙の風船を日本から冬の間約1万メートルの高さに上げれば、直ちにジェット気流に乗って太平洋を横切り合衆国の西海岸に到達することを知った。そこで伝単を風船で合衆国に送る提案がなされた。しかし、もし風船に大量の伝単を積み高高度まで達せず、かと言って少量では効果がないという理由で結局実施はされなかった。いずれにせよこの風船は運よく合衆国へ着けば発火だけはするという、副次的な兵器(secondary weapon)であった。風船が東京の北50マイル[80km]ほどにある太平洋に面した海岸から飛ばされると、恒石少佐は毎回池田のところへ来てこう頼んだ。「『短波ニュース』(※)に、合衆国の西海岸で山火事が起きたというニュースが出ないか注意してください」山火事が起きたというニュースは数回あり、この風船が起こしたものに違いないと言われた。しかし誰も、オーソン・ウェルズの「火星襲来」の放送が[一九三八年に合衆国で]引き起こしたような結果を生むとは期待しなかった。なぜならそれは冬の間飛ばされるだけであり、ほんのわずかしか合衆国に到達しなかったからである。」。『駿河台分室物語【本編】』p.183-184]

(※) 資料「外務省と放送／「短波ニュース」」

『恒石重嗣年譜』

2.5 1945 年

『恒石重嗣年譜』

2.5.1 仏印出張（1月）

○仏印派遣報告（45年1月26日）

「一、恒石〔重嗣〕少佐仏印出張ニ依ル仏印処理⁴⁸⁸ニ対スル現地軍ノ意見左ノ如シ、
イ、作戦目的ハ飽ク迄防衛強化一点張りトスルコト
ロ、仏印処理後ノ安南独立問題ノ処理ハ現地軍ニ一任セラレ度コト
ハ、南方軍トシテハ敵ノ仏印上陸ハ三月頃迄ト判断シ此ノ際ハ敵ト決戦ヲ予期
シテ所要ノ処置ヲ研究中ナリ、」⁴⁸⁹

○恒石は戦後、本件に関する防衛庁戦史調査員・栗田正忠⁴⁹⁰からの照会に対し、（年不明）6月19日付の手紙で次の回答をしている。

「お尋ねの件につきましては誠に残念乍ら何等的確な御返事が出来ません事を申訳なく存じます。と申しますのは御希望の資料は悉く武力処理に関する事であり当時の大本営第一部第二課の所管事項でして小生の所属は御承知と思いますが第二部第八課（宣伝・謀略・防諜・情勢の総合判断・特種情報）で、その宣伝主任参謀でした。確か在仏印の□□□38Aとの連絡の為には前記第二課の近藤中佐⁴⁹¹が小生より約一週間早く出張した筈ですが海南島附近で敵機の出撃に遭い戦死された筈です。小生は

⁴⁸⁸ 資料「仏印との関係」

⁴⁸⁹ 軍事史学会編. 防衛研究所図書館所蔵 大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌 下. 錦正社, 1998, p.657.

⁴⁹⁰ ○「本書の第一部は戦史編纂官不破博の、また第二部は調査員栗田正忠のそれぞれ執筆にかかるものである。」。[防衛研修所戦史室長西浦進. “序”. 戦史叢書 シッタソ・明号作戦：ビルマ戦線の崩壊と泰・佛印の防衛. 防衛庁防衛研修所戦史部編. 朝雲新聞社, 1969]

○「一月二十六日には、佛印処理に対する現地軍意見聴取のため佛印に派遣した大本営参謀恒石重嗣少佐（44期）は次の報告（※）をした。」。[同上（第二部）. p.586]

（※）本ページ冒頭の『機密戦争日誌』記述とほぼ同じ。

⁴⁹¹ ○「『久遠の魂 遺族会結成 30周年記念誌』西田等／編 宮崎県遺族連合会 1977 P372 近藤傳八の戦没年月日（S20.1.8）と戦没場所（海南上空）の記載がございました。』

[宮崎県立図書館回答. 2022-07-21]

○「近藤伝八大佐は宮崎県国富町出身。父は雑貨商。旧制宮中大宮高から熊本陸軍地方幼年学校、中央幼年学校を経て、昭和四年七月十七日陸軍士官学校卒業（四一期）、十月二十五日歩兵少尉。昭和十三年五月陸軍大学校卒業（五〇期首席・歩兵大尉）。[“意外な戦史を語る：カモメとウツボのメクルメク戦史対談”. Rakuten BLOG.

<https://plaza.rakuten.co.jp/oceandou/diary/201412260000/>, (参照 2022-12-22).]

『安南独立⁴⁹²に伴う謀略宣伝に関する現地軍との思想統一、宣伝資材（料）の交付補充、西貢放送局の整備等の事務連絡』のため出張⁴⁹³を命ぜられた次第でした。

機密作戦^(マ)日誌に記載されてある現地軍の意見は伝言を依頼されてそれを上司に報告した程度にて武力処理に関する準備等についての具体的事項は任務外の事でもあり、長年月を経過した今日では全然記憶に残って居りません。

又御尋ねの第二点の現地軍提言[□]か又は中央の意図なりやにつきましても、第二課の課員か又は課長以上のポストの方でなければ不明だと考えます。

第三点の沢田中将⁴⁹⁴の報告の折言[□]は小生は出席してゐなかつたと思いますのでよく判りません。

要するに武力戦については第二課の人々でなければ詳細は不詳だと思います。私共の担任は努めて武力戦的負担をかけずにスムーズに安南独立をなしとげる事に努力を払った次第です。」⁴⁹⁵

⁴⁹² 「しかし 1944 年にパリが解放されてヴィシー政権が崩壊すると、ド・ゴール派からの働きかけも活発化し、インドシナ植民地政府の立場は微妙なものとなった。このため、日本軍は 1945 年 3 月 9 日に明号作戦を発動してインドシナ植民地政府を武力によって解体し（仏印処理）、順化の宮廷にいた保大（バオ・ダイ）帝にベトナム帝国を独立させた。」
[“フランス領インドシナ”. Wikipedia. (参照 2022-12-23)]

⁴⁹³ 43 年 11 月～12 月にも出張している。[本書「2.3.10 仏印出張（11 月）」]

⁴⁹⁴ ○沢田 茂か：「(さわだしげる、1887 年（明治 20 年）3 月 29 日 - 1980 年（昭和 55 年）12 月 1 日）は、日本陸軍の軍人。最終階級は陸軍中将。[中略] 高知県高知郡鴨部村（現・高知市鴨部町）出身。」。[“沢田茂”. Wikipedia. (参照 2023-07-24)]

○「1939 年（昭和 14 年）10 月 2 日、参謀次長に就任、ノモンハン事件および仏印進駐の後始末と責任処置を尽力。」。[同上]

⁴⁹⁵ ○防衛研究所図書館 防衛研修所戦史室蔵. 南西・泰仏印 92. 大本営参謀恒石重嗣少佐記. 昭和一九～二〇・八 第三十八軍関係資料. 38A 参謀林秀澄大佐外口述.

○恒石の返書の日付不明。[防衛研究所戦史研究センター史料閲覧室窓口での回答. 2022-07-15]

2.5.2 命拾い

「私の仕事の内容については近く「知られざる戦記」⁴⁹⁶として発表すべく準備中である。ここには在職中命拾いした三度の思い出を記すに止めたい。

その第一は二十年初め香港空港で五分違いで米艦載機の猛爆を免れたこと⁴⁹⁷であり、第二は十九年秋、悪天候で進路を誤り、台湾東方海上に出たが九十度の変針により辛うじて難を逃れ⁴⁹⁸、第三は二十年春伝書使として入ソ予定であったが、安南工作のため変更となったことである。(私の代りに行った人が、ウォッカ《毒入り?》を飲まされ、シベリアの小駅で狂乱状態となり死亡した⁴⁹⁹) 誠に一切は運命であり、夢である。

昭和五十三年三月」⁵⁰⁰

⁴⁹⁶ 78年8月発行の『心理作戦の回想』のことと思われる。

⁴⁹⁷ 本書「2.5.1 仏印出張(1月)」時のことか。

⁴⁹⁸ ○詳細不明

○南方軍総司令部の碓井準三参謀(恒石と同じ44期)が44年12月マニラへ赴く際、同様の体験をしている。[資料「目視飛行」]

⁴⁹⁹ 死亡した金子昌雄(42期)に柴田進(44期)が同行。[資料「外交伝書使」]

⁵⁰⁰ “任官・満州・参本・命拾い三たび”。『回想録：五十年の歩み』p.122-123.

2.5.3 大本営発表

「陸軍作戦においても従来戦果を重視した発表文が多かったが、一七年後半以後敵の反攻に伴い、戦線を縮小整理せねばならぬ状況が多くなったので、戦果よりも戦況に重点をおいた発表を行ない、できる限り彼我の戦線の推移を説明的に記述することになった。

戦果の発表で、私は一つの失敗を犯したことを告白せねばならない。それはサイパンが敵手に落ちてマリアナ基地からのB29による日本本土爆撃が始まった初期（一九年⁵⁰¹初頭）のことである。このB29を迎撃したわが航空部隊からの戦果報告は、防衛総司令部で取りまとめて大本営に報告された。その内容は撃墜数のほかに撃破数も含まれていた。私は航空戦の特性からみて戦果は重複することが多い上に撃破されたものは修理を加へればただちに戦線に復帰できるから撃破したものまで発表するのは適当でないと判断し、上司の決裁を経てその旨報道部に連絡した⁵⁰²。

ところが撃破された敵機がマリアナ基地に帰着できず⁵⁰³に生の無線通信を出して救助を求めつつ、海中に不時着しているものが数機あることを無線の傍受によって確認された⁵⁰⁴。果たせるかな、作戦部隊から嚴重なる抗議を受けた。劣勢なるわが防空部隊が空の要塞といわれたB29に身を棄てて体当り攻撃まで敢行して撃破の損害を与えたものを発表文から削除するということは、生命をかけて戦っている戦闘部隊将兵に対し誠に申し訳ないことをしたわけで深く反省し、ただちに訂正の処置を講じた。」

（心理 294）

⁵⁰¹ 正しくは「二十年」

⁵⁰² 「…空襲に関しては、敵機の来襲、防空戦闘に関する事からは大本営、行政上の発表は政府各省、空襲の一般状況については情報局から発表されることになっていた。」〔日本放送協会編. 放送五十年史. 日本放送出版協会, 1977, p.165〕

⁵⁰³ ○米軍の硫黄島滑走路使用が可能となる以前と思われる。

○45年「2.19 米軍, 硫黄島に上陸. 3.17 守備隊全滅（戦死 2万 3000）」〔『近代日本総合年表』 p.342〕

⁵⁰⁴ 「帰途不時着する機から、救助の駆逐艦へ暗号化する余裕がなく生で流す無線を傍受するとかなり被害が出ていることが分かった。」〔DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』〕

「要するに損害の発表には常に過少に発表すれば楽観的気分を生じ、敵愾心の高揚を抑制する結果を生ずるし、また損害の大きい場合にそのまま発表すれば第一線将兵の士気を阻喪し、国民の敗戦気運を招く恐れが同居しているものである。またお家の事情や面子から余り損害を過少に発表し続けて戦果ばかりを強調していると、後になって何とも辻褄が合わなくなる

やはり利敵行為にならない範囲で小出しにあるいは時期遅れに発表するような方法を採用とか慎重なる工夫を加えなければならない。戦果にしても既述したように戦場の実相からみてとかく過大となることは已むを得ないものである⁵⁰⁵。戦後大本営発表を虚偽の代名詞のごとくいわれるけれども、けっして国民を欺瞞しようとして発表されたものではない。賢明なる読者諸子のご諒察を願う次第である。」(心理 294-295)

「陸軍海軍ともうるさい「小姑」がいて、報道部が発表するといっても勝手にはできない。案文を書くとき判子をもらわなければならない。陸軍では軍務局の軍事課、軍務課、[参謀本部は]第八課、第二課から印鑑をもらった結果大本営発表の発表文が決まる。そして海軍とも関係ある戦況であれば海軍とも連絡しなければならない。

大本営はうそを言う、という言われ方を今でもされるが、必ずしもうそを言う積りもあまりなかったが、損害をそのまま赤裸々に言うのも利敵行為になるし、国民も受取り方によってはかえって意気消沈してしまう。だから10の損害があっても5とか6にする。」⁵⁰⁶

「米国[の海外放送]もかなり太い⁵⁰⁷こと言ってましたよ。」⁵⁰⁸

○「恒石さんは「総括的にいえば敵側の発表は損害の発表も大胆に行い、発表の仕方にも柔軟性があった。敵は戦局の好転と損害をはるかに上回る豊富な生産力に恵まれていたので損害を思い切って包み隠さず発表しても差し支えなかったがわが方はこれとま

⁵⁰⁵ 資料「戦果誇張と錯誤」

⁵⁰⁶ DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

⁵⁰⁷ 【太い】「④横着である。ずうずうしい。」。[『広辞苑』]

⁵⁰⁸ ○DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

○「真珠灣に奇襲を受けたアメリカが戦線において受太刀だつたやうに、宣傳放送でも、この前期は非常に苦戦であつた。真珠灣で被つた損害をアメリカがこの頃ひた隠しにかくしてゐたことは、もう今日誰知らぬものもない事實であるが、同様な例は各地の失陥、敗退に關しても同様で、十七年一月末のマカッサル海戦の當時などは、相當苦しい、事實とは大部ちがふ放送をしてゐたが、得意満面の日本海軍はさかんに放送局に資料を提供して、アメリカ側の発表をくつがへさうとしたものである。しかしアメリカ側はニューデリー、シンガポール、サンフランシスコ、シドニー等の各地の放送局を總動員して、一せいに呼應して十日も二十日も根強くくりかへしてゐるので、手薄の東京放送が時には押されがちでもあつた。しかしこの初期の東京放送は、連日の戦果を放送してゐれば勞せずしてもう世界の耳目が集まつてゐた頃で、なんの苦心もいらぬ、謀略放送としては至極樂な時代であつた。」。[齋藤博之. 日本の謀略放送. 中央公論. 1950-04, p.175]

○ドーリットルの日本空襲：42年10月ラジオ東京放送「化けの皮を剥がれた「全機無事帰還」」。[NHK放送文化研究所蔵「対敵電波戦」p.283]

「まったく対照的で前線将兵や国民の士気喪失を恐れて秘匿した損害は次第に累増した。」と述べている。⁵⁰⁹

「ミッドウェー海戦 [の損害] も、最初は陸軍に対しても作戦 [課] 以外には知らされていない。 [中略]

[台湾沖航空戦⁵¹⁰でも戦果に] 疑問を感じなければいけないけれど、それがなかなか難しい。前線の命がけて戦をする部隊からの報告を、軍令部とか参謀部などが机の上で空母 11 隻 [撃沈] は多すぎるから 5 隻くらいにしておこうとはなかなかできない。 [中略] …レイテの時は「空母 11 隻の大戦果」のためにハルゼー [艦隊] は壊滅しると判断し、従来考えていたルソン島決戦を敵が上陸しているレイテ決戦に切り替えた。ところがこれが全然間違っていた。軍令部が気が付いて次長が参謀本部へあれは過大評価だったと挨拶に来たが、天皇陛下のお褒めの勅語が出た後だから訂正もできなかった。これが [大本営発表の] 大ウソのトップだが、ウソを言うつもりはないが実情は結果的にそうなった。自軍の損害の発表で、日本は米国より少なかったとは言える。これは「持てる国」と「持たざる国」の違い。戦争は錯誤の重なり⁵¹¹。間違いを多くした方が敗ける。間違いは必ずある。」⁵¹²



図 55 台湾沖航空戦

魚雷投射後、超低空で避退する艦上攻撃機天山
撮影：1944 年 10 月 14 日、空母エセックス
(CV-9)艦上より
出典：Wikimedia Commons

⁵⁰⁹ 資料「高知県軍恩連盟／第六代会長・嶋内 百千世」

⁵¹⁰ ○「台湾沖航空戦（たいわんおきこうくうせん、1944 年 10 月 12 日 - 10 月 16 日）は、第二次世界大戦（大東亜戦争）中、フィリピンのレイテ島への上陸作戦の布石として、台湾から沖縄にかけての日本軍航空基地を攻撃したアメリカ海軍空母機動部隊に対し、日本軍の基地航空部隊が迎撃したことで発生した航空戦。アメリカ軍の損害は軽微なものであったが、日本軍は大戦果と誤認した。」。[“台湾沖航空戦”. Wikipedia . (参照 2023-04-25)]

○出撃した予科練出身の零戦搭乗員から戦後体験を聞いた人の話：空中戦の相手のグラマンは「出力が大きいから」キーンというエンジン音からして違う。最初から勝てないと思った。未帰還者も多数出て負けたと思っていたのに新聞は大勝利だと報じるからおかしいと感じたそうだ。[NPO 法人インテリジェンス研究所諜報研究会. 2023-05-13]

⁵¹¹ 資料「戦果誇張と錯誤」

⁵¹² DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

2.5.4 ヒューマニティコールズ（4月）

ルーズベルト大統領追悼

「次は夢物語りに過ぎないけれども、米大統領ルーズベルトは二〇年四月一二日死去している。これに先立って私は池田氏に放送によって大統領に焦慮の念を起こさせ、ノイローゼにする方法はないものかと相談を持ちかけた⁵¹³。

ノイローゼの大統領のとり政策によかろうはずはない。そこから米政策を攻撃非難して指導者と国民との離間を図りたいと思った。しかしこれは未遂に終わった。今にして思えばもう少し突込んでやっていたら彼の突然の死去と結びつけて面白い展開を見たかも知れないと残念である。

しかしながら実際には大統領の死後三日間、われわれは哀悼の放送を行って「ヒューマニティコールズ」⁵¹⁴の人的立場を貫いたことを記憶している⁵¹⁵。」（心理 247）

⁵¹³ 44年6月ころ。[資料「放送による「暗殺」」]

⁵¹⁴ 表記のゆれ

	ヒューマニティ コールズ	ヒューマニティ コール	ヒューマニティ・ コールズ	ヒューマニティ・ コール
心理作戦の回想	p.247	p.202	—	—
日の丸アワー	—	—	p.117	—
陸軍中野学校				p.139

⁵¹⁵ 「伊野部少佐は、二十年四月十二日ルーズベルト大統領の死に当って、坂西志保氏らと協議のうえ、捕虜達に三日間にわたって自由に哀悼番組を編成させ、敵を愛する日本の古武士的態度をもってこれに臨んでいるが、想えば誠にうるわしい試みであったといえよう。」。[『陸軍中野学校』 p.139-140]

忠告

「... 一時期繰返し放送したものに「米軍の進攻方向を支那へ」向けようと忠告に努めたことがあった。すなわち「たとい米軍が沖縄を攻略し、日本本土の占領を企てても満支の大陸をソ連に席卷せられたならばどうなるか。多大の出血をして何の償いが得られようか。賢明なる米国の採るべき道でない。ソ連と満支は陸続きであり、最少の犠牲を払って最大の収穫をあげる、いわゆる熟柿主義はソ連の伝統的戦略ではないか」と。

一方支那大陸には無疵のわが精鋭一〇〇万がいる。もし米軍の進攻を大陸に誘致できたならば戦争の長期化は避けられないであろうし、わが思う壺である。さすれば諸施策と宣伝の強化と相俟って冒頭に述べた終戦の腹案も実現する可能性が生まれて来るので、大いに努力してみたが、結局原爆の投下という幕切れに終わった。しかしこの忠告の通り大陸が共産化したことは事実であり、さらに赤化の波は東南アジアにまで波及した。朝鮮戦争やベトナム戦争と思いを合わせてはたして米国は何を得たであろうか。」(心理 234-235)

○池田徳眞

「私はドイツ人は性格的に対敵宣伝には向かない人間で、ゲッペルス一派のつくった宣伝組織は立派だけれども、宣伝内容は駄目だと思っていた。しかし、一つだけたいへん感心したことがあった。それは降伏の日まで、平然としていつものように宣伝放送を続けていたことである。その論法は「アメリカさん、ドイツを潰すと、いまにソ連が強くなって、アメリカの手に負えなくなりますよ」というのであった。それで、俘虜放送もいつまでも続けなければならないと考えたからであった。この時⁵¹⁶の日本の論法は、もしアメリカ軍が日本の本土に上陸すると、百万人を超す死傷者が出ますよ、ということであった。」⁵¹⁷

⁵¹⁶ 45年6月以降：「このような事態であったから、昭和二十年六月になって、駿河台分室にも大きな変化があった。まず、本土決戦の態勢を整えるため、参謀本部第八課は縮小され、太平洋沿岸の各地に地区特別警備隊を組織するために、恒石中佐は故郷の高知に配属された。米軍の上陸の時に、自分の故郷を必死で守る防衛組織を作るためであった。藤村所長も、外務省方面で戦争継続について弱気の者がでてきたから、そういう者を爆撃するのだといって分室を去った。森野正義君は、もう駿河台にいても仕方ないというので、JOAKの海外局に出向していった。そして、俘虜放送主任の菱刈隆文君も古巣の同盟通信に帰ってしまった。また、中野学校出身の谷山樹三郎中尉と浜本純一中尉、それに大山勉憲兵も転属され、代って同じ中野学校出身の一二三九兵衛少佐と伊野部重珍大尉、それに大高通男憲兵准尉が、責任をもっていた。六月中旬になって、一二三少佐は以上の実情を私に話され、「JOAKの放送監査室の方は、参謀本部から誰も行かないでよいことになった。ついては、いま一度俘虜放送の主任に戻ってくれないか」と丁重に頼まれた。戦況がこの段階に来てしまったいま、私はふたたび俘虜放送をする情熱など湧かなかつたけれども、自分があれほど精魂を打ちこんで始めた仕事の後始末だから、仕方ないと思って引受けることにし、六月十五日から、また元の俘虜放送の主任に帰ってきた。」. [『日の丸アワー』 p.133]

⁵¹⁷ 同上. p.134.

2.5.5 機構縮小（4月）

「本土決戦準備として陸軍中央部の機構は統合縮小され、[中略] 二〇年六月初め⁵¹⁸ 参謀本部第八課⁵¹⁹も陸軍省軍務課と合併となった。永井第八課長は軍務課長の兼職となったわけであり、私も軍務局課員を兼職したが...」（心理 235-236）

⁵¹⁸ 4月23日：『機密戦争日誌 下』大本営陸軍部戦争指導班(当館請求記号：210.75/タイ) 「省部合体」について該当日周辺を確認しました。

p 699 4月 9日 月曜 「省部合体ヲ迅速ニ実施スヘク決心セラレタリ」

p 707 4月22日 日曜 「省部合体ニ伴フ室ノ配当決定シ・・・」

p 708 4月23日 月曜 「〇〇省部合体ニ伴フ人事発令セラル」

の記載が確認できました。

【参考】

以下の資料にも同期日に記載が確認できたので紹介します。

『大本営機密日誌』種村佐孝（当館請求記号：210/46）※国立国会図書館デジタルコレクションの送信サービスで閲覧可能

（当館には1952年発行のものしかありませんが、デジタルコレクションでは新版も確認できます。）

p 282 20年4月22日「省部合体の措置が発令せられた。・・・第二十班、参謀本部第八課、軍務課、交通課は統合して・・・」

という記載が確認できます。]. [静岡県立図書館回答. 2023-05-22]

⁵¹⁹ 「...小磯内閣は総辞職し（4月5日）、鈴木貫太郎が組閣する（7日）。また、それと前後して参謀本部第20班の編成も改められた。まず、6日に班員の橋本が第2総軍参謀に転出、10日には第4班長の西村敏雄が第20班長を兼務、第4班員の恒石重嗣も第20班兼務、反対に第20班員の田中敬二が第4班兼務となった。第20班長であった種村は班員として引き続き第20班で勤務することになった。さらに23日には陸軍省部合体によって第20班は発展的に解消され、参謀本部第8課（※）、陸軍省軍務局軍務課、同交通課と統合されて、陸軍省軍務局軍務課・参謀本部第4部第12課となった。課長には軍務課長であった永井八津次がなった。それまでの第20班構成員は、種村と恒石が残留したが、他は移動した。]. [立川京一. 戦争指導方針決定の構造：太平洋戦争時の日本を事例として. 防衛研究所紀要第10巻第1号, (2007年9月). p.42.]

（※）8課と4班の関係は不詳：「[43年の秋] 職制がかわり、八課は四班と呼ばれ、その班長には永井八津次少将が就任した。]. [本書「2.3.7 職制変更」]

2.5.6 四国防衛軍へ転出（6月）

「.....なるべく多くの将校を出身地⁵²⁰の郷土防衛軍に転属せしめることとなった。
[中略] やがて六月末⁵²¹郷土四国の防衛軍（第五十五軍）の参謀として転出することとなった。開戦直前から足かけ五年に及んだ宣伝業務から離れ、一転して兵站業務を担当することとなったのである。捕虜の処理や関係者の処遇等につき心残りではあったが命課のままに、心気一新後事を加藤大佐（軍務局）に依頼し、駿河台関係者と別盃をかわし⁵²²任地に向かった。駿河台分室においても私の去った後、所長の藤村信雄氏の退任、菱刈隆文氏の同盟通信社への復帰、浜本中尉の郷土和歌山への転出等が相つぎ、池田氏はNHK監査室を引き上げて駿河台に帰り、再び放送主任となった。またそれと前後して宣伝業務に携っていた山口少佐、伊野部少佐もそれぞれ徳島と高知の地区司令部に転出した。また私の後任者は加藤大佐であったが、駿河台分室の事実上の監督指導を行なったのは中野学校出身の一二三〔九兵衛〕⁵²³少佐であった。」
(心理 235-236)

⁵²⁰ ○土地勘があることに加え、同郷意識による団結に期待したと思われる

○終戦後の中国の例：「...独混第三旅団は、四六年三月一〇日の時点で一〇六八名いた残留者が四月の解散命令が出た後には一三四名に激減しており、各兵団の中でもその減り方がもっとも著しい。これは、今村参謀が下級将校に対して、残留するしないの選択を個人の自由意思に任せたためと思われる。残留した一三四名は、今村と行動を共にしようとする宮城県人会を中心とする将兵たちであった。」。[米濱泰英. 日本軍「山西残留」：国共内戦に翻弄された山下少尉の戦後. オーラル・ヒストリー企画, 2008, p.162]

⁵²¹ ○「[6月20日（水曜）] 恒石中佐 55A 参謀内命発令セラル」. [『機密戦争日誌 下』 p.731]

○「職務歴 1945-6-22 55 軍参謀」. [偕行文庫資料]

○着任日不詳（以下参考）

・恒石の参謀本部転任：1941-11-10 電命, 11-18 着任申告（心理 4）

・浜本純一^{中尉}：「戦時中の転任は発令後五日以内に出発することが鉄則」. [『青雲白雲』 p.86]

⁵²² 「東方社と関係のあった参謀たちも次々と前線に転出する者が多く、その壮行会を杉原の顔のきく浅草の吉原で何回も催した。こんな時期でも軍の関係とえば、普通宴会ができたのである。ところがあるとき、途中で空襲警報が発令されて中止となり、真っ暗闇の中を黄色い将官旗を立てた自動車で、やっとのことで帰ってきたという。自宅が浅草で、この会に同席した国司の話である。」. [『戦争のグラフィズム』 p.258]

⁵²³ 一二三は内陸部の京都府出身で群馬県居住. 長男俊雄に、あの時もし内地に転属しなければ関東軍の特務機関にいた自分はシベリア抑留で生きては帰れなかっただろうと語っている。[一二三俊雄談. 東京日本橋の喫茶店会議室. 2015-02-17]

「...暫く母隊とは疎縁になっていたが本土決戦ということで同 [45] 年七月から懐しい讃岐に帰り善通寺に司令部をおいた第五十五軍の兵站業務に携り終戦を迎えた。」⁵²⁴

○四国防衛第55軍

・45年4月8日に編成され、当初高知市内の城東中学校（恒石の母校）に司令部を置き、次いで6月末土佐山田町（現香美市）新改へ移動⁵²⁵。

○善通寺捕虜収容所

・米軍上陸に備え、高松・坂出港で荷役に従事する下士官・兵109名を除く捕虜将校611名を四国外へ移動。

国籍	出発		人数	行先
	月	日		
米	6	23	335	福井県
英	〃	24	106	長野県
〃	〃	25	40	福岡県
豪	〃	〃	45	北海道
〃	〃	〃	45	秋田県
蘭	〃	〃	40	岐阜県
合計			611	

図56 善通寺捕虜将校の出発（45年）

出典：『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』
p.219. 図204.

○四国への大空襲⁵²⁶

主要目標	時期	B29機数	死者	被災家屋	出典 (Wikipedia. (参照 2022-11-08))
高知市	7月4日	125	401	11,912	“高知大空襲”
徳島市	〃	129	1,000	17,183	“徳島 〃 ”
高松市	〃	116	1,359	18,913	“高松空襲”
松山市	7月26日	128	251	14,300	“松山大空襲”

⁵²⁴ 『歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌』 p.442.

⁵²⁵ 『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』 p.216.

⁵²⁶ 第55軍の後方兵站基地となった善通寺が空襲を受けなかったのは捕虜収容所があったためだと、当時の収容所管理者と捕虜は考えている。 [同書. p.224]

【藤目賢二君の遭難】

昭和二十年の七月だったと思うが私は偶然にも高知後免駅⁵²⁷で数年ぶりに藤目君に出会った。西走する列車に乗らうとするところであったが「何処へ行く」と聞くと「幡多へ行く」と云う。彼は高知縣西南地域の防備担当師団の一員であった。私は直ちに第五十五軍参謀部の部付将校に転属するように処理した。つまり直接の部下に充当された訳である。終戦后私はGHQの調査や試問(ママ)に^(ママ)応ずる為九月から十一月迄陸軍省に転属になったので兵器、弾薬、糧秣などの処理についての兵站参謀の煩雑な仕事は全部藤目君がやってのけた次第である。有能、積極的な彼であったからこそやりとげられたのであるが嘸御苦勞(さぞ)であったと思う。元初年兵教官に見込まれた彼こそ御難であった。感謝に堪えない。」⁵²⁸

○「前任参謀西原征夫(当時大佐)の計画に基づいて、着々貯蔵保管の実績はあがっているものの、じゅうぶんというにはほど遠い。空襲による補給路の遮断が致命傷となろう。[中略]土讃線は箸蔵鉄橋爆破だけで息の根がとまる―「土讃線をやられたらどうするか」―それは大きなテーマとなって、補給関係者を悩ませていた。三縄村から対岸を結ぶ三好橋も同じこと―その代用としての北岸道路も窮余の一策で、トラック輸送もじゅうぶんな効果は期待できぬ。

新着の恒石参謀は第五十五軍司令部(善通寺)とその戦闘指揮所(高知県新改一の山中)との間を汽車で往復し、また自動車を通して事務連絡にあわせて、現地実情を見聞し、さらに綿密なプランを練った。」⁵²⁹

○終戦直前、乗馬中事故⁵³⁰。

⁵²⁷ 第三大隊が駐留：「[満州駐屯の第十一師団主力に対し、45年4月]一日内地防衛の為の動員下令 [中略] 保管馬全部を満州八〇八部隊に移管す 七日部隊は三梯団にて釜山經由第一、第二梯団は博多に第三梯団は敦賀にそれぞれ上陸徳島市周辺に展開 五月第一、第二は高知平地に分進、第一大隊(第一中隊欠)は須崎附近に布陣 第三大隊は後免附近に駐留す」。『歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌』p.642]

⁵²⁸ 同上. p.443-444.

⁵²⁹ 茶園義男. 本土決戦 日本内地防衛軍. 不二出版, 1986, p.296.

⁵³⁰ 「恒石重嗣君 終戦直前乗馬と共に転倒. 脊椎故障の後遺症で時折腰痛を感ずる」。[花だより. 偕行. 1985, 413(5), p.68. (偕行社発行. 1985-05)]

2.5.7 終戦（8月）

「[...]恒石参謀は、各師団および旅団の兵器・経理担当参謀を、[徳島] 県立池田中学校⁵³¹に集合させた。集まる者二十数名、現地視察と“決戦時の物資配分に関する思想統一”のためである。]

当時集まった師・旅団の兵站担当の参謀ら二十数名と、図上打ち合わせをすすめつつも、心の中で現地調達の緊要と、暁部隊による海上輸送しかあるまいと思っていたのです。

まあ、それはそれとして、いちおうの図上打ち合わせも終わり、現地視察という段階で終戦の詔書です。われわれ一同、池田中学の講堂で玉音を涙ながら聞いたものです（恒石重嗣 S45・11・6談）。⁵³²

⁵³¹ 1922年創立。2人の徳島県知事の母校。野球部は春夏の甲子園大会で優勝3回、準優勝2回の名門校。蔦文也監督の時代、「さわやかイレブン」、「やまびこ打線」と呼ばれた豪快な攻撃野球で有名になった。[“徳島県立池田高等学校”. Wikipedia. (参照 2022-10-16) から抜粋]

⁵³² 『本土決戦 日本内地防衛軍』p.296-297.

東京

○恒石と同じ陸大 53 期の 3 名が自決、1 名が殺害されている。

・陸軍省軍務局課員（軍務課）・畑中健二、同椎崎二郎

「終戦時に宮城事件の首謀者の一人となり、近衛第 1 師団長森越中将（28 期）を殺害。クーデターは未遂となり、1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日、午前 11 時過ぎに二重橋と坂下門の間の芝生上で椎崎二郎中佐（45 期）と共に自決した。」⁵³³

・第 2 総軍参謀兼畑俊六元帥副官・白石通教

「同年 8 月 6 日の広島市への原子爆弾投下により被爆するも、奇跡的に難を逃れた。1945 年 8 月 14 日の御前会議に先立って開催された元帥会議に出席する畑に随行し上京。8 月 15 日、義兄森越近衛第 1 師団長を近衛師団司令部に訪問中、クーデターへの参加を拒否し殺害された森をかばい、巻き添えとなり死去した（宮城事件）。」⁵³⁴

・連合艦隊参謀（出向）・晴気誠

「参謀本部作戦班在職時、サイパン島防衛計画の主務者であった。しかし、アメリカ軍によるサイパン侵攻が日本側の予想より早まり（サイパンの戦い）、晴気が指導した、日本陸軍伝統の「水際配置・水際撃滅主義」が防衛準備不足から失敗、アメリカ軍にサイパンへの上陸を許すと、責任を感じて現地での直接作戦指導を、陸軍大臣兼参謀総長の東條英機大将に直訴した。東條はこの異例な申し出を承認したうえ、軍刀と激励の辞まで送っている。晴気は硫黄島まで飛行したが、サイパンはアメリカ軍の制空権下で近づく事ができず、それでもパラシュートでのサイパン降下を懇願したがそれも果たせず、失意の上に断念している。[中略] 2 人は 8 月 17 日の夜明けに陸軍省内の大正天皇御野立所で、羽場 [安信少佐]⁵³⁵が見届けるなか晴気は軍刀で割腹したのち拳銃で自決した。家族に宛てた遺書は 8 月 10 日付けであり、晴気は終戦前に自決を決心していた。その遺書には「サイパンにて散るべかりし命を今日まで永らえてきた予の心中を察せられよ・・・」とサイパンでの作戦指導の責任を最期まで感じていた事が記されていた。」⁵³⁶

⁵³³ “畑中健二”. Wikipedia. (参照 2022-10-16)

⁵³⁴ “白石通教”. ”

⁵³⁵ ○『沈黙のファイル』では益田兼利. [p.101]

○「一九四五年夏、自ら命を絶った軍人・軍属は五百六十八人に上った。]. [同上. p.103]

⁵³⁶ “晴気誠”. Wikipedia. (参照 2022-10-16)

第3部 戦後

『恒石重嗣年譜』

3.1 占領統治

『恒石重嗣年譜』

第3部 戦後／3.1 占領統治

3.1.1 米軍の追及(45年9月)

「米第八軍第十一軍団C I Cのグイシー中尉が元参謀本部第八課長永井 [八津次] 少将⁵³⁷を陸軍省に訪れたのは四五年九月二〇日であった。[中略] 彼の尋問の主題は駿河台の文化学院にいて米本国向けに放送していた捕虜に関することであった。そのときの問答や提出書類は右のとおり [省略] である。」(心理 305, 313)

○池田徳眞

・「終戦後、九月二十日に、伊野部重珍大尉⁵³⁸が大曲の江戸川アパート⁵³⁹の私の部屋に飛びこんで来られ、「すぐいっしょに大本営に来てくれ」と言われた。それで、市ヶ谷の大本営陸軍部の参謀本部第二部長室に行ってみると、永井八津次少将（元第八課長）が丸腰でいて、その前にアメリカの諜報将校のグイシー中尉（Guissy, George S.）が一人で背広姿で落着いて坐っていた。」⁵⁴⁰

・「戦時中そこは参謀肩章を吊った将校が犇めく、いわば「日本陸軍教」の総本山であったが、敗戦後は一変していた。軍人の魂と見なされていた日本刀を誰も身に帯びていない。腰のベルトに軍刀のない、弱々しく見える軍人があちこちを歩いていた。不思議なことに丸腰の軍人は商人のように見えた。これが満州事変以来⁵⁴¹14年間、アジアの盟主を以て任じ権力を振るった大本営の崩壊後の姿であった。」⁵⁴²

⁵³⁷ 45年9月2日、ミズーリ号艦上での降伏調印式(※)に参列。

(※)「日本側からは、天皇および大日本帝国政府を代表して重光葵外務大臣が、また大本営を代表して梅津美治郎参謀総長が署名した。[中略] 日本全権随員 陸軍：宮崎周一中将、永井八津次少将、杉田一次大佐 [資料「杉田一次」] 海軍：富岡定俊少将、横山一郎少将、柴勝男大佐 外務省：岡崎勝男終戦連絡中央事務局長官、加瀬俊一秘書官、太田三郎終戦連絡部長」。「日本の降伏文書」. Wikipedia. (参照 2023-01-07)】

⁵³⁸ ○44年12月から大本営報道部、45年6月少佐に進級。6月ころ高知地区司令部配属。『陸軍中野学校』p.174, 806から抜粋]

○45年9月20日時点で恒石は四国にいた。(心理 313)。

⁵³⁹ ○「昭和九（一九三四）年に完成した同潤会江戸川アパートメントは全二五八戸、東洋一を謳う近代的な装備を搭載した、鉄筋コンクリート造の最も新しい集合住宅だった。」。『駿河台分室物語【資料編】』p.307]

○大戦中池田は同アパートを空襲による火災から守るべく奮闘した。『駿河台分室物語【本編】』p.245-248]

⁵⁴⁰ 『日の丸アワー』p.138-139.

⁵⁴¹ 正しくは日中戦争以来：1937年「11.20 宮中に大本営設置」。『近代日本総合年表』p.312]

⁵⁴² 『駿河台分室物語【本編】』p.273.

・「永井少将は私に、「この米軍の中尉が、駿河台分室にいたイギリス人のウィリアムズとアメリカ人のカルプフライシュは、いまどこにいるかと問うておられる。君知らないか」とのことである。それで私はガイッシー中尉に向って英語で「ウィリアムズは、放送に協力することを拒否しましたから、一九四三年十二月十日に東京憲兵隊に渡しました。その後のことは知りません。カルプフライシュは、私が選んだ者ですが、一九四四年二月十八日に私が放送の責任者でなくなった後で、駿河台分室を去った者ですから、その後のことは何も知りません」と答えた。永井少将は「いま俘虜情報局が疎開先から引越中なので、彼らのカードが見つからず、消息が分からないのだ⁵⁴³」と事情を説明された。

いま一つ大森の俘虜収容所は、上陸してきた米軍の海兵隊に占領され、俘虜は奪還された⁵⁴⁴のだから、誰がいたか明確でないということもあるのだとも話された。ガイッシー中尉は、日本側で殺したものと思っているから「いまどこにいるか」の一点張りである⁵⁴⁵。これから一週間、私も心配なので数回市ヶ谷に通った。そして、一週間後に、二人とも生存していることが確認され、みんなホッとした。⁵⁴⁶

・「ちょうど1週間が過ぎた日の朝、池田がいつものように第二部長室へ顔を出すと、永井少将が大声で叫んだ。「池田さん！2人とも生きています！無事だ！」日本の軍人の声は、通常普通の人々よりも大きい。しかしその朝の彼の声は格別で、部屋中に響き渡った。「本当ですか？絶対に間違いありませんか？」「間違いはない！確かだ！」2人は喜び合った。ガイッシー中尉の目的はもし誰かが死んでいたらその原因を追求し、責任者を見つけて裁判にかけることだったようだ。だから彼はヘンショーたちが言ったことを信じ、ウィリアムズとカルプフライシュは殺害されたに違いないという仮定の上で捜査を開始した。」⁵⁴⁷

543 「[俘虜情報局は] 永福町の宮前公園(※)の中だったが、移動したのでゴタゴタで分からない。」. [DVD『池田徳真氏の回想』(※) 大宮八幡宮北の和田堀公園か。

544 『駿河台分室物語【資料編】』p.298-304.

545 善通寺捕虜収容所と駿河台分室でウィリアムズといっしょだったヘンショーの情報：「一方池田は終戦後ほぼ毎日、友人で外務省ラジオ室長の樺山資英氏を訪ねた。日本の耳に警えられる傍受局(Listening Post Station)なら連合軍の対日占領方針に関する情報を得られると考えたからで、彼は出来るだけ早くそれを知りたかった。終戦後2週間ほどたったある日、池田がラジオ室に立ち寄ると樺山氏が「おい、池田君。ヘンショーがハワイで何か言ってるぞ」と言った。池田はすぐ「短波ニュース」を読み、ホノルルの自宅へ帰った直後に彼がこう語ったことを知った。「東京からアメリカへ向けた捕虜放送への協力を強いられたグループの中にウィリアムズというイギリス人がいて、たまたま夜私の隣に寝ていた。彼が日本の軍人に殺害されたのは、ほぼ間違いはない」樺山が池田に尋ねた。「ウィリアムズはどうした？」しかし池田にはこの質問に答える資料がなかった。ウィリアムズが駿河台分室で放送協力を拒否した後東京の憲兵隊司令部に渡されたこと、関係当局に対して彼が死ぬように北海道の過酷な炭坑へ送る依頼がなされたらしいということくらいしか知らない。樺山にそう話すと、彼は心配そうに言った。「ウィリアムズが死んでいると面倒なことになるぞ」。[『駿河台分室物語【本編】』p.272]

546 『日の丸アワー』p.139.

547 『駿河台分室物語【本編】』p.275.

陸軍省転補

「九月二三日⁵⁴⁸MPを伴ってアメリカ人約八名が文化キャンプを訪れ、一二三少佐と面接した。彼等は校内くまなく見て廻ったが、清掃された建物以外には何一つ残っていないなかった。「命令によってすべて焼却した」旨の同少佐の説明に、彼等は納得して引き上げた。」(心理 236)

「第八課長の職務は広汎で情勢の総合判断、謀略や防諜、特殊情報などがあり、宣伝もその一部である⁵⁴⁹。課長は些細な問題については承知されてないことも少なくないので、比較的長期にわたって主任者であった私は、同年一〇月三日、四国防衛の第五十五軍兵站参謀から陸軍省軍務局へ転補となり、宣伝関係についての米軍尋問に応ずることとなった。私が最初に尋問を受けた相手もやはりグイシー中尉であった。彼は一人の女性を私に紹介して、面識の有無を問われたが、私としてはどうも記憶がなかった。後から考えると濠州のカズンス少佐の裁判に証人となった最所フミ嬢だったようであるが、一度も話したこともなく、顔に見覚えもなかった。中尉は頭の切れそうな若いC I Cであった。私は戦争に負けてその上戦犯などに問われてたまるかという反発と、上司や周囲に迷惑をかけないようにということが胸中を往来していたので、先方の出方を読みつつなるべく余計なことはいわず、差しつかえのない点はむしろ積極的に明快に答えるように努めた。しかし音に聞こえたC I Cだけに応待は慎重ならざるを得なかった。東京ローズや駿河台の捕虜達について一通りの尋問を終わって雑談となったので、私は彼の趣味やスキヤキなどについて聞いてみた。

すると世界中のピストルを蒐集するのが最大の趣味で、日本製のもの以外はほとんど集め終わっているとのことであったので、進駐軍に提出することになっていた武器の中から、二六式(廻転六連発)と九四式ピストルを贈ったところ、彼は狂気のごとく喜んで、ピストルにキッスしたことが今でも思い起こされる。

スキヤキも大変好きだが⁵⁵⁰経験はないということであったので、赤坂の某料亭で永井課長とともに一席を設け、英語の達者なゲイシャガールも侍らせてしこりを解いたことを覚えている。」(同上. 313)

⁵⁴⁸ 「ガイッシー中尉は、ウィリアムズとカルプフライシュの二人か生きているのでは、たいした問題にならないと思ったのであろう。九月二十七日にこんどは数人で駿河台分室に乗り込んできた。[中略] 一二三さんの終戦処理は、まことに見事であった。私は感心して見ていた。実をいうと、中野学校の同期生から「一二三さんは、中野学校ではよい成績ではなかったよ」と聞いていた。だから申し訳ないことだが、その程度の人だと思っていた。しかし、敗戦という想像もしない事態に直面して、彼の真価が発揮された。[中略] 駿河台分室は、一二三九兵衛さんのお陰で、その終りを全うすることができたと言っても決して過言ではない。』、『日の丸アワー』p.140-141]

⁵⁴⁹ 「参謀本部第八課は企画が建前。五、六、七課は立場が違えば見方も違うからそれらを統合して総合的な情勢判断をするのが役目。それと謀略、宣伝、暗号。』。[DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』]

⁵⁵⁰ 「聞いたことはあるが」あるいは「一度食べてみたいと思っていたが」の意か。

3.1.2 復 員 (45 年 12 月)

「私はGHQに毎日のように出頭して関係者の尋問に答え、一月中旬頃、もとの四国防衛軍に復帰し⁵⁵¹、進駐軍に対する武器弾薬等の引渡し業務を続行した後、一二月一日をもって復員⁵⁵²し、第二の人生へスタートすることになった。」(心理 314)

⁵⁵¹ 発令：「職務歴 1945-9-* 軍務局付 1945-10-16 四国軍管区参謀」。[偕行文庫資料]

⁵⁵² ○【復員】「戦時の体制にある軍隊を平時の体制に復し、兵員の召集を解くこと。また、召集を解かれた兵士が帰郷すること。[中略] ←→動員」。[『広辞苑』]

○退職金が支払われたと思われるが、金額は不詳：「戦争が終われば巨額の軍事費支出がとまり、インフレ要因もなくなるとの期待に反し、軍事費の支出は敗戦後の昭和二十年八月から九月にかけて未曾有の規模に達した。これは、復員軍人への退職金支給や、戦時中になされた軍需契約の補償をするための臨時軍事費の大量支払いによるもので、その額は八月四十八億円、九月百四十六億円、十月三十五億円、十一月三十七億円と、この四ヵ月間だけで二百六十六億円という巨額に達した。」。[佐野眞一. 旅する巨人. 文藝春秋, 1996, p.203]

○陸軍少尉の「退職金」は年俸程度：「終戦直後に満州から生還され、博多港に上陸した後はどうされたのですか。下山 米軍の目を逃れて、北陸線や上越線を乗り継ぎ、埼玉県入間の航空士官学校へ戻りました。そこで 1000 円ほどの金 (※1) を渡されて除隊です。」。

[伝川幹. 私の道 オリンパス光学工業会長 下山敏郎 (※2)：倫理学を学びつつ闇商売で一家支え. 読売新聞.1999-06-15, 朝刊]

(※1) 45 年現在の職業軍人の給料一覧表によれば階級少尉の年俸は 850 円。[『50 年目の「日本陸軍」入門』 p.122-123]

(※2) 1924-2013. 陸士 58 期. 「昭和 20 年陸軍少尉任官」。[“下山敏郎”. プロフィール - HMV&BOOKS online. (参照 2023-01-01)]

3.1.3 喫茶店開業

「彼女〔妻喜美〕は私の留守中〔後述〕一人で数人のウェイトレスを使用して喫茶店を経営していたが、私が終戦後の追放令によって適当な役職につけなかったため⁵⁵³生まれて初めての不慣れな仕事に、心身共に疲労の極にあったし…」〔心理 337〕

○喫茶店「田園」は49年1月時点では恒石夫人名義：贈賄事件の舞台になり判明。
「同〔昭和二十四〕年一月末頃同〔高知〕市京町二十八番地喫茶店田園こと恒石喜美方に於て〔中略〕現金一万円を供与し以ていずれも贈賄し…」⁵⁵⁴

○翌50年時点の店の名義は恒石重嗣。

「昭和26年の『高知市商工名鑑1951』のp121「三種喫茶業」中に下記の記述があります。

- ・商号屋号名称「田園」⁵⁵⁵
- ・営業所の所在地「京町二八」⁵⁵⁶
- ・経営者または代表者名「恒石重嗣」
- ・電話番号「二、〇三九」

また、『高知市縦横明細地図 昭和27年度版』（この資料は当時の住宅地図）の「16. 播磨屋橋周辺・附近」京町（はりまや橋のすぐ西隣⁵⁵⁷）に「田園茶房」と読める店舗が記されています。従って、お探しの恒石氏経営の喫茶店とは、昭和20年代にはりまや橋西方の京町商店街（現在はアーケード商店街になっています）にあった「田園」もしくは「田園茶房」と名付けられた喫茶店ではなかったのでしょうか。⁵⁵⁸

⁵⁵³ 「でも、公職追放令で陸士卒業生は公職、教職、ジャーナリズムへの門戸が閉ざされていきましたから、勤め口がない。」。〔下山敏郎『私の道』〕

⁵⁵⁴ 経済関係罰則ノ整備ニ関スル法律違反被告事件. 高知地裁判決, 1952-10-31. D1-Law.com 第一法規法情報総合データベース, https://hanrei.d1-law.com/dh_h/print?3, 判例ID24002532, (参照 2020-02-20)

⁵⁵⁵ 一般的な店名：「当館所蔵資料のうち、以下のものに「田園」という名前の喫茶店が記述に含まれていたのを御紹介します。『喫茶店の時代 あのときこんな店があった ちくま文庫』林哲夫／著（383.88／ヤ／）P69「国画会の画家木内廣は次のように回想している。昭和一五年（一九四〇）頃のこと。《えのぐがなくなると、神田小川町の裏の角にあったクサカベ薬局へ行った。（略）。》（略）。ただ、クサカベ薬局には喫茶部はなかったのか、木内は絵具を買った後、同じく小川町にあった名曲喫茶・田園へ向かうのを常としていた。〔以下略〕」。〔静岡県立図書館回答. 2022-05-10〕

⁵⁵⁶ 「喫茶店はここが「恒石のおじちゃんの処」と言われた何階建てかのビルの外観をかすかに覚えています。」。〔安岡元彦. Eメール. 2019-03-14／資料「コーヒーの戦後』〕

⁵⁵⁷ 「正に一等地だったと思います。戦後復興とともに京橋、帯屋町界隈が中心地となりました。田園が出来た当時は喫茶店は中々ハイカラだったんじゃないかと思います。」。〔同上. 2023-03-16〕

⁵⁵⁸ オーテピア高知図書館回答. 2020-01-13.

○喫茶店の譲渡：56年⁵⁵⁹から63年末⁵⁶⁰までの間。



図57 「田園茶房」店舗裏の看板（赤で囲った部分）
左手遠景に高知城，手前の橋は「使者屋橋」。はりまや橋からの撮影か
撮影時期：62年ころ
提供：高知市民図書館



図58 はりまや橋（右手）の手前に見える「田園茶房」店舗裏の看板
使者屋橋からの撮影か
撮影時期：62年ころ
提供：高知市民図書館

○「[[「田園」店舗裏の] この川は高知城近くまで少なくともデパートの大丸前まで続いていたと思います。元々はお城への運搬運河でもあったようですね。撮影時は干潮、満潮時は足場の半分ぐらいまで潮が上がってた様です。小学生の時、都会高知市内に行くと河付近を歩くとドブ臭かったのは憶えています。田園の場所がここだったのはちょっとイメージが違いました。もっと帯屋町寄りだったと思ってました。」⁵⁶¹

⁵⁵⁹ 「さて、1957年の「高知商工名鑑」ですが、国会図書館デジタルコレクションで田園の代表者を確認して見たところ、やはりこの年も恒石重嗣さんでした。」。[オーテピア高知図書館回答. 2020-02-08]

⁵⁶⁰ 永野宣親名義。[高知市商工課編. 高知市商工名鑑. 高知市商工課. 1964-01-01, p.137]

⁵⁶¹ 安岡元彦. Eメール. 2023-03-15.

○ノンフィクション作家・上坂冬子の取材（77年1月10日）

「終戦後、恒石氏は郷里高知市で喫茶店を開業されたという。

「何せ武家の商法なもので⁵⁶²、学生グループ⁵⁶³が立てこんできて、『早う持ってきてくれ』などと言いますと、『こっちも一生懸命やっとなのに何をいうか』と言いつたりして仲々うまいこといきませんでしたわ」

とのことだが、売り上げはかなり順調だったらしく、氏はやがて喫茶店をたたんで貸店舗を建て⁵⁶⁴、現在はその家賃で悠々自適の生活とお見受けした。⁵⁶⁵

○山崎修（高知大学教授）

・「昭和三十五年の資料によると、高知県の喫茶店は、高知市の二十七店、中村市の二店、宿毛市の一店、計三十店というように、まことに寥々たる状態で、私は当時訪れた高知市内の喫茶店は、店名と所在地はたちどころに挙げる事ができたほどである。」⁵⁶⁶

⁵⁶⁶

・マッチ：製作時期は不明だが、写真が残っている：長方形の長辺の上の部分と下との割合は1：4で、地の色は上が白、下が淡い青。上の左側に薄い茶色でCOFFEE、下の右側に「喫茶」が黒く横に、その下に縦に白抜きで「田園」と書かれている。⁵⁶⁷

⁵⁶² 「販売は商売であり、事業である。昔の陸士の教育は金もうけのことは教えてくれなかった。また旧軍隊では事業の後始末は経理部の主計（※）がやってくれたので心配はなかった。事業の企画となると、経理つまり兵站のことも考えなくてはならない。」。[陸士44期・寺内美代重.“新聞販売三十年— 荆妻に感謝する”。『回想録：五十年の歩み』p.353]

（※）「日本陸軍の主計部ほど奇妙な官僚主義にとらわれた組織も珍しい。糧秣廠も、被服廠も「集積」するためにあるので、「支給」する場所ではなさそうだ。支給してしまうといかにも係が能力がないように見え、司令部にしかられる。そういう根性であろう。私たちの靴がなくなろうが、衣服がボロボロになろうが、めったに支給してくれなかった。そしてその集積品は多くの場合、敵の砲火で灰になってしまうのであった。私の場合でいうと、二年間のビルマ戦線生活で、何かを配給されたのは、ごくはじめの昭和十九年夏以前をのぞくと一切なかった。食糧は全部徴発、つまり略奪したり物々交換したりした。」。[会田雄次. アーロン収容所. 中央公論社, 1962, p.13]

⁵⁶³ ○「私が戦前、昭和六、七年ごろ初めて訪れた喫茶店は、新京橋中央食堂北方から西へ入る北側にあったムーランであった。当時のことなので、テーブルや椅子は普通のレストラン式のものであったが、旧制高知高校生をはじめ、この道の通人、ハイカラがここに屯していたもので、おそらく高知市における喫茶店の濫觴であったであろう。」。[山崎修

（※）. 喫茶店を歩く. 山崎修, 1979, p.61-62]

（※）1909年高知県安芸市に生まれる。京都大学文学部卒、高知大学教授。2006年没。[同書ほか]

○1922年創立の旧制高知高等学校は1950年廃止され、高知大学となる。[“高知高等学校（旧制）”. Wikipedia. (参照 2022-11-28)]

⁵⁶⁴ 恒石は借物件（登記簿第469号。高知市京町字京町南側二拾八番 宅地式拾四坪壹合六勺）上の喫茶店を譲渡し、別の場所に建てた物件を賃貸したと思われる。

⁵⁶⁵ 上坂冬子. 特赦：東京ローズの虚像と実像. 文芸春秋, 1978, p.87-88.

⁵⁶⁶ 『喫茶店を歩く』p.43.

⁵⁶⁷ 同書. p.42.

3.1.4 GHQ 出頭（45 年 12 月～47 年暮れ）

「ところがGHQの東京ローズや捕虜放送等についての調査⁵⁶⁸は、その頃からいよいよ本格的となり、しかも係官が逐次交代したためか、四五年一二月より四七年暮までの二年間に、実に二三回の出頭を命ぜられた。復員後、私は郷里の土佐に居住していたのであるが、交通事情の最悪だった当時は、岡山で乗換えた列車はいつも超満員で、便所も通路も人で埋り、四人掛の座席には八名が詰込み、用便にも窓から出入して車外で事を足さなければならなかった。座席にすわるなど思いもよらぬことで、岡山から横浜まで立ちん棒で行ったことも少なくなかった。私は大型の鞆に日の丸弁当三食と携帯用の折たたみの椅子を入れてゆくのが常であった⁵⁶⁹。

私以外のゼロ・アワー関係者は、ほとんど東京在住であったが、やはり頻繁に呼び出しを受け、彼女のため有利な供述をするよう心掛けたわけである。」（心理 314）

○面接要求（例）

（1）46 年 1 月

「終連報第三八五号 発終連

受天野中佐 昭二一.一.一七

時□一一三〇 担任高倉中佐 渉外係

主担任課 渉外課 電報ニテ連絡中

恒石中佐ニ面接要求ノ件

一九四六年一月十六日

東京民間情報部第八十帝都部隊 S/A 発 終連宛

一. 恒石中佐

二. 場所 東京民間情報部第八十帝都部隊
ヘンリー・L・ウァール中尉（西松組ビル）

三. 日時 一九四六年一月二十二日 又ハソ
レ以前

ポール・A・ホーガン」⁵⁷⁰

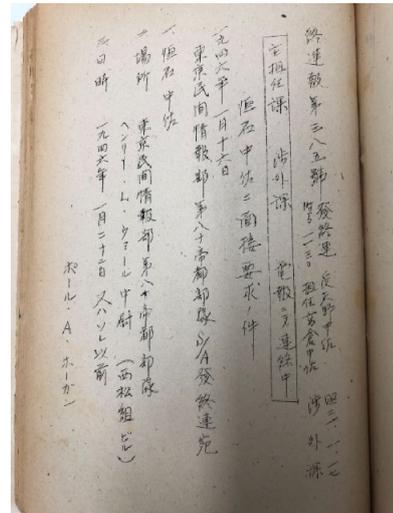


図 59 恒石面接要求（46 年 1 月）
防衛研究所戦史研究センター
所蔵（2023-02-09 掲載承認）

⁵⁶⁸ 本人の戦犯容疑の調査でもあった：「戦犯容疑者...」.[本書. p.205]

・「[放送要員の捕虜に] 選択の自由（※）を与えたことが私が戦犯にもならなかったポイントではなかった [か] と思います」.[恒石重嗣. 葉書. 1989-01-03]

（※）資料「捕虜の活用」

・遠縁の人 [「恒石家は曾祖母の里」]：「当時、お前 [恒石] はよう戦犯にならなんだと話した」.[2018-10-09. 電話]

⁵⁶⁹ 乗り換えの待ち時間を含めると片道丸一日以上かかった。[資料「高知・東京間の往来」]

⁵⁷⁰ 「防衛研修所戦史室. 昭和二〇.一二.三一 - 二一.一.二九 終連報綴 第一復員省史実部」

(2) 46年12月

「終連報甲第一五〇三号

発増沢連絡官 受 完倉事務官 昭二一・一二・一七

担任 完倉事務官 総務課

要処置	総務課	連絡班	普通
-----	-----	-----	----

恒石中佐出頭要求の件

○N・Y・デシャルーン少佐

○恒石中佐

高知県 高知市

○戦犯容疑者でない事を連絡されたい」⁵⁷¹

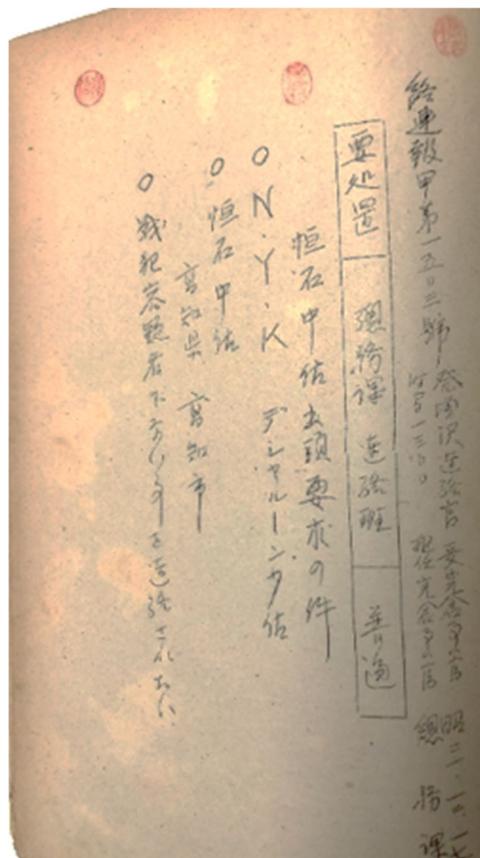


図 60 恒石面接要求 (46年12月)
防衛研究所戦史研究センター所蔵
(2023-02-09 掲載承認)

⁵⁷¹ 「防衛研修所戦史室. 昭和二一・一二・二. - 二一・一二・三一 終連報甲綴 8/9. 第一復員局 (※) 史実調査部. 0782」

(※) 「国立国会図書館リサーチ・ナビ「復員省関係資料」

<https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/jp/fukuinnshou.html>

こちらのサイトに、1945年11月陸海軍各省廃止→同年12月に各々第1復員省、第2復員省に改組→1946年6月内閣直属の復員庁(第1復員局、第2復員局)に改組→1947年10月第1復員局は厚生省に移管、第2復員局は短期間総理庁の直属となった後、1948年1月、厚生省復員局が業務を引き継ぐ。との解説がありました。.[浜松市立中央図書館回答. 2023-02-05]

3.1.5 1回目の渡米（48年9～10月）

「四八年九月一日付の別紙〔省略〕文書によってわれわれ八名は、アイバ戸栗の大陪審における証人としてサンフランシスコに向かうようGHQから要請された。皮肉にもわれわれは弁護側でなく検察側の米司法省証人としてであった。そのメンバーはNHKから秘書課長の池田幸雄氏を始め、ジョージ中元（満潮）、沖健吉、ケネス石井、メリー石井、松田エミ、交通公社の八木弘の諸氏と私であった。われわれは所要の予防注射を終わり、九月一五日ジェムス・R・F・ウッド氏の引率で、羽田から空路サンフランシスコに飛び立った。使用機はPAAの二階建のプロペラ機で、当時は途中ウエーキ島とハワイに着陸して給油などを行なうため、サンフランシスコまでに三六時間を要した。階下のルームは一〇名くらいは坐れる酒場になっていて、ソフトドリンクは無料サービスという具合で、ちょっとシャレていた。

敗戦直後の灰色の東京からわずか十数時間の飛行で底抜けに明るい常夏のハワイに降り立ち、食堂にはいってハワイアンを聞いていると天国へでも来たような気分になったことが、今さらのように思い起こされる。ハワイ市内を一巡してやがて再び機上の人となり、万里の波濤を越えて旅装を解いたのは、サンフランシスコ市中心部にあるホイトカムという華美ではないが渋くて風格のある落ち着いたホテルであった。これは米政府の方で指定したもので、二人一組で広い部屋を割当てられた。やがて始まろうとしていた東京ローズ裁判の法廷のある中央郵便局はすぐ近くにあった。」

（心理 318-319）

○「戦后米国司法省証人として渡米三回」（心理. カバーの著者紹介）

	主な滞在地	被告 (大陪審)	期 間	(心理)
1	サンフランシスコ	(アイバ・戸栗)	48. 9.15～10月下旬	318, 325
2	〃	アイバ・戸栗	49. 6.18～ 8月中旬	326, 338
3	ニューヨーク	(米陸軍プロボー軍曹)	49.10. 1～11月初め	241

現地の人脈

(1) 米軍人

「私は渡米にさきだち、杉田 [一次]⁵⁷²大佐 (元参謀本部第六課長、陸将) から戦前駐日の武官でもあり、戦後GHQにもいた親日のクレスウエル大佐宛の書簡を託されていた。大佐は当時サンフランシスコのアパートに姉さんとともに住んでいた。私は初対面であったが、一日そのアパートを訪ね、杉田大佐の近況を伝え、書簡を手渡した。それ以来たびたび電話連絡を受け、自家用車を駆ってサンフランシスコ近郊の名所旧蹟ことごとくを案内していただき、お蔭で地理にも明るくなり、気分的にも大変リラックスすることができた。帰国の際にはレドウッドの苗を贈られ、記念として大切に育てていたが、風土に合わなかったか、あるいは管理不良か残念ながら枯らしてしまった。今はただその苗の育て方を書いたカードのみが形見として手許に残っている。

四九年初夏、本裁判のため再び渡米のおりには土佐名産のサンゴの仏像を贈って大変喜ばれた。この際は約一ヵ月近くの滞在となったが、大佐は毎週末には必ず自家用車で迎えに来て下さった。そのご厚情は今なお忘れることはできない。」(心理 319, 321)

⁵⁷² 資料「杉田一次」

(2) 日系一世

「若くして大志をいだいてアメリカ大陸に渡り忍苦すること幾星霜、ようやく産をなし生活も安定して楽しい生活にはいっていた一世の人々は、日米開戦という思わざる不幸に見舞われ、強制的に抑留されることとなったため、急遽その資産を処分して出発せざるを得なかった。ほとんど元のモクアミとなってしまったのである。それにも拘わらず私共が渡米した二三年頃にはそれぞれ不屈の闘志を燃して営々として再建の努力を続けていた。そして気にかかる祖国日本の戦後の状態を伝えるニュースに飢えていた。私は毎晩のようにこれらの人々から招待せられ、戦後の日本から来た珍客として歓待された。当時渡米した日本人は私達の前には湯川博士⁵⁷³と朝日新聞の鈴木文史郎⁵⁷⁴氏くらいのものであったからである。

サンフランシスコには日米時事という邦字新聞があり、確か山梨県出身の浅野七之助氏が経営者であった。氏にはいろいろご配慮いただいたが、渡米以来日本食に不自由していた私にとって、浅野夫人の心づくしのお手製の寿司のご馳走は、大変に嬉しかった思い出である。」(心理 321-322)

「またサンフランシスコには博多弁丸出しの福岡県出身の方の経営する草野ホテルがあった。日本から渡米してここで世話になった人々は、ずいぶん多かったようである⁵⁷⁵。米本土の田舎に住む日系の人々もサンフランシスコへ出て来ると、必ずこのホテルに投宿していた。[中略] 田舎育ちの私は、故郷を離れて一〇日も経つと無精に日本食が恋しくなった。初めのうちは日本食のある食堂へ行って事足していたが、とうとう許可を得て高級なホィットカムホテルから逃げ出して、前記の草野ホテルに移った。ここではもちろん米食であり、味噌汁もあれば漬物もある。懐しい日本の方言も聞けるし、万事家庭的雰囲気肩をはずらさず楽しく過ごすことができた。」(同上.323)

573 「1948年 - プリンストン高等研究所客員教授。」. [“湯川秀樹”. Wikipedia. (参照 2023-01-08)]

574 ○正しくは鈴木文史朗。

○「(すずきぶんしろう、1890年3月19日 - 1951年2月23日)は、日本のジャーナリスト、新聞記者、評論家、政治家。**来歴** 千葉県海上郡豊浦(現銚子市)出身。本名は文四郎。旧制銚子中学校(現千葉県立銚子商業高等学校)、東京外国語学校英語学科卒業。三菱合資会社地所部を経て1917年東京朝日新聞に入社。シベリア出兵の従軍記者や、パリ講和会議などの特派員として活躍する。社会部長、編集局総務、論説委員、整理部長、名古屋支社長、取締役を歴任し、1942年常務取締役となるが、朝日新聞社内的人事で冷遇されたことから反緒方竹虎の急先鋒となった。敗戦直後退社し、1946年『リーダーズ・ダイジェスト』日本語版編集長となる。全国出版協会理事、NHK理事を歴任。1950年、緑風会に所属して第2回参議院議員通常選挙で当選するも、その翌年に死去した。[中略] [著書]『戦後のアメリカ第一信』講談社1948...」。[“鈴木文史朗”. Wikipedia. (参照 2023-04-26)]

○米本国向け放送(日の丸アワー)の部外からの主要協力者のひとり。(心理 201)

575 ニューヨークでも訪米日本人が日系一世のお世話になっている。[資料「塚田数平」]

3.1.6 2回目の渡米（49年6月～8月）

「被告アイバ戸栗に関する本裁判のための日本からの証人は、先にグランド・ジュリーに召喚せられた満潮、沖、石井、恒石のほかに別紙 [略] のごとく左記人々が追加された。

日向正三、五十嵐新次郎⁵⁷⁶、百塚 極 山崎 勇 メリー樋口 池田幸雄
岡本 茂 田辺ヨシトシ 黒石 ヨシオ ハリス杉山 森山 久 中村 サトシ
忍足信一 渡辺忠恕⁵⁷⁷ 二井 モトム

合計一九名の大世界で、その大部はNHKの職員であった。われわれは二四年六月一八日シドニー・ブラウン氏の引率によって機中賑かに大挙してサンフランシスコに繰り込んだのである。」(心理 326)

⁵⁷⁶ 「五十嵐 新次郎（いがらし しんじろう、1915年（大正4年）6月10日 - 1975年（昭和50年）12月5日）は、日本の言語学者。専門は音声学。東京出身。

人物 早稲田大学高等師範部を卒業後、日本交通公社、国際文化振興会勤務を経て日本放送協会に入局した。日本放送協会では海外放送課に勤めた。その後、1957年に早稲田大学教育学部英語英文学科教授に就任し、音声学などを教えた。教員としての職務の傍ら、『百万人の英語』など、ラジオ、テレビの英語講座（※）を担当し、その容姿から「ヒゲの五十嵐」として親しまれた。1965年3月から1966年3月まで日本テレビの『これがクイズだ』の司会者、出題者を務めた。早大教授時代の教え子に、東後勝明、田辺洋二、松阪ヒロシ、大田昌秀等がいる。[“五十嵐 新次郎”. Wikipedia. (参照 2023-01-08)]

（※）1968年の中川五郎作詞・高石友也作曲「受験生ブルース」に登場する「コガラシユウジロウ先生」は五十嵐のパロディか。

⁵⁷⁷ 「ところが、[43年] 十二月十五日から一〇日間ぐらいのうちに、あい前後して新しく放送部のスタッフになる四人の兵隊さんが前線の各地から呼び戻されて帰ってきた。それは、召集前は同盟通信社にいた渡辺忠恕君、伊藤忠雄君、田崎花馬君、それに外交官の小島大作君であった。それで、この時はじめて放送部という事務室をつくり、五人が机をならべて仕事をすることになった。[中略] 渡辺君は、お母さんがフィンランド人で、オーケストラの指揮者である渡辺暁雄さんの兄さんである。」。[『日の丸アワー』 p.58-59]

二世からの依頼

「私は出発に先立ち、小平利勝氏から面談を申し込まれた。氏は戦時中は外務省ラジオ室に勤務していて、われわれの対外宣伝にもよく協力してくれ、私とも比較的親しい間柄であった。戦後はA・P通信の東京支局にいた。彼の要望するところは「戸栗に対して軍が命令したと云えば彼女を救うことができるから、ぜひそうして欲しい」ということであった。日本側の謀略放送に参加して、その番組が世界的に名声を高めたのは彼女に負うところが大きいだけに、私も何とかして無罪になるよう努力したいことは山々であった。私は彼に善処を約して別かれた。私は己をむなしうして原点に立ちかえって熟考してみた。しかしながら、「命令あるいは強制によって」となると、それを裏付ける事実がないのでいたずらに偽証に終わるだけである。しかも彼女は前に述べたように巣鴨プリズン [に] 約一年近く拘置され、綿密な調査を受け、多数の関係者の供述も十分考慮された結果、証拠不十分、無条件釈放となった者が再び裁きの庭に立っている。そこにはそれを覆すだけの重大な証拠が新に発見されたか、あるいは米国内与論に押されて政治的意図の下に仕組まれた裁判となったのか、私はその判断に苦しんだ。

幸か不幸か私の立場は検事側の証人である。私は熟慮の末むしろこの立場を逆用して少しでも彼女に有利な証言をすることが現実に即した効果的処置であるとの結論に達した。その要点は次の四点であった。

- 1、ゼロ・アワーは米軍将兵の士気低下を図り、反戦気運を醸成する目的ではあったが、時間的余裕に乏しかったため成果をあげるに至らなかった。
- 2、ゼロ・アワー放送を行なった女性は、数名いたので東京ローズは必ずしも彼女とは限らない。
- 3、ゼロ・アワー放送と同じ性質の放送は日本軍の占領地域にあった数カ所の放送局からも行なわれていた。
- 4、彼女が放送の途中でもし嫌になって止めると申し出た場合には徴用令を適用してでも止めさせないつもりであった。

私は裁判進行中「正直な証人 (Honest Witness)」として新聞にも報道されていたので、その正直さを貫いて右の証言をすることが陪審員の心に訴えることができるものと信じた。結果的に見ると私のこの行き方はそれで良かったと思っている。というのは陪審員の印象では最初一二名中一〇名までが無罪を認めたが、二名の陪審員の強硬意見によって次に六対六となり、最後には裁判長からの示唆もあって三名だけが無罪を主張したが押切られている。そして全員一致をみるまでに実に四日を要しているのである。」(心理 328-329)

「また昭和五二年彼女がフォード前大統領への第三次の特赦請願の際には、私の署名を強く望まれ⁵⁷⁸、特赦となるや改めて彼女と弁護士のコリンズ二世、戸栗救済に当たっていた日系市民協会会長の上田氏の署名入りのお礼状（別紙 [p.359. 略]）を受取ったことから見ても、私の証言は弁護側には有利で、それなりに評価されていたことが証明された次第である。つまり小平氏の、彼女を何とかして救いたいと念願した気持も、私を含めてゼロ・アワー関係者の気持も皆同一であって、それぞれの立場に従って登る道こそ違っていても、一様に富士山頂を目指したことに変わりはないのである。」（心理 329）



図 61 法廷の恒石

出典：米議会図書館ホームページ
Portrait of Shigatsugu Tsuneishi at trial
of Tokyo Rose（参照 2022-01-06）
<https://www.loc.gov/item/2007675010/>

⁵⁷⁸ 「ところで、ひとしきり思い出話が続いた後、恒石氏は切れ長の目をやや緊張させて内ポケットから白い封筒を取り出すと、「**実は署名がわりにこれを……**」と私の前に置いた。つまり東京ローズ特赦嘆願の署名は辞退したいというのである。理由は、自分のような立場の人間が署名することによって先方の逆鱗に触れることもあり得るのではないか。自分としては一日も早く彼女が特赦されるのを望んではいるけれど、名前を出しては事を荒立てることもあり得るゆえ、名よりも実、即ち支援活動のためのカンパを提供して意思表示に代えたい—とのことであつた。そこで私はすかさず本論に入り、「実は支援委員会としては、特にご署名を名指しで要望しており、恒石さんは彼女に対してマイナスの発言をしなかったと、極めて好意的なのですが……」と語りかけるや、恒石氏の頬にパッと血が漲った。「ほんとうですか！」そしてそのあと、恒石氏はふっと息を吐き出すようにしながら、感極まった表情で、「**そうでしたか。やっぱり先方に通じていましたか**」と言うと、即座に筆をとり、第一ページに見事な筆蹟で署名を記されたのである。「元大本営陸軍部宣伝主任参謀 陸軍中佐 恒石重嗣 一九七七年 一月十日」. [『特赦』 p.88-89]

証言・帰国

「そして私の証言の基本姿勢ともいうべき点は、
第一に日本軍人として堂々はずかしくない言動をすること。
第二に真実を述べる。
第三にできる限り被告に有利な雰囲気を作るよう心掛ける。
第四に余計なことを述べて上司や周囲の人々に迷惑を与えないよう注意する⁵⁷⁹。
ことであった。私の証言は延五日間に及び、堅い木の腰掛で連日行なわれたので、最終日には背中が痛くなっていた。そして私の証言の八割くらいの時間は、コリンズ弁護士の反対尋問にあてられ、相当執拗に喰い下られた。」(心理 334)

「……私はトム・デ・ウォルフ検事宛に [49年] 八月一二日 (三三六―三三七頁) 書簡を送った。私はその書簡の中で、右の事情 [妻の健康状態] と私の証言はもういい尽して何もいうべきことは残っていないし、今後予想される元捕虜達の証言は彼等自身の立場を弁護するためのものでさほど重要ではないとつけ加えた。その結果、帰国が認可されたので、単身サンフランシスコ―ハワイ経由で帰国の途についた。裁判は被告の病気 (刑務所医師アドルフス・バーガーの診断では赤痢) のため一時中断することもあったが、多数の証人を繰出したので延々約一〇〇日近くを要し、公判が終結して刑の宣告をされたのは一〇月六日で、私が帰国した八月中旬からいけば約五〇日後であった。私の帰国理由は妻の健康問題もその一つではあったが、もうひとつは仕組まれた裁判の結果はおよそ予見せられたことで、それを見届けるためにわざわざ荏苒二ヵ月近くも滞在する気持にはなれなかったのである。ただ帰国中も続行された証言を知るために、地許のサンフランシスコ・クロニクル紙およびエキザミナー紙の記事収集をB氏に依頼して帰ったが、それは数葉の写真とともに本裁判の経過を物語る貴重な資料として今もなお手許に保存されている。」(同上.338)

⁵⁷⁹ ○「なお文化キャンプの捕虜達が放送を開始する直前に (私が仏印出張中)、小岩井少佐が彼等に命令したことは捕虜放送のところで記述したとおりであるが、このことと私が命令によらず彼等の自由意志を尊重したことを混同したコリンズ弁護士から執拗に尋問を受けたけれども、私としては小岩井命令にはいっさい触れずに終わった。それは私の基本姿勢第四を貫くためであった。」(心理 339)

○池田徳眞はプロボ―裁判前のFBIとの打ち合わせで、この「小岩井命令」が問題になったと記している。[資料「小岩井少佐の「命令」翻訳」]

有 罪

「検察弁護双方から七〇数名の証人を連日証言台に送り、激しい論争を繰返した本裁判も、[49年]七月五日開廷以来約一二週間を要してやっと立証と反証の作業を終わった。九月二〇日より四日間にわたり検察、弁護の両者は陪審員に対して最後の論述に精魂を傾けた。九月二六日から行なわれた陪審員の審議は四日後の二九日夕刻ようやく結論に達し、彼女は有罪と決定された。

書記官から発せられたギルティーの一声に、傍聴者はいっせいに嘆声をあげ、アイバの肉親達は身も凍る思いであった。気丈な被告はただ唇をかんでじっと堪えていた。最後まで無実を信じて来た彼女は、今や五年ないし死刑の宣告を受ける身となったわけである。やがて一〇月六日ついに禁固一〇年罰金一万ドルの重刑が宣告されたのである。」(心理 353)

3.1.7 3 回目の渡米（49年10月～11月）

渡米要請

「そして [プロポーは] 一九四九年九月二日逮捕せられ、F・B・Iのジョージ・デヴィス (George Davis) によって告訴され、反逆罪容疑のゆえをもってニューヨーク市役所の建物内の法廷で裁判せられる身となった。その予審のため、別紙 [本書 p.215.図 63] のごとく日本から私のほか次の人々が政府側証人として渡米を要請された (一九四九年九月二九日)。[中略] 私がプロポー⁵⁸⁰と交渉を持ったのは、駿河台での放送のみであったが、彼は比島において一米軍大尉の銃殺事件に関連があり、台湾の収容所にいたときも必要以上に積極的に日本軍へ協力したなどの点が問題になっていることを仄聞していたので⁵⁸¹、私は今度の渡米は極力回避したかった。というのは比島や台湾のことに加えて東京での出来事の真実を私が述べることは、どうも彼を重罪に陥れる結果を招く公算が大きいと思えたからである。

そこで私は妻の病気 (同年六月から始まった東京ローズ裁判の証人として渡米していたが、妻が脚気のため療養を要する旨の連絡を受け、他の証人よりも約一ヵ月半早く単身帰国したのが八月中旬であった) を理由に渡米を断わり、東京までの協力に止めるよう高知県知事から外務大臣宛請願したけれども、占領下の当時の状況から見てGHQが承認するはずもなく、再三再四長距離電話や電報によって警察当局を通じて渡米を要請してきた。最後には逮捕してでも連行するとまで言って来る始末で、警察としても立場上困るからぜひにとということになり、私も米司法省の証人として行くのに逮捕されてまで出掛けるのは嫌で、とうとう第三次の渡米という羽目になった。」

(心理 239、241)

⁵⁸⁰ 「やがて日米開戦となり、一九四二年コレヒドール要塞の陥落したとき日本軍の捕虜となったが、このとき彼 [プロポー] は軍服を脱いで僧衣をまとい、日本軍へ協力を申出た。後述するように、彼は比島においても台湾へ移送されたときも積極的に日本軍に協力し、一九四三年対米謀略放送要員として東京に転送せられた後は、駿河台キャンプにいて放送原稿を書き、放送に当たっては司会者として立派にその職責を果たした。」 (心理 239)

⁵⁸¹ 中枢部にいた軍人の互助ネットワークがあったようだ：(例)「しかるに敗戦を迎え、東海林支隊長が戦犯容疑としてジャワに連行された。そして、その裁判の証人として私が蘭印側の指名を受けた。当時の情勢上、私がジャワに行くことを心から心配した原四郎君のはからいで、稲葉正夫先輩宅に広瀬栄一、原四郎、梶原重美、飯尾祐幸の諸兄が一夜会同、出頭すべきか否かについて心からのご協議を頂いた。その結果、志村陸城君、原四郎君の温かいご尽力により、報復を回避する地下潜行と相なった次第である。」 [山下豊 (恒石と同じ 44 期)。“徳運の要”。『回想録：五十年の歩み』 p.233]

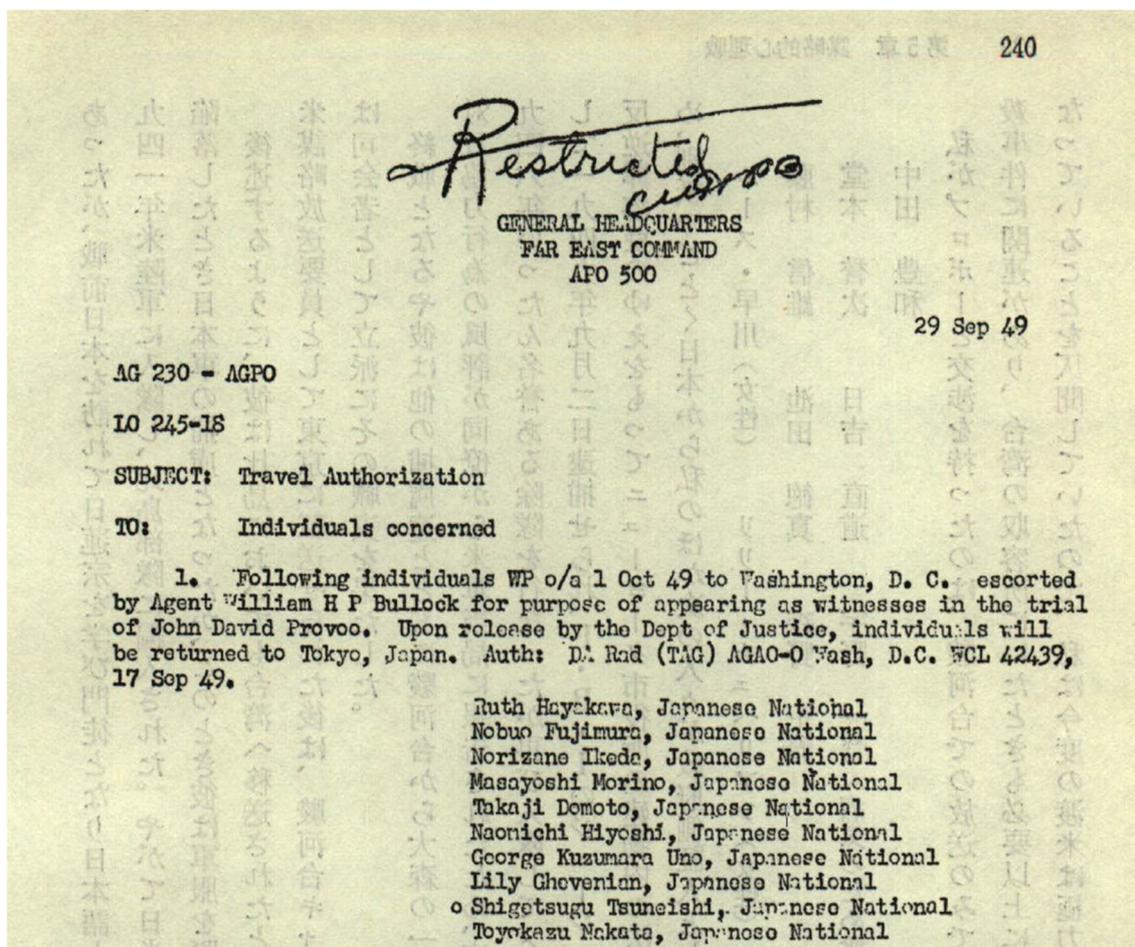


図 62 GHQ 発行の Travel Authorization

サインは B. E. Craig 中佐 (Lt. Col.)

出典：(心理 240. 部分)

○池田徳眞

「このように [B 級 C 級の] 横浜裁判はどんどん続けられていたのだから、駿河台分室のおもだった所員は自分たちが裁判にかけられる危険を感じ、お互いに連絡を取るようになっていた。一口で言えば、各自の自己防衛のために連絡網を作っていたのである。それゆえ東京ローズの情報、恒石さんが四国の高知市からたびたび総司令部 (GHQ) に呼び出されたこと、またゼロ・アワーに関係した NHK — 昭和二十一年三月からこう略称した — の二世の人が総司令部に呼ばれて F B I の検事に調べられた、というような各種の情報が私の耳にはいつてきた。なにしろ相手は、東京ローズを再逮捕して起訴した世界的に悪名の高い F B I の検事のことであるから、表面は東京ローズだけを調べるようなふりをしているが、どんな別の狙いを持っているか分かったものではない。「油断はできないぞ」と、私は神経の感度のボリュームを最高にして、F B I の動きに注意していた。昭和二十四年七月ごろ、こんどは駿河台分室の人びとが、総司令部に呼ばれて、いろいろ質問され始めた。私は「いよいよ来たな」と思った。八月になって、三、四人の者が呼ばれたと思われるころ、とうとう私にも呼出状がきた。

呼ばれた場所は、マッカーサー元帥のいる総司令部の建物ではなく、第五空軍の司令部になっていた馬場先門の元の明治生命ビルであった。なんのために呼ばれたのだろうと訝りながら、しばらく待っていると、フレデリック・ティルマン (Tilman, Frederick) という三五歳ぐらいの人が現われた。彼はそう名のっただけで、身分は言わなかったが、大柄で目の鋭い人であった。私はその時が初対面であったが、彼はFBIの検事だったのである。彼は私を粗末な木の椅子に坐らせて、二時間半質問した。その内容は、大森キャンプ (東京俘虜収容所) で俘虜を選んで文化キャンプ (駿河台分室) に連れてきた時の事情、文化キャンプの組織と放送を開始した時の事情、俘虜にくださった命令の英文の内容、ウィリアムズの放送拒否の事情、プロポーを司会者を選んだ理由等であった。どうも、プロポーのことについて根掘り葉掘り聞くから「ハーン、これはプロポーが狙いだな」と察した。しかし、油断は禁物だから、十分に注意して言葉を選んで答えた。[中略] 九月二十三日は、秋分の日で休日である。それで私は、いつものように友人の家に行ってブリッジをしていた。そこへ娘から急用の電話がかかってきた。出てみると「いまアメリカ人が家に来た。そして十月一日までに証人としてワシントンに来てくれ」と言い置いて帰ったとのことである。それで翌日すぐ、藤村さんと私は、いっしょに連れ立ってGHQのティルマン氏の所に行った。彼の話によると「十月からニューヨークの連邦裁判所で、ミスター・ジョン・デビッド・プロポーの反逆罪に対するグランド・ジュリー (大陪審) がおこなわれる。それで、日本から一五人ぐらい検察側の証人として出廷してもらうことになると思う。二人も行ってくれ」とのことであった。そして「明後日午前十時にここで同行する人を紹介するから、その人といっしょに注射をしに行ってほしい。日本はまだ独立国ではないから、パスポートはいらない。その方の手続きはこちらでしておく。出発の日を追って知らせるから、自分によく連絡するように」と付け加えた。」⁵⁸²

⁵⁸² 『日の丸アワー』 p.154-157.

出 発

「われわれ一行はウィリアム・H・P・ブロック氏の引率の下に、一〇月一日羽田空港発、ウエーキ島、ハワイ、サンフランシスコを経て、一路ワシントンに向かった。」
(心理 241)

○池田徳眞

「[10月1日] 九時三十分ごろ、羽田空港についた。乗る飛行機は、十一時四十五分発のホノルル経由サンフランシスコ行きのパンアメリカン機であるから、まだ二時間以上ある。それで証人一同が、ロビーで勢揃いをした。引率者はミスター・ブーロック、文化キャンプ関係は藤村信雄、森野正義、池田徳眞、菱刈隆文、堂本誉次、日吉直道の六人、NHK関係がルース・早川（寿美子）、リリー・ゲベニアンの二人、フィリピン関係が中田豊一、服役中の藤田曹長、それに離れて立っていたが米軍のリチャード・榊田中尉も同行者であったのだ。すなわち、引率者をふくめて総勢一二人であった。」⁵⁸³

○10月1日出発の証人

GHQ リスト (心理 240)	(心理 239)	『日の丸アワー』 p.162
Ruth Hayakawa	ルース・早川	同 左
Nobuo Fujimoto	藤村信雄	〃
Norizane Ikeda	池田徳眞	〃
Masayoshi Morino	森野正義	〃
Takaji Domoto	堂本誉次	〃
Naomichi Hayashi	日吉直道	〃
George Kazumara Uno	病気のため渡米せず	〃
Lily Ghevenian	リリー・チェベリアン	リリー・ゲベニアン
Shigetsugu Tsuneishi	恒石重嗣	なし ⁵⁸⁴
Toyokazu Nakata	中田豊和	中田豊一
		菱刈隆文
		藤田曹長
		リチャード・榊田中尉
計 10 名	計 9 名	計 11 名

サンフランシスコ

「私 [池田] は生れて初めて、アメリカ大陸にその足を印したのであるから、好奇心と喜びとで目を輝かせていた。ミスター・ブーロックは「今夜十一時四十五分の飛行機で、すぐワシントンDCに向って飛ぶ予定だ」と言っていた。われわれはみんなで、待合室の売店を見ながら、しばらく待っていた。ブーロック先生は、しきりに電話を

⁵⁸³ 『日の丸アワー』 p.162.

⁵⁸⁴ 池田の記憶違いか. [p.218.脚注.585]

掛けているが、何か問題がある様子である。三〇分ぐらいした時、彼は藤村さんの所にきて「東京からの連絡が、うまくこちらに通じていないので、今夜のワシントン行きはむずかしい。サンフランシスコに一泊して貰わなければならない」と言った。これに付け加えて「今日は日曜日の晩なので、係官が事務所にも自宅にもいないので連絡が取れない。なお私は、努力を続けてみる」といってどこかへ行ってしまった。そしてなお一五分ぐらい、空港のビルの出口で待っていると、一台のバスがやって来た。係官が降りてきて、「証人の人は、このバスに乗って下さい」という。「どこのバスか」と問うたら「移民局のバスです」との答である。「どこへ行くのか」と聞いたら「移民局の収容所 (Detention House) です」との答だ⁵⁸⁵。これを聞いて、藤村さんはじめみんな怒りだした。みな「ブーロックはどこだ」と叫び、二、三人が走って空港ビルの中を探した。しかし彼はもうどこにもいない。形勢非なりとみて、彼は囚人の藤田氏だけを連れて逃げてしまったのである。ひどい人もあったものだ。藤村さんは移民局の役人に、大声で“I protest.”と抗議の言葉を叫んだ。[中略] 今朝は、十月三日 (月) である。九時三十分になった時、出発してくれとやってきた。[中略] この時、サンフランシスコの郵便局の二階の法廷では、東京ローズの裁判が大詰めにきていた。それはこの四日前の九月二十九日に、陪審員全員一致で「有罪」と決定したことを裁判長に報告し、この日から三日後の十月六日には、禁錮一〇年罰金一万ドルの有名な判決が下されるのである。こういう東京ローズ裁判の最高潮のときに、いま一つの反逆罪のプロボア裁判の証人たちが日本から来たというので、ニュース・バリューはあるし新聞記者は沸いていた。新聞記者への答は、おもに藤村さんが当たった。彼の口は堅く「ジョン・デビッド・プロボアが、戦時中他の俘虜といっしょに東京から放送をしたことは事実である。しかしこれから、グランド・ジュリーの証人としてニューヨークに行くのであるから、そのほかのことは何も言えない」と沈黙した。[中略] 飛行機は、約三〇分遅れて飛び立った。空から見るサンフランシスコの町は実に美しかったし、サンフランシスコ湾や太平洋が月に照らされて美しく光っていた。[中略] 私は戦時中に俘虜放送をしながら、夢に見たアメリカ大陸の上をいま飛んでいるのだから、感情が昂って寝られなかった。JOAK の五スタからおこなった短波放送は、このカリフォルニアでよく聞えたのであろうか。あの俘虜による対米謀略放送は、何かじっさいに効果があったのであろうか、などと考えていた。」⁵⁸⁶

⁵⁸⁵ 「反逆罪予審 (probe) の証人、留置さる

サンフランシスコ、10月4日. AP ニューヨークにおけるプロボア (John David Provoo) に対する反逆罪容疑の告訴 (complaint) に基づく予審のため、東京から空路到着した11人の日本人証人が本日移民局によって留置された。[米国] 政府が用意した彼らの交通費が不足しているという書類上の不備だという。11人の中の恒石重嗣中佐 (Colonel) は、先週アイバ・戸栗・ダキノ夫人が当地で有罪判決を受けた「東京ローズ」反逆罪裁判における政府側の中心となった証人 (a star government witness)。11名はすべて、プロボア—33才、カリフォルニア州サルサリート、最近陸軍軍曹を退役 (discharged) — 事件の連邦大陪審での政府側証人。政府側によればプロボアは日本から米軍に対し放送を行なった。[Treason probe witness held. *The Spokesman-Review* (Spokane, Washington). 1949-10-04, p.27. (編者訳)]

⁵⁸⁶ 『日の丸アワー』 p.171-172, 175-178.

ニューヨーク

「ワシントンでは約二週間滞在し⁵⁸⁷、検察当局から聴取を受けた後、列車でニューヨーク入りした。指定されたホテルは確か百十丁目くらいのハーモニーホテル⁵⁸⁸でセントラルパークやタイムスクエアなどニューヨーク中心部に程近かった。法廷は下町の市庁舎の中にあったので、地下鉄によって毎日往復した。」(心理 241)



図 63 ニューヨーク連邦裁判所
(赤の矢印の建物)

出典：Wikimedia Commons
File: Foley Square jeh. JPG

⁵⁸⁷ ○「[池田は] ...午後 [中略] ワシントンのインターナショナル空港に到着した。それは、一九四九年（昭和二十四年）十月四日火曜日のことであった。」[『日の丸アワー』 p.184]

○「...恒石さんは、[中略] ...遅れて十月二十一日にフィリピン関係の柳瀬庄一元憲兵大尉と二人でワシントンに来られた。」[同上. p.163/資料「フィリピン戦犯裁判」]

○池田と 恒石の記述は食い違う。恒石はあるいはサンフランシスコで池田ら一行と別れ、東京ローズ裁判の判決に立ち会ったものか。

○「十月二十四日、[ワシントンの] シャムロック・インの全員が、いよいよニューヨークに行くこととなった。」[同. p.200] という池田の記述が正しければ、恒石のワシントン滞在は3日間。

⁵⁸⁸ ○恒石は昼間でも暗いビルの谷間にあるこのホテルが明るく照明していること(※)や夜のブロードウェイを見て、ガダルカナル戦を思い出したという：「夜襲 [で米軍の陣地を抜く] というが、日本と米国では「夜」の観念が違う。夜襲が成り立たない。戦後証人で米国へ行ってそれがよく分かった。」[DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』]

(※)「そして投宿第一夜ハーモニーホテルの四階に泊っていた私は、深い眠りに落ちていたが、夜明けを告げたのは腹の虫であった。しかし周囲は真暗である。時計を見るとやがて午前八時を指しているのではないか。不思議に思ったがやがてやっと気付いた。迂闊にも私は高層ビルの立並ぶニューヨークに来ていることを忘れていたのである。ホテル周辺のビルは平均八〇階だから、四階は地下室同然であり、太陽の光を望むことはとうていできないことで、一日中電灯のお世話にならなければならない。」(心理 245)

○戦時中の日本では夜は暗いのが当たり前だった：(善通寺捕虜収容所の例)「室内電灯ヲ増加ス [捕虜の] 各室二〇 W 二 回 廊下八 W . 事務室四〇 W」.[善通寺市立図書館蔵『善通寺俘虜収容所 情報綴』 A-75]

横山隆一

「約二週間ののち、この〔ワシントン DC での〕静かで楽しい生活から一転して俄かに世界経済の中枢たる喧騒のニューヨーク市に移った。指定されたホテルはハーモニーであった。確か百十丁目くらいであったかセントラルパークやタイムスクエアなどもさほど離れてはいなかった。〔中略〕しばらくして食堂に行つてのかえりにエレベーター入口でバツタリと短軀の日本人に出会った。よく見れば「フクちゃん」で名を売っていた漫画家横山隆一君ではないか。まったくの奇遇というほかはない。

〔中略〕そんな彼は義兄弟の近藤日出造氏と一緒にだったと思うが、戦後いち早く渡米していたのである。「部屋はどこか」と聞くと「セブンアップ」と答えてサッソウと七階の部屋へ登って行つた。当時飲物として「コココーラ」と「セブンアップ」が出始めた頃であったので、シャレの上手な彼が残したこのほほえましい一言は薄暗い地下室のような四階の住人にはいまだに忘れることができない。あれから三〇年近くを経た五二年一月、彼はわれわれの同窓会（昭二会）に出席のため土佐へ帰つて来たが、やはり「セブンアップ」が話題にのぼつた。」（心理 245-246）

○ニューヨーク滞在：恒石は 49 年 10 月、横山隆一は 51 年秋だとしている。

「横山氏著作の「わが遊戯的人生」を確認したところ、昭和 26 年 9 月 4 日からサンフランシスコ講和会議の取材のため訪米したという記述はありますが、昭和 24 年 9 月に関する記述は見つけられませんでした。

『わが遊戯的人生』横山隆一/著 日本図書センター 1997 年刊 ※貸出可。複写対応可。資料番号：1102258405 P139～143「講和会議」

《昭和 26 年 9 月 4 日からサンフランシスコの講和会議を取材するため、8 月の末に日本を出発しました。（中略）読売の近藤日出造は義兄弟ですから、私の渡米が近藤に知られないわけはありません。つつ抜けです。近藤は、社長の正力松太郎さんに毎日から横山が行くそうだがと一言いったら、正力さんは「君はすぐ行くんだ」と一カ月も前に出発させられました。（以下、省略）》などの記述あり。〔以下略〕⁵⁸⁹

○「シスコへ叔母が迎えに来ましたので、会議が終わつて叔母に連れられてロスへ着き、そこからニューヨークへ行きました。また、清水崑君が迎えてくれました。〔中略〕アメリカへ来て床屋へ行きたくないので清水君に頭を刈ってもらおうと、彼の宿をたずねました。宿の受付で清水君の名をいうと「オーセブンナップ」と笑いながらいたので、崑ちゃんも相当顔だなと思ひました。崑君にはさみで刈ってもらいながら、どうしてみんなが笑うんだと聞くと、仕事用に大きな机が必要で、下の受付にあった横二メートルぐらいの机を借りて、クレーンでつるして窓から入れたというのです。永住でもする気かと私も笑ひました。」⁵⁹⁰

⁵⁸⁹ オーテピア高知図書館回答. 2022-09-27.

⁵⁹⁰ 『わが遊戯的人生』 p.141, 143.

帰 国

「やがて予審が始まったけれども、私は証言台に立つことはなかったが、一応起訴に決定をみて⁵⁹¹私共証人は約二週間のニューヨーク滞在の後、帰国の途についた。」
(心理241)

○池田徳眞

「いよいよプロポー裁判のグランド・ジュリーに、証人として立つ時がきた。ニューヨーク州の連邦裁判所は、ニューヨーク市のダウントアウンの中心にある市役所（City Hall）にごく近い、フォーリー広場（Foley Square）のニューヨーク地方裁判所ビル（N.Y. County Court House）の中にある。二〇階ぐらいの建物だが、周囲にも高い建物がたくさんあるから、高いビルとは思えなかった。一七人の証人のうち、森野君、菱刈君、ハリス杉山君はすでに帰ってしまったし、メリー・樋口とリリー・ゲベニアンの二人は連絡がないのでいつ立ったか知らない。そして残りの一二人の証人は、次のように立った。

一九四九年十一月

- 四日 榊田、柳瀬
- 五日 中田、藤田
- 七日 山中、恒石、石井
- 九日 池田、藤村
- 十日 ルース・早川、日吉、堂本」⁵⁹²

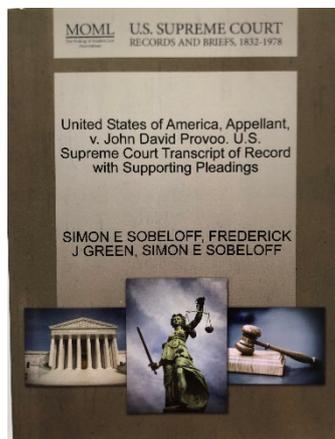


図 64 プロポー裁判の記録

出典：U.S. SUPREME COURT RECORDS AND BRIEFS, 1832-1978

⁵⁹¹ 「そしてその結果は、どうであったかと言うと、大陪審が「起訴」、第一審が「無期懲役」、控訴審が「無罪」、最高裁が「無罪」であった。しかし無罪は、零ではないのだ。彼は控訴審で無罪になるまで、三年半以上勾留されていたし、新聞雑誌では散々にたたかれた。ことに『コスモポリタン』誌には「臆病者の場合」（Case of a Coward, 執筆者は Mr. Clark Lee と記憶する（※））という題で書かれたりした。それでプロポー氏の奥さんも耐え切れなくなって、離婚してしまったとのことである。それは「無罪」という言葉だけで片付けるには、あまりにも残酷な人権の侵害であった。」．[『日の丸アワー』 p.193]

（※）『駿河台分室物語【本編】』iv.に関連した記述がある。

⁵⁹² 『日の丸アワー』 p.203-204.

3.1.8 警察予備隊（50年8月）

○池田徳眞

「一九五〇年⁵⁹³6月、朝鮮戦争（Korean Incident）が勃発、日本駐留のアメリカ軍部隊が次々と朝鮮に送られた結果、日本の防衛が手薄になった。これを補強するため、D・マッカーサー将軍は日本政府に対し警察予備隊（Police Reserve Force）⁵⁹⁴という軍隊の萌芽になるもの（embryonic army）の創設を命じた。これが保安隊（Self Defense Corps）に発展し、今の自衛隊（Self Defense Forces）と呼ばれるものになった。発展の過程で、防衛庁（Defense Agency）が旧軍人を募集したことがある。戦時中恒石元中佐と同じく、南洋で戦略的な宣伝を実施したF機関長の藤原元中佐が応募した。藤原岩市氏は特に問題なく採用された⁵⁹⁵。だが採用担当官が森野〔正義〕に恒石重嗣氏の性格を尋ねると、「この人物は将来日本の防衛を担う幹部（defense officer）としてまったく不適格だ」と大反対したそう。その結果、恒石元中佐は不採用となった。

森野はさらに恒石氏へ「あなたのような方が防衛庁へ奉職されようとするのは間違っています。どこか別の所で働き、ご自分の人格を磨かれるべきでしょう」という手紙を送ったと、池田に個人的に語った。この点に関し恒石氏は「森野氏のご高説を拝読し、恥じ入りました」というやや皮肉な調子の手紙を池田に寄こした。池田はどちらが正しいか知らない。しかしひとつ確かなことがある。つまり片や恒石、そして片

⁵⁹³ 原文では1951年と誤記。[*Bunka Camp Story*. p.440]

⁵⁹⁴ 「日本において1950年（昭和25年）8月10日にGHQのポツダム政令の一つである「警察予備隊令」（昭和25年政令第260号）により設置された準軍事組織。1952年（昭和27年）10月15日に保安隊（現在の陸上自衛隊）に改組された。[中略]また、指揮系統をより強固なものとするため、旧軍軍人の追放解除も検討されるようになった。まず[51年]6月1日、旧軍の影響が少ないものと期待された陸軍士官学校58期生より、245名が第1期幹部候補生として入校したが、58期生は少尉任官が終戦直前（※）であったために実務経験が乏しく、期待されたほどの効果はなかった。このことから、逐次に佐官級まで募集が拡大され、10月1日には405名の元佐官が、12月5日には407名の元尉官が採用された。」。[“警察予備隊”.Wikipedia.（参照2023-07-02）]

（※）45年7月：「私は陸軍航空士官学校第五八期生である。終戦の昭和二〇年七月一日陸軍少尉に任官した陸軍最後の青年将校である。」。[藤本一孝, 大東亜戦争と現在の日本. 展転社, 2006, p.6]

⁵⁹⁵ 藤原岩市（陸士43期）

「... [54年] 既に自衛隊（※）に参加している先輩や同期生から、自衛隊に入隊方勸奨を受けた。旧軍陸大出身参謀経歴者四名のみを最終採用するということであった。この四名を特一佐（内一名は二佐）と俗称し、昭和三十年初秋入隊することになった。当時陸上自衛隊一佐階級三百二十六名の最後尾の序列に編入された。私の陸士一期後輩の逸材原四郎君は二佐に編入された。旧軍高級将校の自衛隊採用人事には、GHQも絡んだ微妙な事情が介在していたようである。」。[『留魂録』 p.290]

（※）「1954年（昭和29年）7月1日設立。」。[“自衛隊”. Wikipedia.（参照2023-01-15）]

や村山〔有〕と森野の確執は死ぬまで和解することはない⁵⁹⁶。なぜならすでに歴史上の事実となった東京ローズ裁判を、なかったことにはできないからだ。⁵⁹⁷

○陸士 44 期生

・林 一

「終戦・公職追放で、だれもがその日の糧を得ることに精一杯であったとき、中村雅郎君は、東京・渋谷に自営するレストラン及びコーヒー店を同期生無料集会所にして、米軍の目をはばかりつつ、ひそかに連絡・親睦の輪を広げていた。このような雌伏数年、朝鮮戦争の勃発で情勢は一変して二十六年八月十六日、陸士四〇期以降の公職追放解除、一部同期生に対する警察予備隊入隊勧誘となり⁵⁹⁸、事態は好転した。

二十七年一月、「四四同窓会申合」ができた。〔中略〕この「申合」には、殿下のおわしまさぬ期の特徴である“対等に本音を言える風とおしのよさ”がでており、ことさらに会長制を採っていない。⁵⁹⁹

・瀬島龍三

「1956年（昭和31年）、シベリア抑留から帰還した。〔中略〕。設立直後の自衛隊に入るよう原四郎から再三の誘いを受けたが、瀬島の長女が反対したため断念した。また、砺波中学校の同級生であり元郵政相の片岡清一から、政界入りの誘いもあった（共同通信社社会部編「沈黙のファイル」p.244）。

瀬島はシベリアからの復員兵の就職斡旋に奔走し、1958年に伊藤忠商事に入社する。入社前に瀬島は入社面接を拒否し、その代わりに手紙を送っている。面接を拒否した理由は「そこまで落ちぶれたくないというプライドだった」と後に語っている。しかし契約内容は嘱託採用、給与は係長待遇、契約は毎年更新という内容だったが、妻の清子はこれを喜び、採用通知書を神棚に飾った。⁶⁰⁰

・橋本選次郎

「最近になって世の中は大分変わってきた。自衛隊が日の目を見るようになった。どこまで見届けられるか長生きしたいものである。（昭和五十七年二月）⁶⁰¹

⁵⁹⁶ 恒石, 村山, 森野は「駿台会」会員。〔本書「3.2.9 駿台会」〕

⁵⁹⁷ ○『駿河台分室物語【本編】』p.290。

○恒石の『心理作戦の回想』にこの「防衛庁不採用」の記述はない。

⁵⁹⁸ (例) 浦茂：「昭和二十七年三月〔民間二社の総務部長と〕内閣調査室客員兼務。この頃から澎湃として再軍備問題が起り、先輩同友と研究し、特に航空再建を図る。二十八年吉田首相に航空軍備創設計画を具申（138頁参照：略）昭和二十九年八月航空幕僚監部装備第一課長。装備の基本を司る。装備部長は源田実空将補。三十年十一月防衛部防衛課長。航空防衛の基本、部隊編成を司承。」。『人生遍路八十年』p.303]

⁵⁹⁹ “第四十四期生会小史”。『回想録：五十年の歩み』p. xxi.

⁶⁰⁰ “瀬島龍三”。Wikipedia。（参照 2023-01-15）

⁶⁰¹ “回想の一端”。『回想録：五十年の歩み』p.369.

『恒石重嗣年譜』

3.2 主權回復

『恒石重嗣年譜』

3.2.1 金剛建設（株）取締役（52年9月）

○会社概要⁶⁰²

- ・52年9月8日登記（この年5月の陸海軍関係者による高知県軍恩連盟結成⁶⁰³直後）
- ・商号・本店：金剛建設株式会社・高知市昭和町六拾九番地
- ・目的：土木建築請負業、関連する一切の事業
- ・公告をする方法：高知市に於て発行する高知新聞に掲載する⁶⁰⁴

取締役 監査役	プロフィール ⁶⁰⁵	出典：高知新聞社編『高知年鑑』／ 国立国会図書館デジタルコレクション
勘佐輝男 (代表取締役)	金剛建設会社取締役社長 大正3年4月22日生 京都市公吏、海軍省文官、 海軍技術士官	『昭和30年版』1954年刊 p.537. 国立国会図書館デジタルコレクション (以下「DC」)：279 コマめ
土居荘一良 (取締役)	高知県証券取締役社長 明治33年7月生	『昭和28年版』1953年刊 p.372. DC: 193 コマめ
恒石重嗣 (〃)	78年発行の『心理作戦の回想』カバーの著者紹介に「会社役員」とあるが、金剛建設（株）は74年10月1日に解散している。 恒石自身の不動産管理会社役員の意か ⁶⁰⁶	
岡崎允福 (監査役)	税理士 公認会計士 岡崎会計事務所所長 大正6年3月24日生	『昭和58年版』1982年刊 p.572. DC: 290 コマめ

○「金剛建設株式会社」〔昭279〕

高知市昭和町六九 (電) ②三六一六

営土木、建築工事施行、設計 資100万円◎四国銀行

役会長 山本清衛⁶⁰⁷、社長 勘佐輝男、取締役 恒石重嗣、監査役 岡崎允福

職工事主任 高木盛喜 従二五名⁶⁰⁸

⁶⁰² 閉鎖登記簿謄本. 高知地方法務局. 2023-02-27 ほか.

⁶⁰³ 資料「高知県軍恩連盟」

⁶⁰⁴ 決算公告未見.

⁶⁰⁵ オーテピア高知図書館回答. 2023-03-11 から抜粋.

⁶⁰⁶ 「高知年鑑にて平成7年前後を確認してみましたが〔恒石が役員をしている会社は〕見つけられませんでした.」〔同上. 2023-04-15〕

⁶⁰⁷ 『高知県人名事典 新版』P881 - 882 「山本清衛」

《陸軍中将、実業家 明治27年2月7日、吾川郡長浜村瀬戸生まれ。戦後は経済界に転進、桂浜観光（株）、呉合同運送（株）各会長、国際化成公社、手結山開発観光、大平産業各社取締役、山内会館代表取締役を務めるなど主に観光、レジャー関係で活躍したほか土佐女子高校理事、高知県軍人恩給連盟会長も務めた。昭和48年没。79歳。》などの記述がありました.」〔同. 2023-04-15〕

⁶⁰⁸ 高知新聞社文化事業部出版部編. 高知年鑑 昭和34年版. 高知新聞社, 1958, p.442.

3.2.2 渡米要請拒否（53年）

「そして約三年の空白の後、一九五二年（昭和二七年）一〇月二七日から裁判長グレゴリー・F・ヌーマンの下で陪審員男五人女七人で約四カ月の審理の末、翌年二月一六日有罪と決し、[プロボーに] 無期懲役、罰金一万ドルが宣告された。この本裁判には日本から証人として二〇名が渡米を要請されているが⁶⁰⁹、私は意外にも除外されていた。そして同二八年夏であったと思うが、私は突然高知県警察から出頭するよう呼出を受けた。行ってみると名古屋から米軍の高官（ただしシビリアン）が来ていて、「プロボー裁判がモタついている。君は必要にして欠くべからざる重要証人であるので、ぜひ渡米して欲しい」ということであった。私はプロボー裁判が同年二月に一応判決が出ていたことも、また引き続き控訴⁶¹⁰して「迅速なる裁判の権利」を主張していたことも知らなかったが、前述したように私の出廷によって彼が有利になると思われる要素はなかったので「サンフランシスコ条約⁶¹¹によって日本が独立国となった以上、もし私の渡米が必要なら米政府から日本政府を通じて要請の手続きをとって貰いたい」と述べた。すると彼シビリアンは「私の一存では決定し兼ねるので、名古屋に帰った後改めて連絡する」と言う返事であったが、この件はどうとうそのまま立消えとなって私は再び渡米を要請されることは無かった。」（心理 241-242）

⁶⁰⁹ 「...一九五二年十月二十六日に羽田発で、ニューヨークへ直行した。[中略] 日本は一九五一年九月八日に、サンフランシスコでアメリカと講和条約と日米安全保障条約を締結して独立国になっていたから、このたびは、パスポートを持ってのごく普通の海外旅行であった。」。『日の丸アワー』 p.217]

⁶¹⁰ 「これは後の問題であるが、東京ローズの裁判にはなぜ控訴審がなかったのであろうか。サンフランシスコの彼女の第一審にどれくらい経費のかかったことは聞いた。しかし、そんなことは理由にならない。おなじ反逆罪のプロボー裁判では、控訴審、最高裁までいって無罪になっている。もし東京ローズも控訴審をすれば、無罪になったと私は確信しているからである。すでに東京ローズの第一審の時でも、一二人の陪審員のなかの三人が最後まで無罪を主張したのに、他の陪審員に押し切られて、有罪と言ってしまったようである。英米法の建前は、主権在民と人権尊重に徹したまことに素晴らしいもので敬意を表するが、こういう運用の仕方ではアメリカの人権尊重にも例外があるようだと思いたくなる。いずれにしてもアイバ・戸栗・ダキノ夫人は、ひどいスケープ・ゴートにされてしまったものである。FBIのインス大尉のファイル（※）を見た唯一の日本人として、アイバ・戸栗夫人が禁固一〇年罰金一万ドルで、インス大尉が不起訴というのでは、深い疑念を持ちかつ怒りを感じる。」。[同上. p.197] （※）同書 p.196.

⁶¹¹ 【対日講和条約】「第二次世界大戦の終結と国交回復について日本と連合国との間に結ばれた条約。1951年9月サン-フランシスコで調印、翌年4月28日発効、占領が終結。[中略] サン-フランシスコ講和条約」。『広辞苑』

3.2.3 警察犬の育成（59年）

「...六年ほど前から⁶¹²趣味として、また心身の鍛錬をかね⁶¹³、警察犬⁶¹⁴ドーベルマンの育成をやっていますが、幸い、牝一頭は一九六三年度の全国大会で日本チャンピオンとなり、その仔も一九六五年度の日本チャンピオンのタイトルを得ましたので、さらに最近、ドイツから輸入された優秀犬と交配させ、未来の日本代表犬を夢みて楽しんでおります。」⁶¹⁵

○世相

「戦後動乱期、人々は食べることに精一杯であったにもかかわらず、一九四八（昭和二三）年には家庭で犬を飼うことが流行した。治安悪化という現状から家庭を守るために、人々は強くてどう猛で、よく吠える犬を求めた。

当時、犬といえば番犬のことを指しており、犬たちは家庭を守る番犬として人間の役に立つことが当然視されていた。犬は現在でいう防犯カメラのような道具の代わりとして、見知らぬ人に脅威を与えることで、家庭を守る存在になることが求められたのだ。」⁶¹⁶

⁶¹² 「生来、犬好きでしたが、とくに精悍俊敏で知られる、かつての軍用犬ドーベルマンに心ひかれ、昭和34年春から、これを飼い始めましたが、...」。[本書「3.2.6 転居」]

⁶¹³ そのほかの動機（推測）

○「戦争責任を追及する様々な勢力」に対する警戒。[本書「3.2.6 転居」]

○防犯：「そんななか〔喫茶店の〕店主たちを悩ませていたのは、悪い奴らがみかじめ料をせしめていくことだった。それはもはや死活問題。店主の多くはそれに対抗するような性格ではなかったため、店を畳んでいく者も少なくなかったという」。[高橋さよ、「喫茶店文化と、現代企業社」。信田英司/企画 竹村直也/文・編集。マッチと街：マッチがあった頃、高知の街はずっと元気であった。。「マッチと街」出版委員，2018，p.166]

⁶¹⁴ 「警察犬（けいさつけん）とは、警察など法執行機関の捜査活動に利用するイヌ（犬）。ヒトの4千倍～6千倍といわれる犬の鋭い嗅覚等の能力を高度に訓練し、足跡追及能力や臭気選別能力を利用する。[中略] 1940年（昭和15年）に、警視庁は警察犬舎を設けて警察犬6頭を飼育したが、太平洋戦争に伴い一時廃止。1952年（昭和27年）には警察犬制度の採用が再度検討され、民間訓練士に12頭の犬を警察犬として嘱託する嘱託警察犬制度が創設された。さらに1956年（昭和31年）には警視庁において本格的な直轄警察犬制度が発足した。日本の警察犬には、警察が所有し使用する直轄犬と、警察による試験や毎年度の審査に合格して、要請を受け非常勤の警察犬として働く嘱託犬の2種類がある。また広義には、日本警察犬協会が警察犬としての能力を認定している7犬種を警察犬ということもある。警察犬の訓練においては、服従訓練、嗅覚訓練、警戒訓練が行われる。」
[“警察犬”. Wikipedia. (参照 2023-01-19)]

⁶¹⁵ 恒石重嗣. 花だより. 偕行. 1965, 174, p.12. (偕行社, 1965-12)

⁶¹⁶ 鶴飼正樹・永井良和・藤本憲一編著. 戦後日本の大衆文化. 昭和堂, 2000, p.152-153.

○日本チャンピオン

・(63年)「【東京支社】財団法人日本警察犬協会主催の一九六三年度警察犬日本チャンピオン決定審査会は二十、二十一の両日、東京北区飛鳥山公園で約六百頭が出場して行なわれた。二十日はドーベルマン、エヤーデルテリヤ、コリー、ボクサーの四種類、二十一日はセパードの審査が行なわれ、ドーベルマン成犬メス組で高知市西秦泉寺、恒石重嗣さん所有のゼエウテル・オブ・ロングアイランドが日本チャンピオンに、[中略]それぞれ決定した。なお恒石さんが育てた子犬(所有者、尾道市西川隆さん⁶¹⁷)も幼犬メス組で日本チャンピオンになった。」⁶¹⁸

・(65年)「【東京支社】日本警察犬協会主催の本年度警察犬日本チャンピオン決定審査会は、十七日、東京都下八王子市飛鳥山⁶¹⁹に全国から約二百五十頭の警察犬が参加して開かれた。本県から参加した犬のうち[中略]若犬メス組では、高知市[西]秦泉寺、恒石重嗣さん所有の[ドーベルマン]「ブラックベル号」がそれぞれ選ばれた。」

620

○安岡元彦

「[尾道市立中央図書館の回答を読んで]大叔父の自転車で犬をおってる姿と応接室いっぱいに飾ってあるトロフィーを思い出しました。今なら聞くことが山ほどあります。」

621

⁶¹⁷ 「・尾道に所蔵している地方新聞で1965年4月17日前後を調べましたが、警察犬に関する記事は見あたりませんでした。

・尾道市の広報は、1965年4月は欠号でした。5月号に掲載はありませんでした。
[中略] 念のため、尾道の警察署に問い合わせましたところ、尾道に隣接する三原市で警察犬飼育の嘱託をされている方に確認してくださいました。その方より「昭和40年頃は警察犬の容姿のコンテストもあった。西川さんという方で駅前で自営をなさっている方がおられた」との情報を得ましたので、当館に所蔵している当時の地図や資料を確認しましたが、駅前のお店の方は、西川隆さんではありませんでした。

・国立公文書館や広島県立文書館などの資料でデジタルアーカイブ化されているものの中に、西川隆さんのお名前はありませんでした。[以下略]。[尾道市立中央図書館回答。2023-05-14]

⁶¹⁸ 高知市の恒石さんの所有犬など入賞 警察犬日本チャンピオン. 高知新聞. 1963-04-22, 朝刊.

⁶¹⁹ 63年度と同じく東京北区飛鳥山公園と思われる。

⁶²⁰ 成犬メス イサベラ号がチャンピオン 警察犬審査会. 高知新聞, 1965-04-18, 朝刊.

⁶²¹ Eメール. 2023-05-15.

3.2.4 戦争体験公表（62年10月）

「昭和二十四年九月二十九日〔陪審員は有罪と決し〕、米国法廷において、「東京ローズ」ことアイヴァ・戸栗嬢は、「反逆罪」で禁固十年の刑を言い渡された。三年前に出所したはず⁶²²の彼女の多幸を祈りながら、当時の対外放送責任者であった私は、いまここに、日本陸軍の戦時謀略電波戦の実相を記録しておきたい……。」⁶²³

○内容

- ・ゼロアワー放送への道・・・p.130-136
- ・「東京ローズ」の登場・・・p.136-140
- ・対日協力を断わった捕虜・・・p.140-145



図 65 手記：「東京ローズ」始末記
出典：雑誌「論争」62年10月号

⁶²² ○「...1949年9月29日に下った判決は有罪で、[中略] アイバは6年2ヶ月の服役後、模範囚として釈放された。」。[「東京ローズ」. Wikipedia. (参照 2023-01-20)]

○この手記を発表した時点で恒石はアイバの仮釈放を知らなかった。

⁶²³ ○恒石重嗣。「東京ローズ」始末記. 論争. 1962-10. p.130. (序文)

○恒石は77年1月10日の上坂冬子との面談前、この手記を届けている：「さて、高知市内の宿に着くと、「お疲れさまでした。夕食を済ませてから伺います。ご参考までに当時のことを書きました拙稿をお届けします。恒石」とメモがあり、雑誌論争の昭和三十七年十月号が一冊届いている。百三十ページの「東京ローズ始末記」というところに葉がはさんであった。」。[『特赦』p.87]

○Bunka Camp Storyの著者池田徳眞は「1962年に書いたものを1964年に書き直した」と述べている。[『駿河台分室物語【本編】』p.v]

○彼は手記を書く恒石から資料の提供を依頼されたため、[証人として訪米する際に準備した英語の資料等を基に?] 62年に一度まとめたのかも知れない。

○翌63年、駿河台分室で苦楽を共にした実弟朽木綱博を亡くした池田は、64年から電子工業会のデュッセルドルフ駐在員（JETRO 軽機械センター）としてドイツに赴任する。[『駿河台分室物語【資料編】』p.51/池田徳眞. 恩寵と復活. キリスト新聞社, 1993, p.165]

『恒石重嗣年譜』

情報公表

(1) 国内

年	月	日	事 項
1958	9	5	高知新聞社. 「高知年鑑昭和 34 年版／人名録」 ⁶²⁴
59	4		雑誌「偕行」. 93 号「花だより 今月の話題」 ⁶²⁵
62	10		雑誌「論争」. 「東京ローズ」始末記
67	10	9-16	読売新聞. 「昭和史の天皇／ゼロ・アワー」連載
77	1	21	高知新聞. 「東京ローズ」特赦決定コメント
78	6	10	文芸春秋『特赦』. (著者上坂冬子 77 年 1 月 10 日取材)
	8	10	『心理作戦の回想』. 自費出版
82	10		陸士 44 期『回想録：五十年の歩み』. “任官・満州・参本・命拾い三たび”を 78 年 3 月寄稿
85			『歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌：思出之記』. 「思い出すまま」寄稿
90	5		『聚光 山下豊追想集』. 「畏友 山下君」寄稿 (陸士同期生)
95	3		『高知県軍恩連盟の歩み』. 巻頭言
		21	NHK スペシャル『戦争と放送—メディアが問われるとき』 ⁶²⁶
	8	11	朝日新聞夕刊「謀略担った「捕虜放送局」」. コメント

⁶²⁴ 「恒石重嗣^{しげつぐ} 明 421019 (香美郡) 金剛建設 (株) 取締役 (昭 20 勲四等瑞宝章)

〔元〕大本営陸軍部参謀 城東中・陸士・陸大卒 〔趣〕乗馬 〔自〕高知市京町二八 (電) ②二〇三九」(p.524)

⁶²⁵ ○「四十四期 異動 「恒石重嗣 高知市万々三七二」(p.22). [国立国会図書館デジタルコレクション]

○以後 60-64, 69, 71, 73, 78 年を除き死去した 96 年まで 61 回投稿等が続く (～541 号)

⁶²⁶ ○渡辺考. プロパガンダ・ラジオ：日米電波戦争幻の録音テープ. 筑摩書房, 2014, p.81.

○「現時点では配信のご用意がございません。※NHK オンデマンド公式にて配信が無い作品は、弊社でも配信はございません。」. [U-NEXT. E メール, 2023-01-29]

(2) 海外

「彼女 [アイバ戸栗] のアンダーソンでの服役成績は良好で、一九五六年（昭和三十一年）一月二八日、仮釈放となった。すなわち六年二ヵ月後のことである。一月二八日早朝、父、兄、妹の出迎えを受けて、彼女は父の経営する店を手伝うべくシカゴへ向かった。しかしながら、ワシントン移民局は、無国籍になっていた彼女を国外追放すると発表した。その後二年ほどかかってコリンズ弁護士の特別の尽力によって、国外追放は取り下げとなったが、市民権喪失はいぜんとして回復されないままであった。そして大統領に対する特赦請願は、一九五四年（アイゼンハワー）、一九六八年（ジョンソン）の二度提出されたが無視され続けた。

一方全米の日系市民協会も世相の変化と本裁判の真相が判明するにつれ、ようやく従来の彼女に対する非協力の態度を改め、一九七四年になって彼女への全面的支援を申し入れて来た。その全米日系市民協会アイバ戸栗支援委員会の会長は、クリフォード・I・上田氏で、サンフランシスコ・サター通りに本部をおき、本職は医師である。氏はハワイを含む全米の二世有志に働きかけて署名を集め、一九七六年秋以来大々的にアイバの特赦請願運動を展開した。

著名な東京ローズだけに、この運動にはマスコミ界も積極的に支援し、一般大衆の共鳴も多く、その運動の輪は急速度に拡がっていった。彼女の地元の「シカゴトリビューン」紙も熱心で、私にも特赦についてのインタビューがあったくらいである。

(心理 357-358)

○「【東京】第二次大戦中の日本の謀略放送元主任が、東京ローズの名で世界的に知られるアイバ・戸栗・ダキノは、後に反逆罪で有罪となるラジオ東京の「ゼロ・アワー放送」対し決して献身的ではなかったと語った。[中略] 200人以上の日系アメリカ人が日本政府の宣伝のため雇用されたが [アイバ以外] 誰も起訴されてはいない。[中略] 「彼女は戦争の犠牲者で、明らかにアメリカ政府によってスケープゴートにされた」と私は思う⁶²⁷」と恒石は言う。

「彼女のことは個人的にとってもお気の毒だと思うが、私の良心ははっきりしている。彼女の裁判で私は真実を述べた。うそも言わなかったし、彼女に良かれと作り話もしなかった — 真実だけを語った。[中略] 彼女が当然受けるべき特赦を受け、幸せな人生を送られることを切に希望する」⁶²⁸

⁶²⁷ 「思うにいやしくも反逆者として服役せしめられた者が、かくのごとく完全無条件の特赦を受けられるものであろうか。彼女の救済に奔走した上田氏を始め多数の日系市民の支援やマスコミによる世論の盛り上りもさることながら、やはり米政府としては本裁判の特殊事情に十分なる検討を加えた結果、大統領の特赦決定に踏み切ったものと信ぜざるを得ない。すなわち換言すれば、これはまさに政治的性格の強い裁判であったことを裏書きしたものである。」(心理 359-360)

⁶²⁸ Ronald Yates (Far East correspondent). Tokyo Rose 'never put heart into job'. *Chicago Tribune*. 1976-03-29, p.5. 編者訳。

3.2.5 乗馬 (66年)

「妻/喜美。警察犬五頭、競走馬一頭、全員壮健。犬馬の労をとりつつ、毎日愉しく過しています。」⁶²⁹

○オーテピア高知図書館

「下記の資料を参照しましたが、恒石重嗣氏が保有していた競走馬の名前などが分かるものは見つかりませんでした。

■『高知年鑑 昭和34年版』(高知新聞社 1958.9 当館資料コード：1103707079 ※館内閲覧資料)

巻末の「人名録」中に、恒石氏の名前がありました (p.524)。馬の名前などは記述がありませんでしたが、趣味に乗馬とありました [本書. p.232. 脚注.624]。

■『地方競馬の優勝旗と軍用候補馬鍛錬会の表彰旗』

(長山昌広/著 [土佐史談会] 2015.8 当館資料コード：1108084425 ※『土佐史談』第259号抜刷。貸出可)

こちらの資料にも恒石氏の競走馬に関する記述は見つかりませんでした。

なお、参考文献によれば『高知競馬のまとめ』(高知県競馬組合 一九六八)という資料があるようなのですが、こちらの資料はオーテピア高知図書館には所蔵がありませんでした。この他、以下の資料も確認いたしましたが、手掛かりになる情報は見つかりませんでした。

■『昭和期の馬政と高知競馬』(長山昌広/著 土佐史談会 2013.12 当館資料コード：1107432377 ※『土佐史談』第254号抜刷。館内閲覧資料)

■『地方競馬史 第1巻』(地方競馬全国協会/編・発行 1972 資料コード：1100680782 ※館内閲覧資料) [中略]

■『地方競馬史 第4巻』(地方競馬全国協会/編・発行 1993 資料コード：1100680816 ※館内閲覧資料)

また、高知新聞記事検索データベースでも、何か参考になる記事が見つからないか確認してみましたが、手掛かりになりそうなものは見つかりませんでした。」⁶³⁰

○安岡元彦

「軍馬が引退して競走馬に転職したというか、戦わなくても良くなった馬がベースに競馬のもとになっていったのかもしれないね。明治になって徳川慶喜の旗本が来静し牧之原開拓して茶畑にしたような。三島にも軍用馬の練兵場(連馬場)があって満州等戦線に送り出されていったようです。軍人社会には馬は欠かせないものなんですよ。」⁶³¹

⁶²⁹ 花だより. 偕行. 1966,182, p.36. (偕行社, 1966-08)

⁶³⁰ 2023-06-08.

⁶³¹ Eメール. 2023-06-10.

3.2.6 転居（68年3月）

「(高知市中秦泉寺三二一) 終戦直後の数年間はGHQや国際裁判などに引き出される一方、喫茶店経営などもいたしました。武家の商法のこととて、大したこともならず終わりました。

生来、犬好きでしたが、とくに精悍俊敏で知られる、かつての軍用犬ドーベルマンに心ひかれ、昭和34年春から、これを飼い始めましたが、幸いにも警察犬協会主催の全国展において、一九六三年度の日本チャンピオンとなったのが病みつきで、自家繁殖犬ばかりですが、目下、七頭になっています。

日の出前から二時間ぐらい、運動のため山野を歩き廻るのが日課です。時には車を駆って桂浜辺を疾走させ、また、北山の険に挑み、敢為の気性と堅固な体軀の養成に努めます。眼もあかない無心の仔犬のときから育て鍛え上げた愛犬を、各地の展覧会に出場させて、賞を重ねるのも楽しいものです。

今や犬歴も十年を越えましたので、陳列コーナーに並んだ、思い出のカップやトロフィーも数十個になりました。

犬を飼うにも環境が大切ですが、当地でも新興市街地の急速な拡散に追われて、居を移すこと三度、とうとう今では山腹を宅地造成して、隔絶した一軒家で毎日、犬々の労⁶³²をとっている状態です。犬母三遷とでも申しましょうか。ここに至っては、犬狂といわれても致し方ありません。

出来れば、機会をみて警察犬の本場のドイツを訪れて、ドーベルマンやシェパード犬の飼育状況を視察し、また、世界最大のドッグショーといわれる米国のウェストミンスター展なども、のぞいてみたいと夢みている次第である。

犬談ばかりで恐縮です。南国土佐観光の節はお立寄り下さい。では皆さん、お元気で。七頭の犬も祝いの 雑煮かな」⁶³³

○安岡元彦

・「恒石の大叔父の名刺の住所 [高知市中秦泉寺 321. 本書.p.252. 図 70] は終の棲家です。大叔父はドーベルマンやシェパードを多い時は 10 頭程飼ってまして以前宅は西秦泉寺に家がありましたが近所に家が建つようになって名刺の中秦泉寺になりました⁶³⁴。今から 50 年以上前の事です。中秦泉寺宅は 50m ほど急な坂道を登り切ったところです。大叔父は晩年までこの犬に力を注いでました。自転車でその犬を毎日追ってましたので相当大変だったと思います。部屋はトロフィーで一ぱいでした。車はフォルクスワーゲンのビートル (旧) で何れも軍人らしい趣味でしたね。」⁶³⁵

⁶³² 「犬馬の労をとりつつ、毎日愉しく過しています。」。 [本書. p.234]

⁶³³ 花だより. 偕行. 1970, 228, p.30-31. (偕行社, 1970-06)

⁶³⁴ 不動産登記: 67-08-07 土地購入, 68-03-10 新築.

⁶³⁵ E メール. 2018-10-19.

・「戦後GHQや戦争責任を迫及する様々な勢力からなるべく目立たないように細心の注意を謀報活動をしていた経験から徹底していたことが窺われます。大叔父の警戒感は西秦泉寺に住んでいた時代⁶³⁶と中秦泉寺に引っ越した時代とは随分その言動の雰囲気が変わったような気がします。引っ越しも犬の事だけではなく周りに住宅が出来て警戒感があったのかもしれませんが。晩年、日本国旗掲揚の活動をし始めた⁶³⁷のも時代の空気を慎重に観察した結果の動きだと今から考えると合点のいくところですよ。」⁶³⁸

・「私は昭和30年生れです。私が小学校のころ大叔父は高知市西秦泉寺に住んでいましたが近所に家が建ち始め犬が迷惑になるとかで中秦泉寺の坂の上の家を新築し引っ越しました。私は中学になって山北から西秦泉寺に一家で住むようになり大叔父の家にはちょくちょく行くようになった次第です。その西秦泉寺の家を親父と尋ねる事が何度かありましたが、親父はちょっと襟を正して何う雰囲気がありました。軍人への敬意がまだ残っている時代だった様な気がします。祖母が大叔父の姉でしたので親戚の集まりではたまに会ってましたが」⁶³⁹

・「大叔父はうちの親父や親戚からは『しげとうおじさん』と呼ばれてました。」⁶⁴⁰

・「急峻な坂を登る中秦泉寺宅は犬の為に人家を避けて山間を削って建てたと思います。その前は西秦泉寺に住んでました。田んぼや畑ばかりの所が急に住宅が増え犬吠えや怖がる人達が出てきて引越し先を探して坂道の家になったと聞いてます。もう55年ぐらひは前のことかと思ひます。北秦泉寺の山間に(少林寺?)馬場があつて競走馬引退してそこに置いたのかもしれませぬ。山北の叔父さんも東京から連れてきたと聞いてます。秀雄さん⁶⁴¹は西川の家を継がせた弟ですかね?全く確証がありませんが。大叔父は養子を取りたく猪野に嫁いだお姉さんの孫が3人いて次男か三男をとひう時があつたと聞いています。」⁶⁴²

⁶³⁶ ○西秦泉寺 371. [花だより. 偕行. 1966,178, p.34. (偕行社, 1966-04)]

○それ以前に「高知市万々372」に住んだことがあつた. [同上. 1959, 93. p.22. (偕行社, 1959-04) / 本書.p.232. 脚注. 625]

○駿台会名簿住所: ①67年4月20日現在京町「田園」, ②70年1月現在中秦泉寺 321.

⁶³⁷ 本書「3.2.13 地域社会活動」

⁶³⁸ Eメール. 2020-02-20.

⁶³⁹ 同上. 2021-01-24.

⁶⁴⁰ 同. 2020-07-04.

⁶⁴¹ ○高知偕行会. 「56期 恒石秀雄」. [花だより. 偕行. 1968, 205, p.15. (偕行社, 1968-07)]

○恒石敬人とも. [花だより. 偕行. 1975, 288, p.36. (偕行社, 1975-05) / 『陸軍士官学校』p.250]

⁶⁴² Eメール 2023-05-22.

3.2.7 東京ローズ特赦（77年1月）

○ 高知新聞

『『よかった、よかった。これで、私もやっと肩の荷が降りました』— 二十日、“東京ローズ”日系二世アイバ・戸栗・ダキノさん（六〇）の米大統領特赦が伝えられたが、このニュースをわがことのように喜んでいる人が、高知市にいる。市中秦泉寺、恒石重嗣さん（六七）。戦時中、大本営の宣伝主任参謀として対米英宣伝放送の管理に当たった、いわば“東京ローズ”生みの親である。[中略]『だが、フォード大統領の時では間に合わないのでは、と思っていたのに、意外に早かった』。心配していただけに、感慨はひとしお。『私の戦後も、これで、やっと終わった』と晴れ晴れした表情である。』⁶⁴³

○ 上坂冬子

・「私はアイバ・戸栗氏の[1月19日の特赦の]感想を求めて、すぐ現地シカゴへ飛んだが、その留守にあの冷徹な恒石氏はいち早く上京し、元NHKのゼロ・アワー班長満潮英雄氏と会談したという。互いに二十数年ぶりであったらしい。それにしてもあの慎重にして重厚な恒石氏が、これほど機敏な行動を見せたのは余程の思いであったに違いない。しかも両氏再会の席に私を誘うべく恒石氏は留守中の拙宅へ電話をくださっていたのである。』⁶⁴⁴

・「もちろん[上記の後、夫人を通して依頼した満潮英雄との]取材を断われた私はあきらめたわけではない。折あるごとに手紙と電話を繰り返し、いつしか夫人と“姿なき昵懇”の間柄となったのである。かくて二ヵ月ほどたったろうか。ある日、遂に夫人の口から満潮氏の伝言があり、「恒石参謀同席の上なら面談してもよい」と返事が入った。私は即座に恒石氏に上京を懇願し、遂に焦点の人、満潮英雄氏との[ホテルオークラのロビーでの]会見にこぎつけたのであった。』⁶⁴⁵

⁶⁴³ “待ちかねた…“東京ローズ”の特赦決定”. 1977-01-21, 朝刊.

⁶⁴⁴ 『特赦』 p.101.

⁶⁴⁵ 同上. p.102-103.

3.2.8 舞台再訪（77年5月）

「私は五二年五月この「つわものどもの夢の跡」を訪ねた⁶⁴⁶が、当時衛兵や日本人職員が使っていた南側の建物はほとんど原形のままに大学⁶⁴⁷事務室や校長室となって残っていることを知って感無量なるものがあった。ああ星移り人去りて三十有余年、何事もなかったような平和なたたずまいの中で戦後っ子の若い男女は私の感傷など他所にただ嬉々として学んでいた。」（心理 195-196）



図 66 中庭からみた戦時中日本人職員が使った建物

提供：「文化学院を愛する会」

<http://lovebunkagakuin.web.fc2.com/>



図 67 建物の2階廊下

提供：大橋智子

⁶⁴⁶ 65年の全日空直行便就航で、高知・東京間は片道2時間程度。[資料「高知・東京間の往来／国内航空」]

⁶⁴⁷ 1921年開校、72年専修学校、2018年閉校。[“文化学院”. Wikipedia. (参照 2022-07-22)]

3.2.9 駿台会（77年7月）

○「一九七七年一月十九日に東京ローズとよばれていたアイバ・戸栗・ダキノ夫人の特赦が、フォード大統領によっておこなわれ、彼女の米国市民権が回復された。これを機会に「ゼロアワー放送」の関係者も合同して、同年七月十二日に「日の丸アワー」の関係者や当時の対敵謀略宣伝の仕事をしていた人々で構成されている、第三十回「駿河台会」⁶⁴⁸を霞が関ビル三四階の霞会館⁶⁴⁹でひらき約三〇人が参集した。」⁶⁵⁰

○「… [77年版の案内状に]「今回は恒石さんも……」と殊更に記してあるのは、氏が宣伝主任として関係した放送などの中から不本意にもNHKゼロ・アワーの東京ローズのような犠牲者を出したことを配慮してか、これまで殆んど公の場に顔をみせたことがなかったからであろう⁶⁵¹。[中略] 霞が関ビルの駿河台会は、元参謀本部第二部長有末精三陸軍中將はじめ、[中略] 藤原岩市中佐らを正面に、総勢二十四名⁶⁵²で近來にない盛況ということであった。但し案内状に特記された恒石元中佐はこの日突然の高血圧症状により絶対安静の身となって欠席し、それを聞いた人々は一瞬どよめいたが、まもなく互いにマイクをうばい合うようにして自己紹介やら回顧などで旧交をあたためにかかった。」⁶⁵³

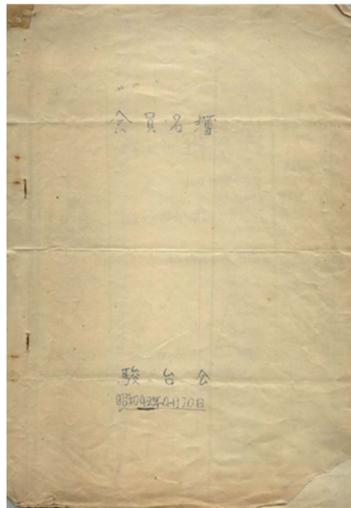


図 68 「駿台会」会員名簿
1967-04-20
提供：小林久子

⁶⁴⁸ ○小林久子が所蔵する4冊の会員名簿の内3冊は表題が「駿台会」：(日付) 67年4月20日, 70年1月, 71年5月10日。

○70年1月の名簿掲載の「駿台会々則」：「第1条 本会は駿台会と称し、元参謀本部第2部に所属する淡路町事務所および駿河台事務所に在籍した者およびその家族で入会した者をもって組織する。」

○残る1冊の表題は「参八会住所録(仮)：1980-02-25 現在」。(全4ページ)

○資料「参謀本部第8課／参八会」

⁶⁴⁹ 61-04-20の駿河台会が日黒の雅叙園で開催されている。[『日の丸アワー』p.25]

⁶⁵⁰ 同上。p.230。

⁶⁵¹ 70年4月18日開催の駿台会に恒石は欠席：名簿の近況欄「御変りなく御過しの由」

⁶⁵² 高知相互銀行会長伊野部重珍もそのひとり。[『特赦』p.212]

⁶⁵³ 同上。p.206, 210。

3.2.10 『心理作戦の回想』 発刊（78年8月）

「そして開戦当初における赫々たる武力戦の進展に相呼応して展開されたわが対外宣伝が、その「植民地独立の」気運醸成に大なる寄与をなし得たこともまた歴史に残るべき業績といわねばならない。

今やわが国は、平和国家として世界各国との友好親善を基盤に国家民族の発展を希求するものであり、反面、核兵器の開発は驚異的發展を遂げ、一瞬にして世界人類は滅亡する危険をはらんでいる。唯一の原爆被害国たるわが国は全世界に向かって核絶滅の積極的行動を起こすべき責務があるものと信ずる。しかして資源に乏しく、もっぱら貿易によって民族の繁栄をはからねばならぬわが国にとっては、今後ますます誠意と実体を伴う宣伝啓蒙工作を展開するとともに、心理戦的要素をあらゆる施策と融合一体化して推進することが、必須の要件であることを痛感する次第である。今次大戦においてわが国は事志と異なり、わずかに四年に足らずして敗戦したので、対敵宣伝もまた中途挫折し、加うるに浅学非才、所期の成果を収めるに至らなかったことは、これに参画した一人として顧みて汗顔に堪えない。

ただ終戦後乱売された各種出版物には対敵宣伝などについてまったく興味本位に流れ、事実を歪曲した記事が横行し、歳月の経過とともにその真相が風化埋没する恐れなしとしない。

あえて秃筆を省みず、本書に筆者の体験に基づく実相⁶⁵⁴を自費出版しておくゆえんもまたここにあり、同時に対敵宣伝業務に携わった者の義務でもあると思うのである。」
(心理5)

「戦後よく軍部横暴を口にしながら悪習があるけれども…」(心理348)

○同じ年に『陸軍中野学校』も発刊されている⁶⁵⁵。

⁶⁵⁴ 瀬島龍三も著書の標題に「実相」という言葉を使い、1972年にハーバード大学の依頼で講演した際の問題意識をこう述べている：「戦後日本は、大東亜戦争を全面的に否定するところから出発した。しかし、「多くの反省点はあるものの、存亡の危機にあって、必死に日本を守ろうとした人々の行動は再評価されるべきではないか。」。〔瀬島龍三、大東亜戦争の実相。PHP研究所、1998、p.3〕

⁶⁵⁵ 資料「『陸軍中野学校』発刊」

「願わくば読者諸賢の忌憚なきご批判を仰ぐとともに、新生日本を背負って立つ青年諸士に何等かの示唆を及ぼすことができれば望外の幸である。ただ関係資料が指令に基づき、終戦時焼却されたため、ほとんど残されてないので、記述に具体性を欠く点が少なくないことを諒承せられたい。

本書執筆に当たり資料提供等の面で好意ある協力を寄せられた町田敬二、山口源等、中島健蔵、池田徳真、太郎良定夫、浜本純一、伴繁雄、森松俊夫、TBS鈴木明、NHK堀賢二の各氏に、また出版に際し理解と尽力を賜った山本春一氏および東宣出版の田辺辰俊氏に深く感謝の意を表する次第である。

昭和五三年春 東京ローズ特赦一周年に際して 恒石重嗣」(心理5)

○中島健蔵

「宣伝は、その時々、派手におこなわれるが、事が終れば、いつともなく消失してしまうのが常である。ことに、軍事宣伝がそうである。實際上、当事者の大部分が沈黙を守り⁶⁵⁶、あるいは世を辞した今日、本書は、公的な意味を持つ唯一の記録といえるであろう。」(心理序文)

⁶⁵⁶ ○池田徳真：本書.p.465.脚注.1148.

○満潮英雄：上坂冬子の再三の取材依頼に対し「恒石参謀同席」を条件に承諾した。
[本書「3.2.7 東京ローズ特赦」]

3.2.11 大戦の総括

(1) 戦争目的

「そこでわが国民に対しても、世界各国に対しても第一に闡明⁶⁵⁷すべきことは戦争目的であり、これが宣伝の大本をなすものである。すなわち、戦争目的を明確にすることによって、国民の総力を結集して戦争に対応せしめることができると同時に、対外的には正義の戦であることを堂々強調することによって同盟国は無論のこと、中立国の支援同調を求め、敵国民に対してもその戦意を挫折せしめるのに役立つわけである。それではわが日本の大東亜戦争における戦争目的は何であったか。

それは宣戦の詔書に、明かに「帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ」と述べられている。すなわち国の存立が危殆に瀕したので、やむを得ず開戦するに至ったというのである。しかしながら、わが国の指導層にいた人々の中には自存自衛一本と考える者、あるいは大東亜新秩序の建設を戦争目的とする者、または上記両者の二本建とする者もあった。

昭和一六年一月五日、御前会議決定の「帝国国策遂行要領」には「現下ノ危局ヲ打開シテ自存自衛ヲ完ウシ大東亜ノ新秩序ヲ建設スル為此ノ際対米英蘭戦争ヲ決意シ……」とあり、「大東亜新秩序建設」を戦争目的に加えている。〔中略〕

このように戦争目的に関する思想は統一を欠いていたのであるが、やはりそれは「自存自衛」の一本に絞るべきで、まず自存自衛を達成することが先決であって、しかるのちに大東亜新秩序あるいは大東亜共栄圏の建設の理想が実現されるべきものであった。

ただ南方諸民族に対する呼びかけとして、米、英、蘭の勢力を東亜から駆逐して、その桎梏から解放し、民族の自由と独立とを獲得することを強調することは、きわめて効果的であって、開戦当初にあっては対日積極的協力を促進するのに役立ったことは事実であった。

しかしながらこの呼びかけは、後述するように占領地の帰属あるいは戦略物資の調達、戦勢不振等により現地の実情からかけ離れた空念仏となり、ジレンマに苦しむ結果となったことは遺憾でもあり、反省を要することでもあった。」(心理 8-9)

⁶⁵⁷ せんめい 【闡明】「はっきりしていなかった道理や意義を明らかにすること。」. 『広辞苑』

(2) 心理戦

「17年6月「ミドウェー」作戦の敗北で戦局は暗転したので、勢い宣伝も初期の戦争目的や戦果中心から、人的損害を重視した謀略的要素を含む内容に移行せざるを得なかった。」⁶⁵⁸

「ミッドウェー海戦で敗れてからは、勝ったなどという宣伝は、国外では通用しなくなり、謀略放送となった。米国民に厭戦（えんせん）の風潮を植え付けるのが目的で、いかにして聞かせるか、知恵を絞った。捕虜の消息を、放送に取り込んだのは、そのためだった。捕虜たちを命令で動かせば、番組内容は硬直する。自発的に協力させることにも腐心した。」⁶⁵⁹

「...米極東政策の反省を求むることは、いうは易いけれども国益に基づく政策であり、それなりの大義名分がある以上実効を取めることは容易でない。その根底となるものは、やはり武力戦において甚大なる損害を敵に与えることである。戦勝に酔っている者にはこちらの主張はなかなか耳にはいらぬものである。したがってどこかの戦場で一大痛撃を加えて敵に出血を強要しとくに莫大なる人的損害を与えることが厭戦気運の醸成のための必須の要件である。また戦争を持久に持込み、ベトナム戦争に見るごとく、一〇年、二〇年戦争ということになれば、戦に疲れ、戦争目的に疑惑を生じ、継戦意志喪失の好機も生じてくるわけである⁶⁶⁰。このためには巧妙なる戦略と南方資源の活用による国力の培養が肝要であった。」（心理 10-11）

「宣伝の手法として、戦争中期以降は電波利用が主流となったが、「ラヂオ」は米国民の心に痛打を与える唯一の武器ではあるが、相手が聴かなければ無価値となる弱点がある。」⁶⁶¹

「放送を国家権力が利用するのは平和な時代では許されないが、戦時であれば当然だと思ふ。ことに総力戦ではラジオも重要な武器になる。」⁶⁶²

「...わが兵術思想は、陸海軍共武力戦偏重で、情報・補給面の考慮が少なかった。まして心理戦などというものは無用視される傾向が強かった。」（心理 128）

⁶⁵⁸ 恒石重嗣. 対米謀略放送のあらまし. 偕行. 1995, 538. p.53. (偕行社, 1995-10)

⁶⁵⁹ 安田彬. 謀略担った「捕虜放送局」. 朝日新聞. 1995-08-11, 夕刊.

⁶⁶⁰ 資料「ベトナム反戦運動」

⁶⁶¹ 恒石重嗣. 「対米謀略放送のあらまし」 p.53.

⁶⁶² 「謀略担った「捕虜放送局」」

(3) ゼロ・アワー

「なお今次大戦中对米英謀略放送の代表的なものは、西にあってはベルリンからの対英放送「ホーホー卿（英人ウイリアム・ジョイス）、ローマからの対米放送エズラ・パウンド（著名な米詩人）と東京ローズ（戸栗いく子）であったといわれている。要するにゼロ・アワーは世界的水準の垢の抜けた放送であると評価されていて、敵将兵の心をつかむ魅力を持っていた。すなわち乱れ飛ぶ無数の電波を排して聴取者をひきつけることができたことは事実であり、本謀略宣伝成功の橋頭堡を構築することはできたわけである。しかしながら敵軍兵士に厭戦思想を醸成し、さらにこれを反戦気運に拡大して、ついには銃を捨てあるいは反乱を起こさせるといいうゆる宣伝決戦の最終段階までもって行くのには、今後格段の創意と努力が必要であり、相当の年月も要することであった⁶⁶³。それにはもちろん甚大なる出血を強要しつつ、長時日の持久作戦を継続することが大前提である。しかるに戦局は将兵必死の敢闘にも拘わらず、近代戦における戦略（大艦巨砲による艦隊決戦にあらずして基地獲得の航空戦および補給遮断）に対する認識とその対応策不十分と、科学と物量の差とから案外脆くも敗退を続け、開戦後三年八ヵ月にして終末を迎えた。したがってゼロ・アワー放送も所期の目的達成には程遠く、いわば上陸点に橋頭堡⁶⁶⁴を構築できた段階で、その電波を止めざるを得なかった。[中略] ...東京ローズのサンフランシスコ法廷で私が「その宣伝効果は時間が足りなかったので十分あげられなかった」と証言したのは、前述の意味合いから出た言葉であったが、被告側弁護人はこれを「効果のない娯楽的な番組で、むしろ米兵の志気昂揚に役立ったから彼女は無罪である」と拡大解釈して私の証言を逆用した。戦争末期におけるわが方の宣伝は、比較的ソフトな手法によって、まずノスタルジアから厭戦へと導く第一段階をのぼり終わったところだったというのが実情であったといわざるを得ない。」（心理 181-182）

「われわれのやった対敵放送は、東京ローズに代表されるように、全体としてソフトムードで、技術的にも洗練されていた、と自負している⁶⁶⁵。もっとも戦いに負けたんだから、宣伝の効果はないに等しい、といえはそれまでかもしれないが—」⁶⁶⁶

⁶⁶³ 「宣伝のことですから確かに幅はありますけどね、でも深刻にそれが集約された力がどこかへ集中できねばいかんのですけど、なかなかそういうところまでできなかったですね。」。[DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』]

⁶⁶⁴ 「要するに我軍は短期決戦々略を採り、過早に完敗したので、前述した放送も一応聴取には成功し、「ポデーブロー」的效果はあがりつつあったようであるが、本番の「ノックアウト」までには、更に相等の年月と工夫を要するので、単に橋頭堡の構築に止ったと言うべく、前途多難であった。」。[恒石重嗣。「対米謀略放送のあらまし」p.54]

⁶⁶⁵ 「この[米国内の]中波傍受情報は故郷のニュースを渴望している前線の将兵にとっては絶好の材料であり、これを織り込むことによって、わがゼロ・アワー放送の信用度も高め、かつ米軍兵士達の不安や不満の芽を育てるよう努力が払われたわけである。ちょうど捕虜放送の「ポストマンコールズ」で捕虜達の情報や前線の状況などを放送させて、その家族に不安感と厭戦気運の助成を図ったのと表裏一体をなすものである。」（心理 262）

⁶⁶⁶ 『昭和史の天皇3』p.194.

(4) 日の丸アワー

「此の放送は、選抜された「ベテラン」の捕虜集団（26名）を内面指導して、彼等の発意による自発的放送の形式をとったが、世界最初の試みでもあり、危険性を内蔵するものだけに通敵防止には心を砕いた。その反響については、赤十字社を通ずる家族からの通信や、多数の「ボランティア」の中継による家族への連絡、或は通信社の「メッセージ」集約冊子の発行販売等を総合判断すると、可成り浸透していたようである。」⁶⁶⁷

「リハーサルは駿河台分室でやって、本番の放送はいつもハイヤーを雇ってNHKへ連れて行き、第五、第六スタジオでやった。この途中、必ず宮城前を通して、宮城遥拝をやらせたことが、彼らに強制した唯一の事だ。いまにして思えばナンセンスかもしれないが、そのほかのことは、占領地で押収してきたアメリカ映画を見せたり、バスケットボールをやらせたり優遇したから、彼らにうらまれることは一つもない、と思っている。」⁶⁶⁸

○池田徳眞

「...『対敵宣伝放送の原理』にはずいぶん勝手なことを書いて、いま読みかえすと、いささか疑問に思う点もある。ただ一つ確かなことは、このあと「日の丸アワー放送」をやったのだが、俘虜にやらせるといふ難しさもあって、この原理のようにはぜんぜんうまく実行できなかったということである⁶⁶⁹。」⁶⁷⁰

⁶⁶⁷ 恒石重嗣、「対米謀略放送のあらまし」p.54.

⁶⁶⁸ 『昭和史の天皇3』p.194.

⁶⁶⁹ 「ゼロ・アワー」放送開始のころと比較して戦況がさらに日本に不利になっていたこと、対象が前線の将兵向けではなく本国の米国民向けだったこと、放送経験のある捕虜が集めにくくなったことなども、うまくいかなかった原因だと推測する。

⁶⁷⁰ 『プロパガンダ戦史』p.209.

(5) 科学力の差

「GHQに行くとくに感じたことの一つは、仕事が能率的でスピーディーであることであった。上から下まで時間励行、工作中無駄口をきく者は一人もいない。どこかの役所のように煙草ふかして両足を机上にあげて無駄話をしているような風景は一度もお目にかかったことがなく、大きな部屋に多数の人々がいるけれども、ただ聞こえるものはタイプ打つ音ばかりであった。

その二は調査が綿密周到、科学的であった。東京ローズについていえば、多数の関係者から詳細な情報を収集、査定して情報の幅広い底辺を作り、その上に逐次データを累加して頂点に及ぶというようなやり方で、私が尋問されたときには先方は細かいことまで実によく承知の上であって、私はあのピラミッドを思い浮べた。」(心理 314)

「それから造成能力というか、スピードが違う。ガダルカナルの飛行場建設で日本はスコップ、米国は鉄板を敷くだけ。」⁶⁷¹

○参謀本部からニューギニアへ出征した小岩井光夫少佐

「敵の歩兵の戦闘力など敢て恐るるに足りなかつたが、敵全般の物量とそれを輸送する能力、戦線の実情に即して直ちにそれに応ずるような進歩改善の措置をとる努力と敏速な行動、そういうものに対しては敵ながら天晴れと感嘆せざるを得なかつた⁶⁷²。米国は金持の国だと聞いていたが、その金持の程度は、日本の中産以下の大衆に当時の三井、三菱の富豪の程度が桁外れで想像も出来なかつたように、我々貧乏国の人間にはついに想像を絶したものと思わざるを得なかつた。一分間に千発以上の迫撃砲がどうして射撃出来るかという技術ではなく、そんなに多数の迫撃砲やその弾薬が、自動車道もない森林のなかの第一線に、何によつて運ばれて来るかということは、大きな疑問だつた。おそらく後方に道路を構築して自動車を動かしているか、或いは軽便手押しのレールが設けられているに違いないと想像したが、それならばこの未開の森林内にどうしてこんなに短時日に道路を構築したかと考察すると、従来の我が軍の工兵隊の作業能力から推して理解できなかつた。[中略] 結局、我々は肉弾を以て敵の機械(科学)と闘つていたのだつた。」⁶⁷³

○戦後の米軍のパイプライン敷設

「アメリカのタンカーは横浜に着いているので、これを厚木[飛行場]まで送油しなければならぬ。ところが日本の輸送能力ではなかなか手間がかかって、とてもアメ

⁶⁷¹ DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

⁶⁷² 厚生労働省元事務次官・村木厚子(1955生まれ):「うまくいかなかったら修正して、いち早く変化するということが日本人はかなり苦手なのではないかと思います。女性活躍にしても働き方改革にしても、ゆっくりとしか進まないのが、この国の特徴のようです。[中略] スピード感のなさには「完璧を求める」という傾向のほか、同質的な社会の中にいるため、自らが置かれた状況に気づきにくく、外の状況に鈍感だということもあるのかもしれない。」[日本型組織の病を考える。KADOKAWA, 2018, p.115, 117]

⁶⁷³ 『ニューギニア戦記』 p.234.

リカの考えているように手早く仕事にはならないと気がつくと、アメリカではすぐにこの間にパイプを敷くと言い出した。これを聞いた日本の軍人は、横浜から厚木まで四十キロ、その間には山あり谷あり、測量するだけでも三日や四日ではできないから、すっかりできあがるまでには少なくとも三年はかかる。[中略] そこで大いにびっくりして「いったい何日でやるつもりだ？」とアメリカの兵隊にきいたところ、「四日（フォー・デイズ）」と答えた。これを聞いた日本人の頭ではどう考えても四日ではあり得ない。四月でも早いと思っただが、「オンリー・フォー・マンズ — 四月とは早いですなあ」と感心したら、「ノー、フォー・デイズ」と言い直した。日本人なら、誰にやらせようかと決めるだけでも四日はかかる。それから測量機械を担いで厚木と横浜の間を歩くとなると、四十キロあるから調査するだけで四カ月で完成すれば、よほど早い方で、それから設計する、入札する、あれが良い、これが悪いと選んで工事にかかって、まあ三年でできれば好成績でしょう。だからその頭で見ると、四日間でやるということがどうしても想像がつかない。けれども、やるというのだから、勝手にしやがれというので肚の中で笑っていた。ところがアメリカ兵はすぐ工事にかかって、たった二十七時間で仕上げってしまった。四日間なんてかかりはしない。たった一日半で四十キロの給油管を敷設して、現に厚木の飛行場にはちゃんと毎日、横浜のタンカーから給油しております。」⁶⁷⁴

⁶⁷⁴ ○永野護 . 敗戦真相記. バジリコ, 2002, p.53-55.

○戦後, 日本企業関係者の米国視察や米国の経営管理手法を学ぶ動きが活発になった。
(例)「日本生産性本部は1955(昭和30)年に「生産性向上対策について」の閣議決定に基づき、政府と連携する民間団体として設立され、米国に経営組織、生産管理、マーケティングなどの経営手法を学ぶための視察団を派遣するなどして戦後の日本経済の復興と高度経済成長を支えました。」。[“日本生産性本部とは”. 公益財団法人日本生産性本部. (参照2023-04-28)]

3.2.12 瀬島龍三来県（83年）

○月刊「偕行」

「[余録]「臨調、御苦労様でした。御気軽に遊びに御出で下さい」という山内の再三、再四の要請で、多忙、分秒の暇ない瀬島さんを、やっと土佐へ御迎えした。御夫妻二泊三日の旅程▲「折角御出で下さったから、一寸御話を」と、お願いしたところ、毎年の県偕行会の集まりでは50名が最高であるが、うわさを聞いて集まるもの約100余名▲国際問題の分析、国内事情の解明、日本の針路、行革の内輪話など、諄々、滔々二時間余、一人の席を立つ者なく、しわぶき一ツなく、満堂、感激の坩堝と化した。「こんな有益な御話は未だ會て聞いたことがない」とは、講演後のパーティ宴での会員ためいきにも似た歎声▲翌日からの足摺への往復約10時間のバスの中、随行者12名、相当な疲労の筈であったが誰一人として居眠る者なく、質疑応答、終始、丁寧懇切なお話、「マルデ勉強会の様だったナ」と瀬島さんを歎ぜしめた程であった▲話中、談偶々シベリヤ抑留に至ルや、随伴の神谷は終に、歔歔、嗚咽、号泣するに至った。一同は瀬島さんの全人格にまるで麻酔をかけられたような三日間であった。

▲山内の細心の気くばりに、御夫妻も亦感謝せられたのであるが、斯ういうお方を先輩として持つ倅をつくづく感じた次第である▲44期

○恒石重嗣⁶⁷⁵さんの即吟

迎瀬島大兄之詩 恒石 重嗣
畏友飛来遊足摺 渺茫太洋到米州
内外多事邦家危 万人齐希出俊秀

▲「万人齐シク希ウテ俊秀出デタリ」と詠じたい。どうか御体に気をつけられて、邦家のために一層の御尽瘁あらん事、唯これのみを御祈りする、これは、こんど親しく警咳に接した一同の異口同音の願いでもありました。 (春)⁶⁷⁶

○室伏稔（元伊藤忠商事会長）

「瀬島さんには、いすゞと米ビッグ3との提携など外国企業との交渉の場に何度も出て頂いた。その交渉ぶりはある意味で「神わざ」だった。まず、こちらの主張に対する相手側の出方、返答をあらかじめ読んでおられた。大抵はその通りに展開したが、まれに予想しない答えが返ってきた時には、通訳に対し「僕の言葉を正しく通訳したのか」と言われるほど自分の読みに自信をもっていた。

瀬島さんは交渉の場では、メモもみないで話をされたが、その論理性と説得力に途中から相手側がぐんぐん引き込まれ、熱心に聞くようになるさまは驚きだった。いすゞとフォードとの提携交渉は結果的には成立しなかったが、途中でフォードの副社長が瀬島さんについて「自分が接したアジアの要人、ビジネスマンであんなに頭の

⁶⁷⁵ 81年3月から高知県偕行会々長。[本書「3.2.15 高知県偕行会」]

⁶⁷⁶ 花だより.偕行. 1983, 376. p.62. (偕行社, 1983-07)

切れる人は初めてだ」と感服していたのが印象的だった。[中略] 商社の収益源の柱はかつての貿易取引の口銭から、事業投資による配当、利益配分に移った。その戦略も瀬島さんが先駆けとなった。特に資源開発については「石油や鉱物資源を取引だけでなく、資本で押さえることは長期的な会社の利益になるだけでなく、国益につながる」と主張され、大型の投資を相次いで主導された。そのなかには、豪州のマウント・ニューマン鉄鉱山、インドネシアの NATOMAS の石油権益など伊藤忠の発展の大きな力になった案件も少なくなかった。」⁶⁷⁷

⁶⁷⁷ 「私の履歴書⑰ 仕えやすい上司」2011-09-18.

3.2.13 地域社会活動（86年）

「◆郷友連盟県支部長、在任約8年。若返り活性化の為、50期森山氏等に後事を託し参与に退いた。◆4・29天皇御在位60年奉祝式典の日、日の丸パレードを計画、国旗掲揚気運の醸成に努めた。参加約千五百。乍残念、未だ低調を免れない。◆昨春、小生の提唱により、県日の丸会を改組、強化した⁶⁷⁸が、会長西山氏県商工会議所最高顧問副会長山崎氏高知大学名誉教授と小生理事長の三人奇しくも中学の同級生、で万事円滑に運んでいる。◆4月県軍恩連盟副会長に選出され、予科時代のゴミン⁶⁷⁹白井⁶⁸⁰先輩の指導を仰ぐこととなった。◆他に県偕行会長、護国神社奉讃会理事等を勤めている。◆幸い健康状態良好。息の続く限り地域社会への奉仕に努力の所存。」⁶⁸¹

⁶⁷⁸ 「高知県日の丸会の発会式が[85年4月]十五日、高知市本町一丁目の高知商工会館で開かれた。従来の「日の丸会」を改組したもので、県遺族会や郷友連盟などから三十人が出席。世話人代表の西山利平高知商工会議所会頭が『諸外国は国旗を国のシンボルとして大切にしているが、日本は祝日にも日の丸を掲揚しない。国旗掲揚の風潮をつくろう』とあいさつ。日の丸掲揚運動の推進などの規約を制定したあと、役員を選出した。[中略]山崎重明、[中略]理事長＝恒石重嗣。[県日の丸会が発足。高知新聞。1985-04-16, 朝刊]

⁶⁷⁹ 「ゴミン 正式名は模範生徒、後に指導生徒とも呼ばれたもの。幼年学校では三年生、予科では対称区隊の中から品行方正、学術優秀の者が、命ぜられて新参生とベツト、自習机を共にした。古代ローマの執政官である護民官がその語源。[吉田武。“武窓用語(2)”。『陸軍士官学校』p.28]

⁶⁸⁰ 「唯それ(※)を調べる方法ですが若し彼の所属した捕虜収容所名が判明すればそれが手がかりとなるかと考へます 捕虜管理の主務官庁は当時の陸軍省軍務局であったと記憶しておりますので軍務局にいた方で陸軍中佐で現在は軍恩連盟全国連合会の理事長をされている白井正辰氏にお尋ねになれば或はその端緒がつかめるかと想像いたします 白井氏は陸士の一年先輩の第43期であり前記理事長を永らく勤められており小生も高知県軍恩連盟の副会長として氏の指導下にありよく知りあった仲です。[恒石重嗣。手紙。1989-01-02] (※) 放送協力を拒否した捕虜ウィリアムズの情報。[(心理 210-211) / 本書「2.3.12 駿河台分室訪問/ウィリアムズの拒否事件」]

⁶⁸¹ 恒石重嗣。花だより：身辺雑記 恒石重嗣君 近況あれこれ。偕行。1986, 428, p.74-75。
(偕行社。1990-06)

3.2.14 高知県軍恩連盟会長（88年）

「来年の参院選では、軍恩連盟でも代表を国会に送るべく走り廻っています。上京回数月平均1.5回。任官60周年には元気に再会しましょう。」⁶⁸²

○着任

「『高知県軍恩連盟の歩み』P78「歴代高知県連会長名」《第7代 恒石重嗣 元陸、中佐 着任：昭和63年より》との記述がありました。」⁶⁸³

○活動例

・(88年9月)「県軍恩連盟(恒石重嗣会長)と同婦人部の本年度大会が十日、高知市本町五丁目の高知会館で開かれた。[中略] 会員相互の親交を深めようと毎年一回大会を開いており、宿毛や室戸などの遠来組を含め、約三百五十人の会員が出席した。恒石会長のあいさつの後、伊藤トク・大川支部婦人部長が会員を代表して活動状況などを報告。全員が戦没者に対し、一分間の黙とうをささげた。」⁶⁸⁴

・(91年9月)「県軍恩連盟大会と同婦人部大会が二十日、高知市本町五丁目の高知会館で開かれ、約三百五十人が参加、一年間の活動報告などを行った。同連盟は旧軍人軍属、その遺族らが公正な恩給の確保などを目的に昭和二十七年五月に結成。現在、県内に九十五支部、約五千人の会員がいる。(以下、省略)」との記述がありました。」⁶⁸⁵

・(95年1月)「高知市本町四丁目、県軍恩連盟(恒石重嗣会長)役職員一同は「阪神大震災」義援金四十万五千円を寄託した。」⁶⁸⁶



図 69 現在の高知会館
提供：高知会館

⁶⁸² 恒石重嗣. 花だより 偕行. 1991, 492, p.95. (偕行社. 1991-12)

⁶⁸³ オーテピア高知図書館回答. 2023-02-11

⁶⁸⁴ 県軍恩連盟の本年度大会. 高知新聞. 1988-09-11, 朝刊.

⁶⁸⁵ オーテピア高知図書館回答. 2023-03-11：高知市で軍恩連盟大会開く. 高知新聞. 1991-09-21, 朝刊.

⁶⁸⁶ 高知新聞. 1995-01-27, 朝刊.

○安岡元彦

「高知県軍恩連盟思い出しました。大叔父が車の運転中、ちょっと前の車に当てる事があったみたいで、やくざらしき前の運転手が飛び出して来たそうですが、大叔父がつけていた軍OBバッジ?を見て「失礼しました」と頭を下げて大急ぎで立ち去ったとのことです。恒石の大叔父には珍しく高揚して笑ってました。車は当時のワーゲンのビートルマニュアル車で犬はドーベルマンとシェパードで割とドイツ好みだったのかもしれない。」⁶⁸⁷

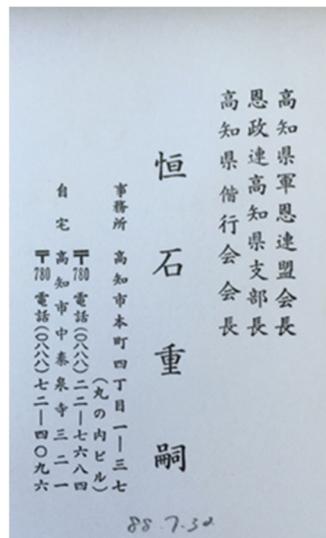


図 70 恒石名刺
1988-07-30 編者受領

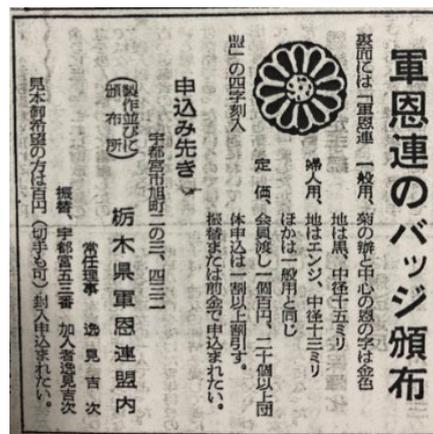


図 71 軍恩連盟のバッジ頒布
出典：軍恩新聞. 1962-06-01

⁶⁸⁷ E メール. 2019-03-18

3.2.15 高知県偕行会（90年3月）

「夜来の雨もあがり晴天に恵まれた三月十一日、鏡川河畔の山内会館⁶⁸⁸で、高知県偕行会の総会を開催した。

日曜日で、また幹事を六幼会が担当したこともあってか、若い期の参加が比較的多かったことは喜ばしい限りである。

総会では昭和天皇の大喪儀に祭官副長として奉仕をせられた45山内豊秋名誉会長から、一年間に及ぶ一連の祭礼に旧軍人として、また近歩一連隊出身者として誠心誠意奉仕をせられた間の貴重な体験をはじめ、我々には到底伺い知ることの出来得ない秘話をも披露して頂き一同深く感動を覚えた次第である。

次に昭和57年3月から⁶⁸⁹実に八年間にも及ぶ長年の間会長として会の発展と会員の親睦を深めるためにご尽力を頂き、また会員を暖く指導して頂いた44恒石重嗣会長から「80の坂を越えたのでこの際会長を勇退したい」との発言があり、次期会長は渡辺とすることになる。

午後四時からの懇親会は実に和気藹々、酒量は確かに減少してはいるが、酒が入ると流石に賑やかになり元気な声が会場内に高まってくる。

今回も出席せられた33松村義金大先輩は、言語明瞭、動作軽快で91歳の高令とは思われず至極ご壮健で、我々の実によい目標である。

春宵漸く迫った午後六時再会を約して盛会裡に幕を閉じた次第である。

当日の出席者、来賓3名、会員43名

（52 渡辺良臣 記）」⁶⁹⁰

⁶⁸⁸ 「高知新聞記事や山内神社の話によると〔山内会館の〕開業は昭和45年、廃業は平成16年3月末となるようです。はっきりした日はわかりませんが、山内神社が竣工したのは昭和45年9月25日ですので、同じ頃ではないかと思われます。

『高知新聞「山内宝物館執務室 山内会館に」（2004（平成16）年3月24日付朝刊28頁）』
《山内会館は資料館と同じ昭和45年に山内神社が建設、所有。株式会社山内会館が結婚式場など宴会場や集会場の貸し館業を行ってきた。しかし最近の利用が低迷し、3月末で駐車場経営以外の業務から撤退することを決めている。》との記述がありました。]

[オーテピア高知図書館回答. 2023-04-15]

⁶⁸⁹ 81年3月から：「...3月10日、高知偕行会では恒例による総会を山内会館で開催した。

[中略] 先ず⁴⁸期沢田会長より、開会ならびに退任のご挨拶があり、名誉会長に山内家ご頭主の豊秋様を、会長に⁴⁴期恒石重嗣先輩を全会一致で推挙したのち、恒石新会長から、次期総会で規約の審議決定を期しているなど、会の充実発展を図る構想についての力強いご挨拶があった。]。[渡辺. 花だより. 偕行. 1981, 365, p.44. (偕行社, 1981-05)]

⁶⁹⁰ 渡辺良臣. 花だより. 偕行. 1990, 474(6), p.65. (偕行社. 1990-06)

3.2.16 終戦 50 周年特別ドラマ (95 年 8 月)

「戦争中、日本からアメリカ国民に戦争放棄を呼び掛ける「日の丸アワー」というラジオ放送があった。陸軍参謀本部が行った謀略・宣伝放送である。昭和十八年（一九四三年）十二月二日に始まり、連合軍捕虜の中から選ばれた二十六人がマイクに向かった。放送を戦争に利用したこの話を、関係者が記した本⁶⁹¹を基に TBS が「こちら捕虜放送局」として、初めてドラマ化、近く放送する⁶⁹²。[中略]

当時、この放送を仕掛けた陸軍参謀本部の恒石重嗣さん（八五）はこう振り返る。

「ミッドウェー海戦で敗れてからは、勝ったなどという宣伝は、国外では通用しなくなり、謀略放送となった。米国民に厭戦（えんせん）の風潮を植え付けるのが目的で、いかにして聞かせるか、知恵を絞った。捕虜の消息を、放送に取り込んだのは、そのためだった。捕虜たちを命令で動かせば、番組内容は硬直する。自発的に協力させることにも腐心した」

現代でいえば、どう視聴率を上げるかにも似ている。

「次週はこの人たちの消息を流す」という安否情報の予告までした。米国では一万人以上が聞いていたという。[中略]

恒石さんはいま、高知市で貸しビル業を営んでいる。

「すでに本にもなっている話だが、そっとしておいて欲しいというのが本心です」

「放送を国家権力が利用するのは平和な時代では許されないが、戦時であれば当然だと思ふ。ことに総力戦ではラジオも重要な武器になる⁶⁹³」⁶⁹⁴

⁶⁹¹ 『日の丸アワー』. 著者池田徳眞は 93-12-06 逝去。[産経新聞. 1993-12-07]

⁶⁹² 95 年 8 月 14 日 21:00-22:54. 恒石の役を佐野史郎が演じた。

「こちら捕虜放送局」. テレビドラマデータベース. http://www.tvdrama-db.com/drama_info/p/id-30894, (参照 2023-02-10)ほか]

⁶⁹³ ○1959 年 NHK に入局した海外放送の歴史研究家・北山節郎（1936-）：「戦争当事国に共通するのが、報道統制である。しかし、統制の下でも、アメリカの AP 通信では政府の統制（検閲）には従うが、政府の宣伝の仕事には参加しないし、報道への政府の介入は認めないという姿勢が一貫して維持されたという。またイギリスのロイター通信でも、外務省から補助金を受けて対外報道をするという秘密協定の存在が暴露され、最高責任者が対独戦の最中にその職を追われるという事件があったが、ロイターの報道自体に政府の関与が及ぶ事態は、回避された。

一方日本の同盟は、政府資金を支給され「内閣情報部の指揮に服す」ことになっていた。]. [『ピース・トーク』 p.261-262]

○恒石：「海外放送はいろいろ聴いたが、いちばん信頼が置けたのは BBC。あまり出鱈目は言わなかった。[中略] 老舗というか誇りを持っていた。]. [DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』]

⁶⁹⁴ 安田彬. 戦争と芸能：謀略を担った「捕虜放送局」. 朝日新聞. 1995-08-11, 夕刊。

体験を語る

「春には「戦時対外放送」につきNHKより2回、夏にはTBSから、戦中の捕虜集団26名による「米国民向けの反戦放送」のドラマ制作（8/14放映）のため取材あり。又、空自幹部学校での「心理作戦」に関する講演、座談会の要請を受けた。本職の県軍恩会長も早や8年目に入り本年は国会決議の阻止や参院選への対応に苦闘した。その報いか全治3ヶ月の「ヘルペス」勲章？をいただいた。諸兄弟祈願壮康。」⁶⁹⁵

「又、8月14日夜の「TBSのドラマ」については予め取材の申入れがあったが、捕虜達は現に生存している人も少なくないので、迷惑を慮り拒絶したので、実名を使うことは避けられたものの、その内容は作り話で、8割以上が嘘である。「ドラマ」を面白くする為もあろうが、言論自由を高唱する戦後民主主義とはこんなものであろうか、と驚き且考えさせられた。」⁶⁹⁶

⁶⁹⁵ 恒石重嗣. 花だより. 偕行. 1995, 537, p.72. (偕行社, 1995-09)

⁶⁹⁶ 〃 . 「対米謀略放送のあらまし」 p.54.

3.2.17 憂 慮 (96年3月)

「戦争は技術が一步遅れたらだめ⁶⁹⁷。最近⁶⁹⁸の中国北朝鮮等、日本軍より装備がいいところばかりだろう。自衛隊がバタバタやったところで大和魂⁶⁹⁹では戦^{いくさ}にならん。
[中略] 自分の義務を尽してルールを守る。それが民主主義の基本。」⁷⁰⁰



図 72 ビデオ録画中の恒石
日時：1996-03-30 午後
場所：高知市・山内会館喫茶室
編者撮影

⁶⁹⁷ サッチャー英元首相：「ただ私には私なりの確固たる信念があり、まさにそのために、レーガン大統領の夢見る核兵器のない世界は実現しないと思った。その信念とは、SDIの研究を引き止められないと同様、新しい種類の攻撃兵器の研究を妨げることはできないということである。われわれは一番乗りをしなくてはならないのだ。科学の進歩は止められない。科学は、無視しようとしても止まらない。核兵器の配備とまったく同様に、SDIの開発も慎重に管理し、それについて協議していく必要がある。だが研究や、当然そのために必要となる実験は、進めなければならない。」。[マーガレット・サッチャー。[普及版] サッチャー回顧録〈下巻〉。日本経済新聞社、1996、p.28-29]

⁶⁹⁸ 「1995年-1996年台湾海峡危機又は1996年台湾危機とも呼ばれる第三次台湾海峡危機は、1995年7月21日から1996年3月23日まで台湾海峡を含む中華民国(台湾)周辺海域で中華人民共和国(中国)が行った一連のミサイル実験により発生した軍事的危機。」

[“第三次台湾海峡危機”. Wikipedia. (参照 2023-01-30)]

⁶⁹⁹ ○恒石は『心理作戦の回想』の中で「大和魂」や「武士道」という言葉は使っていない。
○資料「大和魂」／資料「武士道」

⁷⁰⁰ DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

3.2.18 逝去（96年9月）

○喪主 恒石喜美⁷⁰¹

「夫恒石重嗣儀病氣療養中のところ、九月十九日午後五時二十二分、八十八歳にて帰幽いたしました。ここに生前のご厚誼を深謝し謹んでお知らせ申し上げます。

なお、告別式は先の通り神式により執り行います。

記

一、告別式 九月二十一日午後一時から二時まで

二、場所 葬祭会館 心月記

高知市葛島二丁目美術館通り

平成八年九月二十一日 [以下略]⁷⁰²

○高知県軍恩連盟

「当会会長恒石重嗣殿九月十九日逝去されました。ここに謹んでご通知申し上げます。」

⁷⁰³

⁷⁰¹ 2004年2月逝去：「神戸市在住の村山賀代さん（八二）が[2004年11月]十六日、高知市役所を訪れ、市福祉基金に一千万円を寄付した。寄付金は、平成八年に亡くなった高知市の元県軍恩連盟会長、恒石重嗣さんの遺志を受けた妻の喜美さん（今年二月死去）が生前、「生まれ育った高知市に役立ちたい」と妹の村山さんに託していた。村山さんは「義兄は元陸軍参謀で、戦後も多くの人と親交があった。遺志を受けた姉は、高齢者福祉の充実を繰り返し訴えていた」と話し、岡崎誠也市長は「不景気の折にありがたい話。高齢者福祉の財源として有効に活用したい」と応じた。」、[高知市福祉基金に1000万円を寄付. 高知新聞. 2004-11-17, 朝刊]

⁷⁰² 同上. 1996-09-21. 朝刊.

⁷⁰³ ○同上.

○叙勲なし：「勲章と褒章の受章者は官報に掲載されますので、当館の官報データベース（※）で検索しましたが該当はありませんでした。」、[浜松市立中央図書館回答. 2023-04-01]

（※）「当館で契約しているデータベースは昭和22年（1947）5月3日から当日発行分の官報が検索できます。それ以前の明治16年（1883）7月2日の官報創刊日から昭和27年（1952）4月30日までは国立国会図書館デジタルコレクションで見ることができます。」、[浜松市立中央図書館回答. 2023-06-28]

○なお「昭20勲四等瑞宝章」とある。[[『高知年鑑昭和34年版』p.524／本書「3.2.5 乗馬」]

○「偕行」

「○敬弔 恒石重嗣君 9・19 逝 有利 正君記

恒石君は、南国土佐にて古来武人の家に生れ、常に毅然たる風格を備えた人柄であった。

昭和 15 年陸大卒業後 12D 参謀として東満警備、次いで参謀本部々員、大本営陸軍参謀兼報道部々員等主として軍中央部でご活躍、更に大戦末期は 55A 参謀として郷土四国の直接防衛に全力を傾注せられた。終戦後も公私にわたり活躍され、又平成 4 年春には高知市で 44 期生会を主催格別尽力せられ、参加者全員南国土佐独特の気分を満喫し、その士風に痛く感銘したとの事である。

その後も健康に恵まれ地元高知県の偕行会長次いで相談役、同じく軍恩連盟会長等の役職をも兼ね尽力されていたが、今年春頃から次第に体の痩せが目立ち、8 月 15 日受診、胃潰瘍にて 16 日入院、31 日手術、幸いに経過良好で喜んでいた処 9 月 17 日急変し、同 19 日肺塞栓により遂に逝去せられ、22 日神式により無事葬儀を終了せられた。

御遺族は、御夫人喜美様のみであるが屋敷内の別棟に親戚のお方が居住せられ、万事お世話下さるのでご安心の由。

昭和 5 年春四国 11D 各隊へ勇躍赴任した候補生 15 名中、この度恒石君のご逝去により残るは大屋君と私の兩名のみとなり誠に寂寥。ここに恒石君のご活躍を回想し謹んでご冥福をお祈り致します。

恒石重嗣君の想出

福原元彦君記

恒石君とは陸大同期。彼は参本情報班で、米系二世の女性に東京ローズと名づけ⁷⁰⁴対米謀略放送をさせた関係で、戦後彼女が米軍法廷に戦犯として立たされた時は、渡米弁護。その事について、私と家内が戦後初めて高知に行き城西館に泊まった折、話をしてくれました。又平成 3 年 45 期山内元侯主催高知一周旅行の時も、私は別行動で山内侯邸跡の三翠園ホテルで彼と面談。後彼はワーゲンを運転、桂浜竜馬像や各地を案内して呉れた。恒石君、夫妻共々、生前大変厄介になりました。さようなら。」⁷⁰⁵

⁷⁰⁴ 名づけたのは放送を聴いていた米国人将兵。

⁷⁰⁵ 田口英男. 花だより. 偕行. 1996, 552, p.57-58. (偕行社, 1996-12)



図 73 高知市中秦泉寺の旧宅付近
2018-10-31 編者撮影

謝 辞

私は池田徳眞氏の『日の丸アワー』にある英国人捕虜ウィリアムズ氏の放送協力拒否事件（本書 p.148-149）に興味をもち、余暇に恒石重嗣氏ら関係者からお話を伺い、定年後報告書を自作した。それがきっかけで山本武利早稲田大学名誉教授・一橋大学名誉教授から恒石氏について発表の機会をいただき、本書をまとめることになった。「東京ローズ」裁判の関連で語られることが多い恒石氏だが、本書では米国通の上司が酷評した日本の海外放送の中から、敵の聴取者を魅了する番組を実現した人物として、その生涯をたどってみた。司馬遼太郎の『坂の上の雲』には、世界一といわれたロシア騎兵に対抗すべく、劣勢の日本騎兵を率いて奮闘する秋山好古の姿が描かれている。恒石氏も圧倒的な米英の放送に対抗し、より複雑な状況下、組織内でイノベーションを実現した人物だと感じた。

なお本書作成に際し次の方々からご協力をいただいた。（敬称略）

稲田明子、上田薫、内海愛子、太田茂、大橋智子、大橋祐之、大森淳郎、久保田明、坂本昇二郎、島田匠子、杉山利幸、曾根三明、高田信二、立川京一、立花万起子、高林久記、土肥秀行、冨田光彦、鳥居英晴、中西輝政、名倉和子、西内一誠、西内隆純、細川為久馬、増田充、三谷充弘、村上聖一、森口知仁、モートン常慈、安岡元彦、山登義明、米濱泰英、Peter McQuarrie。

北海道立図書館。宮城県立図書館。埼玉県立熊谷図書館。【東京都】NHK 放送博物館、NHK 放送文化研究所、国立国会図書館憲政資料室、東京国立近代美術館フィルムセンター図書室、東京都立中央図書館、日本警察犬協会、文化学院を愛する会、防衛研究所戦史研究センター、郵政博物館資料センター。新潟県立図書館。富山県立図書館。福井県文書館、福井県立図書館。岐阜県立図書館。愛知芸術文化センター愛知県図書館。【静岡県】五年後の会、静岡県立図書館、静岡市立図書館、浜松市立図書館。奈良県立図書館情報館。岡山県立図書館。【広島県】尾道市立中央図書館、海上自衛隊第1術科学校教育参考館、広島県立図書館。徳島県立図書館。香川県立図書館、善通寺市立図書館。オーテピア高知図書館、高知会館、高知市民図書館、高知新聞社。佐賀県立図書館。大分県立図書館。宮崎県立図書館。鹿児島県立図書館。

上記以外にも多くの方々から様々なご支援をいただいた。すべての皆様に心からお礼を申しあげたい。

1988年、東京で初めてお目にかかった恒石氏は、精悍な外見に似ず穏やかに話をされる方だった。高知に戻る飛行機を待つ間、喫茶店でコーヒーが運ばれると、「わしゃ甘党ですきに」と照れながらスプーンに山盛り三杯砂糖を入れたことが、今でも記憶に残っている。（了）



図 75 高知へ帰る恒石氏
撮影場所：東京・浜松町駅
1988-07-30. 編者撮影

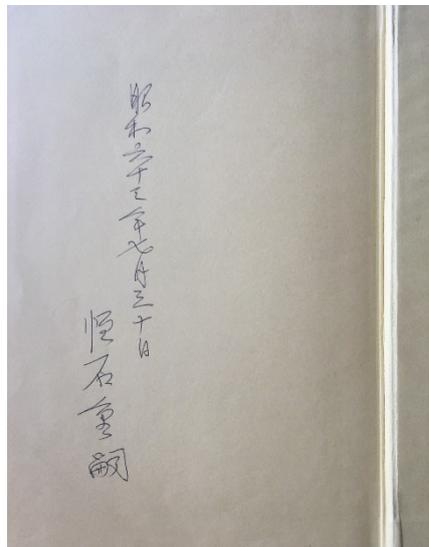


図 74 著書『心理作戦の回想』サイン
日付：1988-07-30

『恒石重嗣年譜』

名倉有一 1950 年生まれ。『日の丸アワー：対米謀略放送物語』（中公新書）に興味をもち、余暇に関係者から話を聞いて定年後以下の報告書を自作：『横浜・山手 250 番館』、『太平洋戦争初の捕虜収容所 善通寺の記録』，“Japan’s First POW Camp in WWII: Zentsuji ”, 『善通寺俘虜収容所』ハンドブック』、『駿河台分室物語』、『長野県・満島収容所』
収蔵例：国立国会図書館，善通寺市立図書館，フォーヴァー研究所，ケンブリッジ大学図書館。
NPO 法人インテリジェンス研究所特別研究員。

つねいしげつぐねんぶ
恒石重嗣年譜

せんでんしゅにんさんぼう たいへいようせんそう
宣伝主任参謀の太平洋戦争

なぐらゆういち
編集：名倉有一

発行：2023 年 8 月

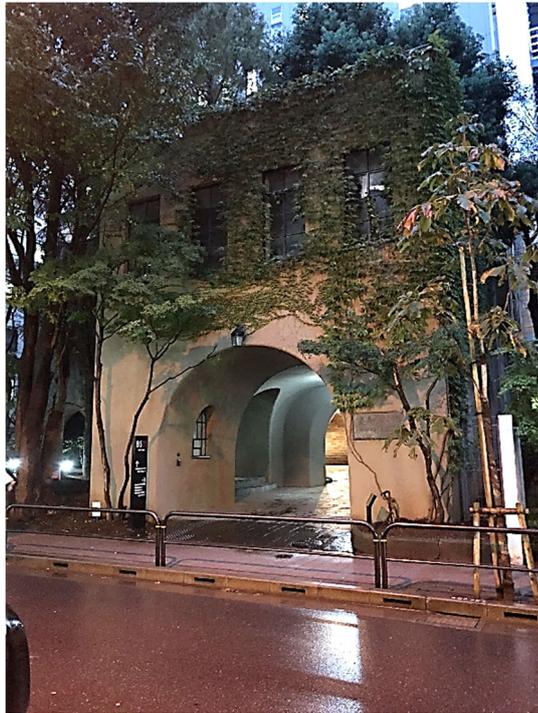
非売品

連絡先：nagura95@gmail.com

つねいししげつぐ
恒石重嗣年譜

宣伝主任参謀の太平洋戦争

資料編



文化学院跡

名倉有一編

恒石重嗣年譜

【資料編】（五十音順）

『恒石重嗣年譜』

あじアジアからの留学生

戦前の留学生関連機関

(1) 国際文化振興会

「1930年代には日本留学ブームといわれたように、日本には留学生が増え、インド、ビルマ、タイ（国、地域の名称は当時の通称、以下同じ）などの東南アジアからの留学生も来日していた。1934年には外務省のもとに国際文化振興会が設立されたが、これは国連脱退後に日本が孤立しないよう中国以外の国に対する外国語による日本文化発信の国家的な機関として作られたものである。この振興会が1937年からは日本語学習者の増加に対応するように日本語の普及も担い、1940年代には留学生を日本に派遣する役割も果たすことになった。」⁷⁰⁶

(2) 国際学友会

「国際学友会は、外務省に新たに設置された文化事業部第三課（中国以外の地域との「国際文化事業」を担当。一九三八年十二月より第二課となった）の担当する「国際文化事業」の中の留学生にかかわる実務機関として、一九三五年十二月に、外国人学生の保護善導を目的に設立された。外務省文化事業部の留学生事業の実務機関としては、同じく外務省文化事業部の第一課・第二課（一九三八年十二月より第一課に統合された）の扱った「対支文化事業」における日華学会と対を成すことになる。十九世紀末以来、在日外国人学生はそのほとんどが中国人で、留学生教育機関や留学生の世話を行なう機関も専ら中国人学生を対象としていたが、一九三〇年代になって増加したそれ以外の地域からの留学生への対応として、また「国際文化事業」として二国間文化協定の締結等の促進されるなか、広く欧米諸国をはじめ世界の国々との学生交流を推進しようとの動きを受けて、国際学友会は設立された。

国際学友会の目的は「学生ヲ通シ国際文化ノ交驩ヲ計リ、且本邦外国人学生ノ保護善導ヲ計ル」ことで、設立後はアジアからの私費留学生を中心に、欧米諸地域との協定による交換学生・招致学生、また日本国籍のいわゆる帰国子女も受け入れ、日本で初めての多国籍・多文化の留学生を収容する施設、国際学友会館を運営した。[中略]

この国際学友会の事業展開の変化をたどるにあたっては、外務省時代（一九三五年十二月 - 一九四〇年十二月）、情報局時代（一九四〇年十二月 - 一九四二年十一月）、大東亜省時代（一九四二年十一月 - 一九四五年八月）、という所管官庁による区分が有効である。」⁷⁰⁷

⁷⁰⁶ 鈴木洋子. 日本における外国人留学生と留学生教育. 春風社, 2011, p.119.

⁷⁰⁷ 河路由香. 非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生；戦時体制下の国際学友会における日本語教育の展開. (有) 港の人, 2006, p.33-35.

始	終	タイ	蘭印	フィリピン	インド	ビルマ	仏印	日本
—	40-03-20	16	0	2	3	1	0	1
40-04-08	07-10	16	1	2	0	0	0	0
09-11	12-24	32	3	1	0	0	0	1
41-01-08	41-03-25	31	3	0	0	0	0	0
04-08	07-10	22	1	0	1	0	1	2
09-11	12-24	19	1	0	2	0	3	2
合 計		136	9	5	6	1	4	6

図 76 戦前のアジア人学生数（国際学友会の日本語教育クラス）

出典：『非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生』 p.79-81.表 5（編者加工）

南方特別留学生

○「太平洋戦争中に「南方」と総称された東南アジアの占領地区などから、国費で招いた留学生。「大東亜の人質」とも呼ばれた。1943, 44 年に 205 人の若者が来日した。各地の名家や有力者の子弟が多く選ばれ、派遣前には現地で日本語の授業や厳しい訓練を受けた。ブルネイ元首相の故ペンギラン・ユソフ氏も留学生として、広島文理科大に学んだ。」⁷⁰⁸

○「南方特別留学生は政府主催行事にも参加し、[43 年] 十一月七日の明治神宮国民錬成大会では東条英機首相や「大東亜共栄圏」の指導者が見守るなか、組み体操を披露した。

十一月一日から関東地方への研修旅行に出発した。米英人捕虜が労働に従事する日本鋼管や「極東最大の菓子工場」の森永食糧工業、三菱重工業の戦車工場など「ふつうの日本人が近寄ることの許されない工場や訓練所」をはじめ、軍事秘密上、「立入制限区域」だった海軍砲術学校や海軍航空学校、陸軍士官学校などを訪問した（十一月十一日—一九日）。フィリピン留学生たちの「日本見学の幅の広さは、当時の日本の青年に与えられた幅よりもよほど広いものであった」（平川祐弘「レオカディオ・デアシス」⁷⁰⁹の『南方特別留学生トウキョウ日記』と森鷗外の『独逸日記』）⁷¹⁰。

⁷⁰⁸ 塚田真裕. マラヤの若者広島で被曝死. 中日新聞. 2022-08-17, 朝刊.

⁷⁰⁹ 「レオカディオ=デアシス（一九一九—二〇〇六）。太平洋戦争で日本軍の捕虜となる。釈放後、日本の国費留学生として戦時下の東京に滞在。」. [永井均. “南方特別留学生トウキョウ日記”. アジアと日本：日記に読む近代日本 5, 竹内房司編. 吉川弘文館, 2012, p.233]

⁷¹⁰ 同上. p.238-239.

あなアナウンス：「淡々調」と「雄叫び調」

戦前

○「この表現が、翌一九四一年八月に出た『アナウンス読本』（非売品）にそのまま採用された。「アナウンサーは与へられたニュースの内容を理解、消化し、書かれてある文章を正確に誤りなく読み、以てその内容を完全に伝達しなければならない。[中略]つまり、ニュースを読んでゐる人間（アナウンサー）を聴取者に意識させない様な読み方が良いといふのである。主観性の強い表現方法は、聴く者に不必要な反発を感じしめるものである……過去のニュースの読み方が朗読調とするならば、現在吾々の用ひてゐる方法は『話しかけ調』と云ふことが出来る。」⁷¹¹

戦時中

○「開戦とともに、「淡々調」からの訣別が叫ばれはじめ、『放送研究』は論壇となった。熊本中央放送局の石井登志雄は、一九四一年一二月号に、「アナウンスの時局的変貌を望む」と書いた。「現下世界の狂躁のもと、[中略]現行のアナウンスは優しさに過ぎ、又それが為に澆刺たる力を失つてゐる。要はもつとダイナミックなアナウンス振りが望ましいのである。[中略]つづく二月号に、開戦の大本営発表をアナウンスした館野守男が登場した。題して「伝達から宣伝へ⁷¹²」[中略]『淡々調アナウンス』の地盤であった聴取者の関心関係の多様性は、今や失はれたのである。情熱をこめたアナウンス、国民の関心の方向を強調するアナウンスこそ、斯る情勢に適応する最も良きアナウンスと云はるべきである」一九四二年四月一五日から、英語追放の波にのり、アナウンサーは「放送員」と呼ばれるようになった。」⁷¹³

○「志村正順が、『放送研究』[43年?]二月号に寄稿した長文の「海外放送のアナウンス」は、まず最初に「音質」を強調した。[中略]第二に声量である。「此れは音質よりも寧ろ重要な要素ではないか……巨大な体軀の毛唐と小さな日本人との間には、生理的に言つて声量に多少の遜色があるのは止むを得ない。此れを補ふのは矢張り精神力である。何糞と頑張る。マイクロフォンを敵米英と見立てて正義日本の進むべき道を世界に告げる」ここで志村が一つのエピソードを紹介する。「参謀本部の某少佐が我々との会合で、冗談だが、斯う言はれた。大きな太鼓を演奏室へ持って来い。それをアナウンスの一語一語の切目にドーン、ドーンと叩け、其の音に負けない丈の声で喋れ」マイクの性能も、今日とは格段の違いがある時代の話である。[中略]さらに志村は「技術的方面」を論じた。[中略]殊に海外[邦人]聴取者の殆んどが内容を筆記してゐるに於てをや。限られた時間に如何に豊富なる材料を盛り得るや。大東亜戦

⁷¹¹ 『ラジオ・トウキョウII』p.363-364.

⁷¹² 「…このように宮本は、政治論議禁止の規定の抜け道を探してでも、国策の宣伝を進めべきと主張していた。」[資料「宮本吉夫」]

⁷¹³ 『ラジオ・トウキョウII』p.364, 366.

争に挙げる皇軍の赫々たる戦果の余りに多く、放送時間がそれに引替へ余りに少いの
に幾度ニュース係と顔見合せて溜息を洩らした事か [中略]

自由奔放なアナウンス

国内放送では種々の制約に縛られて、主観を交へたアナウンスは結果の良否に拘はら
ず思ひ切つた所迄は中々行けないが、海外の場合はどしどしやつて良いと思ふ。但し
根底に腹の底に、確かりと皇国民たるの自覚と時局に対する正確なる認識とを持つた
上でのアナウンスである事は勿論の事である。改めてことわる迄もない。尽忠護国の
花と散られた陸海将士の戦功を語る時は感激に泣いても良からう。暴戻米英の抑留邦
人取扱の非人道をなじつて怒髪天を突くていのアナウンスも又良いではないか。敵の
デマ放送を呵々と笑ひ飛ばして演奏室に腹を抱へても更に差支へないと思ふ。海外放
送は聴取者を意識せよ……国内放送なら今日読んだニュースはすぐ明日にでも聴取者
からの反響がある。褒められたり、叱られたり、そんな事はどうでも良いんだが、と
にかく参考にはなる。所が現在の海外放送は出せば出しつばなし、在外公館等の特殊
関係からの御注文でも相当の日時を要する。つい対象を見失ひ勝になる。所謂焦点の
ない放送をやる危険性があるのである。此れは厳に警戒せねばならぬ。戦争後特に海
外の聴取者は邦人許りではない。敵国人も第三国人も聞いてゐる。さう言ふ種類の聴
取層は別にしても、前に述べた様に聴取者などと言ふ生優しい言葉では表現出来ない
熱心な聴手があるのである……深夜の放送は眠いし又辛い。然し雑音に妨げられつつ
必死に東京放送を求めてダイヤルを廻す人々の姿を思ひ浮べる時眠いなどとはかりそ
めにも言へた義理ではない。此の人達の為に東京の声を聞かせよう。赫々たる戦果を、
銃後の素晴らしき団結を。伝へて『故国に有ると異郷に有るとを問はず齊しく陛下の
赤子として此の戦争を勝ち抜いて行かうではありませんか。』さう言ふ気持ちを電波に
乗せて行くのが海外放送員の責務である」(『放送研究』二月号、四五—五二頁)⁷¹⁴

⁷¹⁴ 『ラジオ・トウキョウⅡ』p.367-370.

うす 白井茂樹

○Wikipedia

「白井 茂樹（うすい しげき、1898年（明治31年）10月30日- 1941年（昭和16年）12月23日）は、日本の陸軍軍人。最終階級は陸軍少将。

経歴

鹿児島県出身。薩摩郡高江村大字久見崎（現在の薩摩川内市久見崎町）に白井恕助の息子として生まれる。熊本陸軍地方幼年学校、中央幼年学校を経て、1919年（大正8年）5月、陸軍士官学校（31期）を卒業。同年12月、歩兵少尉に任官し歩兵第46連隊付となる。1926年（大正15年）12月、陸軍大学校（38期）を卒業した。

1928年（昭和3年）3月、参謀本部付勤務となり、参謀本部員、ポーランド・ソビエト連邦駐在、ポーランド兼ルーマニア公使館付武官補佐官、参謀本部員、参謀本部付などを務め、1937年（昭和12年）8月、歩兵中佐に昇進。同月、兵科を航空兵に転科し航空兵中佐となる。1939年（昭和14年）3月、航空兵大佐に進み参謀本部兼大本営第8課（謀略課）長に就任。1940年（昭和15年）8月、参謀本部課長に転じ⁷¹⁵、浜松陸軍飛行学校教官を経て、1941年（昭和16年）7月、飛行第98戦隊長に発令さ

れ太平洋戦争に出征。ビルマの戦いに参戦し、1941年12月、ラングーン攻撃の機上で戦死し、陸軍少将に進級した。」⁷¹⁶



図 77 白井茂樹戦死

出典：朝日新聞、1941-12-31

⁷¹⁵ 「白井茂樹氏の経歴について以下の資料で確認いたしました。

「1940年参謀本部課長に転じた」ということがわかる資料はWikipediaで参考資料になっていた『日本陸海軍総合事典』以外に見当たりませんでした。[中略]

『日本陸海軍の制度・組織・人事』 日本近代史料研究会／編 東京大学出版会 1979年 p.151 14.3.9～16.2 参謀本部謀略課長 [以下略]。[浜松市立図書館回答、2023-06-13]

⁷¹⁶ “白井茂樹”。(参照 2023-06-11)

おか 岡 繁樹

「[私が東京ローズ裁判のため渡米したおり、初めて知ったことであったが] ...サクラメントの桜府日報の経営者は岡繁樹氏 [一世。1878-1959] で、戦争中日本語の活字をもってインドに飛び、敗退するビルマ方面の日本軍に対する宣伝用の新聞やビラを作っていたという。在米邦人達から売国奴的存在として非難されていた。私とは同郷の高知県人⁷¹⁷と聞いたが、会う機会はなかった。」(心理 322, 374)

「インドのニューデリーからは、「三浦按針アワー」というのがあった。按針というのは、徳川家康の時代に来日した最初の英人で、ウィリアム・アダムスのことであるが、彼を生き返らせて天上の声として使ったものと思われる。この放送は主として前述の岡繁樹氏のグループ（約五名と日本兵捕虜二名）が企画したものと考えられる⁷¹⁸。右のほか重慶、モスクワからの日本語放送もあった。」(同上. 377-378)

⁷¹⁷ 「岡繁樹は、明治十一年八月二十四日、高知県安芸郡安芸村東浜十八番地（現在、安芸市東浜八百五十五番地）に父直一、母駒の長男として生まれた。」[岡直樹. “I 思い出：兄岡繁樹の生涯”. 祖国を敵として：一在米日本人の反戦運動. 岡直樹／塩田庄兵衛／藤原彰編著. 明治文献, 1965, p.3]

⁷¹⁸ 「英国の放送の中心はニューデリーであった。自分が [インドに到着した 43 年 11 月からカルカッタに向うまでの] 三カ月の滞在中、多くの原稿を書き、またそれを録音した。カルカッタでは原稿をニューデリーに送り、あるものはカルカッタで録音もした。

ニューデリーの放送は日本の参謀本部でも相当の脅威を感じていた事を戦後、自分はその主任であった将校より聞いた。ニューデリーの放送のうちに週間解説というのがあって、その時々の戦況、真相を発表放送した。」[岡繁樹. “”At Last” (遂に来た!) が二度あった”. 同上. p.75-76]

軍陣新聞

「軍陣新聞は、後の解説欄にも書いてある通り、岡繁樹が自分の持っている印刷機・活字をそのままニューデリーに移して、イギリス軍指揮の下に、主としてビルマの前線に撒いた新聞である。

岡は新聞のプロであったから、体裁などは、初めから最も整ったものを作ることができた。

創刊は昭和 18 年の秋で、長期にわたって定期的に発行されたという点では、「軍陣新聞」はそのナンバーワンというべきであろう。

「軍陣新聞」は撒かれた場所が日本と余りにも離れていたため、「落下傘ニュース」「マリヤナ時報」とはちがって、戦後もその存在を知られていなかった。

岡は生粋の新聞人であったから、「伝単」というより、本格的な新聞を作りあげる結果になった。この紙面 [p.108, 第 71 号] でも汪精衛に「氏」をつけて報道し、東京からのニュースも極力拾っている。

この新聞のユニークさは、早くから「社説」を載せていたことにある。ここで彼はかなり自由に「自分の言葉」を述べることができた。

東京からのニュースは中立国ポルトガルの首都リスボンを通じての「同盟ニュース」から拾っていた。」⁷¹⁹

⁷¹⁹ 『秘録・謀略宣伝ビラ』 p.104-110 (下欄)

岡繁樹小伝

(a) 生い立ち⁷²⁰

- ・高知県立中学校三年級の時退学処分を受け、自宅前の原田柔道場に通う。
- ・中学時代にも柔道と喧嘩には負けたことがなく、其処彼処で角力をとったり番持バンモテ（石を持上げる競技）をやり、八幡宮に担いだ石が残っていた。
- ・「父は商家だが、隣村伊尾木に山林と農地を持ち、人を雇って農業を営んでいた。ある日隣接の農夫とわが使用人との間に境界の争いがおこって、父に早く来てくれと急使があったので、父は兄を代理に行かしたたら、行くや否や先方の農夫の首を締めておどしたとのこと、それでこの事件もわけなく落ち着いたらしい。」(p.5)
- ・「兄は相当早熟だったとみえ、中学在学当時、同じ下宿で知り合った憲兵上等兵が、一日安芸の自宅へ訪ねて来たことがあった。憲兵は宅の離座敷の床にピストルなどを置いたまま、兄と二人で出て行って、三四日帰らなかった。それは二人で土地の明治亭という料亭に流連したことが後に分明して、父が大いに憤慨し〔中略〕その憲兵は安部栄という吾川郡池川の者で、日露の役で露国の捕虜となり、帰国後日本に居づらくて渡米し、私が明治四十一年二月渡米した時、兄が加州サクラメント桜府で経営していた日刊『植民新聞』が、借金のかたに差し押えられて遂に投げ出して、一時田舎で働いた時、その憲兵が兄と共に居て、其時から私も彼と知り合った。」(p.5-6)
- ・「…無断で〔家を〕飛び出して東京へ行き、人力車を曳きなどして自力で私立中学に通ったらしい。〔中略〕中学を卒業して陸軍士官学校を受験したが、身体検査で眼のため不合格となり、東京で徴兵検査を受けたら砲兵に合格した。ところが郷里安芸郡に四人の砲兵合格者があって、内三人が採られ、兄一人が籤のがれとなってふたたび東京に出、従兄に当たる黒岩周六氏の『万朝報』の社会部の記者となり、大いに活動したらしい。」(p.7)
- ・「〔一九〇二年に渡米して〕⁷²¹ 兄が桑港に着いたとき、丁度アラスカの鮭の季節でなかなかの荒仕事だが、それに加わって出稼ぎに行き、多少の金をためて桑港に帰り、その金を旅費に当てて日本に送り、幾人かの友人を次々に渡米させた。」(p.9)

(b) 開戦

「日米開戦の危機は目前に迫っていた。併し大部分の在留同胞は日米戦争はないと思っていた。ロスアンゼルスロサンゼルスの或る邦字新聞の社長は、もし戦争が起きれば自分の首をやると云い、在米同胞の指導者すらも日米戦争は決して起きぬと公言して居た。私にはそうは思われなかった。〔中略〕

〔真珠湾攻撃が開始され〕来るべきものが来たという当然の感じであった。が、日本人の愚かしさに無性に腹を立ててはみるものの、私も同じ日本人である。私の心はファシズムへの憎悪で一杯だった。私はすでに四十何年かを米国で過し

⁷²⁰ 岡直樹. “I 思い出：兄 岡繁樹の生涯”. 『祖国を敵として』 p.3-9. から抜粋・引用.

⁷²¹ 塩田庄兵衛. “序文”. 上記 I.

てきた。私の二人の子供はアメリカ市民である。日本政府は日本人である私を国内から追放しようとした。仮名を使わねば帰れない私の祖国日本！私が日本へ帰ると必ず特高は私の背後を尾行し、投獄しようとした。警視庁の一室で受けたあの残忍な拷問を忘れる事が出来ぬ。併しアメリカでは私は自由であった。開戦の報に接した瞬間、私の心は決っていた。アメリカの為に力を尽そう。アメリカへの忠誠を誓おう。この日から、「売国奴！」これが私の名前になった。

私は直ちにルーズヴェルト大統領に宛て次のような意味の電報を打った。「私は貴君の宣戦布告のラジオを聞いた。茲に私は米国政府に心からの忠誠を誓うものである。私は日本の活字を所有しているが、これが何かの役にたつならば、何時でもアメリカ政府に提供しよう」と、ルーズヴェルトの秘書から、誠に鄭重な礼状がとどいた。」⁷²²

(c) 収容所生活

「戦争開始と同時に、在留同胞の指導者とみなされている者は全て FBI の手によって強制収容されたが、他の一般同胞はそれとは異り、開戦の翌年即ち一九四二年の四月から米国陸軍の手で、保護という名目で太平洋岸にいる日本人をいくつかの集団に分けてキャンプに収容した。陸軍としては、日本人の待遇には相当な注意を払い、汽車に乗せても年寄りには寝台車を与え、病人に対しては鄭重な手当を施した。汽車の中の食事も、可成り立派なものであった。多少の混雑はあったが、直ぐ改善された。四月から七月まで陸軍の管轄下にあった。

米国政府はこの陸軍の保護という形を廃止して、新に、ウアー・ロケーション・センター（戦時収容所）なるものを作り、大統領直轄の長官を置いて任務を遂行させることになった。米国内に十カ所の収容所を作った。収容所といっても新しい住宅である。燃料も充分であり、食糧も充分支給され、米兵の給与と少しも違わなかった。或者は種々不平を言ったが大部分の人間は満足していた⁷²³。政府から派遣された監督官がいたが、我々は収容所内で自治制を行った。

商店も作れば、購買組合も作り、日常生活としては何の不自由も感じなかった。但し、自由に収容所外に出ることが許されぬのが多少の苦痛であった。

⁷²² 岡繁樹.“私は売国奴か—売国奴の烙印を押された人間の記録”.『祖国を敵として』p.51, 53-54.

⁷²³ ○「第2次大戦中、米国で強制収容された日系人12万人超の名前を初めて記録した「慰霊帳」を中心となって作成した南カリフォルニア大のダンカン・隆賢・ウィリアムズ教授(53)は、「強制収容の歴史は単に数字上のもではなく、実際に人々が家や教育機会を失い、人生を妨げられた。…」と述べている。【ロサンゼルス共同】米強制収容12万人氏名記録：日系人の「慰霊帳」が完成. 静岡新聞. 2022-09-26, 朝刊, p.4. から抜粋]

○「第2次大戦中に全米各地の強制収容所に収容された日系米国人たちが、収容所へ薬などを送ってほしいと求めた約250通の手紙やはがきが、コロラド州デンバーの日系人が経営していた薬局跡地でこのほど見つかった。AP通信が21日伝えた。手紙が求めた品物は、せき止めドロップから糖尿病の薬、キャンディーまで多岐にわたり、収容所での不自由な生活ぶりがうかがえる。」. [ロサンゼルス共同. 日用品不足手紙に切々. 静岡新聞. 2012-11-23, 朝刊]

キャンプに収容された時日本人は、日本は必ず勝つのだ、我々がこういう所にいるのも長いことはあるまい、という堅い信念を抱いていた。日本軍の優秀性を過信して一部の同胞は、アメリカの新聞が日本軍の敗戦を報道しても容易には信じようとしなかった。飽くまで米国を敵にし日本の為に尽そうという人間が一部いた。二世ですらその市民権を放棄してしまった者も出るような状態であった。然し一九四三年秋頃から、このような気持も次第に変化してきた。特にガダルカナルの敗戦其他打続く日本軍の敗戦で、これでは日本は勝てぬと考え始めた。そうなる人間は現金なものである。余り日本のことは口に出さぬようになった。

私が最初にいた収容所は、ロスアンゼルス近くのポモナにあった。ここに八月までおり、八月終わりにワイオミングのハートマウンテンに移された。ここは非常に気候の寒いところで九月の初めに雪が降った。見渡す限りの不毛の地で、荒涼とした土地が続いていた。生活は単調を極めた。」⁷²⁴

⁷²⁴ 『祖国を敵として』 p.54-56.

(d) 国務省のアプローチ

「一九四二年の十二月初め、ワシントンの国務省の人が私を収容所に訪ねて来た。「実は今度英国と米国が協同してインドに大きな飛行基地を作ることになった。君の知っているアダムス氏も行くが、君も一緒に行っては呉れまいか」という話であった。何をするのだと確かめもせずには私は直ぐ承諾した。収容所でたいした仕事もせず単調な生活を送っているのが耐え切れなくなっていたからである。彼は私の同行者五人を選んで呉れと言う。又私が所有しているサクラメントの桜府日報社の活字を調査させてくれと言った。[中略]

契約しておきながら断ってくるものもあつたりしたが、どうやら同行者五人を集めることが出来た。国務省の人に会ってこのことを報告した。彼はサクラメントにある私の活字を調査してきて、これを米国政府に売ってくれないかといった。売るのは嫌だが、月百二十五弗で二年間なら貸しても良い、という彼は妙な顔をした。そこで私が、この戦争は二年間で片がつく、といったら、愈々驚いた顔をしていたが、結局二年間の貸賃を一度にももらうことになって話が決った。

[中略]

... [米国に渡った 1902 年] 当時の日本の政治は甚だ私にとって不愉快であった。言論の自由も出版の自由も次第になくなった。政治家は腐敗し軍閥の勢力が徐々に強くなっていた。これでは日本に民主主義の花は咲かぬ。日本においては不可能だがアメリカには言論の自由がある。アメリカから日本の世論を喚起しようと思ひ立ったわけである。日露戦争当時は、日本内地の幸徳 [秋水]、堺 [利彦] と呼応してアメリカで猛烈な非戦論を発表し、サンフランシスコ平民社を設け社会主義運動を行った。幸徳が私をたよって来米した時に、幸徳と共にサンフランシスコで日本社会革命党を創立したことがある。

一九三九年にサクラメントにある『桜府日報』を買いとり、私はこれに私の生涯を賭ける思いで全精力を集中した。当時の在米邦字新聞は殆んど日本軍閥の手先のようなもので、世界情勢の正確な報道を何一つ掲載しなかった。私の新聞だけが、たとえ日本に不利なことであってもどしどし掲載した。私は戦争には絶対反対であった。[中略]

私が印度へ行って、連合軍に協力し所謂、謀略宣伝工作に従事することは、私にとってみれば決して日本を売るものでも何でも無い。寧ろ深く日本を愛すればこそなのである。命を捨ててかからねば出来る仕事ではない。私の妻に、印度行きのことを話すと「あなたは畳の上では死ねない人ね」と言って強いて止めようとしなかった。当時私は六十五歳になっていた。」⁷²⁵

(e) インドでの活動

「最初の予定ではサンフランシスコから船で出発することになっていて全ての書類は私がサンフランシスコへ行くように出来ていた。然し米国陸軍はどうしても私に太平洋沿岸を見せることを許さなかった。これは非常に面白いところで、私が米国の為に尽していることは分っていることも、万一私が捕虜になった場合、私が

⁷²⁵ 『祖国を敵として』 p.56-59.

日本軍に通報してしまうことを怖れたのである。二、三カ月もこの為^に手間どってしまった。漸く一九四三年十一月に飛行機で行くことに決定した。

私は家族をデンヴァーに移した。デンヴァーから、飛行機でシカゴを経、米国の最南端の半島になっているフロリダのマイアミに着いた。マイアミからポート[オブ]スペインを通り、南米を南へ南へと下り[ブラジル北東部の]ナタール着、そこから大西洋を横断する。途中、太平洋のミドウェーといわれるアセンションなる小島がアフリカの近くにある。ここへ立寄った。このようなところにと思われる程の素晴らしい巨大な航空基地があった。ここから、アフリカのアクラに着いた。アフリカを横断してエチオピアの上空を通り紅海を越え、アラビヤの海岸を^通って印度のカラチに着いた。英国の政庁があり、米国の印度に於ける軍司令部のある、ニューデリーに着いたのは、米国を出て丁度十二日目である。船だと七十日かかる。私達は夜間は飛ばなかったけれどもわずか十二日しか要さなかった。私達というのは、アダムス氏と私と他に一名である。私達が印度へ無事着いたことを知って、二番目、三番目の組がアメリカを立てて印度に向った。

私達はニューデリーで英国軍の管轄に入った。そして英国の情報部の指揮の下に行動することになった。即ち、東南アジア方面最高司令部と情報部とが合同して、東洋方面向けの宣伝活動を行なうことになった。三カ月の準備を費し汽車で更に東のカルカッタに向った。

これより先、米国ではO・W・I (Office of War Information) の宣伝部がアメリカの正規兵として、アッサムのレド (ビルマ・ルートの最重要地点) に二世を送っていた。これは、クラーク・河上 (河上清の子息) をキャップにして、カール・米田など主として共産党の連中で構成されていた。私達は、彼等と協力し、相提携して種々の宣伝を行なったのである。当時、昆明 (ビルマ・ルートの終点) には野坂参三、鹿地亘等がいた。

共産党員か或は余程ラジカルな思想を持たぬ限り、当時アメリカに協力して日本に齒向うことなど、在留同胞にとって不可能事であった。

当初は英国軍及び印度軍は極端に我々を警戒しており、私達には一切の自由行動を許さなかった。彼等にとっては、私達は敵国人であるからである。其点クラーク・河上のほうは米軍管下であるから比較的楽であった。併し日本人は、我々グループの数人を除いてはインドにいないのであるから、おいおい警戒の眼もゆるんだ。インド人そのものは好意を示しこそすれ決して私達に悪感情を持っていなかった。私達は比較的気楽であった。其の中、台湾人、朝鮮人で日本語の解る者も来るようになった。[中略]

アメリカから持って来た私の活字が整然と並んでいる。愈々私達は仕事にとりかかった。私たちの任務は『軍陣新聞』を発行することと宣伝パンフレットを作成することである。東南アジア最高司令部から、情報部へ、仕事の注文があつて、情報部がこれを私達に示すわけである。『軍陣新聞』は週に一回発行する。ヨーロッパ及びアジア方面の戦況の正確なる報道が主であった。と同時に食糧も武器も乏しい日本軍の兵士に対して、無駄死を止め連合軍に投降するようにと勧告することも主要な目的であった。日本人は捕虜になることを極端に嫌い、寧ろ死を選んだがるのである。これに対して私達は、捕虜になっても国際公法によって

十分に優遇されるものだということを盛んに宣伝したのである。大体次のような調子のものである。

(原文のまま)

「アイ・サレンダー…右の言葉を復唱してよく覚えこみ給へ。役に立つ時が来るから。負傷したり、病気になったり、行倒れになったりして、退却中の日本軍から取残された時「愛されんだあ！」の言葉を使ひ給へ。言葉は単に戦闘を中止したという意味だから、英軍部隊がやってきたら、ハッキリとそれを呼び給へ。英軍は諸君に医薬を与へ食事もさせて、諸君の戦友数千名が暮している後方収容所へ送り、戦争終結まで、国際法の保護の下に諸君を護る。日本の好戦主義政府が打倒された暁には諸君も安心して日本へ帰ることが出来る。この言葉を覚えこみ給へ。

英米軍は、日本人が死者狂いで突撃してくるのに何よりも一番恐怖を感じていた。だから先ずもって捕虜になることを勧めたわけである。[中略]

[ビルマ戦線からインドに送られた日本の] 捕虜達は最初のうちはなかなか連合軍の命令に従わず反抗の態度を示している。こういうことがあった。或る日本軍の将校で腕力に自信のあるせいか、暴れまわっていてなかなかいうことをきかぬ男があった。そこへ英軍の将校が行って穏やかな調子で懇々と語を進めている中に、矢庭にその英軍の将校の胸倉を取って投げ飛ばそうとした。柔道の心得があったらしい。英軍将校は非常な小男であったが少しも慌てず右手で、ドスンと日本軍将校の顎にアッパーカットを食わすと、もんどり打って彼は倒れて了った。小男ではあったが後で聞くと拳闘の選手であるという。以後全くこの日本将校は温和しくなってしまった。見ていて私は何となく悲しくなった。[中略]

インド作戦の失敗、インパール作戦の失敗これらの相次ぐ日本軍の敗北の結果、ビルマのジャングル地帯で死んでいった日本軍の数は夥しいものであった。補給線を断たれた日本軍は食糧もなく武器もなく、只ジャングルの中を放浪するばかり

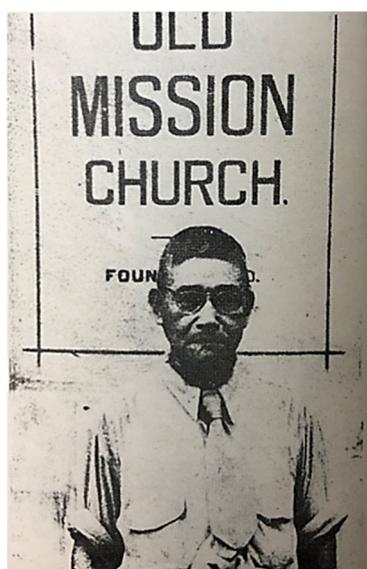


図 79 岡 繁樹
於ニューデリー, 1945 年
出典:『祖国を敵として』
巻頭写真.

りであった。病気で斃れても医薬品とて更がない。死を待つばかりである。自決用の手榴弾を一個持たされて、投降することも知らず放浪する日本軍隊程非合理的な軍隊はないと思う。死にかけて倒れているものが、幸いにも英軍に発見されて救助される。発見されなければ死んでゆくだけである。

このような悲惨な目に日本兵を逢わせたくなかった。力尽き矢折れたならば捕虜になることは決して日本武士道にも反しないのである。英国にも騎士道はある。兵隊同士、人間同(ママ)志ではないか。話をすればお互いに分る筈だ。私達の書くものは常にそのようなものであった。一枚一枚の伝単の中にそれこそ私達が精魂を傾けた。この一枚の伝単を拾うことによって、一人の人間の生命が助かるのだ、然も同じ日本人ではないか。私達の悲願がそこに籠められていたが、私達の心が読む人に正しく響いたかどうかは疑問であった。[中略]

印刷物は飛行機で撒布される。雨に濡れても安全なように、一枚一枚に油をひく。一つの包に二千五百枚の伝単が入る。飛行機にはこの包みを置く場所が定まっています、そこへガンサック（南京袋のようなもの）を丁度そのサイズに作り伝単を包み、ガンサックの真中の紐を引抜けば、自然に中身が落ちる。二千五百枚ずつ落してゆく。日本軍のいるあらゆる地点にバラ撒く。戦場でこれを拾うことは日本軍人には許されていない。将校にかくれて読まなければならなかった。喜ぶべきか悲しむべきか知るところではないが、現実にこの伝単を読んで連合軍に投降し捕虜となったものは、私は遂に聞かなかった。捕虜達がいうには「英軍の宣伝はあまりにも自分たちの弱点をつきすぎるから却って反感を抱く」といっていたが、この点、米国の宣伝工作の方が成功したようである。」⁷²⁶

(f) 任務終了

「其日私は休暇をとって旅行するつもりであった。鉄道の切符を買いに行ったのが金曜日であった。併し切符が未だ来ていないから月曜日にしてくれという話であった。ところが日曜日の放送に重大放送があるから一寸旅行を待ってくれという。当時ニューデリー放送で毎日曜日に私が監修者として時事解説を放送していた。それで愈々日本はポツダム宣言受諾の用意がある、日本は降伏した、ということになって、前にもまして私の仕事は忙しくなり、休暇どころではなくなった。

最高司令部はシンガポールに移転することになった。私達もシンガポールに行くように言われたが、そこには日本の本職の新聞記者も沢山いるし、活字も豊富にあるから、私達がわざわざ出向いてゆく必要はなかった。私達の契約はエンド・オブ・ウォーというのであるから戦争が済んでしまえば、用事がない。併し尚六ヶ月契約してくれといわれたので、翌年一月まで残り、一月に初めて任務が解けてアメリカに帰ることができた。[中略]

アメリカに帰ってみると、何か邦人の私に対する態度は釈然とせぬものがあった。私としては、私が戦前彼等に語った戦争の見透しが総べて正しかったし、予言的中していたのであるから、相当これに対して反響があって然るべきだと思

⁷²⁶ 『祖国を敵として』 p.59-66, 68.

っていた。良い批判が得られるであろうと楽しみにしていた。然るに全く何等の批判も反響も得られなかった。六十五歳の老軀に鞭打つこの無謀といってもよい印度行きが、日本の敗戦と、それに続く日本の民主主義革命という現実に対して多少なりとも意味をもっていたと私は信じている。然るに在留同胞の私を見る眼は冷かった。私の言を強く否定したことがある人に会って、どうだ僕のいうことに間違いあるまい、というとその人は、君は先見の明があるよと言っただけであった。

私の失望は大きかった。人々は未だ私を国賊と罵り、売国奴と蔑すむつもりなのであろうか。云いようのない憤りの感情を抑えることが出来なかった。

(『文芸春秋』昭和二十五年五月号)⁷²⁷

⁷²⁷ 『祖国を敵として』 p. 68-70.

かい 海外情報の収集：情報局

○外国情報の収集配布方針

「愛宕山受信所（東京通信局愛宕山分室）⁷²⁸に同盟からも受信設備と要員を提供して協力することが決まったのは、アジア太平洋戦争勃発の直前であった。情報局は一九四一年一二月六日、戦時下における外国情報の収集配布について次のような基本方針を決定した。」⁷²⁹

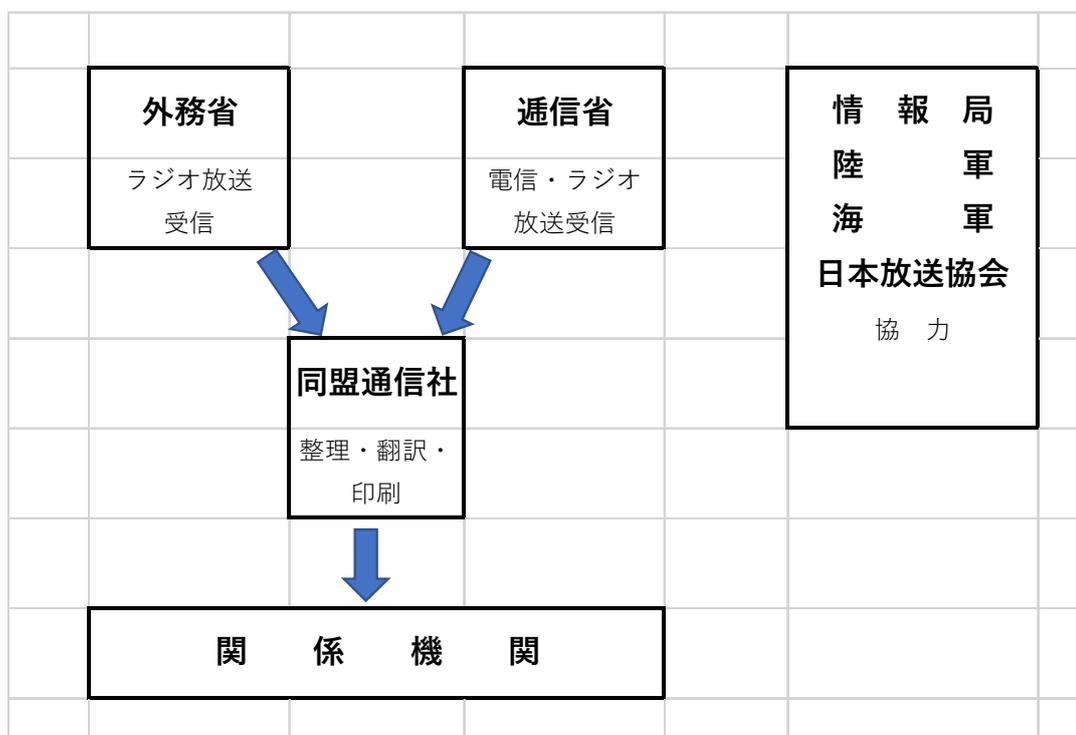


図 80 開戦時の外国情報収集配布
『国策通信社『同盟』の興亡』 p.644-645.を基に編者作成

⁷²⁸ 「東京中央放送局が一九三九年一月に内幸町の放送会館に移り、愛宕山局舎が空いたため、[通信省は] 一部を借用して改装、放送受信のセンターとして使うことになった。この傍受機関は、一九四〇年六月から業務を開始した。」。[鳥居英晴. 国策通信社『同盟』の興亡：通信記者と戦争. 花伝社, 2014, p.643]

⁷²⁹ 同上. p.644.

○「この基本方針をまとめたのは、情報局第二部第三課長（放送課長）だった宮本吉夫である。「この情報収集と配布の機構は、戦争にでもなれば大本営が行う情報機構の補足的なものとして設けられたものであったが、十二月八日戦争の火ぶたが切られると、軍部は殆ど情報らしい情報を集めることができず⁷³⁰、軍も政府も挙げてこの情報に依存する結果となった」（宮本吉夫「太平洋戦争と電波」『通信史話』所収⁷³¹）

開戦とともに、同盟の海外電報はドイツの DNB と中立国にいる海外特派員からの電報しかこなくなった。「ニューヨーク来電によれば」などと書かれていた同盟電は、実際には同盟が直接受信した AP、UP、ロイターであった。こうした同盟電は【ストックホルム発】や【リスボン発】などというクレジットが付けられて配信された。⁷³²

○外務省が受信した海外ラジオ放送（p.275.図 70）の内容は同盟通信社を經由せず、直接関係機関へ配布されたとある⁷³³。

⁷³⁰ 恒石：「短波を聞くのはわからないが、…」.[本書「2.2.5 米国内放送を傍受」]

⁷³¹ ○通信外史刊行会編. 通信史話 中巻. 電気通信協会, 1962.

○「この情報蒐集と配布は通信省が、二・二六事件のとき蒐集配布した電務局情報の例によるものであった。しかしこれは戦争になれば大本営の行う情報蒐集の補足的なものとして設けられたものであったが、軍はほとんど情報らしい情報を集めることができず、軍も挙げてこの情報に依存することになった。」.[宮本吉夫. 戦時下の新聞・放送. (有) 人間の科学社, 1984, p.61]

⁷³² ○『国策通信社『同盟』の興亡』p.645.

○欧米各国も「…外国放送の傍受機構を立ち上げた。」.[同上. p.638]

○「ともかくも、同盟が送信する対外放送は「東亜の情勢を世界に報ずる唯一の機関」であった。中国大陸や南方の広大な地域で活動していた欧米の新聞、通信社は、蒋介石の拠点重慶だけで、重慶にはロイターが支局を設置した他は、UP、ニューヨーク・タイムズなどが特派員を置くにとどまった。このため各国メディアは、同盟の放送を受信し、「この記事は日本側・同盟の電信放送ニュースによる」と説明をつけて掲載した。」.[里見脩. “同盟通信社の「戦時報道体制」”. 岩波講座「帝国」日本の学知第 4 巻：メディアの中の「帝国」. 岩波書店, 2006, p.179]

⁷³³ 資料「外務省と放送／「短波ニュース」」

かい 海軍と対敵放送

「東京を含む大東亜地域からの対米本国放送は中西部は良いとして東部は雑音が多くて感度が悪かった。これを補うためにクサイ島（マーシャル群島）に新たに五〇キロ級の短波要塞を推進するため、私は参謀本部通信課の戸村中佐を通じて、その実現をはかったけれども戦局これを許さず海軍側の同意を得られなかつたことは残念であった。」（心理 113）

○海軍独自の対敵放送：詳細不詳⁷³⁴

- ・『海軍主計大尉の太平洋戦争』：記述なし。
- ・『ラジオ・トウキョウ II』巻末「東亜放送局要図」：海軍軍政下のセレベス島マカッサルからオーストラリア向けに放送。

○消極化

「ミッドウェイの敗戦を機として、東京謀略放送は第二期に入る。日本海軍がこの戦争の轉期となつた重大な敗退を最後まで隠蔽したのは事實であるが、海軍上層部の受けた打撃はさすがに争へぬもので、それまで陸軍以上に熱を上げてゐた海軍の放送に対する關心は目に見えて衰へた。戦争後期に至つては、日本海軍は全く沈黙化したことはもう一般にもよく知られてゐる。[中略]艦隊を喪失した海軍はもう物云ふ元氣も失せた態で、放送局側で今までの情勢で「無敵艦隊」だとか云つて宣傳されるのも、むしろ迷惑といつたやうな弱氣に變つていつた。最後のとことんまで強氣一點ばりの放送を主張したのは陸軍だけであつた。」⁷³⁵。

⁷³⁴ ○既述のとおり捕虜は海軍が捕獲した場合も含め陸軍が管理しており、「ゼロ・アワー」や「日の丸アワー」のような放送への利用は困難だつたと思われる。

○海軍は捕虜から有益な情報を得ることを重視している。（例：海軍が得た捕虜を陸軍の善通寺収容所へ引き渡す前に尋問するため、42年4月大船に仮収容所を開設。[[「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』p.309]）

⁷³⁵ 『日本の謀略放送』p.175-176, 182。

かい 海軍報道部

「なお大本営発表ではないが、陸海軍報道部長はたびたび各地で講演し、国民の戦争協力を促した。とくに開戦初期の大戦果をもとに行なった平出海軍報道部長⁷³⁶のそれは（日本戦勝の観艦式をワシントン沖で行なうと言うがごとき）名調子と相俟っていやが上にも国民の熱狂を煽ったものである。

しかしながらこれは国民の士気高揚に役立つとともに楽観的気運の助長ともなり、将兵の心に矯慢の芽を育てていったのであり、一面主敵米国に対しては対日敵愾心を振起せしめる逆効果をもたらしたものである。」（心理 295-296）

平出英夫

○進級

・「1936年駐伊武官を経て、在職中の1938年大佐に進級。1940年帰国。帰国後大本営海軍部報道課長に就任。[中略]1943年7月軍令部課長を経て、同年12月駐比武官に就任した。翌年5月在職中に少将に進級。同年11月軍令部出仕。」⁷³⁷



図 81 平出英夫
出典：東京日日新聞. 1942-01-09

⁷³⁶ 正式には「海軍報道部長」ではなかったと思われる。[本書. p.285-286]

⁷³⁷ “平出英夫”. Wikipedia. (参照 2023-05-12)

○海軍報道部

・40年12月：「海軍大佐 平出英夫 大本営海軍報道課長被仰附」⁷³⁸

・「日本陸海軍総合事典」秦郁彦／編 東京大学出版会 2005年 p449には在勤期間が掲載されていました。

報道部第3課長 15.7.15-15.11.15

報道部第1課長 15.12.6-18.7.15

報道部第1課長のところに※注として「昭16.9-19.9は軍務局第4課長の併任」とあります。⁷³⁹

○「海軍報道部長」とする資料

・40年11月：「15・11・15 報道部長（※1.本書.p.286.参照）兼軍務局第四課長」⁷⁴⁰

・43年3月：「昭和十八年三月、私は霞ヶ関の赤煉瓦の古めかしい海軍省に入り、軍務局第四課に着任し、さっそく課長に挨拶した。課長は、平出英夫海軍大佐で、大本営海軍報道部長を兼ねておられた。」⁷⁴¹

・44年3月：「海軍の名報道部長平出大佐と共にお馴染の富永海軍中佐は海上の某要職に補せられ海の第一線に出動することになった、その後任には矢倉敏少佐が就任したと一日午後四時次のとおり公表された」⁷⁴²

○「海軍報道部長」としない資料

・「[編者質問] ①開戦前に報道部長だった前田稔少将の海軍部報道部長だった期間少将（兼）前田 稔 15.12.6-17.5.15

② [同上] 前田稔氏以後、栗原悦蔵氏以前の報道部長（もしいれば。栗原氏は不要です）

大佐（兼）小川貫璽 17.5.15-17.12.1

少将（兼）矢野英雄 17.12.1-19.3.1

このあとが栗原氏（19.3.1-20.5.1）です。」⁷⁴³

・「『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会（当館請求記号：392.1/ハタ）

p449に「海軍報道部長」の一覧がありますが、平出の名前はありません。平出は報道部第1課長の中に名前が確認でき、期間は「15.12.6-18.7.15」となっています。

18.7.15-18.12.28は軍令部第3班第8課長に名前があります。」⁷⁴⁴

⁷³⁸ ○神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫 軍事(国防)(50-167)大阪毎日新聞 1940.12.7 (昭和15)

○同時に海軍報道部長発令：「大本営海軍報道部長 前田少将補職発令 海軍省公表(六日午前十一時)本日附左の通り補職発令せらる 海軍少将 前田稔大本営海軍報道部長被仰附」。[同上]

⁷³⁹ 浜松市立中央図書館回答. 2023-05-07.

⁷⁴⁰ 「陸海軍将官人事総覧 海軍篇」外山操／編 芙蓉書房 1981年 p203]. [同上]

⁷⁴¹ 高戸顕隆. 海軍主計大尉の太平洋戦争. 潮書房光人社, 2015, p.197.

⁷⁴² “将軍大將に榮進”. 中部日本戦時版.1944-03-02. (参照 2023-05-07)

⁷⁴³ 「[出典]『日本陸海軍総合事典』秦郁彦／編 東京大学出版会 2005年 p449].

[浜松市立中央図書館回答. 2023-05-12]

⁷⁴⁴ 静岡県立図書館回答. 2023-05-11.

・【新聞データベース】

「◇朝日新聞クロスサーチで検索

朝日新聞では、「海軍報道部長」としては記載が見つかりませんでした。報道部課長としての活動が多く記事になっていましたが、役職について関係する部分を紹介します。
1940年(昭和15年)07月16日 1面 「海軍報道部課長に平出大佐」という記事
1940年(昭和15年)12月07日 夕刊1面 「海軍軍事普及部廃止(※2) 大本営海軍報道部長に前田少将」という記事があり、平出も報道部課長として写真付きで紹介されています。

1943年(昭和18年)07月16日 3面 平出大佐から栗原大佐へと課長が交代した記事であり、平出について「報道部課長在任満3年余」と紹介されてる。記事中に「軍令部課長に栄転した平出英夫大佐は…」と記載があります。

1943年(昭和18年)12月29日 2面 「平出大佐、比島転出」

◇ヨミダス歴史館(読売新聞)で検索

1941年(昭和16年)5月28日 「平出報道部長獅子吼」という見出しがあります。

1941年(昭和16年)5月30日 「日本海軍の準備万全」という記事。上の記事の二日後ですが、「課長」と紹介されています。

1942年(昭和17年)1月9日 「海軍報道部課長平出大佐」と紹介されています。

以降複数の記事がありますが、1943年7月の「海軍報道課長更迭」の記事まですべて「課長」と表現されています。1948年12月23日の訃報記事も「元海軍法部〔報道部〕課長、少将」となっています。」⁷⁴⁵

○後任・栗原悦蔵⁷⁴⁶：「平出英夫海軍少将に代わり、海軍報道部第1課長に着任 [中略]

1943年(昭和18年)7月10日-海軍省兼軍令部出仕

7月15日-海軍省軍務局第4課長兼大本営海軍参謀兼海軍報道部第1課長

1944年(昭和19年)3月2日-免海軍報道部第1課長 兼海軍報道部長」

○推測：平出大佐は40年11月海軍軍事普及部部長に就任、翌12月の機構改革で部長職を外れた(前ページ※1と本ページ※2)が、その後の活躍が目覚ましかったことから、「海軍報道部長」と誤って報道されることがあったのではなかろうか。

⁷⁴⁵ 静岡県立図書館回答. 2023-05-11.

⁷⁴⁶ 資料「栗原悦蔵」／資料「竹槍事件」

高戸主計中尉

○組織

「海軍報道部は陸軍報道部とともに、新聞、雑誌、映画などのマスメディアを使って、戦況を報道するとともに、国民戦意の高揚をはかり、一方では、報道管制、思想統制をきびしくしていた。そのため、国際情報はもちろん、国内情報も収集され、対外宣伝⁷⁴⁷、国内宣伝に使われていた。当時の課員の主たる人々は、つぎのようであった。課長、平出大佐の下に高瀬中佐、田代中佐、唐木中佐、浜田中佐、富永少佐、矢倉少佐、庄田少佐、それに二年現役士官⁷⁴⁸として松岡主計大尉、一色、戸崎、近藤、横山主計中尉がいた。平出大佐は全般を、高瀬、田代中佐は大本営発表、浜田少佐は雑誌、富永少佐は新聞、矢倉少佐は庶務、庄田少佐は写真を主として担当しておられた。

松岡主計大尉は新聞関係、一色主計中尉は雑誌関係、戸崎主計中尉は国際報道関係⁷⁴⁹、近藤主計中尉は庶務関係を担当していた。私は一色中尉の後任となった。[中略]

このほか、市村判任官を長とする庶務関係の雇員や理事生（女子従業員）が多数いた。新聞関係の補佐としては、日本経済新聞から派遣されていた奏任官嘱託の佐藤良邦氏がいて、「黒潮会」という各新聞社から派遣されている海軍記者クラブの面倒と、新聞検閲を司っていた。⁷⁵⁰

⁷⁴⁷ ○同書に具体的記述なし。

○資料「海軍と対敵放送」

⁷⁴⁸ 「短期現役士官（たんきげんえきしかん）とは、大日本帝国海軍が旧制大学卒業者等を対象に特例で現役期間を2年間に限って採用した士官のことで、より正式には二年現役士官と呼ばれる。短期現役（短現）という呼び方は俗称で、本来は徴兵制度の特例で師範学校卒業者を対象とした短期現役兵のことを指す。二年現役士官の制度は海軍士官のうち兵科・機関科以外の部門である将校相当官について設けられ、軍医科・歯科医科・薬剤科・技術科・主計科・法務科などがあり、特に第二次世界大戦期の短期現役主計科士官が知られる。[中略] 二年現役士官の制度については、日本海軍の人事制度で最大の成功として高く評価する見解がある。特に主計科士官について、成果として、海軍外の知識が流入することによって新しいマネジメントがより円滑に行われたことが指摘される。当初期待された単なる事務方としての役割を超えて、優秀な海軍士官として活躍したとする評もある。連合艦隊参謀長などを歴任した福留繁中将らは、戦後の会合で、戦時中のことに加えて敗戦後の処理が成功したのも短現士官のおかげだと述べたという。これに対し、軍隊経験のない一般学生出身者をただちに士官に任用した点について、特に主計科の場合には部下を指揮する立場に立つことを考えると軍紀の乱れを招き不適切であったとの批判もある。海軍経理学校生徒出身の主計科士官からは、経理学校生徒の採用を増やすか、あるいは特務士官からの任用を増やすほうが下士官の士気も高まるという提言がされていた。1942年の制度改正で見習尉官教育が導入された理由には、こうした意見への考慮もあった。なお、日本海軍が二年現役士官を創設し、高等教育を受けたエリートに「ふさわしい以上の処遇をした」ことは、彼らの日本海軍に対する好感度を高め、そのために戦後になっても二年現役主計科士官経験者を中心とした政財官界の要人らが海軍を高評価しているとの見方もある。ただちに士官となっても短期間で現役を終われる二年現役制度は、危険で泥まみれの兵隊生活が避けられない陸軍と比べて、快適な待遇であった。」。[“短期現役士官”。Wikipedia. (参照 2022-08-28)]

⁷⁴⁹ 同書に具体的記述なし。

⁷⁵⁰ 『海軍主計大尉の太平洋戦争』p.198-199.

○雰囲気

「赴任してしばらくすると、部内の空気がダラケ切っているように私は感じた。そと目にはまだ、戦局が追いつめられているようには見えなかったので、海軍はまだまだモテモテの時代であった。ある部員は、夕方になると、ソワソワして、あるいは新聞社の、あるいは雑誌社の誘いに乗って料亭に繰り込み、ときにはこちらから誘いをかけているようにも見えた。新聞社の車を、自分のもののように乗り回したりしていた。当時、部には月額数万円の機密費があったが、それがどのように機密に使われたか、われわれにはわからなかったが、不明朗な雰囲気が感じられたので、ある日、平出大佐に、「報道部は、一切の宴会に出るのをやめてはどうですか。私は、第一線から帰って来たので、今の雰囲気はどうも頂けません」と進言した。大佐はウンと、やや曖昧な返事をされたが、宴会は止まなかった。平出さんは秀才であった。外国の駐在武官もされたことがあるので、数か国語が堪能であった。新聞記者、雑誌記者、作家、評論家、政治家……と言った人たちともソツなく話ができた。新聞雑誌に記事が載り、単行本もいくつか出たが、ほとんど速記によったもので、平出さんの言葉がそのまま立派な文章になっていた。才人であった。文化人であった。軍人になるべきではなかった人かも知れない。演説もうまかった。大向こうをうならせる魅力があった。」⁷⁵¹

⁷⁵¹ 『海軍主計大尉の太平洋戦争』 p.199-200.

がい 外交伝書使

○Wikipedia

「クーリエ（英語: courier）は、本来は外交官業務の一環で、外交文書を本国と各国の大使館・公使館等の間、あるいは大使館・公使館相互間などで運搬する業務のこと。

概要

外交関係に関するウィーン条約では「外交伝書使」と呼称されている。英語における courier はフランス語から英語に入った言葉で、急使や飛脚 (runner) といった意味である。

外交文書には機密文書も多く含まれることから、運搬業務に当たっては厳重に封印が施され "DIPLOMAT" (外交官) の文字が印刷された機内持ち込み可能な巾着袋「外交行囊」(外交封印袋) を用いる。また、一般に外交特権の一種として、行囊の中身に関しては税関などで確認を行われないことが認められている。」⁷⁵²

○瀬島龍三

・「四十四年末、心身疲労症から回復した瀬島 [龍三] は外交伝書使 (クーリエ) としてシベリア鉄道経由でモスクワへ。帰国後の四五年三月、横浜・日吉の連合艦隊司令部に出向した。」⁷⁵³

・「彼 [瀬島] は参謀本部時代にスパイ活動するよう働き掛けられた。作戦課から情報部に回されて外交官の資格でクーリエとなった。彼の任務とは、列車に乗った時点から周囲を観察してソ連軍の動きや対日感情を探るとか、武器の輸送状況を調べることだった。」⁷⁵⁴

⁷⁵² “クーリエ”. (参照 2013-06-23)

⁷⁵³ 『沈黙のファイル』 p.117.

⁷⁵⁴ 同上. p.360.

○柴田進

「昭和十九年十月南方の戦局急を告げているとき、私は秘密偵察勤務の内命を受けた。長髪を用意し、関係兵要地誌やソ軍航空の研究をしながら待命、正月も過ぎ二月になった。比島作戦に敗れ、沖縄作戦準備のため大量の特攻隊の編成が急がれていた⁷⁵⁵。二月下旬参謀本部からの出頭命令に接し、同行の金子昌雄⁷⁵⁶（四二期）さんとともに参謀本部、外務省から指令を受け本格的な諸準備に入った。

私たちの任務は駐モスクワ日本大使館への外交文書（一般文書、暗号書）を宰領⁷⁵⁷する（外交伝書使）ことと、シベリア鉄道及び同沿線のソ軍の動静特に兵力輸送状況、ソ空軍の配置、機種、兵力、訓練状況等の偵察（秘密偵察）で、独ソ戦がいよいよ終局を告げようとし連合軍の総反攻近しと判断される状況下で極東ソ軍の動向をつかむことにあった。

私と金子さんは周到な協議をかさね、携行文書の宰領は共同責任で安全を期すること、偵察の主担当を地上と航空に分掌することとし重要任務の完遂を誓いあって三月二十日離京陸海路満州へ、関東軍司令部、ハルビン日本総領事館、ハルビン特務機関

⁷⁵⁵ 柴田は浜松教導飛行師団（※）司令部勤務。[数学史研究者.“金子昌雄中佐変死事件”. together. <https://togetter.com/li/1209701>, (参照 2022-12-24)]

（※）「浜松陸軍飛行学校（はままつりくぐんひこうがっこう）は、日本陸軍の軍学校のひとつ。主として航空爆撃に関する教育と研究等を行った。1925年（大正14年）5月、前身となる飛行第7連隊練習部が設置され、1933年（昭和8年）8月、同練習部を基幹として浜松陸軍飛行学校が開設された。学校本部および本校は静岡県浜名郡（現在の浜松市）に置かれたほか、同県の三方原と愛知県東春日井郡に分飛行場があった。

1940年（昭和15年）12月、浜松陸軍飛行学校から分かれるかたちで〔茨城県〕銚田陸軍飛行学校が設立されると、航空爆撃に関する教育と研究等のうち重爆撃機を使用するものが浜松陸軍飛行学校の担当となった。また航空における化学兵器に関する教育と研究等や、落下傘部隊の要員育成と落下傘に関する研究等も浜松陸軍飛行学校で行われた。

1944年（昭和19年）6月、浜松陸軍飛行学校は閉鎖となり浜松教導飛行師団および三方原教導飛行団に改編された。さらに1945年（昭和20年）7月、浜松教導飛行師団は教導飛行師団第4教導飛行隊と第27飛行団司令部に改編分離され、同年8月の太平洋戦争（大東亜戦争）終戦により三方原教導飛行団ともども解体された。]

〔“浜松陸軍飛行学校”. Wikipedia. (参照 2022-12-25)]

⁷⁵⁶ 「これらを背景として、1944年4月3日に陸軍は仲野好雄陸軍大佐を幹事長とする陸軍数学研究会を発足。同研究会の秘匿名を陸軍暗号学理研究会とし、陸軍暗号の画期的向上と敵国の暗号解読法の発見を目指した。会長に額田坦大本営第三部長、副会長に高木貞治、幹事に金子昌雄大本営陸軍部暗号班長、他33人の委員が就任している（内民間の数学者は彌永昌吉・小平邦彦（※）を含む8人）。」[木村洋.“第二次世界大戦期に於ける日本人数学者の戦時研究”. 数理解析研究所講究録 1257 巻 2002年 260-274.

<https://tinyurl.com/4y6sda3u>, (参照 2022-12-25)]

（※）「フィールズ賞を1954年に日本人として初めて受賞」。[“小平邦彦”. Wikipedia. (参照 2022-12-25)]

⁷⁵⁷ 【宰領】「②中世以降、荷物を運送する人夫に付き添ってこれを支配・監督する役」。
[『広辞苑』]

等と業務連絡のうえ満州里駅から満ソ国境をこえてアトポールへ、さらにザバイカル鉄道でチタへ、満州国総領事館員の出迎えを受けて領事館内に仮泊したのが四月一日である。

翌二日早暁、米軍は四月一日沖縄上陸、彼我激戦中との情報を知り、いよいよ戦局重大である。総領事からソ連外交部にモスクワ行きシベリア鉄道一等ワゴンの指定を要請したが一向に返事がない。そうこうするうちに、ソ連の日ソ中立条約破棄の事前通告を知る⁷⁵⁸。ソ連は出るぞと直感し、憤激と焦燥のうちに待つこと久しく、ようやく四月二十日ワゴンの指定を外交部から受領、翌二十一日指定の列車に乗車することができた。早春のシベリア平原は白樺が芽ぶき草原が萌えそめ、雪解けの河は豊かな流れに冬の眠りから漸く覚めたことを思わせている。イルクーツク、クラスノヤルスクと進むうちに東行の軍用列車特に独ソ戦線から東方に反転すると思われる重火砲、架橋材料、重車両などの引きも切らない大量輸送である。貨車上の重砲や戦車にまたがる弊衣の兵士やハーモニカをふく女兵士など意気軒昂なものがある。

四月二十九日。ジマーをすぎシベリアの真中で迎える天長節の日である。窓外が見えなくなったので、八時やや前か、その日の偵察を終わり、金子さんと持参のポートワインで聖寿の万歳を祝おうと小さな杯で乾杯、さかなはスハリ（乾パン）とチーズ、するとその時である。ドアをロックする者がある。乗務員が用事だと告げている。ロックしたうえ麻ひもで頑丈にしばったのを解いてドアを開けると、乗務員の制服を着た男と制服の女士官がずかずかと入る。お祝いにきた、乾杯しよう、と彼ら持参の一本のびんをあけた。まずいことになった、凶々しい奴らだ。舌打ちしながら女士官と応接、ゾーヤという名の少佐だという。さかんに酒をすすめる、その高圧的で執拗な態度にかえって警戒心がわいてくる。

われわれのワゴンには盗聴器もあろう、また内部を盗視する仕掛けがあるかも知れない、金子さんといつも話していたことである。飲んでではない、受けてはならないと自分にいいかせながら押し問答をしていたが無理やりワインの杯に少々つがれてしまった。金子さんも同様である。私は少し口にくんだ。舌がやけるような、口の中が燃えるような、毒物だと直感した。そっとハンカチで口をふくようによそおって、はきだ出したが咽喉がチリチリ、頭がクラクラしてきた。金子さんがうつぶせになった様子までは見た。しばらくすると（十五分位？）金子さんの姿がない。金崎（金子さんの変名）はどこへ行ったとどなりながらワゴン内を探したがいない。乗務員「別室で休ませて手当てをしている」私「どこだ、会わせろ」乗務員「できない」問答をくりかえすだけ、私は携行文書が気になって乗務員を腕力でワゴンの外に押しやり、ドアをロックして麻ひもでしばりあげておいた。ところが乗務員が別なところから入ってきて私を見すえている。私は再び「金崎はどうした」と聞くと彼は「死んだ」という。

はかったな！ やっぱり毒殺だなと直感した私は怒髪天をつく思いで「金崎を見せろ」と怒号したが三人の乗務員風の者に制せられた。大使館へ電報するから用紙をく

⁷⁵⁸ 4月5日：「ソ連外相モロトフ、駐ソ大使佐藤尚武に日ソ中立条約不延長を通告。」
[『近代日本総合年表』p.342]

れと要求したが彼らは大使館には既に知らせてあるという。彼らは去って行く。金子さんの死は本当だろうか、何としてもこの目で確認しなければならないと焦った。

独り端座してこれまでのことを反すうした。正に計画的な謀略である。実に巧みに仕組んだ、奇怪な演出が思い浮かぶ。乗務員をよそおった者、女士官の出現、威圧的な態度と執拗さ、そして毒物による謀殺である。不覚だった。金子さんにすまない、と自責の念にかられたのである。

独り翌日の朝を迎え、翌々日は五月一日メーデー。駅々は華やかなデコレーション、大賑である。金子さんのことが心配だがどうにもならない。無論飲まず食わず。カーシャ（かゆ）などすすめられるがニエナーダ（いらない）。持参の光（たばこ）をすったが口の中がただれているのでうまくない。五月六日？ スベルドロフスクを過ぎたところと記憶しているが、大使館から法眼晋作書記官と佐藤書記生の二人が迎えにきてくれた。敵地に救いを得た思いでうれしい。

お二人に経過を説明、また大使館が知り得たことをうかがった。話によると二十九日深夜松平康東参事官がソ連外務省によばれ、二人のクリエールが泥酔して、一人は死亡一人が暴行を働いているので引きとるようにとのことで急遽迎えにきたとのこと。まことに心外、同時に不覚と失態を深く詫び、お二人持参の食料を一週間ぶりで少々頂戴した。また一週間ぶりに安心して半日ゆっくり深い眠りをとることができた。五月九日夜半モスクワ駅着、細雨の駅頭に立つ。独ソ戦で勝利をえたモスクワは空に飛行機が乱舞し、数条のサーチライトが中空をよぎり、祝砲がなりひびき戦勝にわいている。

大使館について松平参事官に、翌日佐藤大使にそれぞれ報告とお礼とお詫びを申し上げた。また金子さんのその後の様子を知ることができた。モスクワ滞在十日、大使はじめ大使館員の温情に傷心の私は漸く蘇生の思いで帰途についたのであった。

私がここで敢えて本文を草した所以のものは1、戦後このことが随分本に書かれた。陸軍中野学校（諜報戦史）、文藝春秋、大東亜戦争始末記、週刊誌などどれも真相や真実を書いていない。ソ連側の一方的な情報や想像で書かれたとしか思えない。真相を知る者は私だけだからである。

泥酔のうえ暴れたとか、深酒をして死んだとか全く心外であり、断腸の思いである。こんなことでは職に殉ぜられた金子さんの死に鞭うつことである。私は金子さんへの汚名を雪ぎたい。任務や責任を忘れ、汚名をきるような行為では断じてないことを断言する。2、ソ連の計画的陰謀による毒殺であるということ。暗号書をねらった謀略であるということである。

シベリア鉄道の指定に二十日間もかけたこと、車中における乗務員の態度など奇怪なことが思いあたるのである。なお帰途、ハルビンの石井部隊で毒物の試験台になったのであるが、飲み物に青酸が入っていたことを証拠立てたのである。（昭和五十三年五月）」⁷⁵⁹

⁷⁵⁹ “ソ連の陰謀・モスクワへの特使”『回想録：五十年の歩み』p.229-232.

がい 外務省と放送

対外宣伝

「太平洋戦争中、日本の外務省が対外（対敵）宣伝についてどんな役割を果たしたのか？について、参考になりそうな資料を検索したところ、以下の資料がヒットしました。

「太平洋戦争メディア資料 続1 外務省と対外放送/ラジオ・トウキョウ小史」北山節郎／編・解説 緑蔭書房 2005年目次によると『外務省と対外放送の開始』および『戦中放送と外務省』についての資料と解説が掲載されているようです。[中略]

浜松市立図書館所蔵資料としては、

「外務省の百年 下巻」原書房 1969年

「外務官僚たちの太平洋戦争」佐藤元英／著 NHK出版 2015年

といった資料がありますが、目次をみた限り対外宣伝についての項目はありませんでした。

また、インターネットで検索したところ、

「十五年戦争期における内閣情報機構と対内情報宣伝政策」（一橋大学）という博士論文要旨がWeb公開されていました。

<https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/hermes/ir/re/12164/ronso1140301450.pdf>

外務省と軍部による関係についても考察しているようです。

参考までにご紹介いたします。」⁷⁶⁰

日本放送協会との関係

「これまでNHKには各省からいろいろの指示や指導があり、とかく混乱があったので、NHKに対し窓口を一本にしぼり、各省は情報局の放送課に連絡し、情報局で調整してNHKに指示連絡を行なうということになったのであった。これまでNHKの国際部に陸海軍や各省、特に外務省からばらばらの指令が来て職員を困らしていたので、それを改めて国際部への窓口を一つにするというのであった。頼母木氏は声をひそめて、「独走を続けている軍の指示がストレートに放送局に伝えられ、それが外務省などを怒らしている。」⁷⁶¹

⁷⁶⁰ 浜松市立中央図書館回答. 2023-03-06

⁷⁶¹ 資料「並河亮」

「短波ニュース」

「[池田徳眞は交換船での] 帰国後は外務省のラジオ室に落ち着く。ここは世界中の敵味方から来るすべての短波放送の傍受室だ。このラジオ室では50名ほどのアメリカ、ペルー、ブラジル生まれの若い二世たちが世界中からの短波放送を日夜傍受していた。

[中略] このようにラジオ室では海外から来る短波ラジオのニュースや重要な解説を傍受しその日のうちにタイプ、謄写印刷した。「短波ニュース」⁷⁶² (Shortwave News) と呼ぶ50から60ページの至急回覧の印刷物が約100部出来上がる。そして陸海軍、内閣情報局、外務省そして政府管理下に終戦まで存続した唯一の通信社である同盟通信社などへ配布された。陸軍の強い要請の下にできた法律により、世界で放送が開始された当初から一般の国民は短波ラジオ放送の受信機を持つことが禁止されていた。したがって、日本では海外の短波放送ニュースを聴いたり読んだりすることは極めて限られていた。なぜならこのラジオ室のほかには、東京では陸軍のラジオ受信室 (Army radio post) とNHK⁷⁶³だけだったからである。

この「短波ニュース」に関しては、いくつかのエピソードがある。この仕事が始まったころ、アメリカの短波ニュースに、当時日本では知られていない「ド・ゴール (De Gaulle)」という名前が出てきた。二世の傍受者はフランスの兵士のようなと言う。ラジオ室にはド・ゴールの綴りが分かるものはおらず、ましてその人物がその後フランス共和国の大統領になろうとは誰も予想しなかった。早急に判断する必要があり、「短波ニュース」では“De Gore”とした。その後しばらくして二世の傍受者が言った。「このニュースはブラザービル (Brotherville) という局から発信されている。受信状態は良くも悪くもない」

「ブラザービル？」

部屋にいた人たちが彼に尋ねた。この時もラジオ室にいた人で、北米や南米、オーストラリアやヨーロッパでこんな町を知っている人はいなかった。大きな地図で探したが、見つからない。約1週間後、ブラザヴィル (Brazzaville) というのはアフリカのコンゴにある町だと判明した。アフリカからのこの短波放送はヨーロッパからの放送より受信状態ははるかに良好だった。⁷⁶⁴

⁷⁶² 「ラジオ室では、それらをまとめて毎日“Shortwave News” (短波ニュース) という英文約六〇ページの謄写刷を一〇〇部つくって、内閣、陸海軍および各省に配布するのが、第一の仕事であった。このラジオ室は戦争で鎖国していた日本の窓で、この「短波ニュース」は貴い世界の光であったから、各省でもっと欲しいという強い欲求があったが、樺山君は「人手不足で絶対に一〇〇部以上は作成できません」と強硬にはねつけていたのであった。」 [『日の丸アワー』 p.13]

⁷⁶³ 東京通信局の愛宕山受信所のことか。 [資料「海外情報の収集：情報局」]

⁷⁶⁴ 『駿河台分室物語【本編】』 p.8-10.

米国内放送

○「[外務省ラジオ室⁷⁶⁵での] 短波の傍受が大体軌道に乗ってきたので、昭和十八年九月になって樺山 [資英] 君と小平 [利勝] 君とのあいだで、敵国アメリカの中波の国内放送を日本で聞くことはできないだろうか、という話になった⁷⁶⁶。その狙いは、日本の短波の国際放送と中波の国内放送ではその内容が大きくなりつつあるのだから、アメリカの国内放送を聞いて分析したら、きっと国際放送ではわからない戦時中のアメリカの国内事情がはっきりわかるのではないか、ということであった。[中略] 昭和十八年十月初旬、この試験を九十九里浜で実行することになった。[中略] ... 九十九里浜でのアメリカ中波放送の傍受が成功したのは同年十月上旬と断定して、まず間違いないと思う。」⁷⁶⁷

○「この十月の中ごろには、私は、翌月の三日に開所される参謀本部駿河台分室に行くことが決まっています、「日の丸アワー放送」のために一日おきぐらいに大森俘虜収容所に通って、俘虜たちと面接していたので、その間をぬって樺山君と二人で [ラジオ室の疎開先、現在の調布市] 国領に行ったように記憶する。[中略] このように、アメリカ国内の中波放送が聞きとれたのは冬だけのニュースであったけれども、毎日、六七局の放送を聞きとって、『ショートウエーブ・ニュース』[「短波ニュース」]とは別刷にして、表題のない極秘資料として外務省内部にだけ配布した。その量は、『ショートウエーブ・ニュース』がそのころはふつう六〇～一〇〇ページであったのに、二〇～三〇ページほどであった。そして樺山君から、中波放送の傍受者に対して、短波放送とのくいちがいと、アメリカ国内の物価の上昇状況と、国民の戦意昂揚のスローガンなどにとくに注意するように、という指示があった。[中略] さて、最初に狙ったように、アメリカの短波の国際放送と中波の国内放送のあいだには何か大きなちがいがあったのであろうか。戦況がアメリカに有利であったため、大きなちがいはなかったのである。しかし中波放送では国民の戦意昂揚のスローガンなどはよく聞きとれたから、アメリカの国内の様子が手にとるようによくわかった。外務省ラジオ室の中波放送の傍受はここまで進んでいたのだが、残念ながら、それを宣伝に生かす機会はなかった。」⁷⁶⁸

⁷⁶⁵ 「海外放送の傍受の仕事は、初めは情報部第五課で樺山君の指導でおこなっていたが、昭和十五年十二月六日に内閣情報部が情報局に昇格したとき、外務省情報部は内閣情報局に統合されてしまった。それで樺山君は、調査部第五課に移った。そして、だんだん傍受の仕事が発展してきて、太平洋戦争開戦のわずか一週間前の昭和十六年十二月一日、ラジオ室が正式に開設されたのであった。」。[『プロパガンダ戦史』 p.14]

⁷⁶⁶ 参謀本部と重複して傍受。[本書「2.2.5 米国内放送を傍受」]

⁷⁶⁷ 『プロパガンダ戦史』 p.28-29. 31.

⁷⁶⁸ 同上。 p.33, 35, 37.

かけ 筧 光頭

○かけいみつあき (1886-1969) ⁷⁶⁹

○「戦時宣伝に関する研究 (エッチ・シー・ピーターソン著 — 米国オクラホマ大学出版部千九百三十九年版 — 読後の所管)」。情報局嘱託 (42年6/7月)

・「英国の宣伝の特徴は元来、事実の捏造よりも事実の巧妙なる編輯に存したるが如きも、[第一次大戦での] 米国参戦に多大の効果を挙げたる所謂独逸軍の残忍行為に関する事実のみは、殆んど全部捏造にして、それが米国と言はず世界に流布せられて、而も深く信ぜられたるは、善悪は別として、単に宣伝の見地よりすれば大成功と言はざるべからず。」⁷⁷⁰

・「今次大戦に於ける英国の文書宣伝は、前大戦に於ける様式と大差無きが如くなれど、その効果に至りては決して軽視すべきにあらず。ウェリントン・ハウスの如き宣傳機関の存否は如何にもあれ、ピーターソンの指摘せる宣伝技術 (第十五項参照：略) は依然として有効に働きつつあり。」⁷⁷¹

・「...英国の宣伝の根本的強味は、英国が常時既に世界的名声を馳せたる刊行物を有せる事なり。」⁷⁷²

○「昭和十八年度参謀長合同における実務連絡事項 (第八課主務事項) (対敵宣伝、戦場宣伝、前大戦の対敵宣伝) / 前大戦ニ於ケル対敵宣伝ノ研究」

・資料冒頭：「一、本書ハ「ジョージ・ダブリュー・ブランツ」博士著「千九百十八年ニ於ケル連合国内ノ宣伝ト独逸帝国ノ崩壊」(千九百三十八年「スタンフォード大学出版)」ヲ筧光頭氏ノ抄訳セルモノナリ

二、前大戦ニ於ケル戦時宣伝事業ハ中立国殊ニ米国ノ同情ヲ獲得シテ自国側ニ参戦セシメントスル英国ノ努力ヲ中心トセルモノニシテ其活動ノ中心機関タリシ「ウエリントンハウス」ハ米国ノ参戦ト同時ニ解消セラレタルガ其ノ後ノ英国ノ戦時宣伝ハ対敵宣伝即チ独逸及ビ其ノ同盟国ニ対シテ傾注セラレ独逸崩壊ノ重要ナル一因ヲナセルモノニシテソノ中心ハ有名ナ「クリュー・ハウス」ト呼バレタル「ノースクリフ」卿主宰ノ一機関ナリ

三、本書ハ英国ノミナラズ連合国内ノ対敵宣伝事業ヲ研究セル米国ノ一歴史家ニシテ社会科学者ノ十年ニ亘ル研究ノ成果ニシテ「スタンフォード」ノ「フーバー・ウオワ・ライブラリー」ノ監修セル貴重ナル文献ナルガ殊ニ「クリュー・ハウス」ノ活動ヲ詳述シ居レリ」

⁷⁶⁹ "筧光頭". Webcast. (accessed 2020-1-12)

⁷⁷⁰ 『情報局関係資料 第4巻』 p.91.

⁷⁷¹ 同上. p.95.

⁷⁷² 同. P.96.

かず カズンスの横顔

戦時中

○並河亮

「カズンスはオーストラリア軍の少佐で、ロナルド・コールマンに似ていた。出征前はオーストラリアで名を知られたラジオのコメンテーターであった。英語班のチーフ、神谷君が彼に原稿を書かせてみると、なかなかいいものを書いた。彼は文学や詩歌に興味をもっていて、後に早稲田大学のアイルランド文学の権威、尾島庄太郎氏の日本の和歌の英訳添削をした。カズンスにとって、その英語訳のリライトは捕虜生活の期間中の最も楽しい仕事であったらしい。彼の態度は終始真面目で、私とは何度か会って文学について語り合ったことがある。山王ホテルに移された戦争末期になると、ホテルにはビールもなくなり、彼の好きなダンスもできなくなったので、参謀本部の諒解を得て横浜の本牧につれていったことがある。そこにはまだ店をひらいている酒場が二軒ほどあり、ダンスをしてくれる日本女性も二～三人働いていた。しかし彼はダンスも五分ほどでやめ、おもてを散歩しようといひ出し、私たちは月の明るい道路を外人墓地のあたりまで二時間近く歩いた。彼は国際局でみなを書いたニュースや解説の原稿をリライトしたり、アナウンスの仕方についてアドバイスし、職員から愛された。戦後、帰国し、法廷に立たされ、無罪となったが、間もなくこの世を去った。」⁷⁷³

○最所フミ

「カズンズ少佐の原稿のうまさについては、当時NHK海外局にいた最所フミさん（現、リーダーズダイジェスト編集部）もこう語っている。

「カズンズは、英国俳優のデビット・ニューズンみたいな渋い人だった。彼の原稿のうまさについては、こんな話があります。そのころサンフランシスコ放送に、ウィンター⁷⁷⁴という、ゴリゴリの反日家で、しかもすごくうまい解説者がいた。これがポンポン対日放送をたたきつける。たまりかねたカズンズは、ウィンターをやっつけるため原稿を書きまくり、カズンズの声に似た石井謙一氏（現、AP東京支局編集長）にアナウンスさせるのだが、この石井対ウィンタースの放送ほど迫力のあったものはない。客観的にいって、戦争には負けたけれども電波合戦では勝っていた、と思う。」⁷⁷⁵

⁷⁷³ 『もうひとつの太平洋戦争』 p.138-139.

⁷⁷⁴ ウィンターカ：「当時アメリカの日本人向け放送解説者は数人いたが、その中にウィリアム・ウィンター（William Winter）という名で放送する人がいた。彼は、日本の歴史になかなか詳しいのであるが、時たまおかしなことを言うので、すこしからかってやると、一夜漬けの勉強をして躍起になって反駁してくる。その調査量からみて、裏に四、五人のスタッフがいるのだなと思った。いずれにしても面白いので、誤りを指摘したり、悪口を言ったりしてやった。」 [『日の丸アワー』 p.14]

⁷⁷⁵ 『昭和史の天皇3』 p.175.

○池田徳眞

「チャールズ・カズンスはゼロアワーとは別に、捕虜になってシンガポールから東京に移送されて以来1年以上⁷⁷⁶ニュースと解説を書き、自身で放送してきた。実際、これが戦時中東京からの捕虜放送の第一段階であった。池田が戦争の初期にオーストラリアのメルボルンで抑留されていたある日、シドニーの新聞⁷⁷⁷にこのカズンスの放送が彼の写真付きで以下のように報じられていた。「シドニーの彼の友人の多くは、それがチャールズ・カズンスの声だと言った。しかしながらその声は少し変だった。おそらく日本の士官が背中に拳銃を突き付けて脅迫していたからだろう」チャールズは素晴らしく聡明な人で、イギリス紳士らしい教養を身に付けていた。父親がインド陸軍の士官だったので彼はそこで育ち、オーストラリア人というよりもイギリス人に見えた。シンガポール陥落直前に上陸し、その数日前少佐に昇進していた。したがって、いわば1週間の少佐 (one week major) であった。彼はとても如才ない人物だったから恒石少佐に「ノー」とは決して言わず、表面的にはあるが常に日本陸軍に協力的な態度をとり、NHK放送局の若手に多くの放送技術を教えた。彼の頭のよさは毎日の解説でただ1つのテーマ、つまり「変化は避けられない」という点に絞ったことにもっともよく表れている。なぜなら日本の軍人たちは、「これは現状維持と既成事実の戦いだ」(This is the war of status quo versus fait accompli)、だと信じていたからだ。極東における勢力均衡 (balance of power) を変えたいと願っていた日本軍はまず行動を起こして軍事力で事実を作り、これが既成事実だと主張した。それゆえ一見したところでは彼のテーマは日本軍の将校にとって、大いに魅力的だった。しかしながらカズンスは日本に有利なように「変化の不可避性」について語ったのではない。放送で彼はこう述べていた。「昨日戦闘があった。昨日軍隊のこうした移動があった、これこれの政府により新しい政策が採用された等々・・・変化は避けられない」日本の陸海軍が進撃しているならそれは疑いなく変化であるが、撤退を余儀なくされても、不幸なことながらそれもまた別の変化だ。戦時においては、大小さまざまな変化が起こるのはごく自然である。だから戦争中、最初から最後まで解説者が変化の不足で困ることは決してない。ああ、なんという賢い男だろう！ [中略] 池田が彼と最初にNHKで会ったのは一九四二年10月9日に交換船でオーストラリアから帰国した直後で、シドニー紙で報道された彼に関するニュースの話をした。その月の26日、池田はカズンス番のNHK職員の許可を得て、リムスキー・コルサコフの音楽劇シエラザードの舞台の本稽古を見せるため、彼を東京の帝国ホテルの目の前にあった宝塚劇場に連れて行った。その劇はロシアのダンサーのオリヴァ・サファイア (Oliva Saphia) さんと、池田の弟の朽木綱博の共同制作であった。この45分間の劇では130名の男女の踊り手が舞台に登場、72名のオーケストラをドイツ人のローゼンストック (Rosenstock) 氏

⁷⁷⁶ ○池田は「カズンスのニュース解説 昭和十七年四月から十九年六月ごろまで」としている。[『日の丸アワー』p.16]

○しかしカズンスの来日は42年8月なので(心理168)、池田が見たオーストラリア紙にある放送は東京からではなくシンガポールからだったと推測する。[本書.p.85.脚注.224]

⁷⁷⁷ 「...翌[42]年の四月になってメルボルンの『アーガス』("Argus")という新聞に、彼の写真と記事とが載っているのを見た。」。[『日の丸アワー』p.16]

が指揮した。このリハーサルの場面を見たカズンスは大いに驚いて言った。「こういった劇が戦時中の東京で上演されるとは実に驚きました」そしてさらに続けた。「私は広島に上陸し、護衛付きで東京に送られました。日本での汽車の旅の間、左手は丘と山が遠くなったり近くなったりしながらずっと続きました。オーストラリアでいう平野はただの一度も見ませんでした。その時私は、この国がいかにしてアメリカやイギリスと戦えるのだろうかと思議に思いました。しかし今、日本と日本人の本当の力を見ました」⁷⁷⁸

○ジャズ番組のアナウンス⁷⁷⁹。

○テニス

「[NHK] 嘱託になってから、ちょっとスリルがあったのは、シンガポールで捕虜となったカズンズ少佐とテニスをしたことである。彼は第一ホテルを宿舎として英語放送を手伝わされていたのだが、運動不足になるからせめてテニスでもさせてくれといったのだそうである。そこで平川唯一先生から、お前のところのコートでやらせろということになり、富坂二丁目のわたしの家へやってきた。そこはドイツ東アジア・ミッションの財産で、当時はドイツ人が五家族ぐらい住んでいたのだが、偶然みな軽井沢に出かけていて留守だったのである。平川さんはさすがに国際人だから、あのウルトラ・ナショナリズムに踊らされていた民衆の中を、平気な顔をして敵の捕虜を電車に乗せてやってきた。テニスはみな下手クソだったが、やがて夕立がきて、家にあがり、なけなしの紅茶でもてなしたように覚えている。部屋の隅においてあったレコード・ケースの中をのぞきながら、「われわれ西洋人は、いままで日本人を過少評価していたのだ……」と言ったときのカズンズの寂しそうな姿が印象的だった。」⁷⁸⁰

○駿河台分室

「このころ、駿河台分室の捕虜グループにさらに数人が加わった。[43年] 12月18日、オーストラリア軍のチャールズ・ヒュー・カズンズ大佐とアメリカ軍のレッド・W・ウォーレス大尉というゼロアワー放送グループの2名⁷⁸¹が、F機関のある山王ホテルから駿河台分室へ移送されて来た。移送の理由はとても簡単で、恒石少佐が警備の観点から同じ目的で使うすべての捕虜を1カ所に集めた方が便利だと考えたからだ。実はもう1つ重要な理由があった。山王ホテルにいたカズンズとウォーレスは、毎日約15分かけて監視なしでNHKとの間を通常徒歩で往復していた。しかし太平洋の前線がもっと日本に近付き、一般大衆がさらに興奮すれば2人にとって少々危険なこと

⁷⁷⁸ 『駿河台分室物語【本編】』 p.54-56.

⁷⁷⁹ 資料「ジャズ」

⁷⁸⁰ 伊藤規矩治.“HYSTERIA と IDYL”. 『NHK戦時海外放送』 p.390.

⁷⁸¹ 「[[「ゼロ・アワー」の] 企画者はカズンズ少佐だが彼は放送には出演せず、アメリカのインズ大尉が司会者としていろいろアナウンスをし、音楽好きのフィリピンのレイズ中尉—すでに解放されて俘虜ではなかった—が、楽しそうにレコードの説明をしながら音楽を流しているのだ。]. 『日の丸アワー』 p.19」

になりかねなかったのだ。彼らが12月18日の朝駿河台分室に到着すると浜本中尉は食堂で彼らの私物を検査し、一緒にいた唯一の日本人である池田に通訳をさせて陸軍的な厳格さで扱った。それから池田が彼らを将校の寝室に案内して、部屋のメンバーに紹介した。この2名の捕虜にとってこの移送は、生活環境の劇的な変化であった。1年前に東京へ送られてからまるで観光客のように扱われており、最初はNHKまで徒歩約5分の第一ホテル、次により静かな場所の山王ホテルに滞在していた⁷⁸²。彼らは背広姿だったから、道行く人の誰も2人を捕虜だとは思わなかった。それまでは彼らはホテルの柔らかなベッドに寝ていた。しかし駿河台分室では板の間(wooden floor)で休まねばならず、日本ではもっとも一般的な敷布団である畳表(surface of Tatami)だけが絨毯のように敷いてあり、2、3枚の毛布を使用する。翌朝池田は挨拶した。「お早う、カズンス。昨夜はよく眠れたかい?」「はい、池田さん」しかし池田は彼の寝不足でぼんやりした目と、右の頬に残る固い枕の跡を見て、この「はい」が本心でないことはすぐ分かった。昨日浜本中尉が示した厳格な態度が、多分この2名の捕虜に自分たちが観光客ではなく捕虜だったと思い出させたことだろう。⁷⁸³

○入院

「またゼロ・アワーに関係していたカズンス少佐も心臓病の持病があって、駿河台へ収容後容態が悪化したため、約三カ月間順天堂で入院加療し、日本語もかなり上手になって退院した⁷⁸⁴。」(心理 226)

⁷⁸² 「この三人は、NHKが第一ホテルに泊めていたが、議会で問題になって山王ホテルに移したりした。」。『昭和史の天皇3』p.189]

⁷⁸³ 『駿河台分室物語【本編】』p.128-129.

⁷⁸⁴ 44年6月17日に心臓発作で倒れ、約2週間後品川の陸軍病院に1カ月入院。退院して駿河台分室に戻った数日後、恒石が順天堂病院に再入院させた。[Tokyo Calling. p.180]

戦後

「二一年八月よりシドニー裁判所で開始されたカズンスの裁判には、日本側証人としてNHKの最所フミ、新野寛の両氏が出廷した。なぜか私には何の要請もなく、また英濠検察関係者からの尋問もなかった。あるいは当時は東京ローズや捕虜放送などについて米軍の調査の重要かつ繁忙な段階であったため米側で私を必要としたのかも知れない。」(心理 238)

「...カズンス少佐は戦後反逆罪の容疑によりキャンベラの法廷で裁判を受けたのであるが、前述のように命令に基づく放送であったことが、当時NHKにいた新野氏や最所嬢の証言によって裏付けられ、六カ月の審理の後無罪となったが、その裁判のため多大の私財を投じた由である。また一九四九年東京ローズの裁判の際には自費をもって進んで弁護側証人を買って出た。」(心理 172)

○池田徳眞

・「戦後池田がジョン・デビッド・プロボー氏の大陪審で渡米した際、FBI 職員のティルマン (Tilman, Frederick) 氏がワシントン D.C. の FBI 本部で質問した。「私が会った日本人は例外なくチャールズ・カズンスをほめる。どうして？ 私の意見では、彼は戦争中常に NHK の放送をごまかしていたのに」池田はこう答えた。「うーん、まず第一に日本人は皆彼の紳士的な態度が好きだったんです。それから自分が同じ環境に置かれたらカズンスのような態度をとりたいと思う日本人もいたでしょう。私が個人的に彼を偉いと思うのは、敵の放送に協力する最低と最高の限度をよく弁えていたことです」⁷⁸⁵

・「たしかカズンス少佐のお父さんは軍人で、彼は子供のときはインドで育ったのだと聞いたように記憶する。いずれにしても、彼の長身でメガネをかけた穏やかな目とその話から読みとれる学識教養の深さからいって、オーストラリア人というよりも、イギリスの紳士といった感じをうけた。彼については後日談がある。それは、戦後昭和二十四年に、ニューヨークでプロボーのグランド・ジュリー (grand jury) が開かれ、駿河台分室と J O A K の人たちが検察側の証人として渡米して、まずワシントン DC に行き、F B I 本部に毎日通っていた時のことである。担当のティルマン検事が私に向って「日本人の証人は、誰でもみんなカズンスをほめる。しかし、彼は戦争中 J O A K の国際放送を骨ぬきにした、日本にとって悪い人間ではなかったのか。あなたはどう思うか」と聞かれた。そのとき私は心の中では、カズンス氏は実際には J O A K の国際局で日本人の若いスタッフを指導した恩人だとは思っていたけれども、当時オーストラリアで同少佐の反逆罪の裁判がおこなわれる様子であったから、うっかりしたことは言えないと思い、「日本人は、誰でも自分が俘虜になった時には、彼のような態度を取りたいと思っているからではないのでしょうか」と曖昧に答えておいた。彼は、結局、反逆罪の裁判では無罪の判決をうけたのだが、イギリス系の社会はアメリカの社会とはちがって対敵協力にはことのほかに厳しく、不遇のうちに先年亡くなられたとのことである。深く哀悼の意を表する。」⁷⁸⁶

⁷⁸⁵ 『駿河台分室物語【本編】』 p.55-56.

⁷⁸⁶ 『日の丸アワー』 p.17-18.

かぜ 「風と共に去りぬ」

○小林久子（駿河台分室職員）

「その日から向かいの校舎に寝泊まりする様になった彼等〔捕虜〕は、毎日ブラブラ遊んでいる様に見える。運動場へ出て、バレーボールをしている事もある。ピアノに合わせて歌っている事もある。それでも時々私達の所へ、おあいそ笑いをしながら鉛筆や紙をもらいに来る所を見ると、何か書いているのだろう。そばで見ると彼等もやはり人間でしかない。毎日何人か、トラックに乗ってどこかへ行く。私達が見たくてウズウズしている『風と共に去りぬ』を映写室⁷⁸⁷で見せてもらっている。「チョッ、捕虜のくせに」最初の頃、こんな事があった。「明日、〇〇の宮様が視察におみえになる」というのだ。こんな時もちゃんと説明されるので無く⁷⁸⁸、俄に所内があわただしくなると、「窓ガラスが汚い」「こっちを掃け」「あっちを拭け」と言われ、何でもまた急にとさらきれいにしなけりやいけないのかとむくれながらうろうろしているうちに、何となく宮様がおなりになるらしい……とわかって来る様な具合だった。宮様がおいでのになったって、私の見た所では、よせ集めの古机と椅子が並んでいるだけで、特別御視察になる様な物は一つない。視察に価する物と言ったら、『風と共に去りぬ』だけじゃないかしら、なんて思った。〔中略〕。でも翌日になったら急に沙汰止みになった。ほっとすると同時に宮様を拝みそこなってガッカリした。何でも宮様が参謀本部の一番偉い人になる事に決まった⁷⁸⁹のに、急に又中止になったとかだった。〔中略〕その頃、私達も『風と共に去りぬ』を見せてもらえるかも知れない、という事になった。それは正にセンセーショナルなニュースであった。『風と共に去りぬ』といえ、当時最高の話題作で、特に年頃の女性の間では、やれアシュレがどうの、バトラーがこうのと大変な人気であった。やがてそれが、上映時間四時間もの超大作映画となって、日本へもやって来るという、その直前に、日米戦争が始まって、そのフィルムは風と共に

⁷⁸⁷ 「文化キャンプで秘かに日記を隠しつけていた捕虜ジョージ・ヘンショー海軍少尉の証言によると、文化キャンプに映写室なるものができたのは一九四四年九月十七日であり、まず参謀本部から恒石たちがやって来て、捕虜のフランク・フジタ軍曹が映写して見せた。』。〔『東京ローズ』 p.187〕

⁷⁸⁸ 「〔駿河台分室への引越し直後に〕前の事務所の三階に居た三人に、一体どうするんですか？」と聞いても、「私達にもわからないのさ」と苦笑するだけ。そして三人でボソボソひたいをよせて評議をしている。どうやら彼等も忘れられた存在らしい。一体誰が知っているのか、西山さん〔本書 p.481. 脚注.1183〕達より偉い人？そのまた上のまた上の、一番てっぺんまで、みんなどうしていいのかわからないみたいな感じであった。もっともその頃は、日本中がどうしていいのかわからなかったのだろう。大本営のおひざ元でこうなのだから、連絡不十分の最前線の軍命令なんて、一体どんな調子だったのか思いやられた。』。〔『猫のしっぽ』 p.58〕

⁷⁸⁹ ○資料「三笠宮崇仁親王」

○「〔映画「風と共に去りぬ」を〕…高貴な方々の所などアチコチで上映したことであった。」（心理 230）

去ってしまったのであった。上海か、香港あたりまでは来ていたその映画の噂は、逃げた魚の大ききで尾ひれをつけて我々の耳にも伝わって来た。新聞にも、ドイツのロケットV1号で破壊されたロンドンの町角で、死体を掘り起こしている写真のわきに、『風と共に去りぬ』の映画を見る為の行列が並んでいるマンガが出ていた。その噂の御本尊が、このB学院〔文化学院、当時は駿河台分室〕の中に来ていて、しかもほとんど毎日足の下で映写室で上映されているというのに見る事の出来ないもどかしさよ。〔中略〕さて、やっどこさ落ち着いて見られる事となったが、始めのうちは初めて見る色つき映画のみごとさと、スカーレットの衣装の豪華さにすっかり気を吞まれて夢見心地であったが、さて内容となると、案の定チンプンカンプンである。憎らしい事に、一緒に見ている俘虜の方は、時々おかしそうに吹き出したりしているのに、我々の方はしんとしている。〔中略〕映画は四分の三位の所でフィルムが切れてしまい、もう遅いからと帰されてしまったが、大して惜しいとも思わなかった。結局私の心にやきついたのは、大きな木の下に、夕焼けの空をバックにして、くっきりとシルエットを見せた音楽つきの動く画の美しさだけであった。その後B学院シネマには、『ファンタジア』というディズニーの音楽映画が入荷した。』⁷⁹⁰

○池田徳眞

・「実際のところ、池田は開戦前にオーストラリアでその映画を見ることができたのだ。彼は横浜からはるばるシドニーへ一九四一年五月十五日に到着し、この映画がそこで上映されていることを知った。池田は見たいと思ったが、その晩結局行かなかった。シドニーには一晩だけの予定だったし、任地のメルボルンで当然上映されているものと思ったからだ。しかしメルボルンに着いてすぐ、どこにも上映館はなく、1年間ほどのロングランが終わったところだと聞き大いに落胆した。上映されていたのは美しい自然を描いたおとぎ話、テクニカラー映画の『ファンタジア』。それで池田は、オーストラリア外務省が日本の公使に紹介してくれたスミス夫人の一人娘メアリーとその『ファンタジア』を見に出かけた。彼が『風と共に去りぬ』を見損なって残念に思っていることを知り彼女は親切にもその映画について話してくれた。彼女は背が高く、とても美人でスタイルもよかった。それで池田は初対面の時から、「女優になった方がいいのではないか」と思っていた。その後何度か会うようになったある日、彼女の家を訪ねると応接間でたまたま自筆のサイン入りの、下に『My dear Mary』と書かれたノエル・カワードの写真を見かけた。「ノエル・カワードを知っているの」と池田が尋ねると、彼女は打ち明けた。「実を言うと私は女優になりたかったんです。それで母とロンドンに行きました。ノエル・カワード氏やそれ以外の人たちにも紹介されましたが、だめでした。結局のところ私には大事なもの・・・才能がなかったんです。お分かりですね？」数カ月後に戦争が始まった。それで彼はオーストラリアで『風と共に去りぬ』を見る機会を逸した。まさか戦争中、日本でそれを見ることになるとは思いませんでした。」⁷⁹¹

⁷⁹⁰ 『猫のしっぽ』 p.73-75, 125-126, 128-130.

⁷⁹¹ 『駿河台分室物語【本編】』 p.69-70.

・「実を言うと池田も〔終戦で〕他の人々と同様に混乱していた。彼は捕虜放送に従事していたので、少なくとも自宅は搜索されるだろうと信じていた。だから彼は駿河台分室に関する書類を焼き、高価な私物を隠して身の回りをきれいにしておこうと考えた。前者については、「論法と事実」はじめ駿河台分室で作ったすべての書類を焼却した。だが、骨身を惜しまず書き上げた「対敵宣伝放送の原理」をすべて燃やしてしまうのは残念に思えたので、東京西郊の三鷹市に住む義母の家に2冊隠すことにした。後者については池田の心理状態は、南軍が戦争に敗けて北軍がアトランタへ進軍して来た時、敵の略奪を避けるためにナイフやフォーク等の銀器を井戸へ投げ込んだ『風と共に去りぬ』に出て来るスカーレット・オハラと極めてよく似ていた。駿河台分室が休みの時彼は妻と三鷹の家に急ぎ、貴重品を4個のスーツ・ケース一杯に詰めて庭に掘った穴に埋めて予想されるアメリカ兵の略奪に備えた。しかしアメリカ軍は日本に上陸したけれど、実際には彼らが市や町を略奪することはなかった。自宅が家宅搜索されるかも知れないという池田の心配は、杞憂に終わった。数カ月の内に池田は、これらすべてのことは自分の混乱した精神状態が作り出した幻に過ぎないと気が付いた。それで終戦後4カ月が過ぎた12月のある日、三鷹の母の家の庭を掘り返した。驚いたことにはトランクの中の彼がイギリスで購入した妻の毛皮のコート・ドレスなどはおそらく9月中旬の豪雨のため一時的に穴に水がたまり、すべて水浸しになっていた。取り出して干すのは一仕事で、結局毛皮は完全にダメになった。物資が不足している時に、何と愚かなことをしたことか！ これを見ても池田が他の人と同様、いかに混乱していたかが分かるというものだ。」⁷⁹²

⁷⁹² 『駿河台分室物語【本編】』 p.269-270.

かる カルカッタ攻撃

○「[42年4月] 三日航空部隊指揮官塚原中將は機密第一八四番電によりカルカッタ、[ビルマ南西部の] アキャブ⁷⁹³方面の偵察攻撃を次のように令した。

(電令作第八四号)

第三空襲部隊指揮官ハ左ノ外指揮官所定ニ依リ「カルカッタ」「アキャブ」方面偵察攻撃ヲ実施スベシ

- 一 兵力 元空陸攻隊及鹿空派遣戦闘機隊一部並ニ偵察隊
- 二 期日 四月四日ヨリ七日迄ノ間⁷⁹⁴
- 三 使用基地 「ラングーン」(状況ニ依リ「バセイン」併用)
- 四 目標 敵艦船及飛行機 [中略]

なおカルカッタ攻撃のため元山空司令指揮のもとに陸攻二八機、零戦一八機、陸偵一機がラングーンのミンガラドン飛行場に進出した。[中略] またカルカッタ攻撃隊は[六日] 一一五五から約一時間にわたって [アキャブおよび] カルカッタを攻撃、次のような戦果を報じた。

- 一 アキャブ飛行場爆撃、滑走路及び施設に全弾命中、大型一機、小型一機爆破
- 二 港内艦船を爆撃、二千屯級敷設艦一隻を撃沈
- 三 戦闘機隊の銃撃によりハリケーナー、DC-3 一機炎上...⁷⁹⁵



図 82 ベンガル湾
Wikimedia Commons
File:Bay of Bengal map.png
カルカッタ (左), ラングーン
の赤丸は编者追記

⁷⁹³ ラングーンの北西、インドとの国境に近い海岸にあるビルマの都市。[本書.p.461.図.104]

⁷⁹⁴ ○「ビルマ攻略を目指す陸軍第十五軍は [42年3月8日] 首都ラングーンまで進出しており、今後、全ビルマ制圧作戦を進めるには海路から [ベンガル湾経由] の軍需品輸送が不可欠であった。」「セイロン沖海戦」. Wikipedia. (参照 2023-02-09)

○このためセイロン [現スリランカ] 方面の作戦と連携：「4.5 海軍機動部隊、インド洋に進出し、コロンプを空襲、英巡洋艦 2 隻を撃沈、4.9 [セイロン北東部の軍港] ツリコマリを空襲、英空母を撃沈」. 『近代日本総合年表』 p.330

⁷⁹⁵ 防衛庁防衛研修所戦史室. 戦史叢書 蘭印ベルガン湾方面海軍進攻作戦. 朝雲新聞社, 1969, p.662.

カルカッタ

○Wikipedia

「コルカタ（ベンガル語: কলকাতা）は、インドの西ベンガル州の州都。世界屈指のメガシティであり、市域の人口密度は首都デリーや、インドの最大都市であるムンバイ以上である。イギリスの帝国主義政策における主要な拠点として建設され、イギリス領インド帝国時代の前半は植民地政府の首都機能を有していた。2011年の市域人口は448万人。2016年の近郊を含む都市圏人口は1,481万人であり、世界第20位、インドではデリーとムンバイに次ぐ第3位である。[中略]かつては英語化されたカルカッタという名称が用いられていたが、2001年にベンガル語の呼称であるコルカタに正式名称が変更された。[中略]コルカタの歴史は、1690年にイギリス東インド会社のジョブ・チャーノックがこの地に商館を開設したことにはじまる。[中略]1857年にはカルカッタ大学が設立され、同年西のダモダル炭田とハウラー駅の間にカルカッタ初の鉄道が開通した。[中略]しかしこの大反乱の結果、イギリス東インド会社のインド統治権は取り上げられ、1858年に東インド会社の統治区域はイギリス直轄植民地となった。植民地のトップは副王（インド総督）であり、カルカッタには総督が居住しインド植民地の首都となり、1877年にイギリス領インド帝国が成立するとカルカッタは引き続きその都となった。インドの行政中心となったカルカッタにおいては、居住する大地主や下級官僚などの知識階級が成長し、彼らを担い手としてベンガル文化復興の流れが生まれ、ベンガル・ルネッサンスとも称される文化の黄金期を迎えた。この流れの中で、アジア初のノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴールなど多くの文化人をカルカッタは輩出した。この時期にはインドのイギリス支配の中心都市として、1905年に建設が開始され1921年に完成したヴィクトリア記念堂など多くの建物が建設され、一部は現在でも使用され貴重な文化遺産となっている。また、ジュートや綿花の輸出が盛んとなり、これらの集散地となったカルカッタは経済的にも繁栄した。また、綿花やジュートをもとにした繊維工業もこのころから盛んとなった。1910年代に入ると、ビハール州やオリッサ州で鉄鉱山などの金属資源が発見され、これをもとに市の南部などにおいて金属・機械工業も立地するようになった。しかし、こうした文化の興隆はやがて民族運動と結びつき、反英運動が盛んとなっていった。この動きを牽制するために1905年にはベンガル分割令が公布されベンガルはイスラム教徒とヒンドゥー教徒の地域に大まかに分割されることとなったが、この法令は強い反発を巻き起こし、1906年にはインド国民会議コルカタ大会で反英姿勢はさらに強まった。この動きを見たイギリス政府は分割令を撤回したものの、反英運動の強いカルカッタを嫌って、1911年に都はデリーへと移された。しかし、その後もカルカッタは反英運動の一中心であり続け、日本に亡命したスバス・チャンドラ・ボースやラース・ビハリー・ボースなど、ガンディーとは異なる武装闘争を標榜する独立運動家を多数輩出した。BOSEの創始者であるアマー・G・ボーズの父であるノニ・ゴパル・ボースも当地から亡命した独立運動家である。第二次大戦中は、1942年から1944年にかけて市街と港が日本軍によって数回爆撃された（カルカッタ爆撃）」⁷⁹⁶

⁷⁹⁶ “コルカタ”. (参照 2023-06-26)

かわ 『河村俊平追想録』

『君を追想して』

陸軍歩兵中尉 恒石重嗣

君⁷⁹⁷と僕とは切つても切れぬ従兄弟の間柄である。否眞の兄弟と思つて居た。年齢の點のみから云へば僕が兄であるが、學識なり人格の點等から見て僕は常に君を兄としてゐた。それだけに君の急逝は返すがえすも残念である。

少年時代僕は暑中休暇等には必ず岸本⁷⁹⁸の君を訪ねたものだった。僕には兄姉はあるが年齢がかけ離れてゐたし家には不在だつたので、此の休暇中に君を訪ねて或は海邊に遊び又は涼台で夕餉を共にし夜はおそく迄カルタ取りに興じ、時には又日曜學校に行つた事もあつた。本當に少年の頃から兄弟の様な氣持で交つてゐた。君も亦僕の行くのを心から喜んでくれたし、山間の僕の家⁷⁹⁹まで自轉車で遊びに来て呉れた事も忘れられない思出となつた。

當時僕は君を「恭ちやん」と呼んでゐた。今でも懐かしい言葉として深く腦裏に刻み込まれてゐる。

少年時代で特に印象に残つてゐる點は君の眞面目さ、頭腦の明敏さ、文字の丁寧な事とそして又朝夕太平洋を友として育つた為か、僕のような山間に育つた者にとつては殊に大きなゆつたりとして人物の様に思はれたことだつた。今から考へると此時既に大成の基礎が出来つゝあつたものと思はれる。

中學校に入つてからは右の諸點は益々伸びていつた様に思ふ。殊に學友一同から敬服されてゐた事は忘れる事が出来ない。

由來同僚から尊敬され「あれは豪い」と云はれることは少いものである。圓滿な人格は年と共に更に更に磨かれて「信頼すべき人」となつた其の反面、運動方面も何一つ出来ぬものはなかつた。

小学校以來常に首席を占め、第四學年修了と共に見事一高に入校され、更に大學に進んでは學識駁々在校中已に高文を優秀なる成績を以てパスされて内務、大蔵、商工の三省から引つ張り夙となつた事は一般のよく知る所である。

世に才子は多い。然し乍ら君の如き大いなる人物は少ない。一見太洋の如く清濁併せ呑み、人に交るには常に信義を以てし、一面又日本刀の様な頭腦の切れ味を見せる所に、眞の利器であることが十分に證せられる。

⁷⁹⁷ ○河村俊平 (1912-10-09~1935-06-25)

○恒石 (1909年10月19日生まれ) より3歳下。

⁷⁹⁸ 現在の高知県香南市香我美町岸本。

⁷⁹⁹ 〃 「香南市香我美町西川」, [本書,p. 17]

嗚呼、學窓を巣立つて將に大飛躍せんとして不幸眞に不幸病魔の犯す所となり神化されたのは、非常時日本のため誠に惜んでも餘りある損失である⁸⁰⁰。僕にとっては「誠の友」を失ひ實に生涯の痛恨事である。僕の寫眞帳には士官學校當時君の一高姿と共に東京野々宮で撮つたのと大學時代のものが残つてゐる、此れを見る度に何事かを僕に呼びかけてゐる様だ。否今も猶確かに高圓寺邊りに居る様に思ふ。

「靈魂は不滅なり」幽明相隔ても魂と魂とで「恭ちゃん」と呼び「重さん」と呼ばれ度い。」⁸⁰¹

⁸⁰⁰ 35年3月東京帝国大学法学部卒業, 4月大蔵省入省・高知市長の三女と結婚, 6月9日徴兵検査で帰郷した夜脳膜炎に罹り, 25日死去. [本書. p.309]

⁸⁰¹ 恒石重嗣. “君を追想して”. 『河村俊平追想録』 p.163-164.

資料編

河村俊平の生涯と恒石

西暦	月	河村俊平	恒石重嗣
1909	10		19日出生
12	10	9日出生	
16	4		小学校入学
19	4	香美郡岸本小学校入学	
22	3		小学校卒業
	4		高知県立高知城東中学校入学
	12	高知市第六小学校4学年へ転校	
25	3	同校卒業	
	4	高知県立高知城東中学校入学	
27	3		高知県立高知城東中学校卒業
	4		陸軍士官学校予科
29	3	同校四年修了	
	4	第一高等学校入学	
32	3	同校卒業	
	4	東京帝国大学法学部法律科入学	
	7		陸軍士官学校卒業（第44期）
	10		歩兵第12連隊少尉任官
34	10		〃 中尉進級
		昭和9年度（1934）高等試験 行政科合格	
35	3	東京帝国大学法学部英法科卒業	
	4	大蔵省主税局国税課奉職	
		7日高知市長村上清氏三女 陽子を娶る 東京市中野区大和町に寓す	
	6	9日徴兵検査のため帰県、 同夜発病、脳膜炎に罹る	
25日死去（二十四歳）			

出典：『河村俊平追想録』 河村俊平略歴／本書。（恒石の小・中学校入学卒業時期は類推）

かん 幹部候補生

○概要

・「兵科将校任官のルートは、大別して三つあった（陸軍では将校の補充という）。

第一のルート 陸軍士官学校（陸士）士官候補生を経る方法

第二のルート 下士官から少尉候補生を経る方法

第三のルート 幹部候補生を経る方法 [中略]

第三の幹部候補生制度により将校に任官する方法は、戦争中の学徒出陣でつとに有名になったが、元来中等学校の学校教練に合格した者が、徴集で二等兵として入営後志願して試験により幹部候補生となり、二年間の訓練ののち、見習士官を経て予備役少尉になり、平時には自己の職業につき、戦時に召集を受けて軍務に復する、という制度であった。[中略]

企業や官庁で幹部といえ、重役・工場長・次官・局長などを指すが、陸軍では下士官以上を指すにすぎず、したがって陸軍の幹部候補生には何らエリート候補生の意味はない。戦後軍の制度が忘れられた中で幹部候補生という言葉が中途半端に記憶され、エリート候補生という意味を含めて使われることがある。」⁸⁰²

・「各部将校相当官（のちの各部将校）任官の方法は、次のとおりであった。

○経理部 [中略]

○衛生部

衛生部将校担当官は、大学医学部・医学専門学校・大学薬学科・薬事専門学校卒業生を見習医官・見習薬剤官に採用し陸軍軍医学校で教育する（現在の防衛医科大学校のような医師養成そのものをする制度はとっていなかった）。」⁸⁰³

○漫画家・やなせたかしの例

「(本名：柳瀬 嵩〈読みは同じ〉、1919年〈大正8年〉2月6日 - 2013年〈平成25年〉10月13日)は、日本の漫画家・絵本作家・詩人・元大日本帝国陸軍軍人。有限会社やなせスタジオ社長。高知県出身（詳細は後述）。作曲家としてのペンネームは「ミッシェル・カマ」。『アンパンマン』の生みの親として知られる。

[中略] 1919年2月6日、東京府北豊島郡滝野川町（現：東京都北区）生まれ。父方の実家は高知県香美郡在所村（現：高知県香美市香北町）にあり、伊勢平氏の末裔で300年続く旧家。父親は上海の東亜同文書院を卒業後、上海の日本郵政に勤めた後、講談社に移り「雄辯」で編集者を務めた。[中略]

1924年（大正13年）に父親がアモイで客死。遺された家族は父親の縁故を頼りに高知市に移住する。弟は後免町（現・南国市）で開業医を営んでいた伯父（父の兄）

⁸⁰² 『事典 昭和戦前期の日本』 p. 318-321.

⁸⁰³ 同上. p. 324-325.

に引き取られ、まもなく母が再婚したため、やなせも同じく伯父に引き取られて育てられる。この伯父は趣味人でもあり、かなり影響を受けたという。

後免野田組合小学校（現・南国市立後免野田小学校）、高知県立高知城東中学校（現・高知県立高知追手前高等学校）⁸⁰⁴に進む。少年時代は『少年倶楽部』を愛読し、中学生の頃から絵に関心を抱いて、官立旧制東京高等工芸学校図案科（現・千葉大学工学部総合工学科デザインコース）に進学した。同期生に風間完がいる。[中略]

1939年卒業後、東京田辺製薬（現：田辺三菱製薬）宣伝部に就職。しかし、1941年（昭和16年）に徴兵のため大日本帝国陸軍の野戦重砲兵第6連隊補充隊（通称号は西部軍管区隷下部隊を意味する西部第73部隊。野重6連隊自体は既に中国へ動員・出征中であり、やなせが入営したのは在小倉の補充隊）へ入営。学歴を生かし幹部候補生を志願し、その内の乙幹に合格し暗号を担当する下士官となる。

補充隊での教育後は日中戦争（中国戦線）に出征。部隊では主に暗号の作成・解読を担当するとともに、宣撫工作にも携わり、紙芝居を作って地元民向けに演じたこともあったという。従軍中は戦闘のない地域に居り、職種も戦闘を担当するものではなかったため、一度も敵に向かって銃を撃つことはなかったという。最終階級は陸軍軍曹。なお、大東亜戦争では弟が戦死している。」⁸⁰⁵

⁸⁰⁴ 恒石や横山隆一の後輩。

⁸⁰⁵ ○“やなせたかし”. Wikipedia. (参照 2022-10-10)

○JR高知駅・岡山駅間を走る特急列車「南風」の車体に、やなせたかしの漫画のキャラクターが描かれている。(2022年10月現在)

くり 栗原悦蔵

○Wikipedia

「(くりはら えつぞう、1894年(明治27年)3月31日 - 1987年(昭和62年)9月18日)は、日本の海軍軍人。最終階級は海軍少将。群馬県前橋市出身。

略歴

旧制群馬県立前橋中学校より海軍兵学校第44期入校。平出英夫海軍少将に代わり、海軍報道部第1課長に着任したが、早々に「竹槍事件」が発生。筆者である毎日新聞記者新名丈夫を守るべく陸軍との対応にあたった。また米内光政、井上成美、高木惣吉などの下、終戦工作に携わっている。戦後は公職追放となり、その後は小松製作所に入社し小松フォークリフト会長に就任した。

人物像

地味で誠実な性格であり、米内、井上、高木などから信頼された。また新聞記者の評判が良い人物であった。

エピソード

.....竹槍事件では、新名丈夫が陸軍に召集されるのを防ぐべく海軍報道班員としてパラオに送ろうとした。このとき栗原は新名に向かい「海軍は君を陸軍に渡すことはできない。願わくは華々しく死んでほしい」と話し、涙を流している。ただし事件の元となった記事は栗原が書かせたという説がある⁸⁰⁶。 [中略]

年譜

.....1943年(昭和18年)7月10日- 海軍省兼軍令部出仕

7月15日- 海軍省軍務局第4課長兼大本営海軍参謀兼海軍報道部第1課長

1944年(昭和19年)3月2日- 免海軍報道部第1課長 兼海軍報道部長⁸⁰⁷

⁸⁰⁶ 日本放送協会の澤田進之丞と平川唯一の記事も陸軍報道部(恒石)が書かせた可能性はないか。 [資料「日本の海外宣伝の評価／批判(日本人)」]

⁸⁰⁷ “栗原悦蔵”。(参照 2023-05-06)

ぐん 軍協力者の戦後

「現在六、七〇歳前後の文士で陸海軍いずれかの宣伝（報道）班員とならなかった者は少ない。」（心理7）

○池田徳眞

・「日本の主要な敵はアメリカ合衆国だから、駿河台分室開所後にまず藤村氏やその他の所員がしたいと思ったことはアメリカという国、およびアメリカ人の弱点についての研究であった。そのため、週に1、2度アメリカやアメリカ人に精通した著名人を招くことに決めた。外交官、ジャーナリスト、政治・経済・歴史学者、さらにはワシントン D.C.の議会図書館に勤めていた女性⁸⁰⁸までいた。戦時中のことであるから参謀本部は日本人ならだれでも呼び寄せることができ、あえて断る人はいなかった。なぜなら一度反軍的（Anti-army）だという烙印を押されると、それは公的な社会生活から追放される（purge from the public life of the society）ことを意味したからだ。それで企画部の所員は、意見を聞きたいと思う人には誰でも手当たり次第に来てもらうことができた。」⁸⁰⁹

・「この事務所の漫画家の1人が陸軍に徴用された⁸¹⁰。小岩井少佐は欠員を埋めるため、太田〔天橋〕氏と相談の上で松下〔井知夫〕という有能な漫画家を呼び寄せた。少佐は事務所近くの喫茶店でその漫画家と会い、事務所の説明をしてこう言った。

「ここへ来てわれわれのために働いてもらいたい」

漫画家が答えた。

「私はある新聞社の仕事で手一杯です。少し考える時間をいただけませんか？」

すると少佐は断固として言った。

「それは困る。参謀本部の秘密を打ち明けた訳だから、いずれにせよあなたには来てもらわねばならない」

こうして彼は淡路町事務所で働くことを余儀なくされ、戦争が終わるまでの5年間日本軍のために絵を描き続けた。松下は、池田にこう話した。

⁸⁰⁸ 坂西志保（1896-1976）。（心理201）

⁸⁰⁹ 『駿河台分室物語【本編】』p.68.

⁸¹⁰ 那須良輔（1913-89）か：「昭和十三年十一月武昌・漢口の戦いが終ると、漢口の軍司令部でしばらく報道班の仕事を命ぜられ、伝単やポスターの製作に従事した。昭和十五年に召集解除で二度目の帰還をしたので結婚、近藤日出造〔1908-79〕の主宰する「漫画」誌にはじめて政治漫画を発表したのが私の政治漫画家への第一歩であった。その年、中国前線での伝単製作の経験で、大本営陸軍部に囑託の勧誘を受けた。戦地帰りで仕事も少なかったものでこれに応じ、やっと生活のめども立とうとした。ところが昭和十六年の初夏、三度目の召集令状が舞い込んだのである。子供があと一週間で生れるという時だった。私は思わず大声で「バカタレ。」と叫んだ。召集令状は公平に配達されるものと思い、国のために戦うのだと信じていたが、政府高官の子弟は徴集のがれができたことを知ったのである。」。〔那須良輔. 漫画家生活50年. 平凡社, 1985, p.24〕

「少佐から話があった直後から憲兵が家の周囲をうろつき始めました。もし申し出を拒否したら陸軍から非国民の烙印を押され、新聞の仕事を失うことは明白でした」

人を雇う時、これほど高飛車で理不尽な勧誘は聞いたことがない！しかしこの話は参謀本部がいかに厳しく淡路町事務所の存在を秘匿し、予想されるアメリカやイギリスとの戦争に直面した日本の軍人がいかに張りつめた感情をもっていたかを示しているようだ。」⁸¹¹

○宮本常一

・「京大教授の社会学者、作田啓一の父の作田荘一京大教授を日本側教授陣のトップに据えた建国大学は、平泉澄、笈克彦など皇国史観の主導的学者たちをそろえたことからわかるように、きわめて国粹主義的かつ植民地主義的色彩のつよい大学だった。

開設にあたっては、関東軍参謀の石原莞爾大佐が唱える東亜連盟構想に共鳴した同じ関東軍の辻政信大尉が、満州国の首都新京の地図の上にドンと指を広げ、六十三万坪という広大な敷地を確保したといわれる。五族協和のスローガンのもと、生徒は日本人、中国人、蒙古人、朝鮮人、白系ロシア人の五民族から集められ、外国人教授陣には、ガンジー、トロツキーまで招聘することも計画された。

宮本〔常一〕は旅に出て留守だったため、大山〔彦一〕に應對したのは〔渋谷〕敬三本人だった。敬三は即座に大山の話をつ断わった。旅から帰った宮本に、敬三は満州行きを勝手に断わったことをまず詫び、それからその理由を説明した。

「日支事変以後、日本はどんどん泥沼に足を突っこんでいっている。いまの日本には残念なことだが、その收拾をつけることができる政治家も軍人もいない。おそらく近いうちに世界大戦になるだろう。そして日本は敗退するだろう。

満州へ行くことにも意義があるだろうが、まず日本をみることだ。満州はかならず捨てなければならなくなる日がくる。

それに満州の苛烈な気候の中で病弱な君が本当にやっていくことができるだろうか。こういうときこそ命をとくに大切にしなければいけない。これからは敗戦後に対してどう備えていくかを、本当に真剣に考えていかなければならない」

敬三の表情は沈痛そのものだった。宮本はそれまで戦に勝つことはむずしいだろうが、それほど遠くない将来に日本が敗北するという事など、まったく考えてもみなかった。

まだ太平洋戦争も勃発する前だった。敬三がどんな情報によって日本の敗北を予測したのか宮本にはわからなかったが、宮本はそのときから戦争敗北後の日本についてぼんやりと考えるようになった。

もしこの時点で宮本の満州行きがなされていれば、今日の宮本は間違いなく生まれていなかった。

この時代、多くの民俗学及び民族学者たちが、熱病にうかされるように満州や朝鮮、台湾の大学に渡って教鞭をとり、また後述する軍部と結びついた国策研究機関の研究員として働いた。彼らは、結果的に植民地政策の一翼を学問的に担わされることになったが、ひたすら日本の村々を歩きつづけた宮本だけは、その咎をまぬがれた。

⁸¹¹ 『駿河台分室物語【本編】』 p.179-180.

彼らのこの時代の研究論文は、戦後まとめられた全集から完全に外されているか、一部収録されていても、大東亜共栄圏、八紘一宇などの文言はきれいに削除されている。これに対し敬三のアドバイスによる民俗調査の旅に基づいて書かれた戦時中の宮本の著作は、『家郷の訓』にしる『村里を行く』にしる『民間暦』にしる、すべて全集におさめられ、いまなお生命の輝きを失っていない。』⁸¹²

・「また、年譜類の経歴からは一切削除されているが、岡〔正雄〕は昭和十三年に開校された陸軍中野学校に特別講師として招かれ、尾行、変装術、錠前の開錠術、柔術などスパイ養成のための講義とならんで、毎週一回行なわれた民族政策の講義を三年間にわたってつづけた。さらに戦争末期には、現役の中佐帯同の少将待遇で、特別軍用機に乗り、ジャワ、スマトラなど南方民族の視察を行なった。

戦時中の民族学者たちの研究テーマと日本植民地主義との関係を精力的に調査し、注目すべき業績をあげている和光大学助教授の中生勝美は、図書館の分類で、軍事の項目に隣接して民族学が位置づけられていることからわかるように、辺境地に居住する民族を研究対象としてきた民族学は、その成立時から、軍事、植民地統治の隣接領域という宿命を負っていたと述べている。

こうしたなかでとりわけ岡正雄が軍部の民族政策に積極的に加担するようになったのは、一つにはウィーン留学時代に知りあった日本人駐在武官との交流があったためだった。

岡と親交が深かったのは、元イタリア大使館付きの駐在武官で、終戦時、参謀本部の第二部長だった有末精三や、元ハンガリー公使館付きの駐在武官で、終戦時、陸軍次官だった若松只一らだった。とりわけ陸軍中野学校を開校した元陸軍少将の岩畔豪雄とはきわめて親密な関係をもつことになった。

昭和十七年に新設された財団法人民族学協会は、戦後、日本民族学協会と再び改組改称されたが、岡が岩畔を知るようになったのは、戦後生まれた同協会の評議員の一人となった佐島敬愛という謎めいた人物を通じてのことだった。」⁸¹³

○中藪英助

「戦時中に書いた記事のことを心配している新聞記者が、ぼくのまわりにもいた。中国時代の上司だった読売論説委員の高木健夫さんもそうだった。軍の御用新聞である現地邦字紙の幹部として軍国主義宣伝に当たった戦争責任を追及され、ページされることを恐れていたのである。

「おれは『北京横丁』を反証に提出するつもりなんだ。どこを切ったって軍国主義者の血なんか出やしねえよ」

と、高木さんは自信たっぷりの口調でいったことがある。」⁸¹⁴

⁸¹² 『旅する巨人』 p.150-151.

⁸¹³ 同上. p.166.

⁸¹⁴ 中藪英助. 私本・GHQ 占領秘史. 徳間書店, 1991, p.62.

○小林秀雄

・「回答資料1 [小林秀雄全集 第8巻／小林／秀雄 著／新潮社／2001.9] のp 9-35に「座談 コメディ・リテレール 小林秀雄を囲んで」（「近代文学」昭和21年2月）が収録されており、その中のP 32に小林秀雄の発言として「この大戦争は一部の人の無知と野心とから起ったか、それさえなければ、起らなかったか。どうも僕にはそんなお目出度い歴史観は持てないよ。僕は歴史の必然性というものをもっと恐ろしいものと考えている。僕は無智だから反省なぞしない。利巧な奴はたと反省してみるがいいじゃないか。」との記載がある。」⁸¹⁵

・「……小林 [秀雄] さん、批評家の現役で八十歳まできちんとやったってことはえらいことだなと思うんですよ。まア、あの人は、戦前は明治大学の先生として、俸給を取っておられたけれども、戦後、追放じゃないけれども、自分から明治大学の文芸科をひかれたあとはまったく筆一貫でしょ。」⁸¹⁶

○猪木正道

「中曽根康弘防衛庁長官がひそかに [猪木正道] 先生を京都に訪ね、防衛大学校長への就任を求めた。当時の社会と学会の空気を考えれば、それは試練であったろう。先生は「バケモノが来たよ」と信頼する高坂正堯先生にもらされたそうだが、結局は受諾された。70年夏に第3代校長に就任し、改革に着手された。「広い視野、科学的思考、豊かな人間性」が防大創設以来の教育理念であったが、実は全学生が理工系を専攻し「科学的思考」以外は科目展開されていなかった。先生は国際政治学を中心に人文社会系を併設し、「広い視野」と「豊かな人間性」をカリキュラムで裏打ちされた。」⁸¹⁷

⁸¹⁵ レファレンス協同データベース. 福岡県立図書館 (2110014) 管理番号：福参-0812. (参照 2022-01-03)

⁸¹⁶ 江藤淳. [江藤淳. 蓮實重彦. オールドファッション. 中央公論社, 1988, p.179. (中公文庫)]

⁸¹⁷ 五百旗頭真. 猪木正道さんを悼む：言葉に強さ 戦う自由主義者. 朝日新聞. 2012-11-13, 朝刊.

こい 小岩井少佐の「命令」翻訳

○49年10月ワシントンDCのFBI本部

「このようにわれわれの取扱いは、けっして悪くはなかった。なにしろ検察側に有利な証言をさせようというのだから、相手はいたってソフトムードであったが、さかんに誘導尋問の奥の手をつかった。その中で大問題になったのが、一九四三年（昭和十八年）十二月一日に、俘虜一三人を文化キャンプに連れて来た日に下した「協力を拒みたる者はその生命を保証せず」という命令である。ティルマン検事は、これを「現実的には誰も殺されなかったのだから、もっと度の弱いものではなかったか」としきりに聞くのである。私は「日本語はこれに間違いありません」と一步も譲らないのだが、ティルマン検事はその英訳を問題にしているのだ。しかもその通訳をして、俘虜に向って叫んだ森野君がワシントンに来ているのだから、検事は森野君に向ってこの点をしつこく問いただすのであった。その時の実情はとっさの場合であったから、通訳した森野君もなんと翻訳したのか記憶がないし、われわれも正確には記憶していないのである。森野君は、次の三つが考えられると言った。

- (1) Your life shall not be guaranteed.
- (2) Your life will not be guaranteed.
- (3) Your future will not be guaranteed.

これは(1)よりは(2)、(2)よりは(3)の方が、言葉の意味が弱いのである。私はティルマン検事に「その場の雰囲気からして、最も強い(1)に九分通り間違いありません」と言った。しかし、プロボーが自発的に協力したのでなければ反逆罪は成立しないのだから、検事は私の証言には不満なのである。」⁸¹⁸

⁸¹⁸ 『日の丸アワー』 p.195-196. (下線は原文)

こう 高知県軍恩連盟

「未曾有の国難に際して我国の自存自衛と東亜諸民族の解放を目途として決然、戈をとった大東亜戦争の終結より早くも半世紀を経過し本年は終戦五十周年を迎えました。

此の節目にあたり健在する歴戦者有志の協力の下過去四十数年に亘る軍恩連盟及恩政連の歩みを想起し主要なる実績を抜粋整理して後世にその記録を残すべく本書発刊の運びとなりました。

顧れば終戦直後の思想混乱、反軍的風潮の渦巻く昭和二十六年三月大島岬の護国神社に参拝した戦友達に対する故山本笹樹陸軍少将の恩給復活⁸¹⁹に関する強力なる提言は一同の共鳴を呼び忽ち高知県元軍人恩給擁護連盟⁸²⁰結成に進展した。

而して時の宰相吉田茂氏や林譲治衆議院議長始め寺尾、宇田、長野、浜田の国会議員の諸先生等の深い理解と支援により全国の先頭グループとして文字通り血の滲むような恩給権擁護の運動が窮乏に堪えて展開された。[中略]

かくして全国の有志相呼応して陳情、請願を反復しつつ歴代政府及与党たる自由民主党の強力なる支援を得て着々法制の整備を重ね恩給権擁護の基盤は構築されて今日に至っている。[中略]

今や男子会員の加齢も進み平均年齢は七十五才を越えたが婦人部の強化拡充を軸として之を補完しつつ一致団結相携えて連盟綱領の理念の実現に向かって邁進せねばならない。

本書発刊にあたり改めて先人の御苦勞を深謝すると共に所謂「衣食足りて礼節を知る」の古語に即して曾て祖国防衛の戦士たりし誇りを忘れず生ある限り英霊奉賛、道義高揚を実践し、国民の儀表となり真に信頼と敬愛を受ける団体となり有終の美を収めるよう努力することを誓う次第である。

平成七年三月吉日

第七代 高知県軍恩連盟会長

恒 石 重 嗣⁸²¹

⁸¹⁹ 軍人恩給の歴史。[“恩給制度の概要”。総務省。(参照 2022-08-13)から抜粋]

・明治 8 年 (1875 年) 陸軍 (4 月)、海軍 (8 月) 恩給制度発足

・昭和 21 年 (1946 年) 連合国最高司令官の指令により、重症者に係る傷病恩給を除き、旧軍人軍属の恩給廃止 (勅令第 68 号)

・昭和 28 年 (1953 年) 旧軍人軍属の恩給復活 (法律第 155 号)

⁸²⁰ ○「昭和二十七年五月に結成」。[本書「3.2.14 高知県軍恩連盟会長」]

○「「高知県軍恩連盟」と名称が改められたのは昭和 36 年 10 月 3 日となっています。」。[オーテピア高知図書館回答. 2023-03-11 【出典】高知県軍恩連盟編. 高知県軍恩連盟の歩み 自昭和 26 年至平成 7 年 3 月. 高知県軍恩連盟, 1995.7, p.21]

⁸²¹ 『高知県軍恩連盟の歩み』冒頭。

第六代会長・嶋内 百千世

○『高知県軍恩連盟の歩み 自昭和 26 年 至平成 7 年 3 月』高知県軍恩連盟/編 資料番号：0100696724 ※館内閲覧資料 P78「歴代高知県連会長名」第六代 嶋内 百千世 元海、大佐との記述がありました。』⁸²²

「嶋内氏著作の資料があり、附属：年譜に経歴が記載されております。

生没年について。明治 35 年 10 月 25 日生まれ 没年は不明ですが、平成 7 年 4 月 27 日時点では 92 才で存命であることがわかっています。「広報のいち」のおくやみ欄が掲載されていた平成 13 年 5 月までを確認しましたが、名前を見つけることはできませんでした。ただ希望しない方は載らないため、全員ではありませんのでご了承ください。また、存命なら 100 才になられているであろう、平成 16 年 12 月まで確認しましたが、亡くなられたというような記述は見つかりませんでした。

全てを書ききれませんが、下記にまとめております。ご参照いただければと思います。詳細につきましては、資料全体はできませんが複写対応もいたしますので、ご希望の場合は当館までご連絡ください。資料の内容は生い立ちや軍所属時代などの回想となっております。

経歴

高知県香美郡野市町出身（現在：香美市野市町）

大正 10 年 海軍兵学校入校（第 52 期）（19 才）

大正 13 年 海軍兵学校卒業、海軍少尉候補生出雲乗組（22 才）（中略）

昭和 24 年 酪農に従事し、その後、関係団体の役員などを歴任。（46 才）

昭和 47 年 高知県軍恩連盟副会長就任（70 才）

昭和 55 年 高知県軍恩連盟会長代理（78 才）

昭和 56 年 高知県軍恩連盟会長就任（79 才）

昭和 62 年 酪農からニラ園芸農業に移る（85 才）

平成 6 年 のいち町の名誉町民として表彰される（92 才）

調査済み資料

『草奔録』海軍兵学校第五十二期 嶋内百千世/著 1990 年刊 ※館内資料。全 67 頁・付属：6 頁 資料番号：0101397704

P1～67 生い立ち、海軍兵学校・少尉候補生時代、青年将校時代、酪農と私、野市町議会議員時代、余録の構成となっております。

付属：P1～6 年譜（明治 35 年～平成 2 年まで）

『高知新聞 1975 年 10 月 28 日 朝刊 2 頁』

「県勢功労者」顔写真の掲載あり。当時、71 才。

『高知新聞 1995 年 4 月 27 日 朝刊 28 頁』

野市町下井「合併 40 周年祝う記念式典で名誉町民表彰」

当時、92 才。表彰式全体の写真のみ。

『広報のいち 平成 7 年 5 月～平成 16 年 12 月まで』（欠号あり。おくやみ欄（死亡欄）は平成 13 年 5 月まで。希望者のみ掲載。）見つけられず。以上』⁸²³

⁸²² オーテピア高知図書館回答. 2023-02-21.

⁸²³ 同上. 2023-02-22.

○高尾和彦（高知県健康福祉部長）

「今年になり、県の援護行政に多大の貢献をされた旧日本軍の元将校があいついで亡くなった。恒石重嗣氏と嶋内百千世氏である。恒石さんは亡くなるまで高知県軍恩連盟の会長を勤め恩給改善など旧軍人の処遇改善に努力された。明治42年生まれで陸軍士官学校、陸軍大学校を卒業し大東亜戦争中は大本営参謀として戦時の情報・宣伝戦略の企画立案にあたった方である。戦後東京ローズという連合軍に対する謀略放送のアナウンスをつとめた日系アメリカ人女性の裁判にもかかわった。生前、恒石会長から伺った話やいただいた著書の中に「大本営発表」のことがあった。今では虚偽の代名詞として定着してしまっているが戦局が悪化する中で把握した損害をいつどのように発表するかで苦悩する当時の関係者の姿が描かれている。恒石さんは「総括的にいえば敵側の発表は損害の発表も大胆に行い、発表の仕方にも柔軟性があった。敵は戦局の好転と損害をはるかに上回る豊富な生産力に恵まれていたので損害を思い切って包み隠さず発表しても差し支えなかったがわが方はこれとまったく対照的で前線将兵や国民の士気喪失を恐れて秘匿した損害は次第に累増した。」と述べている。戦争の結果と戦後の軍部に対する国民の批判は述べるまでもない。

今回、本県の食肉処理センターの牛枝肉から O-157 が検出されたときにも実は公表の是非を巡り内部で議論 [中略]

嶋内さんも明治35年生まれの海軍兵学校、海軍大学校に学んだエリート士官で恒石さんの前任の軍恩連盟会長である。艦隊勤務の経歴が長く幾多の海戦をくぐりぬけ命を拾ったという。海軍士官のモットーは目先がきいてスマートでユーモアを解することだと聞いたがご本人も海洋会という元海軍関係者の集まりの機関紙に「ヘル談」と呼ばれる上品でウィットに富むわい談を掲載したりしておられる。阿川弘之氏の本の中に海軍大学校の入学試験で「自分の現在の年齢を正確にのべよ。」と問われ「こればかりは刻々変わるのでお答え出来ません。」と返答した生徒が最優秀の成績になった、というくだりもあった。戦闘が始まり極限状態の中で指揮官や参謀としての的確な判断を下すためには日頃から柔軟な思考と機知の精神を養わなければならないということであろう。今回の [以下略]⁸²⁴

補 足

○法人格

「軍恩連盟全国連合会（軍恩全連）についてお調べしました。『全国各種団体名鑑2006 中巻』シバ／編集 2006年 p179によりますと、財団法人などの法人格ではなかったようです。ほかの団体名には、団体名の上部に「財団法人」と記載があります。」⁸²⁵

○辻政信元参謀

「[52年] 11月29日、衆議院の一般質問に辻は立った。持論の自衛中立、戦略論を述べると、与野党からは「参謀本部でやれ」「時局講演会ではないぞ」「質問をやれ」

⁸²⁴ 高尾和彦. 研友通信：常在戦場. 高知県衛生研究所. 1996年, 第42号, p.138.

⁸²⁵ 浜松市立中央図書館回答. 2023-06-16.

などの野次が飛び、議場は騒然となった。副議長の「意見は簡潔にするように」と注意を受け、質問に移ったのだが、ここでも「今日（困窮した軍人の）遺族が首をつろうとしている時に議員はお手盛りで歳費をあげようとしているではないか」と発言し、再び議場は騒然となった。波乱含みのデビューであった。

辻には辻なりの信念があった。かつて共に戦場に立ち、国のために戦って死んでいった軍人たちの遺族が、戦争が終わったからと言って蔑ろにされていいわけがない。1952年（昭和27年）12月末に行われた徳川無声との対談で語っている（『問答有用』）。

売名といわれようが、どうしようが、いっこう差支えございません。今日、戦死者の未亡人が月に八百三十三円、一年にして一万円の扶助料をもらうことになっとなるわけですが、この扶助料さえ、この三月の末に法令が出て予算が通つのに、いまだに受取っていない。なかには年の瀬を切りぬけられんで、首つりをするものもある。

潜行中、家族に辛酸をなめさせた辻にとって、戦争で亡くなった将兵の家族の苦境は看過できない問題であった。この対談の最後で辻は自嘲気味にこう語っている。

わたくしは部下も組織もなく、ひとりで肅清をやろうというんですから、袋だたきにあうでしょう。結局、これはわたくしの宿命ですね。（笑）

たとえ「売名」だったとしても、辻が遺族や困窮する元軍人のために尽力したことは事実だ。著書の印税を遺族に送り、そのため、辻の家族が経済的に大変な目にあったということはすでに述べたが、実際に辻の援助を受けた個々人の証言が記録されている。」⁸²⁶

○恩給復活への批判

・「私は戦後、軍人恩給の受給を拒否してきた。戦争の犠牲者は決して私ではない。それはアジアの人々だ。救済すべきはアジアの人々であって、自分が恩給をもらうことには強い抵抗感があった。ほかの人にもらうなと言ったことはないし言うつもりもないが、自分はもらいたくなかった。」⁸²⁷

・「中野好夫という人であったか、もはや戦後ではない、と宣言したそうだが、戦後でなけりゃ、そろそろまた戦争前じゃないのかね。戦争が終わって十八年にもなるというのに、戦争をおっぱじめた連中の恩給を、戦争にひっぱられた者が稼がねばならぬはめで、税は重い上にも重く……」⁸²⁸

⁸²⁶ 『辻政信の真実』 p.334-336.

⁸²⁷ 無惨な死、ひとりその無念思う：軍人恩給の受給を拒否してきた元陸軍軍曹 尾下大造。朝日新聞。2001-08-07, 朝刊。

⁸²⁸ 郡司利男。カップ特製国語笑字典。光文社, 1963, p.159.

こう 高知・東京間の往来

国 鉄

○高知駅→東京駅⁸²⁹ (例)

			45年9月	46年2月	47年11月
土讃線	高知駅	発	05:10	07:35	7:40
	多度津駅	着	09:42	12:32	12:32
		発	09:53	12:38	12:38
宇高連絡船	高松栈橋駅	着	10:53	13:42	13:42
		発	11:10	14:15	14:05
宇野線	宇野駅	着	12:10	15:15	15:05
		発	12:29	15:34	15:34
山陽線	岡山駅	着	13:25	16:38	16:38
		発	16:30	17:34	17:45
東海道線	大阪駅	着	21:04	21:58	22:00
		発	23:00	22:30	22:34
	東京駅	着	13:25	10:36	10:35
所要時間			32時間15分	27時間01分	26時間55分

○東京駅→高知駅 (例)

			45年9月	46年2月	47年11月
東海道線	東京駅	発	22:40	22:40	22:40
	大阪駅	着	13:30	13:30	13:06
山陽線		発	17:00	17:00	13:25
	岡山駅	着	21:30	21:30	18:20
宇野線		発	03:10	03:10	19:04
	宇野駅	着	03:52	03:52	20:04
宇高連絡船		発	04:14	04:14	20:34
	高松栈橋駅	着	05:14	05:14	21:34
土讃線		発	05:48	05:48	23:20
	多度津駅	着	06:48	06:51	00:18
		発	06:53	06:57	00:30
	高知駅	着	11:21	11:24	4:28
所要時間			36時間41分	36時間44分	29時間48分

⁸²⁹ 出典 (東京駅→高知駅も同じ)

- ・「45年9月」：オーテピア高知図書館回答. 2022-10-14.
- ・「46年2月」：時刻表. 第二二巻第一二号. 日本交通公社, 1946-02-01, p.98-99, 54, 4-5.
- ・「47年12月」：〃. 第二三巻第一二号. 〃, 1947-11-15, p.88-91, 47, 4-5.

○旅行者外食券

「旅行には旅行者外食券御持参ください

□⁸³⁰旅行者外食券が無いと、駅や列車内で販売する弁当や鉄道パンが買えません。又、旅行者外食々堂として指定された食堂や旅館で食事が出来ません

□旅行者外食券は最寄りの食糧営団配給所へ「主要食糧配給通帳」を持参すれば交付を受けられます

□旅行者外食券は百瓦券が十枚で一綴となっておりますから、旅行の長短に応じ適当枚数（十枚単位で、十枚以下の端数は配給されません）を予め用意する必要があります。

□旅行者外食券は交付の翌月末日まで有効ですが、旅行の長期に亘る人のため六ヶ月間有効の特別旅行者外食券もあります」⁸³¹

○時刻表裏表紙（例）

- ・「社名変更 財団法人東亜交通公社を財団法人日本交通公社と改称致しました御通知申し上げます 昭和二十年九月〔中略〕

復員輸送 真心こめてあたたかく

復員輸送 感謝をこめて」⁸³²

- ・「元気を出さう 働かう 信託業兼営 三和銀行 大阪・東区今橋三丁目」⁸³³

○進駐軍

「敗戦後の日本は、連合軍の管理下におかれた。実際は連合軍の名前の下に米進駐軍による支配が続き、当時MP（ミリタリーポリス）と呼ばれて親しまれ、あるいは怖がられたものである。

鉄道は第3鉄道輸送司令部から指令が発せられ、米軍や米人等の輸送は日本人に優先して行われ、駅名にもローマ字の表示が入り、占領軍の優遇ぶりを実感させられたものである。被災をまぬがれた1等車両や寝台車、展望車などはすべて米軍に接收され、全国の主要駅⁸³⁴にはRTO（RAILWAY TRANSPORTATION OFFICE）が設置され、豪華でゆったりとした待合室などが設けられた。「THE OCTAGONIAN」と呼ばれるアメリカ第8軍司令官の専用車も運転された。また、横須賀線と山手線には「ALLIED FORCES CAR」なる連合軍専用車が全室あるいは半室2等車として設けられ、一般日本人は乗車できない車両であった。」⁸³⁵

⁸³⁰ □は原文では○（本書で使用する○と区別するため□に変更した）

⁸³¹ 時刻表：第二一卷第三号. 日本交通公社, 1945-09-01, 裏表紙.

⁸³² 同上.

⁸³³ 時刻表：第二二巻第二号. 日本交通公社, 1946-02-01.

⁸³⁴ 「RTOは岡山駅に設けられていた。」. [岡山県史編纂委員会編. 岡山県史 第13巻（現代1）. 岡山県, 1984, p.12-13；岡山県立図書館回答. 2023-01-20]

⁸³⁵ 辻阪昭浩. 鉄道きっぷクロニクル：鉄道きっぷでたどる日本の鉄道130年史. イカロス出版, 2011, p.56-57.



図 83 岡山駅 (1946 年 5 月)
出典：日本国有鉄道編. 日本国有鉄道
百年写真史. 日本国有鉄道, 1972, p.304.



図 84 鉄道公安職員による列車内の
整理と警備
出典：『日本国有鉄道百年写真史』
p.310.



図 85 東京駅貴賓室内の RTO
(1947 年 7 月 2 日)
出典：『日本国有鉄道百年写真史』
p.313.

国内航空

○就航

『高知空港史』 p 330 に「1964 (昭和 39) 年 8 月 1 日 東京・日本国内航空 (株) が大阪－徳島－高知線を東京－徳島－高知線に変更、1 往復開設・・・」とあります。

但し、直通便ではありません。

その他

全日空便の開設は昭和 40 (1965) 年 12 月 20 日 直通

『限りなく大空へ 全日空の 30 年』 資料編 p 50

『高知空港史』 p 330

日本航空便及び日本エアシステム便 (2004 年 JAL 便に統合) の開設は平成 9 (1997) 年 7 月 1 日 直通

『高知新聞』1997 年 7 月 1 日他⁸³⁶

○所要時間

「1. 『時刻表復刻版 戦後編 2-1 昭和 39 年 10 月号』 P536 「日本国内航空」

高知 17:00→徳島 18:10→東京 20:00

東京 13:40→徳島 15:50→高知 16:30

所要時間は 3 時間となります。

<https://www.lib-city-hamamatsu.jp/licsxp-opac/WOpacTifTilListToTifTilDetailAction.do?urlNotFlag=1>

2. 『時刻表復刻版 戦後編 2-2 昭和 42 年 10 月号』

P383 「全日本空輸」直行便

高知 13:50→東京 15:30

東京 9:05→高知 11:20

<https://www.lib-city-hamamatsu.jp/licsxp-opac/WOpacTifTilListToTifTilDetailAction.do?urlNotFlag=1>

所要時間は 2 時間 20 分程度です。

なお、この復刻シリーズでは、昭和 40 年、41 年はありませんでしたので、ご参考程度になります。」⁸³⁷

⁸³⁶ オーテピア高知図書館回答. 2019-08-04.

⁸³⁷ 同上. 2022-10-29.

こお コーヒーの戦後

○状 況

「以下参考までに、当時のコーヒー業界について詳しい「日本コーヒー史」上下巻
全日本コーヒー商工組合連合会 から一部引用いたします。

「日本コーヒー史 下巻」p8 より

昭和 21 (1946) 年、コーヒーの関税のうち「壘詰、缶詰、つぼ詰のものに限り免税」
となる。

(※進駐軍やその家族用として輸入されるレギュラーコーヒーに対して取られた措置)

昭和 25 (1950) 年、コーヒー生豆の輸入再開。

昭和 26 (1951) 年 4 月、コーヒーに改めて従価 35%の輸入税が設けられた。

「日本コーヒー史 上巻」p290～より

太平洋戦争初期、軍の手によって南方地域より多量の珈琲生豆が運び込まれ、国内各
地に分散貯蔵されていた⁸³⁸。

それが終戦後、軍の解体によって市場に放出された事により、終戦後約 2 年間の珈琲
市場は活況であった。(いわゆる隠匿物資、隠退蔵物資)

隠退蔵コーヒーが業界を潤したのは昭和 21～22 年頃まで。再びコーヒー豆は不足し、
高騰する。

昭和 23 (1948) 年 12 月、連合軍放出コーヒーの払い下げが始まる。

「恒石が米国からコーヒーを持ち帰った」1948 年は、隠退蔵コーヒーが無くなった後
で連合軍放出コーヒー払い下げ開始前ですから、コーヒー豆は貴重だったというのは
間違いなさそうです⁸³⁹。」⁸⁴⁰

○東 京 (47 年ころ)

「新円切替⁸⁴¹後の一カ月五百円生活という制限がまだ生きていた時代である。

⁸³⁸ 駿河台分室のコーヒー. [資料「浜本純一」]

⁸³⁹ 「その [証人として 48 年以降訪米した] 時の報酬でコーヒー豆を買って来た話は [恒
石] 本人からなのか親戚の話からなのかはっきりしません。」. [安岡元彦. E メール. 2019-
03-11]

⁸⁴⁰ 浜松市立図書館回答. 2019-07-27.

⁸⁴¹ 「新円切替 (しんえんきりかえ) とは、1946 年 (昭和 21 年) 2 月 16 日夕刻に、幣原
内閣が発表した戦後インフレーション対策として行われた金融緊急措置令を始めとする新
紙幣 (新円) の発行、それに伴う従来の紙幣流通の停止などに伴う通貨切替政策に対する
総称である。

概要

第二次世界大戦の敗戦に伴い、物資不足に伴う物価高及び戦時中の金融統制の歯止めが外
れたことから現金確保の為に預金引き出し集中の発生、また一方で政府も軍発注物資の代
金精算を強行して実施したことなどから、市中の金融流通量が膨れ上がったのが背景とし
てある。

サラリーが三百円くらいで、二倍以上はないと食えなかった。[中略] もとはといえば新聞社の安サラリーに原因がある。社の若い連中がより集まって相談したのは、銀座から日本橋へかけての累々たる焼けビルを見渡せる本社ビルの屋上や、ビルの内臓のような地下室だった。非合法活動でも何でもないので、なぜそんなところでやったかといえば、まず第一に十人以上になるともう集合する場所がなかったのである。小人数の場合は、銀座かいわいの喫茶店を利用した。あのころは、うまいコーヒーを呑ませる店なぞでんでなかったな！黒っぽい、お茶の出がらしのようなお湯に、サッカリンかズルチンの甘味剤を落して呑むコーヒーまがいばかりだ。⁸⁴²

○ニューヨーク (53年1月21日)

「[池田とウィリアムズが思いがけない再会をした翌日の夕食]

ウィリアムズ「あの少佐 (Major)⁸⁴³はどうしていますか？」

池田「あなたを殺そうとした少佐のこと？ 恒石ね。四国の故郷の町で喫茶店を営んでいる⁸⁴⁴。放送協力を拒否したあの瞬間、本当に殺されると感じた？」

ウ「日本の軍人は時に粗暴になるので、殺されるだろうと思いました。厳格さで悪名高い日本軍の命令を拒否したわけですから」

池「恒石少佐は殺すつもりだったと私は思う。あの時あなたを殺していたら、今彼は生きていない」

ウ「そうなら、彼の故郷に喫茶店はなかったわけですね (No coffee shop at his home town, then.)」

池田「そのとおり。ところであなたはあの勇敢な行為のために、戦後勲章をもらったんだね？」⁸⁴⁵

この時同時に事実上の現金保有を制限させるため、発表翌日の17日より預金封鎖し、従来の紙幣(旧円)は強制的に銀行へ預金させる一方で、1946年3月3日付で旧円(5円以上の紙幣)の市場流通の差し止め、一世帯月の引き出し額を500円以内に制限させる等の金融制限策を実施した(ここから「五百円生活」という流行語が生まれた)。これらの措置には、インフレーション抑制(通貨供給量の制限)とともに、財産税法制定・施行のための、資産差し押さえ・資産把握の狙いもあった。このとき従来の紙幣(旧円)の代わりに新しく発行されたのがA百円券をはじめとするA号券、いわゆる新円である。また新円切替の結果、「日本銀行兌換券」と表記されている紙幣は対象外の旧一円券を除いて全て無効となった。[“新円切替”. Wikipedia. (参照 2023-01-03)]

⁸⁴² 『私本・GHQ 占領秘史』 p.63.

⁸⁴³ ○ウィリアムズは恒石が「将軍 (General)」だと思っていた。[自宅での本人談. 92-07-20]

○したがって「少佐 (Major)」は池田の「意識」だと思われる。

⁸⁴⁴ 「池田は高知市を訪れたことはない。恒石元中佐が経営する「田園」という喫茶店で、是非一度コーヒーを飲んでみたいものだと思っている。」[『駿河台分室物語【本編】』 p.290]

⁸⁴⁵ 同上. p.3-4 / 『日の丸アワー』 p.3-4, 55, 226-227.

さん 参謀本部第8課

設 立

○「大正十四年末、第六課〔欧米、南方情報〕内の国別情報に総合評価を加えるため第四班が創設されたのが、第八課の前身で、その後、謀略、思想、軍縮問題などを担当、昭和十一年、第二部長直属の第一班となった。昭和十二年の参謀本部改正で正式に第八課が設立され、主として謀略を担当し、汪兆銘工作、南方工作を実施した。

第八課になっても同課内には、第一班、第四班、第十一班などがそのまま業務を続け、昭和十五年十一月、中宮悟郎（〔陸軍中野学校〕乙Ⅰ長）が四班に、木村武千代（乙Ⅰ長）が十一班に勤務し、更に十六年初頭には、平館勝治が四班に勤務することになった。

昭和十六年に入って、欧州におけるドイツの英本土上陸作戦の期待が薄れると共に、英、米、蘭の南方諸地域への戦力増強の兆候が見えはじめたため、仏印、タイに軍事基地を設定し、万一の場合（註 当時陸軍は英米との開戦はあくまで回避する方針であった）には受けて立つ準備を進めていた。南部仏印への進駐はこのために行なわれたが、この作戦が逆に受けて起たなければならない原因を誘発する結果を招き、大東亜戦争へと発展したのである。昭和十六年二月にはビルマ独立運動の志士オンサン等を支援するため南機関が設立され、中野出身者が多く関係した。（註 南機関参照〔省略〕）

この頃の第八課の業務担当は次のようであった。

第八課長 白井茂樹大佐（31期）

第四班長 武田 功中佐（34期）

部員 門松正一少佐（中国、仏印関係謀略担当 37期）

部員 尾関正爾大尉⁸⁴⁶（南方関係謀略担当 42期）

部員 多田督知少佐（宣伝担当⁸⁴⁷）

部員 藤原岩市少佐（宣伝担当 43期）

部付

羽賀少佐、小岩井大尉（宣伝補佐）藤島宏中尉（庶務）山本主計少佐（登戸研究所、対支謀略資材補佐）中宮悟郎少尉（乙Ⅰ長、南方関係謀略補佐）平館勝治少尉（乙Ⅰ長・ビルマ謀略工作補佐）

第十一班長 矢部忠太中佐（33期）

部付 木村武千代少尉（乙Ⅰ長・謀略人員資材関係補佐）

班員（文官）

⁸⁴⁶ ○次の理由から「少佐」の誤記と思われる：①陸士は藤原岩市少佐より1期上の42期、②「一九四〇年十二月〔中略〕この電報を中心に第八課の門松中佐と尾関少佐とが...」．
〔F 機関〕 p.14]

⁸⁴⁷ 36期．〔『陸軍士官学校』 p.240]

横山（リュシコフ大将関係）岩永 博（アラビア関係）鈴木 剛
（回教関係）中田光男（ソ連関係）齊藤敏男（濠州関係）等

第八課には、その後谷山樹三郎（乙Ⅱ長⁸⁴⁸）坂田 泰（乙Ⅱ長）境 勇（一期）
山口源等（乙Ⅰ長）齊藤俊次（乙Ⅱ短）草間孝次（乙Ⅱ短）武田 武（乙Ⅱ短）井崎
喜代太（一期）亀山六蔵（一期・アフガニスタン駐在後交換船で帰国）粟田口重男
（2乙）、浜本純一（乙Ⅱ長）、富永紀甫（旧姓中瀬・丙2）等が在籍または勤務した。

大東亜戦争の敗色が濃くなり、本土決戦準備が進められる前後、第八課は第四班と
して業務が縮少^(ママ)され、二十年四月三十日廃止された。⁸⁴⁹

○「この第八課は第二部（情報）の総合課的存在であった。ソ連と東欧圏を第五課、
米・英・独・仏・中東とオセアニア、南方諸域、更に中南米等主として英語圏と独・
仏・蘭諸国を第六課、中国を第七課がそれぞれ当域の情報を担当し、第八課はその情
報の総合処理、宣伝、謀略、防諜が主務であった。日・独・伊三国同盟問題や中国の
汪精衛工作を初め、中国軍閥に対する諸工作が当時この課の重要課題となっていた。
その他在外武官や新設中野学校の管理業務もこの課の業務であった。従ってこの課の
部員は、第五～七課勤務と在外武官の経歴者の強者揃い、^{したたか}中佐ばかりで、無経験の
大尉が直輸入されたのは私が初めてであった。私は差し当り、課の庶務、宣伝、防諜
担任の多田主任の輔佐、大本営報道部員業務を仰せつかって、^(ママ)摺伏徒弟的存在に過ぎ
なかった。尤も多田督知中佐が、革新官僚や在野各界のその系統の有力人士に私を引
き合わせて教導してくれた。後に中野学校で思想戦教育を兼務させられ、^(ママ)除々に成長
したように思う。」⁸⁵⁰

⁸⁴⁸ 「第二期乙種長期学生」の略。『青雲白雲』p.47]

⁸⁴⁹ 『陸軍中野学校』p.148-149.

⁸⁵⁰ 『留魂録』p. 40.

○「尚、当時第二部の構成から明らかなように、ソ連、独・仏、中国が重視され、英・米・南方等の英語圏は刺身のつま的存在で、英・米課の南方班の如きは、中佐部員の下に二、三名の部付将校のみの構成であった。二年後には南方で対米・英・蘭大戦争を予想せられる情勢下でこの態であった。わが八課も、第五、第七課系統特に幼年学校出身のソ・独・仏系統の人材が主力であった。第八課内でも宣伝（思想）戦、防諜業務⁸⁵¹は脇役的で影が薄かった。」⁸⁵²

⁸⁵¹ 「……憲兵をも含めて日本の防諜は、その努力に比し効果の見るべきものがなかった。次にのべるゾルゲ事件でもわかるように、当時の日本の国内防諜態勢は、遺憾ながら、隙だらけの御粗末なものであった。秘密戦といい、対諜報謀略防衛といい、その掛け声だけはやかましかったが、その内容は充実していなかった。第一、そこには一元的に統制される防諜組織はなかった。憲兵と警察、それに軍の秘密組織がバラバラに存在し、バラバラに行動していた。たとえ、そこに指導的役割をもつ連絡機関があっても、それはあくまで連絡機関であって、各々の防諜組織に触れることはなかった。ドイツのゲシュタポやソ連のゲ・ペ・ウといった国家秘密組織にまで徹底することは、国民感情上許されなかったことではあるが、それにしても、各機関が、もっと有機的な連絡をもち、より強い統制下にあったならば、より効果的な成果を期待しえたかも知れない。第二に防諜における科学の導入、これも不十分であった。諜報謀略が科学の粋をあつめて行なわれるものである限りその防衛も高度の科学性を持つものでなければならなかった。だが、日本におけるそれは極めて貧弱であった。（資料第四、加藤少将口演参照 [省略]）。[大谷敬二郎. 昭和憲兵史. みすず書房, 2011, p.379-380]

⁸⁵² 『留魂録』 p. 40-41.

恒石在籍時の関係者

(1) 参謀以上⁸⁵³

区分	氏名	着任	離任	備考
総長	杉山 元	40.10	44.2	
	東条英機	44.2	44.7	兼任
	梅津美治郎	44.7	45.10	
次長	田辺盛武	41.11	43.4	
	秦彦三郎	43.4	45.4	
	後宮 淳	44.2	44.7	参謀総長兼任に伴い2人制
	河辺虎四郎	45.4	45.10	
2部長	岡本清福	41.4	42.8	
	有末精三	42.8	終戦時在籍	
8課長	武田 功	41.9	42.8	
	西 義章	42.8	43.7	
	永井八津次	43.7	45.4 (廃止)	43.10 第4班長
宣伝部員 (参謀)	桑原 長 ⁸⁵⁴	41.3	42.9	
	佐藤不二雄 ⁸⁵⁵	43.	44.1	
	恒石重嗣 ⁸⁵⁶	41.11	45.6	

【恒石赴任時の8課在籍参謀】⁸⁵⁷

班長	門松正一	41.9	42.12	
謀略	高沢脩平		43.10	
	尾関正爾	40.5	45.2	
特殊情報	多田 (外彦?)	39.12	⁸⁵⁸	(陸士43期, 陸大52期)

⁸⁵³ ①日本近代史研究会編. 日本陸海軍の制度・組織・人事. 第3版, 東京大学出版会, 1972.

② (心理5, 90)

⁸⁵⁴ 着・離任時期. [『一武人の波瀾の生涯』「桑原長の年譜」]

⁸⁵⁵ ○陸士43期. 1939-12-01 18師団参謀, 1943-* 参本8課員, 1944-01-07 教総課員. [偕行文庫資料]

○「②『本土決戦 四国防衛軍』上・下 茶園義男著 徳島県出版文化協会 1971.10, 1971.12 上巻 p.215 第五十五軍(四国防衛軍)隷下各兵団・部隊幹部名簿に「第十一師団指[司]令部将校職員表」があり, 参謀 中佐 佐藤不二雄の氏名が掲載されています。陸軍士官学校卒業期別は「43」となっています。それ以上の情報はありません。[中略] 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/>で検索したところ, 『各庁職員抄録』昭和21年 印刷局編 1946 (識別番号:永続的識別子 1052004)の5コマめに, 「中部復員連絡局善通寺支部 業務課長 復員事務官 佐藤不二雄」が記載されています。善通寺は師管区司令部が置かれていた場所で, 本人の可能性がります。」。

[徳島県立図書館回答. 2023-03-03]

⁸⁵⁶ 着・離任時期 (心理4, 236)

⁸⁵⁷ (心理5) / 門松正一. 絞首刑. 国書刊行会, 1982, 奥付 / 『陸軍士官学校』 p.242, / Wikipedia ほか.

⁸⁵⁸ 金子正彦は多田の後任か. [資料「外交伝書使」]

(2) 部付将校・下士官 (例)

区分	氏名	着任	離任	備考
部付	小岩井光夫	40.8	42.2	陸士 46 期
		43.9	44. (?) ⁸⁵⁹	
	小池周一郎	40. ⁸⁶⁰	(終戦?)	憲兵下士官
	山口源等 ^{ひとし}	41.初	41.9	以下陸軍中野学校卒業 の将校 ⁸⁶¹
		44.6.3 ⁸⁶²	45.6	
	谷山樹三郎	41.8	44. ⁸⁶³	
	草間孝次	41.半	43.8 頃	
	浜本純一	43.10	45.6	
	伊野部重珍 ^{しげよし}	44.12	45.6	
一二三九兵衛	45.7 ⁸⁶⁴	終戦時在籍	陸軍省軍務局別班	

⁸⁵⁹ 45 年 6 月第 96 師団参謀 (※). [“小岩井光夫”. Wikipedia. (参照 2022-10-11) / 『駿河台分室物語【資料編】』 p.59] (※) 現地軍による参謀養成か. [本書, p.143. 脚注.405]

⁸⁶⁰ 『陸軍中野学校』 p.139.

⁸⁶¹ ○同上. p. 138, 139, 172, 174, 617, 806, 809, 811, 812.

○『陸軍将校実役停年名簿』(※) (昭和 17 年・19 年 9 月 1 日調) と一部日付の相違があるが、発令以前の赴任もありうると考え、『陸軍中野学校』などの記述を優先した。

(※) 「(名簿の記載は) 成績順です。」. [『沈黙のファイル』 p.334]

⁸⁶² ○「マニラの司令部に移ってからひと月後の 6 月 3 日に、大本営陸軍幕僚付け勤務の発令を受けました。しかし、実際に帰国して東京の参謀本部に着任したのは、7 月 10 日でした。[中略] 東京では、市ヶ谷の参謀本部勤務でしたから、戦争末期でも肉や酒に困ることはありませんでした。」. [長崎暢子・田中敏雄・中村尚司・石坂晋也編. 資料集 インド国民軍関係者証言. 研文出版, 2008, p.456]

○山口は 44 年初めには東京で勤務していたようだ。(発令前の長期出張か?) .

・池田徳眞：44 年 2 月, 山口源等大尉らの九州の捕虜収容所訪問に同行している. [『日の丸アワー』 p.123 / 『駿河台分室物語【本編】』 p.213-223]

・浜本純一：「昭和十九年三月末、私は結婚を機に「駿河台」監督将校の任を、中野学校で一期先輩に当たる山口源等大尉と交代して貰った。」. [『青雲白雲』 p.116]

⁸⁶³ 第 8 課の業務を浜本純一に引継ぎ、第 6 課 (米班) を経由して 44 年北部方面軍へ転出. [『陸軍中野学校』 p.740 / DVD 『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』]

⁸⁶⁴ 「昭和二十年七月一日の機構改正で、この [米国及び米軍向け] 俘虜放送は陸軍省軍務局別班 (大本営報道部) に業務が移管されたが、それから終戦までの一ヵ月半ほどの間、陸軍省軍務局付、俘虜放送係の主任として、一二三少佐が勤務した。」. [『陸軍中野学校』 p.140]

陸軍中野学校

○「この第八課は、陸軍中野学校が参謀本部直轄となる昭和十六年には、中野学校を所管した。」⁸⁶⁵

○「そしてこの学校設立の目的である諜報、謀略、宣伝、防諜など秘密戦全般の教育については、参謀本部第二部に在職する参謀将校がそれぞれの専門分野に従って教官を勤めた⁸⁶⁶。これらの参謀連中は、いずれもが在外武官、特務機関員、現地軍情報主任参謀などの経験者で、いふなれば陸軍部内における秘密戦のエキスパートと自ら任じていた。もともと陸軍部内の教育機関はすべて教育総監部に属していた中で、陸軍中野学校は陸軍大学校とともに例外的に参謀本部の直^(マ)括下にあった。[中略] ...この学校の卒業生は、将来参謀本部第二部の「私兵」として使われるように運命づけられていた。従って学校における師弟関係が、将来そのまま実務の面にまで延長される仕組みとなっていた。」⁸⁶⁷

○「参謀本部の情報関係は全部中野 [学校卒業生が担当]。陸大出の中佐・大佐もいて一部一緒に仕事をしたが、[彼らは] 単なる情報関係ではない。」⁸⁶⁸

参謀本部の傘

○特高係

「[44年4月まで] 東方社のあった小石川は古くからの山の手住宅街で、江戸時代からの名刹伝通院が近くにあった。ここから春日町に下る市電通りに富坂警察署があり、そこの特高係が東方社の周辺をうろうろしているという噂が、このあたりの商店の人たちの間に流れた。しかし裏口営業を続けている外食券食堂や和菓子屋などにとって、東方社の社員は上得意であった。長髪で革のジャンパーやツイードの上着など着て歩いている会社員は、このあたりにはあまりいなかったが、軍の関係者だったら闇をやっても安全だろうという、庶民のカンが働いたのかもしれない。だから、こういう話はつつ抜けだった。

だが特高係は聞きこみはやっても東方社へは入ってこなかった。そのころ写真部の暗室主任だった風野によれば、参謀本部から「あの会社に立ち入ることはまかりならん」という通達が警察に入っていたからだという。

元ソ連共産党員という肩書を持ち、シベリアから帰国した勝野金政をはじめとして、しょっぴいて叩けばいくらでも埃の出そうなのが勝手に出入りしており、それを指をくわえて見ていなければならなかった警視庁の特高係にとっては、さぞ口惜^(マ)しかったことであろう。庶民から鬼のように恐れられていた特高といえども、軍の、それも参謀本部の関係とあっては、どうにも手出しができなかったのである。⁸⁶⁹

⁸⁶⁵ 『陸軍中野学校』 p.143.

⁸⁶⁶ 「恒石重嗣中佐 (44期・中野学校教官として宣伝を担当)」。 [同上. p.806]

⁸⁶⁷ 『青雲白雲』 p.46.

⁸⁶⁸ DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』

⁸⁶⁹ 『戦争のグラフィズム』 p.124-126.

○憲兵隊

「この [45 年 3 月 10 日の] 朝、身を挺して東方社を守った海老原らは、うれしさのあまり、「東方社万歳！」と大書して玄関に貼りだした。これを見た近くにある九段憲兵隊司令部の憲兵が、「東京が焼かれたのに万歳とは何事か！」と血相を変えて飛びこんできて、一時はどうなることかと緊張したが、中島 [健蔵] や山川 [幸世] がとりなして、なだめて帰した。警察同様憲兵隊も、眼と鼻の先にある東方社が、参謀本部の傘の下にあって、うさん臭い左翼的人間が出入りするのを快しとせず、かねてから眼をつけていたのだった。」⁸⁷⁰

○改組

「[45 年] 五月から六月にかけて、参謀本部の改組に関連して、東方社の立場に大きな変動があったようだ。当時私たちが聞いたところでは、東方社の所属が参謀本部から離れて、東部軍司令部の管轄になるということだった。そのために一旦解散してやめたい人はやめ、続けたい者は残って次の指示を待つということになった。[中略] 国司メモの七月二十五日の欄に“菊池渡辺送別”とあるが、写真部の菊池は戦後まで残って原爆写真を撮影している。几帳面な国司だったが、この時期のメモは乱れがちで、曖昧な部分が多くなっている。これは推測だが、特高や憲兵隊に狙われていた人の中には、東方社が参謀本部から見離されては、もはや身の安全は期待できないと判断して、黙って自身で別の道を探して去った人もいたのではなかろうか。」⁸⁷¹

⁸⁷⁰ 『戦争のグラフィズム』 p.261.

⁸⁷¹ 同上. p.280-281.

参八会



図 87 参八会寄せ書き

1980-05-10

提供：稲田明子（署名欄上段右から9番目の勝野金政の長女）

鰻の絵は那須良輔か。（長谷川中央の名も見える）

なお、77年の時の会長は同じく漫画家の松下井知夫。[『特赦』 p.206]



図 86 参八会記念撮影

1980-05-10 於霞会館

提供：稲田明子

しえ シェンク軍曹

「……駿河台に来た捕虜の中にオランダ人のニコラス・シェンク (Nicholas Schenk) がいたが、昭和三六年四月二〇日の駿河台会 (対敵宣伝に従事していた連中の懇親会) に彼を招待している。そのミーティングの際、彼は捕虜となって以来馬鹿を装っていたので、われわれは放送には利用できないと思い、もっぱら炊事係をやらせたが、巧に欺されていたことが判明した。彼は戦後間もなく文化キャンプを訪れ、西村氏のお嬢さん (五女のナナさん) と親しくなり、ついに結婚にまでこぎつけ、今では子供ももうけ、日本では婦人用下着類の製造などの事業をやって成功し、現在サンフランシスコ南方のモンレーで余生を送っている由。彼は後述するように東京ローズ裁判に弁護側証人として出廷し、駿河台では食糧不足のため猫まで食ったなどと証言し、自分が炊事係りで他の者の食糧をせしめていたことは頬かむりしている。また秘かに日記を書いていたそうであるが、戦後の反逆裁判を予見してのこととすれば随分手廻しのよいことである。」(心理 199)

「仮りにもしそれに近いような虐待が行なわれていたとすれば、私はどうの昔に刑場の露と消えたに違いないし、少なくとも一〇年以上の服役を強いられたであろう。おそらくこれは東京ローズ裁判の際証人として立った炊事係のオランダ人捕虜シェンクの証言に基づく記事と思われるが、彼こそ前述したように、クリスマス用の牛肉をせしめた張本人であり、常々炊事係の役得をフルに得ていたに違いない。猫はそれをカバーするためのデッチ上げであろう⁸⁷²。」(同上. 224)

「某有力誌の最近号に既述のオランダ捕虜シェンクの日記によると放送の中へ隠語を入れたとある。しかしそれは原稿の段階ですぐ露見することであり、原稿に無い文句を放送すれば後述するように、スタジオでの監査のほか駿河台でも電波を二重に監査しているので、ただちに判明するわけである。」(同. 212)

○池田徳眞

「じつをいうと、その時少佐と私の二人の間で、われわれの放送に使うか使わないかで四～五人論議した人があった。その一人が、オランダのシェンク軍曹で、これは私が騙されて大失敗をした話である。私は彼を、不採用の方に入れていた。彼の戦前の職業は、例の表によるとバタビア (いまのジャカルタ) 放送局の放送員」となっていた。恒石さんはそれを見て「放送員だったのだから使いましょうよ」と主張した。私は「彼は馬鹿ですよ。バタビア放送局なんて程度が低いんですね。うちの放送には不要ですよ」と反対した。恒石さんは、彼が捨て切れず「コックとして、入れて置きましょうよ」と言うので、私も同意した。それでシェンクは駿河台にきて、たまには日の丸アワー放送に参加したが、終戦までコックとして働いていた。

⁸⁷² 資料「文化学院／迷い猫」

戦後も十数年たった、昭和三十六年四月二十日に、目黒の雅叙園で駿河台会（駿河台分室にいた男女職員の会）が開かれたときに、シェンク氏夫妻が出席した。シェンク氏が戦後結婚した夫人は、文化学院の院長西村伊作氏の令嬢ナナさんである。私がシェンク氏と話してみると、戦時中ののろまな同氏とはまるで違い、頭の回転の早いすばらしい人である。

それで「シェンクさん、あなたはずいぶん変わったね」といった。彼はそれに答えて「ミスター・イケダ。じつは私は馬鹿を装っていたんですよ」といった。「エーッ」と、私は驚きの声を上げたが、そのあと何を言ったか憶えていない。くやし紛れに一言いえば、あの時に私が恒石さんに、いま一度シェンクさんを使うことを強く反対すれば、シェンクさんはナナ夫人には出会えなかったんですぞ、ということである。」⁸⁷³

○浜本純一

「[43年12月の駿河台分室でのクリスマス・パーティが終り] 池田氏が帰って半時間も経ったころ、遠慮がちに私の部屋の扉をたたき音がする。英軍マクノートン中尉とアメリカ軍カルプフライシュ中尉のときならぬ訪問であった。二人の将校の話聞いてみると、数日前に入手して冷蔵庫に保管してあったクリスマス用牛肉を、炊事係がちびりちびりと盗み食いしたため、今晚の食卓に上ったビフテキは予定の三分の一ほどが小さくなっていったという。それがパーティ終了後、捕虜の間で問題となり、このままでは盗み食いした炊事係の兵達が同僚のリンチを受けかねない険悪な状態にあるという。事態を心配した将校代表が恐る恐る私のところまで内報にきたわけである。

たびたびいうが「食べること、寝ること」しか楽しみのない捕虜の生活で、食物の恨みは常人の想像もおよばないほどに深いものである。ましてや米、英、濠、蘭四か国の捕虜の寄り合い世帯である。このまま放って置けば捕虜の間で確かに私刑の危険もある。しかし、大幅な自治制を与えている監督将校としては、盗み食いをした捕虜が同僚からビンタの一つや二つ食うぐらいは見て見ぬ顔をする方が得策かも知れない。だが、チームワークを要する共同作業の捕虜放送のことを思えば、こんなことが原因となって彼らの間にヒビが入っては元も子もなくなる。私は二人の将校に全員緊急集合するように命じた。炊事に関係しない将校は列外として、下士官、兵一同を一行横隊に整列させた。「牛肉の盗み食いをした者は潔ぎよく手を挙げろ」と私は余分な註釈抜きでいきなり全員に鋭い眼を向けた。私はこの元凶がオランダ兵のシェンクであろうと直感していた。いままでの二か月ほどの間にも、自ら炊事係を希望して常任当番のような役廻りを買って出ているこの男が、炊事中にうまそうなものを片っ端からつまみ食いするという非難がたびたび私の耳にも入っていた。しかし、「炊事当番のような雑役には多少の役得は仕方なかろう」と私は軽く見逃してきた。ところが、本日の場合は多少趣きを異にする。

私が再度つまみ食いの犯人の自首を督促すると、観念した四名が渋々と右手を挙げた。ところが、私のマークするシェンクは空とぼけたままである。「シェンク！」私が語気を強めて睨みつけると、このふてぶてしい男もやっと五人目に右手を半分ほど挙げた。

⁸⁷³ 『日の丸アワー』p.24-26.

これは前の話になるが「駿河台」に収容した捕虜達の気分一新を図るため、私が大森捕虜収容所にかけて新しい被服と交換して貰ってやったことがある。このとき「駿河台」の内庭で新しい被服を体の大きさに合わせて分配している最中に、隣の男の靴下を失敬して問題を起こしたのもこの男であった。

「牛肉を盗み食いして同僚に与えた不利益はいまさら償う方法もない。しかし不心得な者の盗み食いはそのまま許すわけにもいかない。お前達の中の私刑は絶対に許さないが、その代わりに今後の戒めとして俺が懲罰を科する」と告げたうえで、五名を一步前に進み出させて、一人一発ずつかなり威力のあるビンタをくれてやった。元凶と覚しきシェンクが運悪くも一番最後の順番となったので、この男にはさらに強いパンチを一発おまけに見舞ってやった。

これで牛肉騒動は一件落着し、私が「駿河台」の任務を離れたあとは、私の記憶の中からもこの事件はすっかり消えてしまっていた。ところが、敗戦後になってこのときの捕虜殴打事件が問題化した。「俘虜虐待によるB級戦争犯罪人」容疑者として私が進駐軍の追及を受けることになったのである。敗戦の翌年春、私はそのころ泣く兒も黙ると怖れられたGHQへ呼びつけられ、憲兵中佐から四日半にわたって峻烈な取り調べを受けた。敗戦後の戦犯裁判の判例によれば、捕虜一人を殴れば実刑二年というのが大体の相場であった。まかり間違えば重労働十年を喰う危険に私が曝されたのである。

「駿河台」で働いた捕虜達は昭和二十年八月、日本の降伏と同時に解放されてそれぞれ出身国軍に復帰した。ただ、この捕虜達は一般の捕虜収容所から帰った捕虜とは少々立場が異なる。例え如何なる事情があったとしても、日本軍に協力してラジオ放送に従事したということが、彼らにとっては大きな負い目となった。現に濠洲軍のカズンス少佐、アメリカ軍のプロボー軍曹は本国に復員してから、対敵協力の反逆者として裁判に付せられている。

彼らは自らの保身策として「日本軍の暴行、脅迫により、生命の危険を感じたのでやむなく日本側に協力した」旨を一様に申し立てた。前述の英軍少尉ウィリアムス⁸⁷⁴が当然処刑されたものと思い込んでいた駿河台の捕虜達は「ウィリアムス少尉のあとを追いたくなかった」とも強調した。さらに「牛肉の盗み食い」事件で、同僚のリンチを防ぐために私が科したビンタ刑まで、捕虜放送に協力させるための暴行、脅迫であったと主張したらしい。

私と憲兵中佐の捕虜虐待問答は延々として四日半におよんだ。私は「原子爆弾を広島に投じて無辜の市民二十万人を殺傷したB29の飛行士がアメリカでは最高勲章を貰い、大多数の捕虜の意を代行して処罰をした私が犯罪者になるのか。正義人道の美名を唱えながら、それこそ勝者が敗者に対する虐待ではないか」と捨て身で逆襲した。

昭和十八年十二月二十四日夜の「牛肉事件」は、日本が独立を果たした昭和二十七年までの十年間、私の身辺につきまとして放れなかった。」⁸⁷⁵

⁸⁷⁴ 本書「2.3.12 駿河台分室訪問／ウィリアムズの拒否事件」

⁸⁷⁵ 『青雲白雲』p.110-113.

じゃジャズ

○生演奏

「戦時中、大手を振ってジャズのできる場所が一か所だけあった。日本人が聞くことを許されなかった放送。ラジオ・トーキョーと呼ばれた、NHKの海外放送である。

[中略] 昭和十二年入社から終戦まで、国際部の演出部員として、海外放送の音楽にたずさわり、ジャズメンの出演交渉を行ってきた柴田慶（現貿易商勤務）は、開戦までのジャズ放送の経過を、こう語る。「それまでは対象が中国でしたから、ジャズにはそれほど力を入れていませんでした。ジャズをぼつぼつ取り上げはじめたのは、昭和十四年ごろからですね。日中戦争のはじまったあと、ジャズに対する自粛を率先して行なったのはNHKですが、海外放送にもその影響が及びそうになったとき、国際部長の頼母木〔真六〕さんが、対外的にはジャズが必要だと突っぱねた。比重は少なかったが、コンスタントに流してきてはいたんです」柴田の兄はジャズ・ピアニストの柴田喬。彼自身も熱心なジャズ・ファンだった。開戦後、放送の主力はアメリカ向けに移った。この時点で、第二送信（ニューヨーク、シカゴ他）は三時間三十五分、第三送信（ロサンゼルス、ハワイ他）は、四時間三十五分に、放送時間が延びている。「国策宣伝に力をそそぐことは当然だが、とにかくアメリカ人にラジオを聞いてもらわなければはじまらない。それには、ジャズを使うのがいちばんいいだろう。そんなことで、開戦後は連日のようにジャズを流しましたね」ジャズはいわば、リスナーを獲得するための“エサ”と考えられたのである。当初は、レコードが主体だった。しかし、NHKの資料室にはアメリカ音楽のレコードが不足していた。街のレコード屋では思うようなものが手に入らないとあって、局に働いていた二世から駆り集めたが、まだ足りない。局員を上海に送りこんで、レコードを集めたこともあった。生演奏を、再び放送で流そうという企画は、このレコード不足をおぎなうためでもあったようだ。

[中略] 内幸町の放送会館の一階奥にあった三十畳ほどの広さの第五スタジオ、ここから「ゼロ・アワー」と、ほとんどのジャズ番組が放送された。ガラス張りの“金魚鉢”のなか、調整卓の前にはミキサーと番組担当者がある。脇にはレコード・プレイヤーとアテネーターと呼ばれる放送用機械。ガラスの向こうのスタジオにいるのは、デスクに置かれたマイクを前にしたアナウンサー。捕虜が放送するときには、監視役の二世アナウンサーが、デスクをはさんで立ち合った。コロンビア・オーケストラのメンバーをはじめ [中略]、ジャズメンたちは入れかわり立ちかわり演奏をした。「国力と余裕を見せつけるという意味でも、腕のいいジャズメンをよりすぐった。戦前派の一流どころで、この海外放送に出なかった人は、ほとんどいない。捕虜が放送に関わっているときは、監視と称して憲兵隊がスタジオにやってきた。ところが、いかめしい顔をして腕組みしているのに、靴の先がリズムを取っている。仕事のうえでは邪魔な存在だったが、この赤坂分隊の憲兵には英語のわかるのが多く⁸⁷⁶、捕虜にタバコを与

⁸⁷⁶ 駿河台分室へ東京憲兵隊から派遣されていた大山勉憲兵：「また時には大山憲兵の部屋にいて、話し込むこともあった。彼の部屋をみると、これまた不思議である。フランス

えたり、内心ではジャズを楽しんでいる様子だったり、憲兵にもスマートなのがいるんだなあと、少しばかり感心した覚えがあります。」(柴田慶)

弟を通して番組の内容を多少知っていた柴田喬のような例外を除けば、ほとんどのジャズメンは、自分の演奏がどこでどのように流されるのか、知らなかったようだ。「ビギン・ザ・ビギン」や「キャリオカ」、グレンミラー楽団の曲などを、多い時で週に三～四回、海外放送で演奏したことがあるというコンデは、「好きなジャズを、誰にも気がねなくできるのがなによりも楽しみだった。海外放送だということは、もちろん知っていたが、“対敵謀略ウンヌン”は、あとで聞いたことですよ。当時は、ただジャズができるとそれだけがうれしくて、捕虜がいたかどうかなんて……記憶はないなあ」と首を傾げる。」⁸⁷⁷

○カズンズ

「レコードを使った[42年秋開始の]レイズの番組とは別に、カズンズも音楽番組のアナウンスを担当した。「あれは確か、カズンズだったと思う。ヒゲをはやした背の高い捕虜で、僕がソロで演奏したとき、曲目解説をして『日本の中堅どころのポピュラー・ピアニスト』と紹介されたのを覚えている。落ちついた話しぶりで、英語は硬いなどという感じを受けたが、とても博識だった。もう二人のフィリピンから連れてきた捕虜も見学にきて、スタジオの片隅でじっと聞いていた」このとき、柴田喬は「ディー・パープル」「マンハッタン・セレナード」「セントルイス・ブルース」などを弾いたというが、弟の慶が「その番組は『サンデー・プロムナード・コンサート』でしょう」と兄の記憶を裏付ける。「カズンズには、よくアナウンスをやってもらいました。あの人もジャズが好きでね。アナウンサーのローテーションがあったから、勝手に使うというわけにはいかなかったが、頻度は多かったと思う。そのほか、一日一回『ムーンライト・セレナーデ』をテーマ曲にして、生演奏やレコードを流したジャズ番組には、終戦までつき合ってもらったし、藤原歌劇団の『ローエングリーン』の帝劇公演に連れて行って、放送用のスクリプトを書かせたこともあります」カズンズにとっては、進んで協力した海外放送ではない。満潮の説得に根負けした形で関わりはじめて放送の仕事だったが、ジャズ番組のアナウンスは、好んで引き受け、楽しそうにやっていたという。強いられることの苦痛の少ない、息抜きのひとときだったのだろう。」

878

語の本がずらりと並んでいて、彼自身はゾラやモウパッサンの小説をフランス語で読んでいる。それは、私たちの憲兵というイメージとだいぶ違うので聞きただしてみると、彼の言うには「私は仏文卒で、フランス語の勉強を命じられているのです」とのことであった。[『日の丸アワー』 p.74]

⁸⁷⁷ 中澤まゆみ「ダイナはもう聞こえない」p.192-193, 198-199.

⁸⁷⁸ 同上. p.196-197.

しや 上海派兵

○第12連隊

「日本は満州に農業開拓民を移住させるなど、満州支配をより安定させるため、華北の分離政策を進めていた。昭和十二年（一九三七）七月七日夜、北京郊外の蘆溝橋で日中両軍の衝突（蘆溝橋事件⁸⁷⁹）がおきると〔中略〕戦火は揚子江流域にも波及し、八月十四日、日本は内地二個師団の上海派兵を決定した。ただちに松井石根大将を司令官とした第三（名古屋）・第十一（善通寺）師団を基幹とする上海派遣軍が編成された。丸亀歩兵第十二聯隊は第十一師団とは別編成で、参謀総長直轄として歩兵第十旅団長天谷直次郎少将麾下の天谷支隊基幹部隊として行動することになり、安達二十三太佐が指揮をとったことから安達部隊とよばれている。

第十一師団は八月二十三日夜明け前、上海北方の川沙鎮に強行上陸、羅店鎮に向った。一方、安達部隊は一旦朝鮮半島に沿って北上し、黄海を迂回しながら揚子江河口沖に赴き、九月三日、上海北方の呉淞^{ウオソン}に敵前上陸し、多くの犠牲者を出しながら宝山城へ突入、つづいて月浦鎮、羅店鎮に至り、休む暇なく揚州^{ヤンチョウ}・南京へと向った。犠牲者はおびただしい戦死者のほか、炎天下、コレラ病によって倒れていく者もあった。コレラを心配して生水が飲めず、コウリヤンを刈って水を求めたい（四国新聞社著『昭和五十年史』）。

安達部隊は年末、攻略した揚州市の警備にあたり、一か月ほど後、既に日本軍が占領していた南京の警備に移り、のち十三年三月、坂出港に凱旋した。しかし、全面戦争に発展した戦火はしずまることなく、その後の歩兵第十二聯隊は、同年十月満州に派遣され、二十年春まで北方の守りについた。」⁸⁸⁰

⁸⁷⁹ 参謀本部 8 課に所属した小岩井少佐はこの事件の当事者である：「この小岩井少佐は、参謀ではないのだが、陸軍部内では有名な人であった。というのは、彼は日中戦争の発端である北京郊外の蘆溝橋事件の当夜、現地で演習をしていた日本軍の中隊長〔支那駐屯歩兵第一連隊通信班長〕で、功四級の金鷄勲章をもらった軍人だからである。そして〔40年8月参謀本部付（第八課第四班・宣伝補佐）となり〕、太平洋戦争がはじまると〔42年2月南方軍司令部付となり、同年8月少佐に進級、歩兵第41連隊第2〕大隊長として大隊を率いて、ニューギニアの北岸のブナから前人未踏のニューギニア島中央のオーエンズ・スタンレー山脈を越え、オーストラリア側の港であるポートモレスビーを眼下に見るところまでいったのだが、他の戦況が思うように進まないで、命令により再び山越えをしてもどってきた勇士である。』、『日の丸アワー』p.43／駿河台分室物語【資料編】p.59

⁸⁸⁰ 香川県編、香川県史 第六卷 通史編 近代Ⅱ、香川県、1988、p.640～641。

じゆ 重慶向け放送

「

極秘 第九回対重慶側向集中放送打合会議報告

大本營陸軍報道部主催ノ首題打合会議概要
左記ノ通及報告候也

会長（宛）

昭和十六年十一月十二日起案 [スタンプ] 決裁昭和 16 年^(マ)12 月^(マ) 29 日

- 一、 開催日時 十一月六日午前十時より開催
- 一、 場所 於陸軍省第一会議室
- 一、 出席者 大本營陸軍報道部
小川少佐. 富永少佐. 桑原少佐⁸⁸¹. 小岩井大尉
武田中尉 (部長⁸⁸²ハ課長会議ノ為欠席)

海軍省

一二三囑託

日本放送協会

佐藤国際部第一課長. 澤田第二課長
横山主事. 太田書記 (情報局囑託)

東亜放送協議会事務所

小 倉台放派遣員. 橋 本朝放派遣員
野 村満電派遣員. 宮 内華北駐在員
長谷川中放派遣員. 長笠原日放派遣員

⁸⁸¹ 研究家・坂本昇二郎：「会議の開催日は 41 年 11 月 6 日だが、『一武人の波瀾の生涯』の年譜によれば、桑原長少佐が大本營陸軍報道部部員を兼ねるのは 41 年 11 月 12 日から」

⁸⁸² 大平秀雄. [本書「2.2.1 大本營発表の改善」]

秘

記

一、方針

日華基本条約⁸⁸³ノ成立記念日前後ヲ期シ従来ノ方針ニ基キ特ニ被占領地ニ於ケル実況ヲ重慶側ニ強烈ニ反映セシメ以テ抗戦無為ヲ感得セシム

二、要領

一、期間 自 十一月二十八日

至 十二月 四日

二、前回ニ準シ十一月六日午前十時ヨリ大本営報道部ニ於テ細部ノ連絡及打合ヲ実施ス

三、其ノ他ハ概ネ前回ニ準スルモノトス

(付) 放送実施課目予定表 (次頁)

期日	放送課目	担任	対 稱	摘要
28/11	一、ニュース 二、国民政府一ケ年ノ成果 三、日支提携ニ於ケル日本ノ眞意	各局 中支 東京	全支華僑 全支華僑 全 支	一、予定ハ必要ニ応シ多少変更スルコトアリ 二、本計画ハ全般的事項ノミトス
	[11/29~30、12/1~4 省略]			

」 884

⁸⁸³ 「日華基本条約 (につかきほんじょうやく、英: Japan-China Basic Relations Treaty) は、1940年11月30日、占領下の南京において大日本帝国と中華民国汪兆銘政権の間で調印された条約である。正式名称は日本国中華民国間基本関係ニ関スル条約。この条約により、日本 (第2次近衛内閣) は、汪兆銘による南京国民政府を中国中央政府として正式に承認した。両国の間に東亜新秩序に基づく互惠関係を結ぶことを謳い、永久の善隣友好 (第一条)、共同防共 (第三条)、共同資源開発・経済提携 (第六条) などの実を上げることが強調された。また日清通商航海条約などの中国側が長年廃止を求めていた不平等条約も正式に破棄されたが、同時に治安維持の名目として日本軍の蒙疆及び華北への駐留を認めさせ (第三条、第四条)、附属議定書では中国領内における日本軍の戦争遂行の許可 (附属議定書第一条) を与えるなど、実際的には南京国民政府を日本の傀儡政府とする合法性を与えるための条約でもあった。なお同日、主に満州国と汪兆銘政権の関係を結ぶために、日本、満州国、汪兆銘政権の三国間で同趣旨の日満華共同宣言も公布されている。」

["日華基本条約". Wikipedia. (参照 2022-08-24)]

⁸⁸⁴ NHK 放送文化研究所蔵.

しゅ 主婦の友社

○同社は神田区甲賀町にあった木造二階建ての花柳病の病院を買収、大林組が改修して23（大正12）年6月移転、「...現在の千代田区神田駿河台一丁目で、主婦の友社の本館の敷地になっているところである。」⁸⁸⁵

○この新社屋が3か月後関東大震災のため全焼したため仮社屋に移り、「駿河台の新社屋に引っ越したのは、大正十四年十一月八日であった。社員の数は〔仮社屋の〕関口町時代の四十人から、二倍半の百人にふえた。この新社屋は、大震災後の東京で、本格的な復興建築の第一号であった。地上四階、地下一階の鉄筋コンクリート建築で、とくに耐震と耐火には最新の注意が払われていた。」⁸⁸⁶

○「昭和十三年に新しく建築された社屋は、大正十四年建築の旧社屋と並んで、しかも旧社屋の外観と同じ基調のデザインで、左右対称形に建てられた。」⁸⁸⁷

○戦争末期⁸⁸⁸

- ・ 44年 1月5日 新年会。岡本勇応召、平手敏夫、藤井二郎応徴
- ・ 2月26日 社の空襲対策がきまる
- ・ 4月22日 戦死した上杉久治の遺骨帰る
- ・ 5月20日 情報局に社の空襲対策を提出する。広井利美応召
- ・ 11月25日 B29の東京爆撃がはじまり、地下の第二編集室で執務
- ・ 45年 1月22日 防衛総司令部矢野常雄参謀講演
- ・ 3月10日 下町方面大空襲、社員で罹災したもの八名
- ・ 5月12日 「主婦の友」五月号発売、この月より満州版は中止となる
- ・ 7月26日 憲兵隊が社屋の一室を徴発使用する



図 88 主婦の友社新館（左の白い建物）
出典：『主婦の友社の五十年』 p.268.

⁸⁸⁵ 主婦の友社編. 主婦の友社の五十年. 主婦の友社, 1967, p.97-99.から抜粋・引用.

⁸⁸⁶ 同上. p.104,122. ”.

⁸⁸⁷ 同. p.268.

⁸⁸⁸ 同. p.333-335. (「社内日誌から拾ってみよう」から抜粋)

しよ 昭和八年陸軍特別大演習：福井

「1933年（昭和8）10月、県下を中心に実施された陸軍特別大演習は天皇をはじめ皇族や首相・閣僚、外国武官や旧藩主らが多数来県し、福井市内に設けられた指定場所での見物客だけでも15万人（当時の県人口62万人）にのぼる大きな出来事でした。そのようすはこの年開局したばかりの地元ラジオ局（現在のNHK福井）から全国へ実況中継されました。〔中略〕

1933年（昭和8）の特別大演習は第九師団（金沢市）と第十一師団（香川県善通寺市）を中心に約2万人の将兵が南北軍に分かれて対抗、戦闘を行う想定で福井県および石川県下で行われました。おりしも第九師団・第十一師団は前年の第一次上海事変に動員された部隊でした。

大演習は農地など私有地上で実施されるため、火災の恐れのある場所での発砲は禁止されていましたが、田畑への損害があれば、市町村長と協議して賠償することが規定されていました。天皇が直接演習を統括する特別大演習は日清戦争後の1900年（明治33）から毎年実施されており、将兵の演習への参加機会を増やし「地方人民をして尚武忠勇の心を喚起」することが意図されていました。

しかし、第一次世界大戦後には戦略的な意義は失われ、後者の目的が大きくなっていったと考えられます。

他方、国道改修等による一時的な雇用拡大や観光収入が大きな経済効果をもたらしました。演習後には天皇は藤島神社・福井精練加工（株）・福井師範学校・福井高等工業学校・気比神宮などに行幸されました。」⁸⁸⁹



図 89 大演習参加将校の記念写真

1933-10-26（陸軍参謀本部陸地測量部の撮影と考えられる）

撮影場所：講評会場となった福井高等女学校

（現在の県立高志高校）校庭

福井県文書館提供

資料群番号 10076 資料番号 01192

資料群名 野尻喜平治家文書（陸軍特別大演習集合写真）

⁸⁸⁹ “80年前のふくいのがた：陸軍大演習の写真と地図から”。福井県文書館。（参照 2023-02-22）。

じょ 叙 任

○恒石の叙任

「授爵、叙任及辞令 昭和十六年八月九日 ^{しょう}正七位 恒石重嗣」⁸⁹⁰

○階級と位階

「国会図書館のサイトから『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿 昭和 11 年 9 月 1 日調』で階級と位階⁸⁹¹の関係を調べると以下の通りでした。

大将	正三位、従三位
中将	正四位、従四位
少将	従四位、正五位
大佐	正五位、従五位
中佐	従五位、正六位
少佐	正六位、従六位
大尉	従六位、 <u>正七位</u>
中尉	<u>正七位</u> 、従七位
少尉	従七位、正八位

例えば、少佐は従六位からですが、大尉にも従六位がおり、昇任すると直ちに位階が上がる訳ではなさそうです。

ところで、正七位は上表から見ますと大尉か中尉になります。昭和 19 年の実役停年名簿の恒石氏の部分のコピーが手元にないので、少佐任官時期⁸⁹²が分かりませんが、『日本陸海軍総合事典』の「主要陸海軍軍人の履歴」に載っている陸士 4 4 期の瀬島龍三等 1 2 名の少佐昇進時期を調べますと全員昭和 1 6 年 1 0 月となっています。(うち 9 名が陸大の 5 1 期(昭和 13 年 12 月卒)から 5 5 期(昭和 16 年 1 月卒)、恒石氏は 5 3 期(昭和 15 年 6 月卒))

因に、昭和 1 6 年 8 月に少佐に昇進しているのは陸士 4 3 期の人達でした。以上から、恒石氏が正七位に叙されたのは大尉のときの可能性があると思います。」⁸⁹³

⁸⁹⁰ ○官報第 4383 号 1941-08-16. p.523. [国立国会図書館デジタルコレクション. (参照 2023-04-02)]

○「昭 20 勲四等瑞宝章」. [本書. p.232. 脚注.624]

⁸⁹¹ 【位階】「② 栄典の一種。国家に勲功・功績ある者に与えられる位。文位に対する武位で十二等の勲位がある。明治憲法下では十六階（正・従に分けて一位から八位まで）と八等、新憲法後は死没者に対する追賜・昇叙と生存者叙勲がある」. [『広辞苑』]

⁸⁹² 「なお恒石重嗣氏は、昭和 16 年 10 月 1 日付で少佐に進級しています（参照：「陸軍将官実役停年名簿 昭和 19 年 9 月 1 日調」当館所蔵）. [防衛研究所戦史研究センター史料閲覧室相談係回答. 2023-04-07]

⁸⁹³ 坂本昇二郎. E メール. 2023-04-02.

○浜松市立中央図書館回答

「1. 恒石重嗣氏と同様に、国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>) にて氏名を入力して検索しましたが、膨大な件数がヒットしましたので、「瀬島龍三 正七位」で検索し直したところ、だいぶ絞ることができました。

1941年11月14日の「官報」⁸⁹⁴に掲載された辞令に『陸軍大尉⁸⁹⁵正七勲⁸⁹⁶六瀬島龍三』という記述がありましたので、よろしければご確認ください。

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2960955/1/27> (27コマ目、左ページの中段)

2.3「厚生省五十年史 記述編」厚生問題研究会 1988年 p1477～『叙位叙勲業務の経緯』より叙位の制度は在官者が一定の官等に進級すると、その官等に相当する位が授与される制度、とあります。大正15年に制定された「位階令」に基づき、例えば中尉に進級すれば従七位、大尉に進級すれば正七位の官位が与えられるシステムだったようです。官位が与えられることによるメリット⁸⁹⁷については、それについて言及している資料が見つかりませんでした。詳しくは「厚生省五十年史 記述編」をご確認ください。また、叙勲・褒章関連の専門店「銀座明倫館」

<https://meirinkan.co.jp/about-jokun-hosho/joijokun.php> のホームページにも簡潔にまとめられていましたので参考までにご紹介いたします。

以上です。「軍人 位階」のキーワードで Web 検索すると、階級の一覧表などもヒットしますので（個人サイトですが）お試しください。⁸⁹⁸

⁸⁹⁴ 「官報 昭和十六年十一月十四日 第四千四百五十六号 金曜日 辭令二 ◎ 紀元二千六百年祝典記念章授與 (※)」。[“紀元二千六百年祝典記念章令” e-GOV 法令検索. (参照 2023-04-04)] (※)「昭和十五年勅令第四百八十八号 紀元二千六百年祝典記念章令 第三条 記念章ハ左ニ掲グル者ニ之ヲ授与ス 一 昭和十五年紀元節祭ニ召サレタル者 二 紀元二千六百年式典ニ招カレタル者 三 祝典ノ事務及祝典ニ伴フ要務ニ関与シタル者…」

⁸⁹⁵ 「1871年9月24日(明治4年8月10日)には明治4年太政官布告第400号が施行され、従来の官位相当制は廃止されて新たに15階からなる「官等」が定められた。このことで位階制と官職制は分離したが、位階制が廃止されたわけではなく、その後も官吏をはじめとした諸人に位階は与えられ続けた。また1875年(明治8年)4月10日の詔により、勲等賞牌制(勲等と功級からなる勲位制、勲章制度)が定められ、位階制に併せて栄典としての役割を分有することとなった。」。[“位階”.Wikipedia. (参照 2023-05-08)]

⁸⁹⁶ くんとう【勲等】「国家が勲功ある者を賞するため、1875～76年(明治8～9)に設けた栄典の等級。大勲位のほか、勲一等から勲八等まであり、各等に応じた勲章がある。」。[『広辞苑』]

⁸⁹⁷ 「国家、公共に対して功績のあった方に「位」を授与されるもので、叙勲と同じく日本国憲法第7条に基づき内閣の助言と承認により「天皇が行う国事行為」として実施しているものです。[中略] 位記は折りたたんだ書状のかたちで伝達されますので、その重みが実感しにくいかと存じますが、かつては朝廷に仕える官人の身分証明であり、時には戦国武将が権威として高い官位を求めたという史実がございます。位階を受けられたということは、御受章者様が日本国の歴史に御名前を刻まれたという証です。ぜひ額装して大切にお飾りください。」。[“叙位とは” 銀座明倫館. (参照 2023-04-04)]

⁸⁹⁸ 2013-04-03.

○静岡県立図書館回答

「表題：昭和の軍人の叙任と位階について

(1) 当館蔵書検索、全項目検索で「陸軍」「宮内省」等のキーワードで検索をしましたが、軍人に対しての叙任、位階の管轄に関しまして、明確に記述のある資料は見つかりませんでした。

『官僚制としての日本陸軍』朝倉 治彦／編 筑摩書房 2012.9 (396.21/キタ)

『陸軍省軍務局史 上巻 芙蓉軍事記録リバイバル 明治・大正編』上法 快男／著 芙蓉書房出版 2002.7 (396.21/シヨ)

『陸軍省軍務局史 下巻 芙蓉軍事記録リバイバル 昭和編』上法 快男／著 芙蓉書房出版 2002.7 (396.21/シヨ)

『昭和陸軍の研究 上』保阪 正康／著 朝日新聞出版 2018.6 (396.21/ホサ)

『陸軍歴史 上 明治百年史叢書 第44巻』勝 海舟／著 原書房 1967 (210.6/メイ)

『日本海軍士官総覧』海軍義済会／編 柏書房 2003.2 (397.06/カイ)

また以下はご質問の直接の回答が載っている資料ではありませんが、参考になりそうな記述がありましたので御紹介します。

『日本歴史 577号』吉川弘文館 1996.6 (Z21/1/) p.102-103

「明治二（一八六九）年七月八日、・・・職員令が出された。・・・位階は太政官より与えると定めている。・・・」とあります。

『近代史史料陸軍省日誌 第2巻』朝倉 治彦／編 東京堂出版 1988.6 (317.29/アサ) p.409

陸軍省で使われていたものとして「叙任御請書式」があります。

国立国会図書館デジタルコレクション

『現行宮内省法規集 [上巻]』宮内省 編纂 大日本法令出版 1927.12

(ご覧いただくには当館のオンラインデータベース用パソコンをご利用頂くか、国立国会図書館の個人送信サービスの利用登録が必要です)

第七編 栄典 第一章 位階に「位階令」があります。

『陸海軍軍事年鑑 昭和14年版』軍人会館出版部 編 軍人会館出版部 昭和14

(こちらの資料はだれでも利用することが出来ます。 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1446769>) p.139 位階勲功の頁に「位階令要旨」があります。

(2) 大尉として「従六位」と「正七位」が存在していることの原因について、明確な記述のある資料は見つかりませんでした。『「陸軍成規類聚」研究資料「陸軍成規類聚」資料集成4』森松 俊夫／監修 緑蔭書房 2009.11 (396.21/メイ) p.352に「陸海軍人の階級、停年、位階、勲等、給料」の表があり、その中の「初叙位階」の項目では、陸軍大尉の初叙位階は「正七位」となっています。またこの表の備考に「位階は同じ階級における在任期間が長くなるに伴って進められるから、初叙位階よりも高くなる場合が多い」とあります。さらに、同 p.360に「名誉進級」についての記述があり、進級はするが恩給は元の階級のままである場合がある、との記述もあります。叙任と位階の関係についてですが、そもそも何か明確に「叙任」という言葉と「位階」という言葉を、その役割を分けて使っているような記述は見つかりませんでした。」⁸⁹⁹

⁸⁹⁹ 2023-04-11.

○防衛研究所戦史研究センター回答（「陸軍軍人の階級と叙位について」）

「1. 管轄について

陸軍軍人の任官（進級）は、将校及び下士官は「陸軍武官進級令」（昭和 16 年勅令第 197 号）及び「陸軍武官進級取扱規則」（昭和 16 年陸達第 10 号）に、兵は「陸軍兵進級規則」（昭和 15 年陸達第 63 号）に定めています（参照①）。

他方、位階は「位階令」（大正 15 年勅令第 325 号）及び「位階令施行細則」（大正 15 年 10 月 21 日閣令第 6 号）により正一位より従八位までの十八階を規定し、(1) 国家に勲功あり又は表彰すべき功績のある者、(2) 有爵者又は爵を相続する者、(3) 在官者及び在職者に授与されました。(1) は特旨叙位、(2) 及び(3) の該当者は定期叙位とされましたが、故人にして勲績顕著なる者には特旨をもって叙位されました（参照②）。

[参照]

- ①「陸軍武官進級令」、「陸軍武官進級取扱規則」、「陸軍兵進級規則」／第 4 類「官等分限補任名簿」／『陸軍成規類聚昭和版第二卷（下）』（緑陰書房、2010 年）
②「位階令」、「位階令施行細則」／第 5 類「賞典恩給救恤」／『陸軍成規類聚昭和版第二卷（下）』

2. 階級と叙位の関係について

戦前は、在官在職の文武官、例えば内閣総理大臣・各省大臣・枢密院議長・陸海軍大将の初叙は正四位、極位は正二位、その他の親任官及び親任待遇の初叙は従四位、極位は従二位に叙せられるというように、何れも任官あるいは在官在職の勤続年限によってそれぞれ叙され、これらは「文武官叙位進階内則」（明治 33 年 2 月 26 日、その後改定あり）に定めてあります（参照③）。そしてこの「内則」の規定に基づき、「陸軍叙位上申手続」（陸普第 467 号、大正 6 年 2 月 22 日）に則って、陸軍大臣に上申することになります（参照⑥）。

各階級の初叙は、少尉（高等官八等）が正八位、中尉（高等官七等）が従七位、大尉（高等官六等）が正七位、少佐（高等官五等）が従六位、中佐（高等官四等）が正六位、大佐（高等官三等）が従五位、少将（高等官二等）が正五位、中将（高等官一等）正五位、大将（親任官）が正四位です（参照③—1、④、⑤）。

そして中尉は従七位（初叙）から正六位（極位）まで、大尉は正七位（初叙）から従五位（極位）までの位階が、在職期間に応じて授与されます（参照③—1）。

なお恒石重嗣氏は、昭和 16 年 10 月 1 日付で少佐に進級しています（参照：「陸軍将校実役停年名簿昭和 19 年 9 月 1 日調」当館所蔵）。

[参照]

- ③「文武官叙位内則改正の件」（明治 33 年 2 月 26 日）（C04013676400）
③-1「文武官叙位進階表」（同封 [略]）
④「高等官官等俸給令」（明治 25 年勅令第 96 号）（A03020130600）
⑤『事典昭和戦前期の日本：制度と実態』（吉川弘文館、1990 年）317 頁。
⑥「陸軍叙位上申手続」／第 5 類「賞典恩給救恤」／『陸軍成規類聚昭和版第二卷（下）』（緑陰書房、・2010 年）

以上⁹⁰⁰

⁹⁰⁰ 2023-04-07.

すぎ 杉田一次

○Wikipedia

「杉田 一次（すぎた いちじ、1904 年（明治 37 年）3 月 31 日 - 1993 年（平成 5 年）4 月 12 日）は、日本の陸軍軍人、陸上自衛官。陸士 37 期・陸大 44 期。最終階級は帝国陸軍では陸軍大佐、陸自では陸上幕僚長たる陸将。第 4 代陸上幕僚長を務めた。

経歴

米国陸軍隊付の経験に加えて在アメリカ大使館駐在武官補佐官の経験⁹⁰¹から、対米開戦に終始反対し、海軍をも巻き込んで開戦阻止に動いたが上層部を説得することができなかった。第 25 軍情報参謀としてマレー作戦に従軍、シンガポールの戦い後の降伏交渉において後半から山下奉文将軍の通訳を務める。イギリス軍に対する降伏勧告文を起案した。

ガタルカナル作戦では大本営派遣参謀として現地に入り、第 2 師団の作戦に関与。第 8 方面軍編成に伴いラバウルへ異動。ガタルカナル維持は不可能と大本営へ意見具申。「消極参謀」と批判を受けるが大本営は撤退を決定。撤退計画を立案（担任の井本熊男作戦主任参謀が Dengue 熱で闘病中だったため）。米軍をして PERFECT! と感嘆させた完全撤退を実施した。

大本営の情報軽視体質に危機感を抱いた杉田は自ら作戦課に陣取り作戦業務に関与。課長から班長へ異例の降格人事の形で作戦課高級参謀兼作戦班長に就任した。終戦に際し直ちに帰国命令、東久邇宮首相秘書官に就任。進駐軍受け入れに際して米極東軍サザランド参謀長と調整に当たる。当時作成して閣議に提出した「終戦記録」は江藤淳編集の「占領史録」（講談社学術文庫）に所収されている。1945 年 9 月 2 日の降伏文書調印式代表団に大本営参謀として参列した。

戦後、杉田は俘虜関係調査中央委員会第 4 班に加わり、シンガポール華僑肅清事件の戦犯裁判対策のための報告をまとめた。その後巣鴨プリズンに拘置されていたが、1945 年⁹⁰²8 月の最終週、英軍ワイルド大佐により、同事件への関与の容疑で正式に逮捕され、軍用機でシンガポール・チャンギ刑務所へ送致された。しかし、1946 年 9 月にワイルド大佐が事故により死去すると、杉田は釈放され、同事件の裁判に検察側証人として出廷することになった。杉田は証人としてシンガポールの保安隊に収容されているときに、「上官の罪状を述べるに忍びず、証人台に立つより潔く自決を選ぶ。英軍諸士へ宜敷く」と記した遺書を書き、頸動脈を切って自決を図るが、一命を取りとめた。

⁹⁰¹ 「1937 年（昭和 12 年）1 月：アメリカ合衆国駐在 4 月：アメリカ陸軍第 26 歩兵連隊付 10 月：在アメリカ大使館付駐在武官補佐官 1938 年（昭和 13 年）7 月：陸軍歩兵少佐 9 月：イギリス駐在 1939 年（昭和 14 年）2 月：参謀本部部員（欧米課）」、「杉田一次」. Wikipedia. (参照 2023-01-06)】

⁹⁰² 1946 年の誤記か。

戦後は辰巳栄一中将とともに GHQ 歴史課で戦史研究に携わった他、情報機関設立に関与。吉田茂首相の信任が厚かった。

陸上自衛隊に入り、1960年3月から1962年3月まで陸上幕僚長を務めた。陸幕長退任に当たって後任は「元軍人であるべき」ことを防衛庁長官に意見具申し、井本熊男幹部学校長を推薦したが、内局の妨害で内務省出身の大森寛が就任した。

退官後は、社団法人日本郷友連盟会長、社団法人安全保障懇話会理事長、東京都防衛協会会長、東部防衛協会会長、日本郷友連盟名誉会長、日本世界戦略フォーラム会長を務めた。⁹⁰³



図 90 杉田一次

出典：Wikimedia Commons

File: File:Sugita Ichiji.jpg

『アサヒグラフ』1951年9月26日号.

Author: 朝日新聞社.



図 91 降伏したパーシバル将軍（右端）と杉田（中央）

出典：Wikimedia Commons

File: Surrender Singapore.jpg

Author: Photographer not identified.
"Official photograph".



図 92 降伏文書調印式の杉田（後列右端）

出典：Wikimedia Commons

File: Surrender of Japan - USS Missouri.jpg

Author: Army Signal Corps.

⁹⁰³ ○“杉田一次”. (参照 2023-01-06)

○藤原岩市との共著がある：スイスの国防と日本. 時事通信社, 1971.

すぎ 杉山参謀総長の感謝状

「昭和十七年九月
大東亜戦争放送しるべ第十六輯
情報局第二部第三課

杉山参謀総長より海外放送に対し感謝状

感謝状

大東亜戦争開始以来貴協会ノ実施セル海外放送ハ会長ノ指導宜シキヲ得タルト関係者ノ夙夜精励トニ依リ宣伝ノ成果顕著ナルヲ確認ス
殊ニ「クリップス⁹⁰⁴」渡印以来印度ノ情勢緊迫ノ度ヲ加フルヤ機ヲ失セズ印度人ノ覚醒ヲ促進シ反英独立ノ気運ヲ濃化セシムル等其ノ効果大イニ見ルベキモノアリ
時日ノ推移ト共ニ敵国ノ企圖スル思想戦ハ愈々深刻熾烈化シツツアリ
希クハ更ニ創意ヲ重ネ愈々電波ノ利器ヲ活用シ宣伝戦完勝ヲ期セラレンコトヲ
茲ニ平素ノ労苦ニ対シ深厚ナル感謝ノ意ヲ表ス

昭和十七年八月二十日

日本放送協会々長 小森七郎殿

参謀総長 杉山 元]⁹⁰⁵

⁹⁰⁴ 「クリップスしせつだん【クリップス使節団 Cripps Mission】1942年3月、第2次世界大戦の戦況悪化の中でインドの全面的戦争協力を求めるため、イギリス首相チャーチルにより派遣された国璽尚書 R.S.クリップスを代表とする使節団。彼の提案はイギリス側としては初めて、事実上独立と同義の自治領としての地位を戦後インドに賦与するとしたが、州の分離権も認めており、民族政府即時樹立を求める国民会議派、パキスタン成立の確約なしとするムスリム連盟の双方が拒否し、交渉は失敗に終わった。

出典 株式会社平凡社／世界大百科事典 第2版について。[“クリップス使節団とは”。コトバンク。(参照 2023-07-13)]

⁹⁰⁵ NHK 放送文化研究所蔵. p. 2-3.

資 料 編

する 駿河台分室関係者

「職員の業務分担は概略次のとおりであった。

所 長	藤村 信雄
企 画 部	(兼) 藤村 信雄
	池田 徳真
	朽木 綱博
	森野 正義
	勝野 金政
	中井 某
	岩永 博
	牧 秀司
放 送 部	長井 真先
	池田 徳真
	宇野 一麿
	渡辺 忠恕
	伊藤 忠雄
	小島 大作
	日吉 直道
	菱刈 隆文
総 務 部	堂本 誉次
	早坂 久
	穴倉 忠雄
	斎藤 敏雄 (写真)
	郷 晃
	高島 正雄
	田代 慎一
伝 単 部	仁科 夫妻
	太田 天橋
	松下井知夫
	那須 良輔
	林 勝世
	長谷川中央
	Fujita 軍曹 (日系二世)

女 子 安藤やす江 (※)
小林 久子⁹⁰⁶
佐藤 光代
斎藤富美恵
土田トシ子
大森 博子等

女子は主として放送部または企画部に属して英文タイプなどの業務に従事していた。なお姓は現在のものを記述したので婚前のそれとは違っているものも少なくない。

(※)「私は戦争中、陸軍参謀本部で、敵に向けた伝単（ビラ）を作製する事務所で働いていました。事務所の存在は秘密とされており、最初は東京・神田淡路町のビルの3階にありました。そこで画家たちの筆を洗った水を取り換えたり、外国人の名簿を和文タイプで打ったりしていました。[以下略]」。
[無職 安藤安江（東京都 98）. 一歩前に出た捕虜 無事だった. 朝日新聞. 2023-07-27, 朝刊「声」欄]

警 備

将校一（谷山中尉、浜本中尉、後伊野部少佐）
憲兵下士官一（小池周一郎、石岡正行、大高道男、
高瀬京一の内一名）
下士官以下衛兵 約一〇名

部外からの主要協力者

高瀬 伝
鈴木文史朗
平沢 和重
松岡 洋子
樺山 資英
加藤万寿男
稲垣 一吉
上原 虎重
福島慎太郎
魚返 善雄
坂西 志保
長谷川才次
小平 利勝
鶴見 祐輔
村山 有
前田 多聞
木々高太郎」(心理 199-201)

⁹⁰⁶ 『猫のしっぽ』の著者.

せん 戦果誇張と錯誤

日本側

「[44年10月24日から26日の比島沖海戦において、栗田艦隊の] 反転のきっかけが第十水雷戦隊の魚雷発射であったことは確かである。これは軽巡「矢矧」を旗艦とする魚雷攻撃隊で、この頃護衛空母群の西北に接近して機会を窺っていた。攻撃は[時刻]〇九〇六から〇九一五の間に行われた。「大和」では発射命令を聞いて、艦隊として一応攻撃終了と見なしたのである。

距離は一三、〇〇〇メートル、やや遠すぎたので、魚雷が目標付近に達した時は速度が落ち、一本も命中しなかった。ちょうど空母群と共に退却しつつあった米駆逐艦「ジョンストン」が急に近接したので、あわてて発射したらしいと、モリソンはいう。

しかし水雷戦隊司令の罪は攻撃に失敗したことより、一〇三〇に艦列に復帰した後、その戦果を「エンタープライズ級航空母艦一隻撃沈、一隻大破（沈没殆ど確実）、駆逐艦三隻撃沈」と誇張したことだったかも知れない。

戦果の誇張は海戦に付きものであるが、この誇張はやや悪質である。こういう部下を持った栗田長官はまったく楽ではなかった。」⁹⁰⁷

米国側

「一六四〇、別の一機が、その少し北に、東へ向け一六ノットで航行中の空母四、戦艦二より成る本隊を見付けた。艦隊は付近海面に降りた艦上機の搭乗員を収容中のように見えた。

これはハルゼーが待ち焦れていた報告であった。二〇二二彼は三つの機動部隊に、直ちにルソン島東方海上に集合を命じた。

彼は栗田艦隊には壊滅的打撃を与えたから、もはやレイテ湾に突入することは出来ない、かりにそれを試みたとしても、キンケードの第七艦隊にとって重大な脅威ではない、と判断したのであるが、これは誤っていた。[中略]

一五三〇回頭した時、栗田艦隊はまだ戦艦四、重巡六、軽巡二、駆逐艦一一から成る強力な艦隊であった。アメリカのパイロットがどんな報告をしたか不明であるが、どうやら日本のパイロットと同じく、よほど戦果を誇張していたらしいのである。

[中略] 人間のやることであるから、海戦には多くの錯誤がつきものである。奇蹟的な完全試合といわれる日本海海戦を除いて、ほとんど錯誤の連続といってもよい。

小沢中将の機動本隊はこの時すでに数少ない攻撃機の発進を終り、形ばかりの護衛戦闘機を持つだけの、完全な囮艦隊に化していたのだが、ハルゼー大将にはそうは映らなかった。」⁹⁰⁸

⁹⁰⁷ 大岡昇平. レイテ戦記（上）. 中央公論新社, 1974, p.228.

⁹⁰⁸ 同上. p.195-198.

そう 総 軍

○Wikipedia

「第二次世界大戦終戦時には以下の6個総軍があり、各戦線を担当していた。

支那派遣軍 - 大本営直轄部隊を除いた、中国戦線における在中国の陸軍部隊を統括。

南方軍 - 大本営直轄部隊を除いた、南方戦線における在南方の陸軍部隊を統括。

関東軍 - 大本営直轄部隊を除いた、在満州の陸軍部隊を統括。以上が外地担当。

第1総軍 - 大本営直轄部隊を除いた、内地のうち東方（青森県以南の東日本）の陸軍部隊を統括。（千島列島・南樺太・北海道は大本営直轄部隊たる第5方面軍の担当）

第2総軍 - 大本営直轄部隊を除いた、内地のうち西方（西日本）の全陸軍部隊を統括。

航空総軍 - 内地の陸軍航空部隊を統括。」⁹⁰⁹

⁹⁰⁹ “総軍”. (参照 2023-02-12)

そう 宋 美齡

○Wikipedia

「(そう びれい、ソン・メイリン、1898年3月4日(1898年2月12日、1901年など諸説あり) - 2003年10月23日)は、中華民国の指導者蒋介石の妻、輔仁大学理事長(1967年-1992年)、中国国民党中央委員会委員、中国国民党航空委員会秘書長。

[中略] 1898年に清国の上海県で誕生した。孫文の支援者である父の宋嘉澍(「チャーリー宋」とも呼ばれていた)と、母の倪桂珍の間に誕生する。父はメソジスト教会の宣教師であったが、後に布教活動を止めて商売の道に進み浙江財閥の創始者として大富豪となった。その後孔祥熙の妻となる宋靄齡、父が支援し続けた孫文の妻となる宋慶齡の2人の姉と共に「宋氏(家)三姉妹」として、中華民国内をはじめとする中華圏だけでなく、世界的にも永く知られることとなる。また、中華民国の政治家・実業家であった宋子文は兄に当たる。

蒋介石との結婚

その後1920年に、後に中国国民党党首で中華民国の指導者となった蒋介石と上海市内の孫文の旧居で出会い、約7年の交際を経て1927年9月にプロポーズし、11月には日本に滞在していた宋美齡の母親に結婚の承諾を経て12月1日に結婚した。孫文を継ぎ、中華民国の若き指導者となった蒋介石と、中華民国の名家の出身で、アメリカへ留学し大学を含む高等教育を受け洗練された立ち振る舞いと流暢な英語で欧米でもよく知られた宋美齡の結婚は、中華民国内のみならずアメリカや日本、イギリスなど世界各国で大きく報じられた。2人の結婚のニュースはニューヨーク・タイムズの1面を飾ったほどであったが、一部には「政略結婚」と揶揄する向きもあった。しかし実際は普通の恋愛結婚であった。12月1日に行われた結婚式は、宋家の客間においてキリスト教形式で行われたが、蒋介石が離婚経験者であることから牧師は立てず、中華キリスト教青年会全国協会総幹事とその代理役を務め、蔡元培が立会人を務めた。なお、蒋介石は亡命先の日本で結婚式を挙げた孫文に倣って、結婚式を日本で挙げたいと考えていたことが明らかになっている。しかしながらこの意向は、日中関係の悪化を懸念していた母親の反対で実現しなかった。披露宴は、上海の共同租界にあり、上海でも有数の規模を持つ高級ホテルであった大華飯店(マジェスティック・ホテル)内の最大の宴会場で行われ、宴会場には孫文の遺影と中華民国の国旗、党旗が掲げられた。参列者は日本やドイツ、アメリカやベルギーをはじめとする各国の総領事や中華民国の政財界の有力者など1300人を超え、その後2人は浙江省への新婚旅行に向かった。[中略]

蒋介石への影響

蒋介石は、結婚翌年の1928年に国民党軍総司令の地位を回復し、続いて国民党中央執行委員会の主席、国民政府主席となり、宋美齡も1930年から1932年までの間は、蒋介石の支援の下に、中華民国立法院の立法委員として、また国民党中央執行委員会の委員として国民党内にも多大な影響力を持った。また、1936年12月に起きた西安事件においては、張学良軍に捕らえられ、その後西安市内の高桂滋公館に監禁されて

いた蒋介石の解放に向けて自ら西安に飛び、張学良や楊虎城との会談を行い蒋介石の解放へ向けた折衝を行うとともに、蒋介石に対しては、敵対する張学良軍や中国共産党軍との「統一戦線」の構築（国共合作）による抗日を訴えるなど、生涯を通じて蒋介石の政治的決定に強い影響力を有した。

日中戦争

1937年に日本との間に勃発した日中戦争では、当時中国や満州国で日本との利益対立を深めていたアメリカからの軍事援助の獲得を目指し、「国民党航空委員会秘書長」の肩書で、蒋介石の「通訳」として、駐中華民國大使館附陸軍武官のジョセフ・スティルウェルやアメリカ陸軍航空隊のクレア・リー・シェンノート大佐との交渉に同席し、アメリカからの有形無形の軍事援助を引き出し、日中戦争中から第二次世界大戦の初頭にかけて日本軍と対峙した「アメリカ合衆国義勇軍（フライング・タイガース）」の設立や、日本軍に比べて比喩にならないほど遅れていた中華民國空軍の近代化に大きく貢献した。姉妹が〔宋美齡と同じ〕ウェルズリー大学の卒業生で、『タイム』や『ライフ』の発行者であるヘンリー・ルースは、日中戦争の間を通じて抗日キャンペーンとともに対中支援キャンペーンを行い、『タイム』の1937年度「パーソン・オブ・ザ・イヤー」に日中戦争を戦う蒋介石を選び、誌上でアメリカ市民に対中支援を訴えるなど、宋に協力を惜しまなかった。

蒋介石のスポークスマン

宋美齡は親中派のフランクリン・ルーズベルト大統領やその妻エレノアと親密な関係を構築し、日中戦争から第二次世界大戦に至るアメリカの対日政策に大きな影響を与えたといわれる。第二次世界大戦中の1942年11月から1943年5月には、ルーズベルト大統領直々の招聘でアメリカを訪問し、アメリカ政府の全面的なバックアップを受けてアメリカ全土を巡回し自ら英語で演説し抗日戦への援助を訴え続けた。特に1943年2月18日には、ワシントンD.C.のアメリカ連邦議会において宝石をちりばめた中華民國空軍のバッジを着けたチャイナドレス姿で抗日戦へのさらなる協力を求める演説を行い、並み入る連邦議員のみならず全米から称賛を浴びその支持を増やした。滞在時に抗日戦へのアメリカ市民からの義捐金を募るためにカリフォルニア州ハリウッドで演説した際には、メアリー・ピックフォード、ハンフリー・ボガートやキャサリン・ヘプバーン、イングリッド・バーグマンなどの多数のハリウッドスターから大きな称賛と金銭的なものを含む支援を受けた。また、アメリカをはじめとする連合国における抗日戦のシンボリック的存在として蒋介石とともに『タイム』誌の表紙を飾るなど、第二次世界大戦中を通じて中華民國のファーストレディとして、そして夫で英語を話せない蒋介石のスポークスマン兼中華民國のロビイスト的役割を果たし、アメリカをはじめとする連合国における中華民國、そして日本に対する世論に大きく影響を与えた。また1943年11月には、蒋介石とフランクリン・ルーズベルト、イギリスのウィンストン・チャーチルがエジプトのカイロに集まって戦後の対日処理を決めたカイロ会談にも蒋介石とともに同席し、蒋介石の通訳を務めた。⁹¹⁰

⁹¹⁰ “宋美齡”.(参照 2023-05-15)

だい 第一次大戦における英国の宣伝

ウェリントンハウスとクルーハウス

「開戦直後の一九一四年にイギリスの外務省は、中立国への宣伝文書の配布を目的にした秘密の戦時宣伝局 War Propaganda Bureau をつくった。この宣伝局は、ウェリントンという名の家におかれていたから、関係者は、ウェリントンハウス Wellington House とよんでいた。ウェリントンハウスの主要な目的は、中立国の人を反ドイツにすることであったのだが、その中立国というのはオランダが第一目標であった。[中略]次に、イギリスでは、国内での平和主義者の活動を防止し国民の戦意昂揚を目的にして、一九一七年六月に戦時計画委員会 War Aims Committee がつくられた。国内宣伝を引き受ける機関で、これには政府が財政支出をおこなった。この委員会は、一九一八年五月までに、すでに述べた『リヒノスキー侯爵の回想録』の廉価本を四〇〇万部以上売り尽くしたと報告している。そして戦争の最後の年すなわち一九一八年になって、やっと対敵宣伝の組織のクルーハウスができた。この年の二月、外務省情報部が宣伝省 Ministry of Information に昇格し、ビーヴァブルック卿が宣伝大臣になった。彼は、緒戦からずっと熱心な対敵宣伝論者であったから、ただちに対敵宣伝本部をつくって、これまた対敵宣伝強行論者であった新聞王のノースクリフ卿をその責任者に任命した⁹¹¹。その本部には British War Mission という曖昧な名をつけたのだが、関係者は、本部のあったクルーハウスという家の名で呼びならわすようになった。戦争はこの年の十一月十一日に終わるのであるから、クルーハウスの活動はわずか九か月だけで、その経費は七万ポンドだったとのことである。しかしこの間のクルーハウスの一大宣伝決戦によって、ドイツ軍の戦意は叩きつぶされ、連合軍が勝利をおさめたのであるから、クルーハウスの名は、ビーヴァブルック卿とノースクリフ卿の名とともに世界を驚かせたのであった。」⁹¹²

⁹¹¹ 「クルーハウスの対ドイツ宣伝部長はひじょうに重要な地位であるから、有名な文明評論家の H・G・ウェルズ Wells, Herbert George (一八六六～一九四六) が任命された。彼は、そのとき、すでに外務省の宣伝部の仕事をしていたオックスフォード大学の歴史学者ヘッドラム=モーリ教授 Headlam-Morley, Prof. J. W. に来てもらって、その助けを借りた。ところが、ウェルズと対敵宣伝委員会の委員長であったノースクリフ卿 Northcliffe, Alfred Charles, Viscount (一八六五～一九二二) とのあいだで、対ドイツ宣伝方針の根本問題について大論争が起きてしまった。このことは『クルーハウスの秘密』にくわしく書かれている。[中略] ウェルズは激論のすえ、「委員長がそんなお考えでは、私にはできません」といって、一九一八年七月二十三日にわずか数か月で辞職してしまった(『クルーハウスの秘密』六〇、九〇ページ)。そしてその後任には、作家で新聞記者のハミルトン・ファイフェ Fyfe, Hamilton が任命された」、『プロパガンダ戦史』 p.102-104

⁹¹² 同上. p.105-107.

『クルーハウスの秘密』

「[42年10月に交換船で] 帰国後、一か月ほどして、樺山君とも相談し、第一次世界大戦のプロパガンダに関する本を神田古本屋で買い集めることからその仕事「対敵宣伝放送の研究」をはじめた。そのころ日本政府も、長びく日華事変を見て、何となく日米戦争の危険を感じたのであろう、内閣情報部は、昭和十三年から十五年までの約二か年のあいだに海外で出版された戦時宣伝・謀略・諜報・防諜に関する本を一五冊ほど翻訳して、部内用の「情報宣伝研究資料」として印刷しておいてくれた。当時、これらは、二冊、三冊というふうに神田の古本屋に出ていたもので、できるだけ多く買い集めた。[中略] 第三の名著は、『クルーハウスの秘密』である。これは、イギリスの宣伝本部「クルーハウス」の活動を、委員長代理であったキャンベル・ステュアート中佐が、戦後の一九二〇年に公表したものである。当時、飯野紀元訳『英国の宣伝秘密本部』⁹¹³という題名で出ていたこの訳本を神田で見つけて、読んでみると、第一次大戦の終りちかくにイギリスの宣伝本部が何を考え何をつくったかということが詳細に書いてあって、この本からも教えられることが多かった。」⁹¹⁴

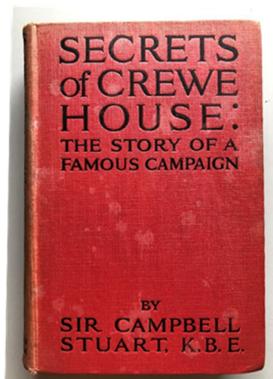


図 93 SECRETS Of CREWE HOUSE
Hodder and Stoughton, 1920.



図 94 飯野紀元訳『英国の宣伝秘密本部』
内外書房, 1943.

⁹¹³ (海軍報道部) 飯野紀元訳. 英国の宣伝秘密本部. 内外書房, 1943-08-25.が(再版の表示なく)発行されており, 43年4月に更迭された情報局次長奥村喜和男の序がある. [本書「2.3.3 情報局改組」]

⁹¹⁴ 『プロパガンダ戦史』 p.38-40.

たい 大正デモクラシー

「変革の息吹～日比谷焼討ち事件

日露戦争（明治37年（1904年）2月6日～明治38年（1905年）9月5日）を終わらせたポーツマス講和会議（明治38年（1905年）8月10日～9月5日）では、戦勝国である日本は賠償金を受け取ることができませんでした。そのため、戦争犠牲者の遺族や戦費拡大に伴う増税に苦しんできた人々の不満が高まりました。

その不満は、同年9月5日から7日にかけて、東京・日比谷に人々が集結して国民大会を開くまでに到り、付近の内務大臣官邸や講和賛成を唱えていた国民新聞社を焼き討ちするというかたちで噴出します。警官隊や軍隊がこれを阻止しようとしたが、群衆との衝突が起きました。これが、いわゆる日比谷焼討ち事件です。(1) [資料. 略. 以下同じ] は、政府が戒厳令（非常時事態に際し、軍隊に治安権限を与えた天皇大権の一つ）を敷くことで騒擾をやっと沈静化した様子を克明に語っています。

大正デモクラシー

このような街頭での騒擾を契機に、中小企業主や商店主といった旧中間層に加えて、都市におけるホワイトカラーなどの新中間層、さらに労働者も加わって「民衆」が誕生したのです。この「民衆」がデモクラシー運動の主演となって藩閥政権からの脱却をはかり、第一回普通選挙を実現させるに至る大正14年（1925年）までの政治的民主化の過程は、大正デモクラシーと呼ばれています。この運動を、アジ歴の資料で追ってみましょう。

大正デモクラシー運動を代表する思想として広く知られるのが、東京帝国大学教授の吉野作造博士（1878年～1933年）(2) [略] が唱えた民本主義です。吉野が言う民本主義は、単に概念的なデモクラシー思想に止まるものではなく、その体系的な理論として提示されたのが論説「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの道を論ず」（『中央公論』1916年1月）でした。吉野は民本主義を「一般民衆の利益幸福並びに其の意嚮に重きを置くという政権運用上の方針」としています。つまり「君側二三者の意見に諮る」閥族政治が、「人民一般の意嚮に聴く」議会政治に比べて如何に非合理的で非立憲的であるかを示し、政党政治の実現、選挙権の拡張、衆議院の重視などを主張したのです。吉野は、主権在君の明治憲法の下で立憲主義への筋道を切り開くために、この「民本主義」という言葉に実践的なデモクラシーの理念を託して、果敢に取り組んだのです。(3) [略] は、戦前の警察行政にあたった内務省の警保局保安課による、米騒動についての資料の一部ですが、ここからは、デモクラシー思想が吉野作造をはじめ、大山郁夫、北澤新次郎といった学者だけではなく、長谷川如是閑や鳥居素川などのジャーナリストを通じて社会に広まっていった経緯がよくわかります。」⁹¹⁵

⁹¹⁵ “大正デモクラシー～吉野作造とその時代～”. アジア歴史資料センター. (参照 2023-04-29)

たい 対ソ静謐

○二正面作戦回避

「一九四一年一二月八日、日本がアメリカ、イギリス等と開戦すると、ドイツ軍がモスクワ前面に迫った一〇月頃にはくすぶっていた日本のソ連侵攻計画は、極東ソ連軍の西送が期待したほど進まず東西からの挟撃は不可能になったと判断して、断念せざるを得なくなった（とりあえず、作戦上不利な冬季が終わるまでという条件をつけて）。それは二正面作戦を回避したい共通利益を持つソ連にとっても同様で、両国は自己の同盟国が戦っているにもかかわらず、以降「日ソ中立条約」を盾にして相互の戦争を回避し続けることになった。日本は一九四二年六月のミッドウェー海戦で躓き、年末から年初にかけて、ドイツ軍のスターリングラード戦敗北と軌を一にしてガダルカナル島で敗退するに至って、ソ連侵攻どころか、「対ソ静謐⁹¹⁶」（ソ連を刺激、挑発しない）を外交の中心に据えるようになった。」⁹¹⁷

○駿河台分室

・小林久子

「こうして私達は、あとから来た、何となく大風な人々に、挨拶も無しに使われる事となった。そして、[九段事務所からの]要領を得ない移動だか引越したかは、何か月もかかって次第にその形態をととのえていった。

かつての教室は、所長室（T君の御主人はこの所長さんだった）、企画室、資料室、伝単（宣伝ビラの事らしい）室、武官室、庶務、それに映写室等と名前がついた。そうしてどうした事か、K [九段] 事務所のソ連色はいつか全く影をひそめ、B [文化] 学院全体が、いわばアメリカ的雰囲気になっていった。

首脳部が更迭したとかしないとかいう話も聞いたが、それは昭和十八年の秋であったから、戦争の風向きが変わって、ソ連とは仲良くしておいた方が良さそうだという事になったのかも知れない。とにかく、大田さんと私は半日ばかりでソ連関係の書類を山程燃した。

空から撒いたらさぞ美しかろうと思われる色とりどりの宣伝ビラ。それも、皆ツルツルの最上等紙である。一その頃紙は今の数の子よりも貴重品で、そんな上等紙は世間ではどこを探しても見当たらない。教科書の紙など、裏側の文字がすけて見える程うすい、粗悪なワラ半紙だった—メラメラと燃える紙の山を眺めて二人は、勿体ないわねえ、の連発だった。地獄の様な戦場にばらまくだけの紙に、これ程見栄を張ら

⁹¹⁶ 梅津美治郎：「同 [39] 年 9 月、関東軍司令官（1942 年から関東軍が総軍に格上げされ総司令官に名称変更）に就任。直前に発生したノモンハン事件の責任を取って植田謙吉大将が退いた後で、再三にわたり中央の統制を破って大事件を起こした関東軍参謀らの肅正が求められていたが、見事にその任を果たした。太平洋戦争中に関東軍が何の事件も起こさず静謐を保ったのは梅津の功である。」.[“梅津美治郎”. Wikipedia. (参照 2022-10-13)]

⁹¹⁷ 富田武. 日ソ戦争 1945 年 8 月：棄てられた兵士と居留民. みすず書房, 2020, p.40.

ねばならんとは、何と戦争とは勿体ないものか。これでは義理にも拾ってもらわなければ。だからお札に見せかけてあったり、ヌードの写真を入れたり。どうやらヌードとは、お札と同じ効果があるものらしい事など知った。そして拾って開くと、裏に死体の写真という仕掛けになっている。その他割引券ならぬ、投降票などという物もあった。

「これを持って日本軍にいらっしやい。只で捕虜にして上げます」なんて書いてあったらしい。たいていロシア語だが、中には蒙古語のもあった。一つ、あんまりきれいでかわいい真っ赤な手帖の様なのがあったので、こっそり持って帰って義兄に見せたら、

「お前、これは共産党の党员手帖だぞ、こんな物持っているとおどかさされて、びっくりして燃してしまった。

長田さんも来なくなったし、あのマラトフの加藤さんも。

「今度の事務所、どこですか？」ふいと駅で声をかけられて振り向くと、加藤さんが心細そうな顔をして立っていた。そこで一緒にB学院まで歩いて行った。日本語は長田さん程上手でなかった。彼は、長田さんみたいに鼻歌も歌わない。あまり笑顔も見せない。どこか寂しそうな外人だった。

「あなたの為に、私はおすし屋からどなられたんですよ」なんて恨む気にはなれなかった。

彼は亡命して来たソ連の高官であったという。日本からソ連に脱出する人。ソ連から日本に亡命する人。いろいろある。彼は、日本を通過してアメリカに行こうとしたのだと、あとで誰かから聞いた。でもその時は、彼が何を考えていたのか、どんな思いで日本の秋を眺めていたのか、私は何も知らなかった。ただ、木の葉の散る駿河台の道を、一時共に歩いただけである。それが私が彼を見た最後であった。長田さんも加藤さんも、ソ連関係の人は、私達の燃したビラの様に、あっさりお払い箱になったのだろうか。

戦後、何かで読んだ、あの寒い国から来た亡命者は、終戦の時大陸のどこかで自殺したと。

西山さんは、しばらく武官室にいたが、間もなく本部へ行ってしまった。宍戸〔宍倉〕さんは庶務課へ来て、後に向かいの校舎に引っ越して来た異色のメンバーのまかない係長となった。大田さんは、よそから来た他のタイピストと、タイピングルームへ行ってしまった。何のかんと言っても彼女は私の親分である。彼女からひきはなされて私はひとしお心細くなった。一人、勝田〔勝野金政〕さんだけが、あちこち勝手に座ってクンクン鼻をならしながら何か原稿を書いていた。たのみの綱のNさんも、いつかぱったり顔を見せなくなっていた。特務将校として、大陸へ行ってしまったとかであった。

こうしてK事務所は完全に解体され、B学院の校門のアーチは、小さなくぐり戸のついた板戸でふさがれて⁹¹⁸、「S [駿河台] 技術研究所」という大看板がかけられた。」

919

・池田徳眞

「加藤氏すなわちリシュコフ三等大将は、参謀本部のロシア通の甲谷悦雄中佐の指導下にあったが、ロシア語のできる中田光男氏と憲兵の小池周一郎曹長が世話して、目黒区本郷町四九（現在の碑文谷五 - 二六 - 一一）に住んでいて、彼自身がソ連の短波放送を聞いて分析をし、九段事務所の勝野君にロシア語で報告し、彼が翻訳して参謀本部に提出していたのである。

吸収後、この勝野金政君は、駿河台分室の企画部に籍をおくことになり毎日来ていた。恒石少佐は、彼について私に次のように説明された。「**勝野君はソ連共産党の正式党员となり、ソ連の地方のオルグで数年働いていた珍しい人です。転向したと言っています、真実は分かりません。ただ憲兵がよく見張っていますから、分室の中ではなんでも自由に話して差支えありません**」とのことであった。それで私は、彼から毎日のようにソ連での共産党の宣伝謀略の策略や高等戦術について徹底的に教えてもらったから、たいへん親しくなり、その交友は今日までつづいている。このように企画部には、森野アメリカ博士と勝野ソ連博士がいたのだから、私が質問さえすればなんでも分かる仕組になっていたのである。」⁹²⁰

⁹¹⁸ 文化学院校門の鉄柵が供出された後、自由に入出りできる状態になっていた。木の扉を付ける作業が遅れたため、大森収容所からの捕虜の移送は放送開始前日となる。[『駿河台分室物語【本編】』p.90-91／『日の丸アワー』p.38-41. から抜粋]

⁹¹⁹ 『猫のしっぽ』p.65-69.

⁹²⁰ 『日の丸アワー』p.32-33.

たい 「対敵海外放送ノ概要ト其ノ反響」

〔秘〕

対敵海外放送ノ概要ト其ノ反響

我が海外放送ハ今次開戦後引続キ情報局主体トナリ大本營、外務省⁹²¹ト緊密ナル連携ノ下ニ作戦ト呼応シテ強力ニ之ヲ実施シ就中対敵放送ニ重点ヲ置キ来タリタル処其ノ成果ヲ挙ゲ敵側ニ対スル反響見ルベキモノアリ。其ノ概要左ノ如シ。

- 一. 放送時間 一日二十五時間 [以下原則として項目のみ]
- 一. 放送方向
- 一. 放送用語 十八ヶ国語
- 一. 対敵放送ノ重ナルモノ
- 一. 対敵放送ノ放送内容
 1. ニュース
 2. 通信
 3. 講演
- 一. 対敵放送ノ具体的方針
- 一. 敵側宣伝動向ト我海外放送ノ応酬
 1. 戦勝虚構宣伝
 2. 枢軸離間
 3. 日ソ離間
 4. 日本ノ対印侵略
 5. 長期戦必勝
 6. 我が非人道性捏造
- 一. 現在ニ於ケル我が対敵放送ノ宣伝ノ重点
- 一. 最近ニ於ケル我が海外放送ノ反響ノ概要⁹²²
 1. 日本側ノ俘虜放送ニ対スル感謝 (四月十三日桑港)
 2. クリップスノ日本ノ宣伝工作言及 (四月十一日ニューデリー)
 3. 枢軸側ノラジオ (三月二十六日アンカラ)
 4. マツカーサーノ逃亡 (三月十七日ワシントン)
 5. 日本ノラジオハ世界デ最モ強力 (三月十三日ロンドン)
 6. 濠洲東京放送ヲ恐ル (三月十二日濠洲)
 7. 蘭印軍ハ日本ノ宣伝ニ耳目ヲ閉ヂヨ (三月五日濠洲) (※ 次ページ末)
 8. 囁キ戦術 (三月二十日ワシントン)
 9. アジア人ノアジア (三月二十五日ワシントン)

⁹²¹ 資料「外務省と放送」

⁹²² 42年1～4月.

10. 日本炉辺談話ノ先手ヲ打ツ（二月二十二日ワシントン）

11. カビテ軍港ノ戦況（一月四日ワシントン）」⁹²³

(※) 同様の論調：「三月二十五日 桑港放送 蘭印軍は日本の宣伝に耳目を閉ぢよ、
日本の宣伝程蘭印軍ノ志氣を阻喪するものはない。日本の最新しい武器は実に「プロ
パガンダ戦」である。」⁹²⁴

⁹²³ NHK 放送文化研究所蔵. No.4302.

⁹²⁴ 「秘 昭和十八年一月 対敵電波戦第 1 号（自昭和十六年十二月 至昭和十七年十一月）
「附録. 二. 敵側に於ける我が海外放送の反響」情報局第二部放送課. p.349.

たい 「対敵電波戦」

「秘」

昭和十八年一月

対敵電波戦 第一号 (自昭和十六年十二月 至昭和十七年十一月)

情報局第二部 放送課

本輯は大東亜戦争勃発以来我が海外放送において対敵、対第三国、対枢軸国、及び対占領地向に行ひたる放送実施状況を概説したもので、関係事務者の参考用として印刷に付したものである。

目次

昭和十六年十二月

一、大東亜戦争勃発	二頁
二、世界に叫ぶ我が海外放送	三
三、敵国軍隊に呼びかく	八
四、住民諸君に告ぐ	十九
五、米英のデマ反撃	三六
六、敵の惨行、暴虐を衝く	四四
七、人種問題と宗教問題	四五
八、敵の放つ離間宣伝	四八
九、対敵宣伝戦	四八
一〇、海外放送の新拡充	五五
一一、枢軸側放送の進展	五五

昭和十七年一月

一、ABCD を破碎して進む我が聖戦の電波	五七
二、マニラ陥落を繞る放送戦	六一
三、米当局の宣伝を衝く	六七

二月

一、シンガポール陥落す	七二
二、東京から「炉辺談話」	七五
三、「桑港放送に答ふ」	八〇
四、俘虜放送	八四

三月	
一、海戦を繞る放送戦	九〇
二、蘭印攻略と放送戦	九三
三、英の敗残と苦肉策「惨行宣伝」	九八
四、対米放送戦の複雑性	一〇一
五、印度問題を繞る放送戦	一〇四
四月	
一、パターン戦線と宣伝戦	一一一
二、米宣伝当局のあの手この手	一一四
三、印度洋作戦と放送戦	一一六
四、印度問題深刻 — 対印放送	一一八
五、没落する英国	一二四
六、ビルマ戦線と対重慶放送戦	一二五
七、敵機空襲と我が海外放送の活動	一二七
五月	
一、コレヒドール攻略と放送戦	一三三
二、珊瑚海々戦を繞る対敵放送戦	一三四
三、米国内の微妙な情勢と対米放送	一四一
四、英の窮状と印度問題	一四五
五、敵ビルマ敗戦に責任転嫁の醜態	一四六
六、「桑港放送に答ふ」	一四八
六月	
一、戦争理由に我が主張を借用する米当局	一六五
二、ダッチハーバー、ミッドウェイ戦を繞る放送戦	一六九
三、対米放送戦	一七九
四、置き去りにされる重慶	一八四
七月	
一、米当局宣伝の目標	一八九
二、拳国一致と英雄の製造	一八九
三、天文学的生産力の苦惱	一九五
四、徒に戦後の問題を論ずる勿れ	二〇四
五、米国内の敵スパイ活動を捏造、宣伝す	二一一
六、米ジャーナリズムの末期的症状	二一二
七、対敵放送に演芸、音楽による新企画	二一三

八月	
一、ソロモン海戦を繞る放送戦	二一四
二、印度独立を繞る放送戦	二一六
九月	
一、米国、生産動員に狂奔	二三九
二、独裁者ルーズヴェルト	二四三
三、「愛国者」グルー	二五一
四、外交的行商人ウイスキー	二五四
五、第二戦線か太平洋戦か	二五五
六、「和平」を夢みる米戦時情報局長官	二五五
七、「米人より米人へ」	二五八
八、「アメリカの非人道を暴く」	二七一
十月	
一、化けの皮を剥がれた「全機無事帰還」	二八三
二、日本の公正なる俘虜取扱	二九二
三、りすぼん丸	二九五
四、米軍死者狂ひの総反攻	二九七
五、南太平洋海戦と放送戦	三〇〇
六、米の対南米工作	三〇七
七、亜細亜文化確立の戦ひ	三一二
十一月	
一、第三次ソロモン海戦	三一四
二、ルンガ沖海戦	三二三
三、開戦責任の追及	三二四
四、東亜侵略の米英思想に宣戦	三三四
五、北阿に対する米英の侵略と米英の対立	三三七

附録

敵側に於ける我が海外放送の反響	三四一」 ⁹²⁵
-----------------	---------------------

⁹²⁵ NHK 放送文化研究所蔵. 「対敵電波戦」第一号. 標題, 目次.

「九. 対敵宣伝戦」

次に放送による弾丸は直接敵国めがけて発射される。敵側の戦力、経済力、精神力等、敵側国内状態を抉出して鋭い批判の言葉を叩きつける」

- 「米英の太平洋艦隊今何處」 (英語、スペイン語、タガログ語)
「米の飛行機よ、飛んで来い！」 (英語)
「逃げ足の早い英軍」 (英語、タイ語、マレー語、蘭語)
「艦隊を有せざる米国提督」 (英語、ビルマ語、蘭語、ヒンズー語)
「米の軍拡はペーパープラン、米の戦時公債全く不消化」
(蘭語、英語、仏語、支那語)
- [中略]
- 「英株式一斉暴落」 (英語他十五ヶ国語)
「英国民預金引出激増」 (〃 十二 〃)
「桑港市民避難を始む」 (英語、アラビア語等)
- [中略]
- 「零はいくつあつても零」 (英語、スペイン語、ポルトガル語)
[以下略]」⁹²⁶

⁹²⁶ 「対敵電波戦」第一号. p. 48-50.

たけ 竹槍事件

○Wikipedia

「(たけやりじけん) とは、第二次世界大戦中の 1944 年 (昭和 19 年) 2 月 23 日付け『毎日新聞』第一面に掲載された戦局解説記事が原因でおきた言論弾圧事件。

概要

問題となった戦局解説記事は、毎日新聞社政経部および黒潮会 (海軍省記者クラブ) 主任記者である新名丈夫^{しんみょうたけお}が執筆した記事 (見出し作成は山本光春) で、「勝利か滅亡か 戦局は茲まで来た」という大見出しの下でまず「^{まなじりけつ} 眦 決して見よ 敵の鋏状侵寇」として南方における防衛線の窮状を解説し続いて「竹槍では間に合はぬ 飛行機だ、海洋航空機だ」として海軍航空力を増強すべきだと説いている (#『毎日新聞』(1944 年 2 月 23 日付) の記事参照)。これは海軍航空力増強を渴望する海軍当局からは大いに歓迎されたが、時の東條英機陸相兼首相は怒り、毎日新聞は松村秀逸大本営報道部長から掲載紙の発禁および編集責任者と筆者の処分を命じられた。毎日新聞社は編集責任者は処分したものの、筆者である新名の処分は行わなかったところ、その後ほどなく新名記者が 37 歳にして召集された。

背景

この事件の背景には、海軍が海洋航空力を増強するため陸軍より多くの航空機用資材 (ジェラルミンなど) を求めても、陸軍はこれに応じようとはしないで、半々にせよとして譲らない、海軍の飛行機工場の技師を召集してしまうなど、航空機や軍需物資の調達配分をめぐる陸軍と海軍の間の深刻な対立があった。

1943 年末には海軍の源田実と陸軍の瀬島龍三は共同研究による大本営陸海軍部の合一に関する研究案を提出し、陸海の統帥部一体化、航空兵力統合などを提案したが、1944 年 2 月 21 日に軍令部総長を兼任した海軍大臣嶋田繁太郎により即刻研究中止となった。

東條はこのころ、戦争遂行のためには国務と統帥の一致が必要と考え、トラック島空襲をきっかけにして首相・陸相と参謀総長の兼務に踏み切ったところであった。これは統帥権に抵触するおそれがあるとして「東條幕府」と揶揄され様々な問題や軋轢を生んでいた。秦郁彦は、東條は政府批判や和平運動は「国賊的行動」とみなし、また東條批判は「陛下のご信任によって首相の任にある者に対する批判や中傷はすなわち陛下に対する中傷」として許さず、憲兵を使って言論を取り締まり、批判者を懲罰召集して激戦地に送る仕打ちをしたと見ている。1942 年 9 月 12 日から 1944 年 1 月 29 日にかけては戦時中最大の言論弾圧事件である横浜事件が発生した。

東條が出した『非常時宣言』の中の「本土決戦」によると、「一億玉砕」の覚悟を国民に訴え、銃後の婦女子に対しても死を決する精神的土壌を育む意味で竹槍訓練を実施した。

そのような状況下で、深刻な航空機不足に直面していた海軍では、航空機用資材の供給についての要求が通らなかつたことで陸軍および東條内閣への不満が強まっていた。

そこで毎日新聞の黒潮会（海軍省記者クラブ）担当キャップだった新名は海軍に同調し、海軍省との紳士協定（「海軍省担当キャップが執筆した記事については事前検閲は不要」）を利用してキャンペーン記事を書くことを進言した。

新名は「日本の破局が目前に迫っているのに、国民は陸海軍の酷い相克を知りません。今こそ言論機関が立ち上がるほかありません」と上司の吉岡文六編集局長に上告書を出した。

『毎日新聞』（1944年2月23日付）の記事

新名の執筆記事は「勝利か滅亡か 戦局はここまで来た」「竹槍では間に合わぬ 飛行機だ、海洋航空機だ」と題して、1944年（昭和19年）2月23日付の『毎日新聞』朝刊に掲載された。

「勝利か滅亡か 戦局はここまで来た」

「戦争は果たして勝っているのか」

「ガダルカナル以来過去一年半余、我が陸海将兵の血戦死闘にもかかわらず、太平洋の戦線は次第に後退の一途を辿っている事実をわれわれは深省しなければならない」

「日本は建国以来最大の難局を迎えており、大和民族は存亡の危機に立たされている。大東亜戦争の勝敗は太平洋上で決せられるものであり、敵が日本本土沿岸に侵攻して来てからでは万事休すである」

「竹槍では間に合わぬ 飛行機だ、海洋航空機だ」

「大東亜戦争の勝敗は海洋航空兵力の増強にかかっており、敵の航空兵力に対して竹槍で対抗することはできない」

「ガダルカナル以来の我が戦線が次第に後退のやむなきに至ったのも、アッツの玉砕も、ギルバートの玉砕も、一にわが海洋航空戦力が量において敵に劣勢であったためではなかろうか」

同じ一面にあった社説の「今ぞ深思の時である」でも精神主義についての批判が行われた。

「我らは敵の侵攻を食い止められるのはただ飛行機と鉄量とを敵の保有する何分の一かを送ることにありと幾度となく知らされた。然るにこの戦局は右の要求が一向に満たされないことを示す」

「勝利の条件にまず信念があることに相違はないが、それは他の条件も整った上でのことであって、必勝の信念だけでは戦争に勝たれない」

記事には陥落したばかりのマーシャル・ギルバート諸島から日本本土や台湾・フィリピンへ至る米軍の予想侵攻路が添えられていた。

この日の一面のトップ記事は東条首相が閣議で上記の「非常時宣言」を発表した記事が載っており、その下に置かれた「竹槍では間に合わぬ 飛行機だ、海洋航空機だ」の見出しはこれに対し真っ向から挑戦する見出しであった。

新名は開戦時から海軍を担当、昭和 18 年 1 月から約半年間はガダルカナルで従軍⁹²⁷して前線の惨状をつぶさに見聞きし、またマーシャル・ギルバート陥落では大本営が 20 日間も報道発表をためらって大騒動を演じている様子を見ており、日本の窮状と大本営作戦の内容を把握していた。

陸軍報道部は、毎日新聞に処分を要求。更に内務省は掲載新聞朝刊の発売・頒布禁止と差し押さえ処分を通達した（ただし、この時点で問題の朝刊は配達を終えていた）。そこへ火に油を注ぐように、同日夕刊トップでは「いまや一步も後退許されず、即時敵前行動へ」と題する記事が掲載された。記事中で

日本の抹殺、世界制圧を企てた敵アングロサクソンの野望に対しわれわれは日本の存亡を賭して決起したのである。敵が万が一にもわが神州の地に來襲し來らんにはわれらは囚虜の辱めを受けんよりは肉親相刺して互に祖先の血を守つて皇土に殉ぜんのみである。しかも敵はいまわが本土防衛の重大陣地に侵攻し來つてその暴威を揮ひつつある。われらの骨、われらの血を以てわが光輝ある歴史と伝統のある皇土を守るべき秋は來たのだ。

と述べており、記事の趣旨は戦争自体を肯定した上で戦況が悪化している現状を伝え、その打開策を提言したものであるが、東條は「統帥権干犯だ」として怒った。夕刊記事の執筆は新名ではなく清水武雄記者によるものだったが、この責も新名が引き受けた。

新名は責任を感じ、吉岡文六編集局長に進退伺いを提出したが、吉岡はこれを受理せず、3 月 1 日、自身が加茂勝雄編集局次長兼整理部長とともに引責辞任した。この記事は読者から大きな反響を呼び、毎日新聞では全国の販売店や支局から好評との報告が入った。海軍省報道部の田中少佐は「黒潮会」で「この記事は全海軍の言わんとするところを述べており、部内の絶賛を博しております」と述べた。

東條は内閣情報局次長村田五郎に対して「竹槍作戦は陸軍の根本作戦ではないか。毎日を廃刊にしろ」と命令した。村田は「紙の配給を停止すれば廃刊は容易」とした上で「日本の世論を代表している新聞のひとつが“あのくらいの記事”を書いたことで廃刊になれば、世論の物議を醸し、外国からも笑われます」と述べ、東條を諷めた。

24 日には陸軍報道部が朝日新聞に「陸軍の大陸での作戦は海軍の太平洋での作戦と同じくらい重要」という内容の指導記事（政府・軍部が予め内容を指示した記事）を掲載させた。

東條批判を日記に綴ることが多かった細川護貞（高松宮宣仁親王御用掛）も、本件に関しては東條の怒りに理解を示し「是は記者の非常識にして、東條の激怒も亦宜なり」としている。

⁹²⁷ 誤記と思われる：43 年「2.1 日本軍、ガダルカナル撤退開始. 2.7, 1 万 1000 人余の撤退完了（地上戦闘の戦死者・餓死者 2 万 5000 人）.」. [『近代日本総合年表』 p.334]

戦時中の言論弾圧事件としてはこの他に横浜事件や大阪商大事件、尾崎不敬事件や新興俳句弾圧事件があったが本事件は陸海軍の対立が大きな背景となった点で他のケースとは趣を異にしている。

新名の「懲戒召集」

毎日新聞は責任者を処分したが、新名は退社させず、逆に編集局長が賞を与えるなどした。記事執筆から8日後、新名に召集令状が届く。新名本人も周囲も、この「指名召集」を東條首相による「懲戒召集」だと受け止めた。新名は郷里、高松に行き、二等兵として丸亀の重機関銃中隊（第11師団歩兵第12連隊）に1人で入営した。中央からは、激戦地となることが予想される硫黄島の「球」部隊へ転属させるよう指令が届いていた（ただし、「球」の通称号を持つ部隊は硫黄島ではなく沖縄に配置された第32軍である）。これに対し、新名が黒潮会主任記者であり、軍需物資の海軍配当割増という海軍の要求を代弁させた結果の事件であったことから海軍が召集に抗議した。新名は、海軍の庇護に加え、日中戦争当時に善通寺師団の従軍記者をしていたこともあって、中隊内で特別待遇を受けつつ3か月で召集解除となった。その際、中隊の陸軍将校から「近いうちに再召集の命が下るだろうから、内地にいないほうがよい」と忠告されている。

その後、陸軍が再召集しようとしたが、その前に海軍が新名を海軍報道班員として外地、フィリピンに送っていたため、再召集を逃れている。

新名が徴兵検査を受けたのは大正時代のことで、それまでその世代は1人も召集されていなかった。そのため、海軍は「兵隊をたった1人取るのはどういうわけか」と陸軍を批判した。それに対し陸軍は、新名と同世代で大正時代に徴兵検査を受けた人間を250人召集し、歩兵第12連隊に入営させて辻褄を合わせた。その30代後半の老兵達は、全員が硫黄島の戦いで玉砕・戦死した（ただし歩兵第12連隊は硫黄島に展開していない）。

海軍側の反応

当時の海軍報道部長であった栗原悦蔵⁹²⁸少将は、「もう太平洋の東の制空権はほとんど失ってしまったと」「海軍としては国民全体に知らせたいと思って、私もずいぶんその黒潮会にもお願いいたしましたけれども、なかなかそれを書く人がない、そこを大胆に新名さんが書いてくださいましたので、われわれとしては、たいへん喜んで絶賛したわけですね」と証言している。⁹²⁹

⁹²⁸ 資料「栗原悦蔵」

⁹²⁹ “竹槍事件”. (参照 2023-05-12)

たて 建川美次

「^{たてかわよしつぐ}建川美次は明治十三年、野崎美孝の三男として新潟県に生まれ、のちに地方官建川周平の養子となった。新潟中学を経て、陸軍士官学校に入学、明治三十四年第十三期生として卒業し、騎兵少尉に任官した。同じ新潟県出身で建川より三年下の山本五十六はのちに海軍大将となる。建川の率いる新潟中学の野球チームが山本も部員であった長岡中学と対戦したという話が伝えられている。[中略] 明治三十七年二月日露両国は戦火を交え始め、八月二十三歳の建川少尉も満州に出征した。その華々しい斥候任務の完遂により、建川は騎兵の花形将校として戦後帰国し、明治三十八年陸軍大学校へ入学、四十二年第二位の成績で卒業して、参謀本部に勤務した。二年後にイギリス駐在、大正二年インド駐在武官としてインドに駐在し、国際派、知性派としての基礎を固める。[中略] 建川は、騎兵の大先輩であった森岡正元少将の娘と結婚した。森岡は長女を騎兵将校であり、後に参謀総長になる鈴木荘六に嫁がせていたから、建川は騎兵隊閥に加わったことになる。大正十二年、建川は大佐に昇進し、参謀本部第二部欧米課長、昭和三年に少将に進級し、支那公使館武官に任じられた。建川が赴任して間もなく張作霖爆殺事件が起こった。昭和四年の人事異動により、建川は情報操作を任務とする参謀本部第二部長の職に戻った。建川は杉山、二宮、小磯と共に「宇垣の四天王」と称された。昭和五年秋、参謀本部ロシア班長の橋本欣五郎中佐を中心に桜会が形成された。その中軸部に加わっていたのは欧米課ロシア班と支那課に属した将校で、ロシア班のメンバーなどは主職の対ソ諜報を放り出し、ここは桜会の国家改造本部と化した感があった。この建川配下の参謀本部将校のエネルギーを利用し、四天王の合意の上に宇垣をかつぎあげて、小磯が大川周明を通じて民間の右翼を動員し、都内に騒乱を起こし、鎮圧の名目で軍を動かし、宇垣に大命降下を強要するクーデター計画が練られたが、宇垣の変心でこの計画は挫折する。この変心の故に、宇垣は石原莞爾らの参謀本部中堅将校の信頼を失い、後に宇垣組閥が石原らの反撃にあう素地を作った。国内で失敗したクーデター（三月事件）を満州において実現したのが満州事変であった。関東軍の石原莞爾、板垣征四郎の両参謀は九月二十八日を期して満鉄線を爆破し、軍を出動させ、張学良軍を掃討し、全満州を制覇する陰謀をめぐるした。国内では橋本欣五郎らの桜会幹部が、朝鮮軍では神田〔正種〕参謀らが参画していた。建川は知ってか知らずか満州問題の武力解決について国内遊説を行っていた。満州に不穏な動きがあるという噂を聞いた当時の参謀総長は、建川に謀議を思いとどまらせる役を命じた。建川は、意図的らしいサボタージュを行って、止め男の役を放棄してしまい、満州事変の勃発を見過してしまった。建川は、その後内閣に支配力を及ぼした皇道派にうとまれてジュネーヴ軍縮会議の代表へ出された。二・二六事件に際し、建川も首班候補の一人に擬せられたが建川は慎重に動かなかつた。二・二六事件後の肅軍人事で、見えがくれとはいえ派手に振舞ったと見られる建川は予備役に編入され

る。退役後の建川は、右翼主催の講演会のスター的存在になり、政府、軍部には目の上のたんこぶ的存在になった。ところが、外務大臣の職について、英米派一掃、革新外交の展開を唱えた松岡洋右の登場により、建川はソ連大使のポストに就いた。三国同盟締結の一週間後の昭和十五年十月二十三日のことである。独ソ開戦を予見できなかった建川は十七年二月更迭された⁹³⁰。帰国後、閑職にあった建川を迎えたのが東方社というわけであった。建川は政治的・軍事的には御用済みの軍人であったが、そのモダニズムとダンディズムは、前述の如く、東方社の首脳に嫌悪の情を抱かせないだけの雰囲気を持っていただろうし、参謀本部と東方社の結びつきからいって建川の総裁就任は妥当なものを受けとめられたのであらうと思われる。建川美次が東方社にどのようなかかわっていたかはつまびらかにしない。しかし、新劇の山川幸世をかばって東方社に入れる尽力をしたいきさは建川の文人派的色彩がよく現われていると言える。」⁹³¹

⁹³⁰ 「…総力戦に突入する前の段階だから宣伝の効果が発揮できるのであって、全世界に戦場が広がってしまった一九四二（昭和 17）年以降では、『FRONT』のような重厚型の宣伝物は、その配布すらままならない状態になった。しかしソ連とは敗戦の直前まで中立を保っていたから、対ソ宣伝という当初の目的どおり、ここには相当量が送り込まれていたと思われる。しかしソ連の国状から考えて、一般市民の手に渡ったとは考えられない。のちに東方社総裁になった建川美次中将は、開戦当時ソ連駐在日本大使としてモスクワにいたが、一九四二（昭和 17）年三月、離任の挨拶のためモロトフ外相を訪問したとき、彼の机の上に意図的であるかのように『FRONT』がおかれてあったという。また海軍の潜水艦で中立国のトルコに運んだという説が流されたが、この分はソ連経由でトルコの日本大使館に入ったのではないかと思われる。ここからはドイツ、イタリア、あるいは英、仏にも少しは流れた可能性がある。さらに日本軍の占領下にあった上海は、敵国をも含めた外国に通じる裏口でもあった。上海に運ばれた『FRONT』はすぐに地下組織を通じて国民政府側に渡り、そこから援蔣ルートをとどって、重慶に入っている米軍に渡るのはいとも簡単であった。こうしたルートを軍が意図的に利用して配布を図ったことも考えられる。 [中略] しかしそれは戦争によって途絶した、日本の状況を知る資料として利用されたにすぎなかったであらう。]. [多川精一. 対外宣伝誌『FRONT』の記録. 『FRONT 復刻版：解説 I』 p.35-36]

⁹³¹ 山口昌男. 『フロント』をめぐる国際派知識人群像. 同上. p.22-24.

たに 谷山樹三郎

○経歴⁹³²

41年7月陸軍中野学校を繰上げ卒業（乙II長）、参謀本部第二部ドイツ班配属⁹³³。約3カ月後第四班へ。43年4月ころから恒石参謀の下で働き、駿河台分室開設準備。10月ころ分室勤務を浜本純一と交代し米班⁹³⁴。44年第五方面軍（旧北方軍、司令部札幌・月寒）対米班々長。

○浜本と交代⁹³⁵

・恒石参謀の依頼で「いずれも乙II長の」支那総軍の浜本純一と中野学校の生徒監村田克己⁹³⁶の二人を後任に推薦し、参謀が浜本を選んだ。

・浜本は当時支那総軍の参謀と折合いが悪く、第一線に放り出されるよううわさも伝わってきていた。

○「北部軍」⁹³⁷転出の経緯⁹³⁸

・42年、それまで大本営の直轄であったアッツ・キスカ占領部隊の作戦指導が北部軍に移されたが北部軍は方針を変えず、情報部も対ソが主、対米が従の観があった⁹³⁹。

・業を煮やした参謀本部の参謀が「北部軍はどっちを向いて戦争をしている⁹⁴⁰」と発言したことから、「対米班ができて参謀本部からの人間は受け入れない」と話がこじれた⁹⁴¹。

⁹³² 『駿河台分室物語【資料編】』p.64/DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』／『陸軍中野学校』p.740.から抜粋。

⁹³³ 乙II長卒業時の首席は桜一郎、次席は谷山。[DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』]

⁹³⁴ 米班には恒石と陸士・第12連隊で同期の大屋角造少佐がいた。大屋は終戦時中佐・「情報アメリカ班長」。[『歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌』巻頭「発刊によせて」]

⁹³⁵ DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』

⁹³⁶ ○41年9月から訓育係長。[『陸軍中野学校』p.56]

○恒石は当時村田が5成（43年7月～44年2月）の謀略の講義を担当中だったため、浜本を選んだものか。[同上. p.44]

⁹³⁷ 「北部軍（ほくぶぐん）は、大日本帝国陸軍の軍の一つ。1943年に北方軍に改組され、1944年に第5方面軍の編成に伴い廃止された。」。[“北部軍（日本）”. Wikipedia. (参照 2022-08-06)]

⁹³⁸ DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』

⁹³⁹ 参謀本部英米課・大屋角造：「従来から陸軍の主敵はソ連軍で、訓練および情報収集の主対象は米軍ではなかった。これを対米軍指向に切り替えるには、なお大きな抵抗があり、これが実現したのは実に十八年秋のことだった。」。[“うら道人生の回想”『回想録：五十年の歩み』p.328]

⁹⁴⁰ 資料「対ソ静謐」

⁹⁴¹ ○43年「5.12米軍アッツ島に上陸。5.29日本軍守備隊2500人玉砕」、[7.29キスカ島の日本軍撤退]。[『近代日本総合年表』p.334]

○同年7月「11日（日）、B25九機、千島列島北端の幌筵^{ハラムシル}を初空襲。」。[『年表太平洋戦争全史』p.249]

○同月「19日（月）、千島列島北端の幌筵基地にアッツ島からB24六機とPB4Y四機とが来襲。」。[同上. p.252]

・44年3月ころ北方軍参謀兼情報部樺太支部長として赴任した浅田三郎中佐（36期
[『陸軍中野学校』p.741]）が、参謀本部時代に部下だった谷山に白羽の矢を立て、事
前に彼に電話で北方軍対米班初代班長就任と大尉進級を告げた。



図 95 浜本純一（左）と谷山樹三郎
撮影場所：東京都・四ツ谷駅付近
〃時期：44年4月
提供：谷山樹三郎（部分）

たん 短波放送受信

「短波による敵の放送を聞くのには、法律に基づいて特別の許可が必要であった。もちろん短波受信機は市販されていないし、外国から秘かに持ち込むとしても、税関で押さえられたわけである。当時短波受信機は、軍官民合計約五〇〇台程度...」
(心理 375)

- 「...アメリカその他の先進国では、国民が自由に短波放送を聞くことができたのであるが、日本では国民が短波放送を受信することは禁止されていたのだ。」⁹⁴²
- 「樺山資英君は、浦和高校、東大法科を経て、昭和十年に外交官試験に合格するのであるが、浦和高校にはいるまえに東京高等工業学校（東京工業大学の前身）の電気科にいた。それゆえ、昭和十一年四月にイギリスに行き昭和十五年五月にイタリアから帰国するまで、ずっと欧米のエレクトロニクスの進歩について研究していた。樺山君は帰国して情報部第五課に配属されると、すぐ前記のハリクラフターやハマーントのメーカー名をあげて、最新式の業務用短波受信機のアメリカでの購入を進言した。」⁹⁴³
- 「私は甲南高校ではラグビー部のほかに無線クラブにも入っていた。青空のもとラグビーボールを追った後、こんどは薄暗い部屋にこもって無線受信機とにらめっこだ。電気蓄音機の増幅器なども設計した。何人かは自分で短波受信機を組み立て、自宅気付でアマチュア無線局の申請をした。ところが日米関係が風雲急を告げ、アマチュア無線は禁止されてしまった。短波受信機を持っている者には破棄するようという指示まで出た。[中略] ある日の授業中のこと、学校近くに住むクラスの仲間から私の机にメモが回ってきた。「おれの家が今捜査されている。おまえのところもきっとやられるぞ」とある。これはまずい、と私はあわてて教室から抜け出して電車に飛び乗った。京都駅から家に電話して、ひとまず受信機をどこかへ隠すように頼み、家に着いてから納屋の中に隠し直した。苦心の作だ。時勢だからといって簡単にこわされてはたまらない。そこへ警官がやはりやってきたが、「全部分解して処分しました」と言い張ってことなきを得た。かろうじて難を逃れた受信機は戦争が始まってから威力を発揮した。米軍放送を聴くと大本営発表と違う戦況がよくわかった。」⁹⁴⁴
- 「転属先の独立混成大隊は、北京から山海関の方へ走っている鉄道の、山海関寄りにある人口五千ほどの町、石匣鎮（せっこうちん）にあった。[中略] むし暑い日の続いた八月の十七日ごろ、無線通信兵が私の部屋に入って来た。彼はアメリカの通信を深夜こっそり聞いていたらしい。「隊長殿、アメリカは日本が降伏したと言っております」と報告に来た。もしかしたら、アメリカ軍の謀略放送かなと思った。」⁹⁴⁵

⁹⁴² 『日の丸アワー』 p.20.

⁹⁴³ 『プロパガンダ戦史』 p.12.

⁹⁴⁴ 堀場雅夫. 私の履歴書⑧無線クラブ. 日本経済新聞.1992-04-08, 朝刊.

⁹⁴⁵ 飯田善国. 私の履歴書⑩日本降伏の報知. 日本経済新聞. 1997-07-11, 朝刊.

ヂー・ヂー・ゴルマン

○ George Gorman (1888-1956)

リバプール生まれのアイランド系英国人。1920年代にカナダの新聞社で働いている時日本領事と知り合い、以後日本の外務省と関係を持つ。中国で活動後26年来日、The Japan Timesなどに寄稿。太平洋戦争前彼の家族はオーストラリアへ出国、彼自身は日英外交官交換船龍田丸で42年7月30日横浜から英国へ帰国。オーストラリア紙は彼を「極東のホーホー卿」と評したが（Melbourne Sun、Sydney Morning Herald。いずれも1941-11-19）愛国者だったとする意見もある。⁹⁴⁶

○「日本の宣傳負けは昔から」⁹⁴⁷

・「[1930年代、世界の世論が日本に反感を持ち中国に同情を示す] 其の由因は宣傳に在る。之に加へて對日恐怖と嫉妬のお蔭だ。」(p.55⁹⁴⁸)

・「斯かる事態も畢竟日本が其の宣傳を怠つた結果だと知つたならば、自ら思ひ半ばに過ぐるものがあらう。「宣傳とは銃と同じ武器で、夫れよりもずっと威力がある」とは某學者の喝破したところである。

日本は欧米から近代戦術を習得しながら、内外の輿論を指導し、利用する外國の遣り口を見落としてしまった。」(同上)

⁹⁴⁶ DEBORAH MACFARLANE. "George Gorman". *Britain & Japan: Biographical Portraits*. HUGH CORTAZZI. 2013, GLOBAL ORIENTAL, 2013, p. 507-524, (The Japan Society. VOLUME VIII)から抜粋。

⁹⁴⁷ ○ヂー・ゴルマン. "日本の宣傳負けは昔から". 宣撫月報. 山本武利編. 不二出版, 2006, p.62-64, (十五年戦争極秘資料集 補巻 25[第2冊]. 最初の掲載は『宣撫月報』第3巻第2号, 1938(康徳5)年2月, p.55-63)から抜粋。

○「現に北京クロニクル紙主筆で、英誌「キャラバン」主宰」.[同書. p.55.前書き]

○ヂー・ゴルマンによる第二次大戦までの各国宣伝比較(同書より編者作成)

	日本(失敗)	中国(成功)	英国(成功)
嘘をつかない	○	×	○
伝える相手の心理を洞察する	×	○	○
自画自賛を避け第三者に言わせる	×	○	○

○宣撫月報は、(31年ころ設立され満州国内の宣伝業務に従事した)中央宣撫小委員会が宣撫工作業務担当者のため36年7月創刊した雑誌で、非売品。38年以降国務院総務庁弘報処が発行。「また本土では紹介されることの少ない英米のプロパガンダの翻訳が連載されることもあった。[中略]本誌は、社会科学的分析で本土のもろもろの研究誌の水準を超えていたといわれる『満鉄調査月報』の宣伝・宣撫版とってよかろう。」.[山本武利. "解説—『宣撫月報』の性格". 上記書:解説・総目次・索引. p.5-20.から抜粋・引用]

⁹⁴⁸ 『宣撫月報』の原ページによる。(『十五年戦争極秘資料集』ではp.62)。以下同じ。

・「...昨年九月の國際聯盟會議を觀るがいい。茲に集まつた各國外交官は新聞に現はれた反日記事を鵜呑みにし、當該國民の意志を代表して日本に制裁を加へる腹だつた。此の不幸な場面は、日本が宣傳を怠つた結果である。リットン報告書の不埒な日本中傷も、未だ日本國民に十分な關心を呼び起して、宣傳の必要、其の方法の研究に注意を向けしむるに至らなかつた。」(p.56)

・「茲で一應、欧州大戰時の宣傳戦に就て検討しよう。大戰以來、宣傳要領は既に學問の一分野を為して、今では何れの國でも（但し日本を除く）攻防戦の「武器」たる本問題を重要視せぬものはない。將來の戦争は單に二當事國だけの争ひではなく、多數の國々を渦中に捲き込む戦争であるから、列強は平和の際に於ても、内外輿論の指導、融和に専念し、從て宣傳に多大な注意を拂つて居る。

茲で確言するが、宣傳上手とは決して上首尾な嘘をつく謂ではなく、相手に理解し易く、耳目に觸れ易いように工夫を凝らし事實をうまく組み合せ、書き綴ることを指す。[中略] 社會宣傳の際、最も陥り易い間違ひは、當の宣傳者が相手の感情を自己と同じだと思ひ誤ることである。」(p.56-57)

[以下、第一次大戰における英国のノースクリフ卿らによる宣伝を詳述したあと、「極東では」の項以降で日本と中国を比較している]

・「茲で先づ日支國情を比較するに、日本は今や獨立自給國として、外國製品を近づけず、諸外國は到底日本で金儲の餘地がない、[中略] 支那は未開不統一で物資の自給が出来ず、欧米諸國は通商貿易、開拓、指導、干涉等己れの欲する儘に手を延ばす餘地がある。自己に都合の良い側の肩を持つは人情の常であるのみならず、支那としても外國の保護を頻りに求めて居る。日本から徳を得られぬ外國としては日本を恐れるか、恨むのみだ。」(p.60)

・「支那歴史には隣國との争に第三國を引込んだ例が澤山あり、今次[日中]事變でも同じ手を繰返して居る。支那政治家實業家等は在支外國人の利害關係を十分に呑み込んで外國の力を藉りて日本を参らせ様と努めた。滿洲事件の際には外國利権屋等の慾深いのを利用し國際聯盟、リットン調査團をして散々に日本を中傷悪罵し世界の同情を一に支那の上に集めた。」(p.61)

・「現事變に際し支那のラヂオ宣傳は素晴らしい効果を擧げ毎日日本を遙かに凌いで居た。ラヂオ宣傳の目的は支那國民の抗日精神鼓吹と外國の同情喚起にあり、事變頭初に南京放送局では頻りに通州、豊臺、北京附近の戦勝を吹聴したのも之が為であつたが、其の為通州、天津の暴動を誘發し數千名に上る支那市民の生命を殺傷した。放送側は豫め深刻な結果を豫想して行つたことだが國民精神の作興はいいとしても困つた嘘は決して國民を裨益するものではない。」(同上)

・「一方日本の放送御役人等は單に日本軍の進出や海陸空軍の勝利事實だけを發表して安心し切り、何故斯くは進出せねばならなかつたの理由に就ては一切御構ひなした、

かの英國が大成功を収めた様な宣傳弘報の出來榮へは到底望むべくもない。特に日本の宣傳者はラヂオ、印刷物、其の他の言論を問はず、人間の心理を全く無視した遣り方だ。例へば日本の防共精神は確に世界の理解、共鳴を博し得るにも拘らず、日本の為政者は今更改めて世間に喋々するの要を認めず、至誠は月日と共に自ら通ずるだらうと御高く止つて動かない。ところが世間には屢々「後ろ暗い者は黙る」と謂ふ場合が多いのだ。」(p.62)

・「日本には幾多の宣傳機關があつて御用を務めるが其の多くは氣の毒にも人間の心理に就て認識、判断を缺いて居る⁹⁴⁹。何人も自慢や手前味噌を聞かされるのは有難くない。正しい理由を落附いて説明して貰へば足り、夫れ以上勇敢さや追撃振りを褒めることは第三者に任すべきである。此の點で支那は遙に日本に優り、列國をして支那に代つて代辯者の役を務めさせる。去る十月末上海陥落の直前に支那側代辯者は其の外人の觀察談を發表して得意がつて居たが、夫れには今次の上海戦に依て日本は軍國として第二流以下に落ちたと述べられ之が今次上海戦の収獲の一つだと謂ふのである。今でこそ之を信ずる人は居ないけれ共當時諸外國は之を其の儘本當と信じて居た。又各通信社は日本軍の勝利を小さく報道する一方、支那軍の「堂々たる後退」振りを褒めちぎり、これこそ長期抵抗の豫定行動だと強調し、凡有困難辛苦を克服して戦勝を導いた日本兵の健闘には殆ど言及しない有様である。」(p.62-63)

・「日本の弘報工作は著しく統一を缺いて居た。同國の首腦者等は黙つて勝ちさへすれば、戦敗國の泣き言に優ると考へて居るらしい。併し列國の考へは夫れとは反對である。世界の反日態度は實に猛烈を極めるが之は宣伝下手に由因する。

斯かる情勢下で日本は如何なる處置をとるべきか、夫れには社會心理に通曉する有能なスタッフを速に集め、此の人々をして世界の對日認識を是正する仕事に十分の働きを為さしむべきである。同時に日本の不人氣を研究して之が真因を突き留むべきだ。此の二題目で随分澤山の仕事があるが未熟の人々は役に立たぬ。世間には社會心理の専門學者にして本目的の五箇年計畫を立案出来る人物も少くない。そして内外に向つて正しい認識を會得せしめ日本軍に加へられる不當な中傷を打破すべきだ⁹⁵⁰。」(p.63)



図 96 George Gorman と娘 Catherine
撮影時期：1931 年ころ
出典：Britain & Japan: Biographical Portraits.
p.507.

⁹⁴⁹ 戦後も同様か：「……ODA（政府開発援助）の問題、なんか日本というのは、相手が必要だといっていないのに、欲しそうだとあげちゃってるケースがあるような気がするんです。」。[永六輔、もっとしっかり、日本人、日本放送出版協会、1997、p.163-164]

⁹⁵⁰ 外国人からの同様な指摘。[本書「2.2.17 捕虜のアドバイス」]

ちゆ 中央公論社員の南方占領地視察（42年10月～43年5月）⁹⁵¹

○「昭和十七年（一九四二）十月、陸軍報道部の企画による主要雑誌編集長十一名の一行にくわわり、わたしは南方占領地視察の旅にのぼることになった。こんどの場合、徴用と同様の趣旨で扱うから、個人的な都合による辞退はみとめないということであった。が、つねづね陸軍を蛇蝎のように嫌っていた畑中繁雄編集長が病気を口実に辞退したために、陸軍報道部「六日会」担当のわたしにお鉢がまわったのである。一行のうち編集長でないのは週刊朝日の渡辺綱雄とわたしだけであった。

報道部から申渡された旅行の目的は、現地における日本軍政の浸透状況を視察し、それぞれの雑誌の立場から、読者の啓蒙、宣伝にあたれということであった。[中略]

改造は、八月号、九月号に連載された細川嘉六の論文「世界史の動向と日本」が谷萩陸軍報道部長の指弾にあつて発禁処分につせられ、筆者細川は検挙されるという筆禍をおこした直後だったためにオミットされた。フィリピン方面に赴く文芸春秋編集局長・斎藤龍太郎ほか数人の人たちは、一足おくれて出発することになった。

[中略] ...わたしの場合、編集長は病気不参加、六日会担当のわたしも辞退したとあつては、報道部の心証のことも考えないわけにはいかなかった。それに、わたしは、内心、いまのように「勝った、勝った」の状況が長くつづくはずはないとおもっていた。それなればこそ、「何でもみてやろう」という気持がつよかった。せつかくこの時代に生まれたからには、強烈な歴史のひとこまを自分の眼でたしかめておきたかったのである。」(p.150-151)

○「行くと決心した日、わたしは、銀座の三越へ行って、うすい夏ものの国民服を買った。雑繊維でつくった生地で、二十円だった。涙をのむおもいで、長髪も切ってイガグリにした。陸軍あたりからとやかくいわれない用心だったが、これはいささか早まった。さすがの陸軍もそこまではとやかくいわなかった。」(p.151-152)

○「いろいろな手続をすませ、かたわら、軍務局南方班長の高橋中佐や、現地の視察旅行から帰ったばかりの戦備課長の岡田菊三郎大佐、報道部の竹田光次少佐などから、太平洋戦争の現段階と南方占領地にかんするあらましの予備知識を注入された。

広島市の天城旅館へ落ちあつて、出発を待っていた十月二十六日と言えば、ガダルカナル島においては、第二師団を基幹とする総攻撃がまったく失敗に帰し、東部ニューギニアにあつては、堀井部隊（南海支隊）が、ブナの海岸を目ざして潰走をつづけているさなかであった。そして、シンガポールへついた十一月十六日は、奇しくも南太平洋方面の戦局に対処するために、あらたに今村均中将を総司令官とする第八方面軍の編成された日であり、第三十八師団をもってするガダルカナル島最後の総攻撃が実施されようとする二日前にあつてた。

⁹⁵¹ 以下、黒田秀俊『もの言えぬ時代』から引用。

しかし、当時のわたしたちに、そのような戦局のわかろうはずはなかった。いや、わたしたちどころか、軍の内部にあっても、陸海両統帥部の作戦関係者以外には、くわしいことはほとんど知らされていなかったようである。それに、なんととっても、昭和十七年いっぱい、真珠湾の不意討ちと各地域における植民地軍を相手の緒戦の戦果に、軍人は胸をふくらませてそりかえっており、国民もまた、勝利の酒に酔い痴れていたときであった。六月四日のミッドウェー海戦の惨敗は、極秘中の極秘で、作戦中枢の限られた人にしか知らされなかったらしい。編集者の南方視察は、ガダルカナル島やニューギニアの敗戦をよそに、このような戦勝気分のなかに計画され、実施されたものであった。報道部も、何も知らされていなかっただろうとおもう。それであれば、こんなおんきな企てを実施にうつすはずはなかった。

出発に際して、谷萩報道部長は、「諸君の航海については、軍としては万全の手段を講ずるつもりだから、安心して行かれるように」といった。その意味は、宇品で乗船するときにはじめてあきらかになった。わたしたちは、国際法を犯して病院船に乗せられたのである。病院船に乗ったことは、生涯口にしてはならぬときつく申しわたされた。」(p.152-153)

○「宇品の港を出たところで、はるか遠くに、大和だか武蔵だかしらないが、すばらしく大きな軍艦の姿を見た。誰かが、「あんな軍艦をつくるから戦争をしたくなるんだ」といった。

便乗者は千人あまりで、種々雑多な民間人を乗せていた。流行の慰問団のほかに、シンガポールその他で料理屋をひらくという一旗組や、芸者や板場がいるかとおもうと、カフェーの経営者、熔接工、時計の修理工、自動車の運転手、三味線直しの職人、占領地で日本座敷をつくるための大工、左官、畳屋、南方に事業をもつ商社の社員、軍の酒保やホテルで働くという女事務員など、このときとばかりに外地へ行けるよるこびのうちにいくらかの不安もまじえて、いずれも興奮気味にひしめいていた。

どこかのビール会社の社員とかいう人が、ビールの箱をおそろしくたくさん積みこんで乗っていた。長い航海のあいだに、わたしたちは、栗山茂事務長にたのんでビール会社の人からビールをわけてもらい、大いに鼓腹したこともあった。みんな船倉に入れられていた。しばらくはわたしたちもそこにぶちこまれたが、いくらなんでも一旗組並みはひどすぎるといい、事務長にかけあって、ようやく上甲板に二十畳足らずほどの部屋をもらった。その三分の二ほどを私たちが使い、あとの三分の一を同行の女流作家の人たちが使った。女流作家の顔ぶれは、林芙美子、佐多稲子、小山いと子、美川きよ、水木洋子らの人びとであった。」(p.153)

○「この船は病院船だったので、隊長は京都府立医大から応召した軍医中尉で、その下の少尉や見習士官も、慈恵や熊本医大の医局あたりからひっぱりされてきた軍人らしくない人ばかりであった。事務長の栗山茂は慶応の出身で、もともと大阪商船の社員だったが、船員の不足で船に乗るようになったのだそうである。もう二回水につかりましたよ、と笑っていた。事実潜水艦の脅威は、そのころすでに戦慄すべきものであるらしかった。だから、白塗りの船腹に赤十字のマークを描き、夜でも堂々と電燈をつけて航行するこの船に乗っていても、救命具のつけかたの演習もしなければならず、

そのほか、甲板へ出てはいけない、紙屑や果物の皮を海に捨ててはいけないというわけで、潜水艦にたいする警戒は嚴重をきわめた。

隊長と事務長は、暇をみては、わたしたちの部屋へ話にきた。隊長がくるので、兵隊は遠慮してあらわれなかったが、ごく稀れには一人二人の見習士官がのぞきにきては話していくこともあった。一個小隊の兵員が乗り組んでいるということだった。

「もう戦争はこりごりですよ。こんな時代に生んでくれた親たちを恨むばかりです」と、憲兵のいない海の上なので、正直に自分たちの気持を告白するものもあった。
[中略]

十二ノットで航行十六日目。シンガポールがみえるときいて、船窓からのぞくと、低い平らな陸地に、奥行のないマッチ箱を立てたような高い建物が一つ眼に入った。八階以上の建物をみたことのない眼には珍しかった。これが、富兵团（マレー派遣、第二十五軍）に収用されている十二階建のカセイ・ホテルであった。港に入ると、十一月半ばというのに、岬は眼のさめるような鮮かな緑に蔽われ、海水はゆらゆらとゆれていた。

憲兵伍長が乗りこんできて、ひとわり携帯品をみてまわった。それから乗船全員を船艙に集めて、憲兵中尉の話があった。ここは占領地で軍政下にあるのだから、内地にいるようなつもりでいてはならない。とくに、病院船に便乗してきたことは絶対に口にしてはならない。もしそれを口外した場合には生命の保障もいたしかねるから、そのつもりでくれぐれも注意してもらいたい、とおどかされた。」(p.154-155)

○「報道部の田村中尉の案内で、一行そろってシンガポールの戦跡を見学。それからジャワへわたり、ジャワを一巡してシンガポールにもどった。大半の人はここで帰国の途についた。何でもみてやろうのわたしは、ここから単身北上、途中、マラッカ、クアラルンプール（土地の人は「コーランポー」と発音した）、イポーを経て、ペナンへ寄り、タイに入った。さらにタイをつつ走り、バンコクから飛行機でビルマのラングーンにとんだ。ラングーンから高原の町メイミョーを経て終点ラシオにいたり、ここでまた日暮れに出る軍のトラックに便乗して箱根の山を何十倍にもしたような山また山の滇緬（てんめん）公路⁹⁵²を夜どおし突破、十一時間ぶっとおしにゆられて、早朝、中国雲南省の芒市に入った。恵通橋を挟んで敵味方対峙しているところまでいってみるつもりであった。

南方占領地のうち、シンガポール、ジャワ、マレー、ビルマを経て、裏側から中国の一部に足を踏み入れたわけである。」(p.155)

○「わたしは、ジャカルタ（そのときはまだバタビヤといていた）へ着くと、すぐ毎日新聞の記者の世話でデンデルスというホテルに落着いた。このホテルは尉官級の将校宿舎になっていた。わたしの通された部屋には、どこかの部隊の軍医中尉で、休暇をとってバタビヤへ遊びにきているという先客が一人いた。

「バタビヤは酒と女に不自由しなくていい街ですよ。どうです。今夜、つきあいませんか」

⁹⁵² 【公路】「②中国で、幹線道路。自動車道路。」、『広辞苑』

街はずれに近いマンガライというところには、白人の女たちを収容している将校専用の慰安所も設けられているという。敵性国の婦人たちで、生活の途に窮したものは、強制的にここへ入れられて働かされるのだそうである。

「なかなかきれいなものもありますよ。もっとも、そういうのはたいてい参謀の奴らがひとり占めしていますがね」

と軍医はいった。わたしは、軍医の話を書いているうちに、占領地の士気の弛緩におどろいた。

宣伝部へ申告に行くと、デス・インデスというホテル⁹⁵³のほうがいいから、そちらへうつれとって案内してくれた。わたしは別に待遇をよくしてもらおうとはおもわなかったが、酒と女の話ばかりしている軍医中尉にはいささか辟易していたので、これ幸いとホテルをかえた。ジャワは占領地のうちでもっとも治安がよく、日本人さえいないところならどこへいっても安全だといわれた。日本人は酔っぱらって喧嘩をするし、そのうえ、軍人は威張りちらすときているので、いちばん始末が悪いとされていた。

日本人は、元来、短気で、感情にはしりやすく、愛憎つねなき欠点をもつうえに、何かといえば軍を背景にものをいいたり、自分より弱いものを軽蔑したり、抑えつけたりする。そのうえ島国根性まるだしで、些細なことにまで目くじらたてて理屈をこねまわすかとおもうと、それがまた観念的で、神がかっていて、相手に理解されるはずもないのに、理解されなければされないで、また腹をたてるのである。そして、こういう日本人の短所は、軍閥が政権を支配するようになって以来、いっそう甚しくなっていた。それがそのまま占領地にもちこまれてしまったのである。戦時中の日本では、大きな方針は何一つ決定をみなかつたにせよ、こせこせした干渉ばかりがおこなわれ、女子のパーマネントにまで文句をつけたほどであったが、軍政の実態もこれとおなじで、そこには異民族を包容するだけのスケールもなければ、政治性もなく、いたずらに煩雑きわまる法律や規則をつくって現地人を戸惑いさせるだけであった。

しかも、一方においては、料理屋やカフェが軒をならべ、夜ごとに女の嬌声がきこえてくるかとおもうと、街を歩く日本人は、眼を光らせ、肩を怒らせて現地人を見下し、酔っぱらっては人のいいベチャ（三輪車）を殴りつけたりするのである。これでは、占領が長びけば長びくほど、現地の民心を失うことは火をみるよりもあきらかであった。」(p.156-158)

○「昭和十七年（一九四二）十二月八日は、わたしたちはジャカルタに滞在していた。この日は、ちょうど開戦一周年にあっていたので、軍政監部主催の記念式典が、市の中央部のコーニングスブレイン広場で、宣伝と示威をかねてかなり盛大に催された。〔中略〕海軍は海軍で、別に警備府内で祝典をあげたということであった。おなじ国の陸海軍でも、何ごとによらず別々であった。」(p.158)

⁹⁵³ 恒石がこのホテルの前で撮った写真がある。(心理 112)

○「ビルマ派遣、林兵団（第十五軍）司令部は、ラングーン大学跡におかれていた。わたしは、のこのこと出かけて行って、この一室で、高級参謀・片倉衷（ただし）大佐に会った。片倉大佐は、

「南方地域で、現に戦争をつづけているのはビルマだけです。ビルマ作戦の目的は、いうまでもなくビルマ全域を防衛し、援蔣路線を分断することにあるのだが、そのほかに、米英の兵力を太平洋に集中させないためにも大きな役割を果している。これは口でいうのはやさしいが、なかなか容易なことではない。そして、戦いつつ、戦いのなかで建設をおこなっている。このきびしい現実の姿をよくみてってください」

といった。〔中略〕

重慶に軍需物資を送るだけの目的で、重畳たる山脈を縫って軍用トラックが列をなして通う滇緬（てんめん）公路を建設した米英の底知れぬ実力を、実際に通ってみてきただけにわたしはあらためて思い返した。事実、恵通橋を挟んでの戦況も、アメリカ式装備の重慶軍の圧迫の前に、じりじりと苦悩の色を濃くしつつあったのである。」（p.159-160）

○「ラングーンを発って来る日、ミートキーナ⁹⁵⁴の作戦に従軍するという朝日、毎日、同盟の記者といっしょになった。昭和十八年（一九四三）二月七日の朝であった。空襲のあい間を縫いながら旅をつづけなければならないので、いくどとなく往復しているこれらの人たちと道づれになったのは心づよかった。灼^(ママ)きつくような昼間の暑さにもかかわらず、夜になると急に冷えて、頭からすっぽり毛布をかぶってもまだ寒さにふるえた。翌日の午まえ、爆撃で不通になっているというので、途中で汽車からおろされた。新聞社の人たちは馴れたもので、すぐ原住民の牛車を雇い、わたしもいっしょに乗せてくれた。兵隊は木立ちのあいだの凸凹の道を砂ぼこりをたてて歩いた。

イラワジ河の河畔に出ると、マンダレーに昼間入るのは危いといって、土民の舟で河を渡った。このあたりは、ビルマでもとくにパゴダ（仏塔）の多いところで、左岸の丘陵にはいくつものパゴダがみえた。

「どうもたいへんな旅ですね」とわたしがいうと、

「あなたは中国の戦線へ行かれたことはありませんか。中国では、こんなにのんびりと河を渡ることもなんかおもしろいもありませんよ。兩岸のどこかからかならず弾がとんできます。それをおもうと、のんきな旅ですよ」

と朝日の人がいった。「まあ、ちょっとしたピクニックのようなものだな」と同盟の人があいづちをうった。」（p.160-161）

○「サガインにつき、その兵站宿舎で休んだ。この付近にもおびただしい爆弾のあとがあった。寝台にもぐりこんで昼寝をした。夕方、マンダレーに向って出発することになり、馬車を雇って鉄道沿線に出た。線路はまだ復旧していなかったので、付近のくさむらに寝て待ったが、結局、今夜中には開通しないことがわかったので、ふたたびサガインの兵站宿舎に引返し、一行四人で、ローソクの灯をかこみ、みんなが携えてきたウィスキーと缶詰をきって小宴をひらいた。

⁹⁵⁴ 資料「ビルマの戦い」

「だいぶん空襲が激しいようですが、おし返すことはできるでしょうか」

わたしは、ビルマに来て以来、心にかかっていることを率直にたずねた。

「いまが精いっぱいのところでしょう」

「時間の問題だとおもうな。敵は日増しに増強されていくのに、こちらはぜんぜん補給がないんですからね。飛行場はあっても、飛行機はなし、電波探知機もなし、ラングーンのほかには高射砲もない始末ですからね。日本の兵隊だから戦っているようなものですよ⁹⁵⁵」

「宣伝部の将校の話ですと、もう少しすれば、内地から飛行機もくるし、さうとう自信のあるような話をしていましたが」と、わたし。

「あいつらはバカですよ。あいつらはなんにも知ってやしない」

「高級参謀なんか、あれで軍人としては優秀なほうだろうが、ビルマ新聞（読売経営）へ載る記事には、かならず『天祐神助』という文字をいれさせるのだそうだ。高級参謀にしてそれだからね」

と、こもごも語った。日本のウィスキーを空にしながら、戦争の前途について、みんなが腹藏なく語りあった。が、結局、誰の口からも明るい見通しはきかれなかった。「敗けるまでやるバカはない。そのうち、なんとか講和ということになるんじゃないかな」と誰かのいったことばが落ちになって、「さあ、明日は早いぞ」とばかりみんながベッドにもぐりこんだ。朝日、毎日、同盟、みんな若くて優秀な記者ばかりだった。翌早朝、記者たちはミートキーナに向けて元気に出発した。ラジオに向うわたしは、軍のトラックに便乗することになって、あとに残った。」(p.161-162)

○「ラジオにも芒市にも警報用のサイレンがなく、爆音がきこえはじめてから、当番の兵隊がカネやバケツをたたいて知らせるのであった。友軍機の飛ぶことはなかったから、爆音といえば敵機に決まっていた。音のするときには機影はすでに上空にあった。兵隊は「空襲、空襲」と叫びながら、大急ぎでカネやバケツをたたいて自分も壕にとびこんだ。対空火器というものは何一つなかったから、敵機が飛んでくれば、壕にかくれて鳴りをひそめるよりほかしかたがなかった。日本軍にかんするかぎり、まことに近代戦らしからぬことばかりであった。

ビルマはカルカッタを基地とする B25 爆撃機の編隊と、雲南を基地とするアメリカ空軍の戦闘機とがマンダレーを境として連日来襲した。戦闘機は人影をみると、たとい一人でも射撃した。飛行機も対空火器もないことを知っていたからなめきっていたのである。B25 の編隊は、午すぎに決まって来襲したので「定期便」といわれた。埠頭、橋梁、停車場、物資集積場などが主な目標になっていた。

⁹⁵⁵ 「中西 [輝政] ええ、戦略はもう、全くの外道なんです。ですから、当然ながら佐藤幸徳師団長の「抗命」などがインパルでありました。ところが末端で前線に行かされる方は、従容と戦場に赴き、一条乱れず戦い抜いた。ヨーロッパの戦史を学んだ身からすると、もっとも不思議に思うのは、最後の最後まで日本兵の大規模な反乱が起きていないことです。ふつうは補給が来なければ即座に大反乱ですよ。中国軍だって目の前でしょっちゅう反乱しているんですから、日本兵がそういう気を起こしても不思議はない。」 [『あの戦争になぜ負けたのか』 p.183]

わたしがラングーンのマングラドン飛行場から軍宣伝部についたときも、まるで待っていたかのように空襲のサイレンが鳴った。村時雨⁹⁵⁶のような機銃の音、重く、鋭い高射砲のひびき、腹の底までゆさぶるような爆弾の轟音、ガソリンの集積場でもやられたらしく、黒煙が空にたちのぼる。わたしは、宣伝部の将校と、防空壕のなかで、来着のあいさつを交わすような始末であった。」(p.162-163)

○「わたしは、昭和十八年（一九四三）五月末に帰社した。六月八日、恒例によって、全社員の前で旅行の報告をおこなった。この戦争については見込みがないともいわなかったし、勝つとも絶対にいわなかった。わたしの見てきたとおりをありのままに話し、どうけとるかは聴くものの判断に委ねた。社長だけが、「君の話、おもしろかったよ。新聞には出ない話だったからね」といつてくれた。

陸軍報道部の雑誌担当は平櫛孝少佐から杉本和朗少佐に代っていた。あたかも六月号に掲載された京大教授・高坂正顕の「思想戦の形而上的根拠」が報道部の批判にさらされていた。南方ボケの頭で帰ってきたわたしは、太平洋の黒潮（日本海流）から日本海の親潮（千島海流）の渦巻に巻きこまれたような戸惑いをおぼえた。

帰還のあいさつに報道部へ行くと、高級部員というか前任の秋山邦雄中佐から、「実は中央公論はこのところ毎号注意をうけているのだが、編集があらたまらないので、いま、こちらで問題になっている」と、意外なことをいわれた。軍人は総合雑誌というものの性格をよく知らないのではないかとおもった。わたしが秋山中佐と話しあったのはこのときがはじめてだったが、これを機として、以後、社がつぶされるまで⁹⁵⁷接触をかさねることになった。」(p.165-166)

⁹⁵⁶ むらしぐれ【村時雨】「一しきり強く降って通り過ぎる雨。」。[『広辞苑』]

⁹⁵⁷ 44年7月。[本書 p.154]

ちゆ 駐在武官

○立川京一. 我が国の戦前の駐在武官制度. 防衛研究所紀要第 17 巻第 1 号. 2014 年 10 月. から引用。

・「同局 [参謀局] は 1878 年に廃止され、参謀本部が新設されるが、その際の参謀本部条例には在外公使館付陸軍武官に関する規定がなく、1893 年 10 月 3 日の同条例の改正によって、参謀総長が在外公使館付陸軍武官を統轄することが定められた (第 4 条)。そして、日露戦争後の 1908 年 12 月 18 日の同条例改正によって参謀本部第 2 部が情報業務を所掌する部門になると、在外大・公使館付陸軍武官は同部の担当業務区分に入る。」(p.141-142)

・「在外大・公使館付武官に任命される軍人の階級は、草創期には尉官であることが間々あったが、その後は、陸軍の場合は佐官 (必要に応じて中将・少将)、海軍の場合は少将・佐官が定員上の決まりであった。また、大使館付は将官・佐官、公使館付は佐官であった。」(p.142)

・「在外大・公使館付陸・海軍武官補佐官は武官同様、陸・海軍それぞれの軍令系統の長である参謀総長・軍令部総長 (1933 年に海軍軍令部長から改称) の隷下に属し、大・公使の監督を受ける。それと同時に補佐官は、武官の監督・命令・指揮等を受ける。[中略] 特筆すべきは、暗号⁹⁵⁸を組んだり、翻訳したりするのが補佐官の役割であった。」(p.147)

・「在外大・公使館付武官が夫人を同伴して駐在する場合、夫人は武官の強力な補助者であった。」(p.150)

⁹⁵⁸ ○参謀本部側は第二部第八課に特殊情報 (暗号) 担当がいた。[本書. p.45, 46, 331]

○池田ら駿河台分室の放送原稿作成関係者は、「日の丸アワー」放送に使う捕虜が秘密連絡するのを防ぐため、参謀本部の暗号解読室で講義を受けている。[『日の丸アワー』p.59-60 / 『駿河台分室物語【本編】』p.119-123]

・「1883年、陸軍は参謀の養成を目的とする陸軍大学校を設置した。同校卒業時の成績優秀者（後年は、各期上位約10人）には欧米諸国に駐在する機会を与えることが慣例となった。また、基本的に成績優秀者以外から中国に駐在する者（複数）が選ばれた⁹⁵⁹。[中略]…在外大・公使館付陸軍武官のほぼ全員が陸大卒業生であり、例外は数えるほどしかない。陸軍の場合、陸大を卒業していることが在外大・公使館付武官の必須に近い条件になっていたといえよう。」(p.151)

・「本人の実力もさることながら、華族であること、すなわち爵位を有していることが、外国人との交際上、物を言うと考えられていたことによる人事ではないかと思わせる節もある。陸軍では、侯爵の前田利為、伯爵の寺内正毅、久松定謨、海軍では、公爵の一条実輝、一条実孝、島津忠重が、英国（島津、前田）やフランス（一条親子、寺内、久松）で大・公使館付武官を務めている。」(p.152)

・「全般的に、在外大・公使館付武官には、いわゆる軍政畑や情報畑を歩んでいる者が任命される傾向にあったといえよう。」(p.153)

・「在外大・公使館付武官としての駐在先が決められる上で、最も重要となる要素は、それまでに修習した外国語である。陸軍の場合、幼年学校出身者はドイツ語、フランス語、ロシア語のいずれかを、中学出身者は英語を修習しており、また陸大ではロシア語か中国語を選択するようになっていた。」(同上)

・「さらに、先述の「1927年7月から33年1月まで在フランス大使館付武官補佐官を務めた」諫山「春樹（当時、大尉）」が「日本の語学教育、殊に陸軍における語学教育なんていうのはなんら価値がなかった」と述べているように、中学校や陸・海軍の学校における外国語教育には限界があった。」(同)

・「日本の対外大・公使館付陸・海軍武官は軍令系統の長に従属する軍人であると同時に外交官であり、大・公使の監督を受ける立場にある大・公使館員として館員名簿に記載され、外交特権を付与された。武官事務所は大・公使館内に置かれることもあったが、別の場所に設けられることが多く、陸・海軍武官も別々に事務所を構えるのが一般的であった。会計も大・公使館から独立し、陸・海軍予算によって賄われ、武官は本俸のほか在勤俸を受け取り、接待、情報収集等に必要な経費は機密費として交付された。」(p.159)

⁹⁵⁹ 中国を重視する軍人もいた：「[31年] 東大を卒業した [鳥取池田家の次の当主となる] 徳真氏の留学について、財界人などで構成されていた池田家の相談役七人は英国と決めた。このとき、その一人だった内山小二郎陸軍大将（元侍従武官長）が言った。「私は反対でござる。これから関係ある大国はアメリカ、ソ連、中国。この三国に一年ずつ行って、英国は最後でよい」 満州事変直後の当時、先見の明があった言葉として、徳真氏の胸にいまも残っている。」。[「日本の肖像：鳥取池田家（旧侯爵）」 p.78]

つか 塚田数平

○「証人としての出廷が終ると、F B Iとの例の約束によって、あと数日しか一〇ドルの日当をくれないのだから、証人はみんな日本に帰って行った。塚田老人が私に、もう少しなさいと言ってくれるので、あと一〇日ほどいた。塚田数平氏は、新潟県高田市の人で、一九〇五年（明治三十八年）に船員としてニューヨークに来たのだが、そのまま一度も日本に帰らずにここで働き、その時は大成功者になって「都レストラン」を経営していたのである。われわれが一日一〇ドルで困っているのを見て、お金もくれたし、たびたびご馳走にもなり、一方ならぬお世話になった。」⁹⁶⁰

○「…客員教授としてコロンビア大学へ行っていた湯川秀樹博士が二十八年帰国するにあたり、その次男が大学生活の途中であったため、ひとり残して帰国した時、後事をすべて塚田数平に託したという。」⁹⁶¹

○「[井上通信員発] 最近日本から来る旅行者は一般に非常な切りつめた生活をしている「いわゆるテン・ダラー・ア・デー・マンの境遇ですから」となげいた旅行者に会ったが、ホテル代、食事代、小遣金をいれて一日十ドルはお定りのあてがいぶちである。[中略] …一日二、三ドルのホテルに宿泊するのはよい方で食事はドラグストアやキャフェテリアの簡単なところですよませている。こうした日本人旅行者のなかにあつて尾崎翁のアメリカ滞在⁹⁶²はまことに豪しやをきわめたものであつた。[中略] 記者が塚田[数平]氏に尾崎氏招待の動機をただと、「戦時中つくづく考えたことは日本もバカなことをやつたものだということでした。もし日本に尾崎さんのような人が百人もいたらあんな戦争は起らなかつたにちがいないと考えました。戦後日本人は沢山来ているが、アメリカ人の心持をやわらげるような人は一人も来ていません。こんなことのできる人は明治時代から今日まで終始一貫戦争に反対して来た尾崎さん以外にないと考えて、三年も前から翁をアメリカに招待することを計画し、一番よい時期は尾崎さんのおくつた桜の咲くころと思つたのですがおくれたのは残念でした」と答えていた。尾崎翁がこちらの歓迎ぶりに気をよくしていることはもちろんであるが、それにこちらで非常にすぐれた聴音器を手に入れたため人の話をきくのに楽になったそうだ。記者が湯川博士と一緒に翁を訪問した時⁹⁶³は非常に元気で談論風発……」

⁹⁶⁴

⁹⁶⁰ 『日の丸アワー』 p.205.

⁹⁶¹ 新潟県上越人物史研究会編. 新潟県人物百年史頸城編. 東京法令出版, 1967, p.217.

⁹⁶² 「渡米に先立ち天皇陛下に拝謁してお別れを言上し、マッカーサー元帥の送別を受けた尾崎の最後の海外旅行は一九五〇年の五月一六日から四〇日あまりの旅であった。」

[原不二子. “欧米の文献に見る罌堂”. 罌堂 尾崎行雄. 相馬雪香・富田信男・青木一能編. 慶應義塾大学出版会, 2000, p.201]

⁹⁶³ 「湯川秀樹著作集 別巻」岩波書店 1990年巻末に湯川秀樹博士の年譜が掲載されています。それによると、1948（昭和23）年9月1日：アメリカ出張（プリンストン高等学術研究所客員教授）1949（昭和24）年8月29日：コロンビア大学客員教授となり、ニューヨークに移る。[以下略]。[浜松市立中央図書館回答. 2023-01-08]

⁹⁶⁴ 尾崎罌堂全集編纂委員会編. 尾崎行雄. 公論社, 1955, p.622-623. (尾崎罌堂全集 第十卷)

つる 都留重人

○Wikipedia

「(つる しげと、1912年〈明治45年〉3月6日 - 2006年〈平成18年〉2月5日)は、日本の経済学者。一橋大学名誉教授。公害の政治経済学を提唱し、雑誌『公害研究』（現『環境と公害』）創刊。

初代一橋大学経済研究所長、第6代一橋大学学長、ハーバード大学客員教授、イェール大学客員教授、国際経済学連合会長（日本人初）、日本学士院会員等を歴任した。日本人として2人目のハーバード大学名誉学位保持者。国民経済計算における三面等価の原則の考案・命名などをおこなった。

略歴

東京都生まれ、名古屋市育ち。小学校第5学年修了、熱田中学校（現・愛知県立瑞陵高等学校）第4学年修了を経て第八高等学校（現・名古屋大学）に入学したが、日本の中国侵入に反対し欠席届を出さずにストライキを起こしたため（反帝同盟事件）、宮崎辰雄（元神戸市長）、田中文雄（元王子製紙社長）、河本敏夫（元通産大臣）らとともに除籍される。

日本の大学に進学できなくなったため、アメリカウイスクンシン州のローレンスカレッジに1年間留学し、ハリー・ホワイトなどの授業を受ける。その後ハーバード大学の学部に入學し、1935年（昭和10年）に優等賞を取得し卒業、同期でただ一人大学院に進学した。大学院では後に高名を馳せたポール・サミュエルソンが同窓生。1936年（昭和11年）、同大大学院で修士号取得。結婚後、1940年（昭和15年）、同大大学院で博士号(Ph.D.)を取得。博士論文は“Development of capitalism & business cycles in Japan, 1868-1897”。そのままハーバード大学講師となる。

1942年（昭和17年）、第二次世界大戦勃発（日米開戦）を受けて辞職して交換船で帰国後、妻の伯父である木戸幸一が重光葵に頼み、外務省嘱託として就職。

1943年（昭和18年）、旧制東京商科大学東亜経済研究所（現一橋大学経済研究所）嘱託研究員。その後都城で二等兵を務めたのち、外務省勤務。

1944年（昭和19年）6月、東條英機により、意見が対立していた木戸に圧力を掛ける目的で、解雇された上、召集令状が出されて陸軍に徴兵された。しかし、木戸が東條の秘書官であった赤松貞雄に頼み込んだので、赤松は木戸の依頼に応え、外務省から都留のために「余人をもって替えがたし」という申し入れを陸軍に出させるように取り計らい、3カ月で除隊となった。

連合軍最高司令官総司令部経済科学局調査統計課勤務を経て、1947年（昭和22年）、片山内閣の下で経済安定本部総合調整委員会副委員長（次官級待遇）に就任、第1回経済白書『経済実相報告書』を執筆した。⁹⁶⁵

⁹⁶⁵ “都留重人”. (参照 2023-02-25)

でん 伝 単

伝単の歴史

○「戦争に伴う重要な宣伝手段として伝単なるものが大量に登場したのは、第一次大戦に始まるのであるが、それは第二次大戦においても欧州の各戦場に於て更に活発に利用されていた。昭和十五年八月参謀本部は、近い将来米英蘭に対して作戦を意図することある場合に備えて、第八課に命じて所要の調査研究とその作成に当らせることとなり、第八課多田督知少佐（〔中野学校〕教職員）を主たる指導者として神田淡路町にその事務所を開設した。対象として、予想される諸国の民情、軍隊内の習慣、作戦地域現地諸民族の状態などの調査等のため多くの民族学者、文化人等をはじめ、太田天橋、那須良輔、松下井知夫その他の漫画家、画家、写真家等が動員された。

〔中略〕伝単は敵の軍隊に対するものと、作戦地域住民に対するものとに区分され、敵軍に対するものには一般伝単の他投降票、住民むけのものとしてはその他、ポスター、マッチペーパー、救急薬品外装用の宣伝文等が作られた。」⁹⁶⁶

○「「伝単」という言葉が、日本軍の間でいつ頃から使われはじめたかは、明確ではない。この言葉は、中国語で「ビラ」を意味するが、日本軍の誰がこの言葉を最初に使ったかも、今のところわかっていない。とにかく昭和十二年七月十四日⁹⁶⁷、いわゆる「日中事変」なるものがはじめられたとき、日本軍は「敵」に対して宣伝工作、謀略などに関するビラを作り、これを「伝単」と呼んでいたことは確実である。後にこの言葉は、「謀略宣伝のためのビラ、新聞」など、あらゆる印刷物に対する俗称として使われるようになり、アメリカ軍が日本側に対して撒いた、投降勧告ビラ、宣伝ビラ、新聞などの類までも総称して「伝単」という言葉で呼ぶようになってしまった。米軍の撒いた「伝単」の多くは日本側では前線の兵士は無論のこと、一般市民も、これを拾って読むことを堅く禁止されていた。極端な場合、これを持っていることは、日本軍、ないし政府によって、かなりの重罪を意味していた。アメリカ政府は自国のビラを自国民には見せなかったし（そのサンプルには「SECRET」というゴム印が押されている）、日本の場合、日本が作った対外用の「伝単」は、国家の最高機密の一つであった。太平洋戦線だけで推定十数億枚 — 例えば「落下傘ニュース」だけでも、約四億枚刷られたという非公式な記録がある — も撒かれたはずの「伝単」が、現在極めて入手困難なのは、これらの事情によるものである。」⁹⁶⁸

⁹⁶⁶ 『秘録・謀略宣伝ビラ』 p.138.

⁹⁶⁷ 37年「7.7 深夜盧溝橋日中両軍衝突（日中戦争の発端）」、『近代日本総合年表』 p.310

⁹⁶⁸ 『秘録・謀略宣伝ビラ』 巻頭.

淡路事務所

「伝単作製のための事務所が創設されたのは昭和一五年八月で、神田淡路町の荒井ビルがこれにあてられた。これは参謀本部第八課に所属する秘密作業所であって、淡路事務所⁹⁶⁹と称した。防諜的見地からこの事務所への部外者の出入は禁ぜられ、部外者との連絡のためには近くの喫茶店を利用し、伝単作製に従事していた漫画家達は化粧品会社の広告のデザインをやっていることになっていた。」(心理 89-90)

○池田徳眞

「太平洋戦争開始に至るまで淡路町事務所、通称田中貿易は対外極秘の方針をとっていた。部外者は一切事務所内への立ち入りを許されなかった。そしてこの事務所で働く者は、何か用事がある時はいつでも事務所の外、例えば近所の喫茶店で会うのがルールになっていた。漫画家は事務所の外で人に会う時、化粧品会社のデザイン部門で働いているとウソをついた。なぜなら田中貿易の中の彼らは、日本軍がマレーとビルマに進撃する際に使用する伝単制作に没頭していた。それで誰かに見られれば、日本軍の次の動きが容易に分かってしまう。だから小岩井少佐は毎日事務所に来て全面的な警戒を怠らなかった。[中略]

挿絵は絵としていかにプロらしく見事に描かれていたとしても、その国あるいは民族の風俗習慣が正確に表現されていなければおかしな印象を与えてしまう。したがって漫画家はある特定の国や民族の絵を描く時は、徹底的に研究しなければならない。その上アジアでは文字が国ごとに違うから、伝単に正しく書くことは大変な作業だった。アジアの言語について言えばシャム語・安南語・マレー語、インドではウルドゥー語・ヒンディー語・ベンガル語などがある。さらに英語⁹⁷⁰はアメリカ・オーストラリア・イギリスの3様に書かねばならない。そこで漫画家は藤原[岩市]少佐の紹介で、日本に亡命し東京のホテルに滞在しているアジアの政治家や軍人⁹⁷¹に会った。彼らに数枚の絵を見せて風俗習慣のチェック、絵に合う日本語のその国の言葉への翻訳、さらには宣伝文句まで書いてもらった。素晴らしい出来だと言われても、漫画家は何がいいのか、それをどのように書くのかが分からなかった。だから彼らにとって原稿に従って不慣れな文字を書くのは、ひどく大変だった。」⁹⁷²

⁹⁶⁹ 「淡路町事務所」とも。[『陸軍中野学校』p.139／『日の丸アワー』p.21]

⁹⁷⁰ 前線の白人兵士向けの伝単も作られている。[『心理作戦の回想』巻頭写真]

⁹⁷¹ (伝単製作への協力の有無は不明だが)日本に滞在した独立運動家の例。

○インドのR.B.ボース。[本書「2.2.4 対インド宣伝」]

○ビルマのアウンサン(オンサン)は戦争直前日本に招かれている。[“ビルマの戦い” Wikipedia。(参照 2022-09-06)／資料「ビルマの戦い／戦前の工作(南機関)」]

⁹⁷² 『駿河台分室物語【本編】』p.179, 181-182.

「伝単は、東南アジアの現地人や、英印軍のインド兵を対象にしたもので、アジアにおけるイギリスの搾取ぶりとか、その歴史を、マンガで説いたもので、英語、タガログ語、インド語で書き、大日本印刷⁹⁷³に頼んで多色刷りにしてもらった⁹⁷⁴。これを数百万部、現地に送り、ストックしておき、開戦と同時に飛行機でパツとばらまいたが、この伝単は投降キップも兼ねており、持ってくれば無条件で受け入れることにしてあった。」⁹⁷⁵

「...桑原参謀の指示の下に小岩井大尉（後少佐）が指導して、神田淡路町の事務所で数人の漫画家達によって作製され、南方各地向けにそれぞれの言語で説明を加えた三色刷のビラで、数百万枚に及ぶものであった。そしてその輸送業務には小池 [周一郎] 憲兵曹長が当たっていた。」(心理7)



図 97 伝単「復讐！復讐！英軍の犠牲になるな」
出典：(心理. 巻頭写真)

⁹⁷³ 「[42年1月、文士らは] 基隆に着いて再び汽車で高雄に着き、高雄商業で南方出発まで待機しながら資材を分類して、宣伝班も数隊に別れました。整理中にマライ語のポスターの大きな間違いを発見して大騒ぎになりました。日本の印刷工場にスパイがいて活字をうまく変えてあり、日本の軍票を受け取らない者は死刑という所を軍票を受け取った者は死刑となっています。何万というポスターを全部焼き捨てることになり、校庭の掘った大きな穴の中で毎日毎日数えながらポスターを焼きました。[中略] 焼いたポスターの代わりを高雄で印刷することになり、私たちは幸いその係りになって外出が自由になりました。』。『わが遊戯的人生』p.94-95]

⁹⁷⁴ 「ただ日本軍のものは多色刷の豪華なものがほとんどであったが、米(英)軍のそれはモノクロが主体でカラーのものは稀であった。」(心理. 巻頭写真の説明)

⁹⁷⁵ 『昭和史の天皇3』p.168-169.

マレーの伝単戦

「伝単が紙の爆弾として明白にその真価を發揮したのは、開戦初期マレー戦線において対英印軍宣伝に使用されたときであった⁹⁷⁶。要するに英国の永年にわたる老獪なる植民地政策を暴き、独立獲得を呼びかけた伝単は、インド兵の心をゆさぶった。少数の英人幹部よりなる英印軍の中のインド兵は、日本軍の進攻に伴い、道路わきの樹林に逃避し、撒布せられた伝単とくに投降票を拾って大切に懐に入れ、続々として投降したので、事実上軍隊は崩壊したのである。そしてシンガポール要塞攻撃前⁹⁷⁷投降したインド兵は数千名に達した。すなわち彼我の出血を最少限に止めて投降を促進することができたのであって、これこそ伝単戦の真髄というべきであろう。[中略]

この朗報はただちに賞詞とともに関係者に伝達せられ、その作業に自信と激励を与えることができた。」(心理 95)

⁹⁷⁶ ○「比島、ジャワ、ビルマ等においても多数のビラを撒布したのであるが主として現地住民の共感を呼び、対日協力を促進するには大いに役立ったようであるが、敵軍隊に対する効果については詳かでない。」(心理 96)

○蘭印でも 42 年 2 月のパレンバン降下作戦で伝単が使用された:「[製油所の] 防空壕にいた原住民に早速伝単を配り「日本軍の敵はオランダ軍だ。インドネシア人は友達だ。吾々は空から降りてきたのだ。皆さん安心してください」等といいながら、敵情を尋ねる。」。『陸軍中野学校』p.494]

⁹⁷⁷ 「42 年 1 月 31 日 第二十五軍の第五師団、ジョホールバルに進出、シンガポールを除くマレー半島全域を制圧。[中略] 捕虜約七八〇〇人」。『年表太平洋戦争全史』p.91]

駿河台分室へ移転（43年秋）

「ここ〔駿河台分室〕には宣伝センスに富み、語学にも優れた人々が多かったので好都合であった。また漫画家達の作業のマンネリ化を防ぎ、その内容に清新さを加える意味から、部外から鶴見祐輔、鈴木文史朗、坂西志保、松岡洋子、江戸川乱歩、大下宇陀児などの知米の士や、探偵作家など⁹⁷⁸を招き、座談会を催し、宣伝の方針や手法について研修するに努めた。〔中略〕……伝単部門の人々と私との連絡に当たった朽木綱博氏⁹⁷⁹〔池田徳眞実弟〕は、東大で美術史を修得して松竹歌劇や日劇などのミュージカルショーのプロデューサーをやっていた人で、J・W・ドウブ著の「宣伝の心理とテクニック」を研究して、これを伝単作製の上に反映させた。また「西部戦線異状なし」の訳者秦豊吉⁹⁸⁰氏から「戦線に於ける兵士の性生活」や戦争中の米国の雑誌などを多量に借り受けて、その中から適当な文句を伝単解説の言葉として活用した。」
(心理 91)

⁹⁷⁸ 捕虜「Fujita 軍曹（日系二世）」は伝単部に所属。〔資料「駿河台分室関係者」〕

⁹⁷⁹ 「池田は伝単部とは関係がなかったが、駿河台分室では弟の朽木がこの部と恒石少佐の連絡役を務めていた。恒石少佐から特別に与えられた重要な仕事は、ドーブの書いた『宣伝の心理と技術』（*Psychology and Technique of Propaganda* by L.W. Dowbe）・・・日本語版があった・・・を研究して報告すること、伝単のアイデアを出すこと、そして宣伝の論説（propaganda article）を書くことであった。ドーブの本は大変厚かったから、池田は彼の研究がどこまで進んだかは知らなかった。いずれにせよ朽木は新しい伝単作りに知恵を絞っていた。彼が音楽劇のプロデューサーをしていた時、大いに助けられた秦豊吉という人がいた。秦氏は『西部戦線異状なし』を日本語に翻訳したことで知られていた。彼はまた「丸木砂土」のペンネームで多くの好色な作品を書き、しばしば雑誌にエロがかった記事を寄稿した。朽木は彼からドイツの戦争百科のうちの『前線での兵士の性生活』（*Sexual Life of Soldiers at the Front*）4巻を借り、伝単部で熱心に研究した。戦時中に発行された何冊かのアメリカの雑誌も、彼から借りた。その内の1冊にこんな挿絵があった。白人の女性が出産し、婦人科医は取り上げた赤ん坊が黒人であることを知る。医師は少しも驚かず、「これが戦争というものさ！」と言う。これは素晴らしい漫画で洗練されていておかしく、明快な主題（motif）があった。喜んだ朽木はすぐに同じ伝単を作るよう手配した。」
〔『駿河台分室物語【本編】』p.184〕

⁹⁸⁰ 資料「秦豊吉」

どいドイツの宣伝

○「国民啓蒙・宣伝省（こくみんけいもう・せんでんしょう、ドイツ語: Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda 略称・RMVP）は、ナチス・ドイツ時代のドイツに置かれた国家宣伝と国民指導を目的とした省。日本語では国民啓蒙・宣伝省と訳されることもある。宣伝省と略称されることが多い。

概要

1933年3月13日、パウル・フォン・ヒンデンブルク大統領によって「宣伝省設置法」(de:Reichsgesetzblatt, I, S. 104)が公布された。そして、国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス党）で宣伝全国指導者を務めていたヨーゼフ・ゲッベルスが初代大臣に任命された。宣伝省の建物はヴィルヘルム通りの Ordenspalais という建物に設置された。1737年に建てられたこの建物の名称は騎士団宮殿を意味し、同所を在ベルリン代表部として用いた聖ヨハネ騎士団にちなむ。ゲッベルスは3月25日に次のような演説を行っている。

宣伝省にはドイツで精神的な動員を行う仕事がある。つまり、精神面での国防省と同じ仕事である。(中略) 今、まさに民族は精神面で動員と、武装化を必要としている。

ナチス党による権力掌握 (Machtergreifung) が進むとともに、強制的同一化を推進する機関となる宣伝省の規模は拡大され、国家の文化、経済、その他のあらゆる宣伝に
関与した。」⁹⁸¹

○「宣伝省の中に政府がある……。全てのメディアを掌握したプロパガンダの怪物の正体！ 15000人の職員を擁した世界最初にして、最大の『国民啓蒙宣伝省』ーヒトラー、ナチ幹部、国防軍、そして市民を従属させた、その全貌を描く。」⁹⁸²

○宣伝中隊：資料「藤原岩市」

○池田徳眞

「しかし、[第一次大]戦後の後仕末のようにこんなにたくさん戦時宣伝の本を書いたドイツ人が、戦争中には、敵に向かって適切な対敵宣伝がぜんぜんできなかったということは、私には長いあいだ不思議でならなかった。そして、対敵宣伝とは、よほどドイツ人の性格に合わない仕事であるにちがいないと思っていた。いずれにしても、このハンス・ティンメの本は、戦時宣伝者の必読すべき教科書である。それがあまりに有用なので、私はとなりに坐っていた樺山君に、「ドイツ人は、ナチスになっても

⁹⁸¹ “国民啓蒙・宣伝省”. Wikipedia. (参照 2023-05-09)

⁹⁸² 広田厚司, ゲッベルスとナチ宣伝戦. 潮文庫光人新社, 2022, 帯.

国内宣伝だけで、対敵宣伝をすることはからっきし下手だけれども、対敵宣伝の本を書くことだけは上手なんだな」というと、樺山君も笑った。」⁹⁸³

⁹⁸³ ○『プロパガンダ戦史』p.83.

○『プロパガンダ戦史』の中国語版：新華出版社が朴世侯訳「宣传战史」（宣伝戦史）を1984年に発行。（CiNii booksによれば京都大学人文科学研究所図書室、公益財団法人東洋文庫が所蔵）

とう 東亜放送協議会

○結成の経緯

「1934年から国内放送が短波で、台湾、「満州」へ中継されるようになり、これらの地域の放送局は、必要なものをその地域に中継した。これは外地中継放送と呼ばれた。日中戦争の拡大とともに、中国占領地の放送局にも中継網が伸びていった。40年7月現在、内地の番組が、1日平日7時間半中継され、一方、外地からの中継は、この年113回であった。「東亜における放送事業の企画運営の協調を緊密」にするため、東亜放送協議会が結成され、第一回の会議が39年9月、新京（長春）で開かれた⁹⁸⁴。40年2月、事務局が東京の放送会館に置かれた。東亜放送協議会は、39年8月から、しばしば「對重慶集中放送」を行ない、各放送局の中波、短波を動員して、中国語による宣伝放送を行なった。40年11月、台北で行なわれた東亜放送協議会では、蘭印、仏印問題の重要性等と関連して、加盟団体の対外放送を効果的にすることが議題となった。この会議の直後から、日本内地からの短波中継は1日13時間に拡大され、41年1月、呼び方も「外地中継放送」から「東亜中継放送」と変わった。

太平洋戦争開戦後の41年12月から、日・満間無装荷ケーブルによって、朝鮮・「満州」向け有線放送が実施された。42年5月から、東亜中継放送の中で、敵国の情報機関に傍受されて、国内情勢の判断材料を与える可能性が多いとおもわれた国内番組には、“番組遮断”が行なわれ、42年10月には、月間40回に達し、中継を受けていた放送局を困惑させた。11月からは、その時間に、原則的に「裏番組」として、東亜向け番組が放送されるようになった。これより先、42年9月1日の組織改正で、日本放送協会の戦時体制が一段と強化され、国際部は国際局に昇格し、海外放送と国際放送の他、業務局から移管された短波による東亜中継放送を担当することにもなった。この際、「東亜中継放送」は「東亜放送」と改称された。外地や占領地から内地への中継は、定時から随時に改められたが、42年9月には、46回行なわれた。42年11月、国内番組に新設された「大東亜に叫ぶ」は、東亜各地で必ず中継されるものとされた。

43年4月に行なわれた第6回東亜放送協議会では、戦況の悪化に伴い、外地、中国大陸における機器の不足と補給が主な議題となった。外地で予定された協議会は、その後中止され、8月には、情報局主催の大東亜放送連絡協議会⁹⁸⁵が東京で開かれ、戦局に即応した放送体制を協議した。⁹⁸⁶

⁹⁸⁴ 「1939年に放送機関は、東亜電気通信協議会とは別に、独自に東亜放送協議会を開催していた。」。〔白戸健一郎. 自著『満洲電信電話株式会社—そのメディア史的研究』を語る。国立研究開発法人科学技術振興機構. 2016, p.69〕

⁹⁸⁵ 「昭和十八年八月には、内閣情報局主催のもとに東京において〔大〕東亜放送連絡協議会が開かれ、〔南方軍の〕山口中尉と原中尉とがこれに出席した。」。〔『陸軍中野学校』p.549〕

⁹⁸⁶ 『外務省と対外放送』p.64.

○開催ルール

「◆「満洲電信電話株式会社 そのメディア史的研究」白戸健一郎／著 創元社
2016年 p165 1939（昭和14）年4月に東亜放送協議会が結成され、最初の会合は同年9月に新京にて開催。以後、年2回開催され、春は日本で、秋は外地または中国大陸で開催されることになった、とあります。

◆「日本放送史上」日本放送出版協会 1965年 p409『東亜放送協議会の結成』
年一回の定例会議は東京で、臨時会議は随時外地において開催。第1回の会議は満洲の新京（長春）で、第2回は昭和15年4月に東京で。第3回は同年11月に台北で開催された⁹⁸⁷、とあります。」⁹⁸⁸

○軍関係者の参加

回	開催	大本営			外地総軍		
		参本8課	陸軍 報道部	海軍部	関東軍 ⁹⁸⁹	支那派遣軍	南方軍 ⁹⁹⁰
5	42年4月	—	少佐・大尉	—	少佐	—	—
6	43年4月	<u>恒石少佐</u>	少佐・囑託	—	—	—	—

図 98 東亜放送協議会への軍関係者参加

出典：協議会議事録ほか

⁹⁸⁷ 第三回東亜放送協議会は「昭和十五年十一月廿五日ヨリ廿七日マデ台湾台北市新公園協議会館ニ於テ台湾放送協会主催ノ下ニ開カレタル」。[NHK 放送文化研究所蔵. 計画部長 [宛] 報告（第三回東亜放送協議会）]

⁹⁸⁸ 浜松市立中央図書館回答. 2023-05-14.

⁹⁸⁹ 第1回は新京で開催.

⁹⁹⁰ 43年8月の大東亜放送連絡協議会に中尉2名が参加。[本書. p.401. 脚注. 985, p.429]

第五回東亜放送協議会

〔 秘 〕 昭和十七年四月
 第五回東亜放送協議会議事要録

日本放送協会

◎日 時 昭和十七年四月二十七、二十八日

◎会 場 東京放送会館第一会議室

◎出席者⁹⁹¹

朝鮮放送協会	常務理事以下	計 4 名	
台湾 ”	”	計 3 名	
満州電信電話株式会社	理事 ”	計 7 名	
華北広播協会	専務理事 ”	計 4 名	
中国放送協会	常務 ”	計 3 名	
蒙古連合自治政府	電波課長 ”	計 3 名	
国際電気株式会社	送信課長 ”	計 4 名	
日本放送協会	会長 ”	計 2 2 名	他関係部課長

◎臨 監

逋信省	電務局無線課長以下	計 3 名
情報局	第二部第三課長	宮本吉夫
	情報官	水谷史郎
興亜院	事務官	松田英一
満州国政府	総務庁事務官	油川 勇

◎陪 席

大本営陸軍報道部	丹羽少佐
	武田大尉
関東軍司令部	齋藤少佐

⁹⁹¹ 引用に当たり逋信省までの出席者氏名を省略。(すべて日本人らしい名前)

・日本放送協会々長・小森七郎

「大東亜戦争の勃発を契機と致しまして、放送事業に課せられましたる国家的使命は一層其の重要性を加ふるに至つたのでありますが、各放送経営団体各位に於かせられましたは、時を移さず、放送戦時体制を布かれ、協心戮力^{りくりよく}、適切なる措置を講ぜられましたる結果、放送電波の活躍は実に目覚しきものがあり、遺憾なく国家国民の与望に応へられつゝありますことは、洵に御同慶に堪へない次第であります。〔中略〕

我々斯業に従事する者としましては、益^{ますます}職域奉公の念を堅くし、内に於きましては国策に順応して与論の指導統一に努めますると共に、外に対しましては占領地域に対する宣撫、文化工作に協力を致しすることは勿論、敵の宣伝謀略に対抗いたしまして、我国の正義と皇軍の勇武を世界に知らしめますことは最緊要なる事と存ずる次第であります。〔中略〕大東亜放送圏の確立を期し以て放送報国の大使命に全力を挙げて邁進せられんことを念願して^{や(?)}竭^ままない次第であります」

・情報局第二部第三課長・宮本吉夫

「短波放送は結局日放〔日本放送協会〕を中心として対敵放送に主力を注ぐことになるが各地とも之に協力してその足らぬ所を補つて日滿支の放送を最も有効に運用して対敵集中を図りたい。この根本等は大本營に考へて貰つてその方針に従うことにしたい。現地放送は軍政下に在つては軍司令官の権限の下に放送陣が入ることになる。戦闘の進展に伴ひ作戦地が占領地になれば其處は現地放送局に任せて東京の対外放送は敵を追つて移動する。東亜中継放送は大体東亜の日本人を結んでいくといふ考えである」

・大本營陸軍報道部・武田大尉

「南方の運営に就いては計画中で建設経営等の問題も未決定であるが、運営形態が如何にならうが実際の運営は放送関係者がやらねばならぬ。各地の南方向放送は各個バラバラにならぬ様東京の南方向放送を聴取し各局はその線に沿つて各地の特異性を附加して放送して貰ひたい。各経営体の短波の出力、性能等を検討し現地とも連絡した上で役割を決定したい。成案が出来次第報告するが協力を願ふ。南方放送は従来作戦行動と並行して来たが、現在は作戦から軍政への轉換期で此の時期に現地放送と東京放送の調和を考へたい。放送に対する根本方針は現地各軍に指令が行つてゐるからそれに従つてやつて貰ひたい。対米放送は満洲も実施してゐるが、空襲以来微妙な動向にあるから東京放送との食違の無い様充分注意されたい。対印度放送は当分東京一本で行く。各個に電波を出すことは遠慮されたい」

・華北広播協会専務理事・葭村外雄

「出来れば対外宣伝の中樞機関が欲しい」

・中国放送協会常務・浅野一男

「対敵放送は中央で統一した方が徹底して良い。[中略] 連絡は放送局には完全な暗号がないから軍に依頼したい。尚ニュース編輯者を中央に集めて教育する機会を作れば能率が挙がるのではないか」

・武田大尉

「中央に於て統括すると遅れる場合もある。現地で作戦案を作つて中央に出せば各軍に協力する様に伝へる。その世話は引受ける」

・関東軍司令部・齋藤少佐

「満州の対外放送案は関東軍で嚴重に検閲してゐる。大本營の指令は大綱であり幅のある事は当然である。満洲では日本が言つては拙いこと、充分言えない事を満州が代わつて存分に言ふ。この方針で放送を指導してゐる。

関東軍の使命は對ソ作戦準備一本である⁹⁹²。従つて放送も之に集中してゐる。北方に事が起つた場合の計画を各地とも今から充分に立てゝ貫ひたい。ロシア語のアナウンサーは関東軍が責任を以て準備している。」⁹⁹³

⁹⁹² 満州国は参戦していない：「大東亞戦争（第二次世界大戦）に日本が開戦する直前の1941年12月4日、日本の大本營政府連絡會議は「國際情勢急轉の場合満洲国をして執らしむ可き措置」(※)を決定し、その「方針」において「帝國の開戦に当り差当り満洲国は参戦せしめず、英米蘭等に対しては満洲国は帝國との關係、未承認等を理由に實質上敵性国としての取締の實行を収むる如く措置せしむるものとす」として、満洲国の参戦を抑止する一方、在満洲の連合國領事館（奉天に英米蘭、ハルビンに英米仏蘭、營口に蘭（名譽領事館））の閉鎖を行わせた。また館員らは警察により軟禁され、1942年に運航された交換船で帰国した。】。[“満州国”Wikipedia. (参照 2023-02-13)]

(※) アジア歴史資料センター. Ref.B02032967400

⁹⁹³ NHK 放送文化研究所蔵「昭和十七年四月 第五回東亞放送協議會議事要録」（4月27, 28日）から引用。

第六回東亜放送協議会

「㊟東亜放送連絡情報

会報

第六回東亜放送協議会開催

既報第六回東亜放送協議会は予定通り四月十五日より東京放送会館第一会議室に於て全加盟団体の関係者、参加団体として国際電気及蒙疆電気及情報局 通信省、大東亜省、満州国政府の各監督官その他陸軍省 参謀本部及報道部よりの出席を得て開催せられた。議事録⁹⁹⁴は目下取纏中であるが、東亜放送各般に亘る当面の諸問題につき熱烈に意見の交換が遂げられた。今後の運行上裨益するところ多く多大の成果を取めた。この議事日程其の他は左の通りである。[中略]

本会議の出席者は左の通りである。

出席者名(順不同) [肩書、氏名(すべて日本人)は一部を除き省略し人数のみ]

- 一. 朝鮮放送協会 4
- 二. 台湾放送協会 4
- 三. 満州電信電話株式会社 7
- 四. 華北広播協会 5
- 五. 中国放送協会 4
- 六. 蒙古連合自治政府交通総局 2
- 七. 国際電気通信株式会社 2
- 八. 蒙疆電気通信設備株式会社 1
- 九. 日本放送協会

会長小森七郎以下計 21 外関係部課長

臨監 情報局

第二部放送課長 水谷史郎
情報官 並河 亮
第三部対外報道課 情報官 八木正夫

通信省 5
大東亜省 2
満州国政府 1
蒙古連合自治政府弘報局 1

陪席

参謀本部 恒石少佐
報道部 後藤少佐
〃 囑託 平井正夫⁹⁹⁵

⁹⁹⁴ 未見.

⁹⁹⁵ ○NHK 放送文化研究所蔵.

○「放送博物館資料 昭和十八年四月」と上部余白に赤鉛筆で追記.

とう 東京初空襲と憲兵司令部

「昭和十七年四月十八日、米空母ホーネット号から発信した米空軍ドウリットル爆撃隊は、初めて日本本土を空襲した。

この日、正午頃、東京の憲兵司令部では、折から昼の休憩時で、職員一同は司令部の屋上に出て明るい陽差しを浴びていた。

と突如、空襲警報が鳴り響いたが、誰もが本物の空襲とは思わず、いつもの防空演習とばかりに、いたって落着いたものだった。ところが普段と違ってサイレンがなおも鳴りつづけた。

屋上では司令部の第三課長河村愛三大佐が、早くもこの警報に異常を感じて本物の空襲と判断し、周囲の職員に屋上から去るように命じた。やがて頭上に敵機が一機飛来すると、高射砲が各所で一斉に砲撃を開始したが、一向に命中した様子は見えなかった。

この日の空襲は、米空軍の戦略的爆撃であって、物的には大した損害はこうむらななかったが、日本本土が爆撃されたという思いもよらぬ現実には、朝野の衝撃は大きく、米空軍の心理作戦は見事に成功したのである。

米空軍の空襲は房総半島方向から飛来し、東京、横浜、川崎、横須賀、名古屋、四日市、和歌山、神戸、新潟を焼夷弾爆撃をして、午後三時半頃、通り魔のように真蒼な大空から消え去った。

空襲警報は爆撃が始まってからサイレンが鳴る始末で、完全に米空軍の奇襲は成功したわけである。特に空襲と同時に飛上った日本各航空隊の邀撃戦闘機が、高度を上げている間に、米軍爆撃機は意表を衝いて超低空を悠々と飛び目標を爆撃したのであった。したがって本土上空では米機を一機も撃墜させることができなかった。

ところが、日本本土初爆撃を終えて、支那大陸の重慶側空軍基地へ向かった米爆撃隊十七機のうち、二機が夜半わが占領地域内の南昌杭州⁹⁹⁶に不時着し、搭乗員八名は支那派遣軍の捕虜となった。

捕虜は直ちに南京の総司令部に送られ取調べを受けた。しかし、訊問に対して米軍捕虜は容易に真実を話さなかった。問題は何処から何で来たかであったが、アリュシャンとかミッドウェー西方のハイエル島から飛来したとか、虚偽の申立をして真相追及に対し頑強に抵抗した。

一方、支那派遣軍総司令部から捕虜の報告を受けた大本営は、直ちに捕虜の東京引渡しを命じた。

四月二十日、米軍捕虜は憲兵によって空路東京へ護送され、東京憲兵隊本部へ留置された。東京憲兵隊本部では、外事課が捕虜の取調べを担当したが、奇襲爆撃を受けて面目を失った大本営は、俄然憲兵隊の捕虜訊問に注目した。大本営幕僚が最も重視したのは、米爆撃機隊が何処からどうやって飛来したかであった。まさか空母で日本近海に迫り、空母から発進して空襲を敢行したとは、どうしても信じられなかったの

⁹⁹⁶ 本書.p.410.図 100.

である。したがって、作戦及び航空機等の専門事項については、大本営幕僚が入替り詳細に調査した。

また、憲兵は一般事項を取調べたが、憲兵当局の処遇のよさと、巧妙な訊問によって捕虜の自供はすすみ、爆撃計画の全貌がほぼ明らかになった。

さらに大本営にとって、もう一ついたって人間臭い思想問題があった。空襲の被害は幸い軽微であったため、これを契機として、国民の防空思想及び施設が向上すればよい⁹⁹⁷、という楽観論である。と同時に、爾後、再三米軍機に本土空襲を反復させないためにも、彼らに神州日本を侵すことに対する、恐れを抱かせる必要があり、敵機必滅を始め、あらゆる敵愾心の横溢する思想があった。硬軟両派である。この思想が本土に対する空襲を防止することこそ、持久戦遂行上最大の戦略とする、戦略思想の転機となったことである。だが、東京空襲が後のミッドウェー作戦を含む積極的進行作戦への動機となったのではないと主張するのが、当時大本営作戦部長だった田中新一中将である。すなわちミッドウェー作戦の企図は東京空襲以前のものであって、この作戦企図が東京空襲によって一層高く評価され、実施促進の契機となったというのである。

確かに東京初空襲が日本の朝野に与えた心理的影響は少なくないが、考えてみれば四面海に囲まれた日本がいつの日か米機動部隊の空襲を受けるのは至極当然であって、このために本格的戦争指導が大きく変更されるものではなかったはずである。特に(ママ)少数捨身の奇襲攻撃は明らかに心理作戦である。ところが、開戦以来、約半年間の順調な作戦的展開によって、ようやく第二段階に入った陸海軍の作戦計画策定時に、東京空襲が大きな影響をもたらすことになった、このことは後に触れる。

さて、問題の捕虜自供の件は次のとおりである。

爆撃隊はドウリットル海軍中佐指揮のもとに約一ヵ月間の猛訓練を受け、空母ホーネットに爆撃機を搭載してアラメダを出港し、途中僚艦空母エンタープライズと合同して、日本本土空襲を執行したのである。しかも搭乗員は学徒出身の志願者で、約一ヵ月間、陸上で空母と同一広さの台の上で発艦訓練を行ったのである。着陸は初めから支那本土へ下りる計画だった。

取調べに当たって最も問題になったのは、東京牛込区の路上で中学生を銃撃で殺傷させ、学校を爆撃し、和歌山では潮干狩の群衆を掃射して、多数の死傷者を出したことである。これが再び南京に返されて極刑の原因となる。

ところが憲兵隊の取調べに対し、参謀本部の辻政信少佐⁹⁹⁸は、東京憲兵隊本部を訪れて干渉指示し、あまつさえ憲兵隊の取調べを手ぬるいと非難した。参謀本部が作戦上捕虜の自供から一刻も早く真相を識りたいのはわかるが、捕虜の方も、万一捕われ

⁹⁹⁷ 「防空訓練は各区別の基本訓練が半ば過ぎたが、統監部たる警視庁では二十一日市民の態度が冷淡であること、指導幹部の指揮が拙く、仮装□□に対する□宜の処置が拙劣なことなどを指摘し左の如くいま一段の緊張を要望している」．[“防訓に市民冷淡：統監部から緊張を要望”．報知新聞．1942-02-22]

⁹⁹⁸ 中佐：「1940年（昭和15年）8月に中佐に進級。[中略] 1943年8月、大佐に進級し、」．[“辻政信”．Wikipedia．(参照 2022-08-16)]

た場合の訊問に対して、その答弁を事前に研究打合せをしてきているので、そう簡単には自供しなかったのである。しかし、憲兵司令部では第三課長の河村大佐らが、参謀本部の干渉に激怒した。

元来、憲兵隊は参謀本部の隷下ではなく、すべてに干渉されるべきものではなかった。特に東京憲兵隊長増岡賢七少将は、

「危険を覚悟の上で日本本土の初空襲とは、敵ながら天晴れな奴だ」

と軍人としての処遇を認めた。この時点では民衆に対する機銃掃射が、命令によるものか、搭乗員個人の意志か不明だったので、増岡少将は一応自供の真相を把握してからと考えていたようである。

また、普通留置人の食事は決っていたのだが、増岡少将は近くの九段下軍人会館（現在の九段会館）の食堂より、特製の洋食を取寄せた。このようにして、東京憲兵隊では正規の捕虜として優遇した。これがまた軍中央の幕僚陣から、非難抗議を受ける原因となったが、増岡少将は頑として聴かなかった。

憲兵隊の捕虜取調べが終了すると、支那派遣軍総司令部より捕虜の還送を要求してきたので、昭和十七年六月十九日、東京憲兵隊の横尾弥三郎中尉と根本常少尉が上海に護送、上海憲兵隊によって南京の支那派遣軍総司令部へ再び護送された。」⁹⁹⁹

⁹⁹⁹ 全国憲友会連合会編纂委員会編. 日本憲兵正史. 研文書院, 1976, p.694-696.



非人道的爆撃に鐵槌

帝國本土を空襲せる
米搭乗員を嚴重處断
嚴正なわが方針布告

大本營報道課長 去る四月十八日帝國本土空襲（わが方に捕へられたる米搭乗員）
 被害者中捕へられたる搭乗員を處断したるものは今般乗作に照らし（捕獲せられたり）
 布 大日本帝國領土空襲シ我々國內ニ入レル敵艦空機搭乗員ニシテ暴行非道アリ
 アリタル者ハ本會場ニ附シ我々ハ捕獲シテ之ヲ我々國內ニ入タル者同シ
 告 捕獲又ハ我々會場ニ附シ我々國內ニ入タル者同シ
 四月十八日布告 切 齋 徳 司 合 官

大 斷乎嚴罰を以て報復
 兒童掃射の惡虐

図 99 米搭乗員の処置決定
 出典：朝日新聞（大阪）. 1942-10-20



図 100 米爆撃機 B25（絵画）
 日本初空襲を終え不時着した元搭乗員の
 寄贈か
 撮影：1994 年編者
 於中国浙江省博物館（海外からの寄贈美術
 品展示施設）

とう 当時の教育事情

全 国

○中学校進学率

「1922年（大正11年）の中学校進学率について記述がある資料はありませんでした。下記資料に、その前後の大正10年の「中学校へ入学」は2.7、大正13年「同」は4.0とありました。

「日本近代教育史事典」日本近代教育史事典編集委員会／編 平凡社 1971年
p175 第6表「尋常小学校卒業者の高等小学校・中学校・高等女学校へ入学比率」
より

補足になりますが、

当時の学校制度は複雑で、特に尋常小学校から進学する際には、中学校、高等女学校、実業学校、高等小学校、実業補習学校などの選択肢がありました。

「学制百二十年史」文部省／[編] ぎょうせい 1992年 p767の「学校系統図」参照

また修学年限も様々ですので、一様に進学率が出しにくく、中学校進学率として明確な数値について記載のない資料が多いようです。[以下略]¹⁰⁰⁰

高知県

○小・中学校

・「1『近代高知県教育史』高知県教育史編集委員会/編 高知県教育研究所 1964年刊 資料番号：1102547203 ※他館貸出可。複写対応可。

p.109-「第三章 大正期の教育」より

「就学率の向上 明治末から大正期へかけては、物価騰貴による家庭の貧困を理由に、就学の猶予を願い出る学齢児童が全国的に多かったが、特に年長の女兒にこの傾向が強かった¹⁰⁰¹。本県においても、～中略～大正元年（1912）には97.65%まで低下～中略～しかし、この就学率低下の傾向も大正5年（1916）ごろから、第一次世界大戦による経済界の好況を背景に漸次好転し、大正15年（1926）には99.49%と全国平均を上回るまでに回復向上したのである。」との記述あり¹⁰⁰²

¹⁰⁰⁰ 浜松市立中央図書館回答. 2022-10-23.

¹⁰⁰¹ 「日本の就学率は、大正九年には九九%に達し、世界最高水準を示していたが、これは当局のはじめからの努力もしくは強制によるものであった。教育を受けることは国民の権利ではなく、義務とされたことに戦前の教育の特徴がある。義務教育とは、児童保護者（親権者）に、その保護する児童を尋常小学校に入学させる義務を負わせ（就学強制）、市町村に尋常小学校を設置することを義務付ける（強制負担）という二面の意義を持っていた。」。[『事典 昭和戦前期の日本』 p.372]

¹⁰⁰² オーテピア高知図書館回答. 2022-11-27.

・「p. 112-113 「一方、義務教育年限延長後における高等小学校は、～中略～ 評判が悪く、その全廃論さえ出るありさまであった。事実、大正元年（1912）に本県において高等小学校へ進学した者は、尋常小学校卒業生中の30%に過ぎなかった。しかし、その後臨時教育会議において義務教育年限の再延長は時期尚早とされ、むしろ高等小学校の内容を改善することこそ緊要の問題と答申されたので、～中略～ 就学率も漸次向上していった。こうして、本県においても大正15年（1926）には、高等小学校に進学する者が尋常小学校卒業生中の45%強にまで達した。」「高知県においては、明治の後期に一時隆盛を誇った中学校教育が、その末年に至るに従って、経済界不況の影響を受けて漸次衰退するようになり、～中略～この傾向は大正期に入ってもしばらく改まらず、本県の中学校教育は、大正4、5年ごろまで依然として不振にあえいだのである。～中略～大正5、6年ごろから本県の中学校教育は再び活況を呈するようになり、中学校への入学志願者がこのころから急に増加し始めた。すなわち、大正元年（1912）には522人に過ぎなかった県立中学校への入学志願者が、大正10年（1921）にはその五割増の799人に達したのである、それにもかかわらず、この間に増員された中学校の入学定員はわずかに100名であったので、県立第一中学校などには180名の入学定員に対して、427名の志願者が出るありさまで、県立中学校の増設が県民の世論となるに至った。」との記述あり。」¹⁰⁰³

○高等学校開設

「2『高知追手前高校百年史』高知追手前高校百年史編集委員会/編 高知県立高知追手前高校校友会 1978年刊 ※複写対応可。

p.247 大正十年（1921）十一月二十五日開会された通常県会の施政演説のなかで、中等教育について阿部知事は次のように述べた（『政友』大正十年度掲載）。（略）
県下中等学校入学志願者の数は近年漸次増加の趨勢を示し、殊に最近に至り其趨勢を高め、本年の如き其数八百六十名を算するに至れり。然るに之に対する設備十分ならざるが為め毎年多数の不遇者を見るに至るは、県下中学教育の為め頗る遺憾とする所なり。加ふるに当地に新設せらるべき高等学校¹⁰⁰⁴の開校も近きにあるが故に、中学校入学志願者の今後一層増加すべきは明かなり。[以下略]」¹⁰⁰⁵

¹⁰⁰³ オーテピア高知図書館回答. 2022-11-27.

¹⁰⁰⁴ ○旧制高知高等学校は1922年創立. [“高知高等学校（旧制）”. Wikipedia. (参照 2022-11-28)]

○恒石は同校の卒業生ではないが、その寮歌は諳んじていた：「また裁判中証言に立ったのは半日ないし数日で、もっとも長かった私でも五日間に過ぎなかったので、自由時間を持って余っていた。検事の諒解さえあれば近郊の旅行や外泊も差しかえなかった。私はクレスウエル大佐や日系の方々の車で、当時日本にはなかったよく整備された八車線ほどの高速道路を時速一〇〇キロ以上で快走し、あちこち近郊を案内していただき、大変快適な日々を過ごすことができた。ことにサンフランシスコ南方にあるモンレーに遊んだときなどは、岩肌に根を張って太平洋の潮風に堪えている巨松を発見して、日本のどこかの海浜にいるような錯覚に陥った。そして洋々として水平線の彼方までつづく太平洋の燃えるような夕景を眺めて、しばし故郷のことを回想し、思わず旧制高知高等学校の寮歌〔豪気節〕「九ツとせ 此の浜寄する巨濤はカリフォルニアの岸を嘯む」を吟じたことであつた。」（心理 333）

¹⁰⁰⁵ オーテピア高知図書館回答. 2022-11-27.

とう 東 宝

○Wikipedia

「東宝株式会社（とうほう、英: TOHO CO., LTD.）は、映画・演劇の製作配給・興行や不動産業を行う日本の企業。本社は東京都千代田区有楽町一丁目2番2号東宝日比谷ビル。東映、松竹と共に日本のメジャー映画会社「御三家」のひとつである。日経平均株価の構成銘柄の一つ。

阪急阪神ホールディングス（旧・阪急ホールディングス）の持分法適用会社で、2022年現在、2つの直営演劇劇場（帝国劇場・新館シアタークリエ）を保有する。阪急阪神ホールディングス（阪急電鉄・阪神電気鉄道）、エイチ・ツー・オーリテイリング（阪急百貨店・阪神百貨店）とともに、阪急阪神東宝グループの中核企業である（旧：阪急東宝グループ）。[中略]

1932年8月に阪神急行電鉄（現在の阪急電鉄）の小林一三によって、演劇、映画の興行を主たる目的として株式会社東京宝塚劇場を設立。1934年に東京宝塚劇場を開場の後、有楽座、日本劇場、帝国劇場を所有し、日比谷一帯を傘下に納め、浅草を手中に収める松竹とともに、東京の興行界を二分するに至る。

一方、会社設立前年に創設された、トーキーシステムの開発を行う写真化学研究所（Photo Chemical Laboratory、通称PCL）は、1937年関連会社JOと合併し、東宝映画株式会社となる。1943年8月30日、東宝映画を合併し、映画の製作・配給・興行および演劇興行の一貫経営に乗り出し、同年12月10日に社名を東宝株式会社と改めた。PCLには大日本麦酒なども出資しており、東宝は発足当初から、従来の市井の興行師からスタートした映画会社とは一線を画する、財界肝いりの近代企業として期待と注目、そして反発を集めた。なお、その名前の由来は「東京宝塚」の略である。

1940年10月1日、東宝系の全劇団は東宝国民演劇団移動隊に発展的解消。古川ロッパ、エノケン、東宝舞踏隊、東宝名人会などがそれぞれ移動演劇班を結成して、地方の農山漁村や工場にも巡回することとなった。宝塚歌劇団は宝塚音楽奉仕隊として健全な娯楽を提供するとともに、忙しい時には勤労奉仕も行う体制を採った。第二次世界大戦に突入すると東京宝塚劇場と日本劇場は風船爆弾工場となり、戦後は東京宝塚劇場が進駐軍専用のアーニー・パイル劇場と改名され、10年間観客としての日本人が立入禁止となるなど、歴史の証人を演ずることになる。¹⁰⁰⁶

¹⁰⁰⁶ “東宝”. (参照 2023-04-27)

とう 東方社

○Wikipedia

「.....1934年、日本工房（名取洋之助によって1933年に設立）から脱退したメンバー、木村伊兵衛、伊奈信男、原弘、岡田桑三らによって、中央工房を設立。同年、三浦直介を会長とする国際報道写真協会が対外的に写真を紹介していく体制をつくり、中央工房は、東方社と発展していった。

東方社設立と『FRONT』の発行

・1941年春、東方社設立。初代理事長・岡田桑三。岡田の子息である岡田一男によれば、東方社の資本金は岡田が俳優“山内光”として在籍していた松竹の退職金や、財閥から集めた金だったという。当時の所在地は、東京市小石川区金富町四七番地。理事には林達夫、岡正雄、岩村忍、小幡操。常務理事に鈴木清。監事杉原二郎。[中略]

・1942年2月、最初の『FRONT』発行。

・1943年3月、林達夫が二代目理事長となる。

東方社解散

・1945年の解散時、岡田の私有財産である小石川区金富町の土地なども無断で処分された。木村伊兵衛とともに、雑誌『光画』を刊行していた写真家・野島康三が経営する写真館と賃貸アパートを兼ねた九段の「野々宮ビル」が解散時の東方社の所在地。」

1007

○「「東方社」って一体何なのだ？ 戦争宣伝集団・参謀本部傘下の団体・参謀本部の直属団体・対敵宣伝機関・戦争推進の軍用機関・軍の特殊機関。—多川[精一]は「その本質は技術家集団だった」と結論づけている。中島健蔵の所見は？—「要するに軍御用の写真出版印刷会社であるが、もう少しは参本と直接の関係があった国策会社であった」（『戦争と文化と抵抗と』『文学界』昭和三十一年八月号）。「戦争協力といわれても仕方のないことになったが、英国あたりの徹底的な宣伝戦のすごさにくらべたら、問題にならない薄弱さだった……。何といっても部外の出版社以上には出なかったわけである」（『毎日グラフ』昭和五十年八月二十四日号）。「直接に参謀本部の機関ではなく、要するにフロントを作り、それを買ってもらう出版社」（別冊『文芸春秋』、昭和五十三年十一月号）。」¹⁰⁰⁸

岡田桑三

・「(おかだ そうぞう、1903年6月15日 - 1983年9月1日) は、日本の映画俳優、映画プロデューサー。俳優としての芸名は「山内光 (やまのうち ひかる)」。

横浜の商家の娘・よねと番頭の美平の間に生まれる。ドイツ、ソ連で舞台美術、映画、写真の技術を学んだ。日活、松竹で俳優として映画に出演する一方、日本プロレタリア映画同盟、写真・映画団体「国際光画協会」、写真集団「日本工房」、「中央工房」

¹⁰⁰⁷ “東方社”. (参照 2023-05-28)

¹⁰⁰⁸ 山室太柁雄. ざっくばらん — 戦時下の特殊出版社物語. 『FRONT 復刻版：解説II』 p.52.

などに関わり、プロパガンダグラフ雑誌「FRONT」を発行する「東方社」の創設に参加。多くの映画人、写真家、美術家らに影響を与えた。戦後は、南方熊楠遺稿の出版に関わった後、東京シネマを興し、科学映画を中心とする短編映画が、内外で高く評価されたことで、そのプロデューサーとして知られた。」¹⁰⁰⁹

・「岡田は、戦時中、ベルグソンの『笑い』などの翻訳や、平凡社の『大百科事典』の編集責任者として知られる林達夫や岡正雄らと一緒に、参謀本部の対外宣伝写真雑誌「フロント」の発刊にかかわり、戦後は、東京シネマという記録映画製作会社を興し、「マリン・スノー」「ミクロの世界」「あるマラソン・ランナーの記録」などの傑作ドキュメンタリー映画を世に問うた。

戦前のサイレント映画時代、日英混血児の母から受け継いだバタくさい風貌で人気を博した、山内光という芸名の二枚目俳優でもあった岡田は、「フロント」の内容をめぐって軍部と対立し、同誌を発刊していた東方社をたたんだ一時期には、満州に渡り、満映理事長の甘粕正彦の下で天然色フィルムの開発の仕事に携わったこともあった。

映画を通じての左翼文化運動、プロキノ運動にも早くから積極的に加わったその岡田が敬三¹⁰¹⁰と会ったのは古く、大正十一年、敬三が横浜正金銀行ロンドン支店に赴任するためヨーロッパに向かう船中でのことだった。岡田はこのとき、舞台芸術を勉強するためベルリン留学に向かう途上だった。」¹⁰¹¹

¹⁰⁰⁹ “岡田桑三”. Wikipedia. (参照 2022-12-25)

¹⁰¹⁰ ○渋谷敬三 (1896-1963)

○「そして渋谷に非常に気に入られ、彼の死 (一九六三年) まで、絶えず仕事上のアドバイスを送る渋谷に仰ぐ、きわめて緊密なつきあいを続けた。渋谷こそ、父の生き方を考える上で最も重要な人物の一人だったといっても過言ではないだろう。」 [岡田一男. 父、岡田桑三 — 東方社初代理事長 — のこと. 『FRONT 復刻版：解説Ⅱ』 p.38-39]

¹⁰¹¹ 『旅する巨人』 p.136.

軍と東方社

「[平凡社編集部] 軍人と東方社の関わりとといいますか、どういったかたちで軍のほうから人がやって来てたんでしょうか。

[今泉武治¹⁰¹²]「たまに顔を出す程度でしたね。大雑把なものを依頼はするけど、結局、写真が好きなような人が担当していたということでしょうか。軍関係の人は、大きな方針を具体的に述べるというようなことはまずしなかったですから、批評的な—好きな連中が来たという程度じゃないですかね、これは」

ごくたまに、誰かが来ている程度—

「そうなんです」

戦時中、国内向けに制作された宣伝物がいまでも紹介されることがあるんですが、『フロント』と比べると仕上がりに大きな違いがありますね。「欲しがりません、勝つまでは」のポスターなどじかに感情に訴えかけるような、直接的で、あまり美しいものはないですね。

「生活的なね」

『フロント』の場合、対外向けということもあるんだらうけども—

「東方社になると一種のグラフィズム¹⁰¹³から出たんで、日本のシビアな戦争の中から生み出していたのではないんですね。なにか、一種の観念がありましたねえ。林達夫さんがそこに座っているということ自体がね」

それを軍が容認するというか、ある意味で、てこ入れしているというのがちょっと面白いと思うんですが—

「そうなんですよね。といっても軍が、東方社の組織を利用しようという気持ちはわかるけれども、具体的に、どういうふうはこちら側を振り回していくかということが明確じゃなかったですね。結局、日本軍の行動そのものが、やっぱり相当不明確ですよねえ。東方社に対して、口を出さない、というより、出せないでいたでしょうね」

岡田さんたちは、そういうところをうまく利用した—

「東方社というものをつくりたいという、極めて常識的な発想がありましたよね。それを受けて、インテリがみんな集まった。しかし本当の意味での機能性とか方向づけとか、軍の要望に応えるだけの態勢はなかったでしょう。なかったというより、間に合わなかったんでしょねえ」¹⁰¹⁴

¹⁰¹² 「いまいずみ・たけじ —一九〇五年、福島生まれ。明治大学商学部卒業。森永製菓、報研、ミツワ石鹸、博報堂、日東エージェンシーを経て、フジモトブレーン取締役。東京広告協会理事、ACC 参与。東方社には一九四二年から二年にわたり在籍。』、『FRONT 復刻版：解説Ⅱ』 p.36]

¹⁰¹³ 「グラフィック／グラフィズム Graphic / Graphism 英語のグラフィックの語源はラテン語の「Graphicus」、ギリシア語の「Graphikos」で「書写、描画、図」という意味。したがって広義には、グラフィック（・アート）とは平面上に図像をあらわすすべての技術、すなわち絵画や写真をも含む平面的な視覚芸術全体のことになるが、一般的には版画やグラフィック・デザインなどの印刷芸術を指すことが多い。』、『木戸英行“現代美術用語辞典 1.0”。（参照 2023-06-03）]

¹⁰¹⁴ 『FRONT 復刻版：解説Ⅱ』 p.23-24.

東方社と淡路事務所

「前記淡路事務所も昭和一七年終わり頃¹⁰¹⁵九段坂下にあった野々宮ビルに移転した。ここにはかねて対ソ宣伝の研究や資料の作製のための「東方社」と称する第八課の事務所があり、宣伝用の写真雑誌「フロント」を製作していた。しかしこれも大東亜戦争開戦に即応して、従来の対ソ宣伝から一転して対南方、対枢軸国、対中立国宣伝へと切替えていたので、東方社と伝単作製部門とを合体（ただし建物は同一でも使用する部屋は違っていた）することによって相互の連繋切磋琢磨を図ると同時に、指導監督を単一簡便にしたわけである。なお野々宮ビルの上層階にいた伝単部は一九年春戦災に遭い¹⁰¹⁶、後述する駿河台文化学院（捕虜を収容して米本国向謀略放送の作業をやっていた）へ^(マ)転移した¹⁰¹⁷。ここには宣伝センスに富み、語学にも優れた人々が多かったので好都合であった。また漫画家達の作業のマンネリ化を防ぎ、その内容に清新さを加える意味から、部外から鶴見祐輔、鈴木文史朗、坂西志保、松岡洋子、江戸川乱歩、大下宇陀児などの知米の士や、探偵作家などを招き、座談会を催し、宣伝の方針や手法について研修するに努めた。」（心理 90-91）

○「『日本週報』という雑誌が戦後刊行されていた。戦中の諸分野の人達の回想を多く載せた仲々鋭利な編集方針を貫いた雑誌であるというのが私が抱いていた印象であった。たまたま、古書展で「未公開戦時伝単大特集—私の見た日本の秘密第三集」（第四八三号、昭和三四年六月臨時増刊号）という特集号を入手した。この号を見ると、「フロント」東方社の側の関係者は、伝単の側を殆んど意識していなかったにもかかわらず、淡路町の伝単部の側の人達は九段の東方社を十分に意識していたことがわかる。この号に太田天橋という人（元参謀本部伝単作製主任）が「私がマンガ伝単の元祖だ」という文章を寄せている。[中略] 昭和十五年参謀本部から多田督知中佐が所長として就任し、八月、神田・淡路町の荒井ビル三階に伝単部の“淡路事務所”が設けられた。太田氏は、「中島健蔵氏は九段の野々宮アパートで、参謀本部写真部東方社の社長として地階全部を占拠して、木村伊兵衛氏等一流写真家と共同で対ソ宣伝のパンフレットを作っていた」（八〇頁）と書いているが、やや正確さを欠いているようである。しかしながら続いて太田氏は「私たちも野々宮アパートに移って、中島氏や鈴木文史朗氏らと共同して対仏印伝単などを作るようになったのである」（同頁）と記す。中島氏のフランス語の知識がお役に立っていたようである。この話が本当だとすると東方社とこの伝単部はお互いに延長線上にあったということになる。この伝単部は時々座談会を開いていたが、参集した人々の中に、鶴見祐輔、坂西志保、松岡洋子らのアメリカ派、木々高太郎、江戸川乱歩、木下宇陀児などの推理小説家、近藤日出造、横山隆一

¹⁰¹⁵ 44年5月。[本書「2.4.1 東方社移転」]

¹⁰¹⁶ 45年3月10日。[『戦争のグラフィズム』p.257-265]

¹⁰¹⁷ 創設・移転：①淡路事務所（40年8月～43年10月ころ）、②参謀本部駿河台分室（伝単部。43年10月ころ～44年5月ころ）、③九段坂下野々宮ビル（44年5月ころ～45年3月）④駿河台分室（45年3月～）。[資料「伝単／淡路事務所」／資料「駿河台分室関係者」／『猫のしっぽ』p.61-62／本書「2.4.1 東方社移転」]

といった漫画家らがいた¹⁰¹⁸。[中略]…太田氏の記憶の混乱のせいで、多分文化学院、九段野々宮アパートといった順であろう。[中略]編集部が「九段の方に行ったのは……」と水を向けると、松下〔井知夫〕氏は次のように答えている。「看板は別だったのですが、あとで仕事の上で合流したのです。東方社というのは野々宮の一階にあって、僕らの伝単部は六階か七階、一番高いところに移ったのです。……二十年の三月十日に九段の野々宮は空襲で焼けたのです。上の方だけ、僕らの作業室だけ焼けたのです。(それで)今度は文化学院に行ったのです」結局、淡路町から文化学院に行って、それから野々宮に移って、又文化学院に帰ったと那須〔良輔〕氏は説明し、松下氏は野々宮には伝単部だけが作業の都合で行ったと証言している。編集部が、対ソ謀略で、九段で近藤日出造や横山隆一氏が仕事をしていた点に触れると、松下氏は「東方社から頼まれたのでしょうか」と述べている。

我々は、東方社を、独立した機構と考える傾向を持っている。今日、「日本週報」に収録された伝単を見ていると、英語ばかりでなく、マレー語、インドネシア語、ビルマ語、ヒンディ語がキャプションとして使われていることが確かめられる。ということは、「フロント」の多い時は十五ヶ国語という使用言語と一部重なることになる。或る意味では私の所属する東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所には、その種の機能の延長という面があるかも知れない。因みに、東方社の二階には後の東大教授の大言語学者で、私たちの研究所の初期の運営委員であった服部四郎氏が、モンゴル語事典編纂の名目で仕事をしていたという。暗号解読のようなことをしていたという説もある。東方社理事の一人であった岡正雄氏が私たちの研究所の初代所長であった事実と合わせると興味深い符合である。ここで、参謀本部がらみの伝単部と「フロント」を発行していた東方社の態勢が重なることになる。多分これらアジア系の言語の翻訳には同一人物が当たっていたと思われるし、或る時期、同じ建物に二つの機構が同居していた必然性が、そのあたりにあったのではないかと思われる。それにしても東方社の姿も長い間、不可視であったが、伝単部が、東方社と同居したことがある事実は更に霧の陰に匿れていた。こうした事実を一つ一つ知ることは“オンリー・イエスタディ”のアルケオロジーになる。ところで、戦争直後、岡田桑三と岡正雄が共同で「スーパーマン」日本版を出して大損したことがある。この二人の知的教養のどこを押してもマンガは出て来ないのでおかしいと思っていたが、野々宮アパートにおける伝単部と東方社の同居を知るに及んで、二人とマンガの関係が理解できた。「スーパー

¹⁰¹⁸ 駿河台分室で(も)同様な会が開かれている:「さて[43年11月に]駿河台分室ができるやいなや、企画部の第一の仕事として、アメリカその他外国通の有名人を招いて、敵国アメリカや中立国の国内事情をきく会合が盛んに開かれた。それによってアメリカを知らない私も、アメリカ人の国民性や宣伝上攻撃を加えるべきアメリカ人の弱点がだんだんに分かってきた。この会合の記録は、私が片っぱしからメモを取ったのであるが、戦後、万一話をされた方々のご迷惑になってはいけないと思い、完全に焼いてしまった。それゆえ、話された方々のお名前さえ定かでない。それで三五年前の記憶をたどって見ると、次の方々は話されたように思う。それは、『毎日新聞』編集主幹の上原虎重さん、同盟通信社の元ワシントン支局特派員の加藤万寿男さん、アメリカ通の坂西志保さん、中国通の魚返善雄さん、作家の木々高太郎(林檎)さん、将棋名人の木村義雄さんたちである。」
[『日の丸アワー』p.34]

マン」は最近何度目かの映画化により、再び話題になった。日本では余り売れなかったらしいから、事情は戦争直後と余り変っていないようである。しかしながら、漫画文化が写真と共にコミュニケーションの世界を席捲している今日、この両者の原型が野々宮アパートに同居していた事実には興味尽きないものがある。」¹⁰¹⁹

¹⁰¹⁹ 山口昌男. 淡路町からの眺め：東方社（対ロシア）へ愛をこめて. 『FRONT 復刻版：解説Ⅲ』 p.2-4.

『FRONT』刊行リスト

No.	通称	判型	ページ数	外国語版	制作年
1-2	海軍号 ¹⁰²⁰	A3版	68	15カ国語（ほかに国内版）	1942
3-4	陸軍号	〃	68	15カ国語	〃
5-6	満州国建設号	〃	68	中・英・露・タイ・仏・日, ほか不明	1943
7	落下傘部隊号	〃	40	中・英・露・日	〃
8-9	空軍（航空戦力）号	〃	68	中・英・露	〃
10-11	鉄（生産力）号	〃	68	2カ国語併記（中・英）	〃
12-13	華北建設号	〃	68	〃（中・日）	1944
14	フィリピン号	〃	52	〃（英・中）	〃
特別号	インド号	B4版	52	英語（一部中国語）	〃
〃	戦時東京号	〃	52	中国語（写真説明カタカナ）	1945
〃	戦時美術号	〃	—	—	

「*「FRONT」は特集システムをとっていたが、各号に正式な呼称はなく、上記の名称は当時における関係者間の通称である。

*「満州国建設号」の満州国向け中国語版・日本語版、および「インド号」「戦時東京号」の表紙には「FRONT」の表題はなく、別な題名が付けられている。

*上記のページ数は表紙4ページを含む。折込みなどの変則ページは、1ページ分のスペースを1ページとして計算した。

*創刊時の外国語版は次のとおり。中国語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、オランダ語、ポルトガル語、タイ語、ベトナム語、インドネシア語（オランダ式表記、英国式表記の2種）、蒙古語、ビルマ語、インド・パーリ語。

*「落下傘部隊号」は進行が早く、「満州国建設号」より先に発行された可能性がある。

[中略]

*一部日本語版を除き、発行年月日はすべての号に表示がない。また「華北建設号」以降は奥付もない。

*2カ国語併記の場合、先に表示したのが主たる表記。

*「戦争美術号」は、敗戦のため発行には至らなかった。」¹⁰²¹

○「特種東海製紙（株）が「FRONT」のバックナンバーを所蔵している。」¹⁰²²

○平凡社が1989～90年に復刻版発行。

¹⁰²⁰ ○「…陸海軍の戦争準備と並行して「陸軍号」「海軍号」の取材が進められていたが、十二月八日の開戦直前までは、予定に従い、前もって創刊号に決定していた「陸軍号」の編集が先行していた。[中略]この「真珠湾攻撃と英戦艦撃沈という」めざましい戦果に合わせて「海軍号」をはじめに出そうと考えたのは、東方社であったか、参謀本部側であったかは定かではない。[多川精一. 対外宣伝誌『FRONT』の記録. 『FRONT 復刻版：解説Ⅰ』p.32]

○42年2月、最初の『FRONT』発行。[本書. p.414]

¹⁰²¹ ○冒頭のリスト：『FRONT 復刻版：解説Ⅰ』p.33.から簡記。

○リスト下段の注記：p.33.から引用。

¹⁰²² 『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』p.170.

どう 同盟通信社

「英米にロイターやUP、APがあるように、わが国の通信社は現在の共同通信と時事通信の前身である同盟通信社があり、電信によって日比谷の本社から海外の各支局向けに情報が送信せられ、また逆に支局から本社向けに通信されて内地新聞に記事の骨格となる情報が供給されるわけである。電信放送なるがゆえにラジオ放送よりは固い内容となる代わりに正確であり、権威もあり、また記録に残るものである。

本社には古野伊之助社長を中心に、長谷川、松平、加藤、秋葉、足立、井上、萩原、岩本、渡辺などという海外事情に通暁した宣伝センスの優れた人材が揃っていて、まさに多士済々であった。私は定期的に毎週一回これらの人々と本社で昼食を共にし雑炊をすすりながらいろいろ啓蒙されることが少なくなかった。南方要地占領に伴いシンガポールに総局を、他の要地に支局を設置し活発な宣伝活動が行なわれ、総局長には福岡誠一¹⁰²³氏が当てられた。同様に上海には松本重治氏がいて活躍されていたはずである。」(心理 157-158)

○Wikipedia

「社団法人同盟通信社（どうめいつうしんしゃ）は、かつて日本に存在した通信社である。略称は同盟。公益を目的とする社団法人として設立を認可され、1936年（昭和11年）1月より発足。法人の構成員（社員）である加盟新聞社は社費を負担した。これが同盟収入の中心だったが、政府から助成金も受けていた。新聞社へ記事や写真を配信する通信社としての活動以外にも「ニュース映画」を製作、日本領と日本軍占領地では新聞を発行。日本に関するニュースと日本の主張を4ヶ国語で毎日、短波無線により発信。かつ連合軍側の通信社電（電報）やラジオニュースなどを傍受。東京中央放送局の海外放送（ラジオ・トウキョウ）ニュース記事も作成。

¹⁰²³ ○福岡誠一の生没年：「...1897（明治30）年～1975（昭和50）年 出典は以下のとおりです。国立国会図書館所蔵の「福岡誠一」同盟育成会 1976年刊より」, [浜松市立中央図書館回答. 2023-05-11]

○「岩永が専務になった国際通信社は学校を出た若い人を養成する方針を立て、一九二四年春、最初の学卒者の採用試験を行った。福岡誠一、萩野伊八らはこの時採用された。福岡は高知商業を出たあと、東京の中学四年に編入、五年を終えて、七校 [鹿児島]、東京帝国大学法学部を卒業した。学生時代から長谷川如是閑に師事していた。[中略] 福岡は国際通信社では、スケルトンをこなすこと、ニュースの理解力、翻訳の文章など、早くから頭角をあらわした。当時は電報料が高いので、電報は全てスケルトン（骸骨）という簡潔な暗号のような英文で入っていた。この短い電文を日本語に翻訳するだけでなく、これまでの経緯や背景を詳しく書き加えて外電に仕立てるのが外信記者の仕事であった。強度の近視で度の強い眼鏡をかけ、口ごもってものを言う癖など、近寄りがたい印象があった。実家は高知の酒造家だったが、酒とたばこが嫌いだった。（『福岡誠一』）。[『国策通信社『同盟』の興亡』p.40]

敗戦後、連合軍最高司令官総司令部（GHQ）から海外向け外国語放送の業務停止命令、事前検閲を受けた。1945年（昭和20年）10月31日、解散。通信社としての業務は翌11月1日に発足した社団法人共同通信社と株式会社時事通信社に引き継がれた。」¹⁰²⁴

○「「同盟」は「聯合」、「電通」の外国通信社との契約をそのまま引きついだ。「同盟」の結成計画は、早くから外国通信社の関心をひき、昭和八年（一九三三年）五月、APの総支配人ケント・クーパー、UPの社長ロイ・ハワードが相ついで来日した。当時は、電・聯合併の大綱がすでにできていたので、両通信社代表は「聯合」の岩永、「電通」の光永とともにアメリカ大使の招宴に臨んで、交歓した。その年、「聯合」とAP、ついでロイターとの契約が更改され、「聯合」は外国通信社と対等の地位を認められた。

その際、ドイツのヴォルフ通信社は、ナチ政権の下でニュースの自主自由を失ったという理由で世界通信社連盟における地位を格下げされた。しかし、その後わが国が独伊に接近するようになったので、「聯合」とドイツのDNB（ヴォルフ社とテレグラフフェン・ユニオンとを合併してつくったもの）イタリアのステファニ両通信社との関係も緊密化した。

「同盟」はこれらの契約をすべて引きついだが、それにつれて一つの問題が起きた。それは、UPがAP、ロイター、ハヴァス [アヴァスとも、フランス] などの世界通信社連盟と対立的な立場にあったので、連盟側から異論が出たのである。しかし、結局連盟側も「同盟」の立場を考慮して一応了承した。[中略]

同 [昭和十六] 年十二月八日、太平洋戦争が起ると同時にロイター、AP、UPとの関係が断絶したことはもちろんである。」¹⁰²⁵

○「さらに南方への関心の高まり、対英米関係緊張にともなって、日本の通信社の空白地であった東南アジアにも支局が設置された。一九三九年時点で、ハノイ・シンガポール・バンコック・ムンバイ・マニラ、さらにはシドニーにまで特派員が送られている。これらの地域は、イギリスの植民地支配の一翼を担うロイターの強固な地盤であった。また、アメリカの植民地フィリピンは、APの拠点であった。これらの地域で、同盟通信社が独自にニュース取材活動を行なうようになってきたこと自体が、西欧の情報覇権に対する大胆な挑戦である。

他方、欧米の通信網をみると、もともとロンドン・パリ・ベルリンなどの重要都市に特派員を駐在させていった。そして、中国ほどの規模ではないが、新たにローマ・ジュネーブなどにも特派員を置くなど拡大させていった。しかし、欧米での通信網拡大の難問は、多額の経費が必要なのと、語学力・取材力などを備えた人材を確保するのが容易でないことであった。しかも、特派員の人選について、同盟通信社だけの判断ではなく、現地公館も人材適否について外務省を通して意見を述べるなど、国策通信会社ならではの厄介事もあった。[中略]

¹⁰²⁴ “同盟通信社”. (参照 2023-05-10)

¹⁰²⁵ 通信社史刊行会編. 通信社史. 通信社史刊行会. 1958, p.521-522, 528.

日本の通信社にとって、長年大きな願望であった自力による海外情報の収集、海外への情報発信は、ともかくも実現したのである。しかし、それは、中国大陸で戦争を拡大させていく国策と一体となって、多額の政府資金の供与を受けるといった仕組みによって実現したのである。こうした仕組みのなかに組み込まれた同盟通信社は、通常の通信社の枠からはずれた活動さえ求められることになった。

外務省は、支局設置と特派員の人選について注文をつけていただけでなく、在外公館に「同盟通信社と在外公館との連絡に関する件¹⁰²⁶」と題する文書を送付し、在外公館が現地駐在同盟通信特派員を「指導」するように指示していた。それによれば [中略] この文面には、在外公館への指示と同時に、同盟通信社員への指示が含まれているから、当然同盟通信社も了承した文書であろう。文書が端的にしている通り同盟通信社員は在外公館と事実上一体であって、その下で「特殊諜報事務」に従事する任務さえ帯びているのである。しかも表面上は、政府と「何等関係なきもの」であるような装い、「対外的には常に不羈独立の機関として活動」する。さらにニュースは「常に国策的見地」から取り扱う。ここでも、以前からいわれていた「ナショナル・ニューズエージェンシー」という言葉が用いられているが、それは「国策」と一体となって、「特殊諜報事務」を行なう通信社という意味に変質してしまったのである。

無論、「特殊諜報事務」といっても、特派員が秘密潜入スパイ的活動をすることではなく、「特情」電報が主に想定しているのは、現地情勢や新聞論調の速報であったようだ。特派員がそうした情報などを通信するのは当然の活動である。だが、それが、会員新聞社へのニュース・サービスである以上に、政府のための情報収集活動として行なわれたということである。」¹⁰²⁷

¹⁰²⁶ 「在仏佐藤大使宛有田大臣「同盟通信社の指導に関する件」(昭和十一年一月七日付文書に添付、「在外本邦通信員関係雑件(新聞記者を含む)」(JACAR:B02031141000)。この文書は在独武者小路大使宛にも送られている。)], 『情報覇権と帝国日本Ⅱ』p.592]

¹⁰²⁷ 同上. p.374-377.

なみ 並河 亮

○Wikipedia

「(なみかわりょう、1905年12月26日 - 1984年5月8日)は、日本の翻訳家、放送作家、評論家。写真家の並河萬里の父。

来歴

島根県生まれ。東京帝国大学法学部卒。NHK 国際部、毎日放送に勤務。日本大学教授を務めた。ドス・パソス『U.S.A.』を唯一完訳した。アプトン・シンクレア¹⁰²⁸などの翻訳、放送台本、評論がある。生涯にわたり『華嚴経』研究著作を行った。¹⁰²⁹

○文化学院講師

「法科を卒業した後、社会学科に入り、先生たちのお手伝いをした。また私の弟、弘がお茶ノ水の文化学院の画学生で石井柏亭画伯にかわいがられていた関係で、私もしばしば学院に遊びに行った。そして院長の西村伊作氏と会うようになった。やがて学院で社会学、というより唯物史観とは何か、について講義するようになった。」¹⁰³⁰

○情報官

「昭和十五年の暮れに上海¹⁰³¹でひらかれた東亜放送会議¹⁰³²に NHK 代表の一人として出席していた私に NHK から電話が来て、私が内閣情報官に発令された。至急帰国せよ、ということで帰国したが、私は役人には不適と思ったので頼母木部長にその旨を伝えた。私は海外放送専任の情報官で、その仕事は NHK の国際部と情報局とをつなぐパイプ役だという。内閣情報局は放送、新聞、雑誌等の出版物、音楽、芸能、美術、催し物等の全分野で民間の団体に対する政府各省の指導を一本化し、指導の混乱を

¹⁰²⁸ 池田徳眞は「日の丸アワー」の反戦劇でシンクレアの作品を使う予定だった：「それで、探した結果、朝日新聞社の羽田三吉さんが、英文の原本を何冊か持っておられると聞いたので、お訪ねして事情をお話しし、次の三冊の原本を譲っていただいた。[中略]当時のアメリカは、資本主義万能で社会主義を嫌っていたから、資本家の圧迫で『ジャングル』を発行してくれる出版社がなく、いま私の手元にある初版本は、まことに粗末な黄色っぽい紙を使って、アプトン・シンクレアが自費出版したものである。そしてその後もアメリカの出版界は彼の著書には協力せず、そのため『ウエット・パレード』までの一七冊は、ロンドンの T. Werner Laurie Ltd. から出版されている。それ以後のことは、私は知らない。いずれにしても、アメリカの資本家がそんなに嫌うものなら、それに戦争をからませて放送したならば有効に違いないというのが、私の判断であった。」[『日の丸アワー』p.115-116]

¹⁰²⁹ “並河亮” (参照 2023-02-23)

¹⁰³⁰ 『もうひとつの太平洋戦争』 p.12.

¹⁰³¹ 正しくは台北か。[資料「東亜放送協議会／結成の経緯」]

¹⁰³² 「東亜放送協議会の定例会議の事かと思われます。ただ、資料によって「会議」であったり「会合」であったりと名称表記が一致しません。[浜松市立中央図書館回答. 2023-05-14]

防ぎ、指導の一貫性を確保するのが目的であった。情報官は課長や課員の中に各省から出向の文官がいるが、そのほかに民間団体から出向の者がいた。私は後者であったが、じつは私を海外放送専任の情報官に推したのは、情報局第二部の放送課長（後に新聞課長）宮本吉夫氏¹⁰³³とNHKの頼母木部長であった。これまでNHKには各省からいろいろの指示や指導があり、とかく混乱があったので、NHKに対し窓口を一本にしぼり、各省は情報局の放送課に連絡し、情報局で調整してNHKに指示連絡を行なうということになったのであった。これまでNHKの国際部に陸海軍や各省、特に外務省からばらばらの指令が来て職員を困らしていたので、それを改めて国際部への窓口を一つにするというのであった¹⁰³⁴。頼母木氏は声をひそめて、「独走を続けている軍の指示がストレートに放送局に伝えられ、それが外務省などを怒らしている。軍の指示をできれば対外宣伝という立場で緩和してNHKへ指示し、またNHKの希望をやんわりと軍に伝える必要がある。それには君が適任であると思ったから」といい、NHKの海外放送のためにぜひ発令に従ってほしいという。私はそれ以上逆らうことができなかった。」¹⁰³⁵

○二世観

「国際局の首脳は、対米放送の番組の企画や原稿の狙いや原稿の文そのものを二世達に委していた。二世達には、両国に対して一種のインフィオリティ・コンプレックスがあり¹⁰³⁶、それがいろいろな形でわれわれが望むものとは質的に異ったものとして表現される。国際局の首脳は二世達の英語力を利用しようとしたが、二世達はそれ以上には出なかつたし、出れなかつた。「ゼロ・アワー」に限らず、ニュース解説でも、二世達の書くものの内容は、残念ながら日本人の精神的なクオリティとは異質なものであった。日本の主張を説くにしても、二世達には質的に限界があつた。国際局の首脳は、二世に委せておけばいいと考え、対米主張を怠つたといわれても致し方ないであらう。私の接した二世達はすべて善良ないい人達であつた。しかし、育つた環境もあり、彼等に日本人の血は流れていても、日本人の心情や人間観、理想的人間像、宗教観について語らせるのは無理である。参謀本部や国際局の首脳が、英語さえうまければそれでいいとして彼等に自由なスピーチを許し、それで宣伝効果があると考えた

¹⁰³³ 宮本吉夫：「昭和十五年末、[通信省から]情報局第二部第三課長を命ぜられた私は、重要な海外放送にほとんど専従してもらうため、NHKに乞うて並河氏に情報局に出向を依頼した。』、『NHK戦時海外放送』p.184]

¹⁰³⁴ 「情報局としては「作戦」には一切口出しをしない。またできるものでもない、と決めていた。したがってNHKとの関係においては、大本営の行う「謀略放送」の内容に口出しをしない。意見もいわない、という態度を決定していた。[中略]...当然、「謀略放送」の立案・実施は、参謀本部とNHKとの直接取引によることになり、NHK国際局にはそれを当然のことと考える者もいたし、意識的に情報局・逋信省を無視する者も出てきた。』。[並河亮、「ミッドウェー海戦から終結まで」。『NHK戦時海外放送』p.301-302]

¹⁰³⁵ 『もうひとつの太平洋戦争』p.90, 92.

¹⁰³⁶ 「宇野氏は有能で仕事熱心であつたが厳格でやや高圧的なところもあり、捕虜との間に感情的な溝が生じつつあつた。あるいは彼が二世として懐いていた白人に対する潜在的反発心も手伝っていたかも知れなかつた。」(心理 227)

のは、いかにも安易な安手な考えであった。英語力はもちろん必要である。しかし二世達を日本人の代弁者とするのは、やはり無理である。」¹⁰³⁷

○上海赴任

「[45年の]ある日、その日の印象は今もハッキリと覚えているが、三宅坂の情報局から宮城のお堀の道を、私は海軍省に帰る参謀と歩いていた。そのとき参謀から、日本の敗戦はもはや決定的である。いかに死ぬか、を各自が考えねばならぬときが来た、と云われてショックを受けた。それからもう一つ、中支の放送局をこれまでわがもの顔に牛耳っていた陸軍のある軍人が病で寝ている。中支にいる陸軍の動向も心配なので、放送局を護るためにさっそく上海へとんでいってくれ、外務省とも相談した。ぜひ君にあってほしい、というのである。上海の複雑な状況については、前に東亜放送会議で上海へ行ったことがあり、そのとき以来、だいたいのことはわかっていた。上海ではこれまで陸軍対海軍・外務の深刻な争いが続いていた。私は一身上の都合ということで情報官を辞め、単身、東京を発って上海へ向かった。毎晩のように空襲で、下ノ関の宿で一泊したが、ゲートルを足に巻いたまま布団をかぶってうとうとして一夜を過ごした。釜山から汽車で北上したが、夜半に列車が線路を爆破されていて動けなくなった。寒月が荒涼とした朝鮮の裸山を照らしていた。やっと北京に着いた。そこから南京へ汽車で行くことになっていたが、途中また線路が破壊されているので、一～二日汽車は出ないという。北京の駅に人影は少なく、からっ風が新聞紙を吹き上げていた。そのとき、ふと大同の雲崗の仏像が頭に浮かんだ。雲崗の仏たちをぜひ一生に一度でいいから見たいものだと、私はかねて思っていたし、京大の長広敏雄教授たちの調査隊が雲崗にいると聞いていたので、急にそこを訪ねたくなり、大同行きの子夜行列車にとび乗ってしまった。」¹⁰³⁸

○安岡元彦

「並河先生の資料有難う御座いました。軍の陸海空、外務省－NHKと当時の混乱と要請、NHKの立場を加えた調整官の役割はさぞ大変だったかと推察されます。重嗣大叔父に並河先生の講義を受けている話をすると『おお並河君か』何か親しそうで、信頼を置いている感触だった事を思い出します。並河先生はかなりお年を取ってから研究論文を東大に出し文学博士取得されたと記憶してます。そのテーマが『華嚴経』なんですかね。CIAとの関係は米翻訳に関してか？情報官の人脈を米として活用する事からか？または米との関係から憶測されたものか？興味深いですね。」¹⁰³⁹

¹⁰³⁷ 並河亮.“ミッドウェー海戦から終結まで”.『NHK戦時海外放送』p.311-312.

¹⁰³⁸ 『もうひとつの太平洋戦争』p.193-194

¹⁰³⁹ Eメール. 2023-02-23.

なん 南方軍などの対敵放送

「開戦に先立ち参謀本部では一七人の日本放送協会職員を、一七年一月にはさらに一九人を徴用して南方に送った。一七年九月には日本放送協会内に南方室を新設、軍との連絡の窓口とした。陸軍は同年十一月一七〇人をジャワ、マレー、フィリピン、ビルマに、海軍は一八年一月二四名をセレベス、ボルネオに派遣、軍の徴用により南方に赴いた職員は合計三〇二人となって、殉職者も中国大陸を含め四六名に達した。」
(心理 111)

○準備不足

「…南方地域を軍事占領する構想が現れたのが 1940 年以降だったこともあり、放送に関しても開戦数か月前になって放送協会が南方の放送事情の調査を本格化させるなど、戦前にはほとんど検討がなされていなかったことがわかった。また、開戦後も、運営主体を軍にするか放送協会にするかで議論になるなど実施の枠組みが定まらず、番組内容も放送局の設置と並行して進むなど、準備不足の中で放送が始まったことが資料から浮かび上がった。長期的展望に立った計画が存在しない中、南方での放送が始まっていったことになる。」¹⁰⁴⁰

○占領地放送局

「戦局が進み、日本軍の占領地が広がるにつれて、軍は南方占領地に放送局を開設し、戦地と内地の一体化を図り、さらに、現地住民の”宣撫”、連合軍前線の”制圧と謀略”のために、放送の効果をじゅうぶんに発揮させようとした。[中略] 陸軍に徴用された協会職員は第一線部隊とともに進み、占領後、日本軍による放送局の開設に当たった。マレー、フィリピン、ジャワでは、占領と同時に放送を開始する計画であったが、連合軍側の放送施設が徹底的に破壊されていたので、これらの施設を復旧するために多くの苦労を重ねた。しかし、戦局の有利な進展によって南方各地の放送局は、急速にその機能を回復した。これらの占領地放送局は、香港総督府の指揮下に置かれた香港放送局を除き、それぞれ現地派遣軍の管理下に置かれた。このほか、セレベス、ボルネオなどの海軍占領地区に設けられた放送局は、海軍民政府（南西方面艦隊）の管理下に入っていた。南方占領地の放送局は、すべて軍の管轄下にあった。[中略] 協会の派遣職員は、長期にわたる熱帯での勤務の中で、軍の作戦に協力して住民の”宣撫工作”や”対敵放送”に従った。」¹⁰⁴¹

¹⁰⁴⁰ 村上聖一. “「南方放送史」再考①：大東亜共栄圏構想と放送体制の整備”. 放送研究と調査. 2021-03, p.40.

¹⁰⁴¹ ○『放送五十年史』p.155.

○恒石の上記枠内の記述は『放送五十年史』p.155, 195.と一致する.

○恒石は『放送五十年史』を参考引用文献に、「NHK 堀賢二」を協力者に挙げている。
(心理 381, 6)

○南方室

「1942年5月に「南方占領地放送暫定処理要領」が作成され、各軍政監部の外局として放送管理局を置くことが決まり、翌月には「南方圏放送計画案」が策定された。このとき放送管理局の職員は主に日本放送協会から派遣されることになった。同年9月には、軍と協会との連絡・折衝窓口として会長直属の「南方室」が設置され、この南方室が日本放送協会における南方派遣要員の人選や身分、俸給、任期などを決めた。」¹⁰⁴²

¹⁰⁴² 松山秀明. “「南方放送史」再考③：激戦地における放送工作とその潰散～フィリピンとビルマを例に”. 放送研究と調査. 2021-05, p.26-27.

南方軍の放送

「南方作戦では、開戦準備の段階から敵側に対するラジオ放送が重視され、主に日本放送協会関係者を、司政官または徴用員として、南方軍¹⁰⁴³報道部および各軍宣伝部に配属、作戦の進捗に備えていた。

マレー作戦に伴う F 機関工作、ビルマ進攻とともに展開されたビルマ独立運動の支援、ジャワ島攻略戦におけるインドネシア人に対する呼びかけなど、ラジオ放送の果たした役割は極めて大きなものがあった。

その後進攻作戦の完了とともにシンガポール、バンドン、ラングーン、バンコック、サイゴンなどの主要放送局をはじめ、地方放送局を含めて二十数局がわが軍のもとに放送を再開し、地域住民に対する広報宣伝のため活躍していた。

しかしながら、当初はその殆んどが現地各軍にまかされ、南方全域にわたっての連絡調整がないままに運営されていた。インド、オーストラリアの他の敵連合軍の後方地域および敵軍に対する放送は、これを統一的に運用する必要から、藤原 [岩市] 少佐はこれを憂慮し、着任した原務中尉 (乙 1 短) とともに、南方軍報道部を強化して各軍宣伝部の内面指導に当たった。

この頃、インド国内に対するラジオ放送の統一強化は、一日もこれを放置できない状況であったので、軍は当時総司令部附として岩畔機関に勤務していた山口源等 (乙 1 長) に南方軍報道部放送科長兼務を命じ¹⁰⁴⁴、シンガポール放送局の緊急整備をはかるとともに、対印放送の統一調整を行うこととなった。[中略]

昭和十八年八月には、内閣情報局主催のもとに東京において東亜放送連絡協議会¹⁰⁴⁵が開かれ、山口中尉と原中尉とがこれに出席した。」¹⁰⁴⁶

¹⁰⁴³ 「太平洋戦争 (大東亜戦争) において、東南アジア (南方) 方面陸軍部隊 (大本営直轄部隊を除く) を統括する総軍として、大陸命第 555 号に基づき 1941 年 (昭和 16 年) 11 月 6 日に編成された。開戦後はマレー作戦・ビルマ作戦・フィリピン作戦・蘭印作戦などに代表される一連の南方作戦を指揮し (香港攻略は支那派遣軍)、また戦前より日本領である南洋群島や、同盟国であるタイ王国 (シャム) においても防衛・軍政の任に当たった。総司令部は当初サイゴンに置かれたが、南方作戦終了後 (※) はシンガポールに移転した。[中略] 総司令官は一貫して寺内寿一元帥陸軍大将。』, [“南方軍 (日本軍)” Wikipedia. (参照 2022-08-24)]

(※) 「42 年 9 月」, [アジア歴史資料センター・グロッサリー検索「南方軍 (威)』]

¹⁰⁴⁴ 「藤原 [岩市] 氏と岩畔氏の対立は、モーハン・スィンフ (昭南) とビハーリー・ボース (東京) との対立に重なり、自分 [山口源等] は現地の実情を知る前者を支持していました。藤原機関長は南方総軍参謀として転任し、私は 1942 年 5 月 1 日の岩畔機関成立と同時に、バンコクの同本部へ転任し、高岡大輔政務班長を補佐する任務に就きました。けれども、実際になすべき仕事は、ほとんど何もありませんでした。そして、1942 年 12 月 1 日に南方総軍報道部放送課長として、ふたたび昭南市に転任し、数 10 名の部下と共に、対外宣伝放送 (10 以上の言語) を行いました。ベルリン・オリンピックの「前畑ガンバレ」で有名な河西アナウンサーも、私の部下として働いていました。』, [『資料集 インド国民軍関係者証言』 p.454-455]

¹⁰⁴⁵ 大東亜放送連絡協議会。[資料「東亜放送協議会」]

¹⁰⁴⁶ 『陸軍中野学校』 p.548-549.

「[43年] 十月二十日¹⁰⁴⁷には、インド仮政府首席 S・チャンドラ・ボース氏が、シンガポール放送局（インド仮政府放送と改称）を通じて英米に対して宣戦を布告した。」

1048

¹⁰⁴⁷ 別の日付とする資料もある。

○「昭和 18 年 7 月 4 日、シンガポール放送局で対英米宣戦布告をするチャンドラボース氏」(心理 105. 写真キャプション)

○「自由印度仮政府は十月二十四日午前零時よりボース主班邸宅に於て第二回閣議を開催し、先づボース主班は日本政府より仮政府が正式に承認せられた旨を報告し、之に對する聲明案文を決定し、次で英米兩國に對する宣戦布告に就き協議した結果、零時五十五分宣戦を布告し、同日午後市廳廣場に於て開催された印度民衆大會席上ボース主班より嚴に之を通達した。」。[假政府の對英米宣戦布告. 日印協會會報. 第八十六號, 昭和十九年五月三十日発行, p.104]

¹⁰⁴⁸ 『陸軍中野学校』p.549.

参謀本部と南方軍

「東京ラジオときわめて接近した波長で、わが占領地域であったマニラやシンガポール、ジャワあるいはサイゴンなどからも、ほとんど同時刻に東南太平洋方面に放送されていたので、それ等と〔東京からのゼロ・アワーが〕混同されたことも十分考えられることである。それは東京放送に準じて現地軍において独自の見地から放送していたものであるが、重要なテーマについては適時参謀次長の指示を電報し、また必要に応じてはそれ等の電波を某地域に集中する戦略的運用¹⁰⁴⁹を行っていた。」

(心理 346)

¹⁰⁴⁹ 対重慶放送で例がある：「東亜放送協議会は、39年8月から、しばしば「対重慶集中放送」を行ない、各放送局の中波、短波を動員して、中国語による宣伝放送を行なった。」
〔資料「東亜放送協議会：結成の経緯」／資料「重慶向け放送」〕

南方各局の対敵放送¹⁰⁵⁰

放送開始時期			放送局	放送先				
年	月	日		インド	濠州	北米	重慶	その他
42	2	11	香港 ¹⁰⁵¹ (広東)				○	
	〃	20	マニラ			○		西太平洋敵軍隊向 ¹⁰⁵² 東南太平洋方面 ¹⁰⁵³
	3	7	ジャカルタ ¹⁰⁵⁴		○			東南太平洋方面
	6	27	シンガポール	○				〃
	8	15	ラングーン	○			○	
43	1		バンドン	○	○	○		
	12		シンガポール ¹⁰⁵⁵	○	○		○	南太平洋向, 欧州向, 南米向
【借用 ¹⁰⁵⁶ 】								
42	3	3	サイゴン ¹⁰⁵⁷					ジャワ向け謀略放送7日間
		10		10	○	○		
			バンコク	○				

¹⁰⁵⁰ (心理 112-113, 158-162, 346) などから編者作成.

¹⁰⁵¹ 「これらの占領地放送局は、香港総督府の指揮下に置かれた香港放送局を除き、それぞれ現地派遣軍の管理下に置かれた。」 [本書. p.427]

¹⁰⁵² 「[42年] 二月二〇日からルソン、ミンダナオ、ピサヤ地域向けの短波(二・五キロワット以下) 放送を行なった。またコレヒドール要塞の米比軍への放送、あるいは前線での拡声機による投降呼びかけ等も行なった。さらに東京から西南太平洋方面の敵軍に対する放送(ゼロ・アワー)の中継や独自の対敵放送も活発に実施した。」 (心理 160)

¹⁰⁵³ 「...わが占領地域であったマニラやシンガポール、ジャワあるいはサイゴンなどからも、ほとんど同時刻に東南太平洋方面に放送されていたので...」 [(心理 346) / 本書.p.431]

¹⁰⁵⁴ 中波. 他局はすべて短波. (心理 113)

¹⁰⁵⁵ 「とくにシンガポールには短波五〇キロの強力施設が一八年一二月以降開局せられ、インド、重慶、濠州、南太平洋方面の敵軍に対する放送が強力に実施され、さらに欧州および南米方面に対する放送も開始されるに至った。」 (心理 161)

¹⁰⁵⁶ 「なお、仏印(フランス領インドシナ。現在のベトナム、ラオス、カンボジア)は、日本が1945年3月に軍事占領[原典脚注省略.資料「仏印との関係」]するまでの間は、日本軍が現地の放送局に使用料を払い、対敵放送などを行っていた。独立を維持したタイでも同様の手法がとられた。」 [「南方放送史」再考①] p.41]

¹⁰⁵⁷ 「一七年三月ジャワ上陸作戦に呼応して有効なる謀略放送を行なったことは既述したとおりである。一七年一〇月一〇日以降時間借りの形式をとり、南方総軍(※1)において対インド、対濠州放送を行なった。またインド独立連盟よりも要員を派遣して(※2)対インド宣伝を強烈に実施した。」 (心理 162)

(※1) 本書.p.429. 脚注. 1043/ 資料「総軍」

(※2) 理由不詳. 放送時間確保, あるいは日本の直接支配下にあるシンガポールからよりも宣伝効果が高いと考えたためか.

南方軍以外の外地総軍の対敵放送

○中国大陸からの対敵放送¹⁰⁵⁸

運営主体	中央放送局	放送先					
		インド	濠州	北米	重慶	南方	その他
華北放送協会	北 京				○	○	外蒙
中国 //	南 京				○	○	
満州電信電話 株式会社	新 京			△ ¹⁰⁵⁹ (西部)		△	欧州

○恒石の支那派遣軍¹⁰⁶⁰・関東軍訪問¹⁰⁶¹：『心理作戦の回想』に記述なし

¹⁰⁵⁸ (心理 159-160) から編者作成.

¹⁰⁵⁹ ○満州国は参戦していない. [本書.p.405. 脚注.992]

○関東軍司令部・齋藤少佐. [資料「東亜放送協議会／第五回東亜放送協議会」]

¹⁰⁶⁰ ○「私は上海には戦中に一度行っただけですが機上から見ても長江と海の区別が水の色で想像出来る位で驚きました その時は天候不良のため北京まで火車 [中国語. 汽車の意] に変更して国土の広さを実感したことでした」. [恒石重嗣. 葉書. 95-08-23]

○資料「重慶向け放送」

¹⁰⁶¹ 訪問の必要があったか不詳. [資料「対ソ静謐」]

にし 西 義章

パネー号事件

(Panay incident, 37年12月12日)

○「大南京攻略戦の途上に起った不幸な偶発事件として国民を驚かせた米艦パネー号事件につき逸早く実情調査のため現地に急行した大本営陸軍部参謀西義章中佐は二十二日午後帰京、二十三日午後四時半から一時間にわたって大本営陸軍部に在京外國新聞通信記者を招致して詳細当時の実情を説明、更に同夜八時半から陸軍省詰記者団に対して惨憺たる苦心に成る調査の結果を次の如く語った……」¹⁰⁶²

○「パネー号事件調査のため現地に派遣された参謀本部欧米課アメリカ班長・西義章31期騎兵中佐は十二月二十二日帰京、直ちに陸軍首脳部に報告、二十三日午後四時半より外国人記者団約三十名を大本営陸軍部に招きその調査に基づき事件経過を説明、引き続き同中佐は柴山兼四郎24期陸軍省軍務課長と共にアメリカ大使館を訪問、グルー大使はじめ陸海軍武官らに約二時間にわたり詳細に説明し、夜八時大本営に引き揚げたが、その概要は次の通りである。

【昭和12年12月24日東京日日新聞記事による】¹⁰⁶³

帰 国

○大本営陸軍部戦争指導班

「[昭和十七年八月二十日(木曜)]日米交換船帰ル 帰ヘリシ人 迎フル人共ニ感深カルヘシ [中略]

[八月二十五日(火曜)]二、午後三時ヨリ官邸ニテ磯田 [三郎] 中將、西 [義章] 大佐、宇都宮 [直賢] 大佐ノ報告ヲ聴取ス 傾聴スヘキモノナシ」¹⁰⁶⁴

○『偕行社記事』¹⁰⁶⁵

「一 開戦初頭に於ける米國の状態

凡そ戦争は國家の危急存亡に關するものである。従つて開戦は國家が最後の關頭に立つて始めて之を決定せらるべきものであり、斯くして始めて全國民の努力、全國家の総力を戦勝に結集せしめ得るのである。

然るにアメリカの對日開戦に至つた事情は之と全く異つて、アメリカの國家國民といふものが危急存亡の最後の關頭に立つて、止むに止まれぬといふ情勢から参戦となつたのではない。即ち昨年末歐洲戦に對してはルーズベルト大統領は一面に於て國民に参戦回避を確約しつつ、他面聯合國側に兵器、其の他の軍需資材を供給することに依つて、其の勝利を確保すると共に米國國內の戦時景氣に依る經濟復興を齎さんとし

¹⁰⁶² 遭難米人好く理解 我方故意の射撃絶対なし 現地調査の西中佐談. 東京日日新聞.1937-12-24, 朝刊.

¹⁰⁶³ 南京戦史編集委員会編. 南京戦史II. 偕行社, 1993, p.460.

¹⁰⁶⁴ 『機密戦争日誌 下』p.274.

¹⁰⁶⁵ 偕行社の機関誌. [“偕行社記事”. コトバンク. (参照 2022-11-26)]

た。一方對日交渉に就ては其の経過は之を一切國民に秘して発表せず、國民は經濟好景氣と誤れる對日侮蔑感、例へば日本は其の全國力を對支戦に消耗し盡し到底米國に抗して立ち得ず、日米開戦するも日本海軍は二週間にして太平洋上より影を没し、日本都市は米飛行機に依り忽ちにして灰燼に歸すべしなどの論に依つて、全く戦争の発起を豫想せず、國民を挙げて浮調子とも稱すべき状態に在つた時、ル大統領の政略的一大過失とも謂ふべき對日交渉の決裂に依り、突如として日米開戦に至つたのである。」

1066

長距離機 A26 (キ 77)

同機の開発に携わった木村秀政の著書¹⁰⁶⁷から抜粋・引用。

○ 開発：朝日新聞社は神武紀元二千六百年（昭和 15 年）を記念して、東京・ニューヨーク間を無着陸で飛ぶ親善旅行を計画、東大航空研究所（航空研）に開発を依頼。機体は立川飛行機、エンジンは中島飛行機が生産と決まったこの長距離機は、朝日新聞の A と 2600 年から A26 と名付けられる。

○ 抵抗：「ところが、こんな細長い片持翼（支柱で支えていない翼）をもった双発機は、それまでにわが国ではあまり作られたことがなかった。こういう場合「大丈夫か、そんな細長い翼で」という声が必ず周囲から起こる。われわれの仕事に声援を送ってくれる立場の人からも、何かといえば、けちをつけたがる小ジユウト的立場の人からでもある。いずれの場合も、別に深く検討した上での論議ではないから、「フランスにこんな例がありますよ」とでもいえば、大ていは納得する。欧米に先例があれば安心、日本ではじめてのものは不安という後進国意識は、不思議なことに、日本の航空技術が後年世界的水準に達した後も、日本の航空界のあらゆる階層にただよっていた。だから、われわれは少しでも新しいことをやろうとすると、必ず何がしかの抵抗を排除する勇氣と努力が必要だった。」（p.140）

○ 完成：「A 二六の細部設計と製作は立川飛行機の工場に進められ、昭和十七年十月に完成した。残念なことに、前年の暮れに太平洋戦争が始まっていて、最初の目的であったニューヨーク訪問飛行は、あきらめなくてはならなかった。その代わり、陸軍でその性能に注目して一機を追加注文し、結局 A 二六は二機作られることになった。陸軍名をキ七七といった¹⁰⁶⁸。」（p.141）

○ 失敗：「昭和十八年七月、A 二六が実力を発揮する最初の機会が訪れた。当時日本とドイツとの間の交通は潜水艦による以外なかったが、A 二六の完成で空路連絡の可能性が生じてきたので、完成したばかりの二号機を使って、その調査飛行をやってみ

¹⁰⁶⁶ 西義章.“日米開戦後に於ける米国国情の一斑”. 偕行社記事. 陸軍偕行社編纂部. 第 819 号, 1942-12, p.59.

¹⁰⁶⁷ 『木村秀政：わがヒコーキ人生』 p.140.

¹⁰⁶⁸ 「その頃、陸軍航空本部内では、キ七七の実用目的についての検討が進められていた。[中略] 昭和十八年が明けて間もなく、川島 [虎之輔・総務部総務課長] は、突然東条英機首相兼陸相から招かれた。[中略] 東条はうなずいてきいていたが、不意に、「そのキ七七で、ドイツに無着陸飛行はできぬか」と、問うた。そして、前年の七月にイタリアのサポイア・マルケッティ SM-75 型機が中国大陸の包頭 [現在の中国内モンゴル自治区] を経由して福生飛行場に飛来したが、日本機でドイツとの空路による連絡路の開発をはかりたいのだと述べた。[吉村昭. 深海の使者. 文芸春秋, 1973, p.204]

ることになった。コースとしては、人目に立たぬインド北方の山岳地帯をこっそり飛ぶのが一番安全と考えられたが、軍当局としては、もしこのコースを飛んでソ連領にでも不時着しては、当時微妙だった日ソ関係に悪い影響を及ぼすというので、南方コースを選んだ¹⁰⁶⁹。日本からシンガポールに飛び、ここで給油して印度洋を越え、当時かなり東にのびていたソ連領内のドイツ占領地区¹⁰⁷⁰まで一気に飛ぼうというのである。平時ならばA二六にとって楽に行けるコースであるが、英国のレーダー網と戦闘機の厳密な警戒を突破せねばならぬことを考えると、成功の可能性はきわめて薄かった。A二六の悲劇はコース決定の瞬間に始まった。この計画は「セ号飛行」という名で、極秘のうちに決行された。セは成功のセだというのが、その望みはずなかつた。乗員には、長友、川崎、塚越、永田、川島と朝日新聞航空部の精鋭が選ばれ、これに陸軍将校三名¹⁰⁷¹が同乗して、昭和十八年六月三十日、都下の福生陸軍飛行場（今の横田飛行場）を出発した¹⁰⁷²。極秘だというので、航空研究所からは私一人が見送りを許された。この日は蒸し暑い日で、飛行場に集まった人たちは、見送る方も見送られる方も一様に重苦しい気分に含まれていた。長友さん以下の乗員は、黒い戦闘帽という一種異様ないでたちで、それが何か不吉な運命を暗示しているように思われた。こうして福生を出発したA二六は、当時日本の占領下にあったシンガポールまで一気に五千三百キロメートルを飛び、ここで数日待機して、七月七日ドイツ領を目指して飛び発った。しかし、同機からは一回の無線連絡もないまま消息を絶ってしまった。英軍戦闘機に撃墜されたのか、出発直後に印度洋を通過したはげしい不連続線に出会って何か起こったのか、戦後しらべてみても消息は全くわからない。

あまりにも無謀な計画のために犠牲になった長友さん以下乗員の霊を慰め、いまだにその全性能を発揮する機会に恵まれていないA二六の真の実力を検討する目的で、残された一号機で世界記録への挑戦が行なわれたのは、昭和十九年七月であった¹⁰⁷³。」
(p.144-146)

¹⁰⁶⁹ 資料「対ソ静謐」

¹⁰⁷⁰ 「…出発地としてシンガポールのテナガ飛行場〔カラン飛行場に変更〕を定め、インド洋上を西進してセイロン島沖約二百キロメートルの地点を迂回後西南方に進み、紅海を経てトルコ南方の地中海上にあるロードス島に着陸する。その後、同飛行場で燃料を補給してベルリンに赴くことになった。』。『深海の使者』p.207, 212」

¹⁰⁷¹ 遣独使として参謀本部の西義章大佐と香取孝輔中佐、機長として「…航空本部内で慎重に人選がおこなわれた結果、航法の権威者であり、ドイツに駐在した前歴もある白城子〔現在の中国吉林省〕陸軍飛行学校教官中村昌三中佐」。〔同上. p.210, 206〕

¹⁰⁷² 「遣ドイツ長距離機キ七七第二号機（機長中村昌三中佐、主操縦士長友重光、副操縦士川崎一、機関士塚越賢爾・永田紀芳、通信士川島元彦、遣独使節西義章大佐・香取孝輔中佐が同乗）、福生飛行場を出発。』。『年表太平洋戦争全史』p.243」

¹⁰⁷³ 1944年7月2日満州の新京飛行場を飛び立ち、3日間で16,435kmの世界記録を達成、「プロペラ機では、今日なおA二六の記録を凌ぐものは現われない。』。『木村秀政：わがヒコーキ人生』p.146-147」

につ 日系二世

○「二世」とは

「③ブラジルなど、移民先で生れた日本人の子で、その国の市民権を持つ者。」¹⁰⁷⁴

○太平洋戦争中、日本に残留した日系二世の数：不明

「統計情報等探しましたが、日本に残留した日系二世の人数が分かるような資料は見つけることが出来ませんでした。ただし、関連する記述等がある以下の資料を見つけましたので、御確認ください。

『名古屋外国語大学現代国際学部紀要 第5号』（当館所蔵なし）

P393-425 「ある日系アメリカ人婦米¹⁰⁷⁵二世画家の口述生活史：戦時下に生きたルイ

¹⁰⁷⁴ 【二世】. [『広辞苑』]

¹⁰⁷⁵ 「二世の中でも、アメリカ・カナダ・ブラジルで生まれ、日本で教育を受けた後、再び各々の国に帰った者を「婦米 (kibei) 二世」「婦加 (kika) 二世」「婦伯 (kihaku) 二世」と呼ぶ。日本に送られた主な理由としては、日本の文化や日本語を忘れて欲しくない、という日本で生まれ育った一世である親達の意向によるものだった。その中でも戦前にアメリカに戻った婦米二世達は、日本語が堪能な反面、英語は上手く話せないといった問題に直面し、アメリカ社会への適応に手間取っただけではなく、日米開戦後は教育を受けた日本への忠誠心と、「自分はアメリカ人である」というアイデンティティの間に板挟みになる、といった苦悩に直面した者が多く、忠誠登録の核となった質問 27・28 には「No-No」と答えた割合が、アメリカで生まれ育った二世に比べて多かったという（※）。その一方で、一般的な二世の多くが日本語能力が十分でない中、日本で教育を受けたことによって得た、難読漢字の入り混じった軍事文書を読めるなど、婦米ならではの高い日本語能力が重宝され、MIS に日本語教員や語学兵として配属されたというケースが多かったという。一方で、婦米二世のなかでも様々な理由で日米開戦後も日本に残り続けた者達は、日本人として学徒出陣によって自身の祖国であるアメリカと戦わざるを得ない状況に置かれてしまうこととなり、MIS のメンバーの中には「兄弟が別れ別れになり戦った」という者もいたという。]. [“婦米・婦加・婦伯”. Weblio. (参照 2023-05-11)]

（※）『『ノー・ノー・ボーイ』（原題：No-No Boy）は、日系アメリカ人の作家ジョン・オカダによって執筆され、1957年に刊行された小説である。概要 第二次世界大戦から戦後にかけての日系アメリカ人の生活を主題にした小説である。第二次世界大戦中の1943年、日系人の強制収容所で行われた調査の中に「米国に忠誠を誓い、日本への忠誠を放棄するか」「米軍に従軍する意思があるか」という2つの質問が含まれており、日系人はYES/NOの選択を迫られた。答えが「YES YES」であれば軍役適格者は米軍兵士として収容所から戦場へ送られた。一方、「NO NO」と答えた者は敵性外国人扱いを受け、収容所に留められた。運命の分かれ道になるこの2つの質問は日系人社会で大議論を引き起こしたが、本書の題名はここから来ている。この小説の主人公である日系二世のイチロー・ヤマダは2つの質問に「NO NO」と答え2年間投獄された。これに対して、主人公の親友であるケンジは志願して従軍の道を選ぶが、戦場で片足を失い、それが原因でやがて死んでしまう。イチローは刑務所を出ると郷里のシアトルに戻るが、戦争、そしてアメリカと日本という2つの国へのそれぞれの想いによって、友人や家族が引き裂かれていく現実に直面し苦悩する。]. [“ノー・ノー・ボーイ (小説)” Wikipedia. (参照 2023-05-11)]

ス・スズキの反戦思想の展開を中心に」吉見 かおる／著

<http://id.nii.ac.jp/1095/00000237/>

P402 (PDF: 10 枚目) に「(略) 生まれの日系アメリカ人二世の多くが太平洋戦争前に来日し、その数はおよそ5万前後、また戦時中には1万数千人が日本に留まっていたと推定されている。」という記述があります。

P419 (PDF: 27 枚目) に「(略) 戦争時に日本に滞在していたことから日本軍として兵役に就かざるを得なかった多くの日系アメリカ人も存在しており、その歴史的事実は最近になりようやく明らかにされている。」という記述があります。

いずれも「太平洋戦争と滞日日系二世 — 二世教育機関に通った日系アメリカ人を事例として」(門池啓史著) を参考文献としています。

『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生 グローバル時代の日系人 明石ライブラリー』村井 忠政／編著 (334.4/ムラ)

P171-196 に、上の参考文献になっている「太平洋戦争と滞日日系二世 二世教育機関に通った日系アメリカ人を事例として」(門池 啓史／著) が収録されています。

P177-179「滞日した二世の数」のうち、P177で「戦前多くの日系アメリカ人は前述のような事情で来日したが、その実数を明確に示す公式資料は存在していない。」とし、P177-178でいくつかの資料を挙げたうえで、P178に「(略) 上述資料から戦前、五万人前後の二世が来日し、戦中一万数千人は日本に留まったと推定される。」と記述しています。

P179-185「二 敵之館」のうち、P184に「(略) 海外からの電信傍受等で二世たちの英語力や速記力が絶対的に必要であり、当時の日本政府および軍部にとってそれは重要事項であったと推測されるのである。」という記述があります。

『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究 国際関係と地域の視点から』今泉 裕美子／編著 柳沢 遊／編著 木村 健二／編著 (210.75/イマ)

P83-126「第二章 日系アメリカ人と国外退去(deportation)」村川 庸子／著

P87に「表2?2 米国から出国した日本人敵性外国人数(1942年5月7日-46年12月28日)」という表があり、「市民権放棄者」という項目がありますが、年毎に分かれていないため、戦中・戦後の数がそれぞれどうなっているのか分かりませんでした。」

1076

○外務省の招聘

・「昭和十二年四月、河相達夫さんは外務省情報部長に任命された。河相さんはなかなか見識のある方で、またアイディアマンでもあったから、情報部長のときに、役人らしくない外務省の事業を発案された。それは、日本を正しく世界に紹介し、理解させるためには、どうしても英語の堪能な二世に奨学金をあたえて日本に招いて教育し、日米の相互理解と親善のための掛け橋となる若者を養成しなければならないという提案であった。それで河相さんは、大正七年に外交官試験をパスしたときの同期生であ

¹⁰⁷⁶ 静岡県立図書館回答. 2022-07-16.

った吉沢清次郎アメリカ局長と相談して、この二世の教育機関を設立することに決定し、河相さんはそれを^{へいしかん}敵之館と命名された。そして「日米の掛け橋」というのが、敵之館の合ことばになった。」¹⁰⁷⁷

・「昭和十七年十月九日に交換船鎌倉丸で帰国して落着いた職場は、外務省の情報部ラジオ室で、外務省の構内をはいって左のいちばん奥の建物にあった。[中略] このラジオ室は、世界中の短波放送の傍受室としては、日本で最高のものであった。この室で働いていた人は五十数人であったが、そのうちの四十数人は外国生れの二世か外国育ちの人たちで、その大部分は通信社等で働いているかたわら、一定時間の海外の短波放送を傍受するために、その時間だけくるのであった。当時はまだテープレコーダーなどというものがない時代であったから、傍受する苦勞もなみ大抵のことではなかった。ある人は速記でとり、タイプの上手な人は大文字なしで大筋をタイプでとっていた。」¹⁰⁷⁸

○日本放送協会・並河亮の二世観：資料「並河亮」

○困窮

「真珠湾攻撃によって日本は米英に宣戦布告をしたが、日本に勉学にきていた数千人の二世は、そのためその日からたちまち生活に困窮せねばならなかった。世間の人たちは、敵意をもって二世をながめた。筆者のように、アメリカのスパイではないかという嫌疑で憲兵隊や特高につけまわされ、果ては引っぱられて知りもせぬことを尋問され、苦しめられたものもいる¹⁰⁷⁹。生活に困った二世をどうするかが大きな問題となったが、二世はややもすると一般世間の攻撃的となる可能性が多分にあった。

こうしたとき、敢然として二世救援のために立ち上がったのが沢田美喜夫人（現在、エリザベス・サンダースホーム経営）であった。戦況は刻々悪化の一途をたどり、日本国民は竹槍をもってしても敵米英に対抗し、民族の名誉にかけて戦い抜こうとしているとき、二世の救援をはかる沢田夫人の努力は、並々ならぬ勇気を必要とした。」

¹⁰⁸⁰

¹⁰⁷⁷ 『プロパガンダ戦史』 p.19-20.

¹⁰⁷⁸ 『日の丸アワー』 p.12.

¹⁰⁷⁹ 「村山有君は、話題の多い人である。明治三十八（一九〇五）年十二月二十四日、シアトルで生まれ、サンフランシスコに移り住んだ二世の新聞記者である。[中略] ... スパイ容疑で二度逮捕された。第一回は、日米開戦の当日の十二月八日の払暁で、渋谷警察署に連行され、殴る・蹴る・怒鳴るの尋問をうけた。さいわい、外務省の鈴木耕一氏が警視庁に連絡されたので、二四時間で釈放された。第二回は、昭和十七年六月のミッドウェー敗戦が報道された日で、九段の憲兵隊本部に連行され、スパイだといってまた殴る・蹴るの暴行をうけた。このときには樺山君が飛んで来たので釈放された。これは、二世はスパイだと頭から決めてかかる、当時の風潮の過ちを物語るエピソードであるが、日米開戦後、日本にいたアメリカ生れの二世はみんな苦しんだようである。』 [『プロパガンダ戦史』 p.17-19/資料「参謀本部第8課/参謀本部の傘」]

¹⁰⁸⁰ 村山有. アメリカ二世：その苦難の歴史. 時事通信社, 1964, p.239.

○横顔

・私費留学

「卒業したけれども、当時のアメリカは日本と同様に大不景気でアメリカ人でも仕事が無い。ぼくら二世にももちろんないという時代でした。『ぐずぐずしていても仕方が無い、いっそのことお前は日本へ行って来い。日本へ行って、日本語がもう少し上手になるように家庭教師ないしは他の方法で勉強して、出来たら日本の日本人になって貰いたい』とおやじは言うんですね。ぼくは『今のところは日本の日本人になって、一生そこで生活する気持はまったく無い。アメリカには悪い点がたくさんあるけれども、このアメリカがぼくの祖国だから、アメリカの市民権を捨ててまで日本へ行って生活する覚悟はどうしてもできない。—今の身分のまま、とにかく行くだけ行ってみるよ』と答えたんです。

一九四〇年九月、ぼくが太平洋を渡っている間に日独伊三国同盟が結ばれて、日本はアメリカや英国という民主主義の国とは手を切って、完全に枢軸国側についたわけです。東京に着いてからは神田台町の芳明館という独身者ばかりが泊まる旅館に下宿して、特に家庭教師に就くわけでもなくぶらぶら過ごしていました。日本軍はもう支那大陸に侵攻していた時ですから、市電に乗って靖国神社の前を通るときまって、支那の方で戦死した日本兵のお骨を胸に抱えている人々の行列を眼にしたものです。

その頃東京に、カリフォルニア大学時代の友人で、やはりアメリカ生れの森野正義という人がいました。この人は卒業すると直ぐに日本へ渡り、日本の外務省の情報部に勤めておられました。それでぼくは森野君に連れられ、よく外務省に行ったものです。外務省に行きますと、アメリカの主な新聞、英国の主な新聞が毎日入って来ていて、それを読むと日本の新聞に載っている内容とはだいぶ違うのですね。日本の新聞は日本政府の都合の良いように変えられているのが、よく判るんです。それで一、これは日本とアメリカの間に戦争が始まると確信するようになって、ぼくは日本での生活を半年で切り上げ、急いでサンフランシスコに帰って来たのです。そして丁度、仕事を探している時に「米国陸軍情報部日本語学校の日本語教官を探していた」ウェッカーリング「中佐」さんに「一九四一年10月初旬」会うことになったのです。」¹⁰⁸¹

・満潮英雄

「実はわたしも二世で、ロスで新聞記者をしていたところ、NHKの海外放送が拡充されるので、スカウトされて来日したものだが、両親はまだロスにいた。来日するとき日本の国籍をとったが、兵隊にとられる、とおどかされたので、また一度アメリカへ帰って、アメリカ国籍をとった。しかし、日米の雲行きがあやしくなって来たので、またあわてて大森区役所に行って日本国籍をとった、という次第。」¹⁰⁸²

・駿河台分室

「私の前の席では、上品なロンドン育ちのM山さんとハワイ二世のM村さんとが捕虜の原稿を日本語に訳していた。[中略] 彼女達の日本語は、話す時はいいのだが、文章

¹⁰⁸¹ 大谷勲. ジャパン・ボーイ：日系アメリカ人たちの太平洋戦争. 角川書店, 1983, p.75-77.

¹⁰⁸² 『昭和史の天皇3』 p.174.

になると、てにをはが少々おかしくなってくる。それを直して上げると大げさに感激してくれるので、私もちょっぴり偉くなった様な気分になる。厳しいロンドンの上流家庭の子供部屋で、ナースにしつけられた〔帰国子女の〕M山さんと、ハワイの椰子の木陰で、昼寝をしながら育ったM村さんとは、あらゆる点で対照的で、時々たわいのない「米英戦争」をしていた。

「アメリカ人は始終クチャクチャガムをかんでて、お行儀が悪いわね」

「イギリス人は、けちできどりやで……」

そう言うM村さんは南国の植物の様に大柄でくったくがない。弟さんと二人で日本に遊びに来ているうちに戦争が始まって帰れなくなり、両親とは敵味方に生き別れたというのにそんなかげりは少しも無い。毎晩帰ると竹槍訓練にかり出され、エイ、ヤーッとやるのだそうだ。

「どう？この服、昨夜二時間で縫ったんよ。みんな手縫いよ」等と言って、どこから仕入れたのか野暮つたい着物地で大ざっぱな服をつくって着て来る。そういえば、どんな和服地でも平気でドレスに仕立てる感覚は、たしかにハワイ的である。彼女は、ハワイ洋裁学校を優等で卒業したそうだ。

英国育ちのM山さんは、英国的質実を身につけた大和撫子である。

「私、お国の為に少しでもお役に立ちたいと思って働いてますのに、お給料なんていただけませんわ」とH氏¹⁰⁸³の所へ返しに行った。

さすがのH氏も恐縮して、

「いや、あんたのきもつはよくわかるがね。まあ、いいからいいから、それはとっといて下さい」と無理に受け取ってもらったのだそうなの。¹⁰⁸⁴

¹⁰⁸³ 早坂久. [資料「駿河台分室関係者」／『日の丸アワー』 p.80-81 ほか]

¹⁰⁸⁴ 『猫のしっぽ』 p.100-101.

には 日本の海外宣伝の評価

情報局

○宮本吉夫（課長）

「今度の大战における宣傳戦には正しい者、強い者が勝つのであつて、前の戦争におけるやうな米英的卑劣なるデマ宣傳は最早や何の役にも立たなくなつてしまつた、[中略] これに對して帝國は開戦以來、帝國の崇高なる戦争目的 米英兩國の世界制覇の野望を世界に明らかにして、今次戦争の責任は全く米英側にあることを全世界に闡明した、しかも緒戦における陸海軍の赫々たる戦果を迅速かつ正確に世界に報道し、皇軍の精強無比にして、また國民の士氣大いに揚れる状況を傳へて來た、この結果、世界の耳目は日本の眞意を理解して來た¹⁰⁸⁵、それと同時に日本の陸海軍の精強無比なる事實に驚いてゐる有様であつて、敵側のデマ宣傳は逸早くその假面を剥がれてしまつた」¹⁰⁸⁶

○奥村喜和男¹⁰⁸⁷（次長）

「[43年2月] 八日付『朝日』によれば、七日の衆議院予算総会での海外放送についてのやりとりは次のとおりである。[中略]「女の放送員を使つて優しい声で聴く人々の耳を引きつけてはどうかとのお話ですが、なるほど、女の声は美しい優しいけれども女の声といふものには迫力がなく、威勢のいい大戦果の発表や、敵をギャフンとやつつけるための気合ひがこもらなくてはならぬ。対敵宣伝には適はしくないやうで¹⁰⁸⁸、とにかく私としては目下は女放送員は使はないことにしてゐます」[中略]

『朝日』の一面には、さらに「敵側の情報蒐集に万全」「対敵宣伝に必勝」との見出しで、奥村の長広舌が掲載されている¹⁰⁸⁹。奥村の答弁は国内で放送され、この「ホー

¹⁰⁸⁵ 対談したある批評家について：「蓮實「.....なにか自分の思っていることを正確に相手に伝えて真剣に相手と向かい合うと、そのままでコミュニケーションが成立すると思つていんですね。」江藤「そうです、そのとおりです。」蓮實「そら恐ろしいといえはそら恐ろしいんですが、正当な思想を正当に表現しあつただけでは絶対に伝わらない何かがある。」。『『オールドファッション』』p.220]

¹⁰⁸⁶ 資料「宮本吉夫」

¹⁰⁸⁷ 1900-69。[奥村喜和男関係文書. 国立国会図書館リサーチナビ. (参照 2022-12-04)]

¹⁰⁸⁸ 「この時期、ジューン・須山芳枝（※）が、美声と確かなアナウンスぶりで国際局員の信頼を得ていた。そして、ラジオ東京が放送史に記録されるのは、東京ローズという「女の放送員」の魅力のためでもあつた。しかし、音声放送の魅力を考えない、「気合ひ」第一の放送論が幅をきかしていた。」。『『ラジオ・トウキョウII』』p.306]

（※）「女性ではその美貌が災いして終戦後接近した米兵のジープで事故死したジューン須山芳枝さんやルース早川寿美さん達も「前線班に」加わつた。」（心理 175）

¹⁰⁸⁹ 「奥村の答弁を読んだ清沢洌が、一〇日の日記に書いた。「奥村情報局次長は日本の対外宣伝は非常にうまくいっているといっている。この人々は相手の心理を知らず、自己満足がすなわち相手の満足だと考へている。彼等は永遠に覺るところはあるまい。悲しむべし。」（『暗黒日記』）。『『ラジオ・トウキョウII』』p.306]

ム・サービス」をメルボルンのモニターが記録した。六日「奥村は日本の宣伝の有効性について楽観的に語った」七日「奥村は、日本側の戦争報道がある程度正確であると敵側も認めていると語った」¹⁰⁹⁰

○並河 亮（情報官）

・「東亜各地には十数万人の連合軍捕虜がいた。そのなかにはかつて放送員をしていた者もいたので、それを利用しようということになった。従来のNHKの海外放送の英語アナウンサーの質がいいとはいえず、それがわが海外放送の最大の弱点であった¹⁰⁹¹。そのような状況のところへ、参謀本部の恒石少佐（当時）から、「南方の捕虜を使うことになった」という、一種の作戦命令が情報局へ伝達され、それが情報局からNHKへ伝達された¹⁰⁹²。もしNHKの日本人による英語班が充実と優秀の域に達していたら、参謀本部は捕虜を使おうとは考えなかったであろうし、問題はなかった。」¹⁰⁹³

・「国際局の首脳は、対米放送の番組の企画や原稿の狙いや原稿の文そのものを二世達に委していた。二世達には、両国に対して一種のインフィオリティ・コンプレックスがあり¹⁰⁹⁴、それがいろいろな形でわれわれが望むものとは質的に異ったものとして表現される。国際局の首脳は二世達の英語力を利用しようとしたが、二世達はそれ以上には出なかったし、出れなかった。「ゼロ・アワー」に限らず、ニュース解説でも、二世達を書くものの内容は、残念ながら日本人の精神的なクオリティとは異質なもの

¹⁰⁹⁰ 『ラジオ・トウキョウII』p.305-306.

¹⁰⁹¹ 「こうして日本の対外放送は強化されたが、技術的にも質的にも問題が多かった。メルボルンの『リスニング・ポスト』（[43年]四月二二日付）の報告は、ラジオ東京の「音声事故頻発」（※）とし、三月二三日午前四時から五分間、二四日には午後八時のニュースと八時三〇分からのニュース解説が消えた」と述べている。

同報告はまた、英語等外国語要員について「東京が現在直面している主要な問題は、英語アナウンサーの不足である」と指摘し、「英語アナウンサーでかなり良い（reasonably good）のは二人だけで、他は、プアであり、解りにくい（The rest are anything from poor to unintelligible.）と酷評した。

さらに「ここ数週間、レギュラーのアナウンサーが読んだあと、見習い中の者が一部のニュースをくりかえし読んだが、発音不良、読み手自身が内容を殆んど理解していないようだ」と述べ、日本人はアメリカ育ちの同胞を「信頼していないようだ」と感想を記している。同報告は、英語ニュースと解説についても「変だ」と厳しい。（quaint expressions があり their way of putting things very often sounds strange to English ears）

こうした状況の中で、カズンスらのプロによる「ゼロ・アワー」が脚光を浴びてくるのも当然であった。]. [同上. p.312-313]

（※）「...日の丸アワー放送が数分空中に出なかったことが二回...」. [『日の丸アワー』p.53]

¹⁰⁹² 「情報局としては「作戦」には一切口出しをしない。またできるものでもない、と決めていた。]. [並河亮.“ミッドウェー海戦から終結まで”.『NHK戦時海外放送』p.301-302]

¹⁰⁹³ 同上. p.299.

¹⁰⁹⁴ 「宇野氏は有能で仕事熱心であったが厳格でやや高圧的なところもあり、捕虜との間に感情的な溝が生じつつあった。あるいは彼が二世として懐いていた白人に対する潜在的反発心も手伝っていたかも知れなかった。」（心理 227）

であった。日本の主張を説くにしても、二世達には質的に限界があった。国際局の首脳は、二世に委せておけばいいと考え、対米主張を怠ったといわれても致し方ないであろう。私の接した二世達はすべて善良ないい人達であった。しかし、育った環境もあり、彼等に日本人の血は流れていても、日本人の心情や人間観、理想的人間像、宗教観について語らせるのは無理である。参謀本部や国際局の首脳が、英語さえうまければそれでいいとして彼等に自由なスピーチを許し、それで宣伝効果があると考えたのは、いかにも安易な安手な考えであった。英語力はもちろん必要である。しかし二世達を日本人の代弁者とするのは、やはり無理である。」¹⁰⁹⁵

○資料 「対敵海外放送ノ概要ト其ノ反響」

¹⁰⁹⁵ 資料「並河亮」

批判（日本人）

「とかく日本軍の缺点としていたずらに勇壮なる文章を書くことによって事足れりとする傾向があった。」（心理 283）

○ 西義章（参謀本部 8 課長¹⁰⁹⁶。日米交換船で帰国, 42 年 8 月 20 日就任）

「西大佐はメキシコの駐在武官やってみて、外国に長くおったもんだから日本の海外放送についてはひとつの意見をもってました。大体東京放送は生硬というか固い、硬直してると」¹⁰⁹⁷

○ 池田徳真（外務省ラジオ室勤務¹⁰⁹⁸。日英交換船で 42 年 10 月帰国）

・「このように、第二次世界大戦の真っ最中に世界の空を飛びかう敵味方の短波放送を傍受する外務省のラジオ室にいて、日本人のだれよりも早く外国のニュースを読んでいた五人のグループの一人であった私は、日本の宣伝放送が外国の宣伝にくらべると無方針かつ無秩序であることに気づいて、当然のことながら、対敵宣伝放送の研究をしてみようという考えに到達したのであった。」¹⁰⁹⁹

・「このように敵味方の宣伝放送を、最初に知ることのできる職場にいたので、私は国民性の違いによって、その対敵宣伝放送の態度が、アメリカ式、イギリス式、フランス式、ドイツ式といえるほど、ひどく違っているのに気づくようになった。そしてひるがえって日本の対敵宣伝放送をみると、理論も、組織も、統一した方針もなくバラバラで、敵国の宣伝態度に比べて、はるかに見劣りするものであるということを痛感するようになった。」¹¹⁰⁰

○ 澤田進之丞（日本放送協会国際局第一部長）

「たとえば宣伝の目標として米国政府と民衆との離間をうかがったとして、その目標は誤ってはいないのだが、もし、いたづらにルーズヴェルト以下の政府指導者を攻撃して見たところで果して米国民がかかる日本からの放送に喜んで耳を藉すであらうか。

政府と民衆を離間するつもりのものが、かえって敵の一致団結を促すことにでもなったとしたら、これは全く単に逆作用というのみではなく、かえって我が勝利への驀進を阻む恐るべき一種の利敵行為にすらなるのである。」¹¹⁰¹

○ 平川唯一¹¹⁰²（同国際局業務部）

¹⁰⁹⁶ 福川秀樹編著. 日本陸海軍人名辞典. 芙蓉書房出版, 1999, p.364.

¹⁰⁹⁷ DVD 『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

¹⁰⁹⁸ 『プロバガンダ戦史』 p.6-7.

¹⁰⁹⁹ 同上. p.38.

¹¹⁰⁰ 『日の丸アワー』 p.14.

¹¹⁰¹ 職域随想：放送の重要性. 朝日新聞. 1943-01-23.

¹¹⁰² 「[日の丸アワー] 放送第二日目にドラマをするのは、意欲的に過ぎると思ったが、私も朽木もどうしてもやりたかったので、二週間ほど前日本放送協会の武藤義雄国際局長にお願いし「俘虜は数人連れてきますから、ドラマの作成と J O A K の方がたの出演をお願いします」と依頼して、訳本の『モンロー主義』（D・パーキング著、豊田義道訳）をお渡しした。そして、じっさいに作成し主演する、チーフアナウンサーの平川唯一氏と打合せをおこなった。平川唯一さんは、明治三十五年岡山県の生れだが、シアトルのワシ

「更に又米国内に於ける官民離間の問題を取扱う場合、先ず考えなければならない事は、現在に於ても米国人の大部分はルーズベルトを絶対支持し、その多くは彼を稀代の政治家とさえ考えていることだ。勿論部分的には彼のやり方に不満を懐いている者もあるのは事実だが、これ等反政府的分子でさえもルーズベルトが日本人から開けっばなしの悪口をされることを快しとするものではなく、むしろ翻って彼ルーズベルトを弁護する心理が動くことさえ予想せねばならない。この事を考慮においた上で我方の行き方を考えて見る。成程我々日本人から見たルーズベルトは、最も悪性の野心家であり、全世界を有史以来の苦しみに突き落した戦争の主導者であって、彼こそは真に許すべからざる人類の敵である。であるから強い言葉で彼を批判すればする程快感を覚えるのである。ルーズベルトの大嘘つき、(米人は嘘つきと言われるのを最も嫌がる) ルーズベルトの吸血鬼、気狂い政治屋、海賊的存在、メフィストフェリス、悪魔等言っただけでも胸がすつとする¹¹⁰³。しかし問題はこれを聴く者の心にこれが果して如何に響くかと言うことで、これは、敵が我が東條首相のことを同じ言葉で呼んだ場合を考えて見ればすぐわかるであろう。」¹¹⁰⁴

○大屋久寿雄（44年11月22日付同海外局編成部長。元同盟通信仏印特派員）

「…ラジオ東京のスタッフに一石を投じた。「[大屋は]日本の宣伝は根本的に転換する必要があると云ふのである……主観性の強い、自分に有利なニュースばかり羅列して見た[のでは]愚劣であり、国内ならばいざ知らず……海外で……まに受けものはない……不利なニュース[も出す]客観性が第三者から見れば宣伝全体を真実らしく思はせるもので、全体を通じた謀略宣伝の目的を達する……[この大屋の意見に]海外局の連中も今更ながら皆なるほどと思はざるを得なかった」（斎藤博之「日本の謀略放送」『中央公論』一九五〇年四月号）こうした議論も、東条退陣によって可能となったのであろう。」¹¹⁰⁵

○一二三九兵衛（少佐。恒石中佐の後、駿河台分室の監督指導）

「関係各部課の承認をとりつける過程で、軍中枢部の軍人は、全く虚勢を張っているとしかいいようのない、いわゆる強がり屋の集団であった。少しでも、弱気というか、和平とか戦争中止に関係するような字句があれば即座に訂正した。謀略放送というのは、もっと深みのある柔軟性が必要で、速効性ではなく遅効性のものが大きな成果を挙げ得るものと信じていたので、戦局の重大さを思い眠れない日が続いた。」¹¹⁰⁶

トン大学で学んだので英語が堪能になった人だ。彼は、戦後、昭和二十一年二月一日から二十六年二月九日まで、五年にわたってNHKの英語会話放送を担当し、冒頭で、「証城寺の狸唯子」のメロディに合わせて、Come, come, everybody という歌で始めるところから、若い人に「カムカムおじさん」と言って親しまれたあの人である。、『日の丸アワー』p.48-49／『駿河台分室物語【資料編】』p.113／資料「平川唯一」

¹¹⁰³ 本書「2.4.4 英文放送事前監査室」

¹¹⁰⁴ 平川唯一. 特輯 決戦下の海外放送：海外放送のアナウンス. 放送研究. 1943-9, 3(9), p.34／資料「平川唯一」

¹¹⁰⁵ 『ラジオ・トウキョウⅢ』p.77. ([] とその内容は原文のまま)

¹¹⁰⁶ 『陸軍中野学校』p.141.

○ドウス昌代

「なお、日本軍は宣伝戦という言葉をもその時 [情報連絡協議会] でも嫌い¹¹⁰⁷、これを心理戦と呼んでいた。[中略] 戦争初期の海外放送は大東亜共栄圏の旗印の下に、日本の戦争目的は帝国主義的侵略ではなくアジア民族の独立を促進するものだとし、「アジア人のアジア」を強調した。宣伝の基調は、まず日本側が戦争に勝っていることを力説した上で、アメリカ連合軍のアジア侵略を非難し、オーストラリアに向けては大東亜共栄圏への参加を促した。宣伝は適切にして真実以上のものでなくては成功しない。ところが大本営発表に基づいた宣伝放送にはその真実がまず欠けていた。日本は心理戦において完敗したといわれるのもここにある。負けているのに勝った勝ったという宣伝では、話にならない。現に、前線に出ている連合軍将兵にとってウソの戦況ニュースほどばかばかしいものはない。それに、日本の宣伝放送技術は連合軍諸国と比較して問題にならぬお粗末さだった。「行け八紘家と成し、四海の人を導きて、正しき平和打ち建てん、理想は花と咲き薫る」¹¹⁰⁸の愛国行進曲を開戦以後のテーマ・ソングとしたラジオ東京は、「神武時代より続く神の子天皇を戴く神兵たる日本兵は死をも恐れるものではない」と繰り返し、恒石のアイデアで敵を嚇かすとして祝詞まで上げさせた¹¹⁰⁹と、海外局員まで呆れさせている。他にラジオ東京からよく聞かれた言葉には、「日本の聖戦」「神の意思により」などがあった。心理戦とうたいながらも、その聞き手である敵国人の慣習からくる考え方、心理をまったく無視した、幼稚で一本調子の宣伝放送は、外地から引き揚げて来る者や海外出先機関からの報告でも批判されたばかりか、当の海外局内でさえ批判が聞かれた。だが、なんといっても問題点はスタッフの貧弱さにあった。L・D・メオはその著書『オーストラリアに対する日本のラジオ戦』(Japan's Radio War on Australia) でそれを指摘している。「多分、宣伝活動において最も重要なことは、有能なプロパガンディストを集めることであろう。この最も必要な点が残念ながら東京放送には欠けていた。」¹¹¹⁰

批判 (外国人)

○デー・ゴルマン：「日本の宣伝負けは昔から」¹¹¹¹

○カズンス、インス：本書「2.2.17 捕虜のアドバイス」

¹¹⁰⁷ 参謀長会議資料では「対敵宣伝」の語が使われている。[本書「2.3.5 参謀長会議」]

¹¹⁰⁸ ○愛国行進曲。作詞森川幸雄、作曲瀬戸口藤吉。二番「...往け八紘を宇となし 四海の人を導きて 正しき平和うち建てん 理想は花と咲き薫る」。[“愛国行進曲-歌詞”. KK BOX. (参照 2023-06-11)]

○「戦前に広く歌われた日本の国民的愛唱歌である。終戦まで、事実上の第二国歌として扱われた。[中略] 1937年(昭和12年)8月に第1次近衛内閣(近衛文磨首相)が閣議決定した国民精神総動員の方針のもと、同年に組織された内閣情報部(のちの情報局)によって歌詞が公募され...」。[“愛国行進曲”. Wikipedia. (参照 2023-06-14)]

¹¹⁰⁹ 恒石の『心理作戦の回想』に「祝詞」の記述はないが、西大佐の「教示善導」(心理166)以前は「いたずらに勇壮な」(心理283)軍人のひとりだったものか。

¹¹¹⁰ 『東京ローズ』p.64-65.

¹¹¹¹ 資料「デー・ゴルマン」

はた 秦 豊吉

「(はた とよきち、1892年1月14日 - 1956年7月5日)は、日本の実業家、演出家、翻訳家、随筆家、興行師。帝大出の商社マンから興行界に転身し、日本初のヌードショー「額縁ショー」の生みの親として知られる。

来歴・人物

東京府東京市牛込余丁町（現・新宿区余丁町）の裕福な薬商の家に生まれる。もともとは三重県東員町長深で土建業をしていた一家で、四日市北町で寿福座という芝居小屋を経営、1878年に祖父・専治が上京し、饅頭屋を経て日本橋で生薬問屋「専治堂」を開業した。豊吉の父親はその長男・鐮次郎で、家業と祖父の名・専治を継ぎ、西洋雑貨なども扱った。東京府立一中を経て、一高では文芸部に。山本有三とは同期であった。1917年に東京帝国大学法科大学独法科卒業後、三菱合資会社を経て三菱商事に勤めるが、文学趣味が強く、ドイツ文学を翻訳した。1917年から1926年まで社命でベルリンに滞在し、1923年結婚のためいったん帰国、その際関西に移住していた谷崎潤一郎を訪ね、谷崎は秦の様子が変わったのを見て「友田と松永の話」のモデルにしたと言われる。ベルリン滞在中には劇場通いをし、ゲアハルト・ハウプトマン（1920年ころ、三菱商事社員としてベルリン赴任中に秦豊吉がファンレターを出したところ、ハウプトマンのシュレーゲンの山荘に招かれ、神道や日本文化について聞かれ、大晦日にも年越しパーティにも招かれたという）やアルトゥル・シュニッツラー、アルフレッド・ケル（de: Alfred Kerr）、ルドルフ・オイケンらに手紙を送って面会にこぎつけるなど1920年代ベルリン文化を楽しんだ。帰国後、マルキ・ド・サドをもじった筆名「丸木砂土」で小説『半処女』（1932）やエロティック随筆を書き、ゲーテ『ファウスト』などの翻訳も行う。三菱合資会社勤務中、レマルクの『西部戦線異状なし』を翻訳、中央公論社から単行本として刊行し、ベストセラーとなる（本書は同社初の単行本）。1932年に三菱を退社。1933年、東京宝塚劇場に勤務して日本劇場（日劇）の運営に関わり、日劇ダンシングチームを育て上げる。1934年8月には支配人として東宝名人会を創設。1935年9月12日に同社の取締役役に就任。1937年2月27日に江東楽天地が開業し取締役役に就任。同年5月8日に東京宝塚劇場専務取締役役を経て、1940年11月20日に同社代表取締役社長に就任。同年12月に株式会社後楽園スタジアムの代表取締役社長に就任。1941年2月27日に東宝映画取締役役に就任。1942年12月に後楽園スタジアム代表取締役会長に就任（1953年まで務めた）。1943年12月10日に東宝代表取締役副社長に就任。1946年2月17日に現業重役制を廃止し新たに経営担当者制を布くために社長補佐に就任。同年3月13日に敗戦により公職追放に追い込まれ、東宝の経営から離れるが、1947年1月15日より東京新宿の帝都座で『ヴィナスの誕生』と題して日本初のストリップ・ショーを上演し成功を収める。1950年11月16日に帝国劇場社長になり、1952年9月20日に東宝取締役役に復帰。国産ミュージカルの「帝劇ミュージカルス」上演で成功を収める。晩年は日本テレビ放送網の経営にも関わった。64歳で亡くなるまで50冊以上の著書・訳書を上梓した。」

1112

1112 “秦 豊吉”. Wikipedia. (参照 2023-02-28)

はま 浜本純一

○入院

「私〔浜本純一〕はこのとき〔44年4月〕の遠乗会で、幹部候補生学校以来数年振りの乗馬で尻を擦りむいてしまった。このときの不覚が因で猩紅熱に罹り、市ヶ谷の陸軍病院に隔離入院させられた。猩紅熱が法定伝染病であったため、三笠宮殿下が在任されている第八課¹¹¹³から危険人物として追放されたわけである。私は痛さも痒さも覚えな患者として退屈な病院生活を一か月送らされた。無事退院した私が、東京着任以来恒石参謀にねだり続けてきた秘願¹¹¹⁴がかなえられ、この年の秋上海、南京方面へ一か月の出張を許された。このとき、尾羽打ち枯らしたスメヤー姫と一年振りで再会したことは「悲劇の王女」の章で述べた通りである。」¹¹¹⁵

○駿河台分室の一日

「…捕虜の生活棟とは別棟であるが、僅か三十メートルも離れていない物置の二階を改造して住み込んでいた私は、毎朝六時半捕虜と一緒に起きて内庭で朝の点呼を行う。八時になると炊事当番の捕虜が彼らと同じ朝飯一食分を私の部屋まで運んでくる。九時前に日本側職員一同が「駿河台」に出揃うのを待って、私は池田氏から前日の放送の様や本日の予定を聞き、私からの連絡事項があればその打ち合わせをする。藤村所長の部屋に立ち寄って前日、大本営に届いた全軍の戦況電報の中から必要な事項だけを伝えたり、簡単な世間話をすることもある。いずれにしても私は「駿河台」の捕虜に対する監督将校であると共に、恒石参謀と「駿河台」の藤村所長以下日本人スタッフとの間の連絡将校の役割も兼ねていた。

毎日十時過ぎにはお茶の水駅から市ヶ谷駅まで省線電車に乗り¹¹¹⁶、参謀本部八課に着くのは十時半ごろになる。「駿河台」関係の昨日の報告をし、主任参謀からの指示を受けるため、私は一日一度は必ず参謀室の恒石少佐のもとに顔を出す。これが終ると、第八課に配布されている軍電報を片っ端から読む。北はアリューシャン列島から南は印度洋に至るまでの全海域、北満洲から中国大陸を経てビルマに至る東亜大陸の全域、

¹¹¹³ 三笠宮殿下は英米課（第六課）在任とある。〔資料「三笠宮崇仁親王」〕

¹¹¹⁴ 「〔43年10月1日付軍電報により〕私が上海から東京へ帰った十八年十月、直属の上司恒石参謀が、市ヶ谷の料亭で歓迎の席を設けてくれた。陸軍中野学校で同期の谷山中尉もこの席に加わっていた。少々酒が廻ってきたころ、私は新上司の恒石参謀には悪いと思っただが、「捕虜放送の仕事が軌道に乗ったら、もう一度私を上海へ返してほしい」と不躰けにもせがんだ。〔中略〕着任早々旧任地へ帰りたがる私を持て余し気味の恒石参謀が「一年ぐらいで元へ帰せというのは無理だが、まる一年経ったら一か月の上海出張を取計ってやろう」と約束してくれた。そしてこのときの約束は正確に果された。〕。〔『青雲白雲』p.90〕

¹¹¹⁵ 同上.p.116.

¹¹¹⁶ 御茶ノ水・市ヶ谷間の所要時間は、水道橋・飯田橋を挟み7分間弱。〔『時刻表第十九巻第三號』p.32. / 本書.p.128. 図45〕

海外派遣陸軍のすべての戦況が大本営に集まる。この電報を熟読するのに午前中一杯はかかる。正午になると二階の第五課欧米情報の桜 [一郎。「杉田 (一次) さんの秘蔵っ子」]。[DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』]、谷山など気心の知れた連中と誘い合わせて高等官食堂へ昼食に行く。昔は参謀総長の着座を待って始めて昼食の箸を取ったらしいが、戦時多端の故をもって私のころは窮屈な作法は適用されていなかった。ただ、私達の第八課に三笠宮殿下が勤務されていたため、殿下が着座されるときは食事中の者も全員一斉に起立して迎えた。

私の一日はおおむね以上のような日課であったが、午後は三時ごろまでに再び「駿河台」へ帰って行った。」¹¹¹⁷

○コーヒー

「每晚九時の夜の「点呼」後の自由時間に、希望する捕虜があれば二、三名ずつ交代で私の部屋へ遊びにくるよう奨めた。一応は「希望者」ということで誘ったら全員が喜んで参加した。まず、私の部屋には二つの魅力があった。暖房資材が極度に不足していた当時としては、私の部屋には参謀本部支給の木炭だけは豊富にあった。底冷えする冬の夜、大きな火鉢に山盛りした炭火が、私に許された唯一の特権であり贅沢であった。いま一つ捕虜達が垂涎したのは本物のコーヒーである。上海時代、私の租界勉強の師匠であった松機関¹¹¹⁸の矢倉氏¹¹¹⁹が、物資の乏しい東京の生活を慮って、大箱に一杯のコーヒーと角砂糖を軍用便で送り届けてくれていた。当時の東京では誰もが持たない私だけの財産であった。」¹¹²⁰

○戦犯容疑¹¹²¹

¹¹¹⁷ 『青雲白雲』 p.105-106.

¹¹¹⁸ 「総軍 [支那派遣軍] 第二課の謀略主任参謀であった岡田芳政中佐が機関長で [中略] 和平工作の探求、要人情報、秘密結社工作をおこなっていた。」 [『陸軍中野学校』 p.314]

¹¹¹⁹ 「それから、明日の昼になっても私から連絡がなかったなら、矢倉君 (甚一郎、田の助手で、後戦病死) ...」 [熊野三平。「阪田機関」出動ス：知られざる対支諜報工作の内幕。展転社, 1989, p.118]

¹¹²⁰ 『青雲白雲』 p.107-108.

¹¹²¹ 資料「シエンク軍曹」

ひう 日向正三

「[43年3月の前線班] 編成当初のメンバーは一五(六)名でマネージャー格はニューヨーク大卒の沖健吉氏(現赤坂のスタンダード通信社長)で、石井鎌一(現AP通信東京支局編集長)兄妹、アメリカ大卒の音楽家忍足信一氏(現銀座のNB T社長)、それに二井、森山、日向、渡辺の諸氏もいた。」(心理 175)

「われわれは二四年六月一八日シドニー・ブラウン氏の引率によって機中賑かに大挙して[被告アイバ戸栗に関する本裁判の開かれる] サンフランシスコに繰り込んだのである。その中で日向正三氏は反検察的な言動があったのをマークされていたためか、裁判途中で日本に送還された。彼は私とカズンス少佐とのパイプ役にもなっていた。」(心理 326, 328)

○ 「「東京ローズ」裁判にあたり、日本からは米州部の職員などが検察側証人として渡米した(本書『ラジオ・トウキョウⅢ』口絵写真参照)。その頃、元米州部副部長であり、戦後まもなく日本放送協会を辞めて、日米会話学院の仕事を始めて間もない板橋並治のところへアイバ戸栗の弁護士がやってきた。

「弁護側の証人は一人も呼んでももらえない¹¹²²ので、私に証言書をかいて貰いたいというのです。

私はよろこんでその依頼に応じました。彼女は私の命令で、ゼロ・アワーの放送に当たっていたのであり、それは戦時中、米国籍の彼女が生き延びるための止むを得ぬ行動であり、米国に反逆する意図など全くなかったと信じておりましたので、私はそういう趣旨の証言書にサインして弁護士にわたしました」(筆者宛、板橋私信)

戸栗が「ゼロ・アワー」に登場しはじめてから半年後、米州部副部長となり、敗戦時までその職にあった板橋の証言は、直接の上司としての重味をもった。しかし、無駄であった。[中略]

一九四五年八月一五日現在米州部名簿中の「スペシャル・フィーチャー・ユニット」には次の名がある。沖健吉、日向正三、ノーマン・レイズ、森山久、戸栗郁子、メリー・石井、マザワ・シゲミ、尾崎シゲマサ、ジョージ・キョウゴ。」¹¹²³

¹¹²² 「裁判の少し前アイバのポルトガル人の夫が池田の働く日本赤十字社の本部へ来て、弁護側の証人として立ってくれと依頼した。池田が「私はゼロアワー放送がどのように行われているかは見た。しかしご存じのように当時は私自身が日の丸アワー放送でとても忙しかったから、証人になるほどの知識は持ち合わせていない」と言って断ると、彼はこう愚痴った。「弁護側の証人になれそうな人は皆検察側の証人にされた。だから私は弁護側の証人としてふさわしい人を見付けるのに苦労している」。『駿河台分室物語【本編】』p.287-288]

¹¹²³ 『ラジオ・トウキョウⅢ』p.332-333.

○石井好子¹¹²⁴

「(いしい よしこ、1922年8月4日 - 2010年7月17日)は、日本のシャンソン歌手、エッセイスト、実業家(芸能プロモーター)。日本シャンソン界の草分けであり、半世紀以上に亘り牽引し続けた業界の代表・中心人物として知られている。日本シャンソン協会初代会長。東京都出身。東京府立第六高等女学校(現・東京都立三田高等学校)卒業、東京音楽学校声楽専科卒業。

来歴

政治家・石井光次郎の次女として生まれ、母の勧めにより6歳からピアノを習う。ただ、歌は好きだがピアノは好きになれなかったという。ピアノを教えていた岡本たま(音楽家岡本敏明の妻)は、そんな好子にピアノを無理強いすることなく、ただ好きな歌を歌うよう勧めた。東京音楽学校では主としてドイツ歌曲を学んだ。同校を卒業して、1945年にジャズ歌手となった。渡辺弘とスターダスターズの専属歌手などを務めたのち、サンフランシスコでの留学を経て1952年に渡仏し、パリでシャンソン歌手としてデビュー。サンフランシスコ時代に、遊びにいったホテルのバーで偶然ジャズ界の重鎮ルイ・アームストロングと出会い、そのホテルのステージで共演したことがある。サンフランシスコでは、ジョセフィン・ベーカーとも共演している。[中略]1961年に石井音楽事務所を設立し、裏方に回る。岸洋子、芦野宏、加藤登紀子、田代美代子、ザ・フィンガーズなどのマネジメントを行ったが(加藤、田代は自身主催のコンクール出身である)、ソ連の赤軍合唱団の招聘公演の失敗などから赤字がかさみ、1977年に廃業。その後は歌手としての活動を再開し、1988年には日本人として初めてシャンソンの殿堂とされるパリのオランピア劇場の舞台に立った。1991年には日本シャンソン協会を設立し会長に就任。2002年より神戸大使を務めた。[中略]

28歳のときに、東洋精糖などの経営に携わった実業家・日向利兵衛の息子、日向正三(コーネル大学卒)と結婚(のちに離婚)。日向がオーナーで森山久(森山良子の父)がリーダーのジャズ・バンド「ニュー・パシフィック・バンド」でボーカルを務めていた。

再婚した夫・土居通夫(ママ) ^(ママ) (ブリジストン液化ガス、三井液化ガス常務)とは小学校の同級生で、1962年に佐藤栄作の媒酌で結婚し、1980年に死別した。通夫は東大経済学部、土浦海軍航空隊を経て、戦後読売新聞社に入社、ニューヨーク特派員、佐藤栄作の番記者などを務めた。」¹¹²⁵

¹¹²⁴ 浜松市立図書館回答. 2023-02-27:「日経新聞に連載された石井好子氏の「私の履歴書」に以下の通り書かれていました。

1991/06/08 日本経済新聞 朝刊 36 ページ

『歌手石井好子氏(8)デビュー 夫のバンドでジャズ(私の履歴書)』

“日向は英語が話せるのでNHKの国際局に勤め、東京ローズで有名な対米軍宣伝放送「ゼロアワー」の仕事をしていた。”

¹¹²⁵ “石井好子”. Wikipedia. (参照 2023-02-26)

ひら 平川唯一

○Wikipedia

「(ひらかわ ただいち、1902年2月13日 - 1993年8月25日) は、日本放送協会 (NHK) アナウンサー・ラジオ英語会話講師を務めた人物。通称「カムカムおじさん」。[中略]

経歴

1902年、岡山県上房郡津川村(現・高梁市)の農家の次男に生まれた。1916年に津川尋常高等小学校高等科2年を修了し農作業の手伝いをしていたが、1918年の16歳のときABCも知らないで、数年前からアメリカに出稼ぎに行っていた父を追って兄と渡米し、ポートランドで半年ほど線路工夫などに従事し、その後シアトルに移って古屋政次郎(英語版)が経営する商店の店員として半年間勤務する。1919年、17歳のとき英語を勉強するため高級住宅街の米人家庭にスクールボーイ(書生)として住み込み、スウェード小学校に入学、ここを飛び級で進級して3年で卒業、ブロードウェイ・ハイスクール(現シアトル・セントラル・カレッジ Seattle Central College)を4年で終えてワシントン大学に入学し、専攻を物理学から演劇に転じて、1931年には演劇科を首席で卒業して文学士となった。[中略]大学卒業後はロサンジェルスのセントメリーズ・チャーチ(米国聖公会 St. Mary's Episcopal Church)の副牧師になって日米文化の伝達に努め、この教会で出逢った東京神田出身の滝田よねと1935年に結婚した。この頃、俳優として Joe Hirakawa の名で『マダム・バタフライ』、『ダイヤモンド島の謎』等ハリウッド映画やパサディナ劇場(Pasadena Playhouse)にも出演。1936年に帰国。日本放送協会の英語放送アナウンサーに応募し、国際放送のチーフアナウンサーとして1945年の9月末に退職するまで8年間勤務した。太平洋戦争時には、米州部放送班長としてアメリカ兵に対する厭戦工作に携わった¹¹²⁶。また、終戦時には放送された玉音放送(終戦の詔勅)を英訳し、国外に向け国際放送でこれを朗読した。」¹¹²⁷

○「海外放送のアナウンス」

「今は戦争しているのだから何を言ってもかまわないと言った調子で、我々日本人が日本人として考える所、感じる所をそのままマイクにどなり込んでみたのでは¹¹²⁸、盲目弾になるばかりで、到底宣伝戦に勝つことは望まれないのである。そこで、我々は敵側の聴取者が何を考えているか、彼等の時局に対する信念は、放送員の話術に関する好き嫌いは、等を充分心得ていてこれをうまく利用してこそ始めて真の宣伝が成立ってくるのである。彼等が物資不足を最も気に病んでいると見た場合、米国には肉が

¹¹²⁶ ○本書,p.445.脚注 1102.

○大戦中の放送例：『駿河台分室物語【資料編】』付属 DVD.No.2.C-5.c.

¹¹²⁷ “平川唯一”。(参照 2023-05-16)

¹¹²⁸ 「...敵側国内状態を抉出して鋭い批判の言葉を叩きつける」。[資料「対敵電波戦」]

ない¹¹²⁹、野菜が少い、自動車の運転も出来ないと正面から嘯し立てるならば、彼等は言うであろう。「そうだ、それは日本と戦争しているお蔭だ。だからこの恨みをはらす為に、日本を何処までもやっつけるのだ。」と。そこでその反対の行き方を考えて見る。即ち劇か解説で平和な楽しい物資豊富な生活を生々と描き出し、これが日本の理想であると強調する。而も東亜共栄圏内では既にこの理想が着々実現しつつある。日本は他国人の幸福を喜び、共栄の理想を実現するために努力していることを力強く主張する。聴取者の心理にはどちらの方が喰い入り易いだろうか。

更に又米国内に於ける官民離間の問題を取扱う場合、先ず考えなければならない事は、現在に於ても米国人の大部分はルーズベルトを絶対支持し、その多くは彼を稀代の政治家とさえ考えていることだ。勿論部分的には彼のやり方に不満を懐いている者もあるのは事実だが、これ等反政府的分子でさえもルーズベルトが日本人から開けっぱなしの悪口をされることを快しとするものではなく、むしろ翻って彼ルーズベルトを弁護する心理が動くことさえ予想せねばならない。この事を考慮においた上で我方の行き方を考えて見る。成程我々日本人から見たルーズベルトは、最も悪性の野心家であり、全世界を有史以来の苦しみに突き落した戦争の主導者であって、彼こそは真に許すべからざる人類の敵である。であるから強い言葉で彼を批判すればする程快感を覚えるのである。ルーズベルトの大嘘つき、(米人は嘘つきと言われるのを最も嫌がる) ルーズベルトの吸血鬼、気狂い政治屋、海賊的存在、メフィストフェリス、悪魔等言っただけでも胸がすっとする¹¹³⁰。しかし問題はこれを聴く者の心にこれが果して如何に響くかと言うことで、これは、敵が我が東條首相のことを同じ言葉で呼んだ場合を考えて見ればすぐわかるであろう。[中略] 効果的宣伝と言うものは威勢よく敵に喰い掛るような性質のものではない。言っている方の側から見て胸がすっとするようなものは宣伝としては概ね落第であることに気がつかねばならない¹¹³¹。[中略]

そこで [第一の敵、一般聴取者の] 次は我等の第二の敵、即ちアメリカの短波放送に活躍する放送員の実力装備について充分知っておかねばならぬ。これを知ることによって我方の欠陥と長所が自ら明かとなり、アナウンスの新構想と言うべきものも自然そこから生れて来ると考えるからである。先ず何は兎もあれ英語の放送に関する限り技術的には彼等に一日の長があることは説明するまでもないであろう。第一彼等は生来の英語国民であるということだけでも既に非常なアドバンテージであるが、然しこれだけならばまだ何も恐れることはない・・・又それを気にして見た所で今更どうにもならない。問題はそれから先である。彼等放送員は現在の地位を得るまでに果して如何なる経路と訓練を受けているであろうか。其の一部はラジオ放送の揺籃時代からこれと四つに組んでラジオと一緒に成長して来たものであり、其他は大学教育を受けた上に相当永い期間充分組織ある放送学を修めた練達の士である。これ等の中で第一線に活躍している者は恐らく六、七年前に大学を卒業して、其後修行をつんで来た連中であろうと思われる。そこで六、七年前米国に於けるラジオ放送に関する訓練機

¹¹²⁹ 43年3月29日から実施された食糧配給制を皮肉ったものか。[本書.p.73.脚注.179]

¹¹³⁰ 本書「2.4.4 英文放送事前監査室」

¹¹³¹ 「どうせ宣伝するなら、宣伝効果がある宣伝をした方がいい。」。[西野亮廣. 革命のファンファーレ：現代のお金と広告. 幻冬舎, 2017, p.272]

関がどういう状態にあったかを見てみるならば、全米を通じて尠くとも三十五校以上の大学が相当の放送局を持って、ラジオ科の課目を実地に教えていた。このほか放送局は持たないが、ラジオに関する課目を教えている学校は百十五校あった。而もこれ等の課目は上級生にのみ許されていて、これを始める前に先ずパブリック・スピーキングに類する課目、即ち発音学、語癡矯正学等を終了することが要求されている。これ等ラジオ科に於ては、音声の訓練、語法、マイクロホン技術、アナウニング、ラジオ劇、スタジオ監督、聴取者の反響分解法等あらゆる方面の訓練を極めて實際的に教えられている。これ等訓練の外に、一人前のアナウンサーとして採用される迄には尠くとも一種類の外国語を自由に話すことが要求され、音楽史、音楽鑑賞の智識と或る程度の劇の経験があることを要するのである。これだけ修めれば先づ先づ相当のようであるが、実際はこれはまだ基礎訓練の一部に過ぎない。

さて彼等が放送員として採用されてからの毎日ほとんどどのようなものであろうか。それは来る日も来る日も正に火花を散らす競争の連続なのだ¹¹³²。それは技術の競争であり、人気取りの競争であり、スポンサーからより高く評価されようとする競争である。斯くして頭角を表した放送員は段々と立派な放送局に引き抜かれて行くのである¹¹³³。我々が海外放送で競争相手とする敵の放送員はこのようにして引抜かれた連中なのであることを思う時、なまやさしい努力で彼等と太刀打ちが出来よう筈はないのである。但しそれかと言って、これを恐れる必要はない。否絶対に恐れるようなことではならない。敵を充分知った上で、これに対する備えをさえ怠らないならば、技術に於ける多少の優劣はあるとしても、宣伝戦の勝利と言う究極の目的は必ず達し得られると確信するのである。

翻って東京の英語放送を見ると、その成長ぶりは真に目覚ましいものがある。愛宕山から欧米向に、一日一時間内外の放送をしていたのはつい此間のようなのであるが、ここ僅か数年の間に拡張また拡張、最近八月の拡張を経て今では英語の担当する放送時間だけでも一日十四時間半と言う歴大なものになった。この長時間に亘る放送を、約二十人の編輯員と十八人の放送員で、日中から深夜へ、深夜から早朝へと毎日継続しているのだ。送信機の増設と相俟って我が対敵放送の陣容も一応整備された形となった。この次はどうしても内容の充実と放送員の素質向上が真剣に考えられなければならない。これは放送時間の拡張や送信機の増設の如く、その結果が直ちに数字や実物となって現れて来ない。現れて来ないから兎角等閑になり易い。

これが国内放送の場合だとそうは行かない。第一聴取者からの投書が承知しない。いやでも向上しないわけには行かないように出来ているのが放送なのだ。[中略]
これに着眼した諸外国の放送局は大体现地にラジオ・アタッシュとか特派員を常置して反響の蒐集に努めている。ラジオ東京にも当然此種機関が各地に設置されるべきであると思う。若しこれが早急に実現出来ないとすれば外にも方法はあろう。例えば局

¹¹³² 米国では戦前から「アナウンサー人気投票」があった：「…全米のアナウンサー人気投票で優勝したイーバン氏の英語アナウンスである」。[聴えた・懐かしい日本語まで：深夜のアメリカから七時間直接放送. 読売新聞. 1935-04-01. 鳥居英晴「参謀本部の米国国内中波傍受作戦」から引用]

¹¹³³ 当時日本に民放はなく情報局の「指導取締」下の日本放送協会1社だけ。

内の職員に聴取報告を作成させる事も考えられる。要するに局内の聴取批判も場外のそれと同様充分重視し、これによって改良すべきは即座に改良するという方針で進むべきであって、外国から時たま来る批評のみをたよりに右住左住するようでは確実な進歩は望めない。

アメリカの放送員が如何に行き届いた訓練を経て来て居るかは前に述べた。生来英語国民にして尚ほ斯くの如き周到さを以て放送に対してしているのである。それに比して当方の陣容は如何。採用以前に放送に関する専門的訓練を受けているものは一人もないのみか、採用と同時にすぐ放送に従事しなければならない現状である¹¹³⁴。それで居て外国から来る批評は多く桑港の放送と東京の放送を比較して云々されるのであるから、なみ大抵な努力では追い付けないことが解る。敵を知り己を知るのは、其処から適当な対策を生み出すためと、これに対する心構えを充分に作るためであって、敵を恐れ自ら萎縮する材料を得るためであってはならない。そこで我々はどうしたらよいか。採用以前に準備訓練を受けていないのは今更如何とも出来ない。放送員養成所の事も考えられるが、それは先の話で当面の役には立たない。決戦下の英語放送が今直ちに効果を挙げるためにはどうしたらよいか。これは放送員の奮起に俟つ所大なるは言うまでもないが、彼等の向上を少しでも容易ならしめるためにその方法なり施設なりを完備することこそ現下の急務であろう。改善に対する奨励の方法として各自の努力の放送実績に対する適切応分の取扱いが考えられるし、又施設としては放送員の研究室、練習スタジオ等の設置が望ましい。其他研究資料を豊富に集めることも必要であるし、定期的に英語専門家の批評を求めることも効果があるにちがいない。要は気の附いたこと、可能なことは今日からでも始めると言うことで、逡巡していたのでは電波の戦に後れをとることは必定である。我等はこの戦を勝ちぬくためには、血潮の一滴をも余さず電波の巨弾として、雄々しく前進すべきではなからうか。」¹¹³⁵

¹¹³⁴ ○満潮英雄：「カズンズは有能な男だった。当時、海外放送には、正式なトレーニングを受けたようなアナウンサーは誰もなく、英語がまともに話せれば、アナウンサーとして起用されていた。それをコーチしたのが捕虜たちです。特に親身になっていろいろ教えたカズンズには、みんなが一目置いていた。」.[中澤まゆみ「ダイナはもう聞こえない」p.196]

○採用者の回想：「昭和十七年の一月、私が日本放送協会国際局の入社試験を受けたのは、ぶらぶらしていると工場に徴用される、という話を聞いたからである。[中略] 私たちの勤務は午後三時か四時から、九時半ごろまでだったので、夕食時には外出し、第一ホテルの地下一階のグリルや天ぷら屋などで歓談しながら食事をしたものである。当時のNHKは日比谷の内幸町にあったので、周辺にはなかなかうまい料理店が多かった。[中略] 第三乙種合格でありながら召集されなかったのは、海外放送要員として登録されていたためであることを、戦後にはじめて知らされた。」.[白井浩司「私と海外放送の時代」。

『NHK 戦時海外放送』 p.393, 395]

¹¹³⁵ 平川唯一「海外放送のアナウンス」 p.34-38.

びる ビルマの戦い

○Wikipedia

「ビルマの戦い（ビルマのたたかい、Burma Campaign）は、太平洋戦争における東南アジアでの戦いの一つで、イギリス領ビルマやイギリス領インドをめぐる戦闘である。この戦いでは枢軸国と連合国の軍隊のほか、当時植民地であったビルマ、インド、韓国などの独立運動も大きくかかわっている。そのためイギリスからの独立を目指すビルマ国民軍やインド国民軍は日本軍やタイ王国軍を中心とする枢軸軍に味方し、日本からの独立を目指す韓国光復軍やビルマの抗日運動はイギリス軍や中国軍、アメリカ軍を中心とする連合軍に味方した。またインドではイギリスの植民地軍である英印軍としてイギリス側で参戦した兵士たちも多かった。戦いは1941年の開戦直後から始まり、1945年の終戦直前まで続いた。」¹¹³⁶

一九四三・八・二五	英、東南アジア軍司令部を編成、マウントバットン司令官に就任	一九四二・一一・五	日本大本営、南方軍の戦闘序列発令（ビルマ攻略の第十五軍司令官飯田祥二郎）
一九四三・一一・一九	東南アジア連合軍総司令官にマウントバットン就任	一九四二・一一・一九	日本対米英宣戦
一九四四・一・一七	ビルマ方面軍、インパール作戦を認可	一九四二・一・一九	第十五軍沖支隊、タイ、ビルマ国境をこえてビルマのタポイを占領
一九四四・三・八	ビルマ方面軍、インパール作戦を開始	一九四二・一・三二	第十五軍、モールメンを占領
一九四四・四・下旬	インパール攻撃の第十五軍、英軍の反撃をうけ形勢逆転	一九四二・三・八	第十五軍、ラングレンを占領
一九四四・七・四	インパール作戦中止命令、日本軍退却開始	一九四二・五・一	第十五軍、マンダレーを占領
一九四四・八・四	日本軍、北ビルマでミートキーナ守備隊玉砕	一九四二・五・六	第十五軍、ミートキーナを占領、ビルマ全土をほぼ占領する
一九四四・九・八	雲南国境の騰越守備隊玉砕	一九四二・六・一九	英首相チャーチル、ワシントンを訪問、反攻を協議する
一九四四・九・二〇	同じく拉孟守備隊玉砕	一九四二・一〇・二八	重慶で米、英、中、ソの東アジア作戦会議をひらく
一九四四・一一・二四	パーモ守備隊、撤退、日本軍北ビルマを放棄する	一九四二・一一・下旬	英印軍、アキヤブ方面に反攻開始
一九四四・一一・二〇	英軍、アキヤブ占領	一九四二・一二・中旬	英軍ウインゲート旅団、北ビルマに侵入
一九四四・三・一八	英軍、イラワジ河畔に攻勢開始	一九四三・三・二七	日本軍、ビルマ方面軍を編成
一九四四・五・二	英軍、マンダレー占領	一九四三・八・一	ビルマ独立宣言、主席パーモウ
一九四四・九・二三	英軍、ラングレン占領、ビルマ方面軍はモールメンに撤退 ビルマ方面軍、降伏調印		

図 101 ビルマ戦線年表（藤原 彰編）
出典：『祖国を敵として』 p.152-153.

1136 “ビルマの戦い”. (参照 2023-02-06)

戦前の工作（南機関）

○「1940年3月、日本の大本営陸軍部は、参謀本部付元船舶課長の鈴木敬司¹¹³⁷大佐に対し、ビルマルート遮断の方策について研究するよう内示を与えた。鈴木はビルマについて調べていくうちにタキン党を中核とする独立運動に着目した。運動が武装蜂起に発展するような事態となれば、ビルマルート遮断もおのずから達成できるであろう。

鈴木は「南益世」の偽名を使ってラングーンに入り、タキン党员と接触した。そこで鈴木はオンサンたちがアモイに潜伏していることを知り、彼らを日本に招くことを決意する。オンサンたちはアモイの日本軍特務機関員によって発見され日本に到着した。これを契機に陸海軍は協力して対ビルマ工作を推進することを決定し、1941年2月1日、鈴木を機関長とする大本営直属の特務機関「南機関」が発足した。」¹¹³⁸

○「当時、イギリス領だったビルマ（現ミャンマー）で民族独立運動を支援して「ボウ・モウ・ジョウ」（ミャンマー伝説の白馬に乗った雷将軍）と呼ばれた陸軍参謀・鈴木敬司（大〔正〕4卒、同〔=故人〕）も戦前のアジア史を彩る人物だ。

鈴木はもと大本営兵たん総監部参謀。独立支援は日中戦争の激化で、米英の援蔣（蒋介石支援）ルート遮断という国策が背景ではあったが、独立派の勢力伸長を恐れる参謀本部と対立、その命令を無視してまで鈴木が指導者を日本へかくまったのが、戦後の両国友好のきっかけとなった。現在の民主化運動のリーダー、スー・チー女史の父アウン・サン将軍である。

世間の目を避けて、浜松市鴨江にあった鈴木の実家、弁天島や館山寺の旅館とアウン・サン青年が転々としたのが十五年の冬。敬司の長男邦幹（昭20卒）＝旭鉄工所自営＝が〔浜松〕一中一年の年だ。「当時まだ中学生でよく事情は分からなかったが、無口で神経質そうなアウン・サンに比べ、もう一人の指導者ラミアンは陽気で、同居する家の中でもよく笑った。大きな目のラミアンに“今いくつになる”と英語で聞かれたのを覚えている」（邦幹）

十六年には独立を支援する南機関が極秘裏に発足、日本でビルマ青年たちの軍事訓練にあたったが、これには当時、軍属として独立義勇軍に加わったアントワープ五輪の名スイマー内田正練（大4卒）や、遠州織物の大陸進出に先べんをつけた木俣光次（同）らがかかわっている。

戦後。その鈴木は戦犯容疑でラングーンで軍事裁判を受けたが、ビルマ民衆の証言で無罪となり、晩年は浜松自動車競走会会長などを務め四十二年九月二十日、七十歳で没した。佐藤栄作首相（当時）が初の東南アジア公式訪問でビルマに降り立った日

¹¹³⁷「鈴木 敬司（すずき けいじ、1897年（明治30年）2月6日 - 1967年（昭和42年）9月20日）は、日本の陸軍軍人。最終階級は陸軍少将。1941年から1942年にかけて存在した、ビルマ（現在のミャンマー）の独立運動の支援を任務とする、日本軍の特務機関「南機関」の機関長。この経歴から「日本版アラビアのロレンス」と称される。」

〔“鈴木敬司”. Wikipedia. (参照 2022-09-13)〕

¹¹³⁸“ビルマの戦い”. Wikipedia. (参照 2023-02-06)

で、その日のビルマの新聞には首相到着の記事より大きく「ボウ・モウ・ジョウ死す」と報じられたという。」¹¹³⁹



図 102 鈴木敬司
出典：中日新聞.
1994-05-14

¹¹³⁹ 浜松北高 100 年：戦史と北高②. 中日新聞. 1994-05-14.

開戦～1942年

「開戦と同時に、第33師団および第55師団を基幹とする日本軍第15軍はタイへ進駐し、ビルマ進攻作戦に着手した。まず宇野支隊（歩兵第143連隊の一部）がビルマ領最南端のビクトリアポイント（現在のコートーン（英語版））を12月15日に占領した。南機関も第15軍指揮下に移り、バンコクでタイ在住のビルマ人の募兵を開始した。12月28日、「ビルマ独立義勇軍」（Burma Independence Army, BIA）が宣誓式を行い、誕生を宣言した。

タイ・ビルマ国境は十分な道路もない険しい山脈だったが、第15軍はあえて山脈を越える作戦を取った。沖支隊（歩兵第112連隊の一部）は1942年1月4日に国境を越えてタボイ（現在のダウェイ）へ向かい、第15軍主力は1月20日に国境を越えてモールメン（現在のモーラミヤイン）へ向かった。BIAも日本軍に同行し、道案内や宣撫工作に協力した。日本軍は山越えのため十分な補給物資を持っていなかったが、BIAとビルマ国民の協力により、給養には不自由せずに行動できた。さらにビルマの青年たちは次々とBIAへ身を投じた。[中略]

日本軍では、シンガポール攻略が予想以上に順調に進展したことから兵力に余裕が生じていた。そこでビルマ全域の攻略を推進することとし、第18師団と第56師団をラングーンへ増援した。両軍の戦闘は各地で激戦となった。[中略]5月中旬からビルマは雨季に入り、連合軍の退却は困難をきわめた。将兵は疲労と飢餓とに倒れ、多くの犠牲者と捕虜が残された。5月末までに日本軍はビルマ全域を制圧した。」¹¹⁴⁰

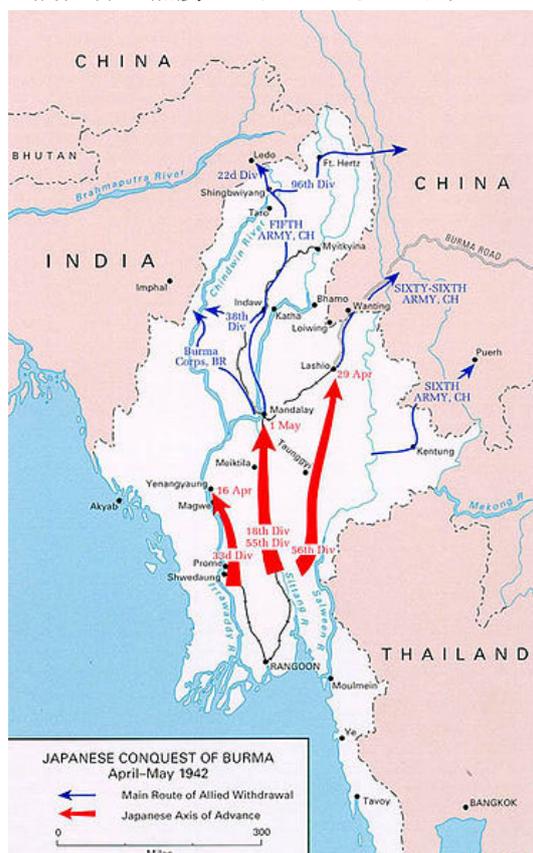


図 103 ビルマの戦い（42年4-5月）

出典：Wikimedia Commons

File: Japanese Conquest of Burma April-May 1942.jpg

1140 “ビルマの戦い”. Wikipedia. (参照 2023-02-06)

アラカン作戦

「第一次アキャブ作戦（三十一号作戦、第一次アラカン作戦）」

1942年から1943年の乾季、ビルマ戦線の連合軍にはまだ本格的反攻に移る余力はなかったが、2つの限定的な作戦を実施した。第1はビルマ南西部のアキャブ(現在のシットウェ)の奪回を目指した作戦、第2は「チンディット」部隊(いわゆるウィングート旅団)によるビルマ北部への進入作戦である。

アキャブはベンガル湾に面し、インドとの国境に近い最前線の要地だった。守備隊は宮脇支隊(歩兵第213連隊の一部)だった。1942年12月、イギリス軍第14インド師団が国境を越えて南下した。宮脇支隊はアキャブ前面まで後退し堅固な陣地を構築した。イギリス軍がこれを攻めあぐねている間に、日本軍第55師団が援軍に向かった。1943年3月末、第55師団主力はイギリス軍が横断不可能と判断したアラカン山脈を踏破して第14インド師団の側面を急襲した。奇襲は完全に成功し、第14インド師団は包囲されて大損害を受け、作戦開始地点まで後退した。こうして連合軍の反攻の初動は日本軍の快勝に終わった。」¹¹⁴¹

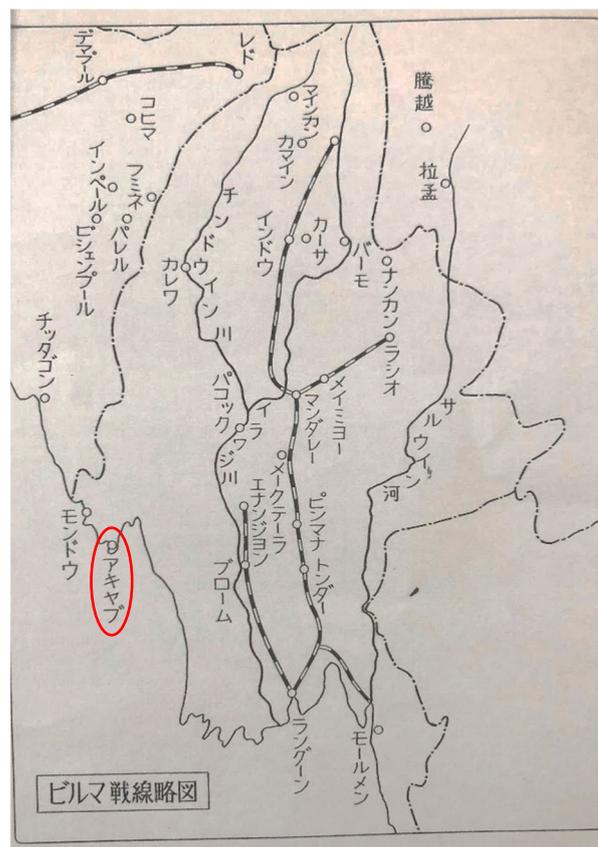


図 104 ビルマ戦線略図

出典：藤原彰. 解説. 『祖国を敵として』 p.154.
赤丸は編者追加.

¹¹⁴¹ “ビルマの戦い”. Wikipedia. (参照 2022-09-20)

ミイトキーナの戦い

「ミイトキーナの戦い（ミイトキーナのたたかい）は、1944年にビルマのミイトキーナ（ミッチーナーに対する当時の日本での呼称）とその周辺地域をめぐって行われた戦闘。日本軍とアメリカ軍・国民革命軍とが戦った。

当初はゲリラ戦により守備隊側が優勢であったが、連合軍側との物量差に加え、増援部隊の派遣がままならなかったことで次第に窮地に陥り、最終的に制圧された。

背景

1942年の日本軍のビルマ侵攻により、重慶の国民党政権への補給ルート（援蒋ルート）は空路（ハンプ超え（英語版））を残して遮断され、中国、そして連合軍にとって大打撃を与えた。ルーズベルト米大統領はこれについて、新しい陸路の援蒋ルートであるレド公路の開設は全ビルマの奪還より重要だと声明していた。

同年末、レド公路の建設は英軍により開始され、米軍のジョセフ・スティルウェル中將の主導に渡って以降、工事は順調に進み、1943年2月末にはビルマ国境にまで完成していたが、雨期により工事は中止された。同公路は雲南路に連結して初めて地上輸送路としての効力を発揮するものであり、それに先駆けてミイトキーナの占領はハンプ空輸の効率を大幅に向上させることが予想された。ミイトキーナはマンダレーから北上する鉄道路線の終点で、イラワジ川の水運の中継地であり、日本軍の飛行場があった。スティルウェルとしては乾季の間にミイトキーナを占領したいところであり、空挺作戦によるミイトキーナ占領を計画した。

一方、日本側にとってもミイトキーナは北緬防衛の要であり、同地の失陥は第56師団の雲南およびフーコン防衛を窮地に陥れ、ひいては連合軍への作戦路の明け渡しを意味していた。当然ながら彼我の要点として苛烈な戦闘が予測された。

雨期明けの1943年末に、スティルウェル率いる新編中国軍が日本軍の第18師団が守備するフーコン谷に侵攻し、ミイトキーナ目指して前進を開始した。しかし、フーコンにおいて第18師団は持久戦を行ったため、連合軍はさっぱり前進できなかった。またルイス・マウントバッテン中將率いるイギリス軍は北ビルマでの戦線拡大に反対であり、北ビルマでの連合軍の主力はスティルウェル指揮下の中国軍インド遠征軍とアメリカ軍のガラハッド部隊だった。

この作戦はスティルウェルの独断で行われ、マウントバッテン中將らイギリス軍には事前に何も知らされなかったため、米中連合軍がミイトキーナを占領した後で作戦を知らされ無然となった。[中略]

結果

連合軍がミイトキーナを占領した結果、インドから中国の昆明に向かう航空輸送ルートは山越えを避け、より安全なルートを取ることができるようになった。さらにレド公路打通にむけてバーモへ南下することができるようになった。

アメリカ軍はビルマ戦線の中国軍やイギリス軍への援軍として投入していた第5307混成部隊は1943年後半のフーコンでの戦いから1944年のミイトキーナ陥落までに全体の八割が死傷する大損害を負い、ビルマ戦線からアメリカの主要な地上部隊は撤退した。

ミイトキーナ守備隊が米・中連合軍を食い止めている間、フーコン戦線の第18師団はモガウンからの脱出に成功した。」¹¹⁴²

¹¹⁴² “ミイトキーナの戦い” Wikipedia. (参照 2023-02-06)

ひろ 広島陸軍幼年学校

同級生の回想

「もう六十数年も昔の事だが、大正十四 [1925] 年四月一日、第二九期生として広幼に入校した¹¹⁴³。[中略] 同級生諸君は概ね関西地区出身者であったが中でも高知県出身者は、山下豊、橋詰勇、寺内美代重、秋澤秀雄、池添光徳、西内久美、橋本選次郎の七名¹¹⁴⁴であり、一大勢力を占めてをり、彼方こちらで「イッチュー」といふ土佐の方言が飛び交っていた。山下君は色浅黒く丈高く、性格は非常に真面目且つ努力家であり、高知勢の親分格であった様に思ふ。」¹¹⁴⁵

¹¹⁴³ 「幼年学校の入学資格は、一三歳以上一五歳未満という年齢制限だけで、学歴上の制限はなかったが、中学校一年程度の入学試験を行うので、英語教育を行わない高等小学校から受験するのは困難であった（辻政信のように合格した例はあるが(※)）。一二歳を入学資格として尋常小学校卒業生を直接入学させず、あえて一三歳として中学校一年程度の入学試験を行ったのは、当時のエリートコースである中学校入学の関門を通った者を採用することによって、二段がまえの選抜を可能にするためであったと思われる。その故に、一般の学校体系を乱す制度として非難を買い、中学校側としては欠員を出すわけで、幼年学校受験を好まない時代があった。もっとも軍国主義華やかな時代になると、合格者を出すのを名誉とする風もできた。」。[『事典 昭和戦前期の日本』 p.339]

(※)「石川県江沼郡東谷奥村今立（現在の加賀市山中温泉）で4人兄弟の3男として生まれた。父の亀吉は炭焼きで生計を立てており、集落の中でも比較的裕福な家庭であった。山中高等小学校から苦学の末、1918年（大正7年）、名古屋陸軍地方幼年学校に入学し、首席で卒業した。」。[“辻政信”. Wikipedia. (参照 2022-11-28)]

¹¹⁴⁴ この7名は陸士44期. 内, 陸大卒は山下豊（52期）と橋詰勇（53期）

¹¹⁴⁵ 大平英夫.“畏友「山下 豊君」”.『聚光』 p.34.

ふいフィリピン戦犯裁判

○恒石重嗣：『心理作戦の回想』に記述なし¹¹⁴⁶。

○池田徳眞：『Bunka Camp Story (17-20章) 削除¹¹⁴⁷、『日の丸アワー』第5章で詳述¹¹⁴⁸。

・「この時まで中田豊一君とは、ぜんぜん話をしたことがなかったが、ワシントンのシャムロック・イン (Shamrock Inn) という下宿では約三週間彼と一緒にいたし、ニューヨークのホテル・ハーモニーでは十六日間二人は同室に寝た。[中略] …彼自身も文化人であったから、たいへん親しくなり、毎晩のようにコレヒドール島やフィリピンの話を聞いた。私はこの後日本で、マニラのモンテンルパ刑務所で服役していた人たちにも会って、榊田中尉や柳瀬元憲兵大尉についてもいろいろな不愉快なことを聞かされた。」¹¹⁴⁹

・「それゆえ、その後いろいろ聞いてみると、フィリピンでは横浜裁判などよりももっと大掛りな、戦後最大のきびしい戦犯裁判がおこなわれたようである。[中略] (1)絞首刑の執行された者 九十六人 [中略] このような事態のなかで、マニラの南方四〇キロにあるモンテンルパ国立刑務所に、昭和二十四年十月に四五歳ぐらいの一人のみすぼらしい姿の日本人の僧侶が教誨師として現われた。最初は身分を言わなかったが、

¹¹⁴⁶ 恒石の中学の先輩・川口清健元陸軍少将が「1946年2月、フィリピンでのホセ・アバド・サントス最高裁判所長の処刑などのBC級戦犯容疑で逮捕され」ている。[本書. p.467]

¹¹⁴⁷ ○本書. p.466. 図 105. (赤い線で囲った章)

○『心理作戦の回想』参考引用文献 (p.382)：「池田徳眞所蔵「文化キャンプ」(英文)」

¹¹⁴⁸ ○「十五年ばかり前、これは公刊しておりませんが、英語で書いたことがあるんです。[中略] …変名で書きました。書いたことで、本人の将来について、不幸になることがあってはいけないと考えましたから……。[中略] あんな経験って、一生のうち、ありませんよ。しゃべってはいけないという気持ちが強かったけれど、書いてうれしいです」。

[半分は未公表の体験・対敵宣伝、三年間のすべて：『日の丸アワー』を書いた池田徳眞氏. 朝日新聞. 1979-08-12, 朝刊]

○「この出版にあたっては、中央公論社の正慶孝さん(※)に、たいへんお世話になりました。」。[『日の丸アワー』 p.231]

(※) 正慶 孝 (1940-2008)：「お尋ねの件ですが、大分昔のことですので正確には記憶しておりません。また正確に記憶していたにしても、その一部始終をお話しするわけにはいきません。ただ、差し支えない点でいえば、あの書物 [『日の丸アワー』] が上梓された時代はつい昨日のどのような出来事がどんどん忘却されつつある時代でした。当事者も高齢となり記録も散逸しかねない時代でした。池田さんの経験されたようなことは、一般にはほとんど知られていないことでした。そのような状況でしたので、昭和史の一端として記録に留めておくべきだということで企画しました。また、サブ・タイトル [「対米謀略放送物語」] の件ですが、確におっしゃるとおりあの書物は、実録には違わずノンフィクションであることは、間違いありません。しかし、物語という語がいかにも作り話に見えるという意見をお持ちであるのであれば、それには賛成いたしかねます。物語という語は、フィクションにだけでなく、ノンフィクションにつけられても不都合なことではないからです。[以下略]」。[FAX, 1999-07-04 ころ]

¹¹⁴⁹ 『日の丸アワー』 p.181.

高野山の加賀尾秀忍¹¹⁵⁰僧正（後に僧忍大僧正）であった。彼は岡山県井原市東江原町の宝蔵院住職の出身なのだが、刑務所内で苦しんでいる青衣の死刑囚と赤衣の懲役囚を見て、心の中でこの人たちを救おうという一大誓願を立てられたようであった。」

1151

<u>C O N T E N T S</u>		
		Page
Chapter 1	53rd Street and Fifth Avenue	1
2	America's Counterthrust and Propaganda Study	20
3	Propaganda during the World War I	43
4	Mysterious Men in Ohmori Camp	65
5	Setup at Bunka Camp	84
6	American's Weakness and Logic and Facts	107
7	Your Life shall not be Guaranteed	133
8	Hinomaru Hour Broadcast	154
9	Refusal of Broadcast by Williams	171
10	Christmas Broadcast and Christmas Dinner	190
11	Life of POWs in the Camp	204
12	Anti-War Plays and Songs	230
13	Leaflet Campaign	261
14	Exciting 78 Days	303
15	The Last Day of the War	351
16	War Criminal and Trial of Tokyo Rose	404
17	First Visit to America	
18	Grand Jury and Corregidor Story	
19	Trial of John David Provoo	
20	Fate of Friend and Foe	

450

図 105 *Bunka Camp Story* 目次

17～20 章は本文なし

下欄手書きの「450」は第 16 章の最終ページ

国立国会図書館憲政資料室蔵

¹¹⁵⁰ 編者は池田から「書こうと思ったがもう時間がない。あなたが書かないと決めたら返してくれればいい」と加賀尾の資料ファイルを託されたが、結局その気になれず池田の遺族に相談の上返却した。

¹¹⁵¹ 『日の丸アワー』 p.208, 214.

川口清健

○Wikipedia

「(かわぐち きよたけ、1892年(明治25年)12月3日 - 1961年(昭和36年)5月16日)は、日本の陸軍軍人。最終階級は陸軍少将。位階勲等は従四位勲二等。

経歴

高知県高知市西町出身。川口清俊陸軍中佐・母スガの息子として生まれる。高知一中 (城東中学)、大阪陸軍地方幼年学校、中央幼年学校を経て、1914年(大正3年)5月、陸軍士官学校(26期)を卒業。同年12月、陸軍歩兵少尉に任官し歩兵第8連隊付となる。[中略] ...1922年(大正11年)、陸軍大学校(第34期)を卒業した。[中略]。1940年(昭和15年)12月、陸軍少将に昇進し、歩兵第35旅団長となった。太平洋戦争開戦に備えて1941年(昭和16年)11月、第35旅団は第18師団から離れ川口支隊となった。支隊は12月16日にボルネオ島のミリへ上陸、[中略] その後フィリピン方面に転用され、4月10日にセブ島へ上陸して同島を戡定¹¹⁵²、さらに29日にはミンダナオ島のクタバトに上陸して、5月10日には同島の戡定を終了した。ガダルカナル島の戦いにおいて一木支隊の全滅をうけ川口支隊が投入されたが、第2師団長・丸山政男中将と意見が対立し罷免された。[中略] 1945年(昭和20年)3月、対馬要塞司令官となる。同司令部付を経て、同年8月、召集解除となった。1946年2月、フィリピンでのホセ・アバド・サントス最高裁判所長の処刑などのBC級戦犯容疑で逮捕され、巣鴨刑務所に収監。1949年(昭和24年)11月、重労働6年の判決を受けたが、1953年(昭和28年)4月に釈放された。」¹¹⁵³

○辻政信元参謀との対立

「当選の興奮も冷めやらない1959年6月22日、参議院議員会館の辻の部屋に、左耳に補聴器を付けた恰幅の良い老人が現れた。対応した秘書の藤にこの老人は、「辻氏に5分ほどでいいから会わせてほしい」と頼んだ(『週刊実話特報』1959年7月17号)。この老人とはガダルカナルで戦った川口支隊の支隊長、川口清健元少将その人だった。川口の手には議員辞職を求める勧告書が握られていた。川口と辻との対立関係はすでに世間に知られており、2人の「対決」に報道陣は色めき立ったが、川口の面会依頼を辻は多忙を理由に拒否する。」¹¹⁵⁴

¹¹⁵² かんてい【戡定】「(「戡」は勝つ意) 敵に勝って乱を平定すること。」。[『広辞苑』]

¹¹⁵³ “川口清健”。(参照 2023-06-16)

¹¹⁵⁴ 『辻政信の真実』 p.356-357.

ふく 福岡受信所（埼玉県）

○「福岡受信所」の歴史¹¹⁵⁵

- ・ 1927年4月 日本無線電信（株）が国際無線電信受信所として設置
- ・ 〃 8月 逓信省東京無線電信局の長波受信所として業務開始
- ・ 28年9月 日本初の短波の国際無線電信の受信所
以後68年8月に業務を終えるまで、現在の上福岡駅周辺に約18万坪（59万㎡）の敷地を有する東日本最大の受信所であった。
- ・ 38年3月 日本無線電信（株）と国際電話（株）の合併により、「無線電信電話、有線電信電話等一切の対外電気通信の設備をし、これを政府の用に供する」ことを目的とした国策会社・国際電気通信（株）が誕生、その福岡受信所となる

【戦時中】

- ・ 41年海軍技術研究所の要請を受け、国際電気通信（株）研究所福岡分室（電波課）が設置され、夜間戦闘機用電波探知機や潜水艦用方向探知機等を開発。
- ・ 軍の委託を受け南洋占領地の無線通信施設の建設保守を担当。
福岡受信所をはじめ、各送受信所・本社・支社などの、主として技術系職員が軍属として派遣された。

- ① 陸軍軍政部地域：シンガポールに「国際電気通信南方総局」
- ② 海軍 〃 : マカッサルに「東印度総局」

- ・ 45年4月ころ、受信室の一隅を参謀本部に提供。「人目を避けるため衝立で仕切り、中には大型受信機1台、小型受信機数台、テープレコーダー、タイプライター等を設置し、常時2~3名の軍人・軍属が勤務していたという。垣間見たようすでは、外国間の電信波を傍受し、その場でタイプ受信したりレコーダーで記録した情報を、専門の「運び屋」が本部に届けているようであったという。[中略][8月14日の朝]参謀本部の者から敗戦決定の旨を聞いた者もいたとのことである。全ての設備（大型受信機のみ福岡受信所に返還）は撤去され、関係書類も焼却処分された。関係者もその日のうちに忽然と姿を消してしまったという。」

【戦後】

- ・ 47年3月のGHQメモランダムにより「国際電気通信株式会社法」が廃止となり、同年5月逓信省が設置した国際電気通信施設部に引継がれる。
- ・ 49年9月のGHQメモランダムにより逓信省は郵政省と電気通信省に分割、福岡受信所は電気通信省国際無線管理署に属し、「武蔵福岡受信所」となった。（九州の福岡と区別するため、頭に「武蔵」がついた）
- ・ 52年8月、電気通信省は日本電信電話公社となる。
- ・ 53年4月、国際電信電話（株）（KDD）創立。福岡受信所は「国際電信電話（株）福岡受信所」となる。（武蔵の字がなくなった）

¹¹⁵⁵ 『福岡受信所の歴史』 p.5-8, 20-27, 67-68.から抜粋.

○「天下の英才が集ったと云われたことがあるが¹¹⁵⁶、[中略] あの人達はよく勉強していた。勤務が終って帰る時（午前2時）もよく電灯がついていた。所長も盛に勉強を^(ママ)進め、皆もよく勉強をし、部屋も本でいっぱいだった。」¹¹⁵⁷

¹¹⁵⁶ 「私 [京都大学名誉教授・桑原武夫 (1904-88)] は成績はよかったが首席にはなれなかった。今国際電気通信の技術重役をしている難波捷吾がいたからで [中略] 一中の入学試験でも全体で彼が一番、私は二番だった。」 [梅棹忠夫・司馬遼太郎編. 桑原武夫伝習録. 潮出版社, 1981, p.220]

¹¹⁵⁷ 『福岡受信所の歴史』. p.49.

ぶし 武士道

○Wikipedia

「(ぶしどう)とは、日本の近世以降の封建社会における武士階級の倫理・道徳規範及び価値基準の根本をなす、体系化された思想一般をさし、広義には日本独自の常識的な考え方を指す。ただし明確な定義は無く、時代のほか、身分や地域によってもその解釈は大きく異なる。また理想化された美学・宗教的な側面もあり、その実像とは大きく異なる場合がある。[中略]

幕末の万延元年(1860年)、山岡鉄舟が『武士道』を著した。それによると「神道にあらざ儒道にあらざ仏道にあらざ、神儒仏三道融和の道念にして、中古以降専ら武門に於て其著しきを見る。鉄太郎(鉄舟)これを名付けて武士道と云ふ」とあり、少なくとも山岡鉄舟の認識では、中世より存在したが、自分が名付けるまでは「武士道」とは呼ばれていなかったとしている。[中略]

明治時代以降の武士道の解釈

明治維新後、四民平等布告により、社会制度的な家制度が解体され、武士は事実上滅び去った。実際、明治15年(1882年)の「軍人勅諭」では、武士道ではなく「忠節」を以って天皇に仕えることとされた。ところが、日清戦争以降評価されるようになる。例えば井上哲次郎に代表される国家主義者たちは武士道を日本民族の道徳、国民道徳と同一視しようとした。新渡戸[稲造]はキリスト教徒の多いアメリカの現実(人種差別など)に衝撃を受け、同時にキリスト者の倫理観の高さに感銘を受けた。新渡戸は近代において人間が陥りやすい根っこにある個人主義に対して、封建時代の武士は(封建)社会全体への義務を負う存在として己を認識していたことを指摘している。無論これは新渡戸の考えである。同時に新渡戸にとって武士は国際社会において国民一人一人が社会全体への義務を負うように教育されていると説明するのに最適のモデルであったとするのが今日の一般的な見方である。そのため彼の考えを正当とされるよりも、批判がなされることもあった。新渡戸を含めたものたちにとって日本の精神的土壌をどのように捉えるかは大きなテーマであり武士道はその内の検証の一つとされている。[中略]『武士道』においては、[新渡戸が]外国人の妻にもわかるように文化における花の違いに触れたり19世紀末の哲学や科学的思考を用いたりしながら、日本人は日本社会という枠の中でどのように生きたのかを説明している。島国の自然がどのようなもので日本独特の四季の移り変わりなどから影響を及ぼされた結果、日本人の精神的な土壌が武士の生活態度や信条というモデルケースから醸成された過程を分かりやすい構成と言葉で読者に伝えている。例えば、武士や多くの日本人は、自慢や傲慢を嫌い忠義を信条としたことに触れ、家族や身内のことでさえも愚妻や愚弟と呼ぶが、これらは自分自身と同一の存在として相手に対する謙讓の心の現れであって、この機微は外国人には理解できないものであろう、といったことを述べている。これに対し、『君が代』と『古事記』を英訳したバジル・ホール・チェンバレンなどからは『武士道』の内容を批判されている。

近現代における武士道

武士道は日本の発展にも重要な精神となった。武士道の精神を基本とした士魂商才という言葉も生まれ、拜金主義に陥りがちであった精神を戒め、さらに商才を発揮することで理想像である経営者となることを表すものであった。このような経営哲学・倫理は欧米でも戦後に発達し、帝王学に類似した学問も登場した。今日では企業の倫理が問われるようになっており、経営者や戦略における要素となっている。武士道などの精神は経営学系統の大学、高校において標語として採用している場合もある。現在では国際化の進展に合わせて日本の武士道などの日本経営精神に対する必要性を挙げるものもいる。『武士道』の著者である新渡戸稲造も祖父が商人としての成功があったが、商業倫理に関する言葉を残している。他にも渋沢栄一は今後の時代に必要な武士道を説くなどと明治時代から大正デモクラシーにかけての日本の実業に関する精神が唱えられ、日本的経営に必要な背骨となった。

2009年6月10日、韓国のソウルで開かれた『トランスフォーマー/リベンジ』の試写会において、マイケル・ベイ監督が「トランスフォーマーのなかに、他人のために自己を犠牲にする英雄主義である日本の武士道を込めた」と発言したことが物議を醸し、韓国人から倭色という批判を受けた。

『「武士道」解題—ノーブレス・オブリージュとは』（小学館、2003年3月）の著書がある中華民国総統であった李登輝は、2001年に心臓病の治療のために訪日しようとした際、中国を怒らせることを恐れた外相や外務省の反対により、なかなかビザが下りなかった。これについて、「義を見てせざるは勇なきなり」という武士道の精神を表す言葉があり、武士道は日本人にとって最高の道徳のはずであるが、このとき日本という国はほんとうにおかしくなっていると感じたと吐露している。その一方で、東日本大震災で日本国民がみせた節度ある行動や献身的な自己犠牲は、まさに武士道の精神そのものであり、武士道という言葉自体はいまの日本ではあまり使われなくなっていたとしても、その精神はけっして失われておらず、それを世界の人々が称賛したと述べている。」¹¹⁵⁸

武士道の誇示

- (1) 日独戦争（第一次世界大戦）：陸軍事務次官より丸亀衛戍司令官への 1915-02-22 付通牒

「収容所職員ノ俘虜下士以下ヲ見ルコト我ガ軍隊ニ於ケル其ノ部下ヲ見ルト同一ナラザルヤヲ疑ハシムルモノアリ即チ或ハ教育陶冶ニ努メ或ハ好意ニ過ギ愛憐ニ失スル者ナキニアラズ 言フ迄モ無ク俘虜ハ訓練シテ我力用ニ供セントスルモノニアラズ其ノ戦闘力ヲ増加シ若ハ東洋ニ於ケル彼等ノ活動ニ資センガ為研究ヲ望ム如キ事柄ハ之ヲ抑止スルヲ有利トスルニ拘ラズ進デ其ノ研究ノ利便ヲ図ル如キ我カ武士道ノ講説ヲ聞カシムル如キ將又規程以上ノ好遇ヲ与ヘントシテ職員自ラ煩忙ニ苦シム如キ [中略] 将来ノ改善ヲ要ス」¹¹⁵⁹

¹¹⁵⁸ “武士道”. (参照 2023-03-04)

¹¹⁵⁹ 『善通寺俘虜収容所 情報綴』 I-57.

(2) 太平洋戦争：「収容所要覧 善通寺俘虜収容所 昭和十七年五月三十日調」

「教育

- 一. 風俗習慣ヲ異ニスル俘虜ニ対シ日本軍同様ニ厳正ナル軍紀ヲ要求スルコトハ不可能ナルモ研究ノ上日本軍隊ノ躰ニ近似セル内務ノ教育ヲ実施シアリ
- 二. 日本語教育ハ個人的機会教育ヨリ逐次全般的組織的教育ニ進展シ教科書ヲ各室ニ配布シ余暇ヲ割キテ所員之力教授ヲ担当ス [中略]
- 四. 尚将来日本歴史. 日本精神其ノ他日本事情ノ紹介ヲモ企図シアリ」¹¹⁶⁰

(3) 情報局宮本吉夫課長

「…日本のかかる好意は礼讓情愛の点において米国人を凌ごうとするものがあるかにみえる。日米ともにこの記録を誇りにしたい。永く米魂と日本の武士道とは相並んで世界の驚異となろう」(サンフランシスコ放送) と述べるようになった。」¹¹⁶¹

(4) 会田雄次

「[終戦となり] そのうち英軍から武器を提出せよとの命令が出た。最後を飾るためということで、私たちはとっておきの油をつかって手入れをした。「日本の軍人は武器を魂として命よりも大切にしていたことをここで証明して見せるのだ」連隊本部の若い士官は、懸命な調子でそう言った。英軍も軍人だからこういうときにこそわれわれの心がけを検査するというのである。それぐらい知っているなら銃剣で草刈りなんかやらせはしないだろうと思ってみたが仕方がない。手入れをするうち、いつのまにか本能にもどって夢中で磨いた。軽機も美しく輝いている。ボロボロの衣服などのそばにあると寸分もいたんでいないその機械美が、驚くばかりの美しさを発揮する。いざお別れというと、頬ずりしたいほどのなつかしさであった。

しかし事は私たちの思うようにはならなかった。士官たちは引渡し式でもおこなわれると思いきや緊張して待っていた。しかしうけとりに来たイギリス将校はまったく事務的であった。「これで全部か」とたずね、「そうだ」と答えると、縄でそれらを束ねさせ、われわれにそれをはこべと言った。河岸か海岸か古い栈橋が入江のところにつき出ている。舟にでものせるのかと思ったらその先のところから海へ放りこめと言ふ。全部放りこみ終ると「オーケ、帰れ」それでおしまいである。

考えてみればそれは当然のことで、このいそがしいときに英軍が武器の引渡し式というようなわずらわしい行事を考えつくはずがなかった。儀礼好きなわれわれもおいおいそれになれてゆくだろう。事実私たちはその後二年間、一度も儀礼らしいことをさせられなかった。捕虜の閲兵などはもちろんなかった。捕虜を整列させてみたところで、得られるものは自分のくだらぬ優越感の満足でしかない。それくらいならなにか作業させた方がずっとよいというのが、イギリスを支えている実利主義であるということを知るのはもっと後のことである。」¹¹⁶²

¹¹⁶⁰ 『善通寺俘虜収容所 情報綴』 D-20.

¹¹⁶¹ 資料「捕虜の活用」

¹¹⁶² 『アーロン収容所』 p.21-22.

ふじ 藤原岩市

マレー方面工作の経緯¹¹⁶³

- ・開戦前日本軍は、香港の刑務所を脱走した3名のインド人のバンコックへの密航を助けたことが縁で、IIL（インド独立連盟）とのつながりができた。
- ・八課門松中佐の命令により藤原大尉（当時）¹¹⁶⁴はバンコック駐在の田村浩武官へ密上陸の手配を打電依頼、補佐役の小岩井大尉が神戸へ出張し兵庫県外事課長、三井物産の汽船船長との連絡。
- ・41年7月末頃、門松中佐が羽田飛行場からバンコック出張、田村武官と密談。
- ・9月10日、門松中佐が藤原少佐に宣告。「貴官には近日バンコックに行ってもらわねばならぬ。その仕事は田村大佐を補佐してマレイ方面に対する工作の準備に当たってもらうことになる。もしこの情勢が悪化して日英戦争が始まるようなことになれば、貴官は近く編成される南方総軍参謀に補佐せられたうえ、もっぱらマレイ方面の工作を担任することとなる予定である。数名の将校をつける予定だ」。そしてバンコックで田村大佐から得た情報を説明した。
- ・翌朝藤原少佐は部下となる中野学校出身者を中心とした5名の将校に内示された任務を語って意向を聞いたうえで、門松中佐に命令拝受を回答。
- ・9月18日、総長室で藤原少佐と5名の将校はタイ駐在武官田村大佐のもとにマレイ方面の工作に関し補佐すべしとの正式な命令を受ける。
- ・インド駐在経験のある杉山参謀総長から藤原少佐に対し付言と激励。
- ・9月29日、藤原少佐と山口源等中尉はバンコックの日本大使館に囑託として勤務すべく、背広姿で羽田飛行場を飛び立つ。

批判

- ・適性・経験不足¹¹⁶⁵：どんな無理な命令でも黙々拝受して任務に邁進するのが軍人だが、この種の仕事は別。「...特殊の知識と経験と [中略] 任務と深い因縁が必要だし...」、「悲しい事に私は今まで戦況報道や一般宣伝の仕事に関係してきて、工作だの、謀略だのといったような仕事に知識も経験ももっていなかった。」、「...英語もマレイ語も、インド語もからきし駄目だった。」、「こんなおしのような有様では異民族相手の工作など全く自信のもちようがなかった。第八課は支那やビルマ方面にこの種の工作を実施していることは承知していたが、私はその謀議には加えられなかった。新聞記者や放送関係者等軍部以外の者に会う機会の多い者は機密が漏れる恐れがあるという考慮からであろうか、過度に敬遠されていた。」¹¹⁶⁶

¹¹⁶³ 『F 機関』 p.14-24, 29-31, 34.から抜粋.

¹¹⁶⁴ 陸士 43 期同期の桑原長と同じく 41 年 8 月 1 日進級と推測. [『一武人の波瀾の生涯／年譜』]

¹¹⁶⁵ 『F 機関』 p.25.から抜粋.

¹¹⁶⁶ 同上.

・思想の違い：「また私はこの種の仕事に対する見解の根本において、この二人の先任将校 [門松中佐、尾関少佐]¹¹⁶⁷と幾分ちがった思想を抱いていた。私は亜細亜における日本の工作は、民族の自主と解放と独立を理解し、支援する線に沿って行われるべきであると信じていた。近代戦における工作は、高いそして普遍性をもつ政治理念に確固たる基礎をもつイデオロギーを振りかざし、堂々と思想戦を展開することの重要性を主張するものであった。その対象は特殊の個人よりも大衆を重視すべきだと考えていた。私は術策を偏重する秘密の取引よりも、公開の宣伝を重視すべきことを主張するものであった。特定の個人を対象として秘密の取引により大事をなさんとする行き方には疑念を抱いていた。それは日本が従来支那で慣用してきたこのような工作の成行きを、余りにも多く見せつけられていたからである。特に理念に乏しく、即効を狙い、利用を本旨とし、功利を主とする行き方にあきたらなかった。私のこのような思考に対して門松中佐は私達の考え方を非現実的な観念論者として蔑視していた。こんな経緯から門松中佐が私に宣告した任務を無条件に快諾することができなかった。こんな困難な任務は主任者である彼らの一人が、自ら出かけて行って全責任をもってやるべきだといった反感さえもった。」¹¹⁶⁸

・資料の欠如：「その日 [9月11日] から私は自分の仕事の一切を桑原少佐に一任した。高岡大輔氏の印度紀行や満鉄調査局インド研究資料を収集して一夜漬のインド知識の蓄積に大わらわになった。また参謀本部のマレイに関する資料もあさった。悲しいことに日本参謀本部は健軍以来、対ソ・対満・対支の作戦準備一点張りで歩んできたのと、日英同盟の親善政策に沿って国歩を進めてきたため、参謀本部にはインド事情に関する資料として取立てるべき資料をもっていなかった¹¹⁶⁹。またわが国には、高岡大輔氏や木村日記氏らの他にインドを研究した権威者が少なかった。それとてもインドの軍情や政治に深く立入ったものではなかった。あったかも知れないが、私の見聞にはなかった。たとえあったとしても、私は今そんな部外の人に会うことを許されないし、また時間が許さなかった。」¹¹⁷⁰

¹¹⁶⁷ ○両将校に関する『陸軍中野学校』の記述。[坂本昇二郎作成「参八会会員の校史（「陸軍中野学校」中野校友会編）]

・門松正一：p.31, 148, 387, 486, 594, 835.

・尾関正爾：p.148, 354, 359, 368, 403, 404, 500, 835.

○門松の著書『絞首刑』は南方勤務時代と戦後戦犯容疑で追及をうけた話を中心に、参謀本部時代の記述はほとんどない。

¹¹⁶⁸ 『F 機関』 p.25-26.

¹¹⁶⁹ ○「元来南守北進を根本方針としていたわが陸軍の南方地域に対する作戦準備ははなはだ不十分で、ジャワやマレーなどの正確な地図すら用意できていないほどで、まして広大な地域に言語・風俗・習慣を異にする多種多様な民族が居住しているのであり、それぞれの地域の特性、歴史、信仰、習慣等に関する調査研究資料の整備は、ほとんどできていなかったのが実状であった。」(心理 263)

○開戦直後第8課員がマレー半島へ出張し、接收した英軍司令部で濠州作戦のため地図などの資料を探している。[DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』]

○ドイツ空軍は英国内の空襲目標を選定する際、旅行案内書 (Baedeker) を利用した。[“Baedeker Blitz”. Wikipedia. (参照 2023-05-05)]

¹¹⁷⁰ 『F 機関』 p.30.

追悼

「彼〔桑原長〕は銜気を忌み、純真無雜そのものであった。童心を思わせる程無邪気で率直であった。〔中略〕兄が参本第八課に着任して、私の主務の総合情報事務と宣伝報道、防諜業務を共にすることになったのは昭和十六年の初夏であった。後になって判ったことであるが、私が東南亜域民族工作準備のため、バンコックに派遣されることが内定されていたからである。私は後事を〔同じ陸士43期の〕彼に託し得る出会いを何より心強く思った。というのは、私は五月初め頃から、大東亜戦争に備える途方もない思想戦計画を策案して上司の認可を乞うていた。それは独逸軍の宣伝隊（PK中隊）¹¹⁷¹にヒントを得たもので、皇軍の日支事変における拙劣幼稚な思想戦の反省と教訓に負うものであった。「アジア人のアジア恢興」「アジア民族の独立、自由の闘取」「大東亜共栄圏の建設」を錦の御旗に思想戦を展開し、広くアジア民族の共鳴、響応を獲得しようというものである。これがため各作戦軍戦域の特性に応じ、ニュース、写真、映画、新聞、放送、宗教、文芸、絵画等の第一流人士を総動員して宣伝、文化工作隊を編成し、大本営と現地相呼応して大思想戦を展開せんと企図した。計画の仕上げは桑原兄との合作となった。これは日本軍初めての試みであり、対国内広報を主眼とした独 PK 中隊に較べ遙かに深遠広汎な計画であった。私達はきたるべき大東亜戦争にこそ真乎の日本思想戦を開拓せねばならぬと共鳴し誓い合った。宣伝戦の用語を排し、思想戦用語を使うことにした。かくて九月半ば私の鹿島発ちに伴ってこの計画の遂行を挙げて桑原兄が引き継いでくれた。

しかし開戦間近かに迫ったこの時機になって、各界一流の名士を網羅するこの宣伝文化工作隊の動員と編成、運用は至難の業であった。これ等の方々は各界の指導者で、軍の階級でいえば将官に当たる人が多かった。この方々は共通して個性が強烈、自負が強く、体力は貧弱、軍隊の経験がない自由業に類する生活不規則な人が多く、戦場の部隊行動にはそぐわない特性があり、又地位上も動員が難しい事情が多かったからである。一例をジャワ島作戦軍（第十六軍）にとると、文士の武田麟太郎、大宅壮一、浅野晃、阿部知二、富沢有為男、北原武夫、清水宣雄、大木淳、諸氏。画家の南政善、佐々木英雄、城取春生各氏。映画人の百本読吉、倉田文雄氏等である。新聞社、放送協会からも第一流の人材が選抜された。他の軍の場合も同様であった。

果たして桑原兄は動員編成段階で次々と予想を超えた障害に直面した。開戦直前になってかろうじて曲がりなりに一応の形を整え、逐次加入式に作戦軍に追従する有り様であった。部内外から様々な非難、中傷が相次いだ。ましてや事前の準備も、訓練

¹¹⁷¹ ○「宣伝中隊(Propagandakompanie, PK)または宣伝部隊(Propagandatruppe)とは、ナチス・ドイツ時代のドイツ国防軍及び武装親衛隊に設置されていた部隊。ドイツの軍民及び敵対国に対するプロパガンダを任務とした。**宣伝中隊の歴史** 1938年初頭、国防軍最高司令部(OKW)総長ヴィルヘルム・カイテル将軍と宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルスは「戦時宣伝の実施に関する合意書」(Abkommen über die Durchführung der Propaganda im Kriege)なる文書に署名した。この文書の中では、OKW 所属の宣伝部隊が定期的に戦時宣伝の材料を宣伝省(RMVP)に供給する事が取り決められていたが、同時に戦時宣伝そのものは総統から権限を与えられている宣伝省がもっぱら担うこととされていた。この合意に基づき、5 個の宣伝中隊が設置されたのである。」、[“宣伝中隊”. Wikipedia.(参照 2023-05-09)]

○40 年, 陸軍遣独使節団の報告書が作成されている。[資料「山下使節団」]

もそこそこに一般兵なみの個人装備で部隊には車両装備を欠く態で、召集将校指揮下に戦場行動を強いる難儀は予想を絶するものがあった。不平不満が現地から色々のルートを通じて中央の政府に、軍当局に伝えられ、政治問題化する形勢となった。桑原兄はその矢面に立つ羽目となった。しかし彼は動ずることなく初心を堅持して対応措置に八方奔走苦汁の末、逐次軌道に乗せてくれた。だが動員編成と緒戦段階の轟々たる非難中傷の責任を彼の一身に問われて参謀本部を追われる始末となった。

元々この計画は私が発想し、彼に継承して貰ったもので、その責任は一切私に帰すべきものであった。だが彼は四面楚歌の中で初心を貫き、一言の陳弁もすることなく、莞爾として私に代わって責任を背負ってくれた。後日彼は私に一言の苦衷も語らなかつたのみか結果においてこの思想戦計画は六、七分の成功を納め得たと満悦していた。私は責任を恐れない彼の信念と実行力と寛容さに敬服し詫び入った次第である。」¹¹⁷²



図 106 藤原岩市
出典：『留魂録』
巻頭写真

¹¹⁷² 藤原岩市. “好漢 故桑原長兄を懐かしむ”. 『一武人の波瀾の生涯』 p.15-19.

ふつ 仏印との関係

北部仏印進駐（1940-09-23）¹¹⁷³

「…わが軍は、北部仏印の飛行場数個の使用が可能となり、一部兵力（約六、〇〇〇名）の駐屯も実現し、今後の対南方進出の手掛りを得たことは、戦略的に重要な意義を有するものであった。と同時に北部仏印進駐はやがて南部仏印への進出となり、大東亜戦争生起の重大なる起爆剤となったことは重視されなければならない事実である。」（心理 27-28）

南部仏印進駐（1941-07-28）¹¹⁷⁴

「陸軍は一六年三月頃物的国力判断から対米戦は回避すべきであるとし、南方武力進出を取止めていた。一方海軍は既に完全動員を終わり、一六年中にやらなければ対米戦はできなくなるという事情から、北面した陸軍を南面せしめようと努め、ついに六月二五日「南方施策促進に関する件」が正式に決定せられた。そして同月三〇日大本営陸海軍部の進駐計画が決定され、陸軍部隊は飯田祥二郎中将の率いる第二十五軍（近衛師団およびインドシナ派遣軍を改編した独立混成第二十一旅団を基幹とした）であって、平和進駐を主旨とするけれども、万一の場合に備えて武力進駐も計画された。一方外交交渉の面ではドイツに斡旋を依頼したが、独の態度は消極的で渋り勝ちであった。そこで駐仏加藤大使を通じてビシー政府と交渉せしめた。近衛首相からペタン主席宛のメッセージも発せられ、結局七月二一日仏国政府は受諾を正式に回答して来た。[中略] 米（英）蘭国は、この事態を重大視し、急拠防備の増強を図り、ついに対日全面禁輸の拳に出る結果を招来した。」（心理 28）

仏印静謐保持

○「…「仏印静謐保持」の方針は早くも北部仏印進駐後には、仏印におけるフランスとの関係と独立運動への対応に関する日本の基本方針となったのである。その後、この方針は、より確固たるものとなっていく。例えば、大本営陸軍部は南部仏印進駐（1941年7月28日開始）後に「大陸指第九百二十四號」を発し、
六 特ニ軍紀風紀ヲ至嚴ニシ佛印側ト無用ノ摩擦ヲサクルモノトス
八 安南獨立ノ謀略ハ之ヲ行ハサルモノトス
と、「仏印静謐保持」の方針をあらためて現地駐屯部隊（第25軍）に指示している」

1175

¹¹⁷³ 40年「9.23日本軍、北部仏印に進駐」。[『近代日本総合年表』p.324]

¹¹⁷⁴ 41年「7.28日本軍[南部仏印]進駐」。[同上。p.326]

¹¹⁷⁵ 立川京一。第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本。『防衛研究所紀要』第3巻第2号（2000年11月），p.69.

○「太平洋戦争中、日本は仏印を、当初は発進基地、のちには後方の兵站基地、海運の中継基地、さらに、戦争の全期間を通じて資源の供給地とした。日本が南方地域で戦争を遂行するうえで、後方たる仏印の安定は絶対条件であった。また、食糧と資源の不足に苦しむ日本にとって仏印産のコメ、とうもろこし、石炭、鉄鉱石などは確保しなければならない重要物資であった。このような理由から、日本、特に陸軍は仏印の「静謐保持」を金科玉条とした。そして、仏印の統治機構を温存し、その効果的な運営をフランスに期待したのである。

一方、フランスは仏印におけるフランスの主権の維持、仏印領土の保全、そして、仏印経済の存続を意図した。フランスは戦後も大国として存続するために、植民地をひとつたりとも失いたくなかった。しかし、ドイツとの戦闘に敗れたフランスには仏印を防衛する力は残されていなかった。フランス本国はドイツとアメリカに、仏印当局はイギリスとアメリカに、仏印への支援を要請するのであるが、すべて拒否された。やむなく、フランスは仏印の安全保障を日本との強調関係にゆだねるのである。また、経済的にも、対独休戦後、イギリスの海上封鎖によって、本国との交易がほぼ断絶した。仏印は本国に代わる大量貿易相手を見つけなくてはならなかった。そこで浮上したのが、ほかならぬ日本であった。こうして「日仏協力」は両国がそれぞれの目的を追求するために不可欠な要素となったのである。」¹¹⁷⁶

○この「静謐」は、日本の「明号作戦¹¹⁷⁷」で消滅する。

¹¹⁷⁶ 立川京一. 第二次世界大戦とフランス領インドシナ：「日仏協力」の研究. 上智大学, 1999, 博士論文.

¹¹⁷⁷ 「明号作戦（めいごうさくせん、英: Operation Bright Moon, 仏: Combats en Indochine）は、1945年3月9日にフランス領インドシナ（仏印）において日本軍が実行した作戦。仏印武力処理、あるいは三・九クーデター（さんきゅうクーデター）とも呼称される。太平洋戦争末期、それまではフランス領インドシナ（仏印）は日本と協力関係にあったヴィシーフランスが統治していたのだが、1944年に連合国に敗れて崩壊、フランス共和国臨時政府が成立し、仏印が同政府の支配下に入り、日本と敵対するようになった為、日本軍と交戦状態に突入し、これに勝利した日本軍が総督府を掌握、インドシナ半島を完全な支配下に収めた。」. [“明号作戦”.Wikipedia.（参照 2022-12-23）]

安南工作関連

年	月 日	恒石関連の事項	本 書
43	11 月末	恒石：安南独立に伴う宣伝業務指導・連絡のためサイゴン出張	「2.3.10 仏印出張」
44	1 月 15 日	恒石：東方社移転先候補として主婦の友社訪問	「2.4.1 東方社移転」
	5 月 1 日	東方社：九段坂下の野々宮写真館ビルに移転	
	5 月以降	伝単部：駿河台分室から東方社入居のビルへ移転，東方社と共同で対仏印伝単作製	資料「東方社」
	7 月 2 日	・東方社：大木実・林重男南方へ出発，ベトナム・サイゴン取材 ・林デング熱感染，大木ハノイ，ユエ訪問 ・大木はユエで中島健蔵に紹介されたフランス文学者の小松清の案内で，安南独立運動のアジト等取材	「2.4.8 東方社の外地撮影」
	10 月ころ	恒石：45 年春伝書使として入ソの予定が安南工作のため変更となる	「2.5.2 命拾い」 資料「外交伝書使」
	12 月 19 日	東方社：大木・林，バンコク，シンガポールを經由し帰国	「2.4.8 東方社の外地撮影」
45	1 月	恒石：安南独立に伴う謀略宣伝に関する現地軍との思想統一，宣伝資材（料）の交付補充，サイゴン放送局の整備などの事務連絡のため仏印出張	「2.5.1 仏印出張」
	1 月 26 日	恒石：仏印処理に対する現地軍の意見を報告	

○谷山樹三郎

「東宝がサイゴンで現地ロケをした安南 [?] の独立戦争がテーマの映画について、自分だけが賛成し、上映が許可になった。」¹¹⁷⁸

¹¹⁷⁸ DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』／本書.p.47.脚注.93.

ぶん 文化学院

引越し

○西村伊作

「建物を引き渡すときに学校にある大切なものだとか、窓かけでも何でも全部学校から五反田の家へ運んだ。そういうことは私の娘たちが一生懸命にやった。」¹¹⁷⁹

○小林久子：九段事務所職員で駿河台分室に移った

「その年 [43年] の秋に、だしぬけに引っ越しという事になった。行く先は、駿河台のB [文化] 学院の校舎だという。B学院は、国策の線に沿わざるの廉を以て閉鎖の憂き目に遭ったのだそう。[中略]

国策の線からはずれていただけあって、B学院は我が母校¹¹⁸⁰より大分スマートに出来ていた。講堂はステージになっており、楽屋には、楽屋風呂までついていた。建物ばかりではない。時々母校を懐かしがって訪れる学生達が誠にハイカラである。ベレー帽に粋なジャケット、キャンヴァスを小脇にかかえたパリジャンみたいな男生徒など、少女歌劇みたいだと思った。二、三日残っていた事務室の女の子がまたシャレしていた。もちろん事務服なんて着ない。ショートカットの髪にクルクルッとパーマをかけて、粗いチェックのブラウスにまるで小学生に見える短いスカート。それが、さっそうと自転車で出勤して来る。それが私達より年上の事務員だと、小使いの小母さんから聞かされてびっくりした。

我々は二人共、ナンキンあみのお下げに、よれよれの事務服、その下に和服地、お手製、だぶだぶのもんぺズボンという国策型。それに、残務整理に来ていた先生が素晴らしい。それは、学院長の令嬢との事であった。その頃、学院長は、不敬罪とやらで牢屋に入れられていたそう。

フランス帰りとかいうその美しい先生を、私は見ているのが好きだった。フワリと肩にかかったウェーブの髪、びたりと身に合ったスーツの上に、何段も手の混んだスモックでかざったオレンジ色のガウンをさっと羽織り、形のいい足には絹のストッキングにハイヒール。

「西洋人みたいね」

「あれで先生なのかしらね」

あんばんみたいなまげを後頭部にチョンとのっけてころころした体に野暮ったいスーツ、木綿の靴下に運動靴というのが、当時の女先生の標準スタイルであった。

「あっ、勝田¹¹⁸¹さんと話してるわよ」

「何を話しているのかしら」

¹¹⁷⁹ 『我に益あり』 p.380.

¹¹⁸⁰ 東京府立第六高女。 [『猫のしっぽ』 奥付]

¹¹⁸¹ 勝野金政。 [勝野金政 web 記念館 (<http://katsuno.life.cocacn.jp/>) / 『駿河台分室物語【資料編】』 p.42] . なお小林久子は九段事務所の時代から勝野を知っている。

父上を獄に送られ、学校を接収された美しい悲劇のヒロインは、我等の赤露脱出者¹¹⁸²に、めんめんと軍の非道を訴えたいらしい。何かスマートなものに対して、妙に反感を抱いていた軍の事だ、さぞかし荒っぽく扱った事であろう。

「とってもひどいのよ」などと言う甘い声が私達の所まで聞こえて来た。勝田さんはすっかり同情して、しきりに遺憾の意を表明していた。私達はガラクタの間から首を出して、映画でも見ている気分でポカンと眺めていた。あとで勝田さんは、しきりに「気の毒だ、気の毒だ」と西山¹¹⁸³さん達に話していたが、西山さん達はただニヤニヤしているだけだった。やはり美しい人から直接訴えられないと、同情は湧かないものらしい。」¹¹⁸⁴

○ピアノ

・「[43年に] 文化学院が軍部に取られたときに、文化学院のグランドピアノとか、大切なものを五反田の家に持ってきてあったのである。」¹¹⁸⁵

・「ピアノをどうする？ 参謀本部はその歴史の中でピアノを購入したことはないから、池田が自分で1台買わなければならない¹¹⁸⁶。」¹¹⁸⁷

・五反田のピアノは空襲で焼け、池田が寄贈したピアノが戦後文化学院で使われている¹¹⁸⁸。

¹¹⁸² 勝野金政. 赤露脱出記. 日本評論社, 1934年.

¹¹⁸³ ○「西山さんは西村庚氏ではないでしょうか?」. [稲田明子. Eメール. 2022-09-09]

○「このころ [昭和13年夏ころ]、一番末端で彼 [リュシコフ] と接触した一人に西村^{こゝろ}庚がいる。西村は幼年学校卒、陸士中退。陸軍省で地下工作に従事していたが、リュシコフの上京後間もなく、参謀本部ロシア課に配転になり、ロシア語が堪能なことからリュシコフ係を仰せつかった。」。[川口信行. “「スターリン暗殺計画」の主人公リュシコフ大将の最期：実録 射殺した大連特務機関長ら続々証言”. 週刊朝日. 1979-07-20, p.19]

○同姓同名の人物が論文6編に地図の編者としてある。[“西村庚”. Google Scholar. (参照 2022-09-09)]

¹¹⁸⁴ 『猫のしっぽ』 p.58-61.

¹¹⁸⁵ 『我に益あり』 p.395.

¹¹⁸⁶ ○日の丸アワー放送の準備にピアノが必要だった：「さらに [44年] 1月17日にノックス少佐とともに大森収容所から移送された3名の捕虜が「今、南太平洋の前線でアメリカの兵隊にこんな歌が人気です」と歌って聞かせた。必ずしも反戦とは言えないが、アメリカの銃後でも聞きなれているかも知れないと池田は考え、この歌をおとりとして使うことにした。しかしながら開戦後に作られた歌なので日本では楽譜が手に入らないという問題があった。それで彼らはヘンショーのピアノの伴奏でこの歌を聴き、楽譜を作らねばならなかった。」。[『駿河台分室物語【本編】』 p.173]

○捕虜の慰安にもつかわれた：「向かいの [捕虜が収容された] 校舎から、切々たる歌声が流れて来た。[池田] 侯爵の寄贈なるピアノの伴奏で、放送の練習である。戦後、それは「恋人よ、我に帰れ」という歌である事を知ったが、その頃は無論何の歌かはまるで知らなかった。ただ、思いなしか、しみじみと胸に迫るものがあった。」。[『猫のしっぽ』 p.116]

¹¹⁸⁷ 『駿河台分室物語【資料編】』 p.88.

¹¹⁸⁸ 同上. p.318-319.から抜粋.

作家・杉本苑子

「昭和十八年（一九四三）」

十八歳

駒沢高等女学校卒業。仏教系の千代田女子専門学校国文科に入学。古典を学ぶかたわら観能に熱中した。おりから学会では世阿弥の自筆伝書類の発見によって世阿弥研究が盛んであった。その影響と教師の指導で能の美にひきつけられ、世阿弥についての研究書を破読した。

昭和十九年（一九四四）」

十九歳

前年に起こった国家権力による文化学院の強制閉鎖（芸術家、リベラリストで、文化学院の創立者であった西村伊作が、昭和十五年に実施された紀元二千六百年奉祝典の直後「月刊文化学院」に執筆した紀元二千六百年奉祝に対する批判文が、かねてから不敬罪に抵触するといわれていた。西村は不合理な建国神話を信じこませて、国民を超国家主義・天皇主義のもとに統合し、本格化する戦争体制への動員をはかろうとする軍国政府の意図を見抜いていたので、批判文を書いたのだが、昭和十八年にそれが不敬罪にあたるということで、文化学院は強制閉鎖された）によって文化学院の在學生は、各学校に分散させられ、そのうちの二人の女子學生が千代田女子専門学校に転校してきた。その転校生は、仏教的な雰囲気になじめないのか、いつも教室のうしろの席にポツンと肩を寄せ合ってすわっており、級友に反感をもっているように感じられたので、話しかけることもできなかった。だが、気の毒に思うと同時に、文化学院の存在とその意義を意識させられた。このころ、当局の教育方針に抱いた疑問が、後に文化学院を選択する基準となった。

昭和二十二年（一九四七）」

二十二歳

千代田女子専門学校を中退し、戦後、再開された文化学院に入学。リベラルで芸術的な学風の中で能の研究に打ち込む。

昭和二十四年（一九四九）」

二十四歳

卒業論文「世阿弥」が院長、西村伊作に注目され、激賞された。文化学院を卒業。

昭和二十六年（一九五一）」

二十六歳

卒論を激賞されたことが励みとなり、世阿弥を描いた処女作「申楽新記」（後年の「華の碑文」の雛形となった作品）を「サンデー毎日」の百万円懸賞小説に応募して佳作となる。選者は吉川英治、大佛次郎、海音寺潮五郎の三氏であった。」¹¹⁸⁹

¹¹⁸⁹ 杉本苑子全集 22：杉本苑子年譜. 中央公論社, 1998, p.391-392.

迷い猫

『東京ローズ』と題する本の中に、「捕虜達にとって一番辛かったのはあまりにも粗末な食事だった。一日三食、コーリャンを薄い味噌汁で飲み下すだけの食事だったため、皆ひどい栄養失調にかかり重症の脚気、壊血病で寝たつきりになったものもいた。彼等はキャンプ内の樹木の若葉を食べたり、迷い込んで来た犬猫を殺して食べたりさえした」とある。何とニューギニアのジャングルで補給の途絶えた兵士のようなようではないか。東京のど真中でそんなことが行なわれるとすればまさに地獄の沙汰である。

仮りにもしそれに近いような虐待が行なわれていたとすれば、私はどうの昔に刑場の露と消えたに違いないし、少なくとも一〇年以上の服役を強いられたであろう。おそらくこれは東京ローズ裁判の際証人として立った炊事係のオランダ人捕虜シェンクの証言に基づく記事と思われるが、彼こそ前述したように、クリスマス用の牛肉をせしめた張本人であり、常々炊事係の役得をフルに得ていたに違いない。猫はそれをカバーするためのデッチ上げであろう。」(心理 223-224)

○駿河台分室の捕虜 Frank Fujita

「[[鮫の肉が来て] 5日目の夜ニックが炊事室へ行くと間もなく、誰か来て猫を捕まえるのを手伝ってくれと叫んだ。腐った鮫の肉に釣られて入って来たのだ。数人が駆け下りて助け、炊事室をほとんど滅茶苦茶にしてついに猫を取り抑えた。ニックは誰かドアを開けてこいつを放り出せと言った。私は皆に、こんな新鮮な肉を逃がす手はないよと話しかけた。誰かが猫なんか本当に食えるのかと聞き、ミッキー・パーキンスと私が「勿論さ」と答えた。[中略]猫が完全に煮えるまでには収容所の全員が集まり、俺にもよこせという人もいたが、大部分は本当にわれわれが猫を食べるのか見ていた。肉は茹でた鶏みたいで、シンガポールの犬[料理]同様、王侯貴族の食事に見えた。私はためらうことなく食べ始め、次第に大部分の者も口に始めた。ほとんどの将校は辞退した。すごくうまかったので木箱のワナを作り、近所の猫は姿を消し始めた。一度私が浴室で猫の皮を剥いていると、管理棟の日本人が1人入って来た。控えめな表現をすると彼はびっくりし、後ろを向いてあわてて逃げ帰った。夜のことではほとんどの所員は帰宅していた。しかし話は伝わり、翌朝の点呼で猫はよせと言われた。近所の人を知ると、われわれが肉を食べさせてもらっていないと思われるからだそうだ。」¹¹⁹⁰

¹¹⁹⁰ 『駿河台分室物語【資料編】』p.163-164.

特別室

「なおナンセンスではあるが一応触れておかねばならない一事がある。それは最近号の某著名誌の記事に「池田氏が捕虜達に女を与える特別室を用意したと言明した」とあることである。これはとんでもないことで、私はその記事を見るとさっそく池田氏に電話して事の真偽を確かめたところ「同僚と冗談半分にそんな話をしたこともあると言ったに過ぎず、事実そんなことがあったわけではない」とのことであった。

前にもちょっと述べたように、同性愛の問題¹¹⁹¹や [中略] 云々のこともあったので、そんな話を雑談したに過ぎなかったと思われる。またそんな話を引き合いに出したのは「猫を食べなければならぬほど食糧不足であったというのは本当か」との質問に対してこれを強く否定すると同時につい口が滑って「女の話まで雑談したこともあるほどだった」という雰囲気の説明したものであったようである。それがどこでどう間違ったか、さも真実のごとく解釈されて活字になってしまったのである。捕虜放送の電波こそは米本国に向かって発射する姿なき弾丸であり、これに従事する者は毎日が真剣勝負であった。いくら謀略放送に彼等を利用するからといっても衛兵まで詰めている神聖なる作業のキャンプに女を入れるなど思いも寄らぬことである¹¹⁹²。まして前線の兵士は生命を的に血みどろになって戦っており、一億国民もまた銃後であってあらゆる苦難に堪えて戦争協力に精進しているときに、事もあろうに大本營の一角にそんな馬鹿なことが許される道理がない。元来捕虜の将校を宣伝等に利用する趣旨は彼等といえども「無為徒食を許さない」ことから生まれたものである。」(心理 227-228)

○駿河台分室の捕虜 Charles F. Williams

“I met XXX in Australia in 1948 on my way home from the Gilbert Islands. He thought I had been killed. He was quite open in saying that his purpose in aiding the Japanese in the propaganda war was to obtain favours, i.e. improved food, visits to IOSHIWARA etc.”¹¹⁹³

¹¹⁹¹ ○「文化キャンプは国籍を異にし、兵科も陸、海、空軍それぞれに所属し階級もまた少佐より兵に至るまで各階級あり、シビリヤンも含まれた寄合集団であった。その包懐する主義思想に至っては千差万別であるのは当然である。しかしながらコレと言うほどのトラブルは起こらなかったが、些細な一、二例をあげると次のようである。モルモン教信者のストーリーターは猛烈なルーズベルト攻撃論者で、そのことについて他の者と口論が絶えなかった。彼の原稿は余りにも正面から攻撃的であって「八割持ちあげて二割落とす」式のわが宣伝戦法からは程遠いものだったので、日本側で手を加えて柔げなければそのまま放送することはかえって逆効果を来す状況であった。またA（仮名）には同性愛の悪癖があったようで、ハンサムポーイのヘンショーなどは狙われた口で、Aとは口もきかない仲間になっていたようだ。そんな事情からこの二人は二階の別室に隔離した。」(心理 227)

○「...恒石少佐にこれら [捕虜間の同性愛] のうわさに付いて話したところ、軍人である彼の意見は徹底していて、「ここは道徳を教える学校ではありません。放送がうまくいきさえすれば本官は何が起きても構いません」と言った。」. [『駿河台分室物語【本編】』 p.145]

¹¹⁹² 捕虜を協力させる手段として分室職員が外部で女を使わなかったとは言っていない。

¹¹⁹³ 手紙. 1992-01-01. (人名削除)

○吉原

「あの日のことは忘れもしません。昭和二十年三月九日。ちょうどその日も、国会議事堂の屋根を隠す例のアレの勤労奉仕に駆り出された日でした。その前の年の暮れあたりから、B29の空襲がだんだん激しくなってきました。それまでの大きな施設や工場への空襲だけでなく、こんな所にも？というようなところまで爆撃されるようになってきました。一本の芸者になっていた歌子さんも、実家に帰しました。「まだ年季が明けないのに」と言うから、「もう、それどころじゃないんだから、年季のことなんていいのよ」って言って、一緒に住んでいたお手伝いさんも、結婚して家を出たので、妹のユリと二人暮らしでした。夜も、何があってもすぐに逃げ出せるようにと、モンペをはいて寝ていましたからね。そうそう吉原にも防空壕があったんですよ。それでも吉原に住む人は、なんだかのんびり構えてたんです。みんな「吉原には爆弾は落ちないよ」って言ってたんですよ。アメリカさんがもし日本にやってきても、吉原がなきゃ困るだろう。向こうだって兵隊さんがいっぱいいるんだから必要なんだ、って。貸座敷の旦那連中が大真面目にね。何の根拠もないんですけど、そのときは「そんなものかしら」なんて思いながら、「吉原だけは大丈夫」という言葉をどこかで信じていたんですよ。今思うと、バッカみたい。そんなわけ無いのに。吉原っていう町は、何度も何度も大きな火事の被害を受けて、関東大震災でも丸焼けになっちゃったけど、そのたびにすぐに立ち直ってきた町なの。だからみんな、どこか楽観的な気持ちを持ち合わせていたのよね。[中略] その日の勤労奉仕が終わったのは、もう夕方でした。国会議事堂の屋根を隠すアレを作るのって、案外肉体労働なのよ。それをさ、一日中やっているから、ホントに疲れるのよ。だって、わたしたちは、三味線や鳴り物しかやったことないんだもの。やっと終わって、一緒に勤労奉仕に駆り出されていた四人組の京子さんと、帰りに見番で立ち話をしてね。他愛も無い話を、少しだけしたの。お茶屋のご主人も何人かいたかしら。それで、「それじゃあ、みな子さん、またね」「うん、またね、京子さん」と言って、お互いの家に帰ったの。なんたって、ろくなモン食べてないし、もうくたびれてぐったりしちゃって、その日は早くに寝ちゃったのよ。空襲警報が鳴ったのは、日付が三月十日に変わってすぐの、夜中の十二時を過ぎたころだったかしら。吉原に爆弾が落ちるなんて、夢にも思っていないでしょ。だから、今夜はどこに爆弾が落ちるのだろうと思って外に出てみると、飛行機の大群が轟音をたてて上空を飛んでいて、空は昼間のように明るくて、もうビックリして。あわてて、妹と一緒に防空壕へ入ったんですけど、あまりにもいつもと様子が違うので防空壕を出ると、あちこちで火の手が上がってたんです。通りは、逃げ惑う人、人、人、でした。飛行機の轟音と悲鳴と燃え盛る火の中、あたしは妹の手を引いて、避難場所だった隅田公園のほうに逃げようと走り出していました。そうしたら、「もう隅田公園はダメだぞ、龍泉寺へ逃げろ！」どこからかそんな声が聞こえてね。たぶん、どこかの貸座敷の旦那だったんじゃないかと思います。それで、思い直して隅田公園とは逆の竜泉のほうへと逃げました。逃げている途中で、妹が、「姉さん、襟巻きを貸して！」って叫ぶの。何かと思ったら、それで火の付いた人の背中を叩いて消したりして。もう夢中でした。親とはぐれた小学生が、制服を着たままだ道端で……、もう動かなくなっていました。市電が三台並んでいたのが見えたんですけど、熱風でみるみるうちに焼け溶けていきました。もう地獄絵ですよ。焼夷弾が雨のように降る中を、ど

こをどう走ったのか。とにかく龍泉寺のほうへ、火の手をくぐって逃げていくと、どうにか火を避けられる場所があったんです。」¹¹⁹⁴

¹¹⁹⁴ みな子. 華より花. 主婦と生活社, 2009, p.156-160.

爆撃禁止区域？

「[駿河台分室の] 南側の道路に面した三階建は日本人職員の使用にあて、北側二階建（一部地階）を捕虜の住居、作業室、食堂、炊事、図書、音楽室等に使用した。風呂場はなかったので中庭西側に新築した。中庭約二〇〇坪は健康保持のための運動場として利用し、校舎西側空地には万一を慮って防空壕も構築したが、その必要はなかった。なぜなら屋上にはPOWの幕をひろげてあったので、敵側では捕虜が収容されていることを知って爆撃禁止区域となっていたことが戦後判明した。したがって幸いにも駿河台のこの界限は戦災を受けなかったわけである。」（心理 195）

○池田徳眞

「駿河台一円が、戦災で焼け残ったのにはわけがあった。それは後で分かるのだが、駿河台分室に俘虜を収容していることはアメリカ側も知っていたから、東京の爆撃に来たB29の東京の地図¹¹⁹⁵には、駿河台だけ赤く染めてあって、爆撃しないように命令が出ていたのである。それで、町会の方に、俘虜のいたことについてあとで感謝された。」¹¹⁹⁶

○駿河台分室の捕虜 Frank Fujita

「[戦後大森収容所に移送されたフジタは] ...自分の宿舎に戻り、最近収容所に来た爆撃機の乗組員がいることを知った。彼らのところへ行って話をして、爆撃の正確さを称賛し、バンカーヒル [文化キャンプ] に収容されていたわれわれを攻撃しなかったことを大いに感謝していると伝えた。彼らは収容所はどこにあったかと聞いた。皇居から9ブロックほど北だと答えると、そこに収容所があるのは知らなかったから、意識的に避けたわけではないと教えてくれた。彼らは収容所の場所をいくつか知っていたが、われわれのいたところではなかった。」¹¹⁹⁷

○研究家・工藤洋三

「米軍は、終戦直後に、日本軍管理下の捕虜収容所に対して食糧や衣料品、医薬品などを投下する大規模な補給作戦を行った。このとき、捕虜収容所の屋根のPWの文字を目印に補給物資を投下したことはよく知られている。一方、戦時中にも捕虜収容所の屋根には同様のマークがあり、空襲の目標から外されていたという指摘もある。写真偵察機が撮影した写真のネガフィルムから高精細な画像が得られるようになって実際の状況が明らかになってきた。これまでに得られたすべての写真について、捕虜収容所の屋根にPWのマークは見つかっていない。このことは、捕虜収容所におけるPWの文字の標示が、1945年8月21日の俘虜管理部長から各地の捕虜収容所長に宛てた通達により行われたことを示している。」¹¹⁹⁸

¹¹⁹⁵ 戦後進駐軍が使用した地図か。『駿河台分室物語【資料編】』p.314-315]

¹¹⁹⁶ 『日の丸アワー』p.137.

¹¹⁹⁷ 『駿河台分室物語【資料編】』p.313.

¹¹⁹⁸ 『米軍の写真偵察と日本空襲』p.140.

へい 兵役制度

○概要

「明治六年に徴兵令（太政官布告）が出されて義務兵役制が成立し、明治憲法においても「日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ従ヒ兵役ノ義務ヲ有ス」として、義務兵役制が確立した。男子は満二〇歳で徴兵検査を受け、陸軍の場合、甲種合格者は二年間の兵役に服し、除隊後も在郷軍人として戦時の動員召集（召集について後述 [略]）をまつ、というパターンが、かつての大きな社会制度ともなっていた。兵役制度は陸海軍共通のものであるが、海軍は志願兵制度があったこと、数も少なかったことなどで、兵役あるいは徴兵はもっぱら陸軍のことと観念され、反感や批判も陸軍に多くむけられた（兵役制度一般を論じながら、結局陸軍のことしか触れていない書物が少なくない）」

1199

○田中角栄（1918.5.4-93.12.16）元首相の例

・徴兵検査：「昭和十三年春、角栄は新潟県柏崎でおこなわれた徴兵検査で、甲種合格となった。徴兵制によって、二十歳になった男子は徴兵検査を受ける。健康で体に異常のない者は甲種合格、体格にいくらか難点のある者は、第一乙種などいくつかの段階に分けられる。また特技により、歩兵、砲兵、通信兵、戦車兵に組み入れられた。角栄は幼時から馬に乗り慣れていたので、騎兵科に配属されることになった。入隊通知のくる日まで半年ほどのあいだ、東京ではたらい回しされていた。」¹²⁰⁰

・入隊：「昭和十三年末、角栄は盛岡騎兵第三旅団第二十四連隊第一中隊に、現役兵として入隊するよう通知をうけた。[中略] 盛岡騎兵第三旅団は、在満勤務であるので、角栄たち新兵は昭和十四年三月末に広島に集合し、宇品で貨物船に乗船、瀬戸内海から関門海峡を通過し、日本海を北上して北朝鮮の羅津港へむかった。[中略] 騎兵第三旅団本部は、三江省（現黒龍江省）宝清にある。角栄の入隊する第二十四連隊は富錦に駐屯していた。[中略] 旅団長は騎兵少将である。連隊長、中隊長、小隊長、班長の下に古兵がはばをきかせており、初年兵の角栄たちから見れば、旅団長は雲のうへのひとである。[中略] 班長の軍曹が角栄の前に立つと、突然尋ねた。[中略] 角栄は、兵營の内務班¹²⁰¹生活で新兵が味わう、おそろしい制裁をはじめて知った。[中略] 騎兵第三旅団は、岩手、青森、秋田、山形、宮城、福島、新潟の出身者で編成されている」¹²⁰²

・一期検閲：「昭和十四年四月に入営し、三カ月後に一期検閲がおこなわれた。初年兵の教育訓練を、連隊長が検閲するもので、兵隊としての基礎実習を終え、実戦部隊に

1199 『事典 昭和戦前期の日本』 p. 268.

1200 津本陽. 異形の将軍：田中角栄の生涯（上）. 幻冬舎, 2003, p. 95.

1201 【内務班】「旧陸軍の兵營内における日常生活の単位。中隊が 5～6 の内務班に分かれ、下士官が班長として統率した。」。『広辞苑』

1202 『異形の将軍』 p. 97-101.

配属される資格を得たことになる。一期検閲は、普通兵科で四カ月間、騎兵で五カ月間の訓練のちにおこなわれることになっていたが、昭和十四年五月十二日におこったノモンハン事件の影響で、速成教育となった。一期検閲の成果によって、初年兵の序列がきまる。第一中隊の初年兵六十人のうち、幹部候補生、下士官候補生は数人で、上等兵候補は十五、六人。残りの四十人ほどは、戦場で抜群の功績をたてないかぎり、軍隊では昇進できない。角栄は上等兵候補者であった。〔中略〕角栄は一期検閲では学科成績がよく、達筆であるのが評価されたが、体質が強健でないとされたため、保護兵扱いになった。保護兵になると、バター、ミルクの配給があり、食事内容もちがってくる。衛兵のような一昼夜勤務も免除、野外訓練に出る回数も減る。中隊事務室勤務となった角栄は、酒保（売店）、糧秣係、支那事变第三次功績係などをつとめ、実戦とは直接の関係がなくなった。だが、地獄のような内務班生活はつづいていた。』

1203

○高田里恵子・桃山学院大学教授：解題「巖原閥」かもしれない症候群

「学校出」、とくに「大学出」が軍隊のなかである程度の人数のグループを成すケースなど、昭和十二（一九三七）年に日中戦争が始まるまでなかったことである。そもそも大学卒業者は同世代男子の数パーセントに過ぎず（「帝大出」に限れば〇・七パーセント程度、旧制中学在籍率は昭和十五（一九四〇）年で約二十パーセント）、青白きインテリの体格が優れているはずもなく、長期の戦争をしたことのなかった日本にそれほど多くの兵士も要らなかった。甲種合格で現役入営するのはほとんどが農民で、平等な徴兵ではなかったと数々の徴兵制研究が口をそろえて言う。中学以上の上級学校在学者には徴集猶予が与えられた。これはつまり、後発近代国家では進学が違ふかたちでの国家への奉公と認められたということである。しかしその二種類の尽忠報国の仕方はともに、エゴイスティックな上昇志向とも無縁ではなかった。軍隊と上級学校という平等の場所で、かえってエゴイズムと不平等があらわになる。農家の三男坊が選抜上等兵になれば村での地位が上昇したのだから、彼は人を押しつけて皇軍でご奉公したろう。近代ドイツの高学歴ブルジョワにとって兵役の義務を果し予備役少尉になっておくことは男の名誉であったが、日本の「帝大出」や高級官僚には兵隊の位はなんの益ももたらさなかったから、兵役はなるべく他の誰かにやってもらいたいものだった。軍隊と高等教育機関は似たもの同士であるがゆえに対立し、時には憎みあったのである。〔中略〕『神聖喜劇』も示しているように、戦前の（あるいは高度成長期以前の）日本はすさまじい格差社会であり、格差に虐げられた者たちを救い、格差解消を目指すのが、公平と平等を旨とする帝国陸軍である、ということになっていた。』

1204

1203 『異形の将軍』 p.102-103.

1204 大西巨人, のぞゑのぶひさ, 岩田和博. 神聖喜劇第 5 卷. 幻冬舎, 2006, p.235, 237.

べい 米国内放送受信

○日本初の受信成功（24年）

「翌年の8月29日、逓信省の荒川技師から、サンフランシスコの対岸にあるオウクランドのKGO局が特別放送をするから受信せよとの指令が、平磯の丸尾登所長に届いた。KGO局は〔中略〕8月30日の特別放送には3kWに増力した電波を、定時番組の終わった後の電波の伝わり易い時間帯に、特別に発射するとのことであった。〔中略〕実験の当日には、特に日本向けに1時から3時（日本時間の18時～20時）の間、放送電波を発射してくれることになっていた。当日平磯出張所では、所長の他5名の職員と10名の職工が働いていたが、全員が緊張して迎えた当日の18時5分前頃、突如として妙なる音楽が聞こえてきた。あまり強いので東京からの放送かと想像している中に、やがて英語の演説に変わり、それが独唱へと、またピアノ曲へと変わった。」

1205

○受信設備開発の難しさ

「中波放送（AM）に限らず、電波を使用した放送全般に云えることですが、放送事業者は利用者に対して、いつでもどこでも一定の品質で安定的に放送サービスを提供する使命があります。しかし中波放送に使用する電波の伝搬特性では、放送局（無線中継所）から比較的近距离のエリアしかカバーできません。仮に中波放送が遠距離のエリアまで届くとすれば、それは電波が地表と電離層との間の反射の繰り返しで届くからです。ただし電波伝播の安定度・強度は自然現象に影響され周波数、時間、位置関係によって大きく左右されます。〔中略〕日本の参謀本部が国際電気に頼み、米国の中波放送を受信できる設備を発注したとしても、国際電気の技術者からすれば、このような電波伝搬の特性から一定の品質で安定的に受信できることは至難の業だったと云えます。「難しい注文」とは、このことを指します。」¹²⁰⁶

¹²⁰⁵ 無線百話出版委員会編. 無線百話：マルコーニから携帯電話まで. クリエイト・クルーズ, 1997, p.156-157.

¹²⁰⁶ 曾根三明. Eメール, 2020-04-05.

ベトナム反戦運動

○ Wikipedia

「1960年代の後半になると、戦争の激化とともに戦地から遠く離れているアメリカ本国にもテレビ報道やニュース映画フィルムにより、多くの国民が戦闘の場面を、その日のうちに視聴することで、事実を目の当たりにする時代に入っていた。

「戦争当事国」のアメリカ合衆国では、次第に反戦運動が高揚していた。1963年に奴隷解放100周年を迎え、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師を中心にした、黒人（アフリカ系アメリカ人）による人種差別撤廃闘争も、この時期に活発化して、「長く暑い夏」に都市での暴動が頻発するようになったが¹²⁰⁷、当初はベトナム戦争に対する反対運動は抑えていた。

しかし1966年に、アメリカ合衆国上院の外交委員会（フルブライト委員長）でベトナム公聴会が開かれて、ジョンソンのベトナム政策は過剰介入だとするジョージ・ケナンの批判が出て、1967年に入るとベトナム戦争への戦費拡大につれ、福祉予算が圧縮されることに不満を抱いたキング牧師らの公民権運動の指導者は、公然と反戦の声を出し始めた。

これらの運動に、さらに大学生の学生運動が結びつき、1967年4月に全米で広汎な人々が反戦集会を組織して、やがて反戦運動が全米を覆い、ニューヨークでは大規模な反戦デモ行進が行われて、同年秋の10月21日に首都ワシントンD.C.で最大規模の反戦集会（ペンタゴン大行進）が開催された。さらに翌1968年1月の「テト攻勢」（後述 [略]）によって、反戦運動は大きく盛り上がった。

ジョンソン政権は、戦場におけるアメリカ兵の士気の低下、国内外の組織的、非組織的な反戦運動と、テレビや新聞、雑誌の各種メディアによる、戦争反対の報道に苦しむことになった。除隊したベトナム帰還兵による反戦運動も盛り上がりを見せた。

1967年にはベトナム反戦帰還兵の会（英語版）（VVAW）が結成された。VVAWは最盛期には30,000人以上を組織化し、ロン・コーヴィック（『7月4日に生まれて』の著者）やジョン・ケリー（2004年民主党大統領候補者）のような負傷兵が中心となって運動が広がった。

そして、ベトナム戦争の最盛期だった1968年初頭には最大で54万人のアメリカ合衆国軍人が南ベトナム領土内に投入され、ベトナム周辺の海上に展開する海軍や、フィリピン、大韓民国、日本、グアム、ハワイ、米本土西海岸などの後方基地からも含め

¹²⁰⁷ ○「私はとくに黒人を対象としてヒューマニティおよびポストマンホールズと併立した別個の番組を編成したい腹案をもっていたが実現に至らなかった。」（心理 221-222）

○43年1月、戦時黒人工作関係。[アジア歴史資料センター、Ref. B02032466100]

○43年12月の「日の丸アワー」放送開始前に池田徳真らが「宣伝虎の巻」作成：「(36)黒人兵士諸君へ。黒人兵士を、激戦地に向けるという情報があります。まさか、と思いますがね。しかし、アメリカ南部にはK・K・K（Ku Klux Klan）なんて団体が、今でもありますから、油断はなりませんね。」。[『日の丸アワー』p.99]

て大軍が投入されたが、ソ連や中華人民共和国による軍事支援をバックに、地の利を生かしたゲリラ戦を展開する北ベトナム軍および南ベトナム解放民族戦線と対峙するアメリカ軍・南ベトナム軍・連合軍にとって戦況の好転はみられなかった。

1967年11月に、それまで北爆を推進してきた、ベトナム戦争の最高責任者であったロバート・マクナマラ国防長官が辞意を表明した。彼はその前年に北爆を縮小するよう大統領に進言し、1967年5月には解放民族戦線を含めた連立政権を受け入れるべきと主張するまでになり、この時点で既にアメリカ合衆国政府内でも、ベトナム戦争の続行に疑問の声が出るようになった。しかしジョンソン大統領は依然として軍事強化の路線を変えなかった。

兵士の間にも厭戦機運が芽生え始め、1967年10月26日には西ベルリンの米軍司令部内からベトナム兵役から逃れ、カナダや北欧へ亡命するよう呼びかけるビラが出回っていたことが判明した。また、この頃にはベトナムに派遣された兵士の中から逃亡する者も増え始め、常時40-50人の逃亡兵が発生していた。」¹²⁰⁸

¹²⁰⁸ “ベトナム戦争”. (参照 2023-04-28)

ハノイ・ハンナ

「ハノイ・ハンナ (Hanoi Hannah, 1931年 - 2016年9月30日) とは、ベトナム戦争 [1960-75] において北ベトナムによって行われたプロパガンダ放送でアナウンサーを勤めた女性のアメリカ軍における通称である。本名はチン・ティ・ゴ (Trinh Thi Ngo)。

概要

彼女は戦争の間1日に3回の放送を行ない、戦死したり捕虜となったアメリカ兵の名前を読み上げ、またはベトナムへのアメリカの介入の不当性とその非人道性を訴えるアナウンスを行い、アメリカ兵達の厭戦気分を煽ろうとした。あるいはアメリカ兵たちに故郷を思い起こさせホームシックに陥れようと、アメリカの反戦ポピュラー音楽を流したりした。

例えば、彼女のアナウンスにはこのようなものがある。

How are you, GI Joe? It seems to me that most of you are poorly informed about the going of the war, to say nothing about a correct explanation of your presence over here. Nothing is more confused than to be ordered into a war to die or to be maimed for life without the faintest idea of what's going on.

(GIジョーのみんな、ご機嫌いかが？あなたたちのほとんどが、何の説明も受けないまま、このロクでもない戦争に連れて来られたんじゃないかしら。訳のわからないまま戦争に行くように命じられて、ここで命を落としたり、大怪我を負って一生を台無しにするのって、意味が無いじゃない。)

— 1967年6月16日の放送

戦後、ハンナは国家栄誉賞を受賞し、エンジニアの夫と共にホーチミン市に移住したが、彼女の長男はボートピープルとなってアメリカに亡命したという。

2016年、ホーチミンで死去。」¹²⁰⁹



図 107 ハノイ・ハンナ

撮影：1966年

出典：Wikimedia Commons

¹²⁰⁹ ○「ハノイ・ハンナ」. Wikipedia. (参照 2022-12-26)

○英エコノミスト誌が彼女の死を「墓碑銘」欄で報じた。[Obituary Hanoi Hannah (Trinh Thi Ngo): The music of English. *The Economist*. 2016-10-15, p.86]

ほう 放送施設

「(一) 日本放送協会

本社は千代田区内幸町にあり、開戦時の全職員数は約六、〇〇〇名に近く、放送系統は全国放送、海外放送、および東亜中継放送の三系統であった。

右は同盟通信の電信放送とは異なり、中、短波によるラジオ放送であったので、寸劇やドラマを入れたり、甘美な音楽を流すことも自由であった代わりに、聴いてくれないラジオは無価値でもあった。右三系統のうち、海外放送は一六年一二月の開戦直後、中国前線部隊、タイ、仏印、蘭印、比島向け放送を充実し、一〇送信・一七言語・二四時間四〇分の放送を行なった。

また一七年二月、独、伊向けを新設、四月からはオーストラリア、インド、アメリカ、イギリス向け放送を強化したため、多数の二世や外人が雇傭されていた。

さらに一七年九月業務局国際部を国際局に昇格し、同年一二月、一三送信・二二言語・延べ三〇時間三〇分、一八年八月には一四送信・二四言語・三〇時間五五分に増加し、一九年一月に至るや一五送信二四言語三二時間三五分という具合に拡充した。

東京ラジオの短波は、五〇キロ三基の強力なもので、米国東部は受信がやや困難であったが、米中、西部とくに太平洋地域は感度良好であった。欧州方面でもダブリン（英）等では割合よく聞えたようである。

なお敵空襲に対する配慮から地下放送設備の必要が痛感された。東京ラジオは開戦に先立ち、一六年八月から放送会館の地下に三室の予備スタジオを設けていたが、空襲激化に応じ、皇居前の第一生命館（戦後GHQ接収使用）に設けた予備スタジオは電気設備、換気、予備発電設備などを備えた完全な地下放送局で二〇年三月に完成した。このほか東京では川口、鳩ヶ谷のいずれかの放送所が予定されていた。

そして対外放送の名崎、八俣の両送信所が被害を受けた場合には、通信院の小山（栃木）、検見川（千葉）両送信所の設備が利用されることになっていた。

また海外放送、東亜放送の予備送信所として、二〇年六月、多摩と足柄に送信施設が設けられ、足柄は横穴を利用した秘密スタジオであったが、完成を見ないまま終戦を迎えた。

(二) 台湾放送協会

台北放送は短波によって比島、マレー、蘭印向けの放送を行ない、使用言語は一一言語であった、当協会はもっとも南方に位置していた関係もあり、早くから南方各地へ録音班を派遣し、現地の生々しい録音を内地にもたらずに努めた。とくにシンガポール陥落時の山下大将と英将パーシバル会談の録音は、その白眉であった。またサイゴンから行なった対敵放送にも協力するとともに比島バターン半島よりコレヒドール要塞にかけての攻略戦においては、弾雨を犯して拡声機による投降勧告¹²¹⁰を行なったことは前に述べたとおりである。（続く）

¹²¹⁰ 〇戦時中はこれも放送と呼んだ：「宣伝車（「セ」号車二型 1. 拡声装置 到達距約二軒 2. 「オフセット」印刷能力一分間四〇枚 3. 通信通達距離五-六〇〇軒 4.

(三) 朝鮮放送協会

開戦とともに戦時特別編成方針をとり、第一放送は日本語で東京放送の中継のほか情報局発行の週報や総督府発行の週報、あるいはNHKの時事解説などを参考として時局解説を行ない、第二放送は朝鮮語で朝鮮民衆の時局認識と戦争協力を呼びかけた。そして京城に中央放送局があり、地方局は八局であった。

(四) 満州電信電話株式会社

新京に中央放送局をおき、一八年には地方局一八局に達し、聴取契約数は四六万を越えていた。第一放送は日本語、第二放送は満語であったが、海外放送の面では、欧州、北米西部、華南、南方地域向放送を行ない、使用言語は七言語であった。また独伊との間に協定を結び、国際交換放送も行なった。

(五) 中国放送協会

南京中央広播電台を中心に、上海、漢口、杭州、蘇州、寧波の各電台を管下におき、民衆の宣撫対重慶および対南方放送を行なった（短波）。

(六) 華北放送協会¹²¹¹

北京を中央広播電台とし、済南、天津、開封、太原、運城、青島などに地方局があった。対敵放送では重慶、外蒙、南方向けの短波放送を実施した。

(七) 比島方面

昭和一七年一月一三日からマニラにあった米国のRCA放送所を修復して、中波（一キロワット）放送を開始。二月二〇日からルソン、ミンダナオ、ビサヤ地域向けの短波（二・五キロワット以下）放送を行なった。またコレヒドール要塞の米比軍への放送、あるいは前線での拡声機による投降呼びかけ等も行なった。さらに東京から西南太平洋方面の敵軍に対する放送（ゼロ・アワー）の中継や独自の対敵放送も活発に実施した。なお地方局はセブ、ダバオ、バギオ、レガスピー、イロイロに設置せられ、マニラ放送の中継に当たった。

(八) マレー・スマトラ方面

一七年三月一八日シンガポールに短波五〇〇ワットが開設されたのについて、逐次中・短波施設を増強した。そしてマレー地区にはペナン・クアラルンプール・イポウ・マラッカ・タイピン・セレンバンの六局、スマトラ地区にはメダン、パダン、ブキチンギ、コタラジャ、パレンバン、タンジョンカラン、タルトンの七局があいついで設置され、マレー半島には五〇〇以上のラジオ塔が設けられ、インド人、中国人、ユウラシアン等を対象とする七言語の放送が行なわれ対日協力を促した。（続く）

写真装置現像定着引延）自動車ニ拡声器ヲ備付ケアルモノニシテ香港攻略時対岸九龍ヨリ放送シテ効果ヲ収メタリ。『昭和十八年度参謀長会同における実務連絡事項』p.6-7]

○米軍も実施（後の日本文学・日本学者、Donald・キーン（1922-2019）の例）：「主に普天間に駐留し、捕虜を尋問した。前線ではスピーカーで日本兵に投降を呼びかけたが...」。

[奥村智司. 67年前、私は沖縄の戦場にいた. 朝日新聞. 2012-06-20, 朝刊]

¹²¹¹ 華北広播協会とも。[資料「対敵電波戦」]

とくにシンガポールには短波五〇キロの強力施設¹²¹²が一八年一二月以降開局せられ、インド、重慶、濠州、南太平洋方面の敵軍に対する放送が強力に実施され、さらに欧州および南米方面に対する放送も開始されるに至った。

(九) 蘭印方面

ジャカルタ放送局（当初五〇〇ワット、一七年七月より一キロワット）は一七年三月七日より放送開始、一八年一月以降一九年八月までにバンドン、スラバヤ、ソロ、ジョクジャカルタ、マラン、スマラン、ブルオケトに放送局が開設された。セレベス、ボルネオなどの海軍民政地区では、バリックパパン、パンジェルマシン、ポンチャナック、メナド、マカッサル、シンガラジャの六局が開設された。とくにバンドンの一〇キロ短波は一八年一月以降対濠州（インド、北米）放送に有効に利用された。

(一〇) ビルマ方面

一七年三月ランググーンはわが軍の占領するところとなったが、放送施設は徹底的に爆砕されていた。NHKから派遣された職員の献身的努力により同年八月一五日以後ビルマ向とインド向けの放送が開始されたが、連日英空軍の来襲に悩まされながらの放送を継続した。しかしながら地理的にインドに近接する関係上、対インド放送はとくに活発に実施されたのである。ちなみにこの放送局長は野球放送の名アナウンサーとして高名であった松内則三氏であった。

(一一) 香港放送

香港放送局（中波二キロ、短波一・五キロ）は一七年二月一日から放送開始となり、中波は現地日本人および中国民衆向けに、短波は重慶向けに利用された。

(一二) サイゴン放送

サイゴン放送局は短波一二キロワットの勢力であった。一七年三月ジャワ上陸作戦に呼応して有効なる謀略放送を行なったことは既述したとおりである¹²¹³。一七年一〇月一〇日以降時間借りの形式をとり、南方総軍において対インド、対濠州放送を行なった。またインド独立連盟よりも要員を派遣して対インド宣伝を強烈に実施した。」

(心理 158-162)

¹²¹² 〇戦後ジョンソン大統領が下院議員時代奥さんに経営させていたテキサス州オースティンのラジオ局は、「[中波?] 250 キロワット」で「まことに小さな局」,[デイヴィッド・ハルバースタム,メディアの権力3.朝日新聞社,1999,p.89-90.(朝日文庫)]

〇「短波と中波との伝搬特性の違いですね。日本の放送サービスでは中波放送(AM)、短波放送(SW)そしてFM放送の3種類があります。音質の面からはFM、中波、短波の順で悪くなり、放送が届く範囲の面では、逆に短波、中波、FMの順に悪くなります。中波放送の場合で遠くまで届くようにするには、放送側の出力(?)を上げればよいことになります。アメリカの場合には、州単位でも土地が広く、「州の一般聴取者に中波放送サービスを均一な品質で提供する」には、250?でも「誠に小さな局」と表現するのかもしれないね。短波放送ではそんなに出力を上げなくても電波の伝搬特性上、遠くまで届きます。むしろ余り出力を上げると他国の短波放送と干渉してお互いに聞きづらくなる弊害があります。」,[曾根三明.Eメール.2021-09-23]

¹²¹³ 資料「蘭印作戦における謀略放送」

ほう 放送による「暗殺」

○「上述したように、池田は朝参謀本部第八課で報告を行い、昼少し前にNHKへ行くのが新しい任務の日課であった。ある日恒石少佐が池田に途方もない依頼（unreasonable demand）をした。その朝いつものように第八課へ行くと、彼がそばに来て何気ない調子でこう言った。

「ねえ、池田さん。ルーズベルト大統領を殺せないかな？」

彼はしばらく考えた。

「そんなことを私に聞くのはおかしいでしょう。暗殺は中野学校が専門でしょ」
困った顔をした池田を見ながら、少佐は繰り返した。

「ラジオの電波でルーズベルト大統領を殺せない？」

池田はこの計画に口もきけないほど驚いたが、こう答えた。

「われわれの放送だけでルーズベルト大統領を殺すとおっしゃるんですか。それは面白い。検討させてください」

池田はしばらく考え込んだ。

それからいつもの道順を変え、真っ直ぐ駿河台分室へ行って弟の朽木に話した。彼は即座に、「面白い、しかし可能かな？」と言った。

しばらく考えた彼は笑いながらこう続けた。

「宣伝は、他人に影響を与えるものだ。宣伝で殺すのは他人への影響の最たるものだ」
池田が言った。

「殺せるかは疑問だが、気を狂わせることは出来るかも知れない。お前は外国の小説をたくさん読んでいる。誰かが次第に発狂していく話を読んだことは無いかね？」

「たくさんあるよ。よし、考えさせてくれ」

朽木が答えて兄弟はさらに話し合い、池田はすぐに活動を起こした。

その日直ちに訪問したのは、有名な精神科医のK氏¹²¹⁴であった。ミステリー小説家であるとともに、日本人としては珍しく幅広い分野の知識を持つ人だった。[中略]

その後、広い分野の知識を持つ医師は精神異常の多くの症状を教えてくれた。池田は「ご迷惑でなければ、ご助力をお願いしたい時にまた参ります」と告げて辞去した。歩きながら池田は、科学的事実に基づく面白い話を作らねばと考えた。そして敵側が正にこちらの計略にかかり、われわれの話を否定すれば大変に結構だ。翌朝それを恒石少佐に報告すると、大いに興味を示した少佐は「研究を続けてください」と言った。池田は、「ルーズベルト大統領が変になったようだ」といううわさを全米に広げるために、放送以上にいい方法がないか懸命に考え続けた。

残念なことにこの計画は実行されなかった。それは多分恒石少佐が、ヨーロッパの戦況が著しくドイツに不利になり太平洋戦線ではアメリカ軍が急速に進撃している戦況では、この種の宣伝が合衆国で受け入れられるチャンスはほとんどないと判断したからであろう。そうではあるが、何千マイルも離れた場所にいる人を短波放送のラ

¹²¹⁴ 木々高太郎（心理201）

ジオで殺そうというのは素晴らしいアイデアであった¹²¹⁵。しかし池田はこれはもともと恒石少佐が思いついたのではないことを後に知った。樺山と、二世で池田の友人の村山〔有〕が恒石少佐に「霊によってルーズベルト大統領を殺す」(kill President Roosevelt by the soul) ことを提案したのだ。「霊によって殺す」という言い方は神秘的で非科学的に聞こえるかも知れないが、仏教に固有の祈祷で人を死に至らしめるといふ呪法と同じである。村山の言葉にヒントを得た恒石少佐が、池田に放送でルーズベルト大統領を殺すことが可能か尋ねたという訳だった。

一九四五年4月12日、つまりそれから10カ月後にルーズベルト大統領が死去し池田は「絶好の機会を逃したとは残念無念！」と思った。

なぜならもし日本側が短波ラジオでルーズベルト大統領を殺害するという計画を実行に移していたなら、彼のヤルタ会談（一九四五年2月4日-12日¹²¹⁶）での不手際についての苦悩を暴露してその死因に疑問を投げかけ、あるいは晩年の戦争指導が情緒不安定に陥っていたことを指摘して彼が死去した際の戦時宣伝をより効果的に実施できたと考えたからであった。」¹²¹⁷

¹²¹⁵ 最近のフェイクニュース拡散による他国の選挙への介入と似た発想か。

¹²¹⁶ 2月11日まで。〔『近代日本総合年表』p.343〕

¹²¹⁷ 『駿河台分室物語【本編】』p.226-228.

ほり 捕虜の活用

方針

「[米本国向け放送のような] 捕虜の集団による放送は世界的にも最初の試みであり、いろいろ苦心の存する点も少なくなかったが、なるべく彼等に自発的に行なわせ「自由アメリカ」的性格をもたせ、日本側は表面に出ることなく陰で指導し、監督する立場をとるようにした。」(心理 193)

「[43年12月1日、大森収容所から駿河台分室に移送された捕虜に対し] 小岩井が、課長と相談したかもわからんが、捕虜に[協力を] 命令した。私の考えは違って、命令と強制¹²¹⁸ではこういう仕事はまずい。」¹²¹⁹

「この[捕虜からの] メッセージは [[ポストマンコールズ] という番組名のとおり] ポストマンがその家族達に届ける懐しい便りであって、人道的にみても立派なサービスである。しかしながらわれわれは彼等の家族達を喜ばせ勇気づけるのが目的ではない¹²²⁰。このメッセージをサンドイッチの中の肉やチーズとして、そのまわりは反戦的な雰囲気をかもすパンの切れで取巻かなければならない。どうしても食べたい聞きたいものが含まれている以上、嫌な部分を取り除くわけにはゆかなかったと思う¹²²¹。」(心理 233-234)

¹²¹⁸ 開戦後の実体験の教訓か：本書「2.2.11 カズンス到着」／ 本書「2.2.10 昼食会」

¹²¹⁹ DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』

¹²²⁰ ○42年2月2日から捕虜のメッセージを米国向けに放送を開始した情報局：「わが国の方針としては、アメリカの俘虜を海外放送のアナウンサーとして本人の承諾を得て利用する場合は別として、その他では、一切政治的な発言をすることは認めず、もっぱらその家族、友人、恋人等に対する個人的な呼びかけのみに局限した。そのため最初にアメリカから、俘虜を利用することは陋劣であると抗議してきたが、途中からは「日本はラジオを通じて米軍俘虜の声を米国へ伝え、米国の家庭では皆楽しんで聴いている。日本のかかる好意は礼讓情愛の点において米国人を凌ごうとするものがあるかにみえる。日米ともにこの記録を誇りにしたい。永く米国魂と日本の武士道とは相並んで世界の驚異となろう」

(サンフランシスコ放送) (※) と述べるようになった。[宮本吉夫、「海外放送と情報局」、『NHK 戦時海外放送』p.185-186] (※) 資料「対敵放送ノ概要ト其ノ反響」

○「捕虜と家族との通信は万国赤十字社を通じて行なわれていたが、それには約三カ月くらい要していたので、家族からの返信をラジオを通じて行なうよう提案してみたが、米当局はこれを許さなかったようである。ただ家族からの返信を[日本の捕虜収容所での検閲で] 抽出的に点検することによってポストマンの便りは十分に届いていることが確認された。すなわち「お前の声を久しぶりに聞いた」「お前の放送があることを友人から電話や電報で知らせてくれた」というような手紙が多数発見された。」(心理 234)

¹²²¹ 戦後の民放の番組提供と CM の関係と同じか。

優 遇

「[そこで仏印出張から帰国し 12 月 10 日駿河台分室を訪れた恒石は、小岩井のときと同様中庭に整列させた捕虜に向かい話をする。] 日本と、米、英、蘭国との間に戦争が勃発したことは誠に不幸なことである。過去を省るとき双方共に甚大な損害を出している。この戦をさらに数年間続けるなら莫大な出血を見ることは明らかであって、それから得られるものは何物もない。したがってこの終わりなき闘争は償われることはないであろう。

一方何時の日会えるとも判らない家族を遠い海の彼方に残して捕虜となった諸君は、誠に気の毒に思う。私は心からこの無用の戦ができるだけ早く終わって、そして諸君が最愛の妻や両親兄弟姉妹と共に幸福な生活を取り戻すことを望んでやまない。それゆえこの無用の戦を止めるために主として米国国民に人道的見地から放送によって呼びかけたい。もし諸君がわれわれに協力してくれるなら諸君の安全を保証し、できるだけの待遇をしたい。しかし協力できない者は前に数歩出るように。そして私は右から順に一人ずつ指さして賛否を問うた。」(心理 209-210)

○池田徳眞

・「恒石少佐は、だいたい月に一回機密費のなかから五千円ずつを[駿河台分室総務部主任の]早坂君に渡した。早坂君は、それでパンやジャガイモなどの主食の闇買いに苦心するとともに、機密費をもらうたびに、牛肉を買って俘虜たちのためにパーティを開いた。その当時の五千円といえば、闇の物価が驚くほど高かったといっても、まだ価値は十分にあったから、これが早坂君が活動する闇買い資金になっていたのである。[中略] 恒石少佐は最初から「俘虜が放送に十分に協力するならば、どんなに優遇しても構わない」という方針であった.....」¹²²²

・「[ひとりの捕虜の片腕が化膿] それで藤村所長も心配され、今日の午後順天堂病院で手術できないか、という話になった。それで、私が参謀本部の恒石少佐に電話で許可を求めた。恒石少佐は「ほかに方法はありませんか」と問われ、「よいでしょう」と同意された。[中略] 翌朝、東京憲兵隊から、私に電話がかかって来た。憲兵「昨日、順天堂病院に俘虜を入院させたのはあなたですか」、私「はいそうです」、憲兵「なぜ、品川の陸軍病院に入れなかったのですか」、私「陸軍病院に入れるには二日かかります。医者は即日手術をしなければ、腕を切断することになり、生命の危険がある、と言ったからです」、憲兵「誰の許可をえて入院させたのですか」、私「参謀本部第八課の恒石参謀です」。憲兵もだいたい納得して「警備は誰がしていますか。大丈夫でしょうな」、私「大丈夫です。警備は参謀本部駿河台分室でしています」。この最後だけは嘘であった。」¹²²³

○浜本純一

¹²²² 『日の丸アワー』 p.77.

¹²²³ 同上. p.83-84.

「キャンプ内の日常生活は将校グループの合議制で統制し、事故のない限り完全な自治制を許した。一般捕虜と異なり、ここに収容された捕虜達はラジオ放送の原稿を作り、これを放送するという知的な仕事に従事するのだから「食って寝る」だけの環境では彼らの能力を枯渇させてしまうおそれがある。」¹²²⁴

○小林久子

「持てる国の彼等にとって、暖房も何も無い日本の冬は、さぞかしこたえた事だろう。それでも元の収容所と比べると〔駿河台分室〕天地の差で、元に戻される事を最も恐れていたという。」¹²²⁵

○二世職員を左遷

「彼〔宇野一麿〕は捕虜と机を並べて放送原稿の作製を指導し、NHKへの出向も池田氏に代わって担当した。有能の士であったが捕虜指導の面ではやや厳格に過ぎることもあり、融和に欠ける点なきにしもあらずであった。一九年後期であったか、彼は比島方面軍の宣伝班に転出し¹²²⁶、現地でゼロ・アワーとよく似た要領で「マニラローズ」を指導し、対敵宣伝に成果をあげたが……」（心理 208）

批判を黙殺

○浜本純一

「この〔43〕年の十二月二十四日クリスマス・イブは放送開始以来、捕虜にとっては初めての祝日である。私は恒石参謀と相談して捕虜達のためにささやかなクリスマス・パーティを計画した。このパーティ用にと参謀本部経理課にビールニダースの特配を申請したら、顔を出すたびに「工作用特配」を要求する私をみて、眼鏡の主計大尉は「日本の兵隊さんさえお目にかかれない貴重品を、捕虜様に差し上げるのですか」と皮肉な言葉を投げかけた。

ところで、こうした捕虜優遇策が回を重ねるにつれて、経理部から苦情が出るのは致し方ないとしても、肝心の足もと第八課の課内でも「恒石や濱本は捕虜を甘やかしすぎる」と、秘かにささやかれる蔭口が私の耳にも入るようになった。しかし、「駿河台」を預る私としては、『戦略兵器』として使うタレント捕虜に対して、ビールのニダースや煙草の百本、二百本を加配してやるぐらいは安いもんじゃないかという気があった。「声の爆弾」―捕虜放送が成功すれば、何個師団にも勝る戦力となるのだ。日本の軍人さえ空き腹を抱えて悪戦苦闘を続けているそのころ、私とて好き好んで貴重な品を捕虜のために費す気はさらさらあったわけではない。ただ、この仕事に携る以上、なんとしても成果を挙げたいという気持で一杯であった。」¹²²⁷

¹²²⁴ 『青雲白雲』 p.102-103.

¹²²⁵ 『猫のしっぽ』 p.100.

¹²²⁶ 「宇野は一九四四年十月二十四日にマニラ入りしたが、これはマッカーサー元帥がレイテへ上陸した四日後だった。フィリピンへやられたら生きては帰れないと宇野に警告する仲間もいた。」、『抑留まで』 p.167]

¹²²⁷ 『青雲白雲』 p.103.

○池田徳眞

「そこで池田は恒石少佐にこれら〔捕虜間の同性愛〕のうわさに付いて話したところ、軍人である彼の意見は徹底していて、「ここは道徳を教える学校ではありません。放送がうまくいきさえすれば本官は何が起きても構いません」と言った。」¹²²⁸

捕虜への風当り

○東条陸軍大臣の訓示

「極秘第五号 俘虜月報 昭和十七年七月五日 俘虜情報局

「第二訓示 五月三十日東条陸軍大臣善通寺師団視察ノ際同師団長ニ与ヘラレタル訓示中俘虜ニ関スル事項ノ抜粹左ノ如シ

「…俘虜ハ人道ニ反シナイ限り嚴重ニ取締リ苟モ誤レル人道主義ニ陥リ又ハ收容久シキニ亘ル結果情実ニ陥ルカ如キコトノナイ様注意ヲ要シマス 又我国現下ノ情勢ハ一人トシテ無為徒食スルモノアルヲ許サナイノデアリマスカラ、俘虜モ亦此ノ趣旨ニ鑑ミ、大ニ之ヲ活用セラルル様注意ヲ望ミマス」¹²²⁹

○善通寺捕虜收容所：俘虜情報局に反論

・「四 所言「優遇」ニ就キテ

「「スイス」公使館員ト俘虜トノ対談¹²³⁰記録中ノ「優遇」ナル文字ハ RECEIVED GOOD TREATMENT. WELL TREATED¹²³¹ノ訳語ニシテ原語ハ字面ノミニテ解訳スレバ種々ノ意味ニ解シ得ルナランモ俘虜待遇ノ実情ヨリ判断セバ主トシテ精神的ノ意味ト解ス WELL TREATED 等ノ字句ヲ「優遇」ト訳スルトキハ誤解ヲ招キ易キコト貴言ノ通ニシテ従来ニ於テモ邦字新聞等ニ対シテハ極力「優遇」シアラザルコトヲ強調シ来リタルモ対外効果ヲ主トスルトキハ必ズシモ然ラズ「スイス」公使館員トノ対談記録ニ於テモ対外効果ヲ要スルモノノ記録ナルコトヲ念頭ニ置キ斯カル字句ノ使用ヲ許容シタルモノニシテ右ハ新聞ハ勿論部外ニモ一切発表シアラザルモノナリ今回此ノ種記録ニ原因シテ俘虜ヲ過分ニ優遇シツツアルカノ如キ誤解ヲ俘虜情報局当事者ニ対シ生ゼシメタルハ甚ダ遺憾ナリ依ツテ自今当所ニ於テモ一切ノ文書ニ「優遇」ナル字句ノ使用ヲ禁ズルコトトセリ

一般風評ニ就テ

俘虜ガ優遇セラレアルガ如キ風評ノ中ニハ荒唐無稽一顧ノ価値ナキモノ多シト雖モ俘虜將校ガ優遇セラレアリトノ觀察ニ至ツテハ大イニ理由ナシトセズ即チ俘虜將校ニハ労役ヲ課セズ而モ日本將校ト同額ノ俸給ヲ支給シ且ツ当番ヲモ使用セシメアルコト之ナリ 彼等ガ將校トシテ特別待遇ヲ受クルハ国際法規上一応当然ナリトスルモ敵国大佐ナルガ故ニ我国大佐ノ俸給ヲ享ケシムルガ如キハ（強制貯蓄ヲ以テ之ニ依ル物資消

¹²²⁸ 『駿河台分室物語【本編】』 p.145.

¹²²⁹ 内海愛子・永井均編集・解説. 東京裁判資料：俘虜情報局関係文書. 現代史料出版, 1999, p.100~101.

¹²³⁰ 42年2月17日. [『善通寺俘虜收容所』ハンドブック』 p.89]

¹²³¹ 原文の英単語で明らかに誤記と思われる個所は訂正. 以下同じ.

費ヲ取締リ得ルハ勿論ナルモ) 我國民性ニ基ク俘虜觀ヲ以テシテハ到底理解シ能ハザル所ニシテ当收容所ノ如ク將校以下幹部ノ數兵ニ比シ甚ダ多キニ過グル場合ニ於テハ特ニ多分ニ人道主義的臭氣ノ漂フアリテ俘虜取扱ニ關スル法規ヲ知ラザル我國民及右翼思想者等ノ之ニ對シ慊焉タルベキハ蓋シ理ノ当然ナリ此ノ如キ風評ヲ一掃センガ為ニハ人道ニ反セザル限り國際公法其ノ他諸法規ヲ無視スルト共ニ最近官報ニ交布セラレタル俘虜給與規則ニ對シテモ一斧鉞ヲ加フルノ要ヲ痛感スルモノナリ若シ然ルコトナクシテ此等諸法規ヲ遵守シ或ハ其ノ精神ニ遵ヒ俘虜ヲ取扱ヒツツアル當俘虜收容所ノ現況ニ目ヲ掩ヒ察リニ誹謗憶測ヲ逞ウ [ス] ルガ如キ者アラバ斷ジテ其ノ言ヲ甘受シ得ザルナリ尚國內ニ於ケル需要ニ多少ナリトモ圧迫ヲ及ボサザランガ為ニハ一人ノ俘虜ト雖モ内地ニ留ムルコトナク悉ク之ヲ外地ニ收容替ヘスルヲ賢明トスベシ又俘虜ヲ取扱フニ敵愾心ヲ以テシ或ハ敵國ニ在ル日本俘虜取扱ニ隨應シテ我國ニ於テモ之ガ取扱ヲ高下スベシト為スガ如キ無節操且低級ナル議論ニ至ツテハ一顧ヲ要セザルモノト信ジアルモ現行諸法規ハ我國ノ國際的地位低キ遠キ過去ノ遺物ニシテ國際的主流ヲ顛倒シタル現況ニ適合セズトノ見解ハ大イニ理由アリ從ツテ當所ニ於テモ此等諸法規ノ解釈及適用ニ關シテハ深甚ノ考慮ヲ払ヒツツアリ

尚當收容所ノ改築工事一段落ノ機會ニ於テ俘虜生活ノ真相ヲ廣ク國內ニ認識セシムル目的ヲ以テ週報写真週報同盟「グラフ」等ヲ利用シテ照會^(マ)シ度キ企圖ヲ有スルモ其ノ細部ニ就テハ後日更メテ善通寺師團長ノ認可ヲ受ケ照會スル予定ナリ又外國人ノ俘虜面接ニ就テハ幾多ノ疑問アリ師團長經由陸軍省ニ質疑提出ノ筈ナリ」¹²³²

・「正遇」：「俘虜ニ關スル新聞記事ニ關シテハ從來其ノ都度原稿ノ提出ヲ要求シアルニ拘ラズ新聞記者ノ不誠實ニ起因シテ事實ニ相違スル記事公表セラレ當方ニ於テ迷惑ヲ感ジタルコトアリ依ツテ收容所並ニ俘虜ニ關スル記事ハ一切發表前ニ其ノ原稿ヲ提出シテ收容所係官ノ檢閲ヲ受ケタル後本社ニ發送スル如ク誓約セシムルト共ニ萬一誓約ヲ拒ムカ又ハ誓約ニ反シタル者ハ善通寺軍事記者團ヨリ除名スル如ク考慮シアリ國外ニ對スル影響ヲ考慮スルトキハ往々國內ニ對シ好マシカラザル印象ヲ与フルコトアルヲ以テ當收容所トシテハ國內外ヲ問ハズ特ニ秘密ヲ要スルモノノ外ハ正遇ノ事實ヲ直視セシメ敢テ作為ヲ為サザルヲ本旨トシ之以上ノ高等政策ハ俘虜情報局ノ職域ト解シアリ尚映画ノ檢閲ニ關シテハ當收容所ニ於テ實施シ難キ場合多シ」¹²³³

○「おかわいそうに」事件：國民の捕虜に対する同情を厳しく批判

・「それに、徳川 [義知] 氏の意見によると、今はそうした陳情をするには都合の悪い時だったのだ。その頃、善通寺收容所の捕虜に対して土地の女学生が「「おかわいそうに」と] 同情を示した事件が起きて、新聞紙上でそれが問題になっていたし.....」¹²³⁴

¹²³² 『善通寺俘虜收容所 情報綴』 B-70~73.

¹²³³ 同上. H-239.

¹²³⁴ 『おかわいそうに』 p.218~219.

・茶園義男「“おかわいそうに”事件の真相」¹²³⁵

- ① 朝日新聞記事を引用：打破せよ心中の“米國”：米俘虜に「お可哀想」とは何事ぞ
[大本营陸軍報道部員] 秋山中佐放送. 1942-12-05.
- ② 「おそろく各地の話題が、結集されて一つの形になったものが、ここに見る朝日報道記事であろう（茶園記）」

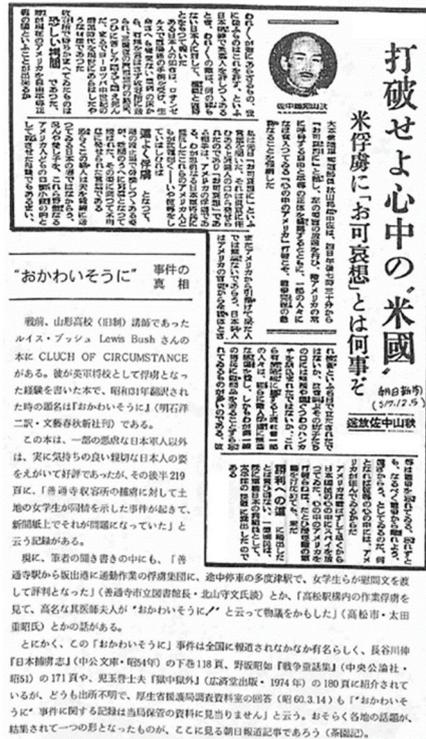


図 108 「おかわいそうに」事件
出典：『BC 級戦犯横浜裁判資料』 p.96



図 109 捕虜「正遇」の見出し
出典：朝日新聞. 1943-04-12

¹²³⁵ ○茶園義男 編・解説. BC 級戦犯横浜裁判資料. 不二出版, 1985, p.96.から抜粋.
○本書. p.504.図 108.

ほり 捕虜の訊問

「一、俘虜名簿

(一) ジョン・ジョセフ・フィッツジユロー

氏名¹²³⁶、階級、誕生日、住所、隊名、本国出発、恋人、隣人、友人、先生、学歴、
隊歴、家族、父母住所 (摘要) 性的関係

[中略]

二、[44年] 二月六日中第五三八号 (参本情報) ニ現ハレタル「ロバート・ハンソ
ン」中尉ノ想出。

二月六日二十時ノ中第五三八号ハ日本戦闘機二十五機撃墜セリト称スル「ロバー
ト・ハンソン」中尉ノ行方不明ニ関シ記載シアルガ之ト約一ヶ月間生活ヲ共ニセル
俘虜「ジョン・ジョセフ・フィッツジャールド」少尉 (John Joseph Fitzgerald) ニュ
ーヨーク州ニューヨーク市バイミリアイ街五四 54 Vermilyea Ave, New York City ニ
就キ其ノ想出ヲ訊問収録シ宣伝ノ餌トセントスルモノナリ

[中略]

六、陣中ニ於ケル東京「ラジオ」ノ聴取状況

(イ) 二〇時 - 二一時ノ間ニ於ケル「ガ」島ニテ連日聴取セリ、聴取状況ハ極メ
テ良好ニシテ音楽ハ米国ニテ最近流行シアルモノヲ演奏シアル為全員連日「東京」
ラジオヲ楽シミアリ。自分 (ブエツセンジャ少尉) ノ聴キタル音楽ハ記憶ニ残ル
モノ「シユー・シユーベビー」夜ハ寝シ等ノモノニシテ如何ニシテ「シユー・シ
ユー・ベビー」ノ如キ新シキモノヲ入取スルヤ不思議ナリト語り会ヘタリ¹²³⁷ (放送
音楽ハ真実ナルヤ否ヤ中央ニテ研究ノ上通報依頼ス)

[中略]

(ロ) 「ラジオ・タイランド」ト称シ俘虜放送セルヲ聴取セリト強ク肯定シアリ或ハ
「バンドン」¹²³⁸ナラズヤト推察シアルモ当方放送実施ニ関シ不明ナルタメ参考マデ」

1239

¹²³⁶ 「氏名」以下「性的関係」まで項目のみ。

¹²³⁷ 本書 481,脚注.1186.

¹²³⁸ 「とくにバンドンの一〇キロ短波は一八年一月以降対濠州 (インド、北米) 放送に有
効に利用された。」(心理 161)

¹²³⁹ NHK 放送文化研究所蔵。「博資 270-15206」

ほり 捕虜の増加

「わが南方作戦の進捗に伴い、連合軍捕虜は一七年初夏頃約十数万人¹²⁴⁰に達し、満、支、内地および占領地域全域に分散して〔下士官・兵は〕各種労役に服していた。」(心理 167)

主戦場	戦闘終了	捕虜概数 (千人) ¹²⁴¹	主な国籍 (現地人以外)
香 港	41-12-25	11	英国、英領インド、カナダ
マレー・シンガポール	42-02-15	131	英国、英領インド、豪州
インドネシア (ジャワ)	03-09	83	オランダ、英国、豪州
フィリピン	06-09	84	米国
合 計		309	

図 110 捕虜概数 (開戦後半年間)

出典：“香港の戦い”，“マレー作戦”，“蘭印作戦”，“フィリピンの戦い (1941-1942 年)”
Wikipedia. (参照 2022-11-06)

¹²⁴⁰ ○アジア人を除く白人捕虜の概数と推測。

○本書「2.2.2 善通寺捕虜収容所開設／開設前後の動き」

¹²⁴¹ アジア人を含む。

まき 牧 秀 司

○池田徳眞

・「この〔外務省の情報部ラジオ〕室の第二の仕事は、樺山君、牧秀司君、私の三人が、敵味方のニュースを片っぱしから読んで分析し解釈して議論することだったが、それに毎日のように来て加わるのが、『ジャパン・タイムズ』の村山有君と通信社にいた小平利勝君とであった。この二人は、開戦前このラジオ室ができた時に、苦勞して最初の傍受の仕事を開拓した人である。村山君は二世だし、小平君は一歳の時にサンフランシスコに渡ったのだそうだから、二人とも英語と日本語とが甲乙ないほど達者であった。その時、このラジオ室の五人男は、みんな三五歳から四〇歳までの働き盛りであった。」¹²⁴²

・「そしてこの日から選考のための俘虜との面接をはじめた。私は〔大森の東京捕虜〕収容所には単独でも行ったのだが、ラジオ室の牧秀司君が三、四回いっしょに行ってくれた。彼はアメリカの大学で勉強していたから、アメリカ人には馴れていた。」¹²⁴³

・「...二十日にぶらりと.....分室に行ってみると、恒石少佐の伝言として藤村所長から「英文放送事前監査室は、三月一日から開設されるのだからまだ八日ある。それまでの間に山口源等大尉（中野学校出身）と外務省ラジオ室の牧秀司君の三人で九州の俘虜収容所の視察に行ってくれ。そして山口大尉は各収容所で、新番組ポストマンズ・コールについて連絡をするが、あなたと牧君には特に任務はない」とのことであった。」¹²⁴⁴

○週刊新潮

「“牧マシーン”と呼ばれる情報機関があった。昭和二十六年、サンフランシスコ講和条約が締結される前後の話である。敗戦直後、在外公館を持たず、GHQ（連合軍総司令部）からも情報が取り難い時代に、時の宰相、吉田茂氏が、とくに役人ではないアウトサイダーを使って情報を集めた。その一人が“牧マシーン”―当時きってのアメリカ通といわれた^{まきひでし}牧秀司氏のことである。二月一日、牧氏は肝臓ガンのために都立荏原病院で亡くなった。七十六歳。告別式にはトヨタ自動車の豊田章一郎社長、住友銀行伊部恭之助元会長ら大企業トップが参列した。鹿児島県の西海岸にある^{よしとし}吉利村で生れた。中学を出るとアメリカ留学、南カリフォルニア大学で修士課程をパスした。同郷人の二階堂進代議士も、一緒に南カリフォルニア大学に留学していた。二階堂進氏が語る。「当時向うでは対日感情が悪化していて、“ボイコット・ジャパン”という立て看板があちこちにあった。そんな中で、牧さんと私ともう一人の日本人学生の三人で、

¹²⁴² 『日の丸アワー』 p.13.

¹²⁴³ 同上. p.23.

¹²⁴⁴ 同. p.123／本書 p.164.

全米四十六州を車で旅して日本を正當に理解してもらおうよう話をして回った。牧さんは体当たりするタイプで、アメリカ人に対して堂々としゃべりまくっていた」帰国してまもなく、外務省の事務嘱託になった。同じ吉利村出身の野村直邦海軍中将が保証人になったという。牧氏の仕事は情報収集だった。太平洋戦争が始まると大本營に向向、対米謀略放送のスタッフの一員となった。アメリカ人捕虜を使って、アメリカ国民向けに宣伝放送をするのである。当時、大本營でこの放送を指揮した陸軍部宣伝主任参謀、恒石重嗣氏（七九）が振り返る。

「牧さんは若くて優秀な人でした。直情径行型というか、議論になると興奮して意見をいう。いかにも薩摩人らしいと思いました。もっぱら企画とか放送の内容についてアドバイスしてもらいました」アメリカの大学で青春時代を過し、一転して日本で対米戦略の一役を担うという運命は、彼に時に劇的な体験を与えた。マニラの捕虜収容所を訪れた時、その中に恩師、クロード・バス教授の姿を見出して驚き悲しみ、さらに、終戦後、今度はマッカーサー元帥の最高顧問として日本に上陸したバス教授と再会して感動する。[中略] その能力を活用したのが吉田茂氏だった。牧氏は米上院軍事委のメンバーやサンフランシスコ講和条約を推進したジョン・ダレス氏らから直接情報を得ては吉田茂首相にレポートした。[中略] 昭和二十七年に在アメリカ大使館が復活すると、牧さんはそこに情報部嘱託という肩書でデスクを持った。当時大使館にいた竹内晴海氏（後にイタリア大使）によれば、「牧さんはとくにアメリカの議会人と気さくに会った。気おくれせずに、議員の秘書を通してすぐに友人になる。やり手でした。情報を取るのが楽しくてたまらないという感じでした」“アメリカン・ロビイスト”として、彼はニクソン、フォード、カーター各大統領の就任式に呼ばれている。日本が買った濃縮ウランの課税問題でフォード大統領と直談判して税額を大幅に減じ、解決したという武勇伝もある。[中略] 日米の橋渡し役として、多くの財界人と親交を持った。酒が強く、スコッチのカティーン・サークを愛好した。酒席では談論風発、「天下国家を論じる“書生っぽさ”が最後まであった。財を為すなんて考えなかった。彼の家はいまだに借家です」（知人）」¹²⁴⁵

¹²⁴⁵ 墓碑銘：吉田茂首相の“黒子”牧秀司氏. 週刊新潮. 1989, 34(7)(1697), p.111. (2月16日号) (※)

(※) 「『週刊新潮 34(7)(1697);1989・2・16』ですが、雑誌「週刊新潮」の34巻7号、通号1697、出版年は1989年2月16日という意味です。34巻の巻は年単位を示します。週刊新潮は1956(昭和31)年に創刊されています。創刊年の1956年は1巻。翌年の1957年は2巻…となり、1989年は34巻。つまり創刊から34年目の巻数ということになります。7号はその年（この場合は1989年）に出版された7冊目、という意味です。1697は通号といたしまして、創刊号からの通し番号です。」。[浜松市立中央図書館回答. 2023-06-01]

○「御依頼のありました、「牧秀司氏の生年」について、次のとおり回答します。

■質問日 : 2023.06.01

■質問内容

こんにちは。牧秀司という方の生年が分かりましたらご教示願います。1989年2月16日号の週刊新潮「墓碑銘」によりますと、鹿児島県の西海岸にある吉利村で生れ、二階堂進氏とともに南カリフォルニア大学で学んだ米国通。戦後吉田茂元首相の黒子として活躍し、1989年2月1日76歳で亡くなったそうです。

■回答日 : 2023.06.10

■回答内容

次の資料が見つかりましたので、紹介します。

【資料1】『鹿児島県人名録 1974』（南日本新聞社 1974年）

p.436-437にある「牧秀司（まきひでし）」の項目のうち、生年の欄に「明45・2・11」とあります。

ただし、出身地が「日置郡日吉町」となっており、お示しのあった『現代物故者事典1988?1990』と異なります。しかしながら、学歴の欄に「米国南カリフォルニア大学大学院国際関係学科卒」、職歴の欄に「外交官（外務省）」、現職の欄に「パシフィックリサーチセンター代表取締役」とあることから、お探しの人物であると推察されます。

【資料2】『選挙の記録 昭和33年』（鹿児島県選挙管理委員会編 鹿児島県選挙管理委員会 1958年）

p.80-110に「8選挙公報」の項目があります。このうち、p.82-84に牧秀司氏が掲載されており、「明治45年2月11日生」とあります。その他、「日置郡日吉町吉利出身」、「米国南加大学大学院卒業」と記載されています。

さらに調査を続けたところ、当館の所蔵資料ではありませんが、Webサイト【国立国会図書館デジタルコレクション】で、次の資料を見つけることができました。

【資料3】『衆議院議員総選挙公報集録 昭和33年5月22日執行』

【資料2】と同様の内容が確認できます。337コマに「昭和33年5月22日執行の鹿児島県第一区衆議院議員選挙選挙公報」があり、牧秀司氏の欄に「明治四十五年二月十一日生」とあります。また、経歴には「日置郡日吉町吉利出身」「米国南加大学大学院卒」とあります。[以下略]¹²⁴⁶

¹²⁴⁶ 鹿児島県立図書館回答. 2023-06-10.

まち 町田敬二

「参謀本部第八課においても藤原（一六年九月転出）、桑原両参謀以下の異常なる努力によって、対南方宣伝準備は行なわれたのであるが、宣伝ビラ（既述）を除き、宣伝資料の準備まではなかなか手が廻り兼ねた。ことに宣伝班の編成のためにはまず統帥部および陸軍省内の関係課と折衝して、その理解を得なければならぬ。何といても作戦第一主義であるので、宣伝のために要員を確保することにはかなり抵抗があり、関係者の啓蒙から始めなければ事は進まなかったのである。

しかしながらともかく作戦開始までに約一五〇名内外の文化人と、戦闘員二〇〇名余からなる宣伝班をマレー（第二十五軍）、ジャワ（第十六軍）、フィリピン（第十四軍）、ビルマ（第十五軍）にそれぞれ一隊ずつ配属する運びとなり、その編成・装備などの経費、一隊約三〇〇万円が認められた。かくして征途に上った宣伝班は、各戦線においてそれぞれ活発な活動をなし、大なる成果を収めることができたが、なかんずく華々しい文化活動を行なったのは、ジャワ攻略に当たった第十六軍の宣伝班であった。

同宣伝班が見事な文化の華を開き得たのは、軍司令官今村均中将（後大将）の文化活動に対する理解愛情と、高島辰彦高級参謀の支援があったにせよ、何といても隊長に陸軍きっての文化軍人と言われた町田敬二中佐（後大佐）が充当せられ、大物の文化人の先生達の手綱捌きよろしく、その全智全能を十分に発揮せしめたことによるものと思われる。

私は昭和一二年から約一年足らずの短期ではあったが、北満の孫呉附近の警備に当たっていた独立守備隊に勤務していたとき、同将校団の先輩として同大佐のご指導を受けた。」（心理 263-264）

まん 満州事変と対外宣伝

「……一九三一年満州事変の結果、中国東北部に満州国の建設をみたのであるが、中国の国際場裡における巧妙なる宣伝工作と、日本勢力の拡張を抑圧せんとする米、英等多数の国々の代表の反対を受け、わが国は〔33年〕国際連盟から脱退し、独り世界に孤立する立場となった。元来日本の大陸政策と米国の極東政策とは本質的に相容れないものであった。」（心理 22）

宣伝戦敗北

○「海外放送は、日本放送協会の放送開始十周年と、受信者二〇〇万突破の記念事業として〔35年6月1日に〕開始された。直接の誘因としては、昭和九年六月以来、満州、台湾へ短波により国内番組が送出され、これが世界各地で受信され、在外同胞から海外放送を要望する声が高まったことである。さらに国際交歓放送の成果があった。それ以上に「国際連盟脱退以後国際的孤立の状態にあったわが国として、対外広報強化のため、海外放送の実施が各方面から強く要請されていた。」（『日本放送史』上四〇〇頁）対外宣伝強化論は、満州事変において日本側が宣伝戦で中国側に敗れたこと¹²⁴⁷から擡頭してくる。東京日々新聞の円地与四松は、日本の国際連盟脱退に際し、「我国の正当なる立場と妥当なる政策を全世界に理解せしめるため」「ラヂオの世界的進出を促進する必要」を説く。¹²⁴⁸

○「重慶放送は、中波のほかに遠距離用の短波で毎日五十七時間余にわたって、十四ヵ国語で放送し、日本の海外放送に劣らぬ強力な宣伝放送を行なっていた。〔中略〕重慶の反日放送、外国向け放送は、放送による宣伝効果を早くから認識し、宋美齡¹²⁴⁹女史の強力な推進によって、日本を圧倒して世界宣伝に大きい働きをし、日本が短波放送ではまったく後れをとったのである。中国の積極性に対して「聴取料の入ってこない」短波放送の重要性になかなか気づかなかった日本政府やNHKは、中国側に緒戦において負けていたことを率直に認めなければならない。¹²⁵⁰

対外放送強化

○「満州事変を契機として、日本放送協会の内外で、対外放送に対する関心が高まった。日本放送協会は1932年6月1日、日曜祭日を除く午後6時25分から5分間の、英語によるニュース放送「カレント・トピックス」を開始した。耳からの英語を必要とした一般の要望もあったが、企画書には、「現下支那事變に就て我が國策に於ても支那方面に英語にて聴取せしむるは宣傳效果上にも必要」という認識があり、外務

¹²⁴⁷ 資料「デー・ゴルマン」

¹²⁴⁸ 北山節郎、「海外放送小史（一）」、『NHK 戦時海外放送』 p.114.

¹²⁴⁹ 資料「宋美齡」

¹²⁵⁰ 『もうひとつの太平洋戦争』 p.84-86.

省も賛意を表した [『關東支部理事會記録』32年5月27日]。放送者は文部省英語教育顧問として日本に招かれたロンドン大学のハロルド・パーマー、「原稿作成主任」が英字新聞のアメリカ人記者ニュートン・エドガース、翻訳者として選ばれたのが溝口歌子¹²⁵¹である。「カレント・トピックス」を企画した頼母木真六は、「日本の正しき輿論と立場とを英語によって放送」することは「急務中の急務」と論じた [『調査時報』32年7月1日号、14-15頁]。

この時期、逓信省出身の日本放送協会調査課長の尾山和安が、「満洲問題其他に關する歐米人の認識不足に対する正誤的對策からも」、従来の國際中継放送を強化するとともに、「報道、慰安、督励」のために、在外邦人に対する放送を提唱した [「對外放送とその將來」『調査時報』32年5月15日号]。尾山は、イギリスが植民地に対して、毎日定期的な放送を行なう方針だとも述べた。

陸軍、外務両省の関係者の間では、對外、對内宣伝¹²⁵²の基本方針を協議決定して、各省が共同動作をとるべしとの意見が出て、5月頃、時局同志会が組織された。「満州事變が勃発して世界の批判は日本に集中し [……] わが方の主張に正当性というようなことを内外に宣伝して正しい認識を与えるということの必要性が痛感され」たためである [小林正雄『戦前の情報機構要覽』出版年不明]。8月25日、内田康哉外相は、議会で「国を焦土にしても」「満州国」を承認するという決意を表明した。

27日、陸軍は時局同志会に「對内外宣伝委員会案」を提議した。この陸軍案に若干の修正を加え、9月10日には、外務次官を長とし、外務、陸軍、海軍、文部、内務、逓信各省から成る「申し合わせ」による情報委員会が設立された。これが後に内閣情報委員会、内閣情報部、情報局となる。

對外放送に強い関心を持っていたのが外務省である。32年11月21日、内田康哉外務大臣は、各在外公館に対し、宣伝、情報提供などの目的を問わず、任国において對外「ブロードキャスティング」を主とするラジオ放送局があるかどうか、詳しく報告するよう訓令を出した [外務省外交史料館F-2-3-2-4「各国「ラヂオ」放送局調査關係一件」]。¹²⁵³

¹²⁵¹ 「1907-1980 昭和時代の科学情報処理技術者。明治40年12月13日生まれ。乙卯(いつう)研究所などをへて、昭和26年から日本薬学会の学会誌の編集にあたる。36年癌化学療法情報センター(のちの癌研究所情報センター)室長。化学や医学の論文の英訳につとめる。昭和55年1月6日スリランカで死去。72歳。東京出身。東京女子薬専卒。著作に「英語の化学論文」など。 [“溝口歌子”. コトバンク. (参照 2023-03-18)]

¹²⁵² 對内宣伝の例：36年の二・二六事件で戒嚴司令部は「兵に告ぐ」のメッセージをラジオや「放送拡声器」、爆撃機から撒布するビラにより反乱部隊に伝え効果を上げた。 [宮本吉夫. 戦時下の新聞・放送. 人間の科学社, 1984, p.27-35. から抜粋]

¹²⁵³ 『外務省と對外放送』 p.44. ([] とその内容は原文のまま)

みか 三笠宮崇仁親王

○Wikipedia

「(みかさのみや たかひとしんのう、1915年〈大正4年〉12月2日 - 2016年〈平成28年〉10月27日)は、日本の皇族、陸軍軍人、歴史学者(古代オリエント史)。三笠宮家初代当主。御称号は澄宮(すみのみや)、お印は若杉(わかすぎ)。身位は親王。敬称は殿下。勲等は大勲位。最終階級は陸軍少佐。[中略] 学習院初等科・中等科を経て、1936年(昭和11年)に陸軍士官学校(第48期、兵科:騎兵)を卒業。陸士在校中は、辻政信が自ら願い出て教育を担当した。辻とはのちに同じ支那派遣軍で勤務している。在校中の1935年(昭和10年)の成年式に伴い、「三笠宮」(みかさのみや)の宮号を兄帝より賜り、同時に大勲位に叙せられる。陸軍騎兵学校を経て、士官候補生時代に指定された原隊たる騎兵第15連隊で小隊長、続いて中隊長を務めのちに陸軍大学校(第55期)を卒業する。[中略] 1941年(昭和16年)12月8日の太平洋戦争(大東亜戦争)開戦後、陸軍大尉時代の1943年(昭和18年)1月から翌1944年(昭和19年)1月まで、コードネーム「若杉」(姓は印にちなんで作られた)として、南京市の支那派遣軍総司令部に勤務。三笠宮は「日本軍は中華民国との戦争が長引き戦闘が泥沼状態になっており、軍紀が乱れている者が一部いる事を深く反省すべきである」と畑俊六総司令官に言い、対中政策のブレーキ役となった。総司令部は、着任に際して部隊内に通達を出し、勤務中の接遇及び食堂での食事の際の礼遇について周知している。若杉の正体は陸軍省上層部に秘匿されていたため、部内にはかなり後期まで若杉が三笠宮であることを知らない者も多かった。[中略] その後、大本営参謀に転出。[中略] 1944年(昭和19年)9月、願い出て陸軍機甲本部付に異動になる。」¹²⁵⁴

○参謀本部の所属

「レファコレ(人物レファレンス事典 plus)」で「三笠宮崇仁」と検索したところ、『新訂増補 人物レファレンス事典 昭和(戦後)・平成編 II(2003-2013)』の記事がヒットしました。

「掲載資料」の中に、『日本陸海軍総合事典 第2版』が挙げられていました。

『日本陸海軍総合事典 第2版』秦郁彦／編(392.1/ハタ/)

P151「三笠宮崇仁親王(48)〔皇族〕大4・12・2?」

経歴に「19・1 大本営参謀(2部英米課)」という記載があります。」¹²⁵⁵

¹²⁵⁴ “三笠宮崇仁親王”. (参照 2023-03-29)

¹²⁵⁵ 静岡県立図書館回答. 2023-03-29

みや 宮本吉夫

○国策の政治宣伝放送を奨励

「情報局の設立以降も各地の通信局による検閲は継続されたが、その方向性に関しては、従来のように提出された原稿が放送禁止事項に該当するかどうかを確認するだけでなく、より積極的な指導を行うべきとする考え方が、監督当局の内部に定着していった。そうした動きを主導したのが、情報局第二部第三課長（第三課は放送担当）に就いた宮本吉夫だった。[中略] このように宮本は、政治論議禁止の規定の抜け道を探してでも、国策の宣伝を進めるべきと主張していた。日本放送協会は、逡信省の方針に従って政治上の議論が放送されることを回避してきたが、宮本はそうしたやり方は「生ぬるい」と評していた。こうした考え方は宮本自身の著書によっても示されている。[中略] 国家が「自由国家」から「国防国家¹²⁵⁶」へと変貌する中、政治論議に関する放送は、国策に沿ったものである限りは、監督当局によって容認されるようになっていった。」¹²⁵⁷

¹²⁵⁶ 「第二次近衛内閣は、組閣直後の1940（昭和15）年8月1日の「基本国策要綱」において、「国防国家体制」の確立を目標として国防、外交、内政の各分野における「新体制」の樹立を試み、その1つに国民経済の確立（「大東亜共同経済圏」確立、一元的統制機構整備、財政金融統制強化、貿易政策刷新、食糧自給方策、重要産業発展、科学振興、交通施設整備、国土開発計画）、農業の安定発展、国民生活水準の確保等を強調した。この「経済新体制確立要綱」は、これら全般的な新体制確立の諸要綱のうち、経済面での中心をなすものであり、1940（昭和15）年12月7日に至ってようやく閣議決定をみた。公益優先、職分奉公、生産増強、指導者原理、官民協力を基調として、企業体制の強化と経済団体の組織化を規定した。とくに論争となったのが、公益優先の下に企業経営の内容にまで官僚による統制を及ぼそうとした点である。この問題をめぐり、同内閣の小林一三商相は企画院と対立して辞職したが、経済新体制確立要綱は、生産共同体的な経済統制団体構想を取り下げて、指導者原理を導入しながらも民間の自主性を尊重したかたちで、経済団体の新体制を方向づけた。[“経済新体制確立要綱”アジ歴グロッサリー.（参照 2023-05-09）]
¹²⁵⁷ 村上聖一. 戦前・戦時期日本の放送規制：検閲・番組指導・組織統制. NHK 放送文化研究所年報. 2020, 第64集, p.283-284.

○日本の放送を自賛

「今度の戦争になつてからも米国と英国は前大戦と同じやうに、いろいろな方法を以て卑劣極まる宣傳をやつてゐるが、前の大戦になかつた無線通信の出現によつて全く趣が違つて來た、今度の戦争で對外宣傳戦の有力な武器は、無線通信、特に無線放送である、無線通信は海底電線と違つて世界至る處に、相手が同盟國であらうと、中立國だらうと、敵國たるを問はず、全世界に到達するのである、特に無線電話による放送の發達は全世界で誰も受信出来るやうな状態にさせた、我か日本から發せられる電波は英米及び盟邦獨伊はもとより、濠州、南米、スカンジナビア半島にも及ぶものであつて、特に性能のよい受信機を持つてゐるアメリカの一般民衆は熱心に我國の無線放送を聞いてゐる状態である、こゝにおいて前大戦では優越を誇つた米英も今度の戦争では最早やその優越感を誇り得なくなつてしまつた、今度の戦争における宣傳戦には正しい者、強い者が勝つのであつて、前の戦争におけるやうな米英的卑劣なるデマ宣傳は最早や何の役にも立たなくなつてしまつた、この無線通信による對外宣傳は電信による放送と電話による放送の二つになつてゐるが、電話による對外放送即ち海外放送は各國の言葉を用ひて直接各國民に呼びかけるものであるから、特にその威力が大きい、これは短波無線によるものであつて、ほとんど全世界に到達する力を持つてゐるものである、現在世界の列強、イギリス、ドイツ、アメリカ等ではこれに非常な力をそゝいでゐる、我國でもまた今日あるを期して本邦の技術による独自の對外放送設備を擴充して來たために、今大東亞戦争に際しては盟邦獨伊と提携して敵國米英に即時完全なる宣傳戦態勢を確立した、敵國米英蘭は前大戦におけるデマ宣傳の成功を忘れず、大東亞戦争が始まつてからも□ゝな各□の方法で虚偽の宣傳を續けてゐる、例を挙げれば、ハワイ海戦における被害の隱蔽、ありもしない日本艦沈没のデマ宣傳、マニラの無防備都市であるといふ虚偽宣傳、それから日獨伊を離間する政策的デマ、ポルトガル領のチモール島への皇軍進駐の捏造等々のデマ放送をやつたが、これに對して帝國は開戦以來、帝國の崇高なる戦争目的　米英兩國の世界制覇の野望を世界に明らかにして、今次戦争の責任は全く米英側にあることを全世界に闡明した、しかも緒戦における陸海軍の赫々たる戦果を迅速かつ正確に世界に報道し、皇軍の精強無比にして、また國民の士氣大いに揚れる状況を傳へて來た、この結果、世界の耳目は日本の眞意を理解して來た、それと同時に日本の陸海軍の精強無比なる事實に驚いてゐる有様であつて、敵側のデマ宣傳は逸早くその假面を剥がれてしまつた」¹²⁵⁸

¹²⁵⁸ ○わが正確な放送 米英のデマを粉碎す. 報知新聞. 1942-02-03. [p.516.図 111] …スポーツ紙のプロレス記事調見出し.

○なお 42-02-02 からラジオ・トウキョウによる捕虜の声の米国向け放送が開始された。
[本書「2.2.3 情報局の捕虜利用／「捕虜の声」]

○更迭

「昭和十七年七月
情報局第二部第三課

第三課長更迭

六月二十三日附 第二部第一課長¹²⁵⁹ヲ命ス 情報局情報官 宮本吉夫
第二部第三課長 同 水谷史郎¹²⁶⁰

○堀江乙雄

「ミッドウェー海戦直後の一九四二（昭和一七）年六月二三日、情報局人事異動により、放送担当の宮本吉夫第二部第三課長は、新聞・通信担当の第二部第一課長となった。後任は水谷史郎である。〔中略〕

新聞担当課長となっても、またそれだからこそ宮本は情報局のマスコミ統制において、放送をもあわせて、強大な実務者としての立場にあったといつてよい。戦後、宮本は逓信省電波局長を最後に退官し、一九五七年から七一年末まで、自由民主党事務局長をつとめた。

情報局の人事異動と時を同じくして、日本放送協会国際部から、情報局嘱託・海軍報道班員として送りこまれたのが、後に東海大学教授となる堀江乙雄であった。堀江は、毎朝、情報局二階の会議室で行なわれる情報会議を「末席にて傍聴」した。出席者は奥村〔喜和男〕情報局次長、宮本吉夫新聞（担当）、水谷史郎放送（担当）課長、陸海軍報道部長などであった。堀江によれば情報会議の様子は次のとおりであった。

「外部から招かれる（というよりは、当時絶大な権力を持っていた情報局からの呼び出し命令とでも云った方がよろしいでしょうか）一応形式は招聘の各界識者との意見交換、戦時情報対策が検討された。

嘱託の各新聞社、放送局（当時はNHKのみ）側は、文字通り末席にてその会議内容を傍聴、そのあと新聞課長、放送課長から、夫れ夫れ、その日の報道指針を与えられた」

さらに堀江によれば、「水谷氏というのは、新聞課長の宮本氏に比べると遙かに人情的な人柄」であったという。情報会議で、アメリカのハル國務長官に対して「日本から放送でアメリカ攻撃の電波戦を為す可きだという話が出た」ことから、水谷課長に執筆を命ぜられた堀江は、恩師の小泉信三慶応大学塾長に相談した。「真っ向からの攻撃文なんぞより寧ろ大国アメリカに対するひやかしの文章の方が良くはないか」という小泉のアドバイスを受けて、即日執筆し、翌朝「英語に翻訳放送された」こともあったという。「毎朝の、実に下らない会議内容……特に某課長の毎回の下らない発言に義憤を覚えて止まなかったことは、未だに忘れないでおります」と堀江は回想している（以上の引用文は、一九八六年四月二日と六月九日付の堀江乙雄から筆者宛の私信による。）¹²⁶¹

¹²⁵⁹ 新聞指導.

¹²⁶⁰ NHK 放送文化研究所蔵.「大東亜戦争放送しるべ」第十四輯. p.12.から抜粋.

¹²⁶¹ 『ラジオ・トウキョウII』p.168-169.

もく 目視飛行

○「…目が覚めると、飛行正面の遙か水平線上に低く深紅に輝く太陽が沈もうとしている。そして東に飛んでいるべきはずの乗機が、落日に向かって飛んでいるのである。

これはおかしいと直感したので、床を這って操縦席の後ろに行き「今は西に飛んでいるのか」と聞くと、操縦士が「そうです。島一つ見えないから、長時間雲中の模索飛行中に比島を横断して太平洋に出ているのではないかと判断して反転したのです」という。

私は全くのお客さんで、マニラに送り届けてもらうまでは何の責任も感ずることなく、あなた任せでいたので、目覚めてぶつかった突然の現象に戸惑った。機の現在位置を推定する由もないし、ただ西に向かって飛んでいることだけが事実であった。

「燃料はどれくらいあるか」と聞くと、「あまり残っていないが三、四十分は飛べると思います」と答える。これは大変なことになったと思った。当時の飛行機だから、通信手段がなくどことも連絡できない。海中に墜落したら、機の残骸でも発見されない限り行方不明である。人前で戦死して行くのと気持ちが違う。

このまま飛び続けるか、反転するかを決心問題にぶつかった。死んだら任務の達成はできない。個人的な問題としても三人の生死がかかっている。状況不明の中で、生きるための決断を迫られているのだ。また、指揮関係のない者が反転しろと言っても、ベテラン乗員が素直に聞き入れてくれるかどうかもわからない。私は迷った。

遂に意を決して、命令とも相談ともつかないような次の指示をした。「反転して真直ぐ東へ飛ぼう。もし海岸が見つかったら渚に沿って飛び、島であったら不時着しよう。島でなかったならば、燃料のある限り海岸を見失わずに飛んで、適当なところに着陸しよう。早くしないと燃料の問題がある」と。

私の話が終わらないうちに乗機は反転し、沈みかけた太陽の残照を背にしていた。
[中略] マニラ市は灯火管制中のようで、漏れ灯が散見できる程度であったが、すぐわかった。わが着陸要求信号に応じて滑走路の照明が点灯され、無事に着陸した。のどがカラカラに焼けついているのに初めて気がついた…」¹²⁶²

¹²⁶² 碓井準三.“苦難の飛行、命拾いの判断”『回想録：五十年の歩み』p.150-151.

やま 山下使節団

○「陸軍遣独視察団

支那駐屯混成旅団長時代の1937年（昭和12年）11月1日には陸軍中將に進級していた山下〔奉文〕は、1939年（昭和14年）9月23日、第4師団長に親補された。山下が第4師団長に親補されたのは、前任者の沢田茂、陸軍次官を務めていた山脇正隆の尽力による。沢田と山脇は、いずれも山下と広島陸軍地方幼年学校・陸士の同期生であった。

1940年（昭和15年）7月22日には、参謀次長を務めていた沢田茂の尽力により中央に復帰し、陸軍航空部隊の要職である陸軍航空総監兼陸軍航空本部長に親補された。また、1941年（昭和16年）¹²⁶³1月8日から4ヶ月間、同盟国ナチスドイツへの視察団（陸軍遣独視察団）の団長として訪独。山下はドイツ側からきわめて鄭重な歓迎を受け、到着早々にアドルフ・ヒトラー総統と面談している。その席でヒトラーは山下に「どんな秘密でも諸君らには公開しよう」と約束するほどの歓待ぶりであった。山下はレーダーの技術が欲しいと考えており、ドイツ国防軍最高司令部に幾度となく技術を見せてほしいと要請したが、ドイツ側にとってレーダーは最重要機密であり、山下が要請するたびに話を逸らされてヒトラーの約束通りには公開されなかった。しかし、山下らは諦めることなく、随行していた日本陸軍のレーダー開発指揮者である佐竹金次中佐によってドイツのレーダー技術の一部を持ち帰ることができて、超短波警戒機乙の開発に繋げている。」¹²⁶⁴

資料

○「昭和十五年八月 山下視察団報告 I、II」¹²⁶⁵

○防衛研究所回答（「山下使節団に関する国内または海外の研究資料について」）

「1. 当館所蔵史料

山下視察団に関する史料は、「アジア歴史資料センター」に掲載されている史料以外に、「山下使節団関係資料」、「山下使節団の航空部隊用法思想」／「航空用法、編成の発達記録」、「山下使節団員と考え方にズレを生じた原因」／「独国航空工業の調査導入」などがあります。当館に来館のうえ、調査をお願いいたします。

2. 山下使節団に関する国内または国外の研究資料

「戦史研究年報 第3号（2000年3月）」に、横山久幸「陸海軍の遣独視察団に見る技術交流の実態-日本における初期レーダー開発との関係において-」が収録されています。それ以外については知見もなく、お答えすることができません。ご了承ください。」¹²⁶⁶

¹²⁶³ 報告書標題が「昭和十五年八月」であり、正しくは1940年（昭和15年）と思われる。

¹²⁶⁴ “山下奉文”. Wikipedia. (参照 2023-05-09)

¹²⁶⁵ アジア歴史資料センター. Ref. C15120144900 ほか.

¹²⁶⁶ 防衛研究所戦史研究センター史料閲覧室相談係回答.2022-07-04.

やま 大和魂

○Wikipedia

「(やまとだましい) は、外国と比して日本流であると考えられる精神や知恵・才覚などを指す用語・概念。大和心。和魂。儒教や仏教などが入ってくる以前からの、日本人の本来のものの考え方や見方を支えている精神である。儒学や老荘思想に基づく「漢才(からぎえ)」に対比して使われ、江戸後期からは日本民族特有の「正直で自由な心」の意味にもなった。[中略]

江戸時代になると、中期以降の国学の流れの中で上代文学の研究が進み、大和魂の語は本居宣長が提唱した「漢意(からごころ)」と対比されるようになって(真心)、「もののあはれ」「はかりごとのないありのままの素直な心」「仏教や儒学から離れた日本古来から伝統的に伝わる固有の精神」のような概念が発見・付与されていき、後期には「日本の独自性を主張するための政治的な用語」として使われるようになった。

そうした中で、遣唐使廃止を建言した菅原道真が、大和魂の語の創始者に仮託されるようになった。このような傾向は、儒学の深化と水戸学・国学などの発展やそれによる尊皇論の興隆に伴うものであり、近代化への原動力ともなった。

明治に入り、西洋の知識・学問・文化が一気に流入するようになると、岡倉天心らによって、それらを日本流に摂取すべきという主張が現れ、大和魂とともに和魂漢才という語が用いられるようになった。この語は、和魂漢才のもじりであり、大和魂の本来の意味を含んでいたが、一方では西洋の知識・文化を必要以上に摂取する事への抵抗感も併せもっていた。やがて欧米列強に対抗できる国家づくりを目標に、欧米を模倣した中央主権的な国家体制が整備されていく過程で、第一次世界大戦に勝利したフランス軍にあった思想(エラン=ヴィタル)や国民の統制教育も整備され、それまでの自由主義的傾向の教育から、中央集権的・国家主義的傾向へと教育政策の方向性が変わっていく。その過程において、段々と「大和魂(日本精神)」という考え方も、本来の意味から国家忠誠心的な部分が強調された意味合いに変質していった。特に日露戦争戦勝以降の帝国主義の台頭に伴い、国家への犠牲的精神とともに他国への排外的・拡張的な姿勢を含んだ語として用いられていき、「大和魂」という言葉も専ら日本精神の独自性・優位性を表現するものと解されるようになった。

昭和初期の第二次世界大戦期には軍国主義的な色彩を強く帯び、現状を打破し突撃精神を鼓舞する意味で使われることが主となった。

関東軍の重砲兵として入隊した当時、「百発百中の砲一門は、百発一中の砲百門に当たる」と教えられた。疑問を挟むと、「貴様は敢闘精神が足らん。砲の不足は大和魂で補え」と怒鳴られた。

一中内功「私の履歴書」(日本経済新聞、2000年1月31日)

「防衛鋼鉄の薄さは大和魂で補う。それに薄ければ機動力もある。」砲の力が弱いと言うが、敵の歩兵や砲兵には有効ではないか。実際は敵の歩兵や砲兵を敵の戦車が守っている。その戦車をつぶす為には戦車が要る、という近代戦の構造を全

く知らなかったか、知らないふりをしていた。戦車出身の参謀本部の幹部は一人もいなかったから、知らなかったというのが本当らしい。

—司馬遼太郎「歴史と視点 私の雑記帖」(新潮社)

日本の敗戦直後は使われることは少なくなったが、その後の日本文化論には本来の「大和魂」の意味に近い論立てに基づいた論考は多く見受けられる。

平成以降も「大和魂」という語は様々な場面で使用されている。」¹²⁶⁷

¹²⁶⁷ “大和魂”. (参照. 2023-03-04)

よう 要 線

「回答：お尋ねの言葉「要線」について、下の【資料1】【資料2】にあげたような軍事関係の用語辞典や、辞書事典類を横断的に調べられるデータベースを調べましたが、残念ながら掲載が確認できませんでした。

【資料1】『日本陸海軍事典 上下巻』原剛／編 新人物往来社 2003（当館請求記号：392.1/ハ）

【資料2】『完本 日本軍隊用語集』寺田近雄／著 学研パブリッシング 2011（392.1/テ）

【オンラインデータベース】「ジャパンナレッジ LiB」

『日本大百科全書』や『日本国語辞典』、『国史大辞典』等の事典・辞典、雑誌類など約50のコンテンツを横断検索できるデータベースです。なお、インターネットで「要線 軍事」等のキーワードで検索していたところ「戦略要線」「戦術要線」などの言葉を見かけました。国立国会図書館デジタルコレクションと次世代デジタルライブラリーで、「戦略要線」「戦術要線」をキーワードに調べたところ、多くの資料がヒットしました。以下に3つあげてみましたが、よろしければ他の資料の記述もご覧いただき、参考にしていただければと思います。

※国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/>

※次世代デジタルライブラリー 国立国会図書館

<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>

【参考資料】『戦術綱要』鴻究学会編 有則軒 明32.6.

国立国会図書館デジタルコレクション インターネット公開

<https://dl.ndl.go.jp/pid/844140>

30コマ目に「戦略要線 戦略要線トハ通常一地ヲ遮断スル所ノ延長ナル障碍物例ヘバ大ナル河系、山脉ノ如キモノヲ謂フ通常此線ハ策線¹²⁶⁸ニ直角ナル者ナリ」とあります。

【参考資料】『兵語之解』軍需商会編纂部 編軍需商会 明43.1.

国立国会図書館デジタルコレクション インターネット公開

<https://dl.ndl.go.jp/pid/843281>

34コマ目に「戦術要線 攻撃ノ爲ニハ障碍ト爲リ防禦ノ爲ニハ利用スヘキ高地線、断絶地又ハ森林村落等ノ外縁竝此等ノ諸點ヲ連絡セル諸線ヲ謂フ」とあります。

【参考資料】『言泉 日本大辞典 第3巻』落合直文著 大倉書店 1922

国立国会図書館デジタルコレクション インターネット公開

<https://dl.ndl.go.jp/pid/969161>

292コマ目に右頁3段目に「せんじゅつ-えうせん 戦術要線【名】[兵] 攻撃のためには障碍となり、防禦のためには利用すべき高地線・断絶地、又は森林・村落等の外縁、並びにこれらの諸點を連絡せる諸線。」¹²⁶⁹

¹²⁶⁸ 【作戦・策線】「①戦いを進めてゆく上のはかりごと。②戦略単位以上の兵団の、ある期間にわたる対敵行動の総称」。『広辞苑』

¹²⁶⁹ 静岡県立図書館回答. 2023-02-17.

らん 蘭印作戦における謀略放送

「昭和一七年三月一日わが第十六軍のジャワ上陸作戦と一体となって敵を混乱に陥れ、わが作戦行動を容易ならしめたサイゴンからの謀略放送は事前の周到なる準備と戦機に投ずる機敏なる措置とによって、見事にその目的を達成したもので、わが放送戦史上特筆すべき業績であり、殊勲甲と申すべきものであった。」(心理 105-106)

○「蘭印占領後、太郎良中尉はその放送反響について現地出張を命ぜられ、蘭印軍司令部、バンドン放送局員その他の現地新聞通信員、スカブミ山中に抑留されていたスラバヤ総領事館員丸崎大尉(一期)「イ」蘭等の現地住民等につき、当時の敵側軍官民の聴取状況、敵の作戦指導に与えた影響、住民の動向に与えた影響等につき詳細に調査に当たったが、本工作については、十七年四月二十八日付をもって、南方軍総司令部より大本営陸軍部宛に文書をもって報告された¹²⁷⁰。

後日、要務のため大本営に出張した大槻中佐は、蘭印攻略に当って、中央の許可なく南岸より兵力を上陸させたとして南方軍の独断を追求されたが、「あれは中野[学校出身者]の謀略ですよ」ということで、笑い話になった一幕があった。それは放送中「南岸唯一の要港チラチャップ方面より新たに日本軍上陸」の偽情報が、敵の情勢判断を誤らせただけでなく、世界の通信網を通じて、大本営までもこれを信じていたのだから驚くほかない。」¹²⁷¹

○敵側の反応¹²⁷²。

¹²⁷⁰ 「私[恒石]は五二年五月中旬、当時この放送を主宰した太郎良定夫少佐(当時中尉)に面談する機会を得、さらに大本営宛に送付した(この謀略放送に関する)報告書の原本写しを入手することができたことは幸いであった。」(心理 109)

¹²⁷¹ 『陸軍中野学校』p.499.

¹²⁷² 「蘭印軍ハ日本ノ宣伝ニ耳目ヲ閉ヂヨ(三月五日濠州)」。[資料「対敵海外放送ノ概要ト其ノ反響」]

りく 陸軍大学校回顧

○有末精三（陸軍中將、元参謀本部第二部長、陸大 36 期恩賜）

「二年学生の某日、戦術教官岩橋次郎少佐（陸士第十六期生）から問題として「本郷（東京帝大）と青山（陸大）との教育を比較論述し之が改善策に及ぶ」という宿題を課せられた。

この問題の答案提出後の研究討論で結論になったのは「この日本を代表する両校教育内容の差は帝大が所謂注入教育主義であるのに対し、陸大はむしろ啓発教育主義とでもいう」事であった。注入教育は事細かに教える事を筆記し頭に入れ（記憶）それに関する問題、論文試験は教官の教えた通り解答させるというやり方を主眼としていた。陸軍でも士官学校の教育はきりつめた時間内にこの様な方式によった所謂「詰め込み教育」であったが然しその応用として図上戦術、現地戦術や実兵指揮等を通じて判断力や応用力を養成し実地活用を教えていた。帝大においてはこれらは卒業後実務（医師や弁護士は開業等その他は実社会に就職の後）によって始めて応用されていた。

[中略]

個々の戦術演習や特に戦史の講述の間に将帥としての徳操、幕僚としての人格形成に就ては学生自らが体得し将来の修養に資するというやり方であったように思われる。

[中略]

陸大戦術戦史の教育においては、特に政略戦略両者の一致を強調された。然も政略が戦略を支配するのは、往々にして統帥の純潔を害し戦勝の要因に非ずと教え込まれた。これが統帥権独立時代においては当然だったかも知れないが、戦争の性格が総力戦的傾向に代った現代においては一考を要する問題であろう。」¹²⁷³

○飯村 穰（陸軍中將、元陸大校長¹²⁷⁴、陸大 33 期）

「...陸大で教えたものは、戦術などという高等なものではなく、単なる対ソ戦法であったことを、分ってもらうためであった。

陸大は、他のシビルの大学同様に最高学府を以て自任し、陸大を出る時には卒業などともいったが、これがいけなかった。最高学府は人生であり、卒業は死ぬ時であり、陸大は、作戦術の堂をのぞいたのに過ぎない。

陸大の入学が極度に難しいので多大の努力を傾け、オマケに三年間¹²⁷⁵猛烈に鍛えられたので、卒業すればホッとして「過早天狗」になってしまった。これが、今次開戦と敗戦の主因であった。

また、陸大兵学教官の養成も、外国に比して、お粗末であった。外国のシビルの大学の教授は助手、助教授、教授の順序を以て進み、その陸大の兵学教官も同様な順序

¹²⁷³ 『陸軍大学校』 p.289-290, 293-294.

¹²⁷⁴ 在勤 1938.12-1939.9（恒石在校時と重なる）。[“飯村穰”. Wikipedia.（参照 2022-10-30）]

¹²⁷⁵ 51 期（38 年卒）から 57 期（43 年卒）は 2 年間。（2 年 7 カ月間の 54 期（41 年卒）を除く。[陸軍大学校卒業生. <http://kitabatake.world.coocan.jp/rikudaitop.html>,（参照 2022-10-30）]

を以て進み、陸大の兵学教官といえタイした権威をもっていたのであるが、わが国では、私のように、陸大を卒業すれば、直ちに兵学教官になれたのであった。[中略]

私は日本の陸軍大学校に残したメッケルのすぐれた学風を尊重するに吝かではないが、ふり返ってみるに一つの弊風をも我が陸軍に、特に陸大教育に残したのではないかと思っている。

それは白を黒といいくるめる議論達者¹²⁷⁶であることを、意志鞏固なりとして推奨したのではないかということである。そして我が国の伝統である以心伝心などは、ハッキリしないとして、排斥されたのであった。私はこの陸大の弁護士養成のためのような教育に疑問をもち、武将は聞き上手になるべきであり、議論上手になってはいけなと常々思っていた。梅沢〔道治〕将軍をはじめ私の上官たちは皆そうであったし、議論上手はいても直ちに同化されるような雰囲気がかつての陸軍にはあった。

私が陸大の校長になった時にも、陸大には議論尊重の気風がまだ残っており、陸海軍大学の合同演習の際、学生達が議論の雄を選手に出して、負けるなどけしかけていたこともあった。

私はこれをたしなめ、人の和のためには聞き上手になれと教えたのであった。私は議論上手を陸大で養成した結果が陸海軍の疎隔となり、軍部とシビリアン間の疎隔となり、幾多の小英雄を輩出して大東亜戦争の開戦ともなり、敗戦の一因ともなったと見ているのである。

実直ではあるが頑固なドイツ人の気風や、やり方をそのまま日本の風土に移し植えた陸軍大学校にその禍根があったのではないだろうか。

何故ならば、理論的なドイツ流兵学がわが国に入らない前に成人された、日露戦争までの連隊長以上のわが将帥は、兵術においても人柄においても、誠に立派であったと私は敬仰しているからである。」¹²⁷⁷

○田崎末松（陸軍主計少佐、中国研究家）

「思想戦とは、「原理に対する原理」を戦争目標とすることである。わが国の思想戦はこの真意をさとらず、皮相的な宣伝戦と同一視していた。戦争目標は、第一次大戦後を境として、単なる領土とか資源とかでなく、その国の制度、国民生活とかを動かす思想原理であるいわゆる原理戦争にあった。「陸大」の教育には、この重要な理念を理解する能力に欠けていた。したがって、満洲事変以来の戦争目標としては、生命線、東亜の新秩序、大東亜共栄圏等、新しい植民地政策を（日本を盟主とする）のぞかせているところに、致命的な欠陥があり、連合国の戦争目標たる大西洋憲章にみられるような、「人類普遍の原理」「文明の名において」とかの堂々たる構想には、到底、思想的、原理的に太刀打ちできないものであった。また、この思想戦的技術の面におい

¹²⁷⁶ ○「Stewart, T.ほか（1998）による五段階指導法」：「ペアになり、一方を肯定側に、他方を否定側に割り当て、一方的に意見を言う。お互いに言い終わったら、役割を交代する。」。〔西谷まり。“ディベート活動を通じた口頭表現の指導法”。一橋大学留学生センター紀要第4号（2001）p.64。（参照 2023-05-12）〕

○陸大の議論でこうした役割を交代するディベートが行なわれていたか不詳。

¹²⁷⁷ 『陸軍大学校』p.302-304.

でも、利用する知識人と称するものの層においてもよくあらわれていた。陸軍の採用したのは、蓑田胸喜等を頂点とする狂信的権力追随者ばかりであった¹²⁷⁸。この点同じ戦争の理論だけにおいても、海軍の採用した京都学派（高山岩男、西谷啓治、高坂正顕等）の知性派¹²⁷⁹にくらべて、格段の相違があった。ここにも「陸大」型の泥臭さが歴然としていた。¹²⁸⁰

¹²⁷⁸ 「大和魂では戦にならん」[本書「3.2.17 憂慮」]という恒石の採用例：資料「伝単／駿河台分室へ移転（43 年秋）」/資料「駿河台分室関係者／部外からの主要協力者」

¹²⁷⁹ 「一九四一年三月に学校を出まして、四月一日から中央公論社に入ったんです。[中略]しかし仕事を始めて、翌年には、細川嘉六さんの「世界史の動向と日本」という論文が『改造』に載りまして、いわゆる横浜事件がおこり、総合雑誌の編集者が次々と逮捕されることになるわけです。細川さんと親しかった人々を中心にですね。我々若者たちにとって、兵隊にとられる者、徴用でもっていかれる者、それから特高警察と、引っ張られていくところが三つあるわけですよ。[中略] ... [徴用で横須賀海軍航空技術廠にいると]かつて中央公論社で一緒にいた友人から手紙が来まして「いま東方社というところで働いている。東方社という出版社はこういう仕事をやってる所で、軍との関係もいいし、君だって大丈夫だから、その気があるならば、こっちへ来ないか」というのでした。そして、これは中島健蔵理事の希望である、と書きそえられていました。東方社というのは参謀本部から金が出ていて、大変ぜいたくな雑誌『フロント』などを海外へ出しているということ、林達夫、中島健蔵というような人たちが関係しているということは知っていました。しかし、こっちへ来ないかといわれたって、私は徴用の身ですから、簡単には移れません。したら、それじゃ公文書を出すからといって、参謀本部の名前でなにかしつかつめらしい文書を出してくれたようです。徴用したほうでも、取り扱いに困っていたのか、半信半疑で待っていたら意外にも、徴用解除になったんです。[中略] その頃 [東方社で] いろんなことを指揮していたのは、編集部は中島さんで、写真部は木村伊兵衛さん、美術・制作部は原弘さんでした。[徴用を解除になるというのは] 特例でしょうね。ただ、私は海軍の報道部とはよかったんですよ。陸軍とは悪かったけれど。だから、そういうこともあったのかなあという気もするんですがね。海軍の報道部は、『中央公論』や『改造』をあんなふうに弾圧するのは馬鹿げたことで、京都哲学のどこが悪いんだといっていた。海軍軍令部には高木惣吉さんのような軍人もいたし、また、海軍報道部には京大哲学を出た高戸さんのような軍人もいました。だから『中央公論』が陸軍報道部とまづくなった時も非常にかばってくれたんです。ともかくにも、一年で徴用解除になって、その足で参謀本部の特殊機関という名目の東方社へ移りました。身分証明書にも「参謀本部特殊機関東方社社員」。これは結構効きましたよ、その当時としては。』[海老原光義、横浜事件と東方社と、『FRONT 復刻版：解説Ⅲ』 p.21-22]

¹²⁸⁰ 『陸軍大学校』 p.342-343.

りく『陸軍中野学校』発刊

「陸軍中野学校は、昭和十三年に創立されてから終戦による閉鎖廃校まで、僅か八年という極めて短期間の存在でありました。

しかし、この間、実に二千五百余名の各種学生がこの学校を卒業し、世界の至るところで各種の任務に服してまいりました。

申すまでもなく、その業務は情報勤務という特殊の分野に属するものが殆んどであったため、その実体については一般国民はもとより、軍の内部においても一部の関係者を除いては、全く知られておりませんでした。

無条件降伏という史上かつてない敗戦を迎えてからも、私どもは濫りにこれを公けにすることを極力避けてまいりました。

その理由はいろいろありますが、まずその第一は、私どもはその任務につくに当って、一切の名利も地位をも求めず、日本の捨て石として朽ち果てることを信条としていたからであります。戦に敗れ、祖国の防衛に任ずる責任を果し得なかった状況のもとにおいては、このことを尚更です。

戦後になって内外の情勢は全く一変しましたが、私どもが嘗て従事した業務の中には、戦後三十三年を経ました今日においても、なお国際的に多少とも影響を与える問題も少なくありませんし、まだ生存中の内外関係者のプライバシーを侵すおそれもないわけではありません。敗戦後といえども、知らず知らせずということを最良の願いとしてきたのであります。

しかしその反面、私どもの過去の出来ごとを、いつまでも秘密のベールに包み秘しておくことは、ともすれば世上一般の異常な興味と好奇心をそそり、誤った事実のもとにいろいろな憶測が行なわれ、無責任な流説が横行する原因にもなりました。

更にまた、このこと以上に、私どもの心を痛めますのは、戦前、戦中を通じて、近親の方々にも真実を知らせず、どこで、何をしたのか一切を明らかにしないまま、不幸任務に斃れ、なお今日に至るまでその消息を確認することができない同志諸兄の霊と、またその遺族の方々の感慨に想いを致す場合であります。[中略]

陸軍中野学校の卒業生をはじめ、教職にあった関係者などで構成する中野校友会では、過去何年もの間、これらの問題をどう処理すべきかについていろいろ協議し、それに対応する最善の方策を検討してまいりました。戦後三十三年を経て、「陸軍中野学校」という本書の発刊をみることになったのは、そのような経緯を経ての結論であります。[中略]

昭和五十三年三月一日 中野校友会

会長 太郎良定夫¹²⁸¹

¹²⁸¹ 『陸軍中野学校』 p.1-3. 「発刊に際して」

GHQ での恒石陳述 (46 年 6 月)

「私は上司岡本清福少将の命により、帰国を控えた米国人抑留者との昼食会を開催した。新聞・通信社特派員を含む彼らに日本に好都合な文章を書かせるのが目的である。帰国後日本を誹謗することを書かせないためでもある。私の指示により、会は東京山王ホテルで 1942 年の 6 月初めに行われた。牧秀司、村山有、並河亮、今井守、沖健吉が同席。

最初に開戦直後の日本軍の活躍を描いたニュース映画を上映。牧秀司が日本語でスピーチした後食事が供された。通訳は村山有。昼食会の式次第のスピーチで、抑留米国人義援募金のための大東亜戦争救済委員会 (the Great East Asia War Relief Committee) ¹²⁸²主催であると強調された。それから後日短波放送で家族に送る彼らの声を録音。名前は思い出せないが、3 名が応じた。内容は個人的なことで、戦争には触れなかった。それが済むとそれぞれの部屋に戻り、「日本の抑留所生活」、「日本での生活」といった題から選んで文章を書いた。日本に好意的な内容が期待された。たしかジョセフ・ダイナン (Joseph Dynan) という特派員が拒否した。牧通訳を通して何か書くように促したがどうしても応じようとしないので腹が立ち、拳で 3 回ほど顔を殴った¹²⁸³。牧に部屋へ連れ帰って何か書かせろと命じた。午後 3 時 20 分ころ。20 分ほどしてダイナンが文章を書いたと報告があった。拒否したのは彼だけだ。ロバート・ベレアー (Robert Bellaire) という名前を覚えているが、話はしていない。」¹²⁸⁴

¹²⁸² 「太平洋戦時救済委員会 (偽装) The Pacific O, War Relif Committee [ママ]。

【『情報局関係資料 第 4 巻』 p.17

¹²⁸³ ○「東京ローズ」の反逆罪裁判で提出された村山有の宣誓供述書にこの暴行が述べられている。[“Officer Tells of Death Threat at Treason Trial”. *Oakland Tribune*. 1949-08-26]

○「『山王ホテル事件』の最大の被害者は AP 通信員のジョー・ダイナン君で [中略] 恒石少佐に殴られて前歯を折ってしまった。ダイナン君は物腰静かな男で私は彼には大きな魅力を感じていた。東京の支局長はマックス・ヒル君で中々好い人物であった。ダイナン君と私はヒル君の両手になって日夜働いて居たが、中に主義主張を曲げぬ男で恒石少佐の要求する『日本の宣伝文』を書く事を拒絶して殴られたのである。敗戦後ダイナン君は『恒石に殴られた事は終生忘れないが戦争は戦争であった。忘れよう』と極めてアッサリ伝えて来て此の敏腕参謀は戦犯にならず...」。[村山有. 東京ローズは三人居た！：対米謀略放送のスタア. 文芸春秋. 1952-05, p.70]

○恒石の村山評「なお村山有氏は本人の希望を無視して、私は囑託の手続きをとらなかつた。彼は有能であったが直言すれば軍をかさに着る恐れのある奇行の多い性格の持主であったがゆえである。」(心理 194-195)

¹²⁸⁴ Investigation Division Report: 国立国会図書館憲政資料室蔵. 画像類/日本占領関係資料. 請求番号: LS31540-31541.

原 文

STATEMENT of Shigetsugu TSUNEISHI¹²⁸⁵

On 24 June 1946, this agent interrogated Shigetsugu TSUNEISHI in the office of the Investigation Division, Legal Section, SCAP. TSUNEISHI Stated as follows:

In June 1942, I was a Major in the Imperial Japanese Army, assigned to the Second Bureau, Eighth Section of the Imperial General Staff. I was ordered by my superior, Major General Seifuku OKAMOTO to hold a luncheon for American internees who were about to be repatriated. The purpose of the luncheon was to induce the Americans, rest of whom were newspaper co-respondents, to write articles favorable to Japan. These articles would later be used as a check against the Americans, should they, upon repatriation, attempt to write disparagingly of Japan. Under my direction, the luncheon was held at the Sanno Hotel, Tokyo, in the early part of June 1942. Other Japanese presents at the luncheon were Hideshi MAKI, Tamotsu MURAYAMA, Ryo NAMIKAWA, Mamoru IMAI and Kenkichi OKI.

The Americans were first shown Japanese newsreels depicting the strength of the Japanese Army in the first months of the war. A lunch was then served, followed by a speech in Japanese by Hideshi MAKI. This speech was then translated into English by Tamotsu MURAYAMA. The speech outlined the plan of the luncheon, alleging that it was sponsored by the Great East Asia War Relief Committee for the purpose of raising funds to aid interned Americans. The Americans were then invited to make phonograph records, which would later be sent to their families by shortwave radio. Three of them accepted the offer. I do not remember their names. The messages were of a personal nature. No mention was made of military matters. The Americans were then directed to retire to separate rooms and to write an article of one of several selected subjects. Among the subjects were, "Life in a Japanese Internment Camp" and "Life in Japan." The Americans were expected to write about Japan in a favorable lights. One of the co-respondents refused to write. His name, I believe, was Joseph Dynan. I talked with Dynan through my interpreter, MAKI, urging him to write some-

¹²⁸⁵ Investigation Division Reports (No. 600) (文書名 : GHQ/SCAP Records, Legal Section = 連合国最高司令官総司令部法務局文書) (部係名等 : Investigation Division) (シリーズ名: Investigation Reports (#1-2796 with volumes by report no.), (1945-49) (ボックス番号:1784 ; フォルダ番号:20)

thing. But Dynan persisted in his refusal. Finally I become angry with Dynan. I shoved Dynan in the face with the fist of my hand about three times. Then I ordered MAKI to make Dynan back to his room and see to it that he wrote something. This was about 1520 hours. In about twenty minutes, I was told that Dynan had completed his articles. Dynan was the only American who refused to write. I did not have direct contact with any of the other Americans. I remember the name Robert Bellaire, but I had no personal contact with him. The foregoing is a complete and accurate description of the events which took place at the Sanno Hotel luncheon.

英字署名 捺印

Shigetsugu TSUNEISHI

訊問

「昭和 21・22 年は GHQ から頻繁に呼び出しを受け、土佐から上京すること 23 回。列車は何時も超満員。立詰めも常であった。そんなある日私は GHQ のスモール大尉の質問に答えていた。彼はその名の如く短軀、しかし、厳しい面魂。曰く「お前は交換船で帰国前の AP 記者 D に対し暴力を振ったであろう。D はその時折損した歯数枚を新任地の巴里で治療した」と。そして調書にサインを求めた。見ると彼の顔面を blow したとなっている。この D 記者は、当時米側が行っていた捕虜虐待宣伝を封止するための一策として在日中の公正な取扱い文書にしておくため、牧師、記者各四名を山王ホテルに連れ出して昼食を馳走したときの一人で、他の七名は協力的であったが、彼のみは傲岸不遜非協力的であったので、若かった私もツイ手が出た訳である。然し blow は絶対、承認できない。飽くまでも push であると約 2h 押問答を続けた。

その時思い出していたのは、河辺将軍（当時 12D 長）のお叱りの言葉で、これに関連する経緯は次の通り。昭 15 関特演の頃の某日、副官部起案の軍紀風紀に関する訓令案の連帯を求められたホヤホヤ参謀の私は、内容の修文に気をとられ発令者が師団長名だけで衛戍司令官名の脱落を見落してしまった。これでは衛戍地（管区）の軍直部隊には及ばない。師団長のお呼びで部屋に入るや否や「盲判ヂャ」と一喝されたのである¹²⁸⁶。

スモール大尉は遂に blow を persuade に改めてきた。懐中の辞書を見ると説得となっていたのでサインした。将軍の大喝は私を巢鴨入りから救ってくださった訳で、今もなおこれを貴重な処世訓としている。」¹²⁸⁷

¹²⁸⁶ 本書「1.7 東満・第 12 師団」

¹²⁸⁷ ○恒石重嗣. 花だよりハイライト. 偕行. 1982, 376. p.81. (偕行社, 1982-04)

○前項の“STATEMENT of Shigetsugu TSUNEISHI”には blow も persuade もない.

索引

※265 ページから資料編に収録

- A26, 122, 435, 436
AP (A・P) , 51, 81, 112, 115, 210, 218,
254, 273, 282, 297, 421, 422, 451,
528, 529, 531,
B24, 377
B25, 75, 377, 388
B29, 169, 174, 182, 189, 338, 344, 485,
487,
BBC, 63, 125, 163, 254,
BIA, 460
CM, 3, 113, 499
DJ, 95
DNB, 282, 422
F 機関, 66, 165, 222, 299
FBI, 93, 136, 212, 215, 216, 228, 273,
301, 317, 392
FRONT (フロント) , 46, 48, 74, 77,
90, 99, 105, 168, 376, 414, 415, 416,
417, 418, 419, 420, 526, 567, 526
Fujita→フジタ
GHQ, 37, 81, 140, 190, 200, 204, 206,
207, 214, 215, 216, 217, 222, 235,
236, 246, 315, 327, 338, 351, 422,
468, 494, 507, 528, 529, 531
GI, 95, 96, 113, 116, 493
JOAK, 64, 85, 144, 145, 146, 159, 173,
186, 301, 445
KDD, 468
LIFE, 90, 99
ライフ, 48, 93, 99, 358
MP, 199, 323
NHK, 3, 4, 47, 51, 54, 55, 69, 71, 75, 84,
85, 95, 100, 109, 112, 116, 117, 132,
142, 144, 158, 159, 161, 163, 173,
183, 188, 206, 208, 209, 215, 217,
232, 237, 239, 241, 245, 254, 255,
260, 293, 294, 297, 298, 299, 300,
301, 339, 343, 345, 352, 366, 369,
402, 405, 406, 424, 425, 426, 427,
440, 443, 446, 452, 453, 456, 495,
496, 497, 499, 501, 505, 511, 514,
517
PK, 52, 475,
R・B・ボース→ラス・ビハリ・ボース
RTO, 323
Tokyo Rose→東京ローズ
UP, 81, 282, 421, 422
VICTORY, 90
愛国行進曲, 447
アイバ・戸栗, 116, 117, 206, 209, 213,
218, 228, 231, 233, 237, 239, 451
アウン・サン, 458
赤尾好夫, 40
アキャブ, 305, 461
秋山邦雄, 154, 389
浅田三郎, 105, 108, 378
浅野七之助, 208
朝日新聞, 118, 119, 122, 127, 140, 158,
208, 232, 243, 254, 286, 316, 321,
348, 373, 383, 387, 388, 424, 435,
436, 442, 445, 465, 481, 495, 496,
504,
愛宕山, 281, 294, 455
アドリブ, 3, 112, 115
アナウンサー, 3, 83, 93, 95, 102, 109,
112, 113, 159, 267, 339, 340, 405,
429, 443, 445, 453, 455, 456, 493,
496, 499
アフリカ, 277, 294, 418, 491

- アメリカ,, 71, 72, 75, 87, 90, 91, 93, 94,
 95, 96, 110, 112, 113, 115, 116, 117,
 119, 125, 126, 131, 133, 136, 139,
 140, 144, 150, 155, 158, 159, 160, 163,
 166, 172, 183, 184, 186, 192, 197,
 198, 199, 208, 216, 217, 218, 220,
 222, 228, 233, 245, 246, 254, 273,
 274, 276, 277, 279, 294, 295, 297,
 299, 304, 313, 314, 320, 323, 337,
 338, 339, 350, 355, 357, 358, 362,
 363, 364, 369, 377, 379, 387, 388,
 391, 392, 393, 394, 395, 398, 417,
 418, 422, 424, 434, 437, 438, 439,
 440, 441, 443, 445, 447, 451, 453,
 454, 455, 456, 457, 462, 470, 478,
 481, 485, 487, 491, 492, 493, 494,
 496, 497, 499, 507, 508, 512, 515,
 517
 アメリカ研究所, 6, 97, 98,
 アラカン, 124, 461
 有末精三, 35, 46, 127, 135, 165, 239,
 315, 331, 524
 淡路町事務所 (淡路事務所) , 48, 52,
 105, 128, 132, 137, 239, 313, 314,
 394, 395, 396, 417, 418, 419
 暗号, 45, 56, 182, 199, 290, 292, 311,
 390, 405, 418, 421
 安南, 47, 141, 169, 179, 180, 181, 395,
 477, 479
 飯野紀元, 124, 160, 360
 飯村穰, 524
 硫黄島, 166, 182, 192, 374
 池田中学校, 191
 池田徳眞, 40, 47, 49, 71, 83, 85, 93, 94,
 106, 108, 116, 117, 126, 128, 131,
 133, 135, 137, 138, 139, 142, 143,
 144, 147, 148, 150, 158, 161, 162,
 163, 166, 173, 175, 185, 186, 188,
 197, 198, 212, 215, 217, 219, 221,
 222, 231, 241, 245, 254, 260, 294,
 298, 300, 301, 303, 304, 313, 327,
 332, 336, 337, 353, 364, 390, 391,
 395, 398, 399, 424, 445, 449, 451,
 465, 466, 481, 484, 487, 491, 497,
 500, 501, 502, 507,
 池田幸雄, 206, 209
 石井鎌一, 112, 209, 221, 292, 297, 424,
 451, 452
 石井兄妹 (ケネス石井, メリー石井) ,
 110, 206
 石井柏亭, 424
 石井部隊, 292
 石井光次郎, 452
 石井好子, 206, 452
 板橋並治, 159, 451
 イタリア, 40, 119, 135, 167, 315, 376,
 379, 422, 435, 508
 市ヶ谷, 24, 45, 163, 197, 198, 332, 449
 一田次郎, 70
 一世, 208, 270, 327, 437
 猪木正道, 316
 伊野部重珍, 133, 186, 197, 239
 今井守, 81, 528
 岩畔機関, 165, 429
 岩畔豪雄, 315, 429
 岩波書店, 4, 17, 46, 106, 107, 282, 392
 インス (テッド, ウォーレス) , 84, 93,
 95, 100, 117, 102, 138, 228, 299, 447,
 インド (印度) , 29, 46, 47, 56, 63, 66,
 67, 69, 70, 74, 76, 84, 96, 121, 122,
 123, 131, 141, 154, 165, 169, 180,
 249, 265, 266, 270, 276, 277, 278,
 280, 298, 301, 305, 306, 332, 352,
 368, 369, 375, 395, 396, 397, 404,
 418, 420, 429, 430, 432, 433, 436,
 450, 457, 461, 462, 468, 473, 474,
 477, 478, 494, 495, 496, 505, 506
 自由インド仮政府, 66
 インパール (インパール作戦) , 37,
 165, 278, 388, 557
 ウィリアムズ (ウイリアムス) , 40, 47,
 51, 129, 130, 132, 138, 148, 149, 150,

- 198, 199, 216, 250, 260, 273, 327, 338
 ウェリントンハウス, 11, 359
 ウォーレス→インス
 白井茂樹, 105, 269, 328
 宇野一磨 (バディ・宇野), 137, 147, 173, 322, 353, 425, 443, 460, 501
 梅津美治郎, 197, 331, 362
 右翼, 25, 46, 375, 503
 ウラジオストック, 175
 浦茂, 24, 223
 映画, 17, 21, 24, 32, 47, 51, 75, 98, 115, 130, 139, 140, 167, 245, 287, 302, 303, 413, 414, 415, 419, 421, 448, 453, 475, 479, 481, 491, 503, 528
 英語ニュース, 63, 100, 443
 英文放送事前監査室, 100, 158, 159, 161, 163, 164, 446, 454, 507,
 援蔣ルート→蒋介石
 厭戦, 116, 166, 171, 243, 244, 254, 453, 492, 493
 汪兆銘 (汪精衛), 121, 141, 271, 328, 329, 343
 大阪, 20, 21, 61, 63, 130, 173, 285, 322, 323, 325, 374, 384, 467
 オーストラリア, 77, 85, 88, 89, 131, 158, 160, 283, 294, 297, 298, 299, 301, 303, 341, 380, 395, 429, 447
 太田天橋, 89, 105, 127, 137, 313, 353, 394, 417, 418
 大森区役所, 440
 大森捕虜収容所 (俘虜収容所、キャンプ), 129, 130, 132, 138, 142, 145, 147, 149, 150, 198, 216, 295, 338, 364, 481, 487, 499, 507
 大屋角造, 26, 29, 36, 45, 258, 377
 大屋久寿雄, 446
 大山勉, 149, 186, 339
 岡繁樹, 165, 270, 271, 272, 273
 岡田桑三, 99, 105, 106, 108, 414, 415, 416, 418
 緒方竹虎, 54, 158, 208
 岡本清福, 46, 122, 331, 528
 岡山 (駅, 県), 204, 260, 311, 322, 323, 445, 453, 466
 沖健吉, 81, 110, 206, 451, 528
 沖繩, 106, 166, 184, 186, 290, 291, 374, 495
 奥村喜和男, 97, 119, 360, 442
 尾崎秀実, 154
 尾崎行雄, 392, 451
 尾崎不敬事件, 374
 尾関正爾, 46, 47, 133, 328, 331, 474
 海外宣伝, 3
 海外放送連絡協議会, 55, 63
 海軍, 3, 20, 23, 24, 39, 45, 47, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 59, 60, 61, 62, 64, 70, 73, 76, 79, 87, 88, 91, 97, 112, 116, 118, 119, 129, 130, 144, 158, 159, 160, 161, 168, 169, 170, 174, 183, 184, 197, 205, 227, 243, 266, 269, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 293, 294, 298, 302, 305, 312, 313, 318, 319, 320, 331, 342, 346, 348, 350, 360, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 386, 390, 391, 402, 408, 420, 425, 426, 427, 434, 435, 442, 445, 452, 458, 468, 477, 488, 491, 496, 508, 512, 513, 515, 517, 519, 522, 525, 526
 偕行会, 9, 148, 236, 248, 250, 253, 258,
 偕行社, 60, 71, 148, 190, 229, 234, 235, 236, 243, 248, 250, 251, 253, 255, 258, 434, 435, 531
 外交伝書使, 181, 289, 290, 331, 479
 ガイッシー, 197, 198, 199
 海兵隊, 87, 99, 198
 外務省 (外務大臣), 3, 24, 39, 47, 49, 51, 53, 54, 55, 71, 73, 77, 81, 85, 97, 98, 112, 118, 119, 126, 131, 137, 158, 159, 161, 164, 167, 170, 175, 186, 197, 198, 210, 214, 254, 265, 282, 290, 292, 293, 294, 295, 303, 359,

- 365, 375, 380, 393, 401, 422, 423,
425, 426, 438, 439, 440, 445, 471,
507, 508, 509, 512
- 加賀尾秀忍, 466
- 香川県, 24, 26, 62, 260, 341, 345
- 学者, 3, 20, 24, 46, 67, 106, 119, 144,
169, 209, 290, 296, 313, 314, 315,
359, 361, 393, 394, 418, 479, 489,
495, 513
- 寛光顕, 124, 296
- カズンス (カズン) , 62, 80, 83, 84, 85,
86, 92, 93, 94, 100, 101, 102, 110,
117, 138, 199, 297, 298, 299, 300,
301, 338, 340, 443, 447, 451, 456,
499,
- 風と共に去りぬ, 98, 139, 140, 302, 303,
304
- ガダルカナル(ガ島) , , 87, 89, 95, 99,
110, 111, 113, 166, 219, 246, 274,
362, 372, 373, 383, 384, 467, 505
- 勝野金政 (勝田) , 105, 137, 333, 353,
363, 364, 480, 481
- 門松正一, 46, 47, 328, 331, 473, 474
- 金子昌雄, 181, 290
- 樺山資英, 131, 132, 133, 137, 155, 198,
294, 295, 354, 360, 379, 399, 400,
439, 498, 507
- 神風→特攻
- 上福岡, 71, 72, 468
- 樺太, 71, 118, 356, 378
- カリフォルニア, 126, 173, 218, 273,
358, 412, 440, 507, 509
- カルカタ, 70, 270, 277, 305, 306, 388
- カルプフライシュ, 129, 132, 144, 145,
198, 199, 337
- 河合治, 26
- 河相達夫, 85, 438
- 川口清健, 465, 467
- 河辺正三, 37, 39
- 河村俊平, 18, 20, 24, 153, 307, 308, 309
- 幹候要員→幹部候補生
- 関東軍, 33, 38, 39, 74, 105, 106, 108,
123, 129, 143, 161, 168, 188, 290,
314, 362, 375, 402, 403, 405, 433,
520
- 関東大震災, 21, 23, 106, 485
- 関特演, 5, 33, 39, 531
- 幹部候補生, 30, 222, 310, 311, 449, 489
- 幹候要員, 30
- 木々高太郎 (林譚) , 137, 354, 417, 418,
497
- 記者, 69, 81, 115, 208, 218, 272, 281,
287, 288, 371, 372, 373, 374, 385,
387, 388, 392, 421, 434, 452, 503,
512, 531
- 鬼畜米英, 158
- 喫茶店, 188, 201, 202, 203, 229, 235,
260, 313, 327, 395
- 木村伊兵衛, 48, 74, 90, 99, 134, 290,
328, 414, 417, 418, 435, 436, 438,
526
- 木村日記, 67, 474
- 旧制中学→中学校
- 教育総監部, 333
- 共産主義者, 46
- 共同通信社 (共同通信) , 35, 55, 223,
421, 422
- 業務局 (NHK) , 401, 494
- 金鷄勲章, 32, 88, 341
- グアム, 61, 153, 174, 491
- グイシー, 197, 199
- 空襲, 70, 75, 76, 113, 153, 165, 169, 174,
175, 182, 183, 188, 189, 190, 197,
305, 344, 368, 371, 377, 387, 388,
389, 404, 407, 408, 409, 418, 426,
474, 481, 485, 487, 494
- 九段事務所 (K 事務所) , 105, 128, 137,
362, 364, 480
- 朽木綱博, 137, 142, 144, 145, 163, 231,
298, 353, 398, 445, 497
- クリスマス, 150, 336, 337, 483, 501
- クリップス, 352, 365

- 栗原悦蔵, 285, 286, 312, 374
クルーハウス (クリュー・ハウス) ,
124, 296, 359, 360
クレスウエル, 207, 412
桑原武夫, 469
桑原長, 46, 48, 51, 52, 59, 60, 331, 342,
396, 473, 474, 475, 476, 510
軍恩連盟, 252
軍恩連盟全国連合会, 250, 320
高知県軍恩連盟, 184, 227, 232, 250,
251, 252, 257, 258, 318, 319, 320
軍陣新聞, 155, 165
軍刀, 17, 35, 148, 192, 197
指揮刀, 29
日本刀, 135, 197, 307
軍令部, 45, 47, 76, 159, 170, 184, 284,
285, 286, 312, 371, 390, 526
慶應義塾大学, 106, 392
警察犬, 229, 230, 234, 235, 260
警察予備隊, 222, 223
警視庁, 81, 229, 273, 333, 408, 439
ゲリラ, 173, 462, 492
検閲, 64, 99, 109, 110, 116, 140, 159,
162, 254, 287, 372, 405, 422, 488,
499, 503, 514
原爆, 186, 240, 334
憲兵, 52, 76, 147, 149, 150, 168, 186,
198, 219, 272, 314, 330, 332, 334,
338, 339, 344, 354, 364, 371, 385,
396, 407, 408, 409, 439, 465, 500
憲兵隊, 149, 150, 168, 198, 334, 339,
344, 407, 408, 409, 439, 500
小池周一郎, 52, 332, 354, 364, 396
五・一五事件, 25
小岩井光夫, 46, 52, 88, 90, 127, 143,
147, 149, 212, 246, 313, 317, 328,
332, 341, 342, 395, 396, 473, 499
交換船, 70, 85, 91, 99, 131, 294, 298,
329, 360, 380, 393, 405, 439, 445,
531
交換引き揚げ船, 80
日米交換船, 3, 99, 434, 445
航空士官学校→陸軍士官学校
皇軍, 89, 267, 404, 442, 475, 489, 515
高坂正顕, 389, 526
濠州 (濠洲) , 4, 62, 63, 77, 83, 85, 87,
96, 100, 102, 109, 199, 329, 338, 365,
432, 433, 474, 496, 505, 515, 523
高知, 3, 18, 19, 20, 21, 24, 30, 33, 148,
184, 186, 188, 189, 190, 197, 201,
202, 203, 204, 205, 214, 215, 220,
227, 228, 229, 230, 231, 232, 234,
235, 236, 237, 238, 239, 248, 250,
251, 252, 253, 254, 257, 258, 260,
270, 272, 307, 308, 309, 310, 311,
318, 319, 320, 322, 325, 327, 411,
412, 421, 464, 467
高知一中→城東中学校
高知県, 18, 19, 20, 21, 24, 33, 148, 184,
190, 203, 205, 214, 227, 228, 232,
234, 248, 250, 251, 252, 253, 257,
258, 270, 272, 307, 309, 310, 311,
318, 319, 320, 411, 412, 464, 467
高知県軍恩連盟→軍恩連盟
高知県立中学海南学校, 19, 20
高知市, 18, 20, 21, 189, 201, 202, 203,
205, 215, 227, 230, 231, 232, 235,
236, 237, 250, 251, 254, 257, 258,
260, 308, 309, 310, 327, 467
高知大学, 21, 203, 250
高等学校, 19, 20, 21, 106, 130, 191, 203,
208, 309, 311, 393, 412, 452
郷友 (ごうゆう) 連盟, 250, 351
日本郷友連盟, 351
神戸, 25, 61, 63, 173, 257, 285, 393, 407,
452, 473
コーヒー, 201, 223, 260, 326, 327, 450
国際局 (NHK) , 47, 85, 109, 160, 297,
301, 401, 425, 442, 443, 444, 445,
452, 456, 494
国際電気 (国際電気通信) , 71, 72, 403,
406, 468, 469, 490

- 国際部 (NHK) , 55, 63, 75, 109, 293,
 339, 342, 401, 424, 425, 494, 517
 黒人, 139, 398, 491
 国内放送, 3, 71, 72, 73, 77, 115, 175,
 268, 282, 295, 401, 455, 490
 国防国家, 514
 小平邦彦, 290
 小平知 [利?] 勝, 81
 小平利勝, 137, 210, 507
 小林久子, 3, 126, 230, 239, 302, 354,
 362, 480, 501, 526
 小林秀雄, 316
 小森七郎, 352, 404, 406
 近衛文麿, 37, 447
 コレヒドール, 87, 93, 214, 368, 432,
 465, 494, 495
 金剛建設 (株) , 227, 232
 近藤傳八, 179
 近藤日出造, 220, 313, 417
 在外武官, 329, 333
 サイゴン, 47, 77, 123, 141, 143, 169,
 429, 431, 432, 479, 494, 496, 523
 西貢, 180
 最所フミ, 160, 199, 297, 301
 裁判, 93, 96, 102, 127, 136, 173, 198,
 199, 201, 206, 207, 209, 210, 212,
 213, 214, 215, 216, 218, 219, 221,
 223, 228, 233, 235, 260, 270, 301,
 320, 336, 338, 350, 412, 451, 458,
 465, 467, 483, 502, 504, 528
 サイパン, 110, 153, 166, 168, 169, 174,
 182, 192
 坂井直, 25
 坂西志保 (坂西しほ) , 119, 137, 160,
 185, 313, 354, 398, 417, 418
 作戦, 3, 4, 17, 25, 26, 35, 39, 40, 45, 46,
 50, 52, 55, 56, 59, 66, 67, 69, 73, 74,
 75, 76, 77, 87, 88, 89, 99, 105, 109,
 110, 118, 124, 125, 133, 138, 160,
 162, 165, 166, 174, 179, 180, 181,
 182, 184, 185, 192, 223, 227, 232,
 240, 243, 244, 255, 256, 278, 289,
 290, 305, 328, 350, 362, 365, 368,
 373, 377, 384, 387, 394, 395, 397,
 404, 405, 407, 408, 425, 427, 429,
 432, 433, 443, 447, 455, 460, 461,
 462, 465, 474, 475, 478, 487, 496,
 506, 510, 522, 523, 524
 桜, 270, 392
 桜一郎, 377, 450
 桜会, 375
 サクラメント, 276
 佐藤不二雄, 46, 331
 サポイア・マルケッティ, 435
 沢田茂, 20, 180, 519
 澤田進之丞 (沢田進之丞) , 55, 86, 109,
 115, 116, 312, 445
 山王ホテル, 49, 67, 81, 82, 84, 126, 132,
 138, 297, 299, 300, 528, 531
 サンフランシスコ, 75, 95, 96, 113, 133,
 183, 206, 207, 208, 209, 212, 217,
 218, 219, 220, 228, 233, 244, 276,
 297, 336, 412, 439, 440, 451, 452,
 472, 490, 499, 507, 508
 参謀次長, 49, 129, 170, 180, 431, 519
 参謀総長, 45, 69, 85, 143, 165, 170, 192,
 197, 331, 341, 352, 371, 375, 390,
 450, 473
 参謀本部, 3, 25, 35, 36, 39, 40, 45, 46,
 47, 48, 49, 50, 51, 52, 56, 66, 67, 70,
 71, 73, 74, 77, 81, 83, 84, 87, 88, 90,
 93, 97, 98, 99, 100, 105, 106, 108,
 109, 110, 112, 113, 116, 122, 126,
 127, 128, 131, 132, 133, 134, 136,
 137, 138, 139, 140, 141, 143, 144,
 150, 154, 155, 159, 161, 162, 163,
 168, 175, 183, 184, 186, 187, 188,
 192, 197, 199, 207, 239, 246, 254,
 258, 267, 269, 270, 283, 289, 290,
 295, 297, 302, 313, 314, 315, 320,
 328, 332, 333, 334, 341, 345, 350,
 364, 375, 377, 378, 390, 394, 395,

- 406, 408, 409, 414, 415, 417, 418,
420, 425, 427, 431, 434, 436, 439,
443, 444, 445, 449, 450, 455, 458,
468, 474, 476, 481, 490, 497, 500,
501, 510, 513, 521, 524, 526
参本, 26, 32, 33, 37, 38, 39, 40, 71, 72,
73, 80, 91, 113, 181, 232, 258, 331,
402, 414, 475, 505
シェンク, 85, 132, 336, 337, 338, 450,
483
士官学校→陸軍士官学校
指揮刀→日本刀
自殺, 31, 46, 363
自転車, 18, 230, 235, 480
指導記事, 373
シドニー, 75, 83, 100, 183, 209, 298,
301, 303, 422, 451
支那→中国
柴田進, 181, 290
渋沢栄一, 471
渋沢敬三, 314, 415,
シベリア (シベリヤ), 33, 71, 181, 188,
208, 223, 248, 289, 290, 291, 292,
333
嶋内 百千世, 184, 319
島村速雄, 20
市民権, 173, 233, 239, 274, 437, 438,
440
ジャカルタ, 123, 132, 336, 385, 386,
432, 496
写真週報, 62, 65, 503
ジャズ, 55, 93, 95, 96, 112, 299, 339,
340, 452
ジャワ, 52, 121, 214, 315, 385, 386, 397,
427, 429, 431, 432, 474, 475, 496,
506, 510, 523
上海, 32, 59, 61, 62, 63, 67, 121, 123,
132, 133, 303, 310, 339, 341, 345,
357, 376, 382, 409, 421, 424, 426,
433, 449, 450, 495
自由アメリカ, 125, 166
自由フランス, 125
自由インド仮政府→インド
重慶, 51, 56, 75, 76, 270, 282, 342, 343,
368, 376, 387, 401, 407, 431, 432,
433, 462, 495, 496, 511
自由主義, 127, 154, 316, 520
終戦, 17, 25, 45, 46, 53, 54, 60, 69, 72,
74, 109, 140, 143, 166, 186, 188, 189,
190, 191, 192, 197, 198, 199, 200,
201, 203, 222, 223, 235, 240, 241,
254, 258, 290, 294, 304, 312, 315,
318, 326, 331, 332, 336, 339, 340,
350, 356, 363, 377, 442, 447, 453,
457, 472, 487, 494, 508, 527,
収容所, 61, 62, 63, 64, 79, 80, 92, 99,
129, 130, 132, 138, 149, 150, 164,
189, 198, 203, 214, 218, 219, 250,
273, 274, 276, 278, 283, 338, 364,
437, 471, 472, 481, 483, 487, 499,
501, 502, 503, 506, 507, 508
主婦の友社, 153, 344, 479, 557
蒋介石, 66, 89, 154, 282, 357, 358, 458
援蒋ルート, 56, 165, 376, 462
上京, 21, 40, 192, 237, 251, 448, 481,
531
省線, 449
城東中学校, 19, 20, 24, 189, 309, 311,
556
高知一中, 21, 467
昭南→シンガポール
乗馬, 33, 190, 232, 234, 257, 449
省部合体, 187
情報委員会, 54, 118, 512
情報官, 55, 69, 81, 84, 85, 97, 118, 403,
406, 424, 425, 426, 443, 517
情報局, 3, 4, 47, 50, 53, 54, 55, 59, 62,
63, 69, 71, 73, 74, 75, 77, 81, 84, 92,
97, 108, 109, 116, 118, 119, 126, 144,
145, 149, 150, 154, 158, 159, 161,
172, 182, 198, 265, 281, 282, 293,
294, 295, 296, 342, 344, 352, 360,

- 365, 366, 367, 369, 373, 401, 403,
404, 406, 424, 425, 426, 429, 442,
443, 447, 455, 472, 495, 499, 502,
503, 512, 514, 515, 517, 528
- 昭和天皇, 88, 253
- 囑託, 46, 52, 71, 72, 73, 81, 84, 99, 116,
126, 137, 159, 223, 229, 230, 287,
296, 299, 313, 342, 393, 402, 406,
473, 508, 517, 528
- 植民地, 61, 63, 67, 89, 132, 180, 240,
306, 314, 315, 384, 397, 422, 457,
478, 512, 525
- 叙任, 47, 346, 348
- 白井正辰, 250
- シンガポール, 66, 77, 83, 98, 106, 108,
121, 122, 123, 139, 140, 161, 165,
169, 183, 279, 298, 299, 350, 367,
383, 384, 385, 397, 421, 422, 429,
430, 431, 432, 436, 460, 468, 479,
483, 494, 495, 496, 506
- 昭南, 80, 169, 429
- 真珠湾, 37, 75, 76, 272, 384, 420, 439
- 新聞, 3, 21, 24, 47, 49, 51, 55, 56, 59, 60,
62, 63, 73, 75, 77, 85, 115, 119, 122,
124, 127, 133, 140, 154, 155, 158,
163, 165, 179, 184, 200, 203, 208,
210, 218, 221, 227, 230, 231, 232,
234, 237, 243, 250, 251, 253, 254,
256, 257, 260, 266, 270, 271, 272,
273, 274, 276, 277, 279, 282, 285,
286, 287, 288, 298, 303, 305, 312,
313, 314, 315, 316, 319, 321, 325,
327, 341, 348, 359, 361, 371, 372,
373, 374, 379, 380, 381, 385, 387,
388, 389, 394, 408, 418, 421, 423,
424, 425, 426, 434, 435, 436, 439,
440, 445, 452, 455, 459, 465, 473,
475, 491, 495, 496, 502, 503, 504,
509, 511, 512, 515, 517, 520, 523,
528
- 新聞記者, 3, 55, 124, 208, 218, 279, 288,
312, 315, 359, 423, 439, 440, 473,
503
- 新聞社, 3, 51, 60, 115, 119, 140, 179,
208, 227, 231, 232, 234, 256, 260,
287, 288, 305, 313, 327, 341, 361,
371, 380, 387, 421, 423, 424, 435,
452, 475, 496, 509, 517
- 新名 (しんみょう) 丈夫, 312, 371
- 心理, 3, 4, 17, 21, 25, 32, 34, 39, 40, 45,
46, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56,
59, 66, 70, 73, 74, 75, 76, 79, 80, 83,
84, 85, 87, 88, 89, 91, 93, 94, 95, 96,
99, 101, 105, 108, 109, 110, 112, 113,
115, 116, 122, 123, 125, 126, 127,
129, 133, 134, 135, 137, 138, 139,
141, 142, 143, 144, 147, 148, 149,
150, 158, 160, 161, 162, 165, 166,
167, 170, 171, 172, 173, 174, 175,
181, 182, 183, 185, 186, 187, 188,
197, 199, 200, 201, 204, 206, 207,
208, 209, 210, 211, 212, 213, 214,
217, 219, 220, 221, 223, 227, 228,
232, 233, 238, 240, 241, 242, 243,
244, 246, 250, 255, 256, 270, 283,
284, 298, 300, 301, 302, 304, 313,
331, 336, 354, 379, 380, 382, 386,
395, 396, 397, 398, 407, 408, 412,
417, 421, 425, 427, 430, 431, 432,
433, 442, 443, 445, 446, 447, 451,
454, 465, 474, 477, 483, 484, 487,
491, 496, 497, 499, 500, 501, 505,
506, 510, 511, 523, 528
- 杉田一次, 197, 207, 350, 351, 450
- 杉本苑子, 127, 482
- 杉山元, 69, 143, 331, 352, 375, 473
- 鈴木文史朗, 208, 354, 398, 417
- 鈴木敬司, 458
- ストライク・ザ・バンド, 110, 112
- スバス・チャンドラ・ボース→チャン
ドラ・ボース

- スペイン, 172, 277, 370, 420
 スマトラ, 59, 315, 495
 須山芳枝, 110, 442
 駿河台, 3, 4, 47, 83, 88, 89, 90, 116, 117,
 126, 127, 128, 129, 130, 131, 132,
 133, 135, 136, 137, 138, 142, 144,
 147, 148, 150, 153, 155, 159, 160,
 161, 162, 163, 164, 166, 167, 171,
 172, 173, 175, 186, 188, 197, 198,
 199, 214, 215, 216, 221, 223, 231,
 239, 245, 250, 294, 295, 299, 300,
 301, 302, 303, 304, 313, 314, 326,
 327, 332, 336, 337, 338, 339, 341,
 344, 353, 362, 363, 364, 377, 390,
 395, 398, 417, 418, 440, 441, 446,
 449, 450, 451, 453, 479, 480, 481,
 483, 484, 487, 497, 498, 499, 500,
 501, 502, 526
 駿河台会（駿台会）, 223, 236, 239, 336,
 337
 駿河台分室, 3, 4, 83, 88, 89, 90, 117,
 126, 127, 129, 130, 131, 132, 133,
 135, 136, 137, 138, 142, 144, 147,
 148, 150, 153, 155, 159, 160, 161,
 162, 163, 164, 172, 173, 175, 186,
 188, 197, 198, 199, 215, 216, 221,
 223, 231, 245, 250, 294, 295, 299,
 300, 301, 302, 303, 304, 313, 314,
 326, 327, 332, 337, 338, 339, 341,
 353, 362, 364, 377, 390, 395, 398,
 417, 418, 440, 441, 446, 449, 451,
 453, 479, 480, 481, 483, 484, 487,
 497, 498, 499, 500, 501, 502, 526
 正遇, 99, 503
 聖戦, 101, 367, 447
 赤十字, 62, 129, 138, 150, 245, 384, 451,
 499
 瀬島龍三, 25, 35, 40, 49, 133, 223, 240,
 248, 289, 346, 347, 371
 ゼロ・アワー, 3, 71, 86, 95, 96, 100,
 109, 110, 112, 113, 115, 116, 125,
 138, 139, 171, 173, 204, 210, 211,
 215, 232, 233, 237, 239, 244, 245,
 283, 299, 300, 339, 425, 431, 432,
 443, 451, 495, 501
 善通寺, 26, 61, 62, 63, 64, 79, 80, 99,
 129, 132, 189, 190, 198, 219, 260,
 283, 331, 341, 345, 374, 420, 471,
 472, 502, 503, 506
 前線班（NHK）, 109, 110, 116, 117,
 442, 451
 戦争犯罪人, 338
 前大戦→第一次世界大戦
 宣伝, 3, 25, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52,
 53, 54, 55, 56, 59, 60, 62, 66, 69, 70,
 71, 73, 74, 75, 76, 77, 79, 80, 81, 83,
 84, 85, 86, 88, 89, 90, 91, 95, 96, 97,
 98, 99, 100, 101, 105, 106, 112, 116,
 117, 118, 119, 123, 124, 125, 126,
 127, 128, 129, 131, 132, 134, 135,
 137, 141, 148, 150, 154, 155, 158,
 161, 162, 163, 165, 167, 169, 170,
 171, 172, 173, 175, 179, 180, 186,
 188, 199, 210, 211, 222, 233, 237,
 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245,
 254, 267, 270, 271, 276, 277, 278,
 279, 287, 293, 295, 296, 304, 311,
 312, 313, 315, 320, 328, 329, 330,
 331, 333, 336, 339, 341, 352, 359,
 360, 362, 364, 365, 366, 367, 368,
 370, 376, 380, 381, 382, 383, 386,
 388, 389, 394, 395, 396, 397, 398,
 399, 400, 401, 404, 414, 415, 416,
 417, 418, 420, 421, 425, 429, 431,
 432, 442, 444, 445, 446, 447, 452,
 453, 454, 455, 465, 473, 474, 475,
 479, 484, 491, 494, 496, 497, 498,
 501, 505, 508, 510, 511, 512, 514,
 523, 525, 528, 531
 宣伝戦, 3, 54, 69, 163, 320, 352, 367,
 368, 370, 399, 414, 447, 453, 455,
 475, 484, 511, 525

- 戦犯, 199, 204, 205, 214, 219, 258, 338,
 350, 450, 458, 465, 467, 474, 504,
 528
 宣撫月報, 380
 宋美齡, 357, 358, 511
 ソ軍, 39, 290
 ソビエト連邦, 269
 ソ連, 32, 33, 38, 39, 45, 71, 74, 99, 134,
 137, 171, 175, 186, 289, 291, 292,
 329, 330, 333, 362, 363, 364, 375,
 376, 377, 391, 414, 436, 452, 491
 谷崎潤一郎, 448
 タイ, 46, 56, 79, 121, 141, 265, 266, 328,
 370, 385, 420, 429, 432, 460, 473,
 494, 505
 第一次世界大戦 (第一次大戦) 23, 63,
 115, 124, 296, 345, 359, 360, 381,
 394, 411, 471, 520, 525
 前大戦, 124, 296, 515, 557
 第一ホテル, 82, 84, 85, 299, 300, 456
 対外宣伝, 47, 50, 51, 54, 55, 106, 112,
 376
 第五十五軍, 188, 189, 190, 199, 331
 第五スタジオ, 110, 142, 144, 145, 173,
 339
 大使館, 47, 51, 56, 74, 91, 112, 113, 119,
 289, 290, 291, 292, 315, 350, 358,
 376, 390, 391, 434, 473, 508
 第十一師団, 29, 36, 190, 331, 341, 345
 第十二師団 (第 12 師団) , 37, 39, 531
 第十二連隊 (第一二連隊, 第 12 連隊) ,
 24, 26, 29, 30, 31, 34, 36, 189, 190,
 232, 309, 341, 374, 377
 大正, 18, 19, 21, 23, 30, 67, 74, 106, 192,
 209, 227, 269, 290, 310, 319, 328,
 344, 347, 348, 349, 361, 374, 375,
 411, 412, 415, 438, 464, 467, 471,
 513
 大震災, 106, 251, 344, 471
 対敵放送, 3, 69, 77, 100, 101, 109, 124,
 139, 145, 159, 244, 283, 287, 365,
 368, 404, 405, 427, 432, 433, 455,
 494, 495, 499
 大東亜, 30, 45, 47, 55, 63, 67, 81, 100,
 101, 108, 118, 129, 135, 141, 145,
 146, 159, 161, 166, 168, 184, 222,
 240, 242, 265, 266, 267, 283, 290,
 292, 311, 315, 318, 320, 328, 329,
 352, 367, 372, 401, 402, 404, 406,
 417, 427, 429, 447, 475, 477, 513,
 514, 517, 525, 528
 大東亜会議, 135, 141
 大東亜共栄圏, 67, 118, 135, 168, 242,
 266, 315, 427, 447, 475, 525
 大東亜圏, 101, 118, 166
 大東亜省, 47, 118, 159, 161, 265, 406
 大東亜戦, 30, 45, 55, 63, 81, 100, 108,
 135, 184, 222, 240, 242, 267, 290,
 292, 311, 318, 320, 328, 329, 352,
 367, 372, 404, 417, 429, 475, 477,
 513, 517, 525, 528
 大東亜宣言, 146
 大東亜戦争, 30, 45, 81, 100, 108, 135,
 184, 222, 240, 242, 267, 290, 292,
 311, 318, 320, 328, 329, 352, 367,
 372, 404, 417, 429, 475, 477, 513,
 517, 525, 528
 ダイナソ, 81, 528
 第二部, 26, 35, 39, 45, 46, 49, 51, 55, 83,
 97, 108, 124, 127, 135, 154, 165, 179,
 197, 198, 239, 282, 315, 328, 329,
 330, 333, 352, 366, 367, 375, 377,
 390, 403, 404, 406, 425, 514, 517,
 524
 第八課 (第 8 課) , 25, 45, 46, 50, 51,
 71, 73, 74, 77, 83, 88, 90, 91, 98, 105,
 112, 116, 124, 126, 131, 132, 133,
 134, 135, 139, 140, 179, 183, 186,
 187, 197, 199, 296, 328, 329, 330,
 333, 341, 390, 394, 395, 417, 439,
 449, 473, 475, 497, 500, 501, 510
 タイピスト, 117, 363

- 太平洋戦争, 3, 30, 59, 60, 61, 62, 64, 69, 70, 71, 72, 85, 88, 89, 93, 105, 109, 118, 119, 127, 139, 168, 175, 187, 229, 266, 269, 281, 282, 283, 285, 287, 288, 290, 293, 295, 297, 314, 326, 341, 362, 377, 380, 383, 395, 397, 401, 422, 424, 425, 426, 429, 435, 436, 437, 438, 440, 453, 457, 467, 472, 478, 508, 511, 513
- 大本營, 40, 45, 47, 49, 50, 51, 52, 54, 56, 59, 60, 67, 69, 70, 77, 79, 81, 86, 87, 91, 100, 105, 109, 111, 112, 118, 124, 133, 159, 163, 165, 167, 170, 179, 180, 182, 183, 184, 187, 197, 211, 232, 237, 258, 267, 269, 282, 284, 285, 286, 287, 290, 302, 312, 313, 320, 329, 332, 342, 343, 350, 356, 365, 371, 373, 377, 379, 402, 403, 404, 405, 407, 408, 425, 429, 434, 447, 449, 450, 458, 475, 477, 484, 504, 508, 513, 523
- 大本營政府連絡会議, 105, 170, 405
- 大本營発表, 51, 59, 100, 112, 159, 182, 183, 184, 267, 284, 287, 320, 342, 379, 447
- タイム, 81, 90, 113, 115, 219, 220, 282, 357, 358, 507
- 第四十四期, 24, 25, 26, 35, 45, 179, 181, 203, 214, 223, 232, 248, 253, 258, 309, 312, 333, 350, 464
- 第四班, 46, 134, 187, 328, 329, 341, 377
- 第六課, 39, 45, 207, 328, 329, 449
- 台湾, 118, 132, 169, 181, 184, 214, 256, 277, 314, 372, 401, 402, 403, 406, 494, 511
- 高峰秀子, 167
- タクシー, 139, 142, 144
- 武田 (陸軍報道部), 69, 342, 403, 404, 405
- 武田功, 46, 91, 328, 331
- 竹槍事件, 165, 286, 312, 371, 374
- 多田 (特殊情報), 46, 331
- 多田督知, 328, 329, 394, 417
- 龍田丸, 56, 70, 380
- 建川美次, 108, 375, 376
- 谷山樹三郎, 47, 49, 126, 133, 186, 329, 332, 333, 377, 474, 479
- 頼母木真六, 293, 339, 424, 425, 512
- 田村正太郎, 24
- タレント, 85, 501
- 短期現役士官→二年現役士官
- 短波受信機, 70, 379
- 短波ニュース, 294, 295
- デー・ゴルマン, 380, 447, 511
- チャンドラ・ボース (スバス・チャンドラ・ボース), 66, 67, 121, 123, 154, 165, 306, 430
- 中央公論, 47, 71, 154, 183, 203, 316, 355, 361, 383, 389, 446, 448, 465, 482, 526
- 中学校, 19, 20, 21, 24, 26, 30, 91, 98, 208, 223, 272, 309, 312, 391, 393, 411, 412, 464
- 旧制中学, 30, 489
- 中等学校, 30, 310, 412
- 中国, 3, 35, 36, 37, 61, 69, 89, 106, 119, 121, 141, 154, 174, 188, 256, 265, 282, 311, 313, 314, 315, 328, 329, 330, 339, 343, 356, 357, 358, 380, 381, 385, 387, 388, 391, 393, 394, 400, 401, 402, 403, 405, 406, 418, 420, 422, 423, 427, 431, 433, 435, 436, 450, 457, 462, 471, 494, 495, 496, 511, 525
- 支那, 23, 37, 52, 56, 59, 62, 88, 118, 122, 123, 171, 186, 341, 356, 370, 375, 377, 381, 382, 402, 407, 408, 409, 429, 433, 440, 450, 473, 474, 489, 511, 513, 519
- 駐在武官, 49, 70, 91, 135, 167, 288, 315, 350, 375, 390, 445, 473
- 中等学校→中学校

- 朝鮮, 38, 39, 59, 106, 118, 186, 222, 223, 256, 277, 314, 341, 375, 401, 403, 406, 426, 488, 495
- 徴用, 48, 73, 98, 106, 169, 210, 313, 383, 427, 429, 456, 526
- 辻政信, 26, 314, 320, 321, 408, 464, 467, 513
- 恒石重嗣, 1, 3, 4, 17, 18, 25, 26, 29, 35, 36, 47, 51, 54, 56, 71, 74, 80, 84, 86, 87, 97, 112, 115, 125, 127, 132, 143, 148, 149, 154, 179, 180, 182, 183, 184, 187, 190, 191, 199, 201, 202, 204, 211, 217, 218, 219, 222, 227, 229, 230, 231, 232, 234, 237, 241, 243, 244, 245, 246, 248, 250, 251, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 260, 263, 307, 308, 309, 320, 331, 333, 346, 347, 349, 433, 445, 465, 499, 508, 531
- 恒石喜美, 201, 234, 257, 258
- 都留重人, 11, 98, 119, 393
- 鶴見祐輔, 119, 137, 354, 398, 417
- 逓信省, 54, 55, 56, 109, 281, 282, 403, 406, 425, 468, 490, 512, 514, 517
逓信局, 294
- ディスク・ジョッキー, 3, 95
- ディズニー, 98, 140, 303
- テーマ, 47, 94, 110, 166, 190, 298, 315, 340, 426, 431, 447, 470, 479
- テッド→インス
- 田園, 201, 202, 203, 236, 327
- 伝単, 3, 48, 52, 77, 89, 90, 99, 105, 112, 127, 128, 134, 137, 153, 162, 175, 271, 279, 313, 362, 394, 395, 396, 397, 398, 417, 418, 479, 526
- 電波, 55, 59, 63, 64, 69, 71, 72, 73, 75, 77, 84, 89, 112, 125, 147, 171, 175, 183, 231, 232, 243, 244, 268, 282, 297, 336, 352, 366, 367, 369, 370, 388, 403, 404, 431, 453, 456, 468, 484, 490, 495, 496, 497, 515, 517
- 電波戦, 55, 64, 69, 73, 77, 84, 89, 125, 175, 183, 231, 232, 366, 367, 369, 370, 453, 495, 517
- 電報, 36, 56, 204, 214, 273, 282, 291, 328, 421, 423, 431, 449, 499
- ドイツ (独逸), 3, 39, 54, 63, 64, 66, 67, 71, 101, 105, 113, 125, 135, 167, 186, 229, 231, 235, 252, 266, 282, 296, 298, 299, 303, 328, 330, 357, 359, 362, 376, 377, 391, 398, 399, 414, 420, 422, 435, 436, 445, 448, 452, 474, 475, 477, 478, 489, 497, 515, 519, 525
- 東亜放送協議会, 69, 73, 77, 342, 401, 402, 403, 405, 406, 424, 429, 431, 433
- 東京, 3, 18, 20, 21, 23, 24, 25, 29, 34, 40, 56, 61, 62, 63, 64, 69, 70, 72, 74, 75, 76, 77, 80, 82, 83, 85, 86, 90, 91, 92, 93, 96, 97, 99, 100, 102, 106, 110, 112, 113, 115, 116, 117, 125, 126, 127, 129, 130, 132, 135, 139, 140, 149, 150, 153, 158, 159, 160, 161, 163, 164, 166, 167, 168, 169, 173, 174, 175, 183, 188, 198, 199, 203, 204, 206, 208, 209, 210, 211, 214, 215, 216, 218, 219, 223, 228, 230, 231, 232, 233, 236, 237, 238, 239, 241, 244, 246, 258, 260, 266, 268, 269, 270, 271, 272, 281, 283, 285, 294, 297, 298, 300, 301, 302, 304, 308, 309, 310, 311, 320, 322, 325, 331, 332, 334, 336, 339, 343, 344, 348, 351, 361, 365, 367, 379, 392, 393, 395, 401, 402, 403, 404, 406, 407, 408, 409, 413, 414, 415, 416, 418, 420, 421, 424, 426, 429, 431, 432, 434, 435, 440, 442, 443, 445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 455, 456, 468, 480, 483, 487,

- 488, 490, 494, 495, 500, 502, 505,
507, 511, 512, 524, 528
東京帝国大学, 18, 23, 97, 106, 308, 309,
361, 421, 424, 448
東大, 21, 23, 25, 47, 106, 344, 379,
391, 398, 418, 426, 435, 452, 485
東京ローズ (Tokyo Rose) , 3, 56, 86,
93, 96, 110, 113, 115, 116, 117, 132,
159, 161, 199, 203, 204, 206, 210,
211, 214, 215, 218, 219, 223, 228,
231, 232, 233, 237, 239, 241, 244,
246, 258, 260, 270, 301, 302, 320,
336, 442, 447, 451, 452, 483, 528,
557
戸栗郁子, 110, 115, 451
東條 (東条) 英機, 62, 79, 105, 108,
118, 119, 121, 135, 165, 192, 266,
331, 371, 373, 374, 393, 435, 446,
454
ドウス昌代, 116, 447
東大→東京帝国大学
盗聴器, 138, 291
東宝, 47, 49, 167, 413, 448, 479
東方社, 48, 74, 75, 98, 99, 105, 106, 107,
108, 134, 140, 153, 168, 169, 188,
333, 334, 376, 414, 415, 416, 417,
418, 419, 420, 479, 526
同盟通信 (同盟) , 47, 54, 55, 71, 83,
102, 108, 119, 123, 137, 158, 161,
167, 186, 188, 209, 242, 254, 271,
281, 282, 294, 296, 329, 362, 376,
387, 388, 393, 414, 418, 421, 422,
423, 429, 440, 446, 474, 494, 503,
515, 519
頭山満, 66
遠乗会, 167, 449
ドーリットル (ドウリットル) , 75, 76,
183, 407, 408
特赦, 9, 203, 211, 231, 232, 233, 237,
239, 241
特殊情報 (特種情報) , 45, 46, 179, 199,
331, 390
独ソ戦, 39, 290, 291, 292
特派員, 77, 89, 102, 208, 282, 418, 422,
423, 446, 452, 455, 528
特務機関, 71, 188, 291, 333, 458, 481
戸栗郁子→東京ローズ
独立運動, 47, 66, 67, 70, 169, 306, 328,
395, 429, 457, 458, 477, 479
土佐, 21, 189, 204, 207, 220, 227, 234,
235, 248, 258, 464, 531
特攻 (特別攻撃隊) , 169, 171, 290
神風, 169
特高, 273, 333, 334, 439, 526
ドラマ, 254, 255, 445, 494
内閣情報部, 54, 144, 254, 295, 360, 424,
447, 512
内務省, 47, 55, 81, 153, 351, 361, 373
永井八津次, 46, 49, 134, 135, 187, 197,
198, 199, 331
中島健蔵, 46, 48, 74, 99, 105, 106, 169,
241, 334, 414, 417, 479, 526
中田光男, 329, 364
中野学校→陸軍中野学校
中野校友会→陸軍中野学校
長野県, 189
永野修身, 20
名古屋, 20, 153, 208, 228, 341, 393, 407,
437, 464
那須良輔, 137, 313, 353, 394, 418
並河亮, 54, 55, 69, 81, 84, 85, 97, 109,
293, 297, 406, 424, 425, 426, 439,
443, 444, 528
南米, 122, 172, 277, 294, 329, 369, 432,
496, 515
南方, 37, 40, 46, 48, 52, 56, 62, 69, 74,
77, 78, 87, 88, 99, 100, 105, 118, 119,
121, 122, 123, 127, 129, 139, 154,
168, 169, 179, 181, 242, 243, 266,
282, 290, 315, 326, 328, 329, 330,
336, 341, 356, 371, 383, 384, 385,

- 387, 389, 396, 401, 402, 404, 412,
415, 417, 421, 422, 427, 428, 429,
431, 432, 433, 436, 443, 465, 468,
473, 474, 477, 478, 479, 494, 495,
496, 506, 510, 523
- 南方軍, 62, 69, 77, 78, 100, 121, 139,
179, 181, 341, 401, 402, 427, 429,
431, 433, 523
- 南方室, 427, 428
- 西村伊作, 127, 337, 424, 480, 482
- 西村庚, 481
- 西義章, 46, 91, 112, 122, 126, 434, 435,
436, 445
- 二世, 72, 73, 95, 109, 117, 126, 131, 133,
137, 173, 210, 211, 215, 233, 237,
258, 274, 277, 294, 339, 353, 398,
425, 437, 438, 439, 440, 443, 444,
494, 498, 501, 507
- 日米交換船→交換船
- 日露戦争, 17, 23, 25, 276, 361, 390, 520,
525
- 日華基本条約, 343
- 日華事変, 32, 89, 360
- 日中戦争, 37, 88, 154, 197, 311, 339,
341, 358, 374, 394, 401, 458, 489
- 新渡戸稲造, 470, 471
- 二・二六事件, 25, 32, 82, 282, 375, 512
- 二年現役士官（短期現役士官）, 287
- 日本郷友連盟→郷友（ごうゆう）連盟
- 日本刀→軍刀
- 日本放送協会, 3, 4, 48, 54, 55, 62, 63,
69, 70, 75, 77, 78, 84, 85, 119, 159,
160, 161, 182, 209, 293, 312, 342,
352, 401, 403, 404, 406, 427, 428,
429, 439, 445, 451, 453, 455, 456,
494, 511, 512, 514, 517
- ニューギニア, 85, 88, 89, 90, 143, 246,
341, 383, 384, 483
- ニューゼaland, 61, 64, 129
- ニュース, 3, 47, 51, 55, 71, 73, 74, 75,
81, 83, 94, 95, 100, 101, 102, 109,
110, 112, 115, 116, 132, 159, 161,
166, 175, 198, 208, 218, 237, 244,
267, 268, 271, 282, 294, 295, 297,
298, 302, 343, 357, 365, 394, 405,
421, 422, 423, 425, 443, 445, 446,
447, 475, 491, 498, 507, 511, 528
- ニューデリー, 75, 183, 270, 271, 277,
279
- ニューヨーク, 102, 110, 113, 115, 126,
136, 206, 208, 214, 216, 218, 219,
220, 221, 228, 282, 301, 327, 339,
357, 392, 435, 451, 452, 465, 491,
505
- 紐育タイムズ, 81
- ノースクリフ, 163, 296, 359, 381
- 野々宮（アパート, 写真館, ビル）, 18,
48, 74, 99, 153, 308, 414, 417, 418,
479
- ノモンハン, 33, 180, 362, 489
- 陪審員, 210, 213, 218, 228, 231
- パイロット, 113, 355
- 爆撃, 70, 75, 93, 117, 165, 174, 175, 182,
186, 290, 305, 306, 344, 387, 388,
407, 408, 485, 487, 512
- 長谷川中央, 137, 353
- 羽田三吉, 424
- 羽田飛行場（空港）, 46, 135, 206, 217,
228, 473
- 秦豊吉, 398, 448
- バタビア（バタビヤ）, 132, 336, 385
- 服部四郎, 106, 418
- パネー号事件, 434
- ハノイ・ハンナ, 493
- 浜本純一, 46, 49, 133, 138, 142, 143,
145, 147, 148, 149, 163, 167, 186,
188, 241, 300, 326, 329, 332, 337,
354, 377, 449, 500, 501
- 早川寿美子（ルース早川寿美, 早川フミ
枝）, 110, 217, 221, 442
- 早坂久, 137, 172, 353, 441, 500
- 林勝世, 137, 353

- 林三郎, 134
 林重男, 168, 169, 470
 林達夫, 99, 105, 106, 107, 134, 414, 415,
 416, 526
 原四郎, 214, 222, 223
 ハリウッド, 358, 453
 ハルビン (ハルピン) , 105, 290, 292,
 405
 ハワイ, 56, 130, 133, 198, 206, 212, 217,
 233, 339, 440, 441, 491, 515
 反逆, 85, 96, 109, 149, 150, 214, 216,
 218, 228, 231, 233, 301, 317, 336,
 338, 451, 528
 バンコク (バンコック) , 169, 385, 422,
 429, 432, 460, 473, 475, 479
 反戦, 13, 124, 139, 162, 166, 171, 172,
 175, 210, 243, 244, 255, 270, 424,
 438, 481, 491, 493, 499
 ピアノ, 302, 452, 481, 490
 ビーヴァブルック, 163, 359
 B 学院→文化学院
 ビール, 33, 111, 297, 384, 501
 日向正三, 110, 209, 451, 452
 光機関, 165
 飛行場, 87, 122, 135, 168, 169, 246, 290,
 305, 388, 389, 435, 436, 462, 473,
 477
 菱刈隆文, 47, 83, 108, 137, 161, 186,
 188, 217, 221, 353
 比島→フィリピン
 ヒトラー (ヒットラー) , 3, 39, 399,
 519
 日の丸アワー47, 49, 85, 88, 91, 93, 94,
 108, 126, 128, 129, 130, 131, 132,
 135, 136, 137, 139, 142-150, 155,
 160-164, 166, 172, 173, 185, 186,
 197-199, 208, 209, 217-219, 221, 228,
 239, 245, 254, 260, 283, 294, 295,
 297-299, 301, 317, 327, 332, 336, 337,
 340, 341, 364, 379, 390, 392, 395,
 418, 424, 439, 441, 443, 445, 451,
 465, 466, 481, 487, 491, 500, 507,
 日の丸会, 250
 ビハリ = ボース→ラス・ビハリ・ボー
 ス
 一二三九兵衛, 133, 162, 163, 186, 188,
 199, 332, 342, 446
 ヒューマニティコールズ, 100, 166, 185
 病院船, 384, 385
 ビラ, 48, 52, 70, 77, 88, 90, 99, 128, 155,
 165, 175, 270, 271, 362, 363, 394,
 396, 397, 492, 510, 512
 平川唯一, 93, 299, 312, 445, 446, 453,
 456
 平出英夫, 59, 284, 285, 286, 287, 288,
 312
 ビルマ, 12, 24, 29, 56, 66, 67, 79, 87,
 123, 124, 141, 155, 165, 179, 203,
 265, 266, 269, 270, 271, 277, 278,
 305, 328, 368, 370, 385, 387, 388,
 395, 397, 418, 420, 427, 428, 429,
 450, 457, 458, 460, 461, 462, 473,
 496, 510
 廣石権三, 51
 広島, 20, 24, 26, 192, 230, 260, 266, 299,
 338, 383, 464, 488, 519
 広島陸軍幼年学校, 20, 24, 26, 464
 ファンタジア (ファンタジヤ) , 98,
 139, 140, 303
 フィリピン(フィリッピン) , 66, 92, 93,
 121, 141, 168, 169, 173, 184, 217,
 219, 266, 299, 340, 372, 374, 383,
 420, 422, 427, 428, 429, 465, 467,
 491, 501, 506, 510
 比島, 47, 56, 84, 92, 166, 173, 214,
 286, 290, 355, 397, 494, 495, 501, 518
 風船爆弾, 175, 413
 フォード大統領, 237, 239, 508
 福井県, 189
 福井市, 29, 345
 福岡誠一, 421

- フジタ (Fujita) , 172, 302, 353, 398, 483, 487
 武士道, 158, 160, 256, 279, 470, 471, 472, 499
 藤村信雄, 97, 119, 126, 128, 132, 133, 135, 138, 144, 145, 147, 161, 162, 163, 164, 172, 186, 188, 216, 217, 218, 221, 313, 353, 449, 500, 507
 藤原岩市, 46, 48, 51, 52, 105, 127, 222, 239, 328, 351, 395, 399, 429, 473, 476, 510
 仏印, 40, 47, 123, 141, 142, 143, 147, 179, 180, 181, 212, 266, 328, 401, 417, 432, 446, 477, 478, 479, 494, 500
 部付将校, 40, 88, 143, 190, 330, 332
 ブッシュ, 130
 俘虜, 49, 62-64, 79, 80, 94, 99, 124, 127, 128, 131, 132, 142-145, 150, 164, 186, 198, 216, 218, 245, 295, 301, 303, 317, 338, 350, 365, 367, 369, 471, 472, 487, 500, 502-504
 俘虜管理部, 62, 79, 80, 84, 487
 俘虜管理部長, 62, 79, 80, 84, 487
 俘虜収容所, 49, 61, 62, 63, 64, 79, 80, 99, 129, 132, 150, 164, 189, 198, 216, 219, 283, 295, 332, 420, 471, 472, 502, 503, 507
 俘虜労役規則, 79
 プリンチピーニ, 167
 フロント→FRONT
 プログラム, 95
 プロパガンダ, 63, 64, 71, 138, 155, 232, 245, 295, 359, 360, 366, 379, 380, 399, 400, 415, 439, 445, 475, 493
 プロボー, 93, 132, 138, 144, 145, 150, 173, 206, 212, 214, 216, 218, 228, 301, 317, 338
 フロント→FRONT
 文化キャンプ, 85, 116, 136, 148, 150, 212, 216, 217, 302, 317, 336, 465, 484, 487
 文化学院, 112, 127, 128, 135, 136, 142, 167, 197, 238, 260, 303, 336, 337, 364, 417, 418, 424, 480, 481, 482
 B 学院, 303, 362, 363, 364, 480
 米国, 3, 53, 61, 62, 63, 64, 66, 71, 72, 73, 75, 77, 81, 87, 90, 92, 93, 96, 110, 113, 115, 119, 124, 126, 147, 150, 166, 171, 173, 174, 175, 183, 184, 186, 206, 210, 218, 219, 231, 235, 239, 243, 244, 245, 246, 247, 254, 255, 258, 260, 272, 273, 274, 276, 277, 279, 282, 284, 295, 296, 332, 350, 355, 368, 369, 370, 398, 434, 435, 437, 438, 440, 445, 446, 451, 453, 454, 455, 472, 490, 494, 495, 499, 500, 504, 505, 506, 509, 511, 515, 528
 米州部 (NHK) , 109, 116, 117, 451, 453
 兵站, 39, 188, 189, 190, 191, 199, 203, 387, 478
 北京, 37, 88, 123, 315, 341, 379, 380, 381, 426, 433, 495
 ベトナム戦争, 172, 186, 243, 491, 492, 493
 ベトナム反戦運動, 172, 243, 491
 ベルリン, 75, 122, 244, 399, 415, 422, 429, 436, 448, 492
 ヘンショー, 129, 132, 144, 145, 148, 198, 302, 481
 捕虜, 3, 49, 61, 62, 63, 64, 67, 74, 77, 78, 79, 80, 83, 84, 85, 86, 87, 92, 93, 95, 99, 100, 102, 108, 109, 112, 113, 115, 116, 117, 125, 127, 129, 130, 132, 133, 137, 138, 142, 143, 144, 147, 148, 149, 150, 161, 162, 166, 171, 172, 173, 185, 188, 189, 197, 198, 199, 204, 212, 214, 219, 231, 232,

- 243, 244, 245, 250, 254, 255, 260,
266, 270, 272, 276, 277, 278, 279,
283, 297, 298, 299, 300, 301, 302,
304, 336, 337, 338, 339, 340, 363,
364, 382, 390, 397, 398, 407, 408,
409, 417, 425, 440, 443, 447, 449,
450, 456, 460, 472, 481, 483, 484,
487, 493, 495, 499, 500, 501, 502,
503, 505, 506, 507, 508, 515, 531
傍受, 3, 70, 71, 72, 73, 77, 115, 155, 158,
160, 175, 182, 198, 244, 281, 282,
294, 295, 401, 421, 438, 439, 445,
455, 468, 507
放送局, 3, 4, 47, 48, 49, 51, 54, 55, 56,
60, 62, 63, 64, 69, 70, 71, 72, 73, 75,
76, 77, 78, 80, 81, 83, 84, 85, 86, 91,
92, 93, 94, 95, 96, 97, 100, 101, 102,
108, 109, 110, 111, 112, 113, 115,
116, 117, 118, 119, 123, 124, 125,
129, 131, 132, 133, 135, 137, 138,
139, 141, 142, 143, 144, 145, 146,
147, 148, 149, 150, 155, 158, 159,
160, 161, 162, 163, 164, 166, 171,
172, 173, 175, 180, 182, 183, 185,
186, 188, 197, 198, 204, 208, 209,
210, 212, 214, 216, 218, 231, 232,
233, 237, 239, 243, 244, 245, 250,
254, 255, 258, 260, 267, 268, 270,
279, 281, 282, 283, 293, 294, 295,
297, 298, 299, 301, 304, 312, 327,
332, 336, 337, 338, 339, 340, 342,
343, 352, 354, 360, 364, 365, 366,
367, 368, 369, 370, 379, 381, 382,
390, 401, 402, 403, 404, 405, 406,
421, 422, 424, 425, 426, 427, 428,
429, 430, 431, 432, 433, 439, 440,
442, 443, 444, 445, 446, 447, 448,
449, 451, 452, 453, 454, 455, 456,
472, 473, 475, 479, 481, 484, 490,
491, 493, 494, 495, 496, 497, 498,
499, 500, 501, 502, 504, 505, 507,
508, 511, 512, 514, 515, 517, 523,
528
放送研究, 55, 267, 268
報知新聞 (読売報知新聞), 92, 120,
408, 515
謀略放送, 47, 49, 70, 77, 85, 86, 94, 95,
109, 110, 111, 112, 113, 125, 127,
131, 132, 133, 137, 145, 162, 183,
210, 214, 218, 233, 243, 244, 245,
254, 255, 258, 283, 320, 379, 417,
425, 432, 446, 465, 484, 496, 508,
523, 528
ポートモレスビー, 87, 88, 341
ホーホー卿, 63, 244, 380
北米, 63, 102, 294, 432, 433, 495, 496,
505
ポストマンコールズ (ポストマンズ・
コール), 166, 244, 491, 499
北海道, 189
ポツダム宣言 (ポツダム宣言), 170,
279
ポルトガル, 122, 271, 370, 420, 451,
515
香港, 56, 61, 62, 130, 181, 303, 427, 429,
432, 473, 495, 496
マイク, 63, 102, 117, 138, 144, 145, 239,
254, 267, 339, 453, 455
毎日新聞, 285, 371
牧秀司, 13, 81, 137, 164, 353, 507- 509,
528
町田敬二, 32, 52, 241, 510
マッカーサー, 93, 173, 216, 222, 392,
501, 508
松機関, 450
松下井知夫, 48, 137, 313, 353, 394, 418
マニラ, 87, 92, 102, 173, 181, 332, 367,
422, 431, 432, 465, 495, 501, 508,
515, 518
マニラ・ローズ, 173
マライ→マレー
マラヤ→マレー

- マリアナ, 174, 182
丸亀, 24, 26, 32, 341, 374, 471
マレー, 11, 12, 46, 56, 66, 67, 77, 121,
169, 350, 370, 385, 395, 397, 418,
427, 429, 473, 474, 494, 495, 506,
510
マライ, 396
マラヤ, 266
マンガ→漫画
漫画, 20, 21, 52, 99, 137, 220, 310, 311,
313, 394-396, 398, 417-419
マンガ, 48, 127, 303, 396, 417, 418
満州 (満洲) , 3, 23, 26, 29, 32, 33, 35,
36, 37, 38, 39, 52, 54, 59, 74, 80, 106,
118, 141, 168, 174, 175, 181, 190,
197, 200, 232, 234, 290, 314, 341,
343, 344, 356, 358, 375, 380, 381,
391, 401-406, 415, 420, 433, 436,
450, 495, 511, 512, 525
満州事変, 3, 23, 54, 80, 197, 375, 391,
511, 512
満鉄, 32, 108, 375, 380, 474
ミイトキーナ, 462, 463
三笠宮崇仁親王, 302, 449, 450, 513
水田健晴, 24
水谷史郎, 55, 403, 406, 517
溝口歌子, 512
満潮 (みつしお) 英雄, 86, 93, 109, 110, 113,
160, 202, 206, 209, 237, 241, 340,
440, 456
ミッドウェー (ミッドウェイ, ミッドウ
エイ, ミドウェー) , 56, 76, 87, 106,
109, 112, 166, 243, 254, 277, 283,
362, 384, 407, 368, 408, 425, 426,
439, 443, 517
南機関, 12, 328, 395, 458, 460
三宅坂, 45, 47, 426
宮崎滔天, 66
宮本常一, 314, 315
宮本吉夫, 54, 55, 75, 267, 282, 403, 404,
425, 442, 472, 499, 512, 514, 517
無為徒食, 79, 80, 484, 502
無線, 56, 72, 96, 182, 379, 403, 421, 436,
468, 490, 515
牟田口廉也, 37, 165
村田五郎, 119, 373
村山有, 29, 81, 137, 223, 257, 354, 439,
498, 507, 528
明号作戦, 478
メルボルン, 85, 298, 303, 443
モスクワ, 270, 289, 290, 291, 292, 362,
376
モティフ, 100
森野正義, 126, 143, 145, 160, 186, 217,
221, 222, 223, 317, 353, 364, 440
安岡元彦, 17, 18, 40, 116, 133, 201, 202,
230, 234, 235, 252, 260, 326, 426
やなせたかし, 20, 310, 311
矢部忠太, 108, 328
山内豊秋 (山内家) , 20, 227, 248, 253,
258
山川幸世, 99, 334, 376
山口源等, 46, 133, 164, 167, 188, 241,
329, 332, 401, 429, 473, 507
山口昌男, 99, 376, 419
山下奉文, 20, 350, 519
山下豊, 25, 26, 35, 214, 232, 464
大和魂, 13, 256, 520, 521, 526
湯川秀樹, 208, 392
要線, 29, 522
横浜, 56, 61, 99, 119, 131, 150, 174, 204,
215, 246, 289, 297, 303, 371, 374,
380, 407, 414, 415, 465, 504, 526
横山隆一, 20, 21, 52, 220, 311, 418
吉原 (地名) , 188, 485
吉原政巳, 25
予備役, 30, 93, 108, 310, 375, 489
読売新聞, 3, 62, 77, 119, 200, 220, 232,
286, 315, 388, 452, 455
ライフ→LIFE
ラジオ, 3, 53, 60, 62, 63, 64, 69, 71, 75,
77, 84, 85, 91, 93, 96, 100, 102, 109,

- 112, 113, 118, 119, 125, 131, 132,
137, 155, 158, 160, 162, 164, 166,
175, 183, 198, 209, 210, 232, 233,
243, 254, 267, 268, 273, 282, 283,
293, 294, 295, 297, 338, 339, 345,
365, 421, 429, 431, 439, 442, 443,
445, 446, 447, 451, 453, 454, 455,
494, 495, 496, 497, 498, 499, 500,
505, 507, 512, 515, 517
ラジオ, 243, 381, 382, 511, 512
ラジオ・トウキョウ, 3, 53, 62, 75, 102,
109, 112, 118, 119, 158, 160, 267,
268, 283, 293, 421, 442, 443, 446,
451, 515, 517
ラジオ東京, 100, 233, 447
ラジオ局, 3, 345, 496
ラジオ室, 85, 131, 137, 155, 160, 164,
198, 210, 294, 295, 439, 445, 507
ラジオ東京→ラジオ・トウキョウ
ラジオ→ラジオ
ラス・ビハリ・ボース (ビハリ=ボー
ス), 66, 67, 121
蘭印, 77, 214, 266, 305, 365, 366, 368,
397, 401, 429, 494, 496, 523
ラングーン, 105, 123, 269, 305, 385,
387, 388, 389, 429, 432, 458, 460
陸軍省, 25, 36, 39, 56, 62, 118, 134, 187,
190, 192, 197, 199, 250, 332, 342,
348, 406, 434, 481, 503, 510, 513
陸軍次官, 62, 80, 315, 519
陸軍士官学校 (士官学校), 18, 20, 23,
24, 25, 26, 35, 45, 83, 108, 133, 161,
179, 222, 236, 250, 266, 269, 272,
308, 309, 310, 320, 328, 331, 375,
467, 513, 524
陸士, 23, 24, 25, 26, 32, 35, 36, 70, 91,
108, 161, 200, 201, 203, 222, 223,
232, 250, 310, 328, 331, 332, 346,
350, 377, 464, 473, 475, 481, 513,
519, 524
航空士官学校, 200
陸軍大学校, 23, 24, 34, 35, 36, 47, 74,
143, 179, 269, 320, 333, 375, 391,
467, 513, 524, 525, 526
陸大, 25, 32, 34, 35, 36, 47, 60, 70, 91,
192, 222, 232, 258, 331, 333, 346,
350, 391, 464, 524, 525
陸軍特別大演習, 29, 345
陸軍中野学校 (中野学校), 25, 46, 52,
70, 71, 105, 133, 162, 164, 167, 186,
185, 188, 197, 199, 240, 292, 309,
315, 321, 328, 329, 332, 333, 377,
378, 394, 395, 397, 401, 429, 430,
446, 449, 450, 473, 474, 497, 507,
523, 527
中野校友会, 25, 474, 527
陸軍病院, 163, 300, 449, 500
陸軍報道部, 45, 51, 52, 59, 60, 69, 100,
154, 173, 287, 312, 342, 373, 383,
389, 403, 404, 504, 526
陸軍幼年学校, 20, 24
陸大→陸軍大学校
陸士→陸軍士官学校
リスボン, 81, 102, 271, 282
立教大学, 97, 98
留学生, 24, 48, 265, 266, 525
リュシコフ (リシュコフ, ルシュコフ,
加藤), 105, 329, 363, 364, 481
ルーズベルト (ルーズヴェルト), 132,
158, 160, 185, 273, 358, 434, 445,
446, 454, 462, 484, 497, 498
ルシュコフ→リュシコフ
レイズ, 84, 93, 95, 117, 299, 340, 451
レイテ, 17, 173, 184, 355, 501
レコード, 95, 96, 110, 117, 145, 299,
339, 340
レド公路, 462
ロイター, 254, 282, 421, 422
ローマ, 135, 167, 244, 250, 323, 422
蘆溝橋 (蘆溝橋), 37, 88, 341, 394
ロシア, 23, 90, 260, 298, 314, 363, 364,
375, 391, 405, 419, 420, 481

索引

ロスアンゼルス (ロサンジェルス) , 56,
173, 272, 274, 453
ロンドン, 75, 125, 131, 303, 365, 415,
422, 424, 440, 512

ワシントン (DC) , 93, 216, 217, 219,
220, 233, 276, 284, 301, 313, 317,
358, 365, 366, 418, 465, 491
ワシントン大学, 446, 453

年 譜 (要約)

(1) 戦 前

年	月	日	事 項	本 書
1909	10	19	誕 生	17
18	11	11	第一次世界大戦終わる	—
22	2	6	ワシントン会議で, 海軍軍備制限条約	—
	4		高知県立高知城東中学校入学	19
	8	24	(旧制) 高知高等学校設置	412
23	9	1	関東大震災	21
24	11	29	社団法人東京放送局設立	—
25	2	19	政府, 治安維持法案を衆議院に緊急上程	—
	3	2	衆議院, 普通選挙法案を修正可決	—
27	3		高知県立高知城東中学校卒業. 陸軍士官学校入校	24
29	10	24	ニューヨーク株式市場大暴落, 世界恐慌はじまる	—
31	9	18	満州事変始まる	—
32	5	15	5. 15 事件	25
	7		陸軍士官学校卒業 (第 44 期). 丸亀歩兵第 12 連隊見習士官	26
	10	25	陸軍歩兵少尉任官	〃
33	10	8	陸軍特別大演習 (福井県)	29
34	10	20	歩兵中尉進級	26
	末		結 婚	〃
35	6	1	アメリカ向海外放送「ラジオ・トウキョウ」を開始	—
		25	従弟河村俊平急逝	307
37	2		北満独立守備隊 25 大隊	32
	7	7	盧溝橋で日中両軍衝突	〃
	11	1	大尉進級	〃
38	6		陸軍大学校入校	34
39	9	1	第二次世界大戦始まる	—
40	6		陸軍大学校卒業 (第 53 期). 東満第 12 師団後方主任参謀	37
	12	5	情報局官制交付 [勅] (内閣情報部は廃止)	54
41	7		関特演	39
	10	1	少佐進級	47
	11	18	参謀本部着任. 第 2 部第 8 課配属	45
			大戦に伴う宣伝計画の陸軍案作成, 情報局に提供	53
			南方作戦の企画秘匿	56

(2) 大戦中

年 譜 (要約)

年	月	日	事 項	本 書
41	12	8	開 戦	—
42	1	14	太平洋戦争初の善通寺捕虜収容所開設	61
	1	15	大本営発表の改善	59
	2		東方社, FRONT 第 1 号発行	420
		末	米国内の中波放送受信機開発に成功	71
	4	18	米軍機東京初空襲	75
	5	26	捕虜カズンスの東京護送命令	80
	6	2	交換船で帰国する米国人の昼食会開催	81
		5	ミッドウェー海戦	76
	8	初	カズンス到着	83
		7	米海兵 1 個師団、ガダルカナル島上陸	87
		20	交換船で西義章大佐帰国, 第八課々長	91
	10		フィリピンから捕虜インス, レイズ到着	93
		15	立教大学アメリカ研究所へ協力を下命	97
	11		カズンス, インス「日本ノ対外放送ニ対スル意見」作成	100
43	1	中旬	並河情報官と立教大学訪問	97
			日本放送協会沢田進之丞部長, 朝日新聞に寄稿	445
	2	1	日本軍, ガダルカナル島撤退開始	372
	3		東方社岡田理事長辞任	105
		20	太平洋敵軍向け「ゼロ・アワー」放送開始	109
	4	15	第六回東亜放送協議会陪席	406
	6	29	<i>New York Times</i> 「ゼロ・アワー」の反響を報道	113
	7	7	出張先シンガポールで西大佐乗機を見送る。(同日戦死認定)	122
	8	17	参謀長会同: 配布資料に「前大戦ニ於ケル対敵宣伝ノ研究」	124
	9		日本放送協会平川唯一, 「放送研究」に寄稿	453
	10	15	参謀本部第 2 部第 8 課廃止, 第 4 班となる	134
	11	3	駿河台技術研究所(参謀本部駿河台分室)開所式	135
		下旬	仏印サイゴン出張(～12月上旬)	141
	12	2	米本土向け「日の丸アワー」放送開始	142
10		駿河台分室訪問し捕虜に協力を要請. ウィリアムズ拒否	147	
44	1	15	東方社移転候補先として主婦の友社訪問	153
	3	1	英文放送事前監査室新設, 池田徳眞を派遣	158
		8	インパール作戦開始	165
	4		在京の同盟国駐在武官を招き遠乗会	167
	6	15	米軍, サイパン島上陸	—
	7	18	東条内閣総辞職	—
	11	1	B29 東京初偵察	174
		3	風船爆弾による米本土攻撃開始	175

『恒石重嗣年譜』

年	月	日	事 項	本 書
45	1		仏印出張	179
	3	1	中佐進級	84
		9	仏印で明号作戦開始	478
	4	8	大本営は本土作戦準備計画を策定（心理 385）	187
	6		参謀本部第 4 班, 陸軍省軍務課と合併. 軍務局課員兼職	〃
		20	四国防衛第 55 軍兵站業務担当参謀	188
	8	15	終 戦	191

(3) 戦 後

45	9		米軍の放送関連戦犯追及対応のため陸軍省軍務局付	199
	12	1	復員	200
				GHQ 出頭（47 年末まで計 23 回）
(49 年 1 月以前)			喫茶店「田園」開業	201
48	9	15	「東京ローズ」大陪審証人として訪米（～10 月下旬）	206
49	6	18	〃 裁判証人 〃（～ 8 月中旬）	209
	10	1	米軍曹プロボア大陪審証人 〃（～11 月初）	214
50	6	25	朝鮮戦争始まる	222
	8	10	警察予備隊令	〃
51	9	8	対日平和条約調印（52.4.28 発効）	228
52	5		高知県軍恩連盟結成	227
	9	8	金剛建設（株）取締役就任	〃
58	9	5	高知年鑑 34 年版に掲載	232
59	春		警察犬飼育開始（63, 64 年審査会で日本一）	229
	4		雑誌「偕行」に近況報告	232
62	10		「東京ローズ」始末記」寄稿（雑誌「論争」10 月号）	231
67	8	7	高知市中秦泉寺 321 に土地購入, 翌年新築（終の棲家）	235
	10	9	読売新聞「昭和史の天皇／ゼロ・アワー」連載（～16 日）	232
77	1	21	高知新聞に東京ローズ特赦のコメント発表	237
78	8	10	『心理作戦の回想』自費出版	240
81	3		高知偕行会々長就任	253
83			瀬島龍三高知来県	248
85	4	15	高知県日の丸会理事長就任	250
88			高知県軍恩連盟第 7 代会長就任	251
90	3	11	高知偕行会々長退任	253
92	春		高知市で 44 期生会主催	258
95	3		『高知軍連盟の歩み』上梓	318
	8	14	TBS ドラマ『日の丸アワー』放送前に朝日新聞取材	254
96	9	19	逝 去	257

主な参考資料

著者	参考資料名	出版社	出版年
会田雄次	アロン収容所	中央公論社	1962
荒木 肇	日本人はどのようにして軍隊をつくったのか	出窓社	2010
有山輝雄	情報覇権と帝国日本Ⅱ	吉川弘文館	2013
有山輝雄／西山武典編	情報局関係資料第4巻	柏書房	2000
池田徳眞	日の丸アワー	中央公論社	1979
池田徳眞	半分は未公表の体験・対敵宣伝、三年間のすべて	朝日新聞(1979-08-12)	1979
池田徳眞	プロパガンダ戦史	中央公論社	1981
池田徳眞	恩寵と復活	キリスト教新聞社	1993
池田徳眞、名倉有一編	駿河台分室物語【本編】	私家版	2015
井上祐子編	秘蔵写真200枚でたどるアジア・太平洋戦争	みずき書林	2018
岩尾光代／栗野真紀子	日本の肖像：鳥取池田家(旧侯爵)	毎日グラフ(1988-03-06)	1988
岩波書店編集部編	近代日本総合年表第三版	岩波書店	1991
鶴飼正樹ほか編	戦後日本の大衆文化	昭和堂	2000
内海愛子／永井均編集・解説	東京裁判資料	現代史料出版	1999
梅棹忠夫／司馬遼太郎編	桑原武夫伝習録	潮出版社	1981
浦 茂	人生遍路八十年	協和協会出版部	1990
永 六輔	もっとしっかり、日本人	日本放送出版協会	1997
江藤淳／蓮實重彦	オールドファッション	中央公論社	1988
老川慶喜／前田一男編	ミッションスクールと戦争	東信堂	2008
大岡昇平	レイテ戦記(上)	中央公論新社	1974
太田天橋	私がマンガ伝単の元祖だ	日本週報(1949-06-04)	1949
大谷 勲	ジャパン・ボーイ	角川書店	1983
大谷敬二郎	昭和憲兵史	みすず書房	2011
大西巨人ほか	神聖喜劇[第5巻]	幻冬舎	2006
岡 直樹編著	祖国を敵として	明治文献	1965
尾崎号堂全集編纂委員会編	尾崎行雄(尾崎号堂全集 第十巻)	公論社	1955
海外放送研究グループ編	NHK戦時海外放送	原書房	1982
香川県編	香川県史 第六巻	香川県	1988
カズンス／インス	カズンス少佐等ノ我力対外放送ニ対スル意見	(NHK放送博物館蔵)	1942
勝野金政	赤露脱出記	日本評論社	1934
門松正一	絞首刑	国書刊行会	1982
上坂冬子	特赦	文芸春秋	1978
上福岡市教育委員会	福岡受信所の歴史	上福岡市教育委員会	1998
河路由香	非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生	港の人	2006
河村茂徳編	河村俊平追想録	河村茂徳	1937
北山節郎	ラジオ・トウキョウⅡ	田畑書店	1988
北山節郎	ラジオ・トウキョウⅢ	田畑書店	1988
北山節郎	ピース・トーク	ゆまに書房	1996
北山節郎	外務省と対外放送	緑陰書房	2005
木村秀政	わがヒコーキ人生	日本図書センター	1997
キャンベル・ステュアート、 飯野紀元訳	英国の宣伝秘密本部	内外書房	1943

『恒石重嗣年譜』

著者	参考資料名	出版社	出版年
共同通信社社会部編	沈黙のファイル	共同通信社	1996
工藤洋三	米軍の写真偵察と日本空襲	工藤洋三	2011
熊野三平	「阪田機関」出勤ス	展転社	1989
黒田秀俊	昭和言論史への証言	弘文堂	1966
黒田秀俊	ものいえぬ時代	図書出版社	1986
黒野 耐	参謀本部と陸軍大学校	講談社	2004
桑原安正編	一武人の波瀾の生涯	桑原文子	1996
軍事史学会編	大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌 下	錦正社	1998
郡司利男	カッパ特製国語笑字典	光文社	1963
小岩井光夫	ニューギニア戦記	日本出版協同	1953
高知県教育史編集委員会編	近代高知県教育史	高知県教育研究所	1964
高知県軍恩県盟編	高知県軍恩連盟の歩み	高知県軍恩県盟	1995
高知市商工課編	高知市商工名鑑	高知市商工課	1964
高知新聞社文化事業部 出版部編	高知年鑑昭和34年版	高知新聞社	1958
小林久子	猫のしっぽ	文芸社	2003
齋藤博之	日本の謀略放送	中央公論社(1950-04)	1950
嵯峨 隆	頭山満	筑摩書房	2021
佐野真一	旅する巨人	文藝春秋	1996
澤田進之丞	放送の重要性	朝日新聞(1943-01-23)	1943
澤田進之丞	姿なき戦ひ	輝文堂書房	1944
週刊朝日編	続・値段の明治大正昭和風俗史	朝日新聞社	1981
柴田武彦／原 勝洋	ドーリットル空襲秘話	三修社	2003
主婦の友社編	主婦の友社の五十年	主婦の友社	1967
情報局	なにを語るか 俘虜の横顔	写真週報(218号)	1942
上法快男編	陸軍大学校	芙蓉書房	1973
ジョン・M・ジョーンズほか. 名倉有一編	太平洋戦争初の捕虜収容所 善通寺の記録	私家版	2012
白戸健一郎	自著『満洲電信電話株式会社—そのメディア史的研究』を語る	国立研究開発法人 科学技術振興機構	2016
新城 敦	昭和二十年の写真家たち	昭和館紀要(2015-05)	2015
杉田一次／藤原岩市	スイスの国防と日本	時事通信社	1971
杉本苑子全集	杉本苑子年譜	中央公論社	1998
鈴木明／山本明編	秘録・謀略宣伝ビラ	講談社	1977
鈴木洋子	日本における外国人留学生と留学生教育	春風社	2011
瀬島龍三	大東亜戦争の実相	PHP研究所	1998
全国憲友会連合会 編纂委員会編	日本憲兵正史	研文書院	1976
相馬雪香ほか編	罌堂 尾崎行雄	慶応義塾大学出版会	2000
大本営陸軍部	昭和十八年度参謀長会同における実務連絡事項	(防衛研究所戦史室蔵)	1943
高尾和彦	研友通信	高知県衛生研究所	1996
高戸顕隆	海軍主計大尉の太平洋戦争	潮書房光人社	2015
多川精一	戦争のグラフィズム	平凡社	2000
多川精一	焼け跡のグラフィズム	平凡社	2005
多川精一ほか	FRONT復刻版:解説 I	平凡社	1989
多川精一ほか	FRONT復刻版:解説 II	平凡社	1990

著者	参考資料名	出版社	出版年
高山信武	続・陸軍大学校	芙蓉書房	1978
竹内房司編	アジアと日本	吉川弘文館	2012
立川京一	第二次世界大戦とフランス領インドシナ	上智大学	1999
立川京一	第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本	防衛研究所紀要(2000-11)	2000
立川京一	戦争指導方針決定の構造	防衛研究所紀要(2007-09)	2007
田村正太郎	ビルマ脱出記	図書出版社	1985
茶園義男	本土決戦 日本内地防衛軍	不二出版	1986
茶園義男編・解説	BC級戦犯裁判資料	不二出版	1985
茶園義男編・解説	大日本帝国内地俘虜収容所	不二出版	1986
茶園義男編・解説	俘虜情報局・俘虜取扱の記録	不二出版	1992
通信社史刊行会編	通信社史	通信社史刊行会	1958
辻阪昭浩	鉄道切符クロニクル	イカロス出版	2011
土屋礼子	対日宣伝ビラが語る太平洋戦争	吉川弘文館	2011
恒石重嗣	心理作戦の回想	東宣出版	1978
恒石重嗣	「東京ローズ」始末記	論争(1962-10)	1962
恒石重嗣	待ちかねた・・・”東京ローズ”の特赦決定	高知新聞(1977-01-21)	1977
恒石重嗣	第二次大戦中の米国内放送の利用	偕行(1990-01)	1990
恒石重嗣	対米謀略放送のあらまし	偕行(1995-10)	1995
津本 陽	異形の将軍(上)	幻冬舎	2003
ディヴィッド・ハルパー スタム・筑紫哲也ほか訳	メディアの権力(3)	朝日新聞社	1999
寺崎英成ほか	昭和天皇独白録	文芸春秋	2020
ドウス昌代	東京ローズ	サイマル出版会	1977
富田 武	日ソ戦争1945年8月	みすず書房	2020
鳥居英晴	国策通信社『同盟』の興亡	花伝社	2014
鳥居英晴	参謀本部の米国内中波傍受作戦	SW DX GUIDE (2019-05)	2019
長崎暢子	資料集 インド国民軍関係者証言	研文出版	2008
中澤まゆみ	ダイナはもう聞こえない	潮(1982-09)	1982
中島健蔵	昭和時代	岩波書店	1957
中島岳志	中村屋のボース	白水社	2005
中園英助	私本・GHQ占領秘史	徳間書店	1991
中野校友会編	陸軍中野学校	中野校友会	1978
永野 護	敗戦真相記	バジリコ	2002
名倉有一編	長野県・満島収容所	私家版	2013
名倉有一編	横浜・山手250番館	私家版	2014
名倉有一編	駿河台分室物語【資料編】	私家版	2015
名倉有一編	DVD『池田徳真氏の回想』	私家版	2016
名倉有一編	DVD『谷山樹三郎元陸軍大尉の回想』	私家版	2016
名倉有一編	DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』	私家版	2016
名倉有一編	「善通寺俘虜収容所」ハンドブック	私家版	2021
那須良輔	漫画家生活50年	平凡社	1985
並河 亮	もうひとつの太平洋戦争	PHP研究所	1984
南京戦史編集委員会編	南京戦史Ⅱ	偕行社	1993
新潟県上越人物史研究会編	新潟人物百年史頸城編	東京法令出版	1967
西野亮廣	革命のファンファーレ	幻冬舎	2017

著者	参考資料名	出版社	出版年
西村伊作	我に益あり	紀元社出版	1960
西村九和	光の中の少女たち	中央公論社	1995
西 義章	日米開戦後に於ける米国国情の一斑	偕行社記事(1942-12)	1942
日本近代史研究会編	日本陸海軍の制度・組織・人事(第3版)	東京大学出版会	1972
日本交通公社	時刻表第二二巻第二號ほか	日本交通公社	1946
日本国有鉄道編	日本国有鉄道百年写真史	日本国有鉄道	1972
日本放送協会編	第九回対重慶向集中放送打合会議報告ほか	(NHK放送文化研究所蔵)	1941
日本放送協会編	放送五十年史	日本放送出版協会	1977
野呂理栄子	陸軍幼年学校体制の研究	吉川弘文館	2006
秦 郁彦編	日本陸海軍総合辞典(第2版)	東京大学出版会	2005
秦 郁彦編	日本近現代史人物履歴事典	東京大学出版会	2013
濱本純一	青雲白雲	濱本事務所	1986
半藤一利ほか	あの戦争になぜ負けたのか	文芸春秋	2006
半藤一利	昭和史の人間学	文芸春秋	2023
日置英剛編	年表 太平洋戦争全史	国書刊行会	2005
平川唯一	海外放送のアナウンス	放送研究(1943-09)	1943
平塚証緒	函説2・26事件	河出書房新社	2003
広田厚司	ゲッベルスとナチ宣伝戦	潮文庫光人新社	2022
深田祐介	黎明の世紀	文芸春秋	1991
福田和也	山下奉文	文芸春秋	2008
福川秀樹編著	日本陸海軍人名辞典	芙蓉書房出版	1999
福川秀樹編著	日本陸軍将官辞典	芙蓉書房出版	2001
藤原岩市	留魂録	振学出版	1986
藤原岩市	F機関	バジリコ	2012
藤本一孝	大東亜戦争と現在の日本	展転社	2006
船橋 治	復刻版新建築(第8回配本)	不二出版	2009
防衛庁防衛研修所戦史室	戦史叢書 蘭印ベンガル湾方面海軍進攻作戦	朝雲新聞社	1969
歩十二編集員会編	歩兵第十二聯隊百十年祭記念誌	歩十二編集員会	1985
マーガレット・サッチャー、 石塚雅彦訳	サッチャー回顧録(下巻)	日本経済新聞社	1996
前田啓介	辻政信の真実	小学館	2021
町田敬二	ある軍人の紙碑	芙蓉書房	1978
松山秀明	「南方放送史」再考③	放送研究と調査(2021-05)	2021
みな子	華より花	主婦と生活社	2009
宮本吉夫	戦時下の新聞・放送	人間の科学社	1984
無線百話出版委員会編	無線百話	クリエイト・クルーズ	1997
村上聖一	戦前・戦時期日本の放送規制	NHK放送文化研究所年報	2020
村上聖一	「南方放送史」再考①	放送研究と調査(2021-03)	2021
村木厚子	日本型組織の病を考える	KADOKAWA	2018
村山 有	東京ローズは三人居た!	文芸春秋(1952-05)	1952
村山 有	アメリカ二世	時事通信社	1964
百瀬 孝	事典 昭和戦前期の日本	吉川弘文館	1990
安田 彬	謀略を担った「捕虜放送局」	朝日新聞(1995-08-11)夕刊	1995
柳井 正	一勝九敗	新潮社	2003
山崎正男編	陸軍士官学校	秋元書房	1990

著者	参考資料名	出版社	出版年
山下則子	聚光	山下則子	1990
山本武利	陸軍中野学校	筑摩書房	2017
山本武利編	宣撫月報(第3巻第2号)	不二出版	2006
山本武利(ほか)／編集委員	岩波講座「帝国」日本の学知 第4巻	岩波書店	2006
山口昌男ほか	FRONT復刻版:解説Ⅲ	平凡社	1990
山崎 修	喫茶店を歩く	山崎 修	1979
山本義彦編	清沢冽評論集	岩波書店	2002
ユウジ・イチオカ	抑留まで	彩流社	2013
横山隆一	わが遊戯的人生	日本図書センター	1997
吉田 茂集録	善通寺俘虜収容所情報綴 翻刻分	私家版	2018
吉村 昭	大本營が震えた日	新潮社	1968
吉村 昭	深海の使者	文芸春秋	1973
米濱泰英	日本軍「山西残留」	オーラル・ヒストリー企画	2008
読売新聞社編	昭和史の天皇3	読売新聞社	1980
陸軍士官学校 第四十四期生会	回想録	陸軍士官学校 第四十四期生会	1982
陸軍省編	陸軍現役将校同相当官実役停年名簿 昭和19年9月1日調	偕行社	1944
ルイス・ブッシュ. 明石洋二訳	おかわいそうに	文芸春秋新社	1956
歴史探検隊	50年目の「日本陸軍」入門	文芸春秋	1991
渡辺 考	プロパガンダ・ラジオ	筑摩書房	2014
(不明)	わが正確な放送 米英のデマを粉碎す	報知新聞(1942-02-03)	1942
(不明)	”一刻も早く帰れる日を”	読売新聞(1942-02-27)	1942
(不明)	All Indians, Arise To Crash British !	The Osaka Mainichi & The Tokyonichinichi (1942-03-15)	1942
(不明)	浜松北高100年:戦史と北高②	中日新聞(1994-05-14)	1994
(不明)	假政府の對英米宣戦布告	日印協會會報(1944-05)	1944
(不明)	戦前の情報機構要覧	(不明)	1964
Chapman, Ivan	Tokyo Calling	Hale & Iremonger Pty Limited	1990
Close, Frederick P.	Tokyo Rose	The Scarecrow Press Inc.	2010
F・L・アレン. 藤久ミネ訳	オンリー・イエスタディ	ちくま書房	1993
Fujita, Frank 'FOO'	FOO	University of North Texas Press	1993
KDD社史編纂委員会編纂	KDD社史／資料編	KDDIクリエイティブ	2001
MacFarlane, Deborah	George Gorman	The Japan Society Volume VIII	2013

収録図一覧

図 No.	収録 ページ	写真	図表	その他	内 容
一	表紙	○			市ヶ谷記念館
1	2	○			恒石重嗣氏
2	〃	○			日本放送協会「放送会館」
3	17			○	高知県南部
4	20	○	○		高知市の両中学校比較
5	23		○		陸軍士官学校入校・卒業生
6	25		○		陸士第44期の入校・卒業生内訳
7	27	○			歩兵第12連隊・兵舎全景
8	〃	○			〃 ・正門
9	〃	○			〃 ・本部前
10	28	○			〃 ・日清戦争記念碑
11	〃	○			〃 ・酒保から見た丸亀城
12	34	○			昭和十六年当時の陸大正門付近
13	36		○		陸大在校生（12連隊. 38年9月現在）
14	40	○			三宅坂の大本営陸軍部
15	45		○		参謀本部組織図
16	51	○			廣石権三（大本営報道部戦況発表主任）
17	52	○			桑原 長
18	54	○		○	情報局開設
19	61	○			善通寺捕虜収容所：開墾作業中の捕虜（下士官・兵）
20	〃	○			〃 ：労働を免除された捕虜（将校）
21	64	○			〃 ：マイクの前の捕虜
22	65			○	〃 ：捕虜特集記事
23	68	○		○	インド人に向け放送するビハーリー・ボース
24	72	○			福岡受信所局舎と増設住宅
25	76	○			日本放送協会「放送会館」
26	78	○		○	南方軍、「捕虜の声」を放送
27	〃			○	日本放送協会、「捕虜の声」を放送
28	79	○		○	四国に到着した東条首相・陸軍大臣
29	82	○			山王ホテル全景
30	〃	○			〃 正面入口
31	91	○			西 義章
32	92	○		○	外地や南方に捕虜収容所新設

収録図一覧

図 No.	収録 ページ	写真	図表	その他	内 容
33	94	○			東京に呼び寄せられた3名の捕虜
34	111	○			第5スタジオ待合室
35	〃	○			第5スタジオ
36	114			○	ゼロ・アワーの反響（米国側）
37	〃			○	〃（日本側）
38	120	○		○	対外放送強化
39	121		○		東条首相の訪問スケジュール
40	〃	○		○	東条首相ジャワ訪問
41	122	○			長距離機A26（キ七七）
42	123		○		大戦中の恒石の海外出張
43	〃	○		○	恒石ジャカルタ訪問
44	128	○			文化学院
45	〃			○	戦時中の鉄道路線図
46	130	○			（左から）ウィリアムズ, ヘンショウ, ブッシュ
47	131	○			樺山資英（左）と池田徳眞
48	136			○	池田徳眞の辞令
49	153	○			野々宮アパート正面外観
50	156			○	軍陣新聞（1944-03-09）
51	157			○	「連合国の日本語放送」欄
52	160		○		英文放送事前監査室開設の理由
53	167	○			高峰秀子
54	174	○			写真偵察機「トーキョー・ローズ」とクルー
55	184	○			台湾沖航空戦
56	189		○		善通寺捕虜将校の出発（45年）
57	202	○			「田園茶房」店舗裏の看板
58	〃	○			はりまや橋（右手）の手前に見える「田園茶房」〃
59	204			○	恒石面接要求（46年 1月）
60	205			○	〃（46年12月）
61	211	○			法廷の恒石
62	215			○	GHQ発行のTravel Authorization
63	219	○			ニューヨーク連邦裁判所
64	221			○	プロボウ裁判の記録
65	231			○	手記：「「東京ローズ」始末記」
66	238	○			中庭からみた戦時中日本人職員が使った建物
67	〃	○			建物の2階廊下
68	239			○	「駿台会」会員名簿
69	251	○			現在の高知会館

『恒石重嗣年譜』

図 No.	収録 ページ	写真	図表	その他	内 容
70	252			○	恒石名刺
71	〃			○	軍恩連盟のバッジ頒布
72	256	○			ビデオ録画中の恒石
73	259	○			高知市中秦泉寺の旧宅付近
74	261			○	著書『心理作戦の回想』サイン
75	〃	○			高知へ帰る恒石氏
—	表紙	○			文化学院跡
76	266		○		戦前のアジア人学生数
77	269	○		○	臼井茂樹戦死
78	275	○		○	日系人抑留
79	278	○			岡 繁樹
80	281		○		開戦時の外国情報収集配布
81	284	○		○	平出英夫
82	305			○	ベンガル湾
83	324	○			岡山駅（46年5月）
84	〃	○			鉄道公安職員による列車内の整理と警備
85	〃	○			東京駅貴賓室内のRTO（47年7月2日）
86	335	○			参八会記念撮影
87	〃			○	〃 寄せ書き
88	344	○			主婦の友社新館
89	345	○			大演習参加将校の記念写真
90	351	○			杉田一次
91	〃	○			降伏したパーシバル将軍（右端）と杉田（中央）
92	〃	○			降伏文書調印式の杉田（後列右端）
93	360			○	SECRETS OF CREWE HOUSE
94	〃			○	飯野紀元訳『英国の宣伝秘密本部』
95	378	○			浜本純一（左）と谷山樹三郎
96	382	○			George Gormanと娘Catherine
97	396			○	伝単「復讐！復讐！英軍の犠牲になるな」
98	402		○		東亜放送協議会への軍関係者参加
99	410	○		○	米搭乗員の処置決定
100	〃			○	米爆撃機B25（絵画）
101	457			○	ビルマ戦線年表
102	459	○			鈴木敬司
103	460			○	ビルマの戦い（42年4月-5月）
104	461			○	ビルマ戦線略図
105	466			○	<i>Bunka Camp Story</i> 目次

収録図一覧

図 No.	収録 ページ	写真	図表	その他	内 容
106	476	○			藤原岩市
107	493	○			ハノイ・ハンナ
108	504	○		○	「おかわいそうに」事件
109	〃			○	捕虜「正遇」の見出し
110	506		○		捕虜概数（開戦後半年間）
111	516	○		○	宮本吉夫談話

『心理作戦の回想』 正誤表

○山本武利氏提供 (2017-05-18)

目次	誤	正
序 文一頁終四行目	反戦直後	敗戦直後
まえがき三頁終五行目	出征遺家族	出征兵士遺家族
同 五頁九行目	しかし資源に乏しく	しかして資源に乏しく
次第四章三	陸軍前戦部隊	前線部隊
本 文五頁三行目	門松正三	門松正一
五頁終三行目	内容の詳細	詳細
五頁九行目	時局処理要綱	処理要綱案
同終八行目	飛行場使用の容認状況	容認・状況により
六一頁終八行目	「南方」を偽称し	と偽称し
六八頁六行目	成果大なのか	成果大なのか
六九頁一行目	動員船の艦装	動員、船の艦装
〇七七頁終八行目	「大統領は日本は	大統領は、日本は……
八五頁終一行目	今までは	今では
八七頁終三行目	独立・達成	北村、独立達成
一〇〇頁一〇行目	二字不明	企図、秘匿
〇一一〇頁終三行目	企図・秘匿	企図、秘匿
一二〇頁四行目	愛宕	愛宕
一二五頁終五行目	「南方政略」……	「南方政略後」……
一二九頁四行目	大東亜宣言を中心	大東亜共同宣言(注)を中心
二八六頁七行目	大東亜宣言	大東亜共同宣言
同終九行目	出征家族	出征軍人家族
三〇一頁終八行目	確定ナルモ	確定ナルモ
三二〇頁終八行目	総合軍	連合軍
同終四行目	ジョージ	ジョージ
三一九頁一行目	挫折せしめる	挫折せしめる
三四〇頁七行目	ゼロアワー放送アン放送	ゼロアワー放送中のアン放送
三四九頁七行目	公刊における	公刊における
〇三四六頁七行目	Statement	Statement
三五一頁一〇行目	戸栗委員会	戸栗支援委員会
三五七頁終三行目	内容	内容
三七二頁四行目	捕虜ニナルコトハシテ	捕虜ニナルコトハシテ
三七二頁四行目及	コチラニ決ハ水モ	コチラニ水モアレバ……

○追加

ページ	行	誤	正
序文 1	2	日本が	日本に
7	8	独軍の PR	独軍の PK
91	7	鈴木文史郎	鈴木文史朗
103	4	市田陸軍大佐	一田陸軍大佐
112	b	一一年	一七年
157	11	事時通信	時事通信
170	6	メルボン	メルボルン
199	9	Schnck	Schenk
201	3	鈴木文史郎	鈴木文史朗
〃	5	加藤万寿夫	加藤万寿男
204	3	金鶏勲章	金鷄勲章
220	12	死んだしまった	死んでしまった
232	3	「自由アアメリカ」	「自由アメリカ」
243	終 1	三日前	三日後
274	11	蘭学	蘭字
294	7	一九年初頭	二十年初頭
322	3	鈴木文史郎	鈴木文史朗
323	7	無精に	無性に
344	後 3	同年同月	同年六月
365	写真	命令された	命名された
〃	後 4	南京	香港

ホームページ上の恒石資料

1. 資料の種類

資料名	種類	備考
(1) 『恒石重嗣元陸軍中佐の回想』	映像・音声 (※)	DVD 抜粋 ¹²⁸⁸
(2) 「戦略謀略放送の立役者―恒石重嗣参謀」	レジュメ	2020-07-11 発表時配布
(3) 「昭和十八年度参謀長合同における実務連絡事項（第八課主務事項）」	翻 刻	
(4) 「太平洋戦争中の対敵宣伝関係資料解説」	レジュメ	上記（3）の 説明
(5) 「恒石重嗣の生涯―宣伝主任参謀の太平洋戦争」	〃	2023-03-25 発表時配布

(※) 内訳

映像①	敵の放送、BBC を評価
〃②	「日本の宣伝体制は貧弱だった」
〃③	米中波放送傍受（1）
〃④	〃 （2）
〃⑤	8 課新課長・西義章大佐の批判 「東京放送（ラジオ・トウキョウ）は硬直してる」
〃⑥	「ゼロ・アワー」の難しさと成功要因
〃⑦	続いて米国民に向けた放送を準備
音 声	捕虜放送は終戦前日まで続けられた （1945 年 1 月 5 日、米国での録音）
映像⑧	限界

2. アクセス方法：「インテリジェンス研究所」(<http://www.npointelligence.com/>)

○ 上記（1）～（4）

- ・画面左下の「特別研究会関係」の（2020 年 7 月 15 日）[こちら](#)をクリック
- ・「第 5 回特別研究会（2020 年 7 月 11 日（土）」に収蔵

○ 同（5）

- ・（2023 年 3 月 27 日）[こちら](#)をクリック
- ・「第 9 回特別研究会（2023 年 3 月 25 日（土）開催）」に収蔵

¹²⁸⁸ DVD（原本）と同 DVD の文字起し所蔵館：国立国会図書館，オーテピア高知図書館，善通寺市立図書館。

Tsuneishi Shigetsugu Nenpu (A Chronological Record of the Life of Tsuneishi Shigetsugu)

Edited by Nagura Yuichi

2023

Hamamatsu, Japan

When the Pacific War broke out, Mr Tsuneishi Shigetsugu (1909-1996) was a Major in the Imperial Japanese Army, assigned to the Second Bureau, Eighth Section of the Imperial General Staff. He was the chief officer of propaganda activities and he was summoned to appear as prosecution witness in the case of 'Tokyo Rose' held in San Francisco after the war.

This book was edited for the purpose of donating a copy to OTEPIA Kochi Library, 2-1-1, Otesuji, Kochi City, 780-0842, to document local history.

Table of Contents

Foreword	3
Explanatory Notes	4
Contents	5
Part I Before the War	
1.1 Childhood	17
1.2 Junior high school	19
1.3 Military Academy	23
1.4 12th Infantry Regiment (Marugame, Shikoku)	26
1.5 25th battalion of Independent Garrison (North Manchuria)	32
1.6 Army War College	34
1.7 12th Division (East Manchuria)	37
Part II During the War	
2.1 Just before and after the War	
2.1.1 General Staff Office	45
2.1.2 Organization of propaganda	50
2.1.3 Information Bureau	54
2.1.4 Concealment operation	56
2.2 1942	
2.2.1 Improvement of Imperial General Headquarters Announcement	59
2.2.2 Establishment of the first POW Camp in Zentsuji	61
2.2.3 Utilization of POWs by Information Bureau	63
2.2.4 Propaganda against British India	66
2.2.5 Interception of the American local radio	71
2.2.6 Tohosha (the publisher of General Staff's propaganda magazine 'FRONT')	74
2.2.7 Doolittle Raid	75

A Chronological Record of the Life of Tsuneishi Shigetsugu

2.2.8 Recognition of the broadcast	77
2.2.9 Utilization of POWs	79
2.2.10 Luncheon at Sannoh Hotel	81
2.2.11 The Arrival of Charles Cousens	83
2.2.12 American counterattack	87
2.2.13 Colonel Nishi Yoshiaki	91
2.2.14 The Arrival of two American POWs	93
2.2.15 Rikkyo University: The Institute for American Studies	97
2.2.16 Tohosha and leaflets	99
2.2.17 POWs' advice on Japanese broadcasts	100
2.3 1943	
2.3.1 Resignation of the founder of Tohosha	105
2.3.2 Zero Hour	109
2.3.3 Reorganization of Information Bureau	118
2.3.4 PM Tojo's visit to Nanking, Thailand and southern occupied territories	121
2.3.5 Annual meeting of the chiefs of staffs in Tokyo	124
2.3.6 Preparation for a propaganda radio program to the United States	125
2.3.7 Reorganization of the Second Bureau	134
2.3.8 Opening ceremony of Surugadai branch office (Bunka Camp)	135
2.3.9 Booty film from Singapore: "Gone with the wind"	139
2.3.10 An official tour to French Indochina	141
2.3.11 Hinomaru Hour	142
2.3.12 Visit to Surugadai branch office	147
2.3.13 Christmas party for POWs	150
2.4 1944	
2.4.1 Move of Tohosha in anticipation of air raid	153
2.4.2 <i>Chuo-koron</i> (monthly magazine)	154
2.4.3 <i>Gunjin Shimbun</i> (British propaganda newspaper)	155
2.4.4 Precensorship room for broadcast in English	158
2.4.5 Operation Imphal	165
2.4.6 Reorganization of Hinomaru Hour	166
2.4.7 Horse riding in the suburbs for military attaches in Tokyo	167
2.4.8 Overseas shooting trips by Tohosha	168
2.4.9 Outline of War guidance	170
2.4.10 Report by the President of Information Bureau	172
2.4.11 Demotion of a staff	173
2.4.12 First reconnaissance B29 over Tokyo	174
2.4.13 Balloon bomb	175
2.5 1945	
2.5.1 An official tour to French Indochina	179
2.5.2 Three hairbreadth escapes	181

2.5.3 Imperial General Headquarters Announcement	182
2.5.4 Humanity Calls	185
2.5.5 Reduction in Imperial General Headquarters	187
2.5.6 Transfer to Shikoku Defense Force	188
2.5.7 The end of the War	191
Part III Post War	
3.1 Occupation	
3.1.1 War criminal investigation	197
3.1.2 Demobilization	200
3.1.3 Coffee shop	201
3.1.4 Summons (GHQ/SCAP, Tokyo)	204
3.1.5 First visit to the USA as a prosecution witness	206
3.1.6 Second	209
3.1.7 Third	214
3.1.8 Police Reserve Force	222
3.2 Independence	
3.2.1 Kongoh Construction Company	227
3.2.2 Refusal to visit the USA	228
3.2.3 Police dogs	229
3.2.4 Contribution to a monthly magazine	231
3.2.5 Horse riding	234
3.2.6 New home	235
3.2.7 Amnesty to 'Tokyo Rose'	237
3.2.8 Revisitation to 'Bunka Camp'	238
3.2.9 Sundaikai (Association of Eighth Section)	239
3.2.10 Publication of the memoir: "Shinri Sakusen no Kaiso"	240
3.2.11 Summary of the War	242
3.2.12 Reunion with Sejima Ryuzo in Kochi	248
3.2.13 Contributions to the local social community	250
3.2.14 Kochi-ken Gun-on Renmei (Federation of Military Benefits in Kochi prefecture)	251
3.2.15 Kochi-ken Kaikokai (Network of former Army Officers in Kochi prefecture)	253
3.2.16 TV drama	254
3.2.17 Patriotism	256
3.2.18 Death	257
Afterword	260
Appendices	263
Index	532
Chronological record (Summary)	552
Bibliography	555
Illustrations	560
Other documents on Tsuneishi Shigetsugu	564

Appendices

Air raids on Calcutta	305
Announcers	267
Asian students in Japan	265
Assassination by radio	497
Battle in Burma	457
Battle in Shanghai	341
British propaganda in WWI	359
Bunka Camp	480
Bushido	470
Cadet	310
Charles Cousens	297
Coffee	326
Courier	289
Dōmei News Agency	421
Dutch surgent Schenk	336
Educational system	411
Eighth Section of the Imperial General Staff	328
Evaluation of Japanese foreign propaganda	442
Exaggeration and mistakes	355
First Tokyo air raid and Military Police	407
French Indochina	477
Fujiwara Iwaichi	473
Fukuoka receiving station	468
General army	356
George Gorman	380
German propaganda	399
<i>"Gone with the wind"</i>	302
Hamamoto Jun-ichi	449
Hata Toyokichi	448
Hirakawa Tadaichi	453
Hiroshima Regional Military Preparatory School	464
Hiuga Shozo	451
Increase of POWs	506
Interception of the American local radio	490
Investiture	346

Jazz	339
Takei Mitsuaki	296
Kawamura Shunpei	307
Kochi-ken Gunon Renmei (Federation of Military Benefits in Kochi prefecture)	318
Kurihara Etsuzo	312
Leaflets	394
Letter of appreciation from the Chief of General Staff to NHK Overseas Broadcasting Bureau	352
Machida Keiji	510
Madame Chiang Kai-shek	357
Major Koiwai's order	317
Maki Hideshi	507
Manchurian Incident and Japanese overseas broadcasts	511
Memories of Imperial Japanese Army War College	524
Military attaché	390
Military collaborators after the War	313
Military service	488
Ministry of Foreign Affairs and broadcasts	293
Miyamoto Yoshio	514
Namikawa Ryo	424
Navy and radio broadcasts	283
Navy News Service	284
Network of radio stations	494
Nishi Yoshiaki	434
Oka Shigeki	270
Peace and tranquility between Japan and USSR	362
Pivotal line	522
Press oppression	371
Prince Mikasanomiya Takahito	513
Propaganda broadcasts in the Invasion of the Dutch East Indies	523
Propaganda broadcasts to Chongqing	342
Propaganda broadcasts to Enemies	427
Protests against the Vietnam War	491
Public transport from Kochi to Tokyo after the War	322
Publication of “Nakano (Intelligence) School”	527
Questioning POWs	505
Receiving overseas broadcasts	281
Report: Enemy's reaction to our overseas broadcasts	365
Report: Our broadcasts to enemies	367
Restriction on possession of shortwave radio	379

Second generation Japanese	437
Shufunotomo Co. Ltd.	344
Southern occupied territories	383
Special large-scale manoeuvre in 1933	345
Staffs and participants of Surugadai branch office (Bunka Camp)	353
Statement of Tsuneishi Shigetsugu at GHQ/SCAP	528
Sugita Ichiji	350
Taisho Democracy	361
Taniyama Jusaburo	377
Tatekawa Yoshitsugu	375
Toa Housou Kyogikai (Conference of radio stations in East Asia)	401
Toho Co. Ltd.	413
Tohosha	414
Tsukada Kazuhei	392
Tsuru Shigeto	393
Usui Shigeki	269
Utilization of POWs	499
Visual Flight	518
War-crime trial in the Philippines	465
Yamashita mission to Germany	519
Yamato spirit	520

『恒石重嗣年譜』

つねいしげつぐねんぶ
恒石重嗣年譜【資料編】
せんでんしゅにんさんぼう たいへいようせんそう
宣伝主任参謀の太平洋戦争

編 集：なぐらゆういち名倉有一
発 行：2023 年 8 月
非売品
連絡先：nagura95@gmail.com

